小矢部市埋蔵文化財調査報告書第61冊

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

縄文時代総括編

2007年

小矢部市教育委員会

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第61冊

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

縄文時代総括編

2007年

小矢部市教育委員会

序

本書は、国道8号線小矢部バイパス建設に伴い、昭和55年度から平成16年度にかけて実施した桜町遺跡の発掘調査のうち、縄文時代のものが数多く発見された舟岡地区の成果について報告するものです。

この地区で発見された縄文時代の遺構・遺物については、平成15年度に「縄文遺構編Ⅰ」、平成16年度に「縄文遺構編Ⅱ」、平成17年度に「縄文土器・石器編Ⅰ」として、それぞれまとめてきました。また本年度には「縄文土器・石器編Ⅱ」と「木製品・繊維製品・植物編」も刊行し、今回の調査についての発掘調査報告書は本書の刊行をもって完結することとなります。

本書は縄文時代総括編として、これまでの報告では扱われなかった各種分析の結果や、遺構・遺物についての考察を収録いたしました。桜町遺跡の発掘調査で得られた資料を基にした、縄文時代に関する研究成果の一端を示すものであります。

この発掘成果が、今後の研究の参考となり、埋蔵文化財に対する理解並びに保護の一助となれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご指導とご協力をいただきました、桜町遺跡調査等検討委員会・同専門部会委員各位、国土交通省富山河川国道事務所、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、並びにご理解いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成19年3月

小矢部市教育委員会
教育長　西川　康夫

例　　言

1. 本書は、富山県小矢部市桜町に所在する桜町遺跡の発掘調査報告書のうち、第7巻目にあたる「縄文時代総括編」である。
2. 発掘調査報告書は、これまで平成14年度に「弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ」、平成15年度に「縄文遺構編Ⅰ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ」、平成16年度に「縄文遺構編Ⅱ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ」、平成17年度に「縄文土器・石器編Ⅰ」を刊行している。また、本書と同時に「縄文土器・石器編Ⅱ」及び「木製品・繊維製品・植物編」を刊行した。
3. 発掘調査は、国道8号小矢部バイパスの建設に伴うもので、小矢部市教育委員会が国土交通省(前建設省)から委託を受けて実施した。
4. 本書に収録している内容は、桜町遺跡のうち、縄文時代を主体的な時期とする舟岡地区の発掘調査によって得られた資料を基としたものである。この地区の調査や出土品に関する事実報告については上記の既刊報告書に収録したが、本書ではそれらに載せることのできなかった自然科学分析の結果と、遺跡・遺物に関する考察を収録した。
5. 本書の作成は、小矢部市教育委員会が行った。担当者は下記のとおりである。

・2006年度　総括　文化スポーツ課　課　長　森下博幸
　　主務　同　上　主　事　大野淳也・中井真夕
　　事務　同　上　課長補佐　安念幹倫
　　同　上　主　任　塚田一成・高木場万里

6. 本書の作成にあたり、桜町遺跡調査等検討委員会の指導を受けた。本年度の委員会の体制は下記のとおりである。

・桜町遺跡調査等検討委員会（平成18年4月現在）

委員長　小林　達雄（國學院大學教授）
副委員長　小島　俊彰（金沢美術工芸大学教授）
委　員　宮本長二郎（東北芸術工科大学教授）
　　鈴木　三男（東北大学教授）
　　山田　昌久（首都大学東京准教授）
　　網谷　克彦（敦賀短期大学助教授）
　　松井　　章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター環境考古学研究室長）
　　西井　龍儀（小矢部市文化財保護審査委員会会長）
　　中西　　彰（富山県教育委員会生涯学習・文化財室長）
　　関　　清（富山県埋蔵文化財センター所長）

7. 本書の執筆分担は、目次及び各項の題名の後に記した。
8. 本書は、ほかに本書を収めたCD－ROM 1枚が付いている。

目　　次

第Ⅰ章　自然科学分析の結果 …… 1
1　桜町遺跡の縄文土器底部圧痕の繊維技法について（中田節子） …… 3
2　桜町遺跡出土の動物遺存体（廣藤紀子・松井章） …… 9
3　桜町遺跡より出土した大型植物化石からみた植物利用（吉川純子） …… 22
4　桜町遺跡出土の縄文時代の木材の樹種とその利用（鈴木三男・能城修一・管野宗武） …… 35
5　桜町遺跡出土編物および縄の素材（井上美知子・鈴木三男） …… 86
6　小矢部市桜町遺跡・漆塗り製品の科学分析（四柳嘉章） …… 100
第Ⅱ章　考　察 …… 129
1　桜町遺跡の変遷について（久々忠義） …… 131
2　桜町遺跡の縄文時代中期後葉から後期初頭土器の位置付け（小島俊彰） …… 141
3　桜町遺跡の縄文後期末から晩期の土器変遷について（酒井重洋） …… 183
4　桜町遺跡の石器・石製品の様相について（山本正敏） …… 207
5　北陸地方における岩版類について－桜町遺跡出土品を中心として－（大野淳也） …… 219
6　桜町遺跡出土木部遺物の検討（山田昌久） …… 265
7　桜町遺跡出土建築材の考察（宮本長二郎） …… 279
8　桜町遺跡の縄文時代の森林植生と植物利用（鈴木三男） …… 296
第Ⅲ章　総　括 …… 303
1　発掘調査結果のまとめ（大野淳也） …… 305
2　桜町遺跡その選ばれし場所（小林達雄） …… 307
抄　録 …… 312

第Ⅰ章　自然科学分析の結果

1　桜町遺跡の縄文土器底部圧痕の繊維技法について

中田　節子（帝京大学山梨文化財研究所）

桜町遺跡縄文土器底部圧痕について

このたび機会をいただき桜町遺跡の底部に繊維圧痕が残存する縄文土器計845点の繊維技法について調査を行った。結果、組み組織368点、捩り組織328点、木葉痕49点、複合組織２点、繊維圧痕は観察できるが現在は詳細不明79点、その他圧痕はあるが繊維とは確定できない土器９点、圧痕のない土器８点、欠番２点に分類された。

Ⅰ　組み組織

ここでいう「組む」とは、２本ないし３本以上の材料を、お互いに起こしたり抑えたりしながら、Ａ２本、Ｂ２本を最小単位として素材を越したり潜らせたりして、面を作っていく方法とする。今回の調査では、平組49点、網代組232点、三方組５点と、３パターンの組み技法が確認された。

Ⅰ－１　平組

作り方は織物とは別であるが、組織的には織物で言うところの平織にあたる。四つ組ともいう。桜町遺跡では２種類の平組が観察された。

①Ⅰ－１Ａ　拓本番号18･表番号１は、同じ幅の素材Ａ･Ｂともに密に組んである。

②Ⅰ－１Ｂ　ＡとＢの密度が違う平組が残存している資料で、拓本番号14（表番号２）（以下同じ順）･15（３）･16（４）にあたる。

Ⅰ－２　網代組

網代組とは狭義には「ＡとＢの組素材がほぼ隙間なく密接に組まれ、組み目を飛びながら模様を作り出す特徴をもった技法」と定義されている。5種類が観察された。

１－２Ａ　１本組・２越え２潜り１送りの組織である。拓本１（表５）、２（６）、３（７）、４（８）、５（９）、10(10)にあたる。

Ⅰ－２Ｂ　２本組・２越え２潜り１送りの組織である。拓本６（表11）、８（12）、11(13)、12(14)である。

Ⅰ－２Ｃ　拓本15(表15)の土器で３本組が見られるが残存部少量のため詳細は不明。

１－２Ｄ　網代組の組み方を変えて模様を組みだすものを模様網代と名付けられている。そのうち模様が桝目に組まれた桝網代状の組織が確認された。拓本７（表10）である。

１－２Ｅ　①から④までの網代組と比べると、素材の間にすき間がみられるという特徴がある。拓本９（表17）で、１本組･２越え･２潜り･１送りである。

Ⅰ－３　三方組

三方組とは、ＡとＢに斜め方向のCの素材を加えて組む方法。通称カゴ目ともいわれる。さらに別の素材をさまざまな方向からさし足していくこともできる。２種類が見られた。

１－３Ａ　拓本17(表18)で小片のため斜めは一方向のみ観察された。

１－３Ｂ　拓本19(表19)と20(20)である。斜め両方向が見られる。

Ⅱ　捩り技法

「捩る」とは、基本的に3本以上の素材を使い、そのうちの２本で芯になる素材によじりながらかけていく方法である。捩り方により組織を模様にしたり、幅を違えてバリエーションを出すこともできる。桜町遺跡では３パターンの捩り技法が観察された。

Ⅱ－１　密度や素材の幅はそれぞれに違いが見られるが、等間隔に捩られた資料である。拓本25(表21)、26(22)、29(23)、30(24)、31(25)、表28。

Ⅱ－２　素材の間をあけずに緻密に捩る方法で、拓本32(表27)と表30は細い素材を使用している。

Ⅱ－３　拓本27(表29)は斜め方向の捩りが観察された。

Ⅲ　木葉痕

桜町遺跡の木葉痕は、広葉樹の網状脈痕と平行脈痕が観察された。

Ⅲ－１　広葉樹の葉脈を利用した圧痕で、拓本22(表31)と23(32)である。

Ⅲ－２　平行脈の観察される圧痕である。拓本21(表34)と24(33)で、平行脈を持つ植物を交互に重ねている部分が観察される。

Ⅳ　その他の技法

Ⅳ－１　拓本28(表36)は捩り技法に、平行して別の素材をライン状にいれてある。

Ⅳ－２　表36は平組技法の一部に巻き技法によるラインが観察されるものである。

まとめ

桜町遺跡は、大量の土器底部繊維圧痕とともに繊維の実物資料が出土しているというあまり例のないきわめて貴重な特徴をもっている。これらを合わせて調査研究することで、縄文時代の繊維技法解明への手がかりができる。

土器底部に見られる複合的繊維技法は、実物の資料からも観察されている。また拓本番号18は圧痕をつけたものの上に別の底部を重ね、そこにも同じ組織の圧痕が見られるという非常に珍しい資料である。

今回の調査による桜町遺跡の土器底部圧痕は、組み技法と捩り技法がほぼ同数観察された。そのなかでも網代組と等間隔の捩り技法が、圧倒的多数をしめている。

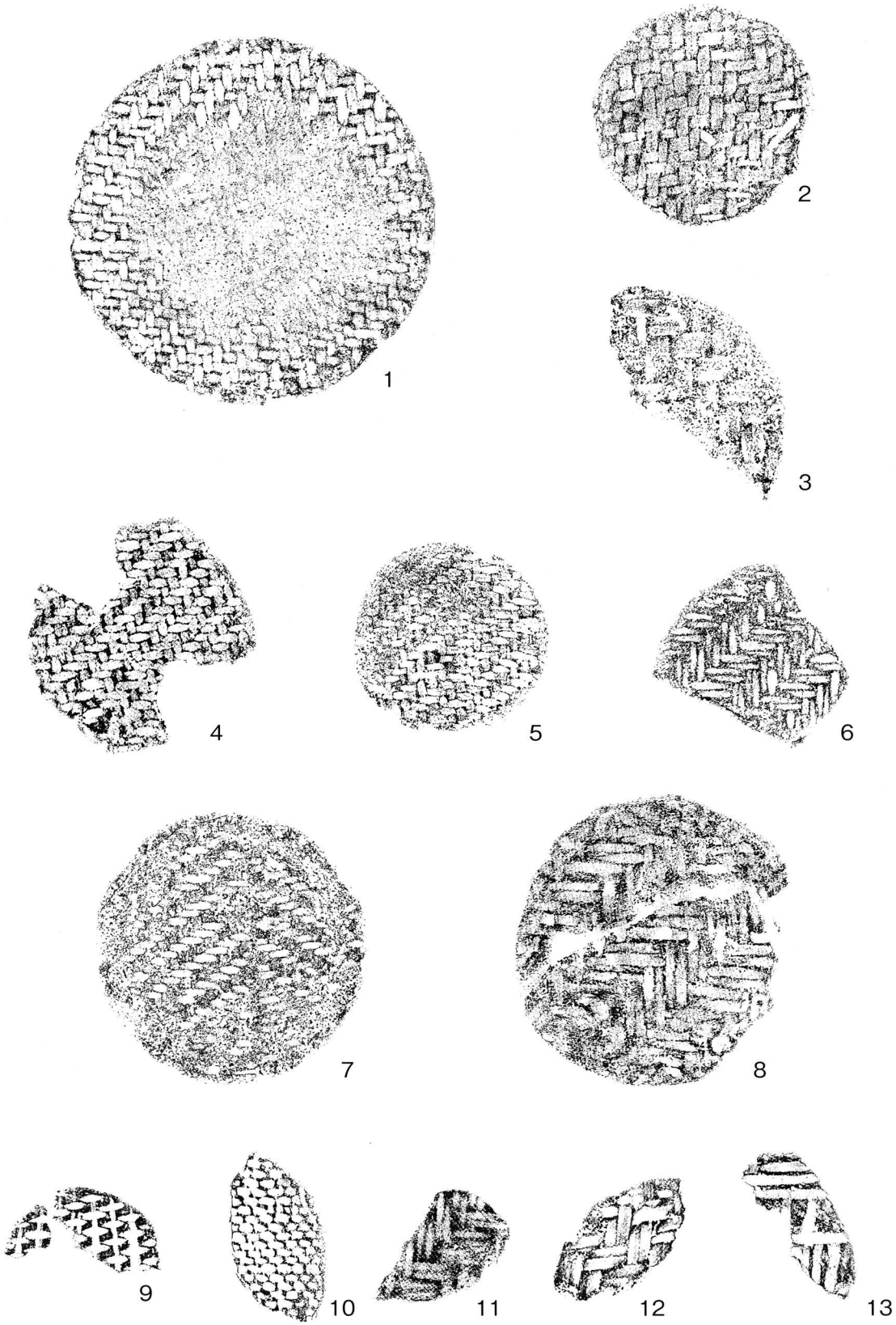
依頼された資料はすべて底部のみだったため、胴部の残存している土器における底部圧痕を調査できれば、底部繊維圧痕土器の時代、型式、器形との関係、同じ圧痕によるさまざまな技法の可能性の検討などを解明する手がかりになると思われる。

紙面の都合で報告できなかったが、実物繊維資料も土器底部圧痕と合わせて調査をした。実物繊維は出土が少なくこれまでいくつもの課題が残されている。貴重な調査の機会をいただいた桜町遺跡の資料は、後日土器底部圧痕資料とともに何らかの方法で報告をさせていただく予定である。

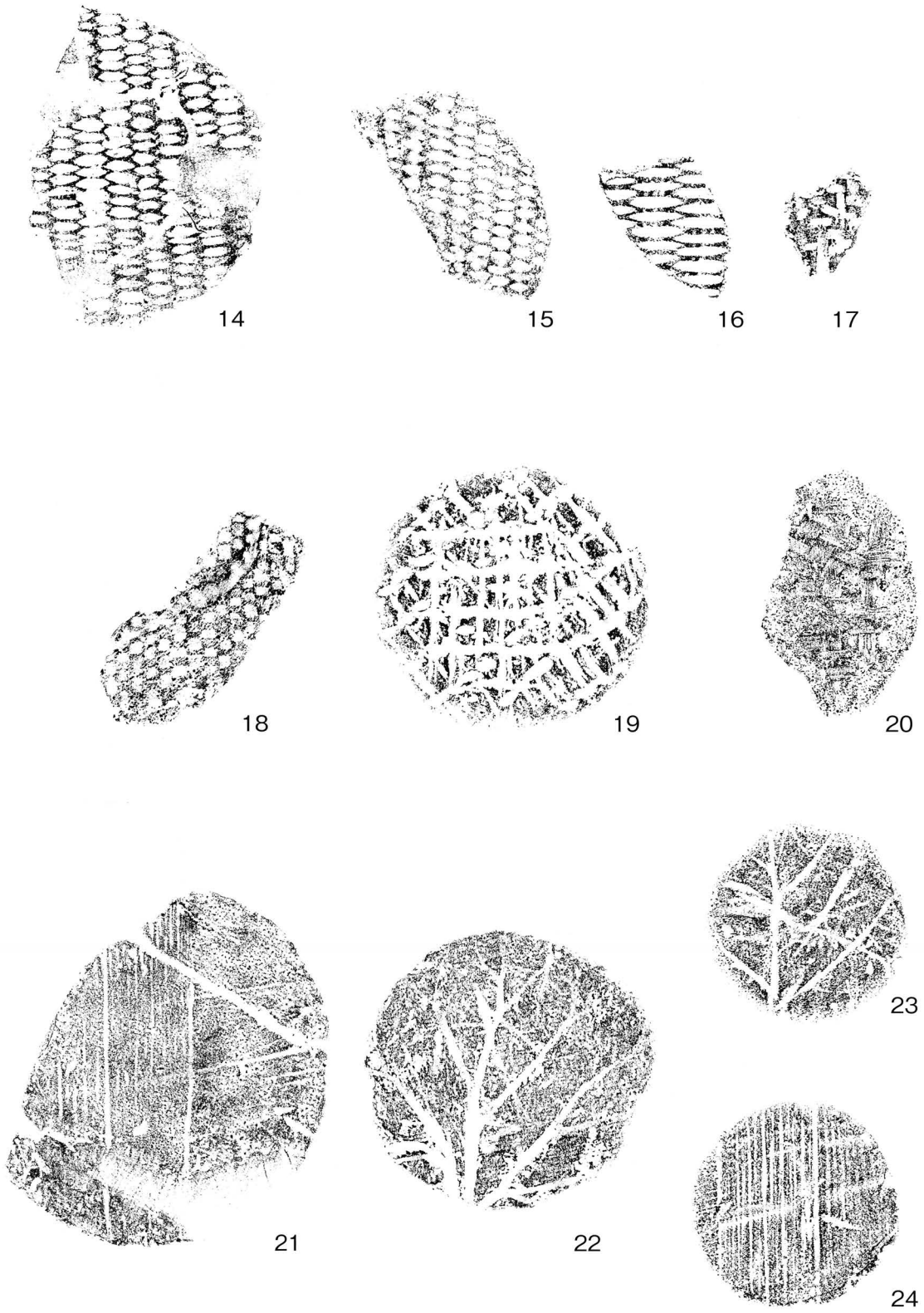
桜町遺跡出土土器底部繊維圧痕観察表

単位＝cm

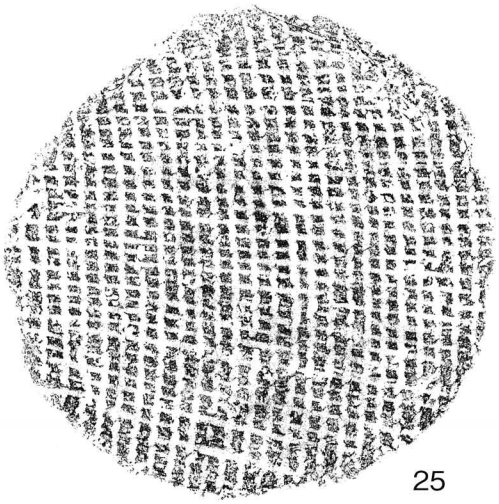
番号	繊維分類	底部A	底部B	素材幅a	素材幅b	素材幅c	素材幅d	密度・cm間	A本数	B本数	C本数	D本数	拓本番号	備考
1	Ⅰ－1A	5.5	4.4	0.4	0.4			3	7	10			18	
2	Ⅰ－1B	10.4	7.1	0.4	0.4			5	6	24			14	
3	Ⅰ－1B	5.9	6.1	0.4	0.3			5	7	24			15	
4	Ⅰ－1B	4.2	3.4	0.4	0.3			3	2	14			16	
5	Ⅰ－2A	11.8	11.8	0.28	0.28			2	8	7			1	
6	Ⅰ－2A	6.8	6.8	0.4	0.4			5	12	13			2	
7	Ⅰ－2A	4.3	4.5	0.6	0.6			4	5	5			3	
8	Ⅰ－2A	7.2	7.2	0.2	0.2			4	11	13			4	
9	Ⅰ－2A	6.1	6.2	0.2	0.2			4	13	17			5	
10	1－2A	5.2	3.1	0.2	0.3			3	16	10			10	
11	1－2B	5.5	6.2	0.2	0.2			5	22	22			6	
12	1－2B	9.4	8.4	0.4	0.4			5	14	12			8	
13	1－2B	3.5	3.2	0.25	0.25			3	10	10			11	
14	1－2B	3.2	3.2	0.4	0.4			3	8	8			12	
15	Ⅰ－2C	3.7	2.4	0.4	0.4			不明	不明	不明			13	
16	Ⅰ－2D	8.8	8.8	0.3	0.3			5	14	18			7	
17	Ⅰ－2E	4.8	2.5	0.25	0.3			2	4	7			9	
18	Ⅰ－3A	2.8	2.2	0.3	0.3	0.3		2	3	5	1？		17	小片のため詳細不明
19	Ⅰ－3B	8.1	8.6	0.35	0.35	0.35	0.35	8	5	5	5	5	19	
20	Ⅰ－3B	7.6	5.1	0.4	0.4	0.4	0.4	4	4	5	4	4？	20	
21	Ⅱ－1	12.8	12.8	0.3	0.3			10	20	26			25	
22	Ⅱ－1	11.5	11.4	0.35	0.35			10	11	15			26	
23	Ⅱ－1	7.3	7.3	0.2	0.2			5	12	16			29	
24	Ⅱ－1	8.1	5.6	0.3	0.2			5	5	12			30	
25	Ⅱ－1	3.9	4.4	0.2	0.2			3	2	6			31	
26	Ⅱ－1	3.5	4.8	0.2	0.2			3	8	8				
27	Ⅱ－2	4.8	5.1	0.15	0.15			2	9	7			32	
28	Ⅱ－2	5.8	6.4	0.15	0.15			3	15	13				
29	Ⅱ－3	12.3	13.0	0.2	0.2	0.2		5	9	8	8		27	
30	Ⅱ－3	10.9	8.1	0.25	0.25	0.25		5	7	10	7			
31	Ⅲ－1	8.7	8.7										22	
32	Ⅲ－1	6.1	6.3										23	
33	Ⅲ－2	6.5	6.5										24	
34	Ⅲ－2	11.3	9.9										21	
35	Ⅳ－1	11.2	11.0	0.2	0.2	0.2		10	34	21			28	素材C本の間にBは9本ある
36	Ⅳ－2	12.3	10.8	0.3	0.3	0.25		8	16	32				

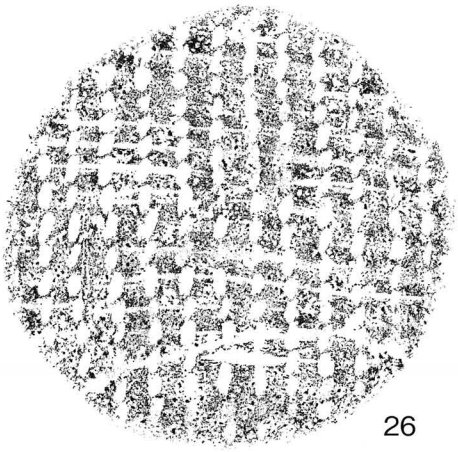


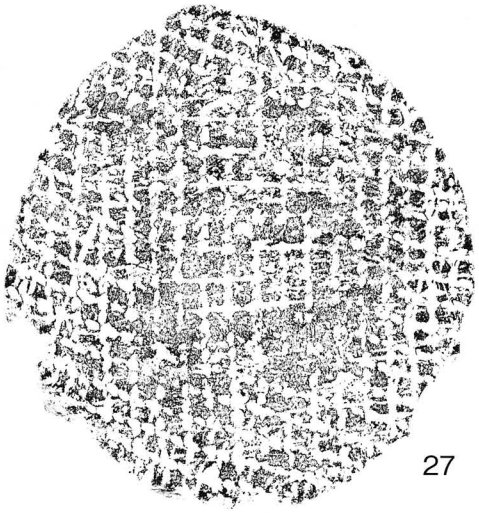
第1図　桜町遺跡出土土器底部圧痕拓本1（S=1/2）

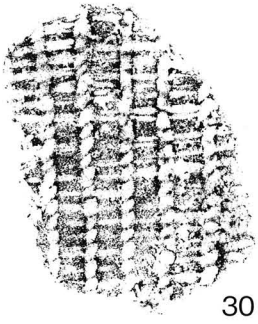


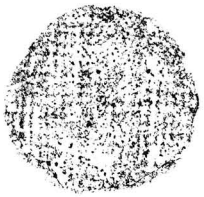
第2図　桜町遺跡出土土器底部圧痕拓本2(S=1/2)











第3図　桜町遺跡出土土器底部圧痕拓本(S=1/2)

2　桜町遺跡出土の動物遺存体

廣藤　紀子（京都大学大学院人間・環境学研究科）
松井　　章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

1．概要

桜町遺跡は富山湾から直線距離で20キロメートル離れた内陸部に営まれた集落遺跡で、小矢部川の支流である子撫川が山間部から平野部に流れ出す谷部に形成された小規模な扇状地の末端に位置する。縄文時代以来、幾度も生じた土石流が、それぞれの時代の遺構や遺物を覆い尽くして空気を遮断し、さらに伏流水が各遺構面を浸したおかげで、乾燥した遺跡では残らない植物遺体を良好な状態で保存した。しかしながら、動物遺存体の保存条件には恵まれず、貝塚や石灰岩洞穴で見るような食料となった大型哺乳類の出土はほとんど見られず、出土した動物遺存体の総破片点数は21,192点に上るが、すべて焼けて細かく砕けた砕片であり、そのうち、種類や部位を同定できたのは、総破片点数の約２パーセントにあたる399点にすぎない。その内訳は、軟骨魚綱・硬骨魚綱が125点、両生綱が126点、爬虫綱が27点、鳥綱が11点、哺乳綱が110点を数える（表１）。以下、調査区ごとに報告する。

2．調査区別の出土量分析報告

i）第1調査区

本調査区は西へ入り込む谷の入り口部分に当たる。中期中葉あたりから後期初頭にかけての土器溜まり・木材群の土壌に含まれる焼骨群で、破片点数にして2,108点を採集した。そのうち、種類、部位が同定できたのは以下の122点である。

【軟骨魚綱】

サメ類の遊離歯が１点出土している。歯根は失われており、エナメル質の部分が残っていた。破砕され、先端の尖った部分のみが残存していたため、元の大きさは不明である。

【硬骨魚綱】

椎骨を始めとする魚類遺存体が64点出土したが、種名・部位を同定できたのは以下の種にとどまる。

・コイ科

第一腹椎骨が４点、第二肋骨の左側が１点出土している。小型のコイ科魚類で、体長10cmから30cm未満のフナ、オイカワ、ウグイなどに相当する。種名の同定に最も有力な部位である咽頭骨、または咽頭歯は見られなかった。コイ科の第一腹椎骨は、厚みのない円筒形という特徴をもっており、同定に有効である。

・サケ属

網目状の椎骨破片が32点、先の尖った遊離歯の破片が12点出土している。椎骨や遊離歯の破片の大きさから、サケ科のなかでもイワナやヤマメなどの小形の陸封型ではなく、大形の降海型のサケ属と考えられる。日本近海の主要な降海型のサケ属には、マスノスケ、カラフトマス、シロザケ、サクラマスなど

があるが、桜町遺跡は、北太平洋の降海型サケ属の分布域の南端に位置するため、南まで分布するシロザケやサクラマスのものである可能性が高い。

・スズキ

体長30cm程度の、セイゴクラスと思われる腹椎骨が2点出土している。ともに火熱を受けた明白な痕跡は見られないが、他の例と比較して、やはり熱を受けたものであろう。

・タイ科の一種

前上顎骨もしくは歯骨と思われる破片が1点出土している。火熱を受けて白灰化しており、歯列の一部のみ確認できたが、詳細は不明である。マダイ、クロダイなどが候補にあげられる。

・不明魚類　種名の同定にいたらなかった破片が13点出土している。内訳は以下の通りである。

・鱗1点　火熱を受けた明白な痕跡は見られない。

・棘2点　いずれも鋸歯状の突起を持ち、火を受けて砕片となっている。

・前上顎骨／歯骨1点　小型魚の顎骨の歯列部分が出土している。

・椎骨9点　出土した椎骨はいずれも体長10cm～20cm程度の小型魚のものと思われる。火を受けて白灰化し、収縮して細かく砕けているために具体的な種名を同定するには至らなかった。

【両生綱】

カエル類の骨が多く出土している。いずれも詳細な同定には至らなかったが、大型のものが多く、食料資源として捕らえていたものと考えられる。

本調査区からはカエル類の骨が18点出土している。その内訳は、上腕骨の右側遠位部が1点、橈尺骨の左側遠位部が2点、左側近位部が1点、右側近位部が1点、腸骨寛骨臼の左側が1点、左右不明の腓骨が2点、四肢骨が6点、椎骨が2点、尾骨が2点となっている。ほとんどが白灰化しており、火熱を受けて白色に灰化した痕跡が認められなかったのは腸骨寛骨臼の1点のみであった。

【爬虫綱】

ヘビ類の椎骨が9点出土している。属名や種名の同定には至らなかった。いずれも火熱を受けて白色に灰化した痕跡は見られない。

【鳥綱】

本遺跡からは数量は少ないが、第2調査区を除く各調査区から鳥類の骨が出土している。多くは属名や種名の同定には至らなかった。しかし大型鳥類の骨は認められず、小型のカモ相当の大きさのものが多い。本調査区からは6点の鳥類の骨が確認できた。

・カモ科の一種

烏口骨の右側近位部、上腕骨関節面部分の破片が1点出土している。大きさはマガモ、カルガモクラスである。

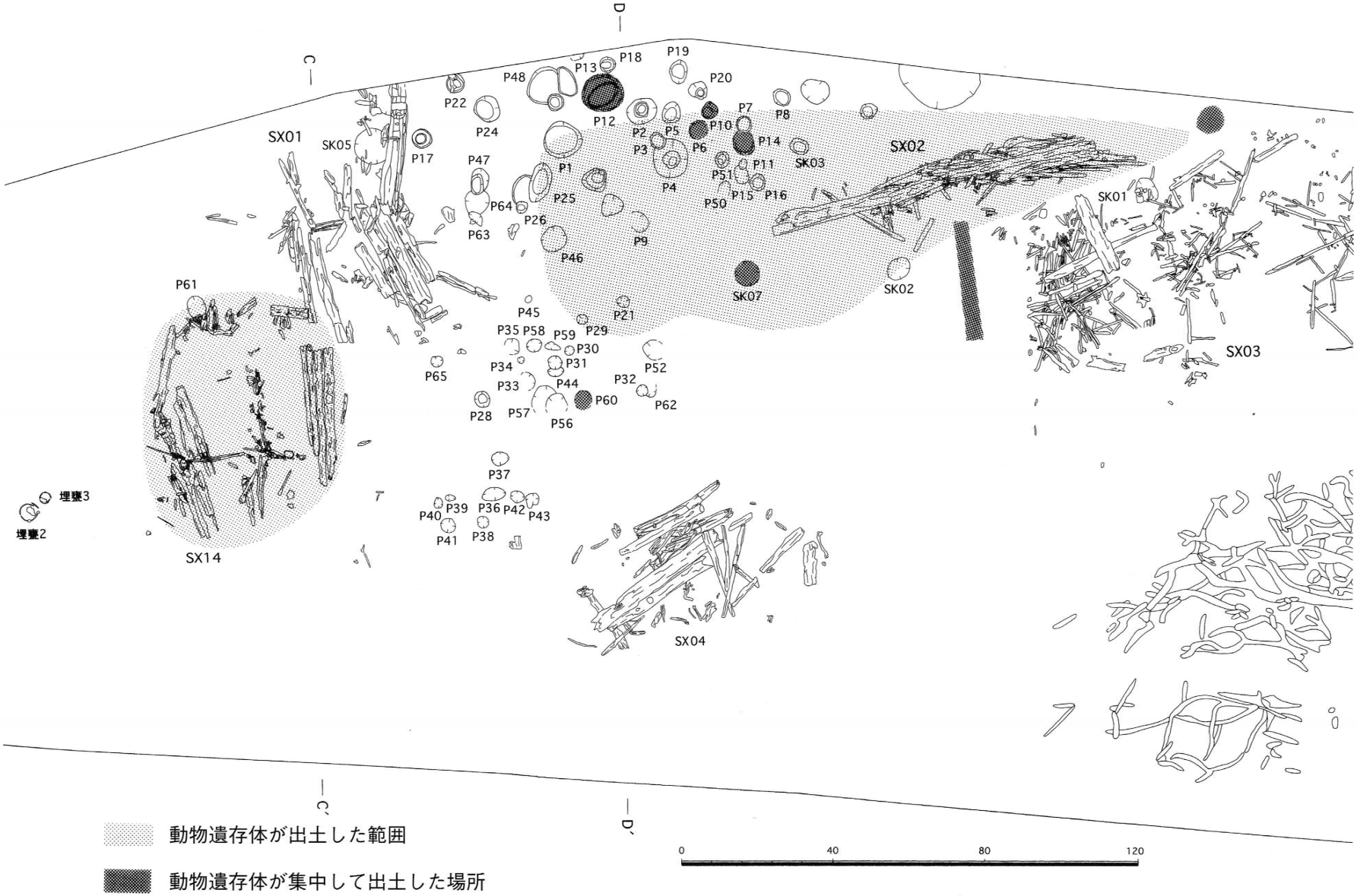
・不明鳥類　属名や種名の同定に至らなかった鳥類の骨が5点存在する。内訳は以下の通りである。

・烏口骨の左側1点　肩甲臼部分のみが残存する。種名は不明だが、小型鳥類のものと思われる。

・足根中足骨2点　カモ科のものに似た足中足骨の右側骨幹部が1点、小型鳥類の足根中足骨遠位端（左右不明）が1点出土している。

図１　第１調査区　動物遺存体　出土分布図

小矢部市教育委員会 2004　第１・６調査区縄文遺構全体図より作成



・手根中手骨 骨幹部1点　小中手骨の一部を含む。詳細は不明だが、小型鳥類のものと思われる。

・指骨1点　小型鳥類のものと思われるが左右など詳細は不明である。

【哺乳綱】

ニホンジカ・イノシシを始めとする哺乳類の骨が23点存在する。小型哺乳類が多く、また種類も多い。これら以外にも哺乳類のものと思われる破片は多数出土しているが、その多くが火熱を受けて細かく砕けてしまっているために、属名や種名の同定には至らなかった。同定に至らなかった破片には、大型哺乳類のものが多く含まれていると思われる。同定できた破片は、以下の通りである。

・ニホンジカ

鹿角表面の顆粒の一部が1点と、基節骨の遠位端の滑車部が1点出土している。いずれも火熱を受けて白灰化している。

・イノシシ

イノシシのものと思われる遊離歯が11点出土している。ほとんどが破片で、切歯1点と右側上顎後臼歯1点のみが同定できた。切歯は歯冠のエナメル部分の破片であり、詳細は不明である。上顎後臼歯も歯根は失われていたが比較的良好な状態で残っていた。

・大型哺乳類

イノシシもしくはニホンジカのものと思われる肋骨骨幹部が1点、遊離歯の破片が1点、出土している。これ以外にも大型哺乳類の骨は多数出土しているが、そのほとんどが火熱を受けて白灰化し、細かな砕片となっているために、種名、部位名共に詳細な同定には至らなかった。

・ノウサギ

大腿骨の右側骨頭部が1点、肋骨の近位端が1点、橈骨の左側遠位端が1点　中手骨もしくは中足骨の遠位端が1点出土している。いずれも火熱を受けて白灰化しており、部位の特徴の顕著な骨端部のみが同定できた。

・ムササビ

上腕骨の左側遠位端が1点、寛骨の左側が1点、指骨の遠位部が1点、出土している。上腕骨は火熱を受けて白灰化し、破砕されて滑車部分を含む遠位端のみが同定できた。寛骨は寛骨臼を含む腸骨部分が残存しており、火熱による白色灰化は認められない。指骨は火熱のために白灰化しており、遠位端を含む骨幹部のみが同定できた。

・イタチ

寛骨の右側1点が出土している。寛骨臼を含む腸骨部分のみ残存していた。火熱による白色灰化は認められない。

ii）第2調査区

本調査区は、第1調査区の西側に当たり、31点の動物遺存体が出土している。それらのうち、種名、部位の同定に至ったのは、1点のみであった。この個体は縄文時代晩期以降から古墳時代の土石流が再堆積を繰り返した層から出土しているため、詳細な年代は不明である。他の破片も哺乳類のものと思

われるが、いずれも同定には至らなかった。

【哺乳類】

ムササビに相当する齧歯目の、上腕骨の右側遠位端が1点出土している。火熱を受けて砕け、遠位端の滑車部分の一部のみが残存していた。

iii）第３調査区

縄文時代後・晩期の遺物包含層や土坑、溝から18,776点の動物遺存体が出土している。それらのうち、種類、部位の同定に至ったのは以下の271点である。詳細な同定に至らなかった遺存体についても、哺乳類のものと思われる破片が多く含まれていると考えられる。

【軟骨魚綱】

エイ・サメ類の椎骨を始めとする、軟骨魚綱の遺存体が5点出土している。詳細は以下の通りである。

・ホホジロザメ

鋸歯状の歯冠部を持つ遊離歯が1点出土している。形状から、おそらくホホジロザメのものと考えられる。

・サメ類

遊離歯が2点出土している。いずれも歯冠部のみ残存していたため、体長、種類等は不明である。1点は断面が円形を呈する三角錐状であり、もう1点は断面が潰れた楕円形を呈している。

・エイ・サメ類

円筒形状の椎骨が2点出土している。いずれも小型のものであり、火熱を受けて白灰化している。

【硬骨魚綱】

本調査区からは51点の硬骨魚類の遺存体が出土している。詳細な種類・部位は以下の通りである。

・コイ科

第一腹椎骨が2点、第二肋骨の左側1点、同じく右側1点、角骨の右側関節部1点が同定できた。体長10cmから30cm程度のものと思われる。いずれも火熱を受けて白灰化していた。

・サケ属

椎骨の破片が11点、遊離歯の破片1点出土している。いずれも火熱を受けて白灰化している。

・スズキ？

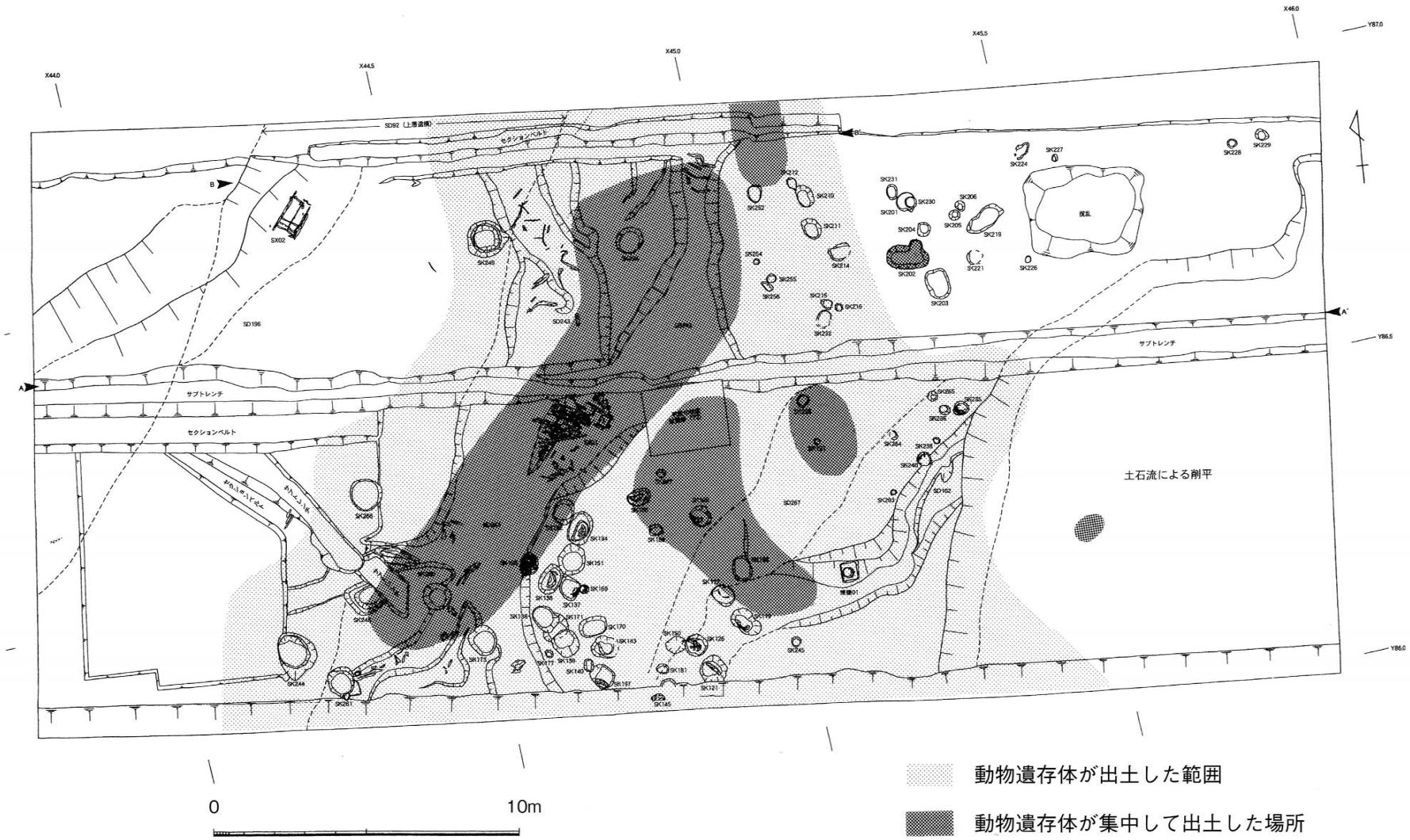
硬骨魚類の鰓蓋骨が1点出土している。骨自体に厚みがあるため、スズキの主鰓蓋骨の可能性が高いが、白灰化し、破片となっているために詳細は不明である。

・不明魚類　種名の同定に至らなかった破片が33点出土している。内訳は以下の通りである。

- ・方骨 左側1点・右側2点　いずれも関節部分のみ残存しているが、同定には至らなかった。小型の魚である。
- ・第一腹椎骨1点　頭蓋骨と関節面の一部が同定できたが、種名等は不明である。
- ・椎骨27点　いずれも30cm以下の小型魚のものと思われるが、詳細な同定には至らなかった。正中方向に平行な切断痕と、垂直な切断痕を持つ個体が、それぞれ1点ずつ確認できた。

図２　第１３調査区　動物遺存体　出土分布図

小矢部市教育委員会 2005　第３調査区東側下層遺構図より作成



・棘1点　鋸歯状の突起を持つ。

・部位不明1点　鰓蓋骨あるいは歯骨と思われるが、詳細は不明である。

【両生綱】

属名や種名の同定には至らなかったが、本調査区からもカエル類の骨が108点出土している。いずれも火熱を受け白色灰化している。

内訳は、上腕骨の左側遠位が5点、同じく上腕骨の右側近位端が1点、同じく右側遠位端が6点、左右不明の遠位が3点、左右不明の近位が1点、橈尺骨の左側近位端が5点、右側近位端が5点、右側遠位端が1点、左右不明の近位が7点、左右不明の遠位が2点、寛骨臼部の左側が1点、同じく右側が1点、腸骨寛骨臼の左側が1点、同じく右側が4点、左右不明が1点、腓骨の左右不明が12点、その他の四肢骨が10点、指骨が16点、椎骨が23点、尾骨が3点である。

【爬虫綱】

属名や種名の同定には至らなかったが、ヘビ類の椎骨が18点出土している。いずれも火熱を受けて白灰化している。

【鳥綱】

目以下の同定には至らなかったが、本調査区からは4点の鳥骨が出土している。いずれも白灰化して、破片となっている。詳細は以下の通りである。

・足根中足骨 滑車部分1点　元の大きさは不明である。

・手根中手骨 左側遠位端1点　小中手骨を含む骨端部の一部が同定できた。

・指骨 遠位端1点　大きさ、左右は不明である。

・部位不明1点　鳥骨の特徴である緻密で薄く平滑な骨幹部分が出土している。

【哺乳類】

本調査区からは85点の哺乳類の遺存体を同定できた。これ以外にも、哺乳類のものと思われる破片は大量に出土しているが、いずれも詳細は不明である。種類・部位が確認できた遺存体は以下の通りである。

・ニホンジカ

枝角の破片が39点、手根骨(三角骨) の右側が1点、橈側手根骨の左側が1点、右側が1点出土している。なお、枝角の破片39点のうち、37点に加工痕が認められていることから、骨角器の破片であると考えられる。これは他の調査区出土の動物遺存体には見られない特徴である。出土した鹿角製品は骨針が多く、中には鋭く尖らせた先端部分や、溝状の括れを持つ個体も確認できた。いずれも火熱を受け、白灰化していた。手根骨もともに白灰化していたが、関節面の残りがよかったため、種名や部位を同定することができた。

・イノシシ

肩甲骨の左側関節面が1点、尺骨の右側遠位端が1点、同じく尺骨の左右不明破片が1点、距骨の右側滑車部が1点、中足骨の左側遠位端が1点、中手骨もしくは中足骨の右側遠位端が1点、中節骨の近位端が3点、完形が1点、不明指骨の近位端が1点出土している。いずれも火熱を受け、白灰化している。

完形の中節骨は近位端の化骨化が終了せず、若い固体と考えられる。

・大型哺乳類

大型哺乳類の側頭骨鼓室部が1点、頭蓋骨の一部と思われる破片が1点、椎骨が1点、四肢骨の骨端部が1点、中節骨が1点、出土している。いずれも大きさからイノシシもしくはニホンジカのものと思われるが、詳細は不明である。

・ノウサギ

中手骨または中足骨の近位端が3点、同じく遠位端が1点、距骨の左側関節部分が1点、基節骨の近位端が2点、同じく遠位端が7点　中節骨の完形が2点、同じく遠位端が1点　末節骨の完形が1点、同じく近位端が2点、中節骨もしくは基節骨と考えられる指骨の遠位端が2点、出土している。

また、これら以外にもノウサギのものと考えられる遺存体が、中手骨または中足骨の遠位端が1点、中節骨または基節骨の遠位端が2点出土している。

・齧歯目

椎骨との関節面を含む肋骨の近位端が1点出土している。ムササビに似ているが、火熱を受けて収縮、白灰化しており、属名や種名の同定はできない。

・ムササビ

脛骨の左側遠位端が1点出土している。火熱を受けて白灰化しているが、関節面はほぼ完全な状態であった。

iv）第6調査区

本調査区は、第1調査区の北側に位置する。調査区東端の中期後葉の土器包含層から195点の動物遺存体が出土しているが、種類、部位の同定に至ったのは5点にとどまる。

【硬骨魚綱】

サケ属の椎骨の、網目状の破片が3点確認できた。そのうち2点は火熱を受けて白灰化しているが、残り1点には明白な火熱による変色、変形は見られない。

【鳥綱】

小型のカモと同程度の脛骨の右側遠位端が1点出土している。骨端部が欠けているため属名や種名の同定には至らなかった。明白な火熱による変色、変形は見られない。

【哺乳綱】

ムササビの下顎切歯の左側が1点出土している。火熱による変色、変形は見られず、完形に近い良好な状態であった。

表１．桜町遺跡出土動物遺存体種名表

脊椎動物門　Vertebrata
軟骨魚綱　Chondrichthyes
　ネズミザメ目　Lamniformes
　　ネズミザメ科　Lamnidae
　　ホホジロザメ　*Carcharodon carcharias*
　　サメ類　種不明　Lamniformes fam. et gen. indet.
エイ目　Rajiformes
　エイ類　種不明　Rajiformes fam. et gen. indet.

硬骨魚綱　Osteichthyes
　コイ目　Cyprinida
　　コイ科　Cyprinidae
　　コイ科の一種　Cyprinidae gen. et sp. indet.
　サケ目　Salmoniformes
　　サケ科　Salmonidae
　　サケ属の一種　*Oncorhynchus sp.*
　スズキ目　Percidae
　　スズキ科　Percichthyidae
　　スズキ　*Lateolabrax japonicus*
　　タイ科　Sparidae
　　タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. indet

両生綱　Amphibia
　カエル目　Salientia
　　カエル目の一種　Salientia fam. et gen. indet.

爬虫綱　Reptilia
　トカゲ目　Squamata
　　ヘビ亜目　Serpentes
　　ヘビ亜目の一種　Serpentes fam. et gen. indet

鳥綱　Aves
　鳥綱の一種　Aves fam. et gen. indet.

哺乳綱　Mammalia
　ウサギ目　Lagomorpha
　　ウサギ科　Leporidae
　　ウサギ科の一種　Leporidae gen. et sp. indet
　齧歯目　Rodentia
　　リス科　Sciuridae
　　ムササビ　*Petaurista leucogenys*
　食肉目　Carnivora
　　イタチ科　Mustelidae
　　イタチ　*Mustela itatsi*
　偶蹄目　Artiodactyla
　　シカ科 Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*
　　イノシシ科　Suidae
　　イノシシ　*Sus Scrofa*

※なお、これらの他にウシの歯の破片が確認されたが、骨の風化度の違いなどから、後世の混入遺物と判断し、本報告から省略した。

3．考察

桜町遺跡から出土した動物遺存体の大半は、火を受けて変色し、収縮した痕跡が見られる。日本の土壌の多くは火山灰性の酸性土壌であり、カルシウムやリンを主成分とする動物遺存体の保存には適さない。桜町遺跡出土の動物遺存体は土石流によって瞬時に空気から遮断され、かつ火を受けたことで、骨自体が遺跡に残ったものと考えられる。逆に言えば、火を受けて無機質化したものだけが、化学バクテリアや土壌細菌の分解を受けずに保存されたのであろう。このような理由により、貝塚や洞穴遺跡で見るような、食糧資源となったシカやイノシシの大形動物の生の骨は腐朽し、消えてしまったと考えられる。

したがって、本資料は桜町遺跡で消費・廃棄された動物遺存体のうち、ごく限られた「熱を受けた」、「細片」だけであることを前提に考察を行わねばならない。

桜町遺跡から出土した資料は、上記の理由により細かく砕けたものばかりで、21,191点の資料が土壌水洗で選別、採集されながら、種名や部位を同定できた資料は出土総数のうち2パーセント程度にすぎない。しかし従来、報告されてきた動物遺存体の出土例は、海岸部に多い貝塚や山間部に多い洞穴遺跡がほとんどであり、こうした平野部と山間部の中間に位置する内陸部の集落遺跡での出土例は貴重である。

魚類は淡水魚であるコイ科の椎骨や、遡河性のサケ属の椎骨の破片や遊離歯が出ており、桜町遺跡の人々が子撫川、小矢部川に生息する魚類を利用していたことがわかる。だがその一方で、海水魚のサメ類やスズキ、タイ科の出土も認められることから、海岸部との交流があったと考えられる。

出土した哺乳類の骨は、ウサギ類やムササビのような小型哺乳類のものから、ニホンジカ、イノシシのような大型哺乳類のものまで数多く同定できた。また、属名や種名の同定には至らなかったがシカ、イノシシに相当する大型哺乳類の破片が多いことから、桜町遺跡においても他の縄文遺跡と同様にシカ、イノシシが重要な食料資源であったと考えられる。

その他の動物遺存体では、鳥類、ヘビ類、カエル類を検出した。特にカエル類の出土点数は100点を超え、火を受けていることからも、動物性食料資源として積極的に食べられていたと言える。

サケ属、つまり、シロザケやサクラマスの遺存体は、桜町遺跡から出土した魚類遺存体の中で多数を占める。江戸時代の小矢部川にサケが上がり、その漁獲をめぐる課税記録があり(小島2001)、その支流の子撫川にもサクラマスやシロザケが産卵のために遡ってきたのだという。特に桜町遺跡の周辺は扇状地の縁辺にあたり、子撫川の川底には伏流水が吹き出していたことが容易に想定でき、そうした川底はサケ属の産卵場として格好の環境だったのだろう。コイ科をはじめとするその他の魚種に比べて、サケ属の出土量が多いことから、桜町遺跡の人々が季節的に川を遡上するサケ属を、最も重要な食料源として利用していたと判断できる。遡上してきた大量のサクラマスやシロザケを捕らえ、日干しや燻製のような保存加工をし、食料の乏しい晩冬から春先の重要な動物性タンパク資源として利用していたのだろう。コイ科と思われる淡水魚の骨も見られたが数は少なく、桜町遺跡の人々にとってサケ属が重要な資源となっていたことがわかる。他の内陸部の遺跡も含めて、出土したサケ属の椎骨が焼かれて細かく砕けているのも、日干しを主とした乾燥保存によって、現在の棒ダラのように堅く加工されたサケ・マス類を消費する際、骨ごと砕いて軟らかくして食していたためだと思われる(Casteel1976、Matsui1996)。

また、縄文時代前期の小竹貝塚(富山県富山市) や縄文中期の上山田貝塚(石川県宇ノ気町) からもサケ・マス類の椎骨破片や遊離歯の出土例が報告されており、北陸地方において縄文時代の早い段階から、サケ・マス類が重要な食料資源として利用されていたことが伺える。一部の研究者が考える考えるような、縄文海進期の温暖化の時期に本州には、シロザケやサクラマスは遡河しなかっただろうという意見は当たらないだろう。

参考文献

小島俊彰 2001「コラム かつて小矢部川をサケは遡った」『北陸の縄文遺跡 桜町遺跡 調査概報』桜町遺跡発掘調査団編、学生社

小矢部市教育委員会2004『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅰ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ』

小矢部市教育委員会2005『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅱ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ』

桜町遺跡発掘調査団編2001『北陸の縄文遺跡 桜町遺跡 調査概報』学生社

松井章・平口哲夫1979「第8章 動物遺体」『上山田貝塚 石川県宇ノ気町上山田遺跡調査報告』宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会

松井章1985「サケ・マス論の展望と今後の課題」『考古学研究』第31巻4号

松井章1999「生存保障のために試みられた多様な工夫」小林達雄編『最新縄文学の世界』朝日新聞社

山崎京美1983「小竹貝塚採集の動物遺存体」『富山市考古資料館紀要』第13号　富山市考古資料館

Akira Matsui1996 “Archaeological investigarions of anadromous salmonid fishing in Japan” World Archaeology Vol.27 (3)

Casteel, R. 1976 “Fish Remains in Archaeology” Academic Press. New York

表２　出土動物遺存体部位別集計表

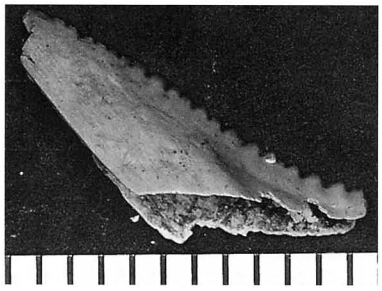
魚類	種類	遊離歯	第一腹椎骨	腹椎骨	椎骨	その他	合計
第１調査区	サメ類	1					1
	コイ科		4			第二肋骨（L1）	5
	サケ属	12			32(破片)		44
	スズキ			2			2
	タイ科					前上顎骨／歯骨（左右不明1）	1
	不明魚類				9	鱗（1）・棘（2）・前上顎骨／歯骨（左右不明1）	13
	合計	13	4	2	41	6	66
第３調査区	エイ・サメ類				2		2
	サメ類	2					2
	ホホジロザメ	1					1
	コイ科		2			第二肋骨（L1・R1）・角骨（R1）	5
	サケ属	1			11		12
	スズキ？					主鰓蓋骨（左右不明1）	1
	不明魚類		1		27	方骨（L1・R2）・棘（1）・鰓蓋骨／歯骨（1）	33
	合計	4	3		40	9	56
第６調査区	サケ属				3		3
	合計				3		3
合計		17	7	2	84	15	125

両生類	種類	上腕骨			橈尺骨			寛骨		腸骨			腓骨	四肢骨	指骨	椎骨	尾骨	合計
		L	R	不明	L	R	不明	L	R	L	R	不明	不明					
第１調査区	カエル類		1		3	1				1			2	6		2	2	18
第３調査区	カエル類	5	7	4	5	6	9	1	1	1	4	1	12	10	16	23	3	108
合計		5	8	4	8	7	9	1	1	2	4	1	14	16	16	25	5	126

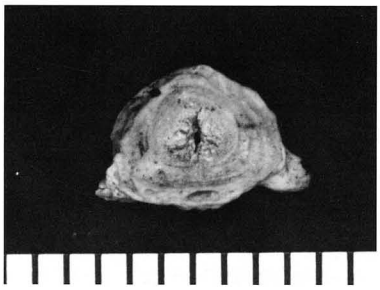
爬虫類	種類	椎骨	合計
第１調査区	ヘビ類	9	9
第３調査区	ヘビ類	18	18
合計		27	27

鳥類	種類	烏口骨		手根中手骨			脛骨		足根中足骨			指骨	その他	合計
		L	R	L	R	不明	L	R	L	R	不明			
第１調査区	カモ科		1											1
	不明鳥類	1				1				1	1	1		5
	合計	1	1			1				1	1	1		6
第３調査区	不明鳥類			1							1	1	不明部位（1）	4
	合計			1							1	1	1	4
第６調査区	不明鳥類							1						1
	合計							1						1
合計		1	1	1		1		1		1	2	2	1	11

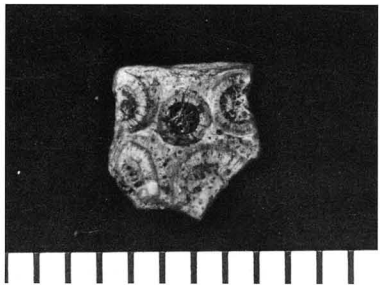
哺乳類	種類	頭蓋骨	肩甲骨		上腕骨		橈骨		尺骨			寛骨		大腿骨		中足骨		脛骨		椎骨	その他	合計
			L	R	L	R	L	R	L	R	不明	L	R	L	R	L	R	L	R			
第1調査区	ニホンジカ																				鹿角(1)・基節骨(1)	2
	イノシシ																				上顎後臼歯(R1)・切歯(1)・遊離歯破片(9)	11
	大型哺乳類																				遊離歯(1)・肋骨(1)	2
	ノウサギ						1								1						肋骨(1)・四肢骨(1)	4
	ムササビ				1							1									指骨(1)	3
	イタチ												1									1
	合計				1		1					1	1		1						18	23
第2調査区	齧歯目					1																1
	合計					1																1
第3調査区	ニホンジカ																				鹿角(39)・三角骨(R1)・橈側手根骨(L1・R1)	42
	イノシシ		1							1	1					1					距骨(R1)・中節骨(4)・四肢骨(1)・指骨(1)	11
	大型哺乳類	2																		1	四肢骨(1)・指骨(1)	5
	ノウサギ																				距骨(L1)・四肢骨(4)・指骨(17)	22
	ウサギ類																				四肢骨(1)・指骨(2)	3
	齧歯目																				肋骨(1)	1
	ムササビ																	1				1
	合計	2	1							1	1					1		1		1	77	85
第6調査区	ムササビ																				下顎切歯(L1)	1
	合計																				1	1
合計		2	1		1	1	1			1	1	1	1		1	1		1		1	96	110



1　ホホジロザメ　遊離歯

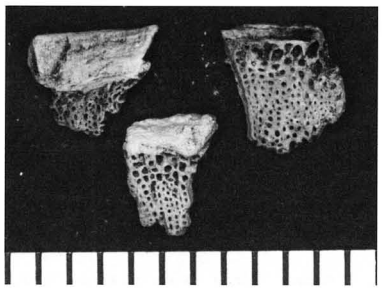


2　コイ科　第一腹椎骨

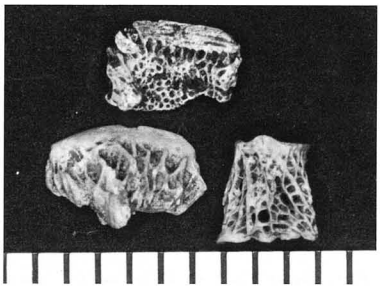


3　タイ科　前上顎骨／歯骨

4　スズキ　腹椎骨

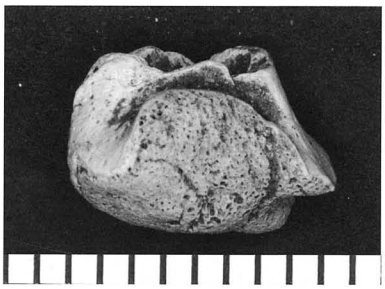


5　サケ属　椎骨破片



6　サケ属　椎骨破片

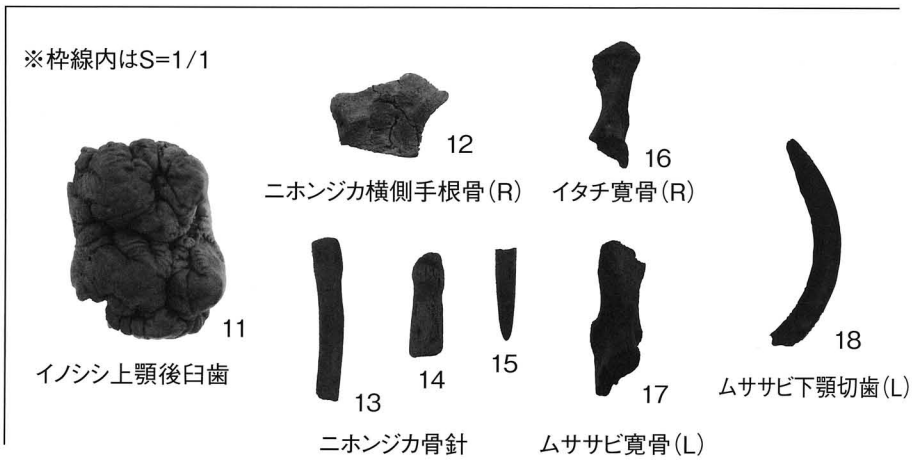
7　サケ属　遊離歯



8　カエル類上腕骨遠位端（R）

9　ヘビ類　椎骨

10　鳥類手根中手骨遠位端（L）



1　第3調査区　Ⅶ-C層
5・6・7　第1調査区盛土層
10　第3調査区　Ⅶ-C層
13・14　第3調査区　後・晩期　南溝
17　第1調査区　盛土層

2　第1調査区　盛土下層
8　第3調査区　Ⅶ-C層
11　第1調査区　S×17
15　第3調査区　Ⅶ-C層
18　第6調査区　SG-01黒②

3・4　第1調査区　盛土アゼ2
9　第1調査区　盛土アゼ2
12　第3調査区　Ⅶ-C層
16　第1調査区　盛土アゼ2

図3　出土動物遺存写真

3　桜町遺跡より出土した大型植物化石からみた植物利用

吉川　純子（古代の森研究舎）

1．はじめに

桜町遺跡は小矢部川と小撫川の合流部谷部分にある低地部が主体の遺跡である。本遺跡では縄文時代早期から晩期にかけての河川堆積物と土器溜まり、包含層、土坑、貯蔵穴、水場が検出され、これら遺構より得られた大型植物化石について当時の植物利用を解明する目的で調査を行った。

各遺構からは堆積物が採取され、発掘担当者により水洗選別がおこなわれた。選別された試料は全部で191試料である。大型植物化石は肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、同定･計数を行った。同定・計数した大型植物化石は時代、遺構の種類、層位別に表１から表７にまとめた。人間により何らかの加工があった種実は「利用痕のある植物」、利用の痕跡がないが利用できると考えられる植物の部位は「利用植物」、利用しない種類、もしくは利用できない植物の部位は「その他」として区別した。また、本遺跡では剥かれて廃棄されたとみられる多くのクリ果皮と若干の炭化したクリ子葉を出土したので、これらの中から計測可能な果実種子について高さ、幅、厚さの計測を行い、結果を表８に示した。

2．出土した大型植物化石

a. 縄文時代早期および前期包含層

縄文時代早期は、試掘Ｃ区の黒色最下層堆積物を、前期は第１調査区の包含層の分析を行い、出土した大型植物化石を表１にまとめた。ただし、破片状の遺物を含む包含層で、二次堆積の可能性が高いということである。オニグルミ、カラスザンショウには割跡や削られた痕が確認され、コナラ属子葉、サクラ節核、ミズキ内果皮、ササゲ属近似種種子の炭化した種実を出土した。利用痕はないが利用可能な植物としては、オニグルミ、カラスザンショウのほか、トチノキ、ミズキ、カヤ、キハダなどを出土し、利用しないと考えられる種類はアカメガシワを多く出土し、そのほかトチノキの幼果、コナラ属芽などを出土した。

表1　縄文時代早期および前期包含層より出土した大型植物化石

		時期	早期	縄文時代前期･包含層（二次堆積層）				
			試掘C区	第1調査区				
		遺構	黒色	前黒	前黒	前黒	前黒	前黒
分類群	出土部位／層位		最下層	④	⑥'	⑦	下	⑥'
利用痕のある植物								
オニグルミ	内果皮半分割跡		7	-	-	-	-	6
	内果皮破片		6	-	-	-	-	
コナラ属	炭化子葉半分		-	-	-	-	-	1
サクラ属サクラ節	炭化核		-	-	-	1	-	-
カラスザンショウ	内果皮削痕		-	1	10	1	3	-
ミズキ	炭化内果皮		-	-	3	-	-	-
ササゲ属近似種	炭化種子		-	-	1	-	-	-
利用植物								
カヤ	種子		-	-	1	-	-	-
オニグルミ	内果皮完形		2	-	-	-	-	1
	内果皮半分		8	-	-	-	-	-
	内果皮半分食痕		4	-	-	-	-	-
	内果皮半分風化		1	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮		-	6	68	1	6	-
キハダ	種子		-	-	1	-	-	-
トチノキ	種子完形		-	-	1	-	-	-
	種子破片		-	-	-	-	-	22
ヤマブドウ	種子		-	1	-	-	-	-
ミズキ	内果皮		-	-	2	4	1	-
ハクウンボク	内果皮		2	-	1	-	-	-
その他								
コナラ属	芽		-	-	-	1	-	-
アカメガシワ	種子		-	5	29	6	9	-
トチノキ	果皮破片		-	-	-	-	-	3
	幼果		-	1	-	-	-	-
広葉樹	芽		-	-	2	3	-	-
カナムグラ	種子		-	-	1	-	-	-

表2　縄文時代中期の土器溜より出土した大型植物化石

分類群	出土部位／層位	時期	中期後葉												中期末～後期初				
		遺構	第6調査区		土器溜										第1調査区	土器溜			
			SG-01	SG-01	SG-01	SG-01	SG-01	SG-01	SG-01	SG-01	SG-01	SG-02	SG-02	SG-04	盛土	盛土	盛土	盛土下	盛土畦2
			黒①	黒②	黒③	黒	黄④	青①	青②	灰粘		黒				上層	下層		
利用痕のある植物																			
オニグルミ	内果皮半分割跡		-	7	1	3	-	7	12	2	3	8	2	-	-	28	58	-	7
	内果皮半分割跡炭化		-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	内果皮完形炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	内果皮破片炭化		-	16	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	82
	内果皮破片		-	2	-	-	-	-	-	-	-	2		-	-	-	13	-	17
クリ	子葉破片炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
コナラ属	子葉半分炭化		1	1	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	子葉破片炭化		-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ	内果皮破片		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮削痕		-	3	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
トチノキ	種子炭化		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	種皮破片炭化		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13
	子葉破片炭化		-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12
ミズキ	内果皮炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
ハクウンボク	内果皮破片		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	1
ササゲ属	種子炭化		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	1	13
ササゲ属近似種	種子炭化		-	4	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	2	9
マメ科	種子炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	28
利用植物																		-	-
オニグルミ	内果皮完形		-	1	16	84	-	-	1	12	3	1	-	-	-	2	6	-	-
	完形食痕		-	-	-	-	-	-	-	-	2	9	2	-	-	12	4	-	-
	完形風化		-	2	5	93	-	5	-	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分		-	2	1	-	-	-	-	1	-	4	-	2	-	-	7	-	-
	半分食痕		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-
	半分風化		-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	10	3	-	-
	半分食痕		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマグワ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒメコウゾ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
サンショウ	内果皮		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カラスザンショウ	内果皮		-	5	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	9	3	5
トチノキ	種子完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-
	種子破片		-	-	-	1	-	-	-	-	-	19	-	-	-	7	2	-	4
ヤマブドウ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ヤマボウシ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
ミズキ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	11	-	5
クマノミズキ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
その他			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナラガシワ	幼果		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
フジ属	芽		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アカメガシワ	種子		-	1	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9
ミツバウツギ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
トチノキ	果皮破片		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	-	-
	幼果		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27	-	5	-	8
	幼種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	10
ノブドウ	種子		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
クサギ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヤブデマリ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
広葉樹	芽		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カナムグラ	種子		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	6
不明			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

b. 縄文時代中期後葉から後期初頭の土器溜まり

中期後葉においては第6調査区で土器の捨て場と考えられる土器溜まりおよび第1調査区の中期末～後期初頭にかけての盛土遺構と呼ばれる土器溜まりから大型植物化石を出土した。土器溜まりからは破損した土器などとともに、利用痕跡のある種類が比較的多く出土した（表2）。オニグルミ、サンショウ、カラスザンショウ、ハクウンボクは破砕痕があり、特に第1調査区の盛土からは多くのオニグルミを出土した。被熱された種類はオニグルミ、クリ、コナラ属、トチノキ、ササゲ属を出土しており、第1調査区の盛土畦2からササゲ属を含むマメ科の炭化種子を多く出土している。利用痕がない種実は、オニグルミの完形もしくは風化した内果皮を比較的多く出土し、特に第6調査区のSG-01での出土数が多い。トチノキ、カラスザンショウ、ミズキなども出土した。利用しないとみられる植物は、アカメガシワ、ミツバウツギ、カナムグラなどを出土した。

c. 縄文時代中期から後期の土石流と川

河川堆積物と土石流層から出土した大型植物化石の同定結果を表3に示した。第1調査区の

SX-16 と SX-17 は木材群で土石流が堆積したと推測されている。土石流層からは利用痕のあるオニグルミとカラスザンショウを少し出土した。利用痕のない植物は、オニグルミ、カラスザンショウ、トチノキなどを出土した。そのほかにアカメガシワをやや多く出土し、ウリノキや沢沿いに生育するツリフネソウも出土した。第 3 調査区の SD267 と第 1 調査区の SD133 ～ SD138 は河川堆積物である。河川からはおもに割跡のあるオニグルミを比較的多く出土し、完形や風化内果皮も比較的多かった。トチノキは完形や完形が割れたと思われる種皮を出土した。ほかに、カラスザンショウ、ムクノキ、ヤブツバキ、サンショウ、ヤマボウシなどもわずかに出土している。

表 3　縄文時代中期～後期の土石流および川より出土した大型植物化石

		時期	中期中葉以前		中期～後期中葉	中期末～後期初				
			第 1 調査区		第 3 調査区	第 1 調査区				
		遺構	SX-17	SX-16(2)	SD267	SD133	SD133 以前	SD-134	SD-135	SD-138
分類群	出土部位／層位		土石流	土石流	川	川	川	川	川	川
利用痕のある植物										
オニグルミ	内果皮半分割跡		17	-	-	29	-	94	196	40
	内果皮破片		-	-	-	-	-	2	3	23
コナラ属	果皮半分		-	-	-	-	-	-	1	-
	果実基部		-	-	-	-	-	-	-	1
	子葉半分炭化		-	-	-	-	-	-	-	1
カラスザンショウ	内果皮削痕		2	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	幼果炭化		-	-	-	-	-	-	-	2
利用植物										
カヤ	種子		-	-	-	-	-	-	1	-
オニグルミ	内果皮完形		32	-	1	17	-	28	8	6
	完形食痕		10	1	-	6	-	14	5	16
	完形風化		1	-	1	-	-	-	3	1
	内果皮半分		24	-	1	2	-	12	8	9
	半分風化		4	-	-	7	-	11	2	8
	半分食痕		1	-	-	4	-	1	-	5
ムクノキ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	2
サンショウ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	1
カラスザンショウ	内果皮		25	-	-	-	-	-	2	2
トチノキ	果実完形		-	-	-	1	-	1	7	-
	種子完形		3	-	-	11	-	15	24	-
	種子破片		6	5	-	28	-	66	39	-
クマヤナギ	内果皮		-	-	-	-	-	-	-	1
ヤマボウシ	種子		1	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ	内果皮		2	-	-	-	-	-	-	2
クマノミズキ	内果皮		1	-	-	-	-	-	-	-
ハクウンボク	内果皮		-	-	-	-	1	-	-	-
その他										
コナラ属	芽		-	-	-	1	-	-	-	-
フジ属	さや破片		-	-	-	18	-	-	-	-
アカメガシワ	種子		22	-	-	-	-	-	-	1
ミツバウツギ	種子		-	-	-	-	-	-	-	5
トチノキ	果実破片		23	-	-	14	-	4	7	5
	幼果		57	-	-	1	6	-	7	5
	幼種子		-	-	-	-	-	-	1	-
ヤブツバキ	幼果		-	-	-	-	-	-	-	1
ウリノキ	種子		1	-	-	-	-	-	-	-
クサギ	内果皮		-	-	-	-	1	-	-	-
広葉樹	芽		-	-	-	-	-	-	-	1
カナムグラ	種子		1	-	-	-	-	-	-	-
ツリフネソウ	種子		1	-	-	-	-	-	-	-

表 4　縄文時代中期末～後期初頭の貯蔵穴より出土した大型植物化石

		時期	中期末～後期初											
			第 6 調査区　貯蔵穴											
		遺構	SK-14	SK-24	SK-25	SK-02	SK-30	SK-26	SK-09	SK-29	SK-13	SK-31	SK-35	SK-23
分類群	出土部位													
利用痕のある植物														
オニグルミ	内果皮半分割跡		-	2	-	23	3	-	2	-	14	-	-	1
	内果皮半分炭化		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	内果皮破片		4	-	4	3	-	-	-	1	6	-	-	-
利用植物														
オニグルミ	内果皮完形		258	98	-	-	7	-	2	2	1	1	-	-
	完形風化		194	13	10	8	-	6	2	-	1	-	1	-
	完形食痕		-	1	-	-	1	-	2	1	2	-	-	-
	内果皮半分		6	2	-	1	3	-	1	5	1	-	-	-
	半分風化		-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
	半分食痕		-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	種子完形		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	種子破片		-	2	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-

d. 縄文時代中期末から後期初頭の貯蔵穴

第 6 調査区では SD18・19 の川岸に貯蔵穴とみられる土坑が 26 基検出され、このうち 12 基から大型植物化石を出土した（表 4）。利用痕のある種類はオニグルミのみ出土し、SK-14,SK-23 からは完形および風化したオニグルミを大変多く出土した。トチノキも 3 基から出土したがわずかな量であった。

e. 縄文時代中期末から後期初頭の土坑

第 1 調査区および第 6 調査区では目的不明の土坑（SK）および柱穴とみられる土坑（P）を多数検出し、29 カ所から大型植物化石を出土した。表 5-1 は完形のオニグルミを出土した土坑で、とくに SK-6 からは多量のオニグルミを出土した。これらからは割跡のある内果皮も出土している。表 5-2 では利用痕のある植物を出土した土坑をまとめた。利用痕のある植物はオニグルミ、コナラ属、カラスザンショウ、トチノキ、ハクウンボク、ヤブツバキ、ササゲ属を出土した。利用できる植物ではムクロジ、トチノキ、カラスザンショウ、ミズキなどを出土した。利用痕のある植物を出土しなかった土坑は表

表 5-1　縄文時代中期末～後期初の土坑より出土した大型植物化石 1

オニグルミ完形を出土した土坑		第 1 調査区			
分類群	出土部位／遺構	P-9	SK-2	SK-5	SK-6
利用痕のある植物					
オニグルミ	内果皮半分割跡	20	10	2	35
	内果皮破片	11	13	7	-
利用植物					
オニグルミ	内果皮完形	5	1	9	421
	完形食痕	2	-	1	2
	内果皮半分	2	3	2	158
	半分風化	-	32	-	-
サンショウ	内果皮	-	-	1	-
カラスザンショウ	内果皮	-	-	2	-
トチノキ	種子完形	-	5	-	-
	種子破片	-	7	5	3
ミズキ	内果皮	-	-	10	-
ハクウンボク	内果皮	-	-	1	-
その他					
ナラガシワ	幼果	-	-	1	-
アカメガシワ	種子	-	-	5	-
ミツバウツギ	種子	-	-	1	-
トチノキ	果実破片	-	-	7	1
	幼果	-	-	1	-
	幼種子	-	-	1	-

表 5-2　縄文時代中期末～後期初の土坑より出土した大型植物化石 2

利用痕のある植物を出土した土坑		第 1 調査区														6 区
分類群	出土部位／遺構	P-4	P-42	P-43	P-52	P-53	P-56	P-61	SK-1	P-10	P-11	P-38	P-40	P-46	P-57	P-56
利用痕のある植物																
オニグルミ	内果皮半分割跡	3	3	-	9	8	-	1	17	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮破片	-		1	7	8	3	-	3	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮破片炭化	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	子葉半分炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カラスザンショウ	内果皮削痕	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-	3	-	-	3	-
トチノキ	子葉破片炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ハクウンボク	内果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヤブツバキ	種子破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ササゲ属	種子炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	1	5	1	-	-	-	-
木本	芽炭化	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
利用植物																
オニグルミ	完形食痕	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分	1	-	-	3	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
	半分風化	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	1	-
キハダ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サンショウ	内果皮	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮	-	-	-	-	3	32	8	-	-	-	1	-	3	4	-
トチノキ	種子破片	-	-	1	-	-	31	31	-	-	-	-	3	-	30	-
ムクロジ	果実	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ属	種子	-	-	47	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマブドウ	種子	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマボウシ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミズキ	内果皮	-	-	-	1	2	6	1	-	-	-	2	-	-	1	-
クマノミズキ	内果皮	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	1	-	-		-
その他																
ナラガシワ	殻斗破片	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	幼果	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コブシ	種子	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	種子	-	-	-		3	23	7	-	1	-	2	-	1	7	-
ミツバウツギ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
トチノキ	果実破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	-
	幼果	-	-	1	-	-	1	4	-	3	-	2	-	-	-	-
	幼種子	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ	種子	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサギ	内果皮	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		-
カナムグラ	種子	-	9	4	2	-	51	1	-	-	-	2	-	8	18	-
不明		-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

5-3 に示した。出土した分類群は種類も個数も少ないが、アカメガシワ、カナムグラをやや多く出土する土坑がある。

なお、作表しなかったが、同時期の SI-02 焼土炭層からはオニグルミの炭化した内果皮破片を 3 個出土した。

表 5-3　縄文時代中期末～後期初の土坑より出土した大型植物化石 3

利用痕のある植物を出土しなかった土坑		第 1 調査区							第 6 調査区		
分類群	出土部位／遺構	P-12	P-28	P-41	P-48	P-60	P-62	SK-7	P-26	P-58	SK-41
利用植物											
オニグルミ	完形風化	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1
カラスザンショウ	内果皮	-	-	-	-	5	-	-	1	-	-
トチノキ	種子完形	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマボウシ	種子	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
その他											
アカメガシワ	種子	1	-	1	1	7	-	-	-	-	-
トチノキ	幼果	-		-	-	-	-	2	-	-	-
	幼種子	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カナムグラ	種子	-	-	-	76	2	-	-	-	-	-
トウバナ属	果実	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-

表 6-1　縄文時代中期末～後期初の水場遺構より出土した大型植物化石　1

		時期	中期末～後期初								
			第 1 調査区	水場							
		遺構	SX-01	SX-01	SX-02	SX-02（2）	SX-03	SX-03	SX-04	SX-05	SX-07
分類群	出土部位／層位		シルト				シルト				
利用痕のある植物											
オニグルミ	内果皮半分割跡		-	72	1782	1852	-	75	-	1	2
	内果皮破片炭化		-	-	-	8	-	-	-	-	-
	内果皮破片		-	1	167	68	-	9	8	-	-
クリ	果皮半分剥き跡		-	74	-	-	-	-	1	-	-
	果皮破片		-	532g	-	-	-	-	-	-	-
ブナ科	果皮破片		-	-	-	-	-	-	4	-	-
ヤブツバキ	種子破片		-	-	-	1	-	-	-	-	-
ササゲ属	種子炭化		-	-	-	1	-	-	-	-	-
利用植物											
オニグルミ	内果皮完形		-	14	22	1	-	11	13	3	2
	完形食痕		-	13	28	5	-	12	12	3	-
	完形風化		-	-	8	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分		-	4	98	56	-	8	15	-	-
	半分食痕		-	1	-	-	-	1	-	-	1
	半分風化		-	6	53	-	-	2	4	-	-
ヤマグワ	種子		-	-	-	11	-	-	12000	-	-
ヒメコウゾ	内果皮		-	-	-	-	-	-	1	-	-
サクラ属サクラ節	核		-	-	17	-	-	-	-	-	-
キイチゴ属	核		-	-	-	-	-	-	2	-	-
サンショウ	内果皮		-	-	-	1	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮		-	-	-	34	-	-	-	-	-
トチノキ	果実完形		-	3	-		-	1	3	1	-
	種子完形		-	52	10	5	-	2	9	13	11
	種子破片		-	60	1196g	1562g	-	26	29	3	3
ヤマブドウ	種子		-	-	-	5	-	-	-	-	-
ヤマボウシ	種子		8316	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ	内果皮		-	-	-	30	-	-	4	-	-
クマノミズキ	内果皮		-	-	-	6	-	-	1	-	-
ハクウンボク	内果皮		-	-	-	-	1	-	1	-	-
ニワトコ	内果皮		-	-	-	5	-	-	3000	-	-
その他											
コナラ属	芽		-	-	-	-	-	-	1	-	-
フジ属	芽		-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	種子		-	-	-	30	-	-	-	-	-
ミツバウツギ	種子		-	-	-	1	-	-	8	-	-
トチノキ	果皮破片		-	17	5	25	-	57	7	1	-
	幼果		1	6	-	3	41	7	11	-	-
	幼種子		-	-	-	-	2	-	-	-	-
ウリノキ	種子		-	-	-	1	-	-	-	-	-
カナムグラ	種子		-	-	-	9	-	-	-	-	-
ナス属	種子		-	-	-	1	-	-	-	-	-
イヌコウジュ属	果実		-	-	-	2	-	-	-	-	-
シソ属	果実		-	-	-	2	-	-	1	-	-

表 6-2　縄文時代中期末～後期初の水場遺構より出土した大型植物化石 2

分類群	出土部位／層位	SX-11	SX-12	SX-13	SX-13 (2)	SX-14	SX-14 以前	SX-19	SX-20
	時期	中期末～後期初							
	遺構	第 1 調査区　水場							
利用痕のある植物									
オニグルミ	内果皮半分割跡	907	2	-	133	72	-	23	2
	内果皮半分割跡炭化	1	-	-	-	5	-	1	-
	内果皮破片炭化	17	-	-	-	8	-	-	-
	内果皮破片	732	38	-	103	182	-	34	-
コナラ	殻斗破片炭化	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	果実基部炭化	1	-	-	-	-	-	-	-
クリ	果実完形剥き跡	-	17	1	-	-	-	-	-
	果皮半分剥き跡	16	93	1	-	-	-	-	-
	果皮破片	196g	1517g	-	10938g	120g	-	-	-
カラスザンショウ	内果皮削痕	83	-	-	-	-	3	3	-
ムクロジ	種子炭化	1	-	-	-	-	-	-	-
ヤマブドウ	種子炭化	2	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ	内果皮炭化	60	-	-	-	-	-	1	-
クマノミズキ	内果皮炭化	4	-	-	-	-	-	-	-
ハクウンボク	内果皮破片	21	-	-	1	2	-	-	-
ササゲ属	種子炭化	3	-	-	-	-	-	-	-
ササゲ属近似種	種子炭化	14	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	種子炭化	27	-	-	-	-	-	-	-
利用植物									
イヌガヤ	種子	2	-	-	-	-	-	-	-
	種子破片	3	-	-	-	-	-	-	-
カヤ	種子	4	-	1	-	-	-	-	-
	種子破片	3	-	-	-	-	-	-	-
オニグルミ	内果皮完形	29	2	-	3	1	-	-	-
	完形食痕	28	-	-	-	3	-	1	-
	完形風化	1	-	-	-	-	-	-	-
	内果皮半分	44	2	-	6	3	-	2	-
	半分食痕	-	-	-	-	-	-	1	-
	半分風化	-	1	-	1	1	-	17	-
ブナ	果実	2	-	-	-	-	-	-	-
ヤマグワ	種子	50	-	-	50	1	-	-	-
ヒメコウゾ	内果皮	20	-	-	2	-	-	-	-
ムクノキ	内果皮	14	-	-	1	-	-	1	-
サクラ属サクラ節	核	2	-	-	2	-	-	-	-
キイチゴ属	核	21	-	-	1	-	-	-	-
キハダ	種子	16	-	-	6	-	-	-	-
サンショウ	内果皮	12	-	-	2	-	-	2	-
カラスザンショウ	内果皮	606	-	4	41	18	4	9	-
トチノキ	種子完形	16	-	8	2	-	-	1	13
	種子破片	1448g	229g	4	360g	513g	-	78	9
ムクロジ	種子	3	-	-	-	-	-	-	-
ヤマブドウ	種子	39	-	-	1	-	-	2	-
ブドウ属	種子	1	-	1	4	-	1	-	-
マタタビ属	種子	30	-	-	48	-	-	-	-
ヤブツバキ	果実	1	-	-	1	-	-	-	-
	種子	-	-	1	2	-	-	-	-
ミズキ	内果皮	379	-	-	41	18	-	38	-
クマノミズキ	内果皮	156	-	1	11	3	1	1	-
ハクウンボク	内果皮	17	-	-	5	2	1	2	-
コハクウンボク	内果皮	1	-	-	1	1	-	-	-
ニワトコ	内果皮	2540	-	-	8000	-	-	-	-
その他									
オニグルミ	病果	5	-	-	-	-	-	-	-
アサダ	果実	1	-	-	-	-	-	-	-
ブナ	殻斗	5	-	-	1	-	-	-	-
コナラ	幼果	2	-	-	-	2	-	1	-
	殻斗破片	1	-	-	-	1	-	-	-
ナラガシワ	幼果	1	-	-	1	1	-	-	-
	殻斗	5	-	-	1	1	-	-	-
アカガシ亜属	幼果	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	芽	5	-	-	-	-	-	-	-
フジ属	芽	2	-	-	-	-	-	-	-
コブシ	種子	1	-	-	-	-	-	-	-
ホオノキ	種子	8	-	-	-	1	-	-	-
アカメガシワ	種子	881	-	4	63	20	35	22	-
ミツバウツギ	種子	51	-	-	34	10	-	4	-
ミツデカエデ	果実	-	-	-	-	1	-	-	-
ハウチワカエデ近似種	果実	5	-	-	-	-	-	1	-
トチノキ	果皮破片	76	94	4	198g	159	-	6	27
	幼果	444	-	5	128	54	2	64	-
	幼種子	54	-	-	2	1	-	5	-
ムクロジ	幼果	2	-	-	-	-	-	-	-
	幼種子	5	-	-	-	-	-	-	-
ノブドウ	種子	4	-	-	1	2	-	-	-
イイギリ	種子	31	-	-	2	-	-	-	-
カツラ	果実	1	-	-	-	-	-	-	-
ウリノキ	種子	2	-	-	-	-	-	-	-
タラノキ	内果皮	30	-	-	11	-	-	-	-
クサギ	内果皮	36	-	1	5	4	-	-	-
ヤブデマリ	内果皮	-	-	-	2	1	-	-	-
ゴマギ	内果皮	-	-	-	-	2	-	-	-
広葉樹	芽	23	-	-	41	5	1	3	-
スゲ属	果実	1	-	-	48	-	-	-	-
カラムシ属	種子	11	-	-	-	-	-	-	-
カナムグラ	種子	130	-	2	8	6	-	34	-
サクラタデ近似種	果実	-	-	-	50	-	-	-	-
ハナタデ近似種	果実	15	-	-	20	-	-	-	-
ヒユ属	種子	34	-	-	15	-	-	-	-
ツリフネソウ	種子	-	-	-	1	1	-	-	-
カタバミ属	種子	-	-	-	5	-	-	-	-
キカラスウリ	種子	1	-	-	-	-	-	-	-
ナス属	種子	-	-	-	3	-	-	-	-
ハダカホオズキ属	種子	1	-	-	-	-	-	-	-
キランソウ属	果実	1	-	-	-	-	-	-	-
イヌコウジュ属	果実	2	-	-	1	-	-	-	-
メナモミ	果実	-	-	-	5	-	-	-	-

f. 縄文時代中期末から後期初頭の水場遺構

第1調査区では水場遺構とそれに伴うとみられる木材群が検出され、遺構から出土した大型植物化石を表6に示した。SX-01は水溜とみられる木組みや堰き止めの板などで構成されている。

ここでは剥かれたクリ果皮と割跡のあるオニグルミ内果皮、ヤマボウシの種子などをやや多く出土した。SX-02は水場の足場とみられる遺構で多くの割跡のあるオニグルミとトチノキの種皮破片をやや多く出土した。サクラ節、ミズキ、アカメガシワなどもやや多く出土している。SX-07は河川内に生育していたと考えられるトチノキの根株である。ここからはオニグルミとトチノキを少量出土した。SX-14は杭と板で構成された水溜施設と考えられている。ここからは利用痕跡のあるオニグルミ、クリをやや多く出土し、トチノキ、ミズキ、アカメガシワ、ミツバウツギなどを出土した。SX-12はクリ塚と呼ばれた遺構である。クリは果実の形状を残した果皮を多く出土し、破片も多く出土している。また、トチノキもやや多く出土した。SX-03, SX-04, SX-05, SX-11, SX-13, SX-19, SX-20は木材の集積遺構である。SX-13 (2) ではクリ塚とされたSX-12よりもはるかに多い、湿重で約10kgのクリ果皮破片を出土していて、完形果皮に換算すると約4000個になる。水場遺構全体では炭化した種実の出土種類が多く、オニグルミ、コナラ、コナラ属のほか、ムクロジ、ヤマブドウ、ミズキ、クマノミズキ、ササゲ属を出土した。利用痕跡のある植物は、オニグルミ、クリ、カラスザンショウ、ハクウンボクを出土している。利用できる植物も多く、イヌガヤ、カヤ、ブナ、ナラガシワ、コナラ、ヤマグワ、ヒメコウゾ、ムクノキ、サクラ節、キイチゴ属、キハダ、サンショウ、ムクロジ、ヤマブドウ、ヤブツバキ、ニワトコなどを出土した。そのほか周囲に生育していたとみられる、トチノキの幼果、ホオノキ、フジ属の芽、アカメガシワ、イイギリ、ゴマギ、クサギなどを産出した。草本は水辺に生育するカラムシ属やサクラタデ近似種、ツリフネソウのほか、キカラスウリ、カタバミ属、ナス属などを産出している。

g. 縄文時代後期から晩期

後期から晩期の遺構から出土した大型植物化石を表7に示す。後期初頭の埋甕からはトチノキ幼種子とハクウンボクを出土した。後期末～晩期のSD243河川堆積物からは割跡のあるオニグルミと剥いたクリ果皮を出土し、完形のオニグルミ、トチノキ破片、ナラガシワを出土した。包含層からは炭化したオニグルミ、コナラ属、トチノキをやや多く出土し、栽培植物はイネ、アサ、ソバを出土するが、イネ、ソバは1個だけのため混入の可能性も否定できない。水場SX-1では割跡のあるオニグルミと剥いたクリ果皮、トチノキ、ムクロジなどを出土した。試掘B区の黒色土からは割跡のあるオニグルミとトチノキをわずかに出土した。

h. 特筆すべき分類群の形態記載

カヤ：種子完形は基部が膨らんだ紡錘形で種皮はやや薄く堅く黄褐色から赤褐色で縦にややねじれた浅い溝状の筋が全面に分布する。現在の日本海側には変種のチャボガヤが分布しているが、区別していない。

イヌガヤ：種子は楕円形で先端で2本の稜が発達し表面は細かいおうとつがあり灰褐色である。現在の日本海側には変種のハイイヌガヤが生育しているがこれとは区別していない。

クリ：多数の破片を出土した。剥かれているクリは側面に裂け目が入っている果皮も多くみられ、果実の高さと幅が計測できるものがあり、計測値を表 8-1 に示した。最大値は高さ 34.28mm、幅 48.54mm、平均値は高さ 26.82mm、幅 29.16mm で現在の管理された山林のクリと近似した値を示す。炭化した子葉は完形の計測値を表 8-2 に示した。

ブナ科:ブナ科果皮は破片の状態では属の区別がつかない。薄くやや軟らかく、縦方向に筋が並ぶ。果皮は 3 層の構造があるがいずれの細胞も縦に並んでいる。

サクラ節：核は丸い紡錘形で方向線で 2 つに分かれ、表面には上下端に向かってしわが入り、種類によっては全面にややはっきりしたしわがあるものもある。

サンショウ、カラスザンショウ：内果皮は球に近い楕円形で一文字状のへそがある。サンショウの表面は比較的壁が低い大きさの揃ったやや細かい網目があり、カラスザンショウはやや高い壁で大きく角張った網目がある。カラスザンショウには内果皮が割れた、あるいは削って減ったような痕跡が

表 7　縄文時代後期～晩期より出土した大型植物化石

分類群	出土部位／層位	時期	後期初頭	後期末～晩期					晩期
			第 1 調査区	第 3 調査区					試掘 B 区
		遺構	埋甕 3	川 SD243	包含層	包含層	包含層	包含層	水場 SX-1	黒色土
					Ⅶ−a	Ⅶ−c	Ⅶ−c-2	Ⅶ 断割		
利用痕のある植物										
オニグルミ	内果皮半分割跡		-	28	-	-	-	1	95	8
	内果皮破片炭化		-	-	2	12	-	1	-	-
	内果皮破片		-	-	-	-	-	6	25	1
サワグルミ	内果皮炭化		-	-	1	-	-	-	-	-
コナラ属	子葉半分炭化		-	-	27	65	11	4	-	-
	子葉破片炭化		-	-	14	28	4	8	-	-
クリ	果皮半分剥き跡		-	1	-	-	-	-	-	-
	果皮破片		-	5	-	-	-	-	34g	-
	子葉完形炭化		-	-	-	1	-	3	-	-
	子葉破片炭化		-	-	1	2	-	1	-	-
ムクノキ	内果皮破片炭化		-	-	-	-	-	2	-	-
トチノキ	種皮破片炭化		-	-	1	-	1	-	-	-
	子葉破片炭化		-	-	-	7	3	-	-	-
ミズキ	内果皮炭化		-	-	2	-	1	4	-	-
イネ	穎破片		-	-	-	-	1	-	-	-
アサ	種子半分		-	-	2	-	1	-	-	-
	種子炭化		-	-	2	-	-	-	-	-
ソバ	果実		-	-	1	-	-	-	-	-
マメ科	種子炭化		-	-	2	2	-	-	-	-
利用植物										
オニグルミ	内果皮完形		-	27	-	-	-	-	4	-
	完形食痕		-	28	-	-	-	-	13	-
	完形風化		-	3	-	-	-	-	4	-
	内果皮半分		-	5	-	-	-	-	9	-
	半分食痕		-	2	-	-	-	-	1	-
	半分風化		-	-	-	-	-	-	3	-
サクラ属サクラ節	核		-	-	6	-	-	2	-	-
サンショウ	内果皮		-	-	-	1	-	1	-	-
トチノキ	種子完形		-	5	-	-	-	-	13	1
	種子破片		-	22	-	1	-	7	194g	-
ムクロジ	果実		-	-	-	-	-	-	3	-
	種子		-	-	-	-	-	-	1	-
ヤマブドウ	種子		-	-	-	-	-	1	-	-
ミズキ	内果皮		-	-	1	1	3	-	-	-
クマノミズキ	内果皮		-	-	1	-	-	-	-	-
ハクウンボク	内果皮		1	-	-	-	-	2	-	-
ニワトコ	内果皮		-	-	-	-	1	2	-	-
その他										
イヌシデ	果実		-	-	-	-	-	1	-	-
ナラガシワ	殻斗		-	-	-	-	-	-	21	-
	殻斗破片		-	2	-	-	-	-	-	-
	幼果		-	-	-	-	-	-	1	-
アカメガシワ	種子		-	-	151	7	1	63	-	-
ミツバウツギ	種子		-	-	1	-	-	5	-	-
トチノキ	果皮破片		-	2	-	-	-	1	43	-
	幼果		-	1	-	1	-	7	11	-
	幼種子		1	2	1	-	-	-	-	-
ガンピ属	種子		-	-	1	-	-	-	-	-
タラノキ	内果皮		-	-	1	-	-	-	-	-
エゴノキ	内果皮		-	-	-	1	-	-	-	-
カナムグラ	種子		-	-	1	-	-	3	-	-
不明			-	-	1	-	-	-	-	-

表 8-1　桜町遺跡縄文時代出土クリ計測値 1（果皮）

出土時期	遺構	状況	高さ	幅
後期末～晩期	川 SD243	ほぼ半分	(20.96)	25.38
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(22.80)	26.40
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	30.30	28.89
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(24.68)	23.86
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(23.91)	24.74
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(24.67)	27.01
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(21.36)	23.11
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(28.40)	30.58
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	34.28	48.54
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	27.30	(25.56)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	33.28	(36.76)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(22.14)	(20.58)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(27.38)	(32.00)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(24.08)	35.73
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	32.43	29.34
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	24.28	27.50
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	30.78	27.49
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	26.73	26.31
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	24.76	(37.20)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	24.08	26.17
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	28.05	(37.36)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	27.18	(22.70)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	28.07	(22.50)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	26.71	(31.03)
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(23.87)	26.15
中期末～後期初頭	水場 SX-1	半分	(27.36)	24.11
中期末～後期初頭	水場 SX-11	完形剥跡	28.22	30.96
中期末～後期初頭	水場 SX-11	完形剥跡	28.59	32.54
中期末～後期初頭	水場 SX-11	完形剥跡	30.41	34.76
中期末～後期初頭	水場 SX-11	完形剥跡	27.08	31.82
中期末～後期初頭	水場 SX-11	完形剥跡	23.13	(26.24)
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	24.85	27.63
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	(25.66)	30.29
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	(21.05)	25.05
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	27.63	(23.58)
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	(25.67)	33.28
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	24.93	28.31
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	(23.70)	26.10
中期末～後期初頭	水場 SX-11	半分	24.17	(27.22)
中期末～後期初頭	水場 SX-12	完形剥跡	28.25	31.18
中期末～後期初頭	水場 SX-12	完形剥跡	29.70	32.91
中期末～後期初頭	水場 SX-12	半分	31.43	34.85
中期末～後期初頭	水場 SX-12	半分	33.27	33.16
中期末～後期初頭	水場 SX-12	半分	24.87	21.89
中期末～後期初頭	水場 SX-12	半分	(32.29)	29.15
中期末～後期初頭	水場 SX-12	半分	30.38	38.66
中期末～後期初頭	水場 SX-13	完形剥跡	28.58	24.97
中期末～後期初頭	水場 SX-13	ほぼ半分	(17.93)	24.53
中期末～後期初頭クリ果皮		平均値	26.82	29.16
		最大値	34.28	48.54
		最小値	17.93	20.58

（ ）内は少し欠けている果皮、もしくは折れている果皮を復元した数値

表 8-2　桜町遺跡縄文時代出土クリ計測値 2（炭化クリ子葉）

出土時期	遺構	状況	高さ	幅	厚さ
後期末～晩期	包含層Ⅶ	炭化子葉完形	14.98	16.91	8.00
後期末～晩期	包含層Ⅶ	炭化子葉完形	14.14	15.23	8.40
後期末～晩期	包含層Ⅶ	炭化子葉完形	11.57	10.34	6.75

あり、自然に割れた痕跡と異なるため利用のための削痕とした。

トチノキ：果実はほぼ球形で縦の縫合線で３つに割れる。表面はざらついて円形の斑点があり褐色で壁は柵状構造で厚いがもろい。種子は楕円形で下半はおおきなへそで褐色扁平で光沢がなく、上半は黒色で光沢があり、微細な指紋状または流理状の模様がある。種子壁は薄く不規則に割れる。本遺跡からは多数の果実種子を出土したが、ほとんどの種子破片は２分の１から４分の１程度で大きく割れ、しかも生育時の曲面が残った状態であり、これらは本報告では利用痕とみなさなかった。トチノキの種皮は子葉と密着しており、生の種子を剥くと内面を外にして反った状態になり、あまり大きな破片とならない。乾燥保存したトチノキは乾燥の萎縮痕が残り、湯につけてもこの痕跡は戻らない。また、剥いた種皮が多量に堆積すると圧力により種皮が平坦になり堆積していく。このような剥かれた種皮破片で形成された廃棄層は青森県八戸市是川遺跡（吉川 2002）や埼玉県川口市赤山遺跡(川口市遺跡調査会)などで確認されており、これらの種皮は加工痕跡があると見なすことができる。

ヤブツバキ：果実は球形で果皮は厚く表面はざらつく。種子は三角形に近い不定形で種皮が厚く平滑で光沢はなく三角形の頂点にややへこんで平らな小さいへそがある。現在の日本海側には変種のユキツバキが生育しているが、区別はしていない。

ササゲ属：炭化した種子を出土した。長さは 4mm ～ 6mm 程度、へそはほぼ真ん中に位置し、種子長の３分の１よりやや長く、割ると内面に初生葉と呼ばれる発芽の痕跡がみられる。ササゲ属近似種とした種子はへそがはっきりしないが外形が角張った楕円形のもの、マメ科とした種子はそれ以外の焼け伸びがおきた種子などである。

シソ属：本遺跡からは数個のシソ属果実を出土した。果実長ではエゴマに近似するが、基部の形態が少し異なることと、表面の保存が悪く、特有のえぐれた網目が確認できなかったためシソ属とした。

3．出土した大型植物化石から見た当時の植物利用

桜町遺跡では縄文時代中期から晩期にかけて、谷を利用して土坑や水場を構築し、コナラ属やオニグルミ、クリ、トチノキなどの植物食料の加工に利用していたと推側される。本遺跡では2005年の報告も含めて、コナラ属、クリ、オニグルミの積極的な利用が確認されたが、トチノキの積極的な利用は確認できなかった。ただし、大変細かい種皮の破片や炭化した種皮、炭化した子葉の破片などは確認されているため消極的ではあるが利用していたと考えられる。ミズキやササゲ属など炭化した種実は水場や土坑を利用する際に持ち込まれたり、周囲から流れ込んだと考えられる。河川には杭を使った遺構やトチノキの根株、木材集積がみられ、これらの障害物に周囲の斜面から供給された植物等が掃きだめ的に堆積していたと考えられる。谷にはトチノキやオニグルミなどの利用できる植物が生育し、谷沿いの斜面にはアカメガシワ、ミツバウツギ、クサギ、ホオノキなどの落葉広葉樹やカナムグラ、フジ属、キカラスウリなどの植物が繁茂していたと考えられる。

縄文時代早期から前期は周辺で遺構が発見されておらず、ササゲ属近似種やミズキ、コナラ属などの炭化種子を出土しているが二次堆積の可能性がある。

縄文時代中期から後期では、オニグルミ、トチノキが大変多く出土している。割跡がある内果皮は利用後に廃棄されたものであるが、完形内果皮は外果皮を腐らせるために土坑などにまとめて入れていた可能性も考えられる。SK-6、SK-14、SK-24はこの処理に利用した可能性が高い。

トチノキはあく抜きのために河川周辺で多量に処理されることが多いが、本遺跡で出土した破片は球体の形状を保っていて加工痕と見なすことができない種皮が多かった。完形種子、幼果や果皮も多く出土しており、調査区内にトチノキの根株があることから毎年多量に母植物から供給され、谷に堆積していたと考えられる。むろん炭化種皮などの利用痕がある種皮が少量ではあるが確認されているので、当時の重要な食料のひとつであったと考えられ、破片の一部はあく抜きなどの行程で流され堆積したものもあると考えられる。

クリはほとんどが剥かれて潰れた状態であるため、利用後の果皮を多量に廃棄したと考えられる。剥かれた痕跡のあるクリ果皮の大量な出土例はおもに日本海側で確認されており、縄文時代晩期の石川県米泉遺跡では総復元個数約26万個とされる大量廃棄層が検出され（南木1989）、新潟県青田遺跡では1層準で復元個数2万個を超えるクリ果皮を出土している（新潟県教育委員会ほか2004）。これほど大量ではないが、晩期の新潟県野地遺跡（吉川ほか2002）での発見例がある。太平洋側ではこのような大量のクリ廃棄層は発見されておらず、あく抜きが必要でないクリを水場周辺で処理しないと考えていた。また、青田遺跡については住居が河川に張り出すような形で構築されているため、住居でクリを剥いてそのまま外に廃棄したために川岸に大量のクリ廃棄層が形成されたと推測した。本遺跡では廃棄層に住居がそれほど近接しているわけではなく、剥いた跡の果皮をなぜ水域に多量に廃棄したのか不明である。

コナラ属、マメ科は炭化した種子がほとんどで、住居で利用された後、周囲で廃棄されたものが流れ込んだ可能性がある。2005年の桜町遺跡発掘調査報告では、ドングリピットの分析を行っており、本遺跡でのコナラ属果実の積極的な利用が確認されている（吉川2005）。

栽培植物の可能性があるものは、ササゲ属、マメ科のほかにアサを出土している。アサは完形もしくは半分に割れた種子がほとんどで、2層準から5個出土している。アサの利用目的は繊維もしくは薬用の両面が考えられる。アサについては遺伝的、系統的に検証され、日本に自生していなかった外来植物とほぼ確定されている。

谷の周辺にはムクノキ、ムクロジ、ホオノキ、ハクウンボク、クマノミズキ、ミズキなどの落葉広葉樹やアカガシ亜属などの常緑のコナラ属が生育し、果実種子が供給され谷に流れ込んで堆積したと考えられる。これらの広葉樹林の林床にはヤブツバキや針葉樹のカヤ、イヌガヤが生育し、林縁や斜面の開けた場所には蔓植物のカナムグラ、タラノキ、ニワトコ、アカメガシワ、ミツバウツギなどが生育していたと考えられる。

引用文献

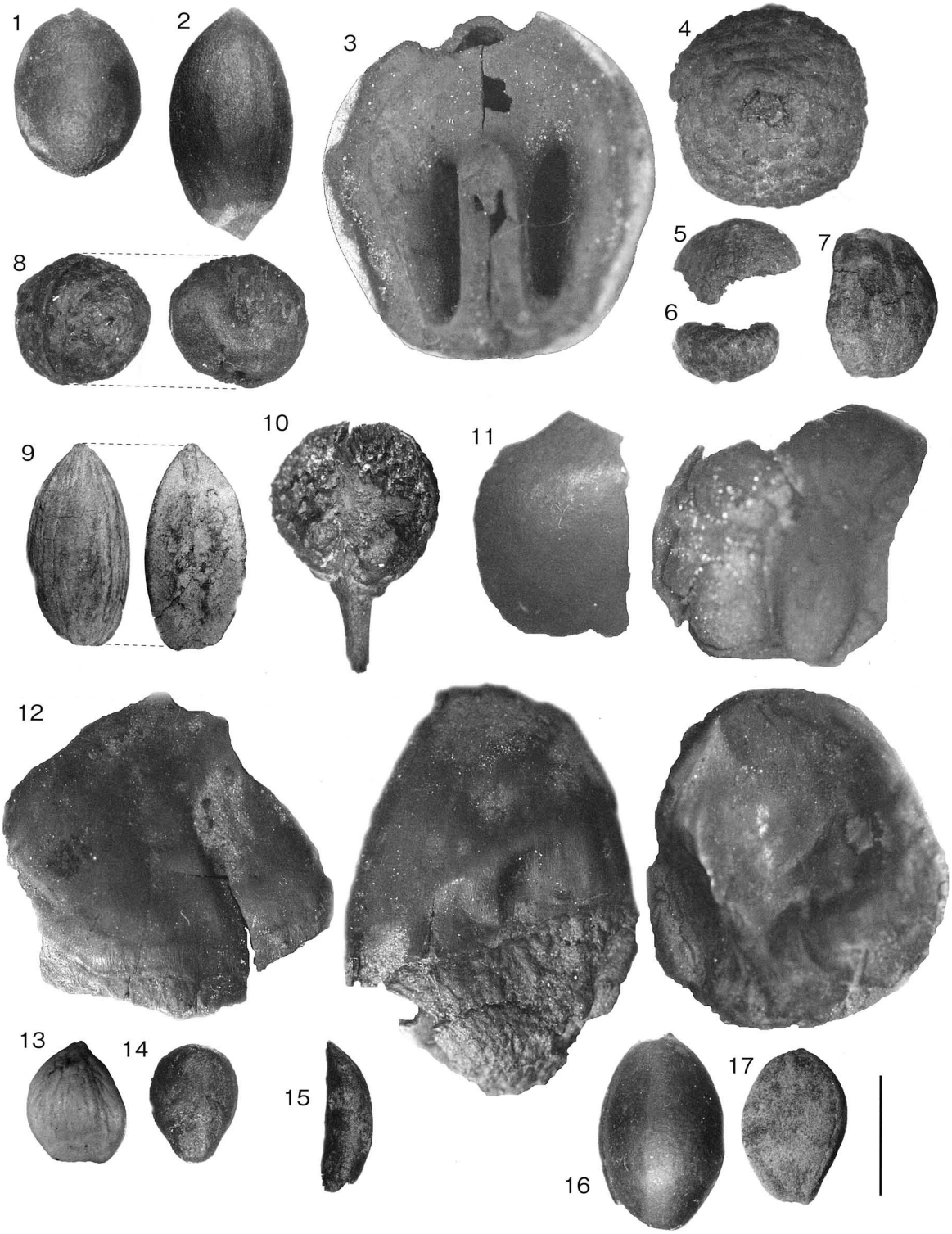
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財事業団. 2004. 第V章遺物8植物遺体. 新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集　日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V　青田遺跡　本文・観察表編. 221-229.

南木睦彦. 1989. 米泉遺跡の大型植物化石. 金沢市米泉遺跡. 石川県埋蔵文化財センター. 279-296.

吉川純子. 2002. 大型植物化石からみた野地遺跡の生業活動. 野地遺跡における縄文時代後・晩期の花粉化石群および大型植物化石. 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成13年度. 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団. 43-44.

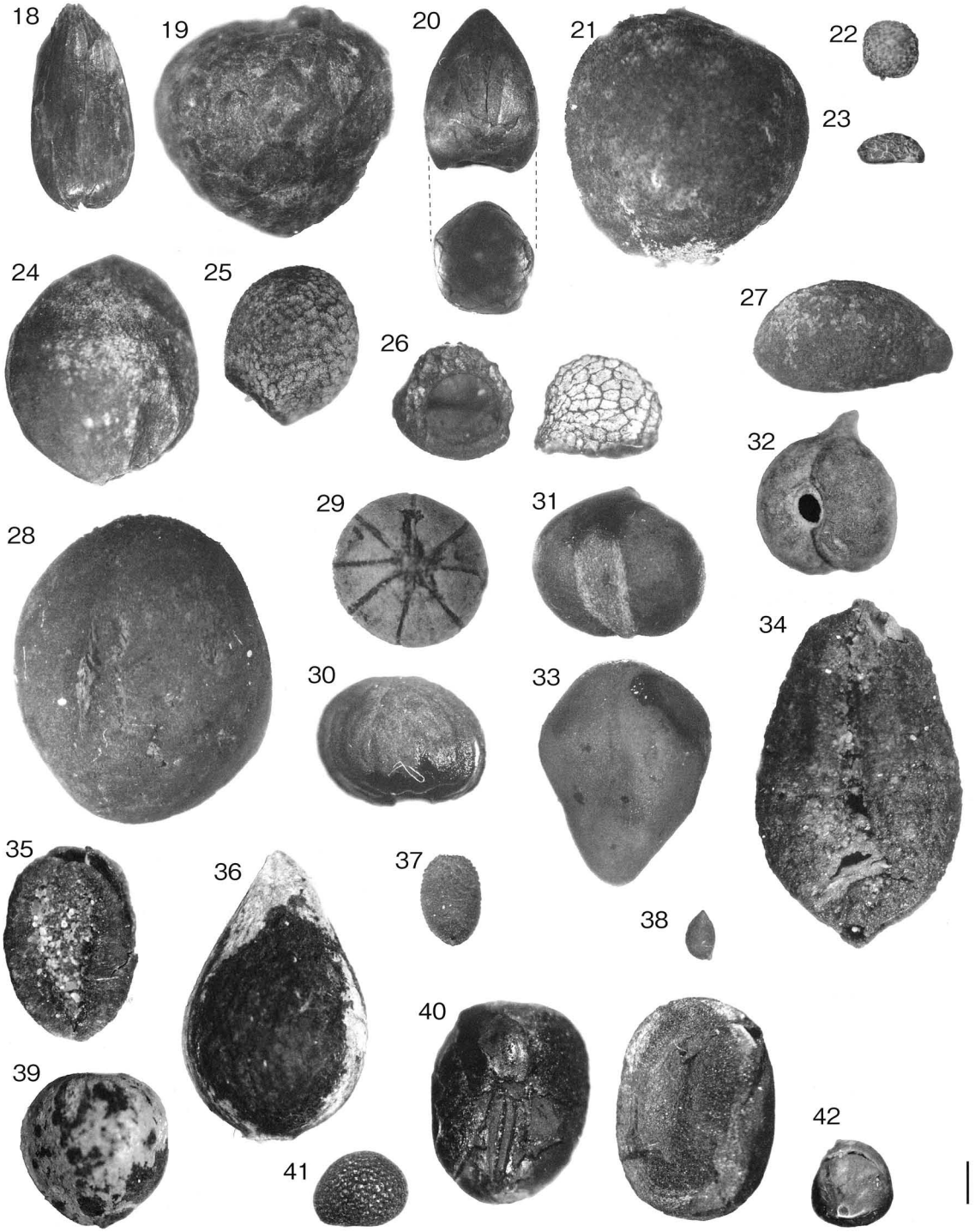
吉川純子. 2002. 是川中居遺跡D区より産出した大型植物化石. 八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集　八戸市内遺跡発掘調査報告書15　是川中居遺跡1. 青森県八戸市教育委員会. 76-87.

吉川純子. 2005. 付載1　桜町遺跡貯蔵穴より出土した大型植物化石. 小矢部市埋蔵文化財報告書第55冊　富山県小矢部市　桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編II. 小矢部市教育委員会. 27-34.



図版1 桜町遺跡縄文時代より出土した大型植物化石その1

1. イヌガヤ、種子(SX-11)　2. カヤ、種子(SX-11)　3. オニグルミ、内果皮半分割跡(SX-11)　4. ナラガシワ、殻斗(SX-11)　5. コナラ、殻斗SX-11)　6. ナラガシワ、幼果(SX-11)　7. トチノキ、子葉炭化(Ⅶ-c)　8. クリ、子葉炭化(盛土畦2)　9. コナラ属、子葉炭化(Ⅶ-c)　10. ブナ、殻斗(SX-11)　11. トチノキ、種皮破片(SX-1)　12. クリ、果皮剥跡(SX-1)　13. ホオノキ、種子(SX-11)　14. ウリノキ、種子(SX-11)　15. カツラ、果実(SX-11)　16. ハクウンボク、内果皮(SX-11)　17. キカラスウリ、種子(SX-11)　　スケールは10mm



図版2 桜町遺跡縄文時代より出土した大型植物化石その2

18. アサダ、果実(SX-11)　19. コナラ、幼果(SX-11)　20. コナラ属、芽(SX-11)　21. ムクノキ、内果皮(SX-11)　22. ヒメコウゾ、内果皮(SX-13 (2))　23. キイチゴ属、核(SX-13 (2))　24. サクラ属サクラ節、核(Ⅶ-a)　25. サンショウ、内果皮(SX-11)　26. カラスザンショウ、内果皮、左は削痕(SX-11)　27. キハダ、種子(SX-11)　28. ムクロジ、幼果(SX-11)　29. クマノミズキ、内果皮(SX-11)　30. ミズキ、内果皮炭化(SX-11)　31. ノブドウ、種子(SX-11)　32. ヤマブドウ、種子(SX-11)　33. ヤマボウシ、種子(SX-1)　34. ゴマギ、内果皮(SX-14)　35. ヤブデマリ、内果皮(SX-13 (2))　36. ガンピ属、種子(Ⅶ-a)　37. ニワトコ、内果皮(SX-11)　38. カラムシ属、種子(SX-11)　39. アサ、種子(Ⅶ-a)　40. ササゲ属、種子、右は内面(SX-2 (2))　41. ナス属、種子(SX-2 (2))　42. シソ属、果実(SX-2 (2))
スケールは1mm

4　桜町遺跡出土の縄文時代の木材の樹種とその利用

鈴木　三男（東北大学植物園）・能城　修一（森林総合研究所）・管野宗武（国土環境株式会社）

富山県小矢部市桜町遺跡からは縄文時代中期～晩期にかけての自然木及び各種加工木、施設材、構造材などの木質遺物が大量に出土した。縄文時代中期以前のもの352点、縄文時代中期～後期初頭のもの877点、縄文時代後期末～晩期前葉のもの303点、晩期中葉のもの60点、それに縄文時代以降のもの5点、合計1,598点についてその樹種を調べた。これらの木質遺物について剃刀刃で切片を作成し、光学顕微鏡を用いて樹種同定を行った結果、保存不良などの理由により同定できなかったもの23点、広葉樹の樹皮であるとしか分からなかったもの16点を除いた1,559点から52の樹種が同定された。この同定されたものの多くは幹あるいは枝の材とされたが、根の材（根材）、また樹皮も比較的多く出土した。ここではこれらも含めてその同定結果を紹介し、合わせて時期毎の遺跡を取り巻く森林の樹木相とその利用について考察した。

なお、同定された組織プレパラートは東北大学植物園に保管されている。

I.　樹種同定の結果

1.　アカマツ　Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　マツ科

写真図版 I-1a-c (TOM-1703)

出土材は赤みを帯びていることが多く、年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をともに持つ。垂直樹脂道は晩材部に散在する。樹脂道の周辺には、壁の薄いエピセリウム細胞がある。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は量が多く、年輪界は明瞭である。放射組織には、上下に放射仮道管があり、その水平壁は、鋭角な鋸歯状に肥厚している。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で普通一分野に一つ存在する。以上の形質より、マツ科マツ属の複維管束亜属に属する樹種であることが分かり、類似したクロマツからは放射仮道管内壁の鋸歯状の突起が激しいことで区別され、アカマツの材と同定した。

アカマツは北海道南部から九州にかけての冷温帯から暖温帯の海岸付近から山中至るまで普通に生える針葉樹で、特に二次林に多い。材は重硬で樹脂が多く加工性は悪いが保存性はよく、建築材、土木用材、器具材等広範な用途がある。

2.　スギ　Cryptomeria japonica (Linn.f.) D.Don　スギ科

写真図版 I-2a-c (TOM-905)

出土材は黒みを帯びていることの多い針葉樹材で、水平・垂直の両樹脂道を欠き、早材から晩材への移行は急あるいはやや急で晩材部は量が多く、年輪界は極めて明瞭である。樹脂細胞が晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなり、大径材では背がかなり高くなる。分野壁孔は、大型のスギ型で一分野あたり通常2個存在している。

以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。

スギは青森県南部から九州屋久島まで広く分布し、特に本州日本海側全域、関東南部から紀伊半島にかけての東海地方の天然林が多く分布し、また、北海道南部以南の全国の植栽される。成長が早くて大材が得易いこと、木理通直で割裂性、加工性に優れることから、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、特に北陸、東海地方でよく利用されてきている。

3. イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight) K.Koch.　イヌガヤ科

写真図版 I-3a-c (TOM-112)

出土材は白色～淡い黄土色で極めて保存性の良い針葉樹材で、晩材と認められる部分はほんのわずかで早材から晩材への移行は不明瞭だが、年輪界の晩材部とその外側の早材部での仮道管の直径と壁の厚さの違いから年輪界がようやく認められる。樹脂細胞が多く、年輪内に均一に分布しているがスギ科、ヒノキ科の樹脂細胞のように出土材で細胞内容物が黒褐色になることはなく木口面では目立たない。樹脂細胞の水平壁には数珠状の肥厚が1、2個ある。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があるが、カヤのように2、3本ずつまとまることはなく、また、螺旋も水平に近い方向に巻く。放射組織は単列で1～4細胞程度と背が低く、柔細胞のみからなり、分野壁孔は小型のトウヒ型で、一分野あたり1～2個ある。以上の形質から、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。

イヌガヤは岩手県以南の本州から九州の暖温帯に分布する樹高10m、幹径30cm程度になる小高木で、海岸近くに多い。変種のハイイヌガヤは幹が直立せず、這った幹が長さ2～5mほど、幹径は10cm以下の低木で、本州から北海道の多雪地帯に分布する。いずれも材質が硬く緻密で粘りがあるので縄文時代から古代にかけて全国的に丸木弓に多用されるとともに杓子、匙などの木器にも用いられる。

4. カヤ　Torreya nucifera (L.) Sieb. et Zucc.　イチイ科

写真図版 II-4a-c (TOM-794)

イヌガヤ同様、出土材は極めて保存性の良い針葉樹材で、黄白色を帯びることが多い。年輪界は明瞭で、早材から晩材への移行は緩やかである。早材、晩材とも仮道管は整然と並び、樹脂細胞はない。仮道管の内壁には顕著な2～3本ずつまとまったらせん肥厚がある。放射組織は単列で背は余り高くなく、分野壁孔は小さなヒノキ型ないしトウヒ型で、一分野あたり2～4個ある。以上の形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イヌマキ、イヌガヤ、イチイに似るが、前二者は年輪が不明瞭で樹脂細胞が均一に散在していることで区別され、イチイは仮道管内壁のらせん肥厚が2～3本ずつまとまることはなく、常に単独であることにより区別される。

カヤは東北南部(宮城県、山形県)以南の本州から九州にかけての暖温帯に広く分布する針葉樹で、樹高30m、幹径1mを越える大木になる。木理は通直で硬く、緻密で、弾性があり、また切削、加工性に優れ仕上がりが美しく、我が国産の針葉樹の中でも特に材質が優れている。大材が得られることと材質の優秀さから建築材、器具材によく用いられ、特に碁盤、将棋盤などの特用がある。か

つて古代の木彫仏等はほとんどがヒノキ製だと言われていたがその大部分がカヤであることが最近判明してきた。

5. オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Miyabe et Kudo) Kitamura　クルミ科

写真図版 II-5a-c (TOM-235)

保存性のあまり良くない黒褐色を帯びた出土材である。中～大型で楕円形の道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して複合道管全体で楕円形をなし、それらが散在状あるいは幅の広い年輪ではルーズな放射状に配列する散孔材で、年輪界付近の晩材部では径が小さくなる。木部柔組織は単細胞幅で長く接線方向に並び、晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状に密に配列する。放射組織は3～5細胞幅で細長い紡錘形をなし、同性である。これらの形質からオニグルミの材と同定した。

オニグルミは北海道から九州まで、全国至る所の冷温帯から暖温帯上部の沢沿いなど湿潤な地に広く分布する落葉高木で、樹高30m、幹径80cmくらいになる。実が食用となることから縄文時代以来、よく利用されている。材質は軽軟で緻密で粘りがあり、建築材、家具や机、椅子、指物、火鉢などの各種器具材、特にラケットなどの運動具、鉄砲の銃床などの特用がある。

6. サワグルミ　Pterocarya rhoifolia Sieb. et Zucc.　クルミ科

写真図版 II-6a-c (TOM-489)

オニグルミによく似た道管配列をするが、道管はひとまわり細く、壁は薄く、断面が多少とも角張ることが多い。また、遺跡出土材の保存性もオニグルミより悪い。道管はふつう単独で、ときに2～3個放射方向に複合し、直径は年輪界にむけて緩やかに減少する。木部柔組織は単細胞幅の接線状で、年輪を通して著しい。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織はオニグルミより幅狭く、同性で2細胞幅、背も低い。これらの形質からサワグルミの材と同定した。

サワグルミは北海道道南地方以南の九州までの冷温帯の沢沿いに普通に生える落葉高木で、中部地方より西では余り多くない。幹は良く直立し、樹高30m、幹径70cm以上になる。材質は軽軟で肌は粗い。オニグルミと同様の用途があるが材質が劣るので余り使われない。

7. ヤナギ属　Salix　ヤナギ科

(根材) 写真図版 III-7a-c (TOM-499)

小型の楕円形の道管が均一に年輪内に分布する散孔材で、年輪界付近では道管はやや細くなる。道管は通常単独だが、2個放射方向に複合するものもある。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状に密に分布する。道管内壁にはらせん肥厚は無い。放射組織は単列異性で、道管-放射組織間壁孔は大振りの多角形ないし楕円形で密に集まり、蜂の巣状を呈する。以

上の形質からヤナギ属の材であることがわかり、さらに繊維細胞の直径が大きく壁が薄いこと、放射組織の柔細胞の直径がやや大きく壁が薄いことなどから、根の材であると同定した。

ヤナギ属は広く全国の山野や水湿地に普通に生える落葉高木～低木で、特に湿地に多い。多数の種があり、材構造で区別するのは困難である。北陸地方の丘陵、低山地にはバッコヤナギ（ヤマネコヤナギ）が普通に生えている。木質遺物が良好に保存されるような低湿地遺跡ではヤナギ属の材が比較的多く出土するのが通例であるのに対し本遺跡では１点のみであること、それも根の材であることから、遺跡成立当時に生育していた樹木ではなく、遺跡埋積の後に生育した樹木の根であることが充分に考えられる。

8.　ハンノキ属ハンノキ節　Alnus sect. Gymnothursus　カバノキ科

（枝幹材）写真図版 III-8a-c (TOM-141)

薄壁で多角形の小道管が均一に分布する散孔材で、普通、道管は２～４個放射方向に複合し、全体として放射方向に連なった配列となる。道管の穿孔は横棒が 20 本くらいからなる階段状で、側壁の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在するが晩材部でやや接線方向にまとまる傾向はあるが目立たない。放射組織は単列同性と集合放射組織がある。以上の形質からブナ科ハンノキ属のハンノキ節の材と同定した。同属のヤシャブシ節は集合放射組織を持たないか、出現しても希であることから区別される。

(根材) 写真図版 III-9a-c (TOM-265)

枝幹材のそれより、薄壁で角張った道管が散在する散孔材。木繊維の直径は大きく、壁はあまり肥厚していないので、木口面で道管との区別が不明瞭になる。放射組織は大振り薄壁の柔組織で構成され、背は低い。その他の形質は枝幹材と同じである。これらのことから根材と同定した。

我が国のハンノキ節の樹木のうち、普遍的なのはハンノキ（変種のヤチハンノキを含む）とケヤマハンノキ（変種のヤマハンノキを含む）で、北海道から九州までに広く全国に分布しており、ハンノキは低湿地、湿原に多く、ケヤマハンノキは丘陵地の斜面や沢沿いに多いが、いずれの材構造も互いによく似ており、区別は出来ていない。いずれも成長の早い落葉高木で、ケヤマハンノキでは樹高 20m 以上、幹径 60cm になる。材質はハンノキは軽軟でケヤマハンノキはやや堅硬、木理緻密だが、両者とももろい。身近にあるので建築材や器具材などによく利用されるが、いずれもよい材質とはいえず、マッチの軸木や廉価な割り箸などによく用いられる。樹皮や果実からタンニンを採り染料に利用する。また、根粒をつくることから、肥料木としても利用される。

9.　クマシデ属クマシデ節　Carpinus sect. Distegocarpus　カバノキ科

写真図版 IV-10a-c (TOM-173)

小型（直径約 30 ～ 60 μm）で楕円形の道管が単独あるいは数個放射方向に複合し、全体としては道管群が放射方向に波打って散在する散孔材で、道管の直径は年輪の後半で徐々に減少する。木部柔組織は接線状、晩材部で目立つ。道管の穿孔は数本の横棒からなる階段状と単一の両方がある。

道管相互の壁孔はやや大きく（直径約6㎛）、交互状で密に配列する。放射組織は同性にちかい異性で、2～3細胞幅である。これらの形質からクマシデ属クマシデ節の材と同定した。同属のイヌシデ節の材は道管穿孔が単一がほとんどで、階段状のものはごくまれであることで区別される。

我が国に自生するクマシデ節にはクマシデとサワシバがあり、いずれも落葉樹で、サワシバは北海道から九州にかけての冷温帯に、クマシデは東北南部から九州にかけての暖温帯から冷温帯に広く分布する。サワシバは樹高15m、幹径50cmに達する高木となるが、クマシデは樹高10m、幹径30cm程度である。いずれの材も硬く粘りがあり、建築材（床柱）、柄物、各種器具材に利用される。

10. アサダ　Ostrya japonica Sarg.　カバノキ科

写真図版IV-11a-c (TOM-37)

単独あるいは数個が放射方向に複合した楕円形の道管が均一に分布する散孔材で、道管量は年輪前半に多く、後半部では道管が年輪界付近に向けて順次小さくなり、晩材部での道管密度は低い。単細胞幅の木部柔組織が接線方向に並び、晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に並び、内壁には繊細ならせん肥厚がある。放射組織は1～3細胞幅の同性で、スマートな紡錘形をしており、時に単列の翼部が高くなる。これらの形質からアサダの材と同定した。

アサダは北海道の道東、道央より南の全国の冷温帯から暖温帯上部にかけての山地斜面や沢沿いに広く分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高20mになる。材は堅く緻密で、割裂、加工性は難しいが、きめが細かく、仕上がりが美しい。床板、敷居などの建築部材、各種柄類、運動具、軸木、船の櫓などに用いられる。

11. クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

（枝幹材）写真図版IV-12a-c (TOM-1851)

出土材は心材は黒色で非常に保存性はよいが、辺材は茶褐色で非常に柔らかく組織の保存性は悪い。木部柔組織及び放射柔組織の細胞にはタンニンから変質したと思われる黒色物質がしばしば集積される。年輪の始めには大型の丸あるいはやや放射方向にのびた楕円の道管が単独で1～5層に配列し、晩材部にかけて道管は小型で薄壁となり、徐々に径を減じ、ルーズに集まって火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織は接線状～短接線状に配列する。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は対列状、あるいは柵状となる。これらの形質からブナ科のクリの幹あるいは枝の材と同定した。

(根材) 写真図版V-13a-c (TOM-347)

年輪幅が広いところでは大～中型の道管が年輪界にむけて径を減じながら火炎状に配列する半環孔材だが、狭い年輪で大道管が均一に分布し散孔材のように見える。放射組織は単列同性が基本であるが、ときに2列となり、直立細胞を交えることもある。放射組織細胞が大振りなこと、繊維細

胞は直径がやや大きく薄壁であることなどを除いては枝・幹材と同じである。
(樹皮) 写真図版 V-14a-c (TOM-1819)

横断面で内樹皮に近い部分では篩管と柔組織であった細胞群の列と繊維細胞群の列がそれぞれ帯状になって交互に配列し、接線断面では放射組織が単列で木部同様同性的であることなどからクリの樹皮と同定した。

クリは北海道小樽、岩見沢市以南の全国の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、樹高20m、幹径1mを超える大木になる。成長が速い陽樹で、特に二次林に多い。材はやや堅硬で割裂容易、耐朽性、特に耐湿性に優れる優秀な木材である。大材が得られるので大型建築物の柱材や土台、各種器具材をはじめ、ありとあらゆる用途がある。また特に耐湿性と耐朽性に優れているので土木用材、木造の橋、鉄道枕木などに用いられた。

12. ブナ属　Fagus　ブナ科

写真図版 V-15a-c (TOM-214)

小型でやや角張った道管が、単独あるいは2個複合し、年輪内に均一に散在する散孔材で、道管径は年輪の終わりに向かってかなり小さくなり、晩材部では道管の相対的密度が低くなる。道管の穿孔は単一あるいは横棒が10数本からなる階段状である。放射組織は平伏細胞と上下端のみ直立細胞の異性で、1～14細胞幅からなり、非常に大きな放射組織が肉眼でも見える。道管と放射組織間の壁孔は大型のレンズ状である。これらの形質からブナ科ブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部（黒松内低地）から九州鹿児島県までの冷温帯に広く分布するブナ Fagus crenata Blume と岩手県以南の本州、四国、九州の冷温帯下部から暖温帯上部の太平洋側に分布するイヌブナ Fagus japonica Maxim. があるが、材質は多少とも違うものの、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。いずれも幹径1m、樹高30mに達する落葉大高木である。ブナの材は堅硬緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、和洋家具、椅子、机、箱もの、玩具、農具の柄などの器具材、下駄、マッチの軸木、鉄道枕木など広く用いられるが、漆器椀の木地などの特用がある。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途がある

13. コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科

写真図版 VI-16a-c (TOM-116)

遺跡出土材は色の鮮やかな茶褐色をすることが多く、まれに黒色となる。年輪の始めに丸い大道管が1ないし数層並び、晩材部では中～小型の丸くて壁の厚い道管が単独でまばらに放射方向に並ぶ環孔材で、道管の穿孔は単一、道管の周りには周囲状仮道管がある。木部柔組織は2～3細胞幅の独立帯状で晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合放射組織があり、後者は大変幅広く、背が高くなり、しばしば大型の結晶細胞を含む。道管 - 放射組織間壁孔は柵状である。以上の形質からコナラ属のうち、落葉性のコナラ亜属の中のクヌギ節のクヌギ、アベマキのいずれかの材であると同定した。

クヌギ Quercus acutissima Carr. は岩手県の海岸地方以南の暖温帯の、特に二次林や河辺の水湿地によく生える落葉高木で、特に農村部の集落内外に多い。幹は通直にのび、成長が早く、樹高15m、幹径 60cm くらいになる。材はやや堅硬で木理は粗く、割裂が容易である。柄類、桶類、車軸、舟の櫓、薪炭材など、最近では椎茸栽培の原木に用いる。アベマキ Quercus variabilis Blume は主に北陸・東海地方以西の暖地に生える落葉高木で、材質、用途等はほとんどクヌギと同じである。

14.　コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

写真図版 VI-17a-c (TOM-651)

クリによく似た木材で、出土材は時にはクリ同様、心材部が漆黒に着色することがある。年輪の初めの大道管、晩材部の火炎状に配列した小道管などクリによく似るが、クヌギ同様の大きな複合放射組織を持つことから、コナラ節の材と同定した。

(根材)（写真無し）

中型でまるい道管が年輪のはじめに１～２層に配列し、晩材部では小型で薄壁の道管が火炎状～放射状に配列する環孔材で、年輪幅の狭いところではクリの根材同様、散孔材のようになる。放射組織は同性で、１～２列の小型のものと、大型で集合状ないしは複合状のものとからなり、その他の形質は枝幹材と同じである。

コナラ節には北海道南部から九州までの冷温帯下部から暖温帯の二次林に広く分布するコナラ Quercus serrata Thunb.、コナラよりやや冷涼な北海道から九州までの冷温帯から暖温帯上部に広く分布するミズナラ Quercus mongolica Fish. var. grosseserata Rhed.、主に中部地方以西の冷温帯から暖温帯に希に分布するナラガシワ Quercus aliena Blume、ミズナラより更に冷涼な北海道から九州の冷温帯、暖温帯に分布し、特に海岸部に多いカシワ Quercus dentate Thunb. があるが、材構造での区別は困難である。小矢部市付近の丘陵にはコナラが普通に分布し、丘陵から山地にかけてはミズナラが普通に分布し、またナラガシワが非常にまれにある。コナラは幹径 50cm、樹高20m くらいになる落葉高木で特に二次林の主要構成樹種で、材質はやや堅硬、肌目は粗い。建築材、各種器具材、土木用材、薪炭材に用いられる。ミズナラは幹径 1m、樹高 30m になる落葉大高木で、材質は重硬、緻密で、肌目は粗、保存性、加工性は中位だが、大きな複合放射組織が特有の文様をなし、木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第１級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材、運動具など極めて広い用途がある。ナラガシワはコナラ同様である。これらは薪炭材、椎茸のほだ木にも用いられる。

15.　ムクノキ　Aphananthe aspera Thunb.　ニレ科

写真図版 VI-18a-c (TOM-1458)

中～小型で丸あるいは放射方向にやや長い楕円形で厚壁の道管が、年輪界にむけて直径を減少しながら、単独あるいは２～３個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に分布し、道管内部にはチローシスが見られる。木部柔組織は早

材部で周囲状、晩材部では数細胞幅の帯状で著しい。放射組織は異性で１～３細胞幅くらい、１～４細胞高の単列部には小型の結晶がしばしば見られる。これらの形質からニレ科のムクノキの材と同定した。

ムクノキは関東地方以西の暖温帯に普通の落葉高木で、二次林、屋敷周りなどに多いが、北陸ではほとんど分布しない。樹高 20m、幹径 60cm になり、材はやや硬く強靱で割裂困難であり、農工具及びそれらの柄、三味線の胴、下駄、櫛材などに用いられる。

16.　エノキ属　Celtis　ニレ科

写真図版 VII-19a-c (TOM-671)

年輪始めに丸いあるいはいびつな楕円の大道管が１～数層並び、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって接線方向に長い塊をつくり、木部柔組織も集まって全体として波状の紋をなす環孔材で、幅広い年輪の晩材部では小道管の帯は同心円状になる。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は大きな紡錘形で、平伏細胞は接線面で見ると直径が小さく、密集しており、周囲に鞘細胞を持つ。方形細胞や大きめの平伏細胞に時に結晶を持つ。これらの形質からニレ科のエノキ属の材と同定した。

エノキ属には東北南部以南の暖温帯に広く分布し、特に二次林や屋敷林に多いエノキ Celtis sinensis Pers. var. japonica Nakai と、それより冷涼な北海道から九州にかけての冷温帯に多いエゾエノキ Celtis jessoensis Koidz. があり、両者の材構造での区別は困難であるが、その分布と、普遍性から当遺跡出土材はエノキである可能性が高い。エノキは成長が早く、幹径 1m、樹高 20m 以上になる落葉高木で、その材質は比較的堅硬で従曲性にとみ、割裂困難で質がやや劣るが、大材が得易く、建築、器具材などの用途があり、材質の良さを重視しない、余り重要でない部分によく使われる。

17.　ニレ属　Ulmus　ニレ科

（枝幹材）写真図版 VII-20a-c (TOM-940)

年輪のはじめに中～大型の丸い大道管が１～３層並び、晩材部ではエノキ属同様、薄壁多角形の小道管が接線方向に多数集まって波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に分布し、小道管の内壁にはエノキより顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織にしばしば膨らんだ結晶細胞があり、縦方向に数個～ 10 数個が連なる。放射組織は２～６細胞幅の同性できれいな紡錘形となる。以上の形質からニレ属の材と同定した。ニレ属の出土材は一般に茶褐色を呈するのに対し、エノキ属のそれは灰白色で透明感がある。

(根材)（写真無し）

年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは数個複合して散在し、晩材部では小型道管が数～ 10 数個複合して斜め方向に配列する散孔材で、道管は年輪界にむけて徐々に集合し、直径を減じていく。その他の形質は枝幹材と同じである。

我が国に分布するニレ属には北海道から九州の冷温帯に広く分布するハルニレ Ulmus davidiana Pl. var. japonica (Rhed.) Nakai とオヒョウ（オヒョウニレ）Ulmus lacciniata (Trautv.) Mayr、それに西日本の暖温帯に分布するアキニレ Ulmus parvifolia Jacq. がある。アキニレは道管の形態と配列が異なりはっきりと区別されるので、本遺跡出土材はハルニレかオヒョウである。ハルニレ、オヒョウとも幹径 1m、樹高 30m に達する落葉大高木で、北海道から九州までの冷温帯に広く分布するが西日本には少ない。材質はやや堅硬で、木理通直、緻密で弾性にとみ、割裂困難で加工は難しい。建築材、家具、柄や指物など各種器具材に用いられる。オヒョウの樹皮からアイヌが繊維をとりアツシ布を織理、ハルニレの樹皮も繊維として利用される。

18.　ケヤキ　Zelkova serrata Thunb.　ニレ科

（枝幹材）写真図版 VII-21a-c (TOM-521)

年輪の始めに大道管が１層に並ぶ環孔材で、晩材部には薄壁多角形の小道管が多数集まった塊が繊維組織の塊と交互に分布する。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に分布し、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は３～６列の多列で背は低く上下端の単列部を除き同性、単列部にはしばしば大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

(樹皮) 写真図版 VIII-22a-c (TOM-1623)

内樹皮部分では篩管と柔組織の帯と繊維組織の帯がやや規則的に交互にあるが直ぐ外側では、細胞が増殖して大きな繊維組織の塊をつくり極めて硬くなる。柔組織部分では大量の結晶が形成される。放射組織は木部同様多列の紡錘形であるが、外部に向かうにつれ直ぐに配列は乱れる。これらの形質からケヤキの樹皮と同定した。

ケヤキは北海道をのぞく全国の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉広葉樹で、九州南部ではまれである。成長が早い上に寿命が長く、樹高 30m、直径 1.5m を超えるきわめて大きな樹になる。平野部から山間部の落葉樹林、特に二次林に広く生育し、また農村や邸宅などで良く植えられるので天然分布との区別は難しい。材質は堅硬で肌目はやや粗、強靭で弾力があり、木理は光沢があって美しく、加工性、割裂性に優れる極めて優秀な広葉樹材である。神社仏閣などの大型建築物の柱材や農家の大黒柱などを始め、木目が美しいので天井や床の間、床板など建築の装飾的部分、和洋家具、各種家具、建具類、杵、臼、刳物、挽物などの生活用具、漆器木地、仏像などの彫刻など極めて広い用途がある。

19.　ヤマグワ　Morus bombycis Koidz.　クワ科

写真図版 VIII-23a-c (TOM-539)

遺跡出土材の心材部はしばしば鮮やかな赤褐色を帯び、保存性がよい。年輪始めに中～大型の楕円形の道管が単独あるいは２個放射方向に複合して１～３層に並び、順次径を減じて、晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊となったものが波状の紋をなすように斜め接線状に配列する環孔

材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は多少大きめの小孔紋で交互状、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。一見、エノキ属やケヤキによく似るが、晩材部の小道管が比較的丸い塊状に集まること、放射組織は３～７細胞幅の紡錘形で、単列の翼部が発達し、異性であることから、ヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは北海道から九州までの暖温帯、冷温帯の山野に広く分布する落葉高木で、特に沢沿いに多く、幹径 40cm、樹高 15m くらいになる。材はやや堅硬で靭性にとみ、木理は粗いが光沢があって美しく、特に保存性に優れている。和風建築の内装材や家具材、強さを必要とする各種器具材、彫刻材などに用いる

20.　モクレン属　Magnolia　モクレン科

（枝幹材）写真図版 VIII-24a-c (TOM-258)

遺跡出土材は透明性のある灰褐～灰黒色をしており、年輪界は目立たない。薄壁で多角形の小道管が単独あるいは数個主に放射方向に複合したものが高密度で均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は階段状である。放射組織は１～３細胞幅の同性で幅狭くスマートである。これらの形質からモクレン属の材と同定した。

(根材)（写真無し）

枝幹材にくらべ道管が一回り小さく、また、密度がはるかに低く、放射組織の構成細胞がやや大きいことから根材と同定した。

モクレン属には北海道から九州の暖温帯から冷温帯の山野に広く分布するコブシ、冷温帯に多いホオノキ、本州から九州の温帯の、特に多雪地に多いタムシバなどがあるが、材構造での区別は困難である。ホオノキは成長が早く幹がまっすぐに延び、樹高 20m、幹径 60cm になる落葉高木で、材質は木理通直、軽軟緻密で、肌目は精、加工性が大変良く仕上がりが美しい優秀な材である。戸障子などの建具、欄間、下駄（朴歯）、漆器木地、挽物、刳物、各種彫刻材など広い用途がある。コブシはホオノキ同様の用途があるが、材が小さく、また質がやや劣る。タムシバは低木～小高木で材は余り利用されない。

21.　クスノキ科　Lauraceae

写真図版 IX-25a-c (TOM-949)

丸くて壁のやや厚い小道管が単独あるいは２～数個放射方向に複合したものが年輪内に均一に密度低く散在する散孔材で、道管の周囲には周囲状柔組織がある。道管の穿孔は単一と横棒が 10 本以下の階段状がある。放射組織は２～３細胞幅で背は低く、上下端の細胞を除けばほぼ同性状である。木部柔組織及び放射組織には時折大型の油細胞がある。これらの形質から、クスノキ科の材と同定した。

クスノキ科の材は道管穿孔が単一と階段状の両方があることと放射組織、木部柔組織に大型の油細胞があることにより他の木材から容易に区別することが出来るが、その一方で、我が国に分布す

るクスノキ科の樹木ではクスノキを除いた多数の樹種は材構造が互いによく似ていて属の区別もしばしば困難である。本出土材もクスノキを除くクスノキ科の樹木と言うことで、暖温帯の常緑樹であるタブノキやシロダモなど、暖温帯から冷温帯に分布する落葉樹であるクロモジやアブラチャンなど、候補は多くあるものの、種を特定するのは今のところ出来ていない。

22.　カツラ　Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.　カツラ科

（枝幹材）写真図版 IX-26a-c (TOM-695)

薄壁の角張った小道管がほぼ単独で密に均一に分布する散孔材で、道管の直径は年輪のおわりで緩やかに減少して、早材部とのコントラストで年輪界がわかる。道管の穿孔は 20 ～ 40 本ほどの横棒からなる階段状で、側壁の壁孔も階段状、内部には薄壁のチローシスが著しい。放射組織は異性で 2 細胞幅、1 ～ 4 細胞高の単列部と数細胞高の多列部からなり、道管との壁孔は対列状～階段状である。これらの形質からカツラ科のカツラの材と同定した。

(根材) 写真図版 IX-27a-c (TOM-852)

道管の細胞壁が薄く、また密度も低く、放射組織の細胞がやや大振りで壁が薄いことから根材と同定した。

カツラは北海道から九州までの冷温帯から暖温帯上部に生育する落葉高木であるが、西日本では少ない。樹高 20m、樹幹は通直で、幹径 1m 以上の大木となり、しばしば根元付近から多数の萠芽枝がでてよく成長し多幹となり、あるいは千本桂と称せられるほどとなる。材質は軽軟、木理通直で靭性があり、切削加工が容易で仕上がりが美しい。和洋家具、机、仏具、漆器木地、小細工ものなど、多くの用途がある。

23.　ヤブツバキ　Camellia japonica Linn.　ツバキ科

写真図版 X-28a-c (TOM-1087)

微細な薄壁多角形の道管がほとんど単独で均一に分布する散孔材で、年輪始めに一回り大きい道管が一層に並び、晩材では年輪界に向かってわずかずつ小さくなる。道管の穿孔は横棒が 10 本くらいの階段状で、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状、細胞内に茶褐色の物質があり横断面でも見やすい。放射組織は 2 細胞幅で背の低い異性、直立細胞がときどき大きく膨らんで大きな結晶を一つ持つ。以上の形質からヤブツバキの材と同定した。

ヤブツバキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、樹高 10m、幹径 30cm ほどにもなり、秋田以南の東日本ではほとんど海岸沿いに分布するが西日本では山中にもよく生える。変種のユキツバキ Camellia japonica Linn. var. decumbens Sugimoto は東北～北陸にかけての日本海側の海岸から山地帯の多雪地に分布し、樹高 1 ～ 3m、幹はしばしば横伏し 10cm 程度となる低木である。ヤブツバキの材質は極めて堅くて粘りがあり、加工は困難だが、柄物、滑り台、滑車、轆轤部品など強度を必要とする部分によく用いられ、遺跡出土材では柄物などの他、犂などの特用もある。

24.　ツルアジザイ　Hydrangea petiolaris Seib. et Zucc.　ユキノシタ科

写真図版 X-29a-c (TOM-887)

早材部では、中型で放射方向にややのびた丸～いびつな道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合したものが、放射方向の列をなして密に分布し、晩材部ではやや小型でまるい道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して間隔のあいた放射方向の列をなし、年輪界附近では小型で角張った道管が放射方向に数～10数個複合して配列する半環孔材で、道管の穿孔は20～40本ほどの横棒からなる階段状で、道管相互の壁孔は階段状。放射組織は異性で、直立細胞からなる単列のものと、３～８細胞幅くらいで不完全な鞘細胞をもち、高さが極めて大きい多列のものとからなる。これらの形質からツルアジザイの材と同定した。

ツルアジザイは北海道から九州の冷温帯から暖温帯上部の山林に広く分布する落葉藤本で蔓の太さが10cmを超えることもある。籐本であるため材は柔らかくてもろく、特に用途があるほどではない。

25.　カマツカ　Pourthiaea villosa (T.) Decne var. laevis (T.) St.　バラ科

写真図版 X-30a-c (TOM-1807)

微細で丸い道管がほぼ単独で比較的まばらに散在する散孔材で、道管の直径は年輪界にむけて緩やかに減少し、道管の密度も晩材部へむけて減少するが、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で２～４細胞幅、上下端の１～３細胞が直立ないし方形細胞からなる。これらの形質からカマツカの材と同定した。

カマツカは北海道から九州の低山地に普通に生える樹高10m、幹径20cmほどになる落葉小高木で、材は硬く強靱で粘りがあり、器具材（特に柄物、牛の鼻輪）、櫛、舟の艪などに用いられる。

26.　サクラ属　Prunus　バラ科

（枝幹材）写真図版 XI-31a-c (TOM-970)

遺跡出土材は濃い茶褐色をして保存性がよい。年輪のはじめにわずかに大きめの楕円形の小道管が単独あるいは２個複合して比較的密に分布し、それ以外では小道管が単独あるいは数個が主に放射方向に複合して密度高く、均一に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一で、側壁の壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状、内壁には顕著ならせん肥厚がある。道管内部を濃い茶褐色のゴム状物質がしばしば充填している。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は１～４細胞幅くらいの背の高い紡錘形で、構成細胞は大振りで、同性にやや近い異性である。以上の形質からサクラ属の材と同定した。 サクラ属にはヤマザクラを始め多数の種があるが、当遺跡出土材では樹種の識別は出来ていない。

(根材)（写真無し）

枝幹材に比べて道管壁が薄く、道管密度が低く、放射組織細胞はやや大きく接線面で見た形が粗雑になるなどから根材と同定した。

サクラ属には常緑のバクチノキなどの仲間から、暖温帯に普通なヤマザクラ、冷温帯に多いオオヤマザクラやシウリザクラなど実に多くの種があり、それぞれ木材資源として利用されてきている。最も普遍的なヤマザクラは東北南部以南西の暖温帯に普通に生える落葉高木で、幹径 60cm、樹高 15m くらいになる。材はやや緻密堅硬で割裂容易で耐久、保存性が高く、加工性もよい。柱、天井板、床板、敷居などの建築材、和洋家具、各種器具材、小細工ものなど、広い用途がある。樹皮はいわゆる桜皮で樺細工に用いる。

27. ナシ亜科　Pomoidae　バラ科

写真図版 XI-32a-c (TOM-870)

やや角張った丸い小道管が単独で密度低く均一に分布する散孔材で、年輪初めにある道管はやや大きく、年輪界付近ではかなり小さい。木部柔組織も散在状で、着色物質が含まれるので横断面で見つけやすい。道管の穿孔は単一、放射組織は２～３細胞幅の同性に近い異性で、背は低く、上下端の１～２細胞くらいが方形細胞となる。これらの形質からバラ科のうち、ナシ属、ナナカマド属など、ナシ亜科の材と同定した。

ナシ亜科のナシ属にはヤマナシ、ナナカマド属にはアズキナシ、ナナカマドなど多数の種がある。多くは暖温帯から冷温帯に生える落葉小高木で、材は一般に堅く緻密で粘りがあり、家具、小細工もの、柄物などの用途がある。

28. ネムノキ　Albizzia julibrissin Durazz.　マメ科

写真図版 XI-33a-c (TOM-242)

年輪のはじめにやや大きな道管がならび、そこから順次すこしずつ径を減じた丸～楕円の道管が晩材部では単独または数個放射方向に複合してまばらに散在する環孔材で、道管の周囲には木部柔組織が周囲状、翼状あるいは連合翼状となる。木部柔組織はストランドで層階状に配列し、ときに結晶をもつ。道管の穿孔は単一、らせん肥厚は見られない。放射組織は同性で３細胞幅くらいであり、接線断面でみると外形はいびつである。これらの形質からマメ科のネムノキの材であると同定された。

ネムノキは東北地方以南の全国の山野、原野に自生する落葉高木で、熱帯域まで分布する。樹高 10m、幹径 30cm ほどになり、主幹は直立せず、横枝が大きく張りだして傘形に横に拡がった樹形となる。木材は軽軟で脆く、切削加工は容易だが仕上がりは余り良くなく、保存性も低いが木目は美しく、キリの代用として、家具などの化粧板、火鉢の胴、桶、下駄などに用いられる。

29. ハギ属　Lespedeza　マメ科

写真図版 XII-34a-c (TOM-101)

年輪にそって中くらいの道管がほぼ単独で１層にならび、それからごく緩慢に径を減じた道管が夏材部では単独あるいは２～３個複合してまばらに散在する散孔性の環孔材で、道管の周囲には周

囲状から連合翼状の木部柔組織がある。道管の穿孔は単一、らせん肥厚はない。放射組織は同性で1～4細胞幅で、構成細胞は粗雑に見える。以上の形質からマメ科のハギ属の材と同定した。

ハギ属には多数の種があるが、現在の小矢部市周辺ではヤマハギ Lespedeza bicolor Turcz. とキハギ Lespedeza buergeri Miq. が最もポピュラーである。いずれも日当りのよい原野や山林に生育する低木で、樹高1～2m、幹の根元径で2～5cm程度になる。木材としての特段の利用はないがヤマハギでは夏に枝葉を乾燥させ、家畜の冬の餌にする。

30. イヌエンジュ　Maackia amurensis R.upr. et Maxim. var. buergeri (Maxim.) C.K.Schn.　マメ科

写真図版 XII-35a-c (TOM-1136)

一般に茶褐色を帯びた出土材で、やや大型で丸い道管が年輪のはじめに、単独ときに2個複合して1～3層に並び、年輪の中間部分は中型の丸い道管が単独あるいは2～3個複合してまばらに散在し、晩材部では薄壁で断面四角形の微細な道管が多数集合して、接線方向のにびる塊をなして文様をつくる環孔材である。道管の穿孔は単一、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚があり、道管内部にはしばしば濃褐色のゴム状の物質が見られる。木部柔組織は周囲状、晩材部では小道管の塊に混ざる。放射組織は同性で5細胞幅くらい、比較的形のよい紡錘形となる。小道管、木部柔組織、繊維組織は層階状に配列する。これらの形質からイヌエンジュの材と同定した。

イヌエンジュは北海道から中部地方の山地丘陵、西日本では山地の冷温帯から暖温帯上部に生える落葉小高木で、樹高12m、幹径30cmくらいになる。心材は暗黄褐色で、材質はやや堅硬で重く、木理美しく、耐久、耐湿に優れ、仕上がりが美しい。床柱や床板、和洋家具、調度品、小細工もの、農具の柄、三味線の絃、鼓の胴、漆器木地などの用途がある

31. フジ　Wisteria floribunda (Willd.) DC.　マメ科

写真図版 XII-36a-c (TOM-422)

樹齢数年程度の若齢部では中～大型の道管が年輪に沿って1～2層に並び、順次径を減じた丸い道管がまばらに散在し、それより歳の行った部分では大変大きな楕円形の道管が年輪のはじめに1層に並び、晩材部では薄壁で四角形～多角形の小道管が多数集まって接線方向に広がった塊をなす環孔材で、年輪幅に大きな変異がある。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は量多く、早材部では周囲状、晩材部では翼状～連合翼状となり、紡錘形あるいは4細胞からなるストランドとなる。歳の行った部分では繊維組織は特に晩材部で密集して塊をなし、道管と木部柔組織以外の部分を埋める。放射組織は1～5細胞幅の同性で輪郭が不整の背の高い紡錘形となる。柔組織、小道管、背の低い放射組織等は層階状に配列する。これらの形質からフジの材と同定した。

フジは広く本州青森県から九州の山野に分布する落葉の籐本で、他物にからみついてよじ登り、多重に形成層が出来、それぞれが肥大成長するので成長が旺盛で、しばしば幹が30cm以上になる

が、大きなものでは肥大成長する部分が限られるのでいずれ何本かに分裂してゆく。材内篩部ができるので組織の均一性と強度に極端な差があり、材そのものの利用はほとんどできないが、蔓が柔軟で、ものを縛ったりするのに用いられる。靭皮繊維を織物、紙に使用する。

32. ヤマウルシ　Rhus trichocarpa Miq.　ウルシ科

(写真無し)

中型でまるい道管がほぼ単独、ときに2～3個複合して、年輪のはじめに1～2層に配列し、孔圏外では径を減じ、晩材部では小道管が集まった塊となり、年輪界付近でごく小型のものが数個おもに放射方向に複合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、道管内部にはチローシスが認められる。木部柔組織は周囲状で、道管との壁孔は大型でややまばらである。放射組織は異性で、2細胞幅くらい、道管との壁孔はやや大きく、対列状（一部柵状）となる。これらの形質からヤマウルシの材と同定した。

ヤマウルシは北海道から九州までの全国の山野に生育する落葉低木～小高木で、樹高2～5m、幹径3～10cmほどになる。木が細く、材は軽軟であるので特に用途はない。

33. ウルシ　Rhus verniciflua Stockes　ウルシ科

写真図版 XIII-37a-c (TOM-509)

ヤマウルシによく似た環孔材で、遺跡出土材はしばしば茶褐色を呈する。中～やや大型で楕円の道管がほぼ単独あるいは2個複合して年輪のはじめに1～3層ほど配列し、道管はそこから年輪中央部までゆっくりと径を減じ、晩材部では順次径が小さくなった丸～多角形の小道管が放射方向あるいは接線方向に数個複合して散在する環孔材で、幅広い年輪では中間部分の小道管は接線方向に集まって斜上した紋をなす。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、内部にはチローシスが著しい。木部柔組織は周囲状で、晩材でときに翼状、道管との壁孔は横に広い。放射組織は異性で3～6細胞幅、樹齢の行った部分では比較的大きな紡錘形となる。道管との壁孔はやや大きく、対列状（一部柵状）である。これらの形質からウルシの材と同定した。近縁のヌルデ、ヤマウルシ、ハゼノキとは晩材部の小道管の集合と分布、放射組織の大きさと形態などから区別される。

ウルシは中国原産とされる樹高15m、幹径50cmになる落葉小高木～高木で、樹液を取るため北海道～九州で栽培され、また野生化しているところもある。ウルシの材は軽軟でもろいが心材は黄色く着色し、光沢があり、建築物の建具、装飾部分、家具の化粧板、下駄、網の浮木など、キリの用途に似たところに使われる。

34. ヌルデ　Rhus javanica L. var. roxburghii (DC.) Rheder　ウルシ科

写真図版 XIII-38a-c (TOM-563)

遺跡出土材はやや透明感のある黒ずんだ褐色で、保存性は悪い。年輪の始めに中～大型の楕円形

の道管が単独あるいは2個複合して2～4層くらいに並び、晩材部では薄壁多角形の微細な道管が多数集合して斜上した接線方向に長い塊となる環孔材で、小道管の塊は特に年輪界に接して著しい。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織等は層階状を示さず、放射組織は1～2細胞幅の同性で、背は低く、接線面での輪郭がでこぼこの不整形を示す。放射組織の直立細胞がしばしば上下2細胞に分裂しそれぞれに結晶を持つ。道管 - 放射組織間壁孔は横長の楕円形で大振りである。以上の形質からヌルデの材と同定した。

ヌルデは北海道渡島半島からから九州まで、全国の山野に普通の落葉小高木で、特に陽光の二次林に多く、幹径30cm、樹高7mくらいになる。枝が太く大きな葉を付ける二次林の先駆種である。材は軽軟で肌目は粗、切削加工が容易であり、小細工物、釣りの浮木、下駄などに用いることがある。

35.　ウルシ属　Rhus　ウルシ科

(写真無し)

極めて保存性の悪い出土材で、往々にして早材部は潰れており、また、細胞壁の劣化が激しく充分な観察が出来ない。中型～やや大型の道管が年輪始めに数層並び順次径を減じて晩材部では小道管となり、道管の穿孔は単一、小道管内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状だが目立たない。放射組織は1～5細胞幅でほぼ同性であるが接線面での輪郭は不整である。これらの形質からウルシ属の材と同定したが、種までは識別できなかったものである。

36.　チドリノキ　Acer carpinifolium Sieb. et Zucc.　カエデ科

写真図版 XIII-39a-c (TOM-1611)

遺跡出土材は薄い黒茶褐色を呈し、保存性は比較的よい。やや小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して均一に散在する散孔材で、年輪界付近では道管は小さくなる。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚があり、内部には黄褐色の充填物がしばしば見られる。比較的薄壁で直径の大きい繊維細胞の塊と厚壁で直径のやや小さい繊維細胞の塊があり、それらが横断面で雲紋状の文様をなす。放射組織は同性で、板目面で1～4細胞幅、高さ400μmくらいの他のカエデ属の種同様の大きさのものが均一に分布している中に、幅200μm、高さ1800μmに達する大型のものが混じる。これらのことからカエデ属のチドリノキの材と同定した。

チドリノキは本州から九州の暖温帯～冷温帯の沢沿いなどの適潤地に生育する落葉小高木で、樹高10m、幹径40cmくらいになる。材質は大変堅くて粘り強く、木理緻密で光沢があり、洋家具、刀の鞘と束、農具の柄、彫刻材などに用いる。

37.　カエデ属　Acer　カエデ科

写真図版 XVI-40a-c (TOM-502)

薄壁楕円形～多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して密度低く、均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、内壁にはらせん肥厚がある。放射組

織は１～６細胞幅ほどの紡錘状で同性である。これらの形質からチドリノキを除くカエデ属の材と同定した。標本により薄壁で径の大きい繊維組織の塊と厚壁で径の小さい繊維組織の塊が交互になって雲紋状を呈するものもあるがはっきりしないものもあり、また、放射組織の大きさも標本によって異なり、複数種がこれに含まれていると考えられる。

カエデ属にはわが国には亜高山帯から亜熱帯まで、沢山の樹種があり、北陸地方の低山地にも、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、ウリハダカエデなどがあり、また、山間部に入ればイタヤカエデの仲間が多くある。材構造は互いに似ているので各樹種を識別するのは困難である。いずれも落葉の小高木から高木で材はやや柔らかいものから堅いものまであり、粘りがあり、木目も美しく、加工性も比較的よく、良材である。特にイタヤカエデの仲間は樹高 20m、幹径 60cm を超える大木となり、良材が得られる。建築材の装飾的部分、和洋家具、刀の鞘や束、農工具の柄、楽器（バイオリンの胴)、漆器木地、彫刻（こけし）などの多様な用途がある。

38.　トチノキ　Aesculus trubinata Blume　トチノキ科

（枝幹材）写真図版 XVI-41a-c (TOM-1944)

単独あるいは数個が放射方向に複合した薄壁で楕円形～丸みを帯びた多角形の小道管が均一に散在する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がかすかに見えることがある。放射組織は単列同性で層階状配列する。道管 - 放射組織間壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状、密に並ぶとヤナギ科の蜂の巣状の壁孔に似てくる。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

(根材) 写真図版 XVI-42a-c (TOM-1905)

枝幹材より一回り以上大きくて薄壁の道管が単独あるいは放射方向に数個複合して密度高く均一に分布する散孔材で、繊維細胞は量少なく、薄壁で直径がやや大きく、短い。放射組織は大振りの細胞で構成され単列、層階状配列はやや乱れることが多い。その他の形質は枝幹材と同じであることから根材と同定した。

(樹皮) 写真図版 XV-43a-c (TOM-1853)

木口面で篩管のある層と柔組織の層が規則正しく交互に形成され、放射組織は単列同性、層階状に配列することからトチノキの樹皮と同定した。

トチノキは北海道の札幌付近から九州北部にかけての冷温帯～暖温帯上部に広く分布する落葉高木で、樹高 30m、幹径 1m 以上になり、しばしば 2m を超す巨木となる。種子は有毒のサポニン、アロインを含むがこれを晒して取り除けば優良なデンプンが多量に取れる。この澱粉を食用とするほか､種皮の粉末は殺虫剤や薬用となる。樹皮にはタンニンを多く含む。材は肌理細かく柔らかく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低いが、大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分によく使われる。その他、家具、各種器具、特に刳物、挽物、漆器木地などに縄文時代前期から非常によく利用されてきている。

39.　ニシキギ属　Euonymus　ニシキギ科

写真図版 XV-44a-c (TOM-1198)

微細ででやや角張った楕円形の道管がほぼ単独で均一に散在する散孔材で、道管の直径および密度は年輪の終わりでやや急に減少するが、年輪はあまり目立たない。道管の穿孔は単一、内壁に微細ならせん肥厚があり、放射組織は単列同性で、上下端の細胞はときに方形細胞に近くなる。これらの形質からニシキギ属の材と同定した。

ニシキギ属には全国の冷温帯から暖温帯のかけての山野に広く分布する落葉低木～小高木で、北海道から九州にかけてニシキギ、ツリバナ、本州から九州にかけてマユミなど多数の種がある。多くは低木で樹高 5m、幹径 20cm 以下であるが、マユミは幹径 30cm、樹高 8m くらいになる。材はいずれも大変緻密で、堅くて重くて質が良く、切削加工容易で仕上がりが美しく、版木、印材、杖、弓（真弓）、櫛、篩、その他様々な小細工ものに用いられる

40.　ゴンズイ　Euscaphis japonica (Thunb.) Kanitz.　ミツバウツギ科

写真図版 XV-45a-c (TOM-1616)

保存性の悪い出土材で、丸みを帯びた多角形薄壁の小道管が均一に分布する散孔材で、年輪界附近でも余り変化はないので年輪界は目立たない。道管の穿孔は横棒が 30 本以下の階段状、木部柔組織は周囲状にまばらにあるようだが全く目立たない。放射組織は異性で、単列と 5 ～ 10 細胞幅あるいはそれ以上になる多列とがあり、単列放射組織と多列放射組織の単列の翼部は全て直立細胞からなる。以上の形質から、ゴンズイの材と同定した。

ゴンズイは富山県及び茨城県以西の本州から九州までの暖温帯の陽光地に生育する落葉小高木で、樹高 5、6m、幹径 15cm ほどになる。材はやや重硬緻密で割裂困難であり、小細工ものに多少使われる。

41.　ミツバウツギ　Staphylea bumalda (Thunb.) DC.　ミツバウツギ科

写真図版 XVI-46a-c (TOM-1317)

ゴンズイより小型で丸みを帯びた多角形薄壁の小道管が均一に分布する散孔材で、、道管の直径は年輪界にむけて徐々に減少する。道管の穿孔は 30 ～ 40 本ほどの横棒からなる階段状で、木部柔組織は周囲状だが量少なく目立たない。放射組織は異性で、単列と 2 ～ 5 細胞幅の多列とがあり、単列放射組織と多列放射組織の単列の翼部は全て直立細胞からなる。以上の形質からミツバウツギの材と同定した。

ミツバウツギは北海道～九州の冷温帯及び暖温帯の林内や沢沿いに良く生育する落葉小高木で、樹高 3 ～ 5m、幹径は 10cm ほどになる。材は硬く割裂容易で、木釘、箸などに用いられる。

42.　ケンポナシ属　Hovenia　クロウメモドキ科

写真図版 XVI-47a-c (TOM-274)

大型で厚壁のまるい道管が、単独あるいは２～３個放射方向に複合して年輪界にそって１～３層配列し、その後道管がゆるやかに径を減じながらまばらに散在し、晩材部では小型で厚壁で丸い道管が単独あるいはおもに放射方向に２～数個複合してまばらに散在する環孔材である。道管の穿孔は単一、小道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状で、晩材では量が多くなり翼状～連合翼状に配列する。放射組織は異性で１～５細胞幅、１～３細胞高の単列部をもつ。これらの形質からケンポナシ属の材と同定した。

ケンポナシ属には北海道から九州の冷温帯～暖温帯に広く分布するケンポナシ Hovenia dulcis Thunb. と西日本に分布するケケンポナシ Hovenia tomentella (Makino) Nakai があるが両者の材構造での区別は困難である。いずれも樹高 15m、幹径 40cm に達する落葉高木で、実が熟すると果柄が膨らんで甘く、梨のような味がするのでこの名がある。材はやや硬く肌目は粗であるが木理は美しく、家具、箱物、火鉢、彫刻材などに使われる。

43.　キブシ　Stachyurus praecox Sieb. et Zucc.　キブシ科

写真図版 XVI-48a-c (TOM-634)

小型で角張った道管が単独で均一に散在する散孔材で、年輪界は全く目立たない。道管の穿孔は横棒が 30 ～ 40 本ほどの階段状で、木部柔組織は散在状、放射組織は異性で２細胞幅、単列部はふつう多列部の倍以上背が高い。道管 - 放射組織間壁孔は階段状である。以上の形質からキブシの材と同定した。

キブシは北海道南部から九州までに広く分布する落葉低木で、樹高２～ 5m、幹は根元径で２～ 10cm ほどになる。材は丸木のまま柄物に使われたりする程度である。

44.　ミズキ　Swida controversa (Hemsl.) Sojak　ミズキ科

写真図版 XVII-49a-c (TOM-1034)

遺跡出土材はやや透明感のある灰黒色で保存性は悪い。丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒の多い階段状、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はみえない。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は１～５細胞幅くらいの典型的な異性で、単列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは北海道から九州までの全国の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、平野部にも普通に生え、幹径 50cm、樹高 15m 以上になる。材はやや軽軟で肌目は緻密であり、農具の柄、把手類、漆器木地、玩具、彫刻、こけしなど広く用いられるが、「水木」の名にちなんで梁に用い、防火のモニュメントとする特用がある

45.　クマノミズキ類　Swida cf. macrophylla (Wall.) Sojak　ミズキ科

写真図版 XVII-50a-c (TOM-1988)

丸い小道管が単独で比較的まばらに均一に散在する散孔材で、年輪前半の道管径はやや大きく、後半は小さいが、年輪界は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は1～3細胞幅で典型的な異性、上下に単列の翼部がある。これらの形質からクマノミズキあるいはヤマボウシの材と同定した。

クマノミズキ Swida macrophylla (Wall.) Sojak は成長の早い落葉高木で、樹高 15m、幹径 40cm くらいになり、東北地方北部から九州まで広く分布するが、東北地方では少ない。ヤマボウシ Benthamidia japonica (Sieb. et Zucc.) Hara はおおむね樹高 10m、直径 40cm 以下の落葉小高木で、東北地方北部から九州までの冷温帯～暖温帯にかけて分布するが、東北南部～北陸では多い。クマノミズキの材質は硬くて重く、建物の梁、漆器木地、把手、柄物、彫刻ものなどに使われる。ヤマボウシは特に堅く強靭で粘りがあり、柄物、楔、鑿の柄、櫂、櫛などに使われる。

46. エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科

（枝幹材）写真図版 XVII-51a-c (TOM-1063)

保存性の良くない出土材で、薄壁多角形の小道管が放射方向に2～6個複合したものが散在する散孔材で、年輪の前半では道管は目立つが、後半では道管径はかなり小さくなり、かつ道管密度が低く、代わって木部柔組織が1細胞幅の独立帯状でよく目立つ。道管の穿孔は10～20本と横棒の少ない階段状、放射組織は2～3細胞幅の異性で、単列の翼部が高い。以上の形質からエゴノキ属の材と同定した。

(根材)（写真無し）

枝幹材より道管径が少し大きく、分布密度が低く、年輪幅は一般に狭く、また、年輪界が不明瞭、繊維細胞の直径はやや大きく薄壁、などの形質より根材と同定した。

エゴノキ属には北海道最南部以南の全国の山野にごく普通なエゴノキ Styrax japonica Sieb. et Zucc.、それより山間部に多いハクウンボク Styrax obassia Sieb. et Zucc. などがあるが、材構造での区別は困難である。エゴノキは樹高 10m、幹径 20cm ほどの落葉中高木で、その材はやや堅硬、弾性強く、緻密であり、床柱、傘の柄、把手、杖、玩具、各種器具、小細工ものなどの用途がある。ハクウンボクも同様である。

47. トネリコ属　Fraxinus　モクセイ科

（枝幹材）写真図版 XVIII-52a-c (TOM-965)

遺跡出土材はやや透明感のある灰褐色で、保存性は比較的よい。丸い大道管が年輪始めに1～数層に並び、晩材部では厚壁の小道管が単独あるいは数個、主に放射方向に複合したものが均一に分布する環孔材で、周囲状柔組織をもち特に晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微小孔紋で交互状に密に分布する。放射組織は2～4細胞幅で同性、背は低い。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

(根材)（写真無し）

道管は直径が小さく、薄壁でしばしば多角形となり、年輪内にまばらに散在する散孔材で、道管壁はやや厚い。道管の穿孔は単一、らせん肥厚は見えない。木部繊維は薄壁で直径がやや大きく、短い。放射組織はほぼ2列で同性だが構成細胞は大振りで粗雑である。これらの形質から根材と同定した。

トネリコ属には北海道から九州の冷温帯の山地に多いアオダモ Fraxinus lanuginose Koidz. f. serrata (Nak.) Mura.、同じ分布域の湿地に多いヤチダモ Fraxinus mandshurica Rupr. var. japonica Maxim.、本州から九州の冷温帯から暖温帯に分布するヤマトアオダモ Fraxinus longicuspis Sieb. et Zucc.、マルバアオダモ Fraxinus sieboldiana Blume、東北から本州中部にのみ分布するシオジ Fraxinus platypoda Oliv. など、いくつかの種があるが材構造での識別は困難である。多くは放射組織がほとんど2細胞幅だが、ヤチダモでは2～4細胞幅になることが知られ、その点で本遺跡出土材はヤチダモの可能性が考えられる。

ヤチダモは幹径70cm、樹高25mほどの大高木となる。材は堅く強靭で弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易な優秀な広葉樹材である。床柱、床板などの建築材、和洋家具、タンス、農具、柄類、各種器具材、野球のバットやラケット枠、スキーなど運動具の用途がある。

48. ムラサキシキブ属　Callicarpa　クマツヅラ科

写真図版 XVIII-53a-c (TOM-646)

遺跡出土材はやや透明感がある灰褐色で保存性はよい。小型で厚壁のまるい道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な孔紋で、密に交互状に分布する。らせん肥厚はない。放射組織は異性で背が高く、2～3細胞幅、しばしば単列部が連結して、多列放射組織が上下に連続する。道管と放射組織との壁孔もごく小型で、交互状に密に配列する。これらの形質からムラサキシキブ属の材と同定した。

日本列島にはムラサキシキブ属の樹種は何種かあるが、北陸地方に分布しているのは北海道～九州、沖縄まで全国に広く分布するムラサキシキブ Callicarpa japonica Thunb.、本州から琉球まで分布するコムラサキ Callicarpa dichotoma (Lour.) K.Koch、東北南部以南の低山地に生えるヤブムラサキ Callicarpa mollis Sieb. et Zucc. があるが、ムラサキシキブが最も普遍的である。ムラサキシキブは低山地の山林原野に普通に生える落葉低木で、樹高2～3m、幹の根元径が3～8cmほどになり、更新の萌芽は真っ直ぐに2mほど伸びる性質がある。この萠芽枝は伸びだしの時に2m以上になり、後にそれが太るので、通直な丸木の棒が得やすい。その材は大変堅く、また強靭である。現在はほとんど利用されないが、特に縄文時代の遺跡出土材で弓状あるいは掘り棒状の木器、木釘などとして多数が知られている。

49. ニワトコ　Sambucus racemosa L. subsp. sieboldiana (Miq.) Hara　スイカズラ科

写真図版 XVIII-54a-c (TOM-1242)

遺跡出土材は灰褐色であるが保存性はややよい。年輪はじめではやや丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が多数複合して幅のある接線状に長い波状の紋、あるいは同心円状に配列する散孔材で、晩材部に向けて径が順次小さくなり、接線方向につながった紋様を際だたせ、年輪界付近では繊維状仮道管とともに接線方向に扁平な長方形となって年輪界を際だたせる特徴がある。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。放射組織は幅広くて背が高く、ほぼ同性、構成細胞は大振りで粗雑、鞘細胞がある。これらの形質からニワトコの材と同定した。

ニワトコは北海道から九州までの全国の冷温帯、暖温帯に広く分布する落葉小高木で、特に湿った二次林に多く、幹径 20cm、樹高 8m くらいになる。材は軽軟で肌目は緻密だが脆い。小細工もの、寄せ木細工などに用いられる。

50. ガマズミ属　Vibrunum　スイカズラ科

写真図版 XIX-55a-c (TOM-1609)

やや角張った微少な道管が、単独で均一に分布する散孔材で、年輪は目立たず、道管径は年輪を通してほとんど変わらない。道管の穿孔は繊細な横棒が約 20 本からなる階段状、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状、放射組織は平伏細胞と上下端に長く伸びる直立細胞からなる異性で、1 ～ 3 細胞幅からなり、背が高い。これらの形質からガマズミ属の材と同定した。

ガマズミ属はサンゴジュなど暖温帯以南の樹種以外は落葉性の低木で、平野部に多いガマズミ Viburnum dilatatum Thunb.、山地丘陵の沢沿いに多いヤブデマリ Viburnum plicatum Thunb. var. tomentosum (T.) Miq.、深山の林内に多いオオカメノキ Viburnum furcatum Blume ex Maxim. など、たくさんの種類がある。ガマズミは樹高 4 m、幹径 10cm ほどになる低木で、日当たりの良い山野によく生え、しばしば根際から次々と萠芽枝がでて株立ちとなる。萠芽枝は伸びだしの時に 2 m以上になり、後にそれが太るので、ムラサキシキブ同様、通直な丸木の棒が得やすい。この材は堅く緻密で強靭で粘りがあって折れにくく、かんじきや柄類、とくにげんのうなどしなりを要する柄に特用される。

51. タニウツギ属　Weigela　スイカズラ科

写真図版 XIX-56a-c (TOM-952)

微小でやや角張った単独道管がまばらに均一に散在する散孔材で、年輪界附近でも大きさは余り変わらず、年輪界は全く目立たない。木部柔組織は少なく、ときに散在状あるいは短接線状だが、これも目立たない。道管の穿孔は数十本の横棒からなる階段状、放射組織は異性で 1 ～ 3 細胞幅、多列部から単列部への移行は不明瞭である。これらの形質からタニウツギ属の材と同定した。

日本列島にはタニウツギ属の種が幾つかあり、また、しばしば栽培されるが、北陸地方に自生するポピュラーな種はタニウツギ Weigela hortensis (Sieb. et Zucc.) K.Koch である。タニウツギは北海道の西半分から本州の日本海側を山陰地方まで分布する落葉低木で多雪地帯特有の樹種と言うことが出来る。樹高 1 ～ 3m、幹の根元径は 1 ～ 5cm ほどで、萠芽枝が根際から出て株立ちとなる。

52. ハリギリ　Kalopanax pictus (Thunb.) Nakai　ウコギ科

写真図版 XIX-57a-c (TOM-689)

保存性のあまりよくない出土材で、年輪の始めに楕円形の大道管が一層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が多数複合して接線～斜上の幅広い帯となった紋をなす環孔材で、道管の配列は一見、ニレ属やケヤキによく似る。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に配列し、内壁にはらせん肥厚はない。放射組織は２～６細胞幅の綺麗な紡錘形でほぼ同性、構成細胞は大振りで上下端の１細胞が方形細胞に近くなる。道管 - 放射組織間の壁孔は大振りな円～楕円で、間隔をおいて配列する。以上の形質からハリギリの材と同定した。ケヤキ、ニレ属からは道管にらせん肥厚がないこと、放射組織の構成細胞が大振りなこと、道管 - 放射組織間の壁孔も大振りなことなどで区別できる。

ハリギリは全国の亜寒帯から暖温帯にかけて広く分布する落葉高木で、幹径 60cm、樹高 20m になる。材は堅さ、重さとも中くらいで脆いが、光沢があって美しく、加工容易なので建築の装飾的部分、和洋家具、机、椅子、タンス、箱もの、各種調度品などに用いられる。キリ（桐）の代用ともされる。

II. 桜町遺跡の縄文時代の出土材の樹種組成

1. 縄文時代各期における森林植生と木材利用

以上、1595 点の木質遺物サンプルから 52 の樹種が同定され、そのうち、12 種については根材が、また、3 種については樹皮も識別された（表 1）。これらについて遺物の出土地域と以降の違いから、(1) 縄文中期以前、(2) 縄文中期末～後期初頭、(3) 縄文後期末～晩期前葉、(4) 縄文晩期中葉、の 4 つの時期に分けてその樹種組成を見ていくことにしよう。

(1) 縄文中期以前

第一調査区から出土した加工材 71 点、施設材 7 点、それに自然木 266 点の樹種が調べられた（表 2）。自然木ではヤマグワが 14.7%、ナラ類（コナラ節）が 12.4%、クリ 10.5%、カツラ 8.6%、トチノキとヤマウルシが 6.8%、オニグルミが 6.0%、ブナ属とカエデ属が 4.5%、トネリコ属が 3.4% となっており、その他タニウツギ属、カヤ、ヤブツバキ、ニワトコなど全部で 28 樹種がある。当遺跡は丘陵地を下刻した小谷の出口付近に位置するが、これらの樹種組成を見ると、ヤマグワ、カツラ、トチノキ、オニグルミ、トネリコ属（ヤチダモと考えられる）、タニウツギ属、ニワトコなどは沢のすぐそばによく生え、ナラ類、クリ、ヤマウルシ、ブナ属、カヤなどは沢から少し離れた斜面、尾根の方によく生える。さらに、クリ、ナラ類、ヤマウルシ、タニウツギ属、ニワトコ、フジ、ヌルデの出土は二次林的色彩が色濃く窺える。一方根材ではトチノキ、ナラ類、カツラ、モクレン属、ニレ属、エゴノキ属があり、エゴノキ属を除いては枝幹材も比較的多く出土しており、これらの樹種が遺跡周辺直ぐ近くに生育していたことは間違いない。

このようなことから、出土自然木の樹種組成からは、当時の当遺跡があった谷では、斜面上部の方にブナやナラなど落葉樹の自然林があり、それはおそらくは人為による伐採などにより一部二次

林化しクリなどがやや多く生育し、沢のすぐそばではトチノキ、ヤマグワ、オニグルミなどが目立つ林があり、またその部分も一部二次林化してタニウツギやニワトコなどが増えていたと考えられる。ヤブツバキが4点出土しているが、これが母種のヤブツバキなのか、あるいは変種のユキツバキなのかは判断がつかない。

このような森林植生の下で利用された木材を見て行くと、圧倒的にクリが多いことが分かる。クリは丸太材や分割材、板材などとともに施設材（柱根）として使われている。それ以外ではナラ類、カツラ、オニグルミ、ヤマグワ、トネリコ属、イヌガヤなどであり、遺跡周辺から調達された木材であると言える。なお、自然木でウルシが検出されており、当遺跡に於いてかなり早い時期からのウルシの植栽があったことを示していると考えられる。

(2) 縄文中期末～後期初頭

この時期の木質遺物は自然木が239点、加工材451点、器具材64点、構築材10点、施設材103点、合計867点が調べられた（表3）。

自然木ではクリが37.3%を占め、次いで、トチノキ(8.1%)、カツラ(6.4%)、ヤマグワとニワトコ(3.4%)、ナラ類とカエデ属（3.0%）、イヌエンジュ（2.5%）などで、根材を除くと合計31樹種が検出された。根材ではトチノキが15点あり、その他、トネリコ属、カツラ、ヤナギ属、ハンノキ類があり、いずれも遺跡の谷底周辺の水湿の多いところに生育していたものに由来すると考えられる。これらのことから、遺跡周辺のこの時期の森林植生は上述の縄文中期以前の様相と種類組成の上では基本的には変わらないが、クリが大きな位置を占めるようになることが歴然としていると言える。

加工材451点の内容は丸木材、半割材、分割材、板目板、柾目板などである。それらの加工材の約4分の3をクリが占めている。ついで、スギとオニグルミ（14点、3.1%）、イヌガヤ（11点、2.4%）、ナラ類（9点、2.0%）、トチノキ、カツラ（8点、1.8%）と極端に少なくなり、その他様々な樹種がわずかずつある。このように住居や土木用材などに使われたかあるいはそれに使うために集められた木材と思われるものは圧倒的にクリ材で、他の樹種はわずかであることに大きな特徴がある。これは構築材、施設材では更に明瞭で、構築材（柱根）では10点全てが、施設材（足場材、水場の柱、板材）では103点のうち100点がクリ材であり、土木、建築用材が第一義的にクリであったことが歴然としている。

表4はこの時期の器具材の一覧であるが、器具材となると実に多様な樹種選択が働いていたことが分かる。石斧柄は18点あり、うち7点がヤブツバキ、5点がナラ類、3点がクマノミズキ類で、他にトネリコ属、ナシ亜科、ミズキが各1点である。また、当遺跡では石斧を押さえるパーツも出土し、石斧の装着・結束の様子をはっきりと知ることが出来た貴重な例だが、押さえ具3点のうち2点がクマノミズキ類、1点がミズキであり、石斧柄本体と同じ樹種が使われたと考えるのが妥当だろう。ヤブツバキは材が極めて硬く緻密で粘りがあり、大きな打撃力に応える樹種選択であると言える。なお、変種のユキツバキが使われたのではないかとの疑問も起きうるが、低木のユキツバキでは石斧柄にするだけの直径が得にくいと考えられる。また、クマノミズキ類とミズキ材の石斧柄が少なからずあるが、これも硬く強い材質にあった樹種選択と言えるが、その中でも、ヤマボウ

シは最も強靱で柄に適した材と言える一方、ミズキはそのような点では劣ることから、最適樹種の選択とその代用が同じ仲間で見られるのかもしれない。さて、このような石斧柄の使用樹種は、よく知られている鳥浜貝塚遺跡の縄文時代前期のそれとは大きく異なる。鳥浜貝塚遺跡では出土した石斧柄の7割がユズリハ属で、次いでクマノミズキ類、ヤブツバキ、スダジイ、カエデ属があげられている。桜町同様、クマノミズキ類、ヤブツバキも使われているが、これらは軽軟でむしろ石斧には余り適していないのではないかと考えられたユズリハ属の柄が主に伐採用具と考えられる「柄鋭角型1類」(網谷克彦、鳥浜貝塚研究1、1996) と区分されるのとは違った器形をしており、明確な樹種の使い分けがされていた。本遺跡出土の石斧柄も主として伐採用と考えられるものも多くあり、それらが鳥浜貝塚遺跡では伐採用に余り選ばれない樹種であることの意味は不明である。

刳物などの容器は13点出土しており、そのうち、9点には漆塗りが施されていた。木地の樹種はケヤキが6点、トチノキが5点で、その他イヌガヤ、カエデ属がある。ケヤキ、トチノキとも現在までつながる木地利用である。堀棒は5点あり、全てムラサキシキブ属である。鳥浜貝塚遺跡では「尖り棒（弓2類)」(網谷1996) と区分された片側が偏平、反対側が尖ったまっすぐな棒の大部分がこの樹種で、堀棒とも考えられた（鈴木三男、日本人と木の文化、2002)。この属の最も普遍的な種であるムラサキシキブは樹種の記載の項に触れているように、低木だが根元からまっすぐな萠芽枝が出て2mほどになる。これは3～5年で2～4cmほどの丸棒状になる。日当たりのよい林縁などにある個体で古い幹を根元から伐り去ると元気の良い萠芽枝がすっと伸びてくる。出土材はこのようなものが堀棒に使われたと考えることが出来る。

明確に弓と認定されたものは1点のみでこれはニシキギ属（おそらくはマユミ）であった。丸木弓と認定されたものはないがその素材ではないかと考えられる丸木棒が14点出土しており、12点がイヌガヤ、あとはカヤとニレ属であった。農・土木用具と思われる鍬状品が3点出土しており、クリが2点でヤマグワが1点であった。削りだし材とは大材の一部が細棒状に削って調整されたものでいずれもスギである。スギは縄文時代以来、本州日本海側には普通の樹種であったと考えられ、当遺跡でももっと多くの出土、利用が期待されても良かったのだが、実際は出土量は少ない。その他、ヤマグワの楔が1点、クマノミズキ類の砧状が1点出土している。これらがその用途に使われたとしたら材質にあった選択と言える。

(3) 縄文後期末～晩期前葉

この時期の加工材が84点、施設材が199点、器具材が2点出土している（表5)。

加工材ではクリが39点と半分近くを占め、枝材、半割材、ミカン割り材、板目板、木片、樹皮などである。次いで多いのはトチノキで丸木材、半割材、ミカン割り材、それに樹皮である。その他オニグルミ、スギ、ナラ類、イヌガヤなど8樹種の材が使われている。

器具材は2点で、1点はカマツカの編み錘状の木塊で、もう1点はゴンズイの石斧の留め具である。前者は手近にあった材を、後者は材が重硬緻密で割れにくい性質に合った利用と言える。

施設材とされたものは貯蔵穴及び水場遺構の構成材で、199点のうち木材は151点で樹皮が48点である。木材のうち100点がクリで、それ以外に20もの樹種が少しずつ使われている。一方樹

皮はトチノキ27点、クリ17点、ケヤキ4点が同定されその他広葉樹樹皮としか同定できなかったものもある。これら貯蔵穴及び水場の施設材を部位で見たのが表6である。貯蔵穴では蓋材148点のうちクリの木材が59点（39.9%）、樹皮が17点（11.5%）、トチノキの樹皮が19点（12.8%）、材が8点（5.4%）で、この両樹種で7割を占める。他にヤマグワ、ガマズミ属、ムラサキシキブ属、ナラ類など様々な樹種があり、低木などでは枝を、あるいは葉がついたまま使ったものかと考えられる。一方貯蔵穴側面の枠材にはやはりクリがほとんどでその他の材の利用は少ない。足場材、底板は1点づつでいずれもクリであった。

水場は掘り込んだところを杭と側板で安定させるものだが、その杭、枠材ともほとんどクリで出来ており、クリの水湿に強い性質を活用している。

(4) 縄文晩期中葉

この時期の木材は加工材44点と構築材15点のみで、構築材は円形木柱列の半截柱であり、また加工材はその半截柱の根がらみ材である。半截柱は全てクリで、根がらみもほとんどがクリである。

2. 出土材の結果から見た桜町遺跡の縄文時代の森林植生と植物利用

以上見てきたように桜町遺跡から出土した木質遺物1600点ほどから52の樹種が同定された。そのうち、縄文時代中期以前及び縄文中期末～後期初頭の二つの時期については自然木がそれぞれ265点と239点が得られ、それらから、遺跡周辺の丘陵斜面にはクリ、コナラ、ナラガシワなどのナラ類、ブナなどが、遺跡のある谷沿いにはカツラ、トチノキ、オニグルミ、トネリコ属、サワグルミ、モクレン属などの高木層からなる林があり、それにはスギ、カヤなどがまれに混じり、ヤマグワ、カエデ属、イヌエンジュ、イヌガヤ、ヤブツバキなどの小高木、ヤマウルシ、ニシキギ属、ニワトコ、タニウツギ属などの低木が生え、フジ、ツルアジサイ、イワガラミなどが木にからみついていた林相が推定される。部分的には樹木の伐採により二次林化し、クリ、エノキ属、ナラ類、ヤマウルシなどが多めであったと思われる。

このような林から人びとは目的に応じた樹種選択を行うとともに遺跡の隆盛につれて植生に干渉し、結果的にクリの非常に多い森を作っていったと考えることができる。これは縄文中期以前と以後とを比べてクリの占める割合が10.5%から37.3%にまで急増していることから分かる。こうした中で人びとは周囲及び遠隔地から用途に応じた木材を調達して利用し、また、植生に積極的に関与して必要な植物資源を得ていたと考えられる。本遺跡の木材利用を見た時、他の東日本の縄文時代遺跡と共通することであるが、それでも特に目を引くのは圧倒的なクリへの依存度の高さである。建築、構造、施設のほとんど全てといって良いほどがクリでまかなわれている。遺跡は丘陵地を開析した小谷の出口付近にあり、周囲の斜面の傾斜は緩くない。勿論それらの斜面はクリが生えるのに問題はないが、遺跡直近のこれら斜面でここで使われたクリが全て調達されたとは考えにくく、遺跡を中心として広範囲のクリ資源が使われたと考えるのが妥当であろう。そして、新潟県の青田遺跡など、他の遺跡では縄文晩期に向けてクリの比重が下がり、ナラ類やクヌギ類などへのシフトが見られるのが普通であるが、ここでは縄文時代を通してクリへの依存の高さが改めて目を引く。

クリ以外に本遺跡出土材の樹種組成で他の類似遺跡と顕著な対照を見せる点がいくつかある。木質遺物を豊富に出土する縄文遺跡は基本的に低湿地性であることによりそれらの保存がなされたので、低湿地性の樹木が自然木に多く含まれるのが普通である。ところが本遺跡では低湿地に普通でそのような立地の遺跡からの出土が多いトネリコ属、ハンノキ類、ヤナギ属、クヌギ類（クヌギ節）の量が非常に少ない特徴がある。これは本遺跡が狭い小谷底にあり、広範に滞水して湿地林を形成するような場所ではないことによるものだろう。特にクヌギ類は自然木としてだけでなく、加工木としても比較的よく利用されてしかるべきだが、この遺跡では非常に少ない。その原因はクヌギが北陸地方にはもともと余り生育していなかったことによると思われるが、一方でクヌギは縄文人が木材利用と食料利用のために分布域を拡げた可能性が考えられ、桜町遺跡を始めとする北陸でなぜ拡まるようなことがなかったのか、今後の課題である。

表 1.　富山県小矢部市桜町遺跡から出土した縄文時代の木質遺物の樹種

樹　種	RB	縄文中期末以前				縄文中期末～後期初頭						縄文後期末～晩期前葉				縄文晩期中葉			縄文以降	総計
		加工材	施設材	自然木	小計	加工材	器具材	構築材	施設材	自然木	小計	加工材	器具材	施設材	小計	加工材	構築材	小計	器具材	
アカマツ																1		1		1
スギ				1	1	14	3			4	21	3			3				3	28
イヌガヤ		2	1	3	6	11	13			5	29	2			2					37
カヤ		1		4	5		1			2	3									8
オニグルミ		3		16	19	14			1	5	20	3		3	6					45
オニグルミ	R											1			1					1
サワグルミ										4	4									4
ヤナギ属	R									1	1									1
ハンノキ属ハンノキ節				1	1	1			1		2									3
ハンノキ属ハンノキ節	R		1		1					1	1									2
クマシデ属クマシデ節						1					1									1
アサダ						1					1									1
クリ		35	4	28	67	335	3	10	100	88	536	39		100	139	42	15	57		799
クリ	R					3					3									3
クリ	B									2	2	3		17	20					22
ブナ属		2		12	14	1				1	2									16
コナラ属クヌギ節						2					2									2
コナラ属コナラ節		5		33	38	9	5			7	21	2		3	5					64
コナラ属コナラ節	R			3	3															3
ムクノキ						3					3			1	1					4
エノキ属		1	1		2	3				3	6			1	1					9
ニレ属				3	3	1	1			1	3									6
ニレ属	R			1	1															1
ケヤキ						1	6				7			2	2				1	10
ケヤキ	B											1		4	5					5
ヤマグワ		3		39	42	2	2			8	12			6	6	1		1		61
モクレン属		2			2	1				4	5									7
モクレン属	R	1		1	2															2
クスノキ科						1					1									1
カツラ		5		23	28	8				15	23	1		1	2					53
カツラ	R			3	3					1	1									4
ヤブツバキ				4	4	2	8			2	12									16
ツルアジサイ				1	1															1
カマツカ													1	3	4					4
サクラ属										2	2									2
サクラ属	R	1			1															1
ナシ亜科							1				1									1
ネムノキ										1	1									1
ハギ属						1					1									1
イヌエンジュ						3				6	9									9
フジ				3	3	1			1	2	4			1	1					8
ヤマウルシ		2		18	20	2				3	5									25
ウルシ				2	2	1					1			1	1					4
ウルシ属				1	1					2	2									3
ヌルデ				2	2	2					2									4
チドリノキ				1	1									1	1					2
カエデ属		2		12	14	5	1			7	13	1		2	3					30
トチノキ		2		18	20	8	5			19	32	15		8	23				1	76
トチノキ	R			8	8					15	15	3		2	5					28
トチノキ	B									1	1	9		27	36					37
ニシキギ属				2	2		1			3	4									6
ゴンズイ													1	2	3					3
ミツバウツギ										2	2									2
ケンポナシ属						1					1			1	1					2
キブシ										1	1									1
ミズキ				1	1		2				2									3
クマノミズキ類						2	6			1	9			1	1					10
エゴノキ属						1					1									1
エゴノキ属	R			1	1															1
トネリコ属		3		9	12	3	1			4	8			3	3					23
トネリコ属	R									4	4									4
ムラサキシキブ属						3	5			2	10			4	4					15
ニワトコ				4	4	2				8	10			1	1					15
ガマズミ属				1	1					1	1	1		4	5					7
タニウツギ属		1		6	7	2				1	3									10
ハリギリ				1	1															1
小　計		71	7	265	343	451	64	10	103	239	867	84	2	199	285	43	15	58	5	1559
広葉樹	B			2	2	3					3	3		7	10	1		1		16
同定不可		2		5	7	2	2			3	7			8	8	1		1		23
総　計		73	7	272	352	456	66	10	103	242	877	87	2	214	303	45	15	60	5	1598

RB:R= 根材，B= 樹皮

表 2.　富山県小矢部市桜町遺跡出土縄文時代中期以前の木質遺物の樹種組成

樹　種	RB	加工材	施設材	小計	(%)	自然木	(%)	合計
クリ		35	4	39	50.0	28	10.5	37
コナラ属コナラ節		5		5	6.4	33	12.4	38
カツラ		5		5	6.4	23	8.6	28
ヤマグワ		3		3	3.8	39	14.7	42
オニグルミ		3		3	3.8	16	6.0	19
トネリコ属		3		3	3.8	9	3.4	12
イヌガヤ		2	1	3	3.8	3	1.1	6
ヤマウルシ		2		2	2.6	18	6.8	20
トチノキ		2		2	2.6	18	6.8	20
ブナ属		2		2	2.6	12	4.5	14
カエデ属		2		2	2.6	12	4.5	14
エノキ属		1	1	2	2.6			2
モクレン属		2		2	2.6			2
タニウツギ属		1		1	1.3	6	2.3	7
カヤ		1		1	1.3	4	1.5	5
ヤブツバキ						4	1.5	4
ニワトコ						4	1.5	4
ニレ属						3	1.1	3
フジ						3	1.1	3
ウルシ						2	0.8	2
ヌルデ						2	0.8	2
ニシキギ属						2	0.8	2
スギ						1	0.4	1
ハンノキ属ハンノキ節						1	0.4	1
ツルアジサイ						1	0.4	1
ウルシ属						1	0.4	1
チドリノキ						1	0.4	1
ミズキ						1	0.4	1
ガマズミ属						1	0.4	1
ハリギリ						1	0.4	1
トチノキ	R					8	3.0	8
コナラ属コナラ節	R					3	1.1	3
カツラ	R					3	1.1	3
モクレン属	R	1		1	1.3	1	0.4	2
ニレ属	R					1	0.4	1
エゴノキ属	R					1	0.4	1
ハンノキ属ハンノキ節	R		1	1	1.3			1
サクラ属	R	1		1	1.3			1
小　計		71	7	78		266		344

表３　富山県小矢部市桜町遺跡出土縄文時代中期末～後期初頭の木質遺物の樹種組成

樹　種	RB	加工材	器具材	構築材	施設材	小計	(%)	自然木	(%)	合　計
クリ		335	3	10	100	448	71.6	88	37.3	536
イヌガヤ		11	13			24	3.9	5	2.1	29
スギ		14	3			17	2.9	4	1.7	21
オニグルミ		14			1	15	2.3	5	2.1	20
コナラ属コナラ節		9	5			14	2.4	7	3.0	21
トチノキ		8	5			13	2.0	19	8.1	32
ヤブツバキ		2	8			10	1.5	2	0.8	12
カツラ		8				8	1.2	15	6.4	23
ムラサキシキブ属		3	5			8	1.4	2	0.8	10
クマノミズキ類		2	6			8	1.2	1	0.4	9
ケヤキ		1	6			7	1.1			7
カエデ属		5	1			6	0.9	7	3.0	13
ヤマグワ		2	2			4	0.6	8	3.4	12
トネリコ属		3	1			4	0.6	4	1.7	8
イヌエンジュ		3				3	0.5	6	2.5	9
エノキ属		3				3	0.5	3	1.3	6
ムクノキ		3				3	0.5			3
ニワトコ		2				2	0.3	8	3.4	10
ヤマウルシ		2				2	0.3	3	1.3	5
フジ		1			1	2	0.3	2	0.8	4
ニレ属		1	1			2	0.3	1	0.4	3
タニウツギ属		2				2	0.3	1	0.4	3
ハンノキ属ハンノキ節		1			1	2	0.3			2
コナラ属クヌギ節		2				2	0.3			2
ヌルデ		2				2	0.5			2
ミズキ			2			2	0.3			2
モクレン属		1				1	0.2	4	1.7	5
ニシキギ属			1			1	0.2	3	1.3	4
カヤ			1			1	0.2	2	0.8	3
ブナ属		1				1	0.2	1	0.4	2
クマシデ属クマシデ節		1				1	0.2			1
アサダ		1				1	0.2			1
クスノキ科		1				1	0.2			1
ナシ亜科			1			1	0.2			1
ハギ属		1				1	0.2			1
ウルシ		1				1	0.2			1
ケンポナシ属		1				1	0.2			1
エゴノキ属		1				1	0.2			1
サワグルミ								4	1.7	4
サクラ属								2	0.8	2
ウルシ属								2	0.8	2
ミツバウツギ								2	0.8	2
ネムノキ								1	0.4	1
キブシ								1	0.4	1
ガマズミ属								1	0.4	1
トチノキ	R							15	6.4	15
トネリコ属	R							4	1.7	4
クリ	R	3				3	0.5			3
ヤナギ属	R							1	0.4	1
ハンノキ属ハンノキ節	R							1	0.4	1
カツラ	R							1	0.4	1
クリ	B							2		2
トチノキ	B							1		1
合　計		451	64	10	103	628		239		867

表 4.　富山県小矢部市桜町遺跡出土縄文時代の器具材の樹種

標本番号	樹　種	器　種	木取り等	備　考	出土調査区	遺構
縄文中期末～後期初頭						
TOM- 1492	クマノミズキ類	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	SD06
TOM- 1561	クマノミズキ類	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	SD06
TOM- 1955	クマノミズキ類	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	SX13
TOM- 868	コナラ節	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品	第1調査区	SD06
TOM- 869	コナラ節	石斧柄	枝幹材	未成品，	第1調査区	SD06
TOM- 1490	コナラ節	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	SX13
TOM- 1956	コナラ節	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品	第1調査区	SX13
TOM- 1965	コナラ節	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	SD06
TOM- 1532	トネリコ属	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品	第1調査区	
TOM- 870	ナシ亜科	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品	第1調査区	SD06
TOM- 1948	ミズキ	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	
TOM- 867	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	完成品	第1調査区	SD06
TOM- 871	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品，	第1調査区	SD06
TOM- 1358	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品	第1調査区	SX04
TOM- 1491	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	SD06
TOM- 1530	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	完成品の欠損品	第1調査区	SD06
TOM- 1592	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	未成品	第1調査区	
TOM- 1990	ヤブツバキ	石斧柄	枝幹材	石斧柄の未成品か	第1調査区	SX05
TOM- 1987	クマノミズキ類	石斧柄押さえ具		完成品の欠損品	第1調査区	SD06
TOM- 1988	クマノミズキ類	石斧柄押さえ具		完成品	第1調査区	SD06
TOM- 1967	ミズキ	石斧留め具	不明	完成品	第1調査区	SX02
TOM- 1595	トチノキ	片口鉢	縦木取り	未成品	第1調査区	SD135
TOM- 856	イヌガヤ	刳り物	縦木取り	赤色漆塗布。片口付き。完成品の欠損品	第1調査区	SD06
TOM- 1951	カエデ属	刳り物		容器の口縁部か?	第1調査区	SD05
TOM- 854	ケヤキ	刳り物	横木取り	把手付き赤色漆塗鉢	第1調査区	SD135
TOM- 1507	ケヤキ	刳り物	縦木取り	赤色漆塗布	第 6 調査区	SG01
TOM- 1508	ケヤキ	刳り物		赤色漆塗布	第 6 調査区	SK26
TOM- 1509	ケヤキ	刳り物		赤色漆塗布	第1調査区	SD06
TOM- 1989	ケヤキ	刳り物		赤色漆塗布	第1調査区	SD06
TOM- 1474	トチノキ	刳り物	横木取り	大型容器か	第1調査区	SD06
TOM- 1506	トチノキ	刳り物		赤色漆高杯脚部か?	第1調査区	
TOM- 1972	トチノキ	刳り物	板目板	大型容器か	第1調査区	SD06
TOM- 1968	ケヤキ	漆器	横木取り	完成品の欠損品、底部	第1調査区	X51.8Y85.3
TOM- 1985	トチノキ	漆器	不明	完成品の欠損品、口縁部	第1調査区	SD05
TOM- 35	ムラサキシキブ属	堀棒	丸木材	完成品の欠損品	第 1 調査区	SX02
TOM- 332	ムラサキシキブ属	堀棒	丸木材	完成品の欠損品	第1調査区	SX02
TOM- 858	ムラサキシキブ属	堀棒	丸木材	完成品	第 6 調査区	SG01
TOM- 859	ムラサキシキブ属	堀棒	丸木材	完成品	第1調査区	SD06
TOM- 1975	ムラサキシキブ属	堀棒		完成品の欠損品	第1調査区	SX11
TOM- 855	ニシキギ属	弓	丸木材	完成品。一部欠損	第1調査区	SX13
TOM- 1992	イヌガヤ	素材	丸木材		第1調査区	
TOM- 872	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 873	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 1573	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 1575	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 1957	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 1958	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SX04
TOM- 1959	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	不明
TOM- 1960	イヌガヤ	素材・曲棒	丸木材		第1調査区	SX13
TOM- 1583	イヌガヤ	素材・直棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 1961	イヌガヤ	素材・直棒	丸木材		第1調査区	SD138
TOM- 1962	イヌガヤ	素材・直棒	丸木材		第1調査区	SX04
TOM- 1489	カヤ	素材・直棒	丸木材		第1調査区	SD06
TOM- 1593	ニレ属	素材・直棒	丸木材	18 本	第1調査区	SX13
TOM- 1950	ヤマグワ	楔	柾目材		第1調査区	SD06
TOM- 1986	クマノミズキ類	その他（きぬた状）	削りだし材	未成品か	第1調査区	SD06
TOM- 861	クリ	鋤状品		完成品の欠損品	第1調査区	SD06
TOM- 331	クリ	鋤状品・土堀具	板目板	完成品の欠損品	第1調査区	SX01
TOM- 1514	ヤマグワ	鋤状品		未成品か	第1調査区	
TOM- 160	クリ	削りだし材			第1調査区	SX02
TOM- 1980	スギ	削りだし材	丸木材	完成品の欠損品	第1調査区	SP65
TOM- 1981	スギ	削りだし材	半割材	完成品の欠損品	第1調査区	
TOM- 1982	スギ	削りだし材	分割材		第1調査区	
縄文後期末～晩期前葉						
TOM- 1801	カマツカ	編錘状木製品	偏半割材	両端切断痕。縄かけ突起。	第3調査区	SK171
TOM- 1664	ゴンズイ	石斧留め具	偏半割材	縄かけ部に紐の断片残	第3調査区	SK260

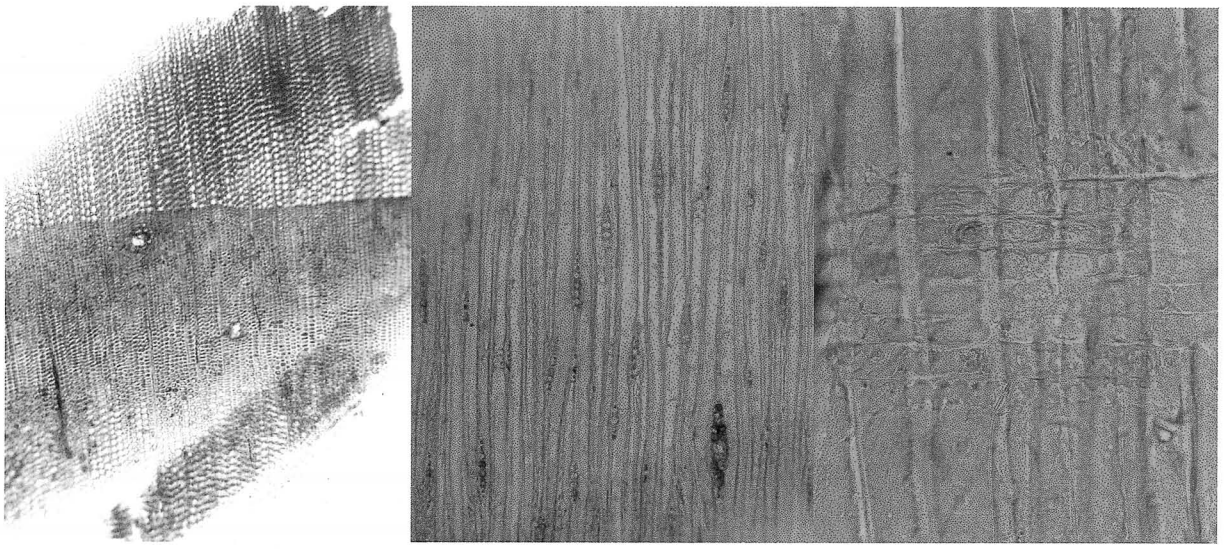
表 5.　富山県小矢部市桜町遺跡出土縄文時代後期以降の木質遺物の樹種組成

樹　種	RB	縄文後期末～晩期前葉 加工材	器具材	施設材	小計		縄文晩期中葉 加工材	構築材	小計	縄文以降 器具材
クリ		39		100	139	48.8	42	15	57	
トチノキ		15		8	23	8.1				1
ヤマグワ				6	6	2.1	1		1	
オニグルミ		3		3	6	2.1				
コナラ属コナラ節		2		3	5	1.8				
ガマズミ属		1		4	5	1.8				
カマツカ			1	3	4	1.4				
ムラサキシキブ属				4	4	1.4				
カエデ属		1		2	3	1.1				
ゴンズイ			1	2	3	1.1				
トネリコ属				3	3	1.1				
スギ		3			3	1.1				3
イヌガヤ		2			2	0.7				
カツラ		1		1	2	0.7				
ケヤキ				2	2	0.7				1
エノキ属				1	1	0.4				
ムクノキ				1	1	0.4				
フジ				1	1	0.4				
ウルシ				1	1	0.4				
チドリノキ				1	1	0.4				
ケンポナシ属				1	1	0.4				
クマノミズキ類				1	1	0.4				
ニワトコ				1	1	0.4				
アカマツ							1		1	
トチノキ	R	3		2	5	1.8				
オニグルミ	R	1			1	0.4				
トチノキ	B	9		27	36	12.6				
クリ	B	3		17	20	7.0				
ケヤキ	B	1		4	5	1.8				
小　計		84	2	199	285		44	15	59	5

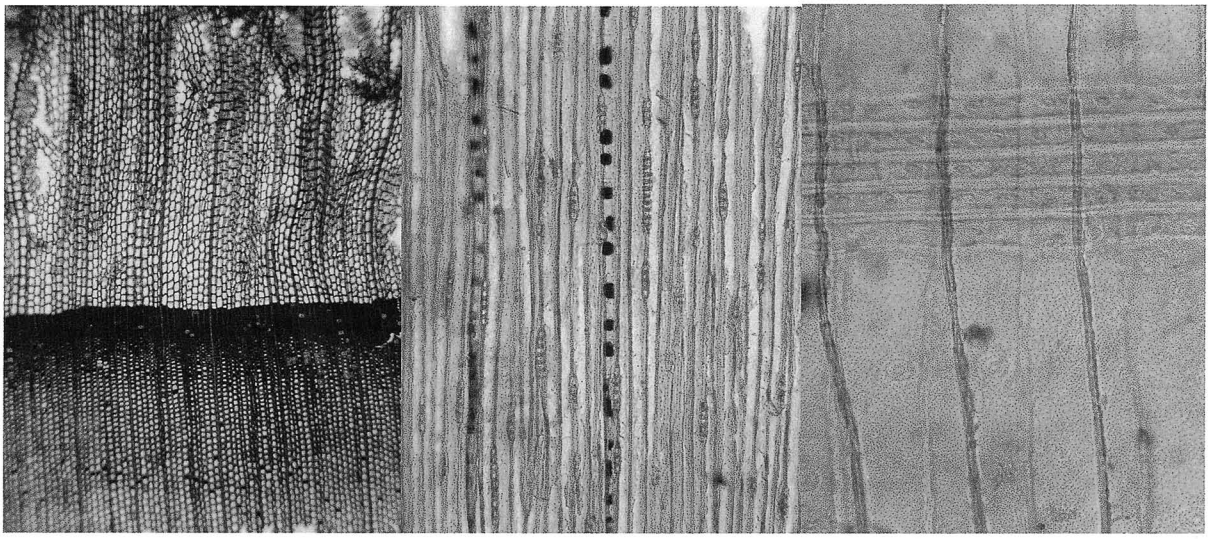
表 6.　富山県小矢部市桜町遺跡の縄文後期～晩期前葉の施設遺構構成材の樹種

樹種	BR	貯蔵穴遺構 蓋材	(%)	足場	底板	枠材	小計	(%)	水場遺構 杭	枠材	小計	合計
クリ		59	39.9	1	1	21	82	44.1	12	6	18	100
トチノキ	B	19	12.8			8	27	14.5				27
クリ	B	17	11.5				17	9.1				17
トチノキ		8	5.4				8	4.3				8
広葉樹	B	6	4.1			1	7	3.8				7
ヤマグワ		4	2.7			2	6	3.2				6
ガマズミ属		4	2.7				4	2.2				4
ムラサキシキブ属		4	2.7				4	2.2				4
ケヤキ	B	4	2.7				4	2.2				4
コナラ節		3	2.0				3	1.6				3
トネリコ属		3	2.0				3	1.6				3
オニグルミ		1	0.7			2	3	1.6				3
カマツカ		2	1.4				2	1.1		1	1	3
カエデ属		2	1.4				2	1.1				2
ケヤキ		2	1.4				2	1.1				2
ゴンズイ		2	1.4				2	1.1				2
トチノキ	R	1	0.7			1	2	1.1				2
ウルシ		1	0.7				1	0.5				1
エノキ属		1	0.7				1	0.5				1
クマノミズキ類		1	0.7				1	0.5				1
チドリノキ		1	0.7				1	0.5				1
ニワトコ		1	0.7				1	0.5				1
フジ		1	0.7				1	0.5				1
ムクノキ		1	0.7				1	0.5				1
ケンポナシ属						1	1	0.5				1
カツラ										1	1	1
総計		148		1	1	36	186		12	8	20	206

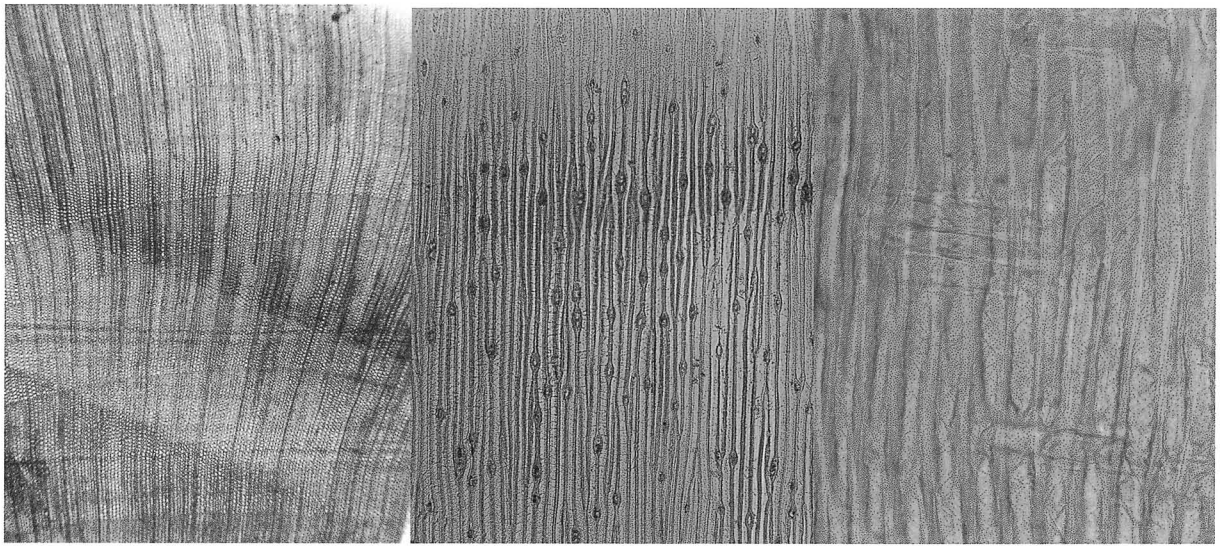
BR:B= 樹皮，R= 根材



1a. アカマツ　TOM-1703. 木口×24.　　1b.　同　板目×60.　　1c.　同　柾目×240.

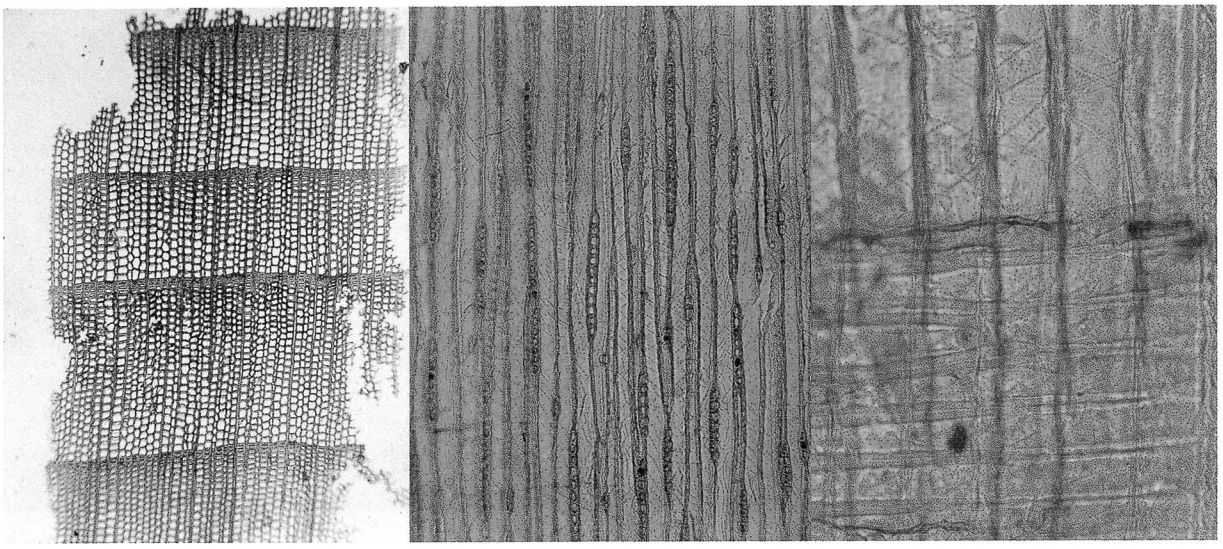


2a. スギTOM-905. 木口×24.　　2b.　同　板目×60.　　2c.　同　柾目×240.

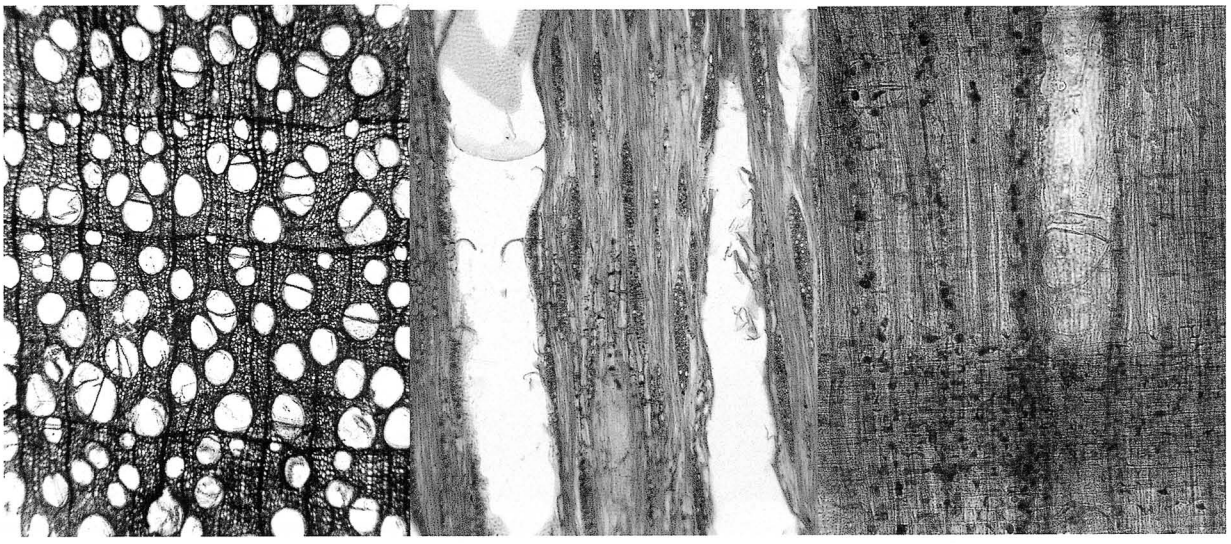


3a. イヌガヤ　TOM-112. 木口×24.　　3b.　同　板目×60.　　3c.　同　柾目×240.

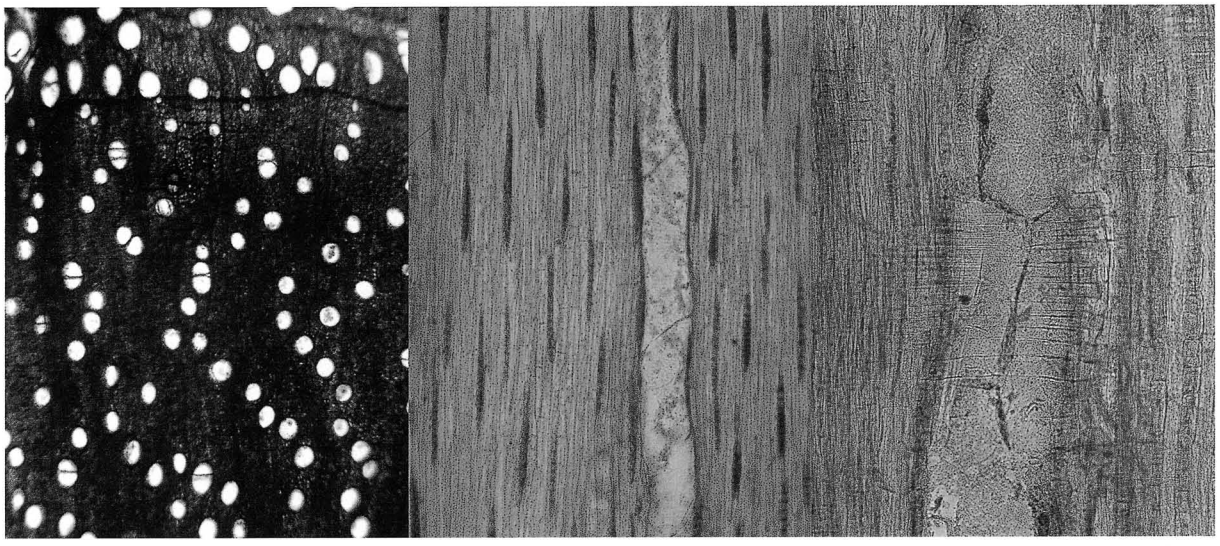
写真図版Ⅰ



4a. カヤ　TOM-794. 木口×24.　　4b.　同　板目×60.　　4c.　同　柾目×240.

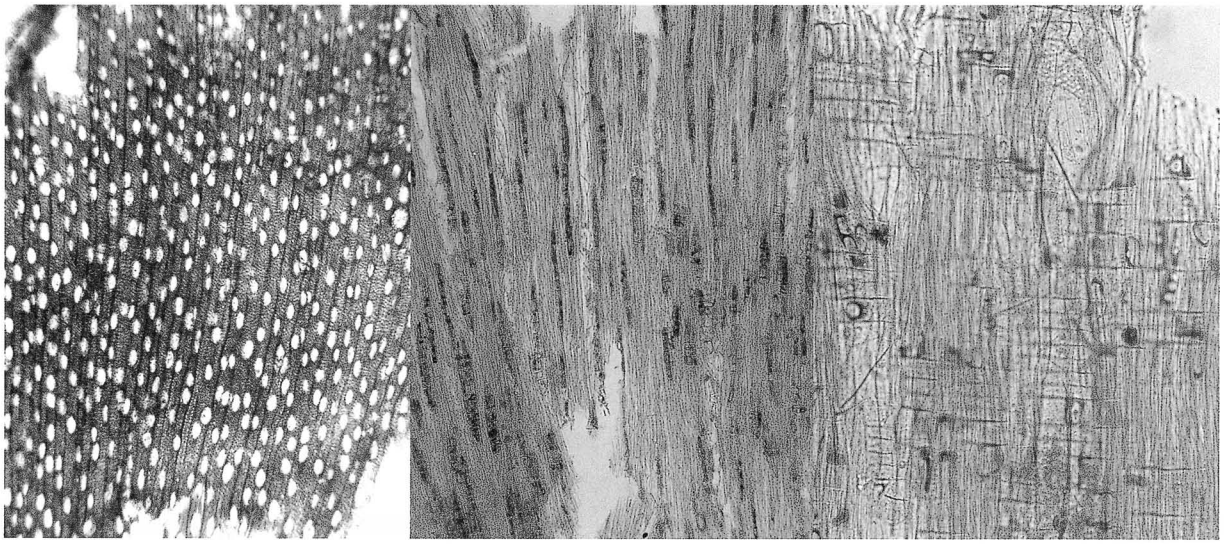


5a. オニグルミTOM-235. 木口×24.　　5b.　同　板目×60.　　5c.　同　柾目×120.



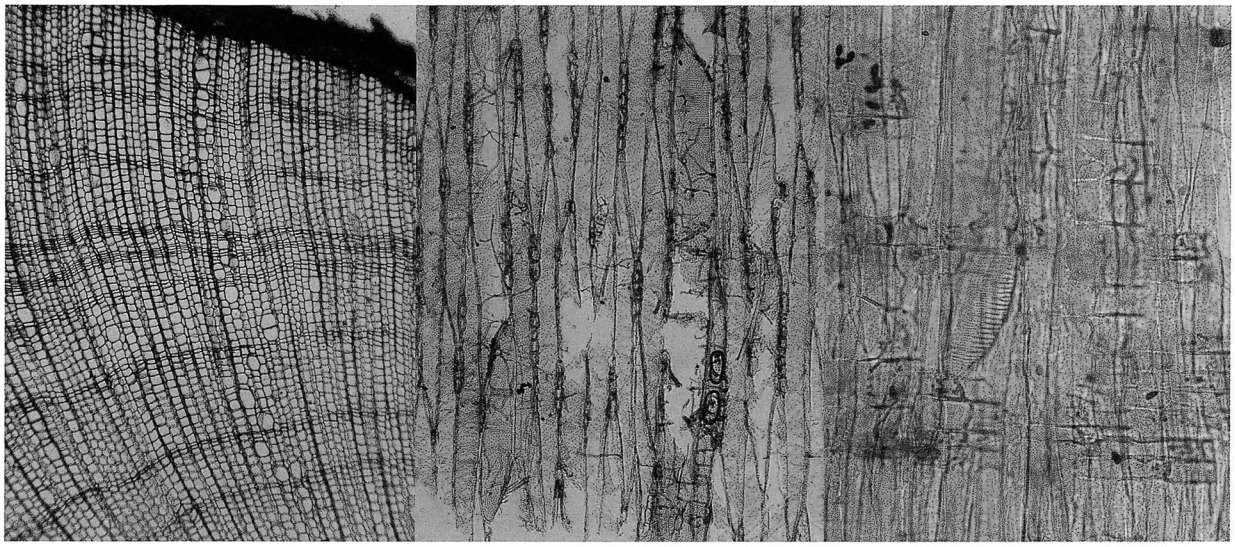
6a. サワグルミ　TOM-489. 木口×24.　　6b.　同　板目×60.　　6c.　同　柾目×120.

写真図版Ⅱ



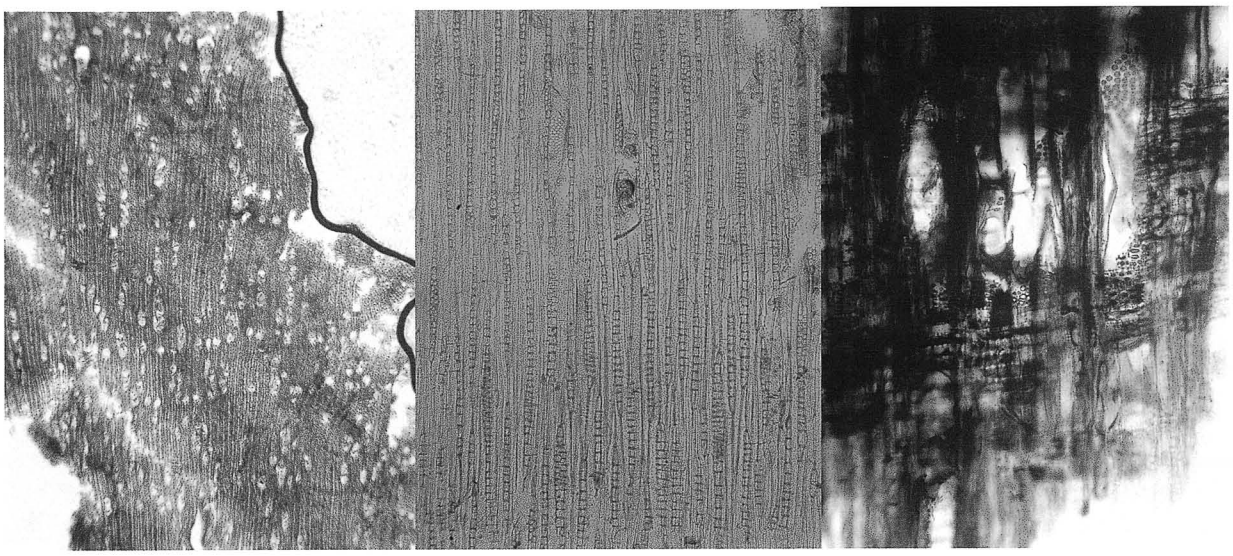
7a. ヤナギ属根材TOM-449. 木口×24.　7b. 同　板目×60.　7c. 同　柾目×120.

8a. ハンノキ節TOM-141. 木口×24.　8b. 同　板目×60.　8c. 同　柾目×120.



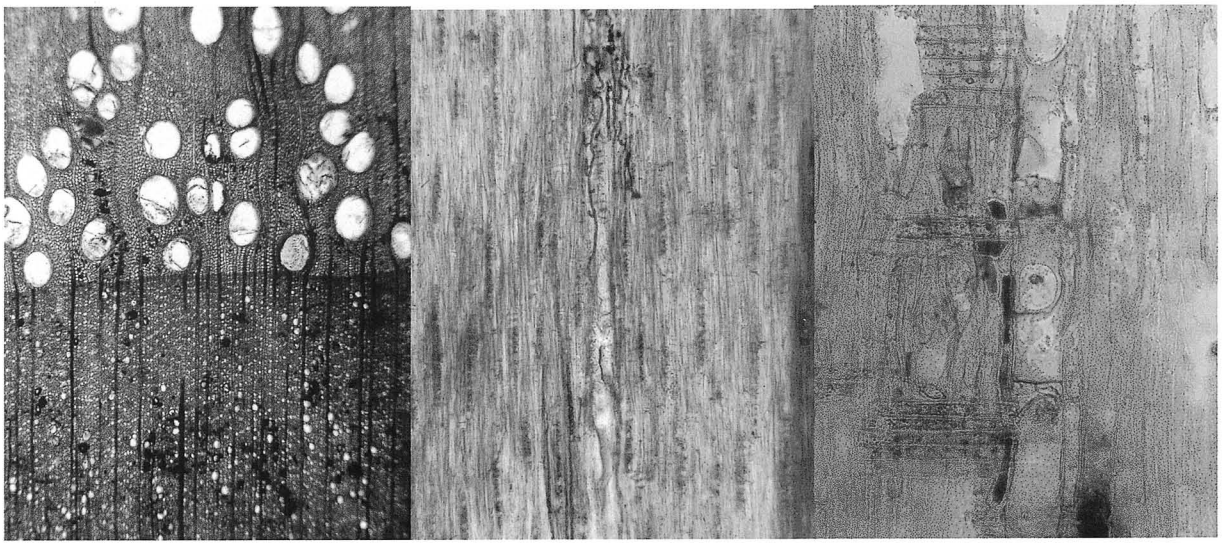
9a. ハンノキ節根材TOM-265. 木口×24.　9b. 同　板目×60.　9c. 同　柾目×120.

写真図版Ⅲ



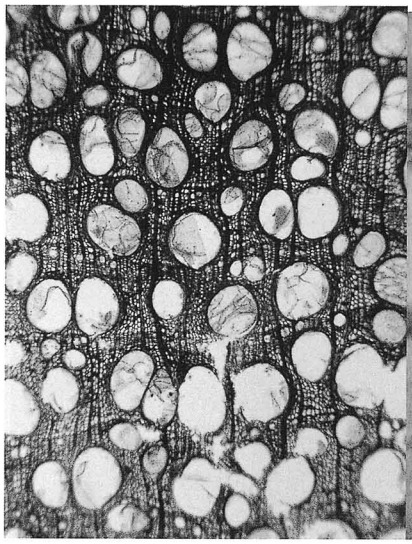
10a. クマシデ節TOM-173. 木口×24.　10b. 同　板目×60.　10c. 同　柾目×120.

11a. アサダTOM-37. 木口×24.　11b. 同　板目×60.　11c. 同　柾目×120.



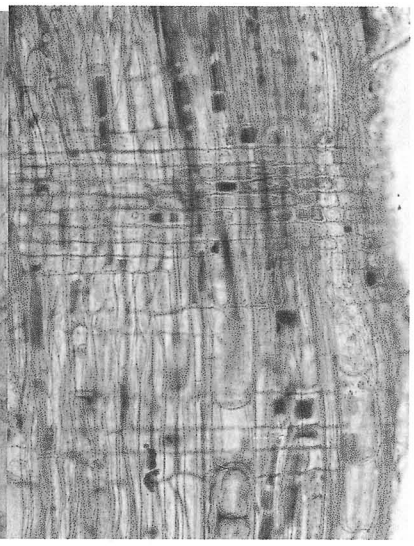
12a. クリTOM-1851. 木口×24.　12b. 同　板目×60.　12c. 同　柾目×120.

写真図版Ⅳ

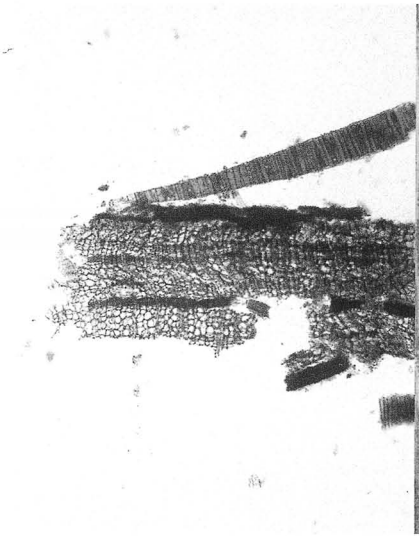


13a. クリ根材TOM-347. 木口×24.

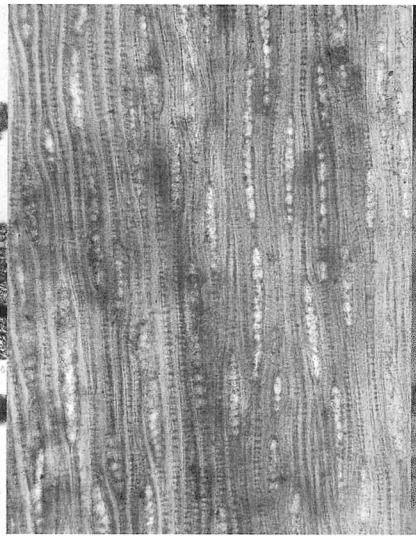
13b. 同　板目×60.



13c. 同　柾目×120.

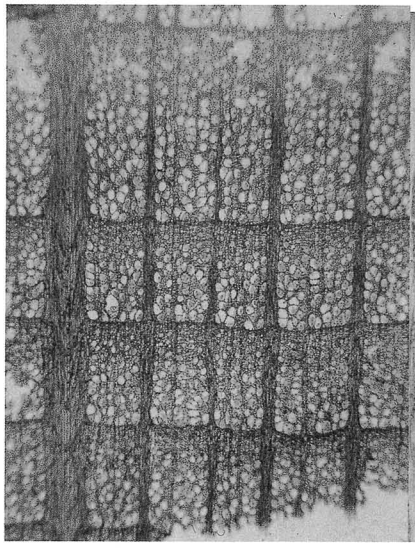


14a. クリ樹皮TOM-1819. 木口×24.

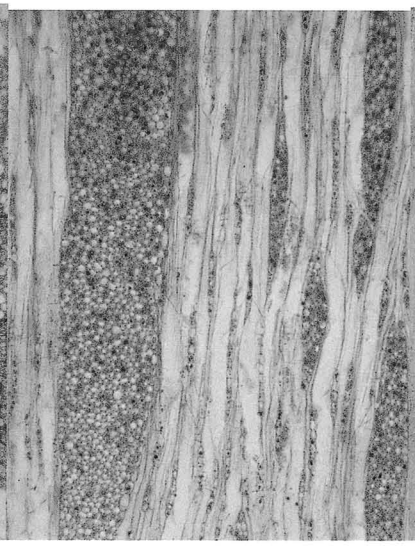


14b. 同　板目×60.

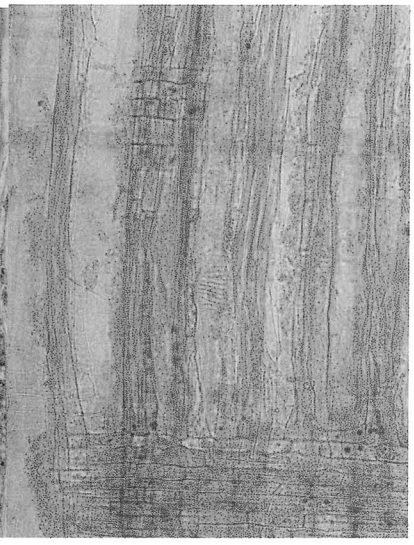
14c. 同　柾目×120.



15a. ブナ属TOM-214. 木口×24.

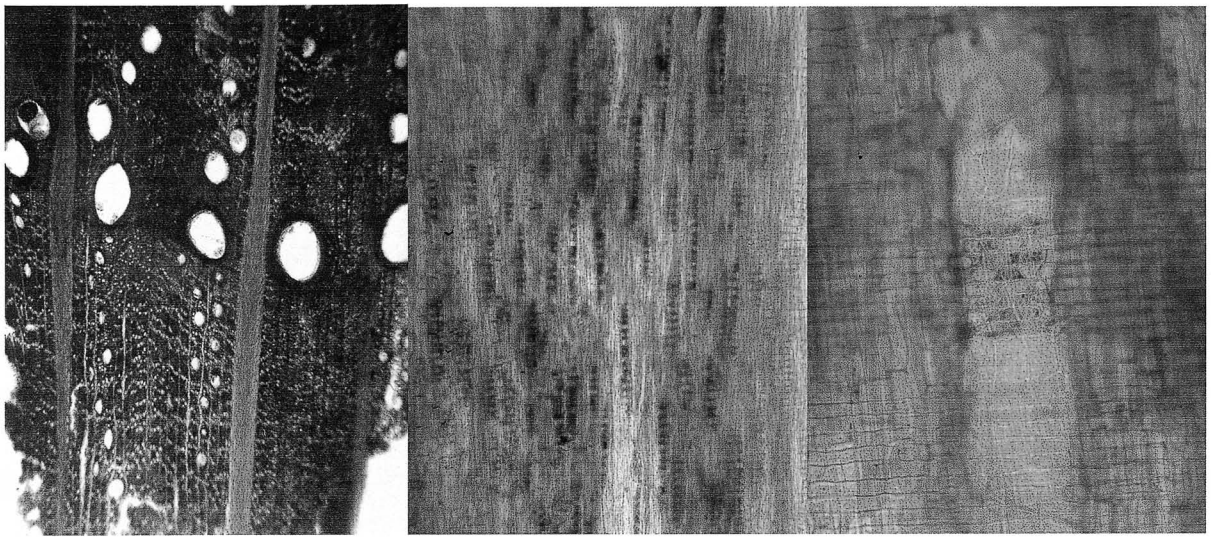


15b. 同　板目×60.

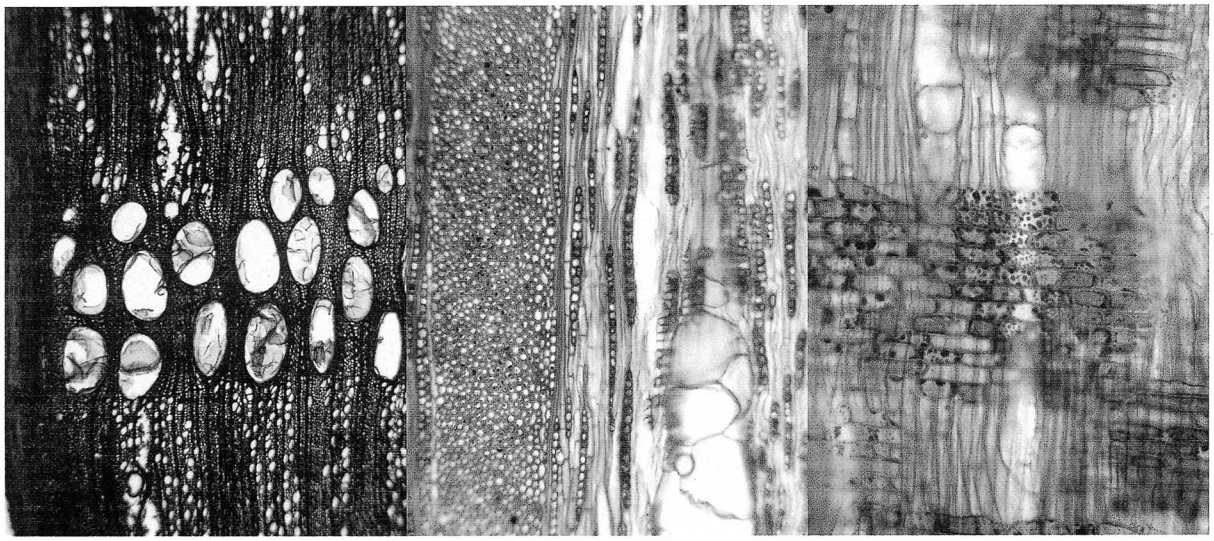


15c. 同　柾目×120.

写真図版Ⅴ



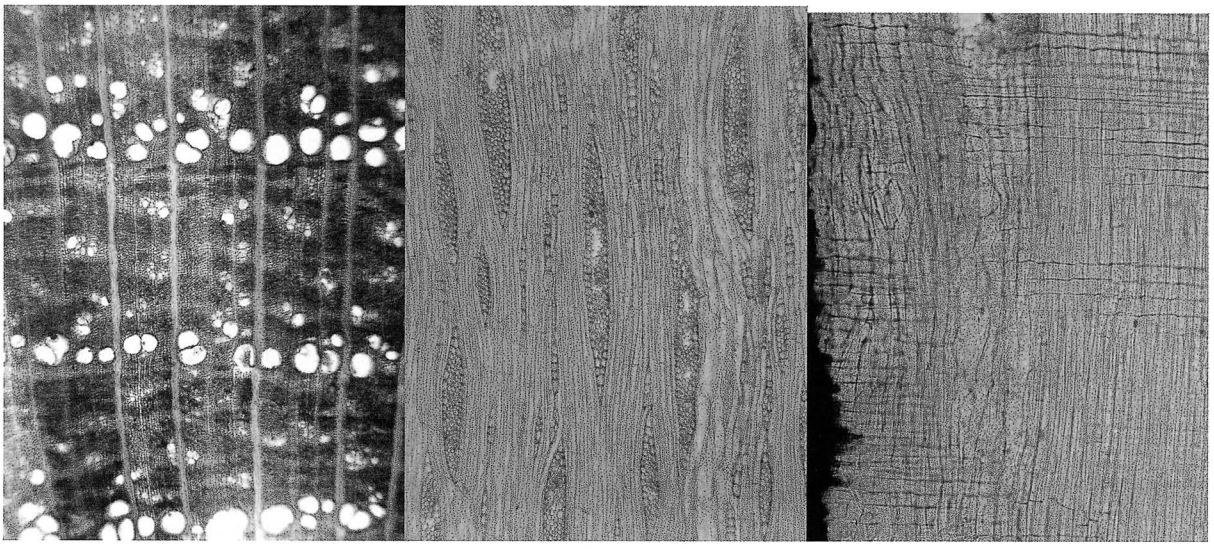
16a. クヌギ節TOM-116. 木口×24.　16b. 同　板目×60.　16c. 同　柾目×120.



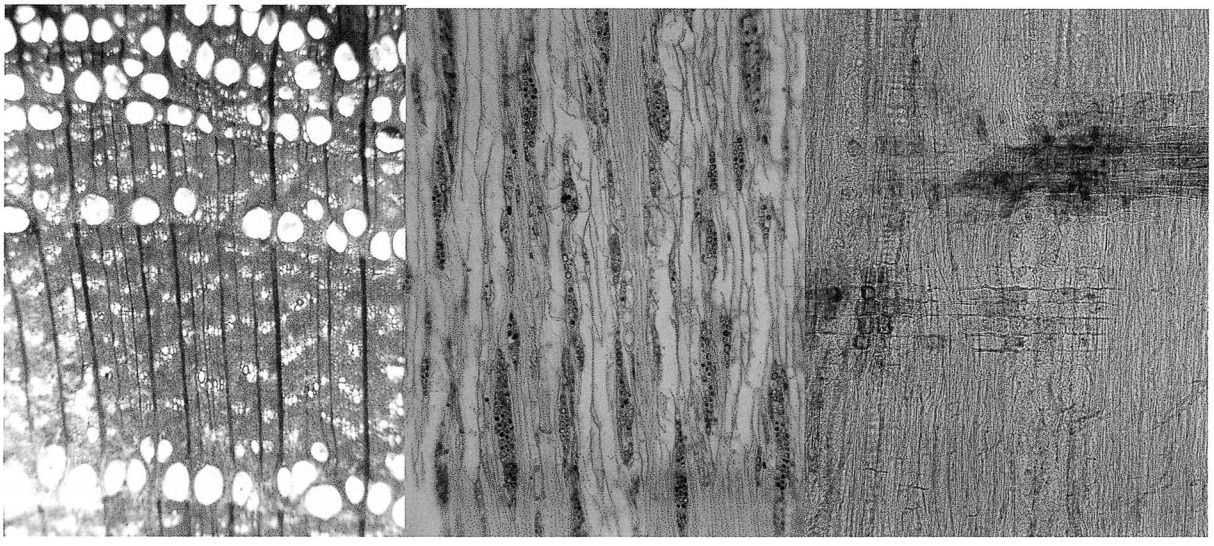
17a. コナラ節TOM-651. 木口×24.　17b. 同　板目×60.　17c. 同　柾目×120.

18a. ムクノキTOM-1458. 木口×24.　18b. 同　板目×60.　18c. 同　柾目×120.

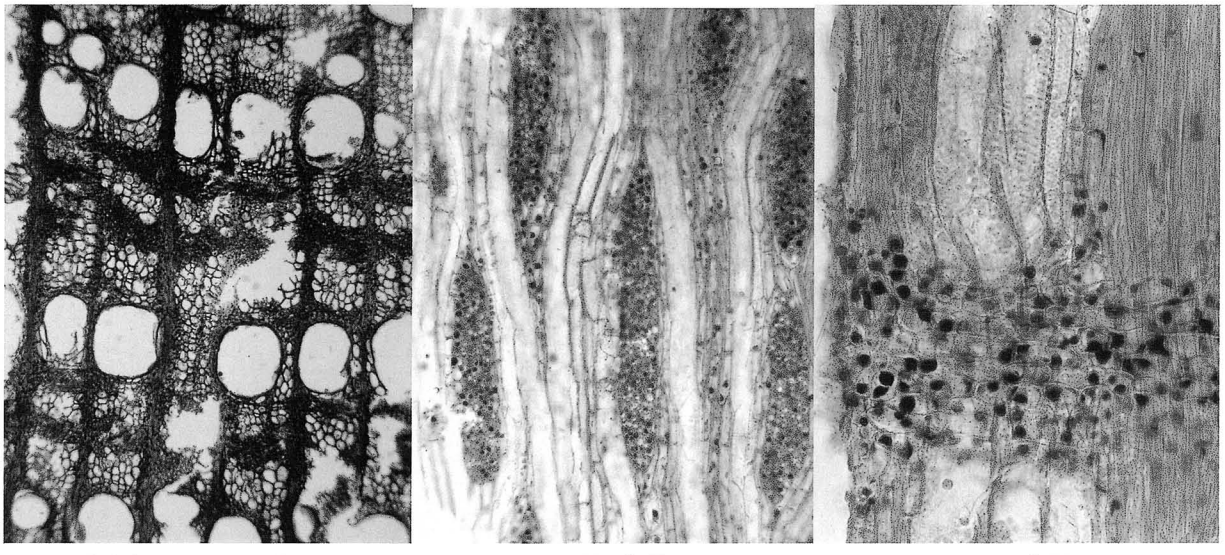
写真図版Ⅵ



19a. エノキ属TOM-671. 木口×24.　19b. 同　板目×60.　19c. 同　柾目×120.



20a. ニレ属TOM-940. 木口×24.　20b. 同　板目×60.　20c. 同　柾目×120.

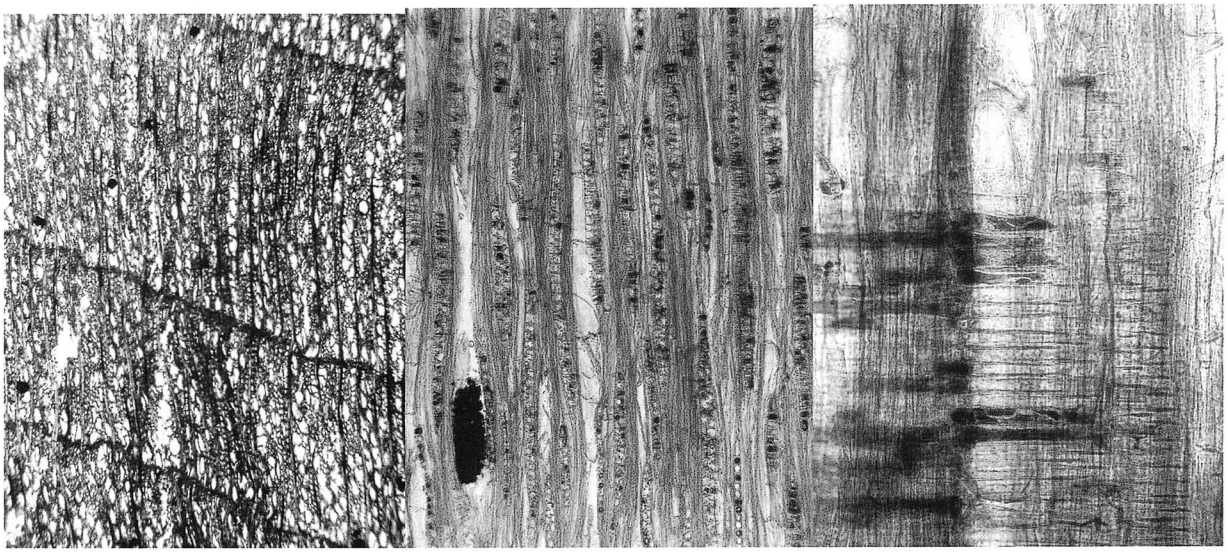


21a. ケヤキTOM-521. 木口×24.　21b. 同　板目×60.　21c. 同　柾目×120.

写真図版Ⅶ

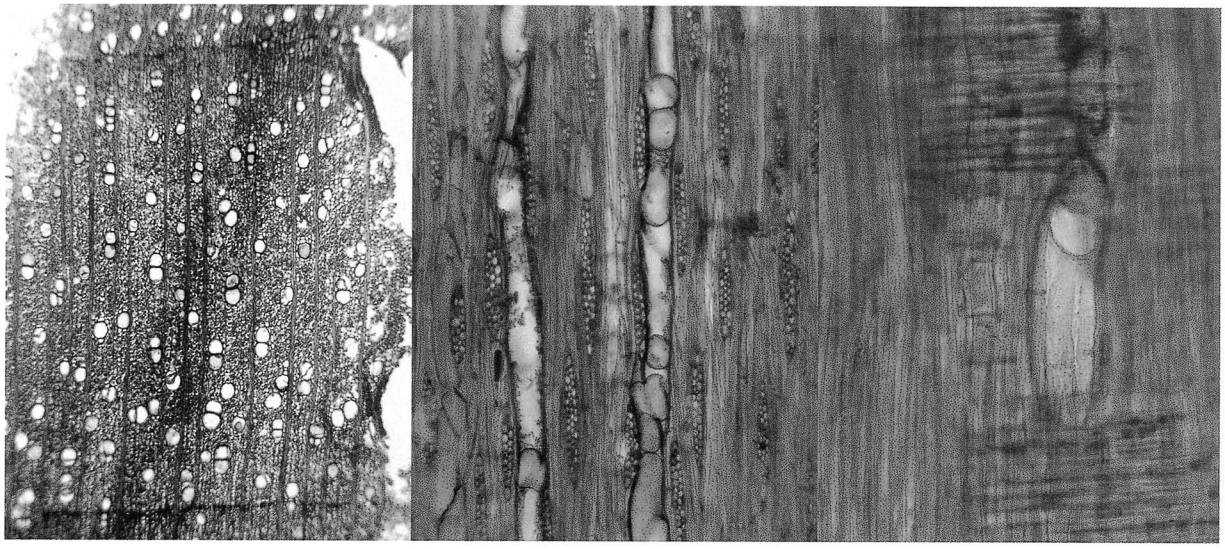
22a. ケヤキ樹皮TOM-1623. 木口×24.　22b. 同　板目×60.　22c. 同　柾目×120.

23a. ヤマグワTOM-539. 木口×24.　23b. 同　板目×60.　23c. 同　柾目×120.



24a. モクレン属TOM-258. 木口×24.　24b. 同　板目×60.　24c. 同　柾目×120.

写真図版Ⅷ



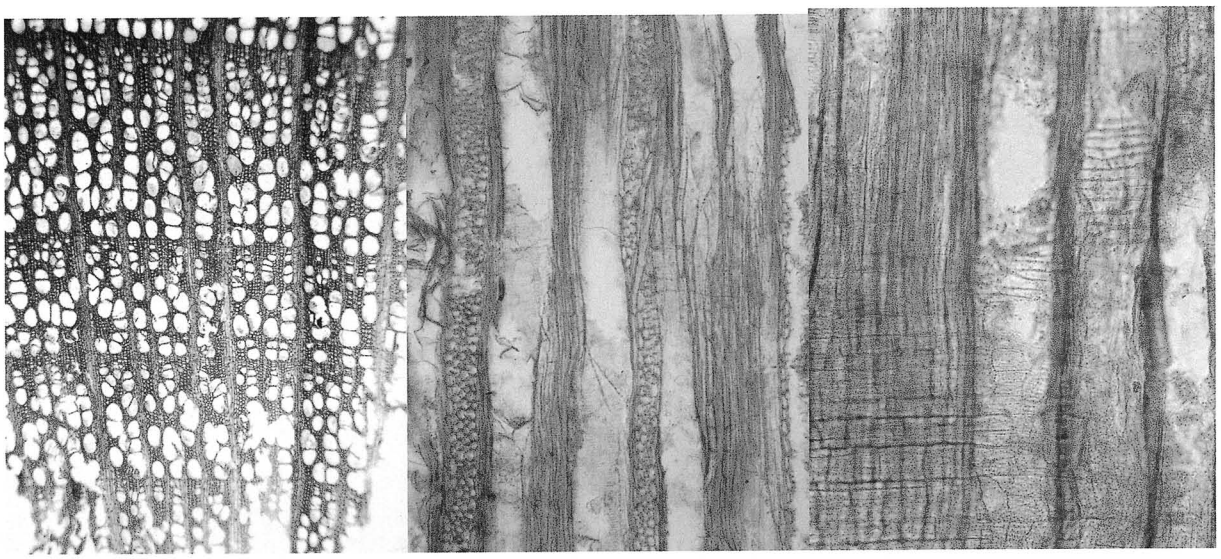
25a. クスノキ科TOM-949. 木口×24.　25b. 同　板目×60.　25c. 同　柾目×120.

26a. カツラTOM-695. 木口×24.　26b. 同　板目×60.　26c. 同　柾目×120.

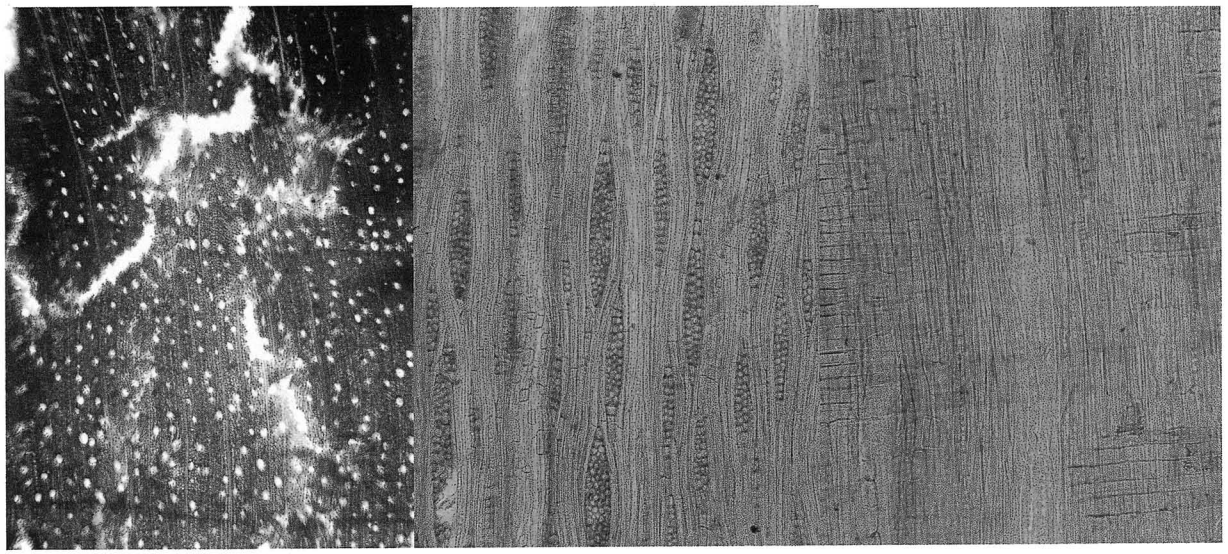
27a. カツラ根材TOM-852. 木口×24.　27b. 同　板目×60.　27c. 同　柾目×120.

写真図版Ⅸ

28a. ヤブツバキTOM-1087. 木口×24.　28b. 同　板目×60.　28c. 同　柾目×120.

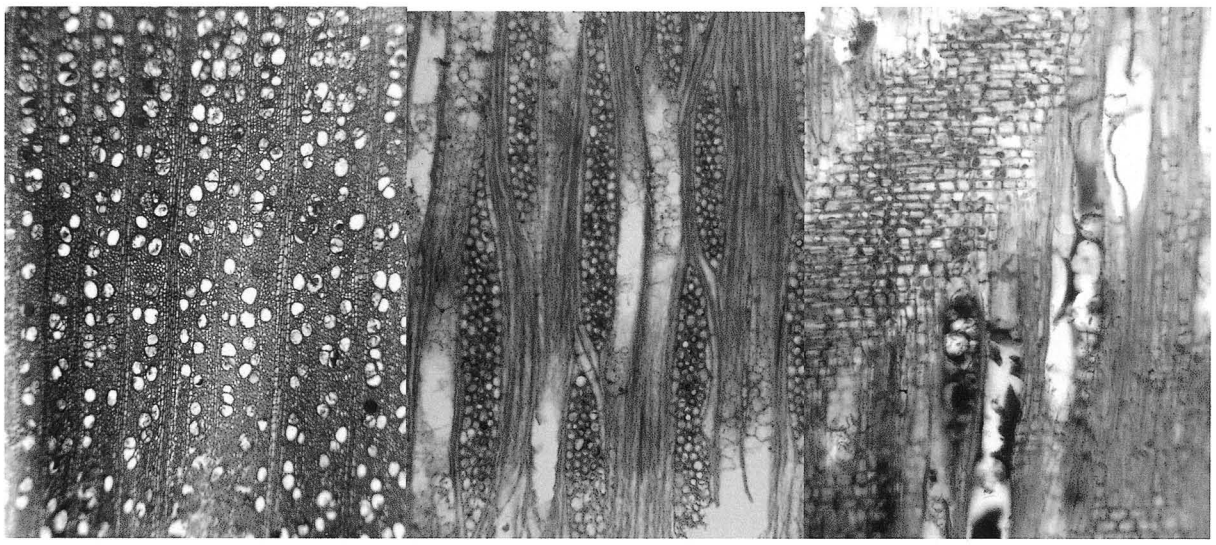


29a. ツルアジサイTOM-887. 木口×24.　29b. 同　板目×60.　29c. 同　柾目×120.

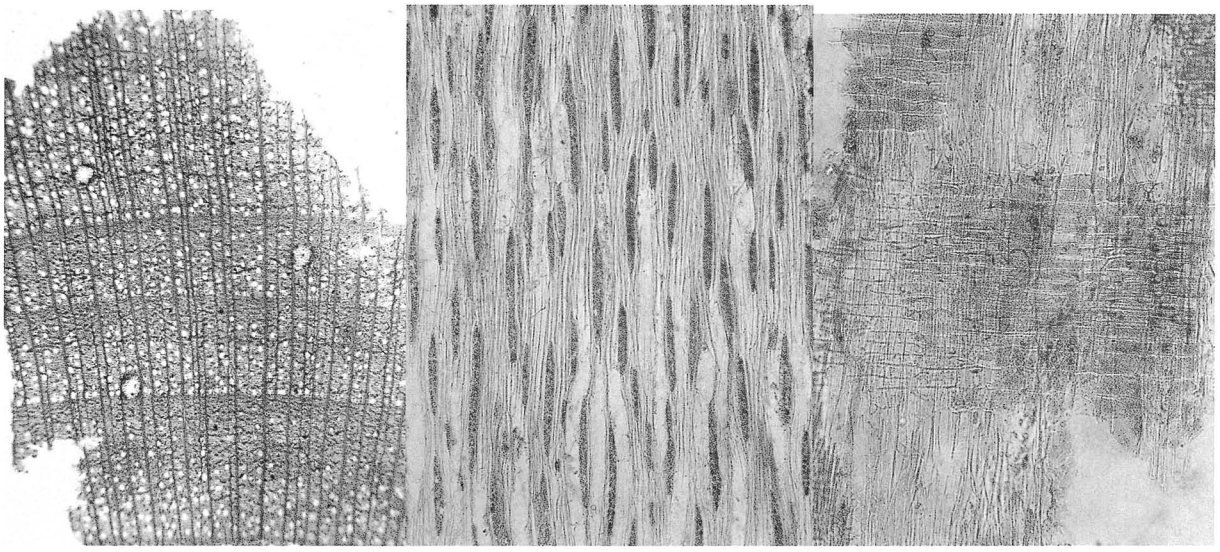


30a. カマツカTOM-1807. 木口×24.　30b. 同　板目×60.　30c. 同　柾目×120.

写真図版X



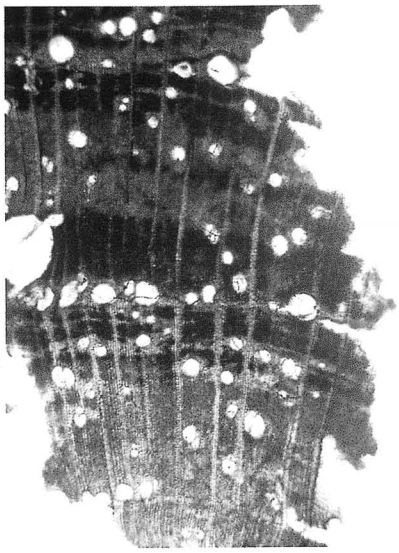
31a. サクラ属TOM-970. 木口×24.　31b. 同　板目×60.　31c. 同　柾目×120.



32a. ナシ亜科TOM-870. 木口×24.　32b. 同　板目×60.　32c. 同　柾目×120.

33a. ネムノキTOM-1807. 木口×24.　33b. 同　板目×60.　33c. 同　柾目×120.

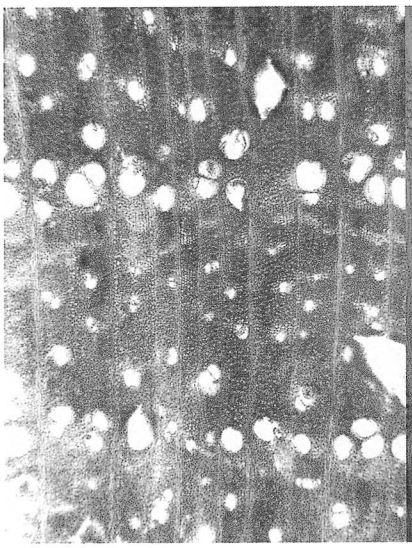
写真図版XI



34a. ハギ属TOM-101. 木口×24.

34b. 同　板目×60.

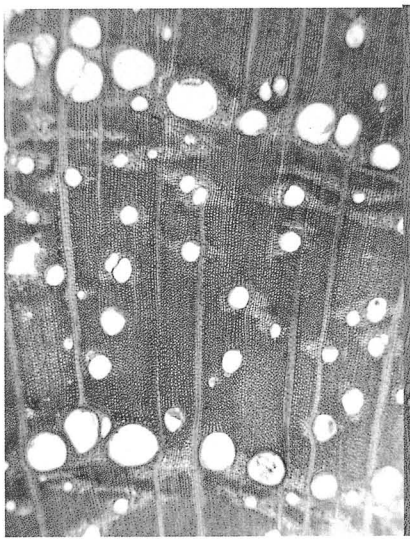
34c. 同　柾目×120.



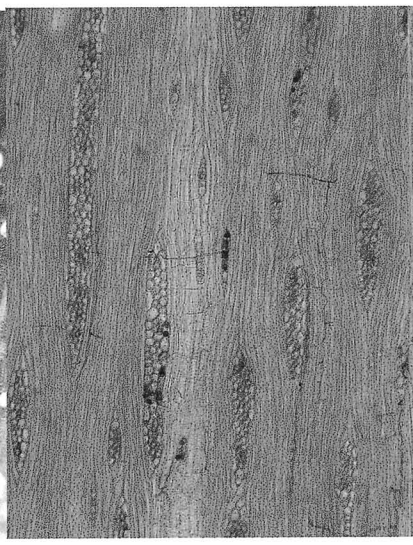
35a. イヌエンジュTOM-1136. 木口×24.

35b. 同　板目×60.

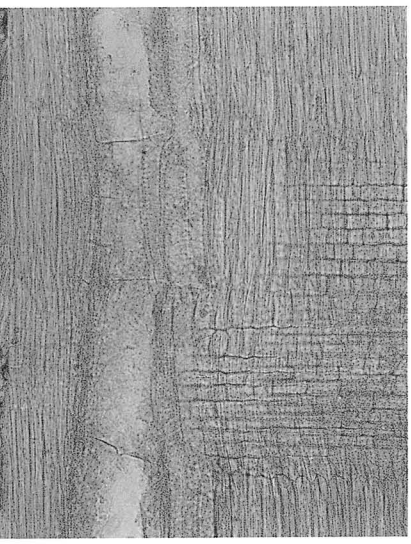
35c. 同　柾目×120.



36a. フジTOM-422. 木口×24.

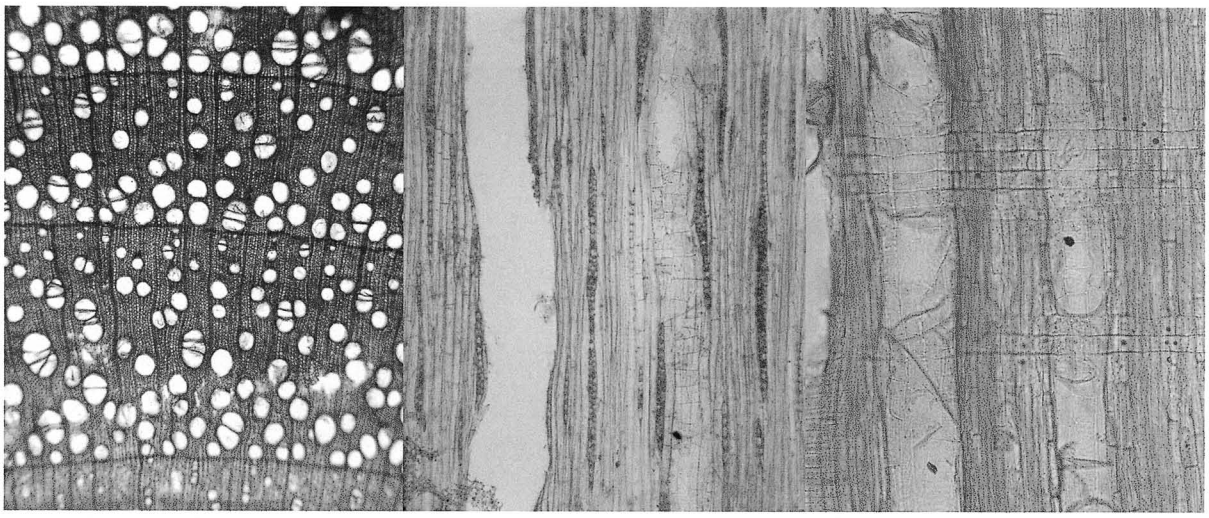


36b. 同　板目×60.

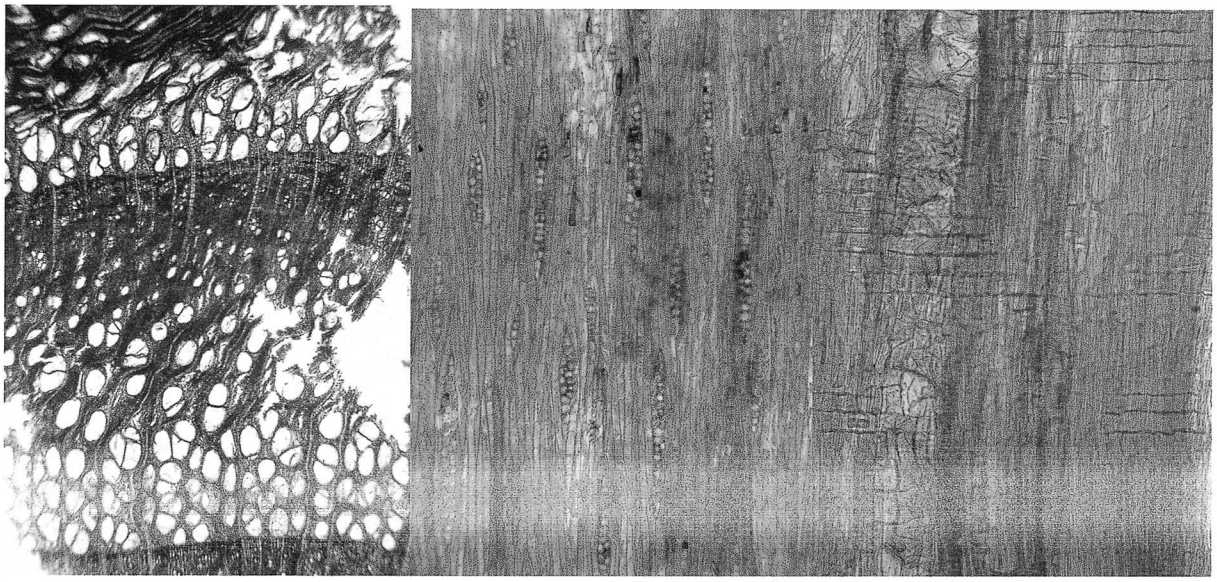


36c. 同　柾目×120.

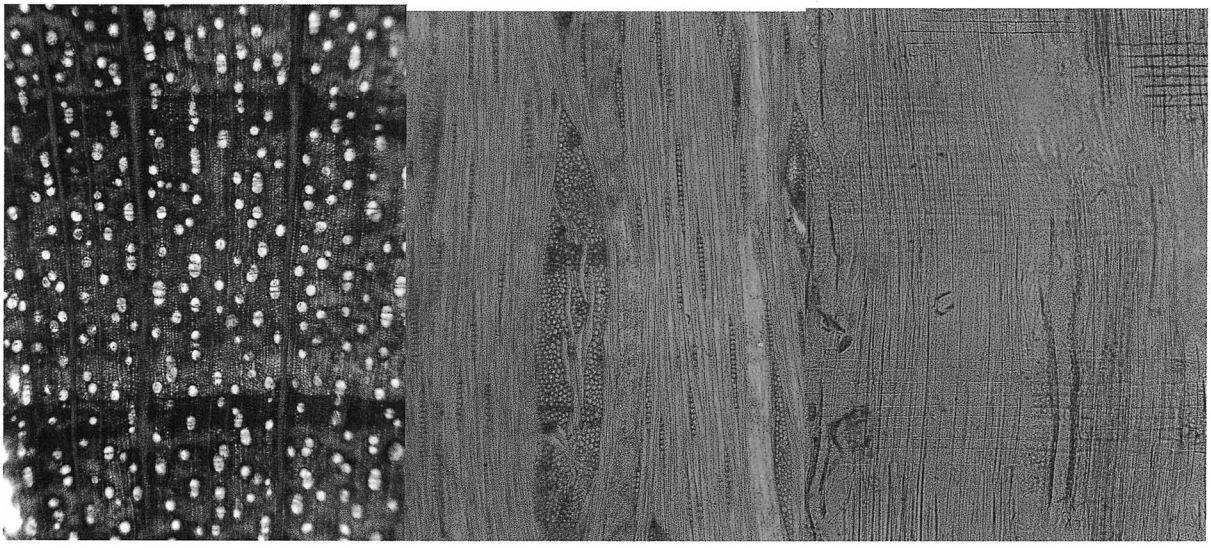
写真図版XII



37a. ウルシTOM-509. 木口×24.　　37b. 同　板目×60.　　37c. 同　柾目×120.

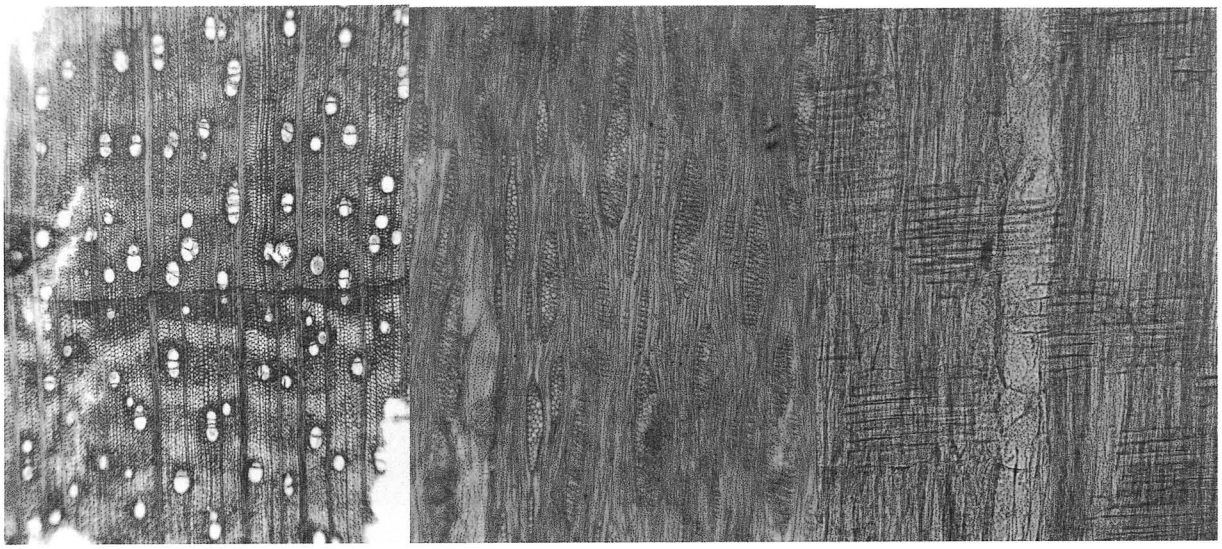


38a. ヌルデTOM-563. 木口×24.　　38b. 同　板目×60.　　38c. 同　柾目×120.

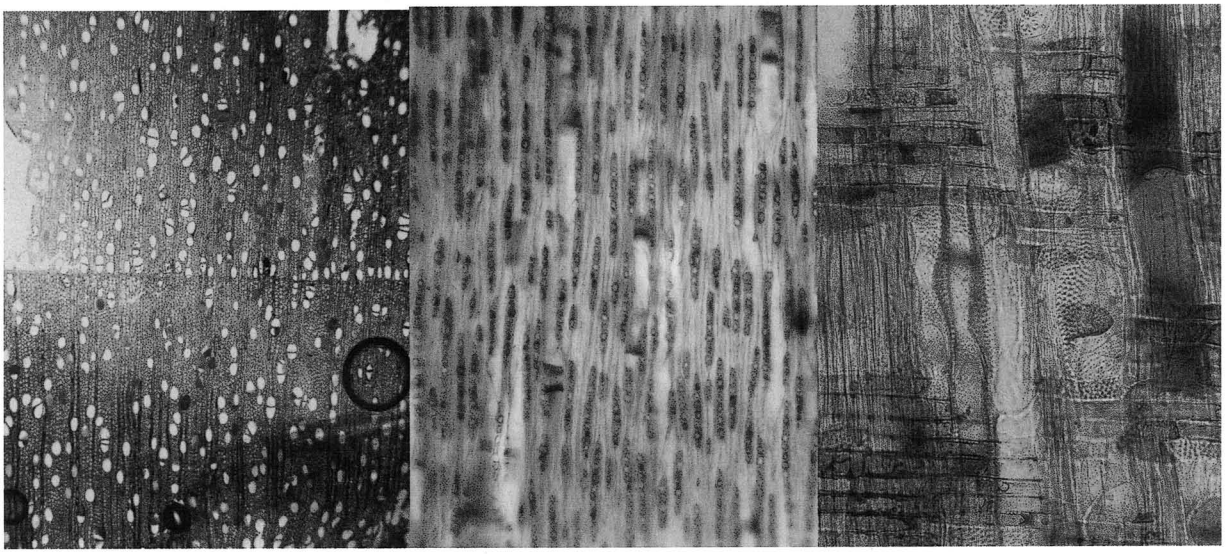


39a. チドリノキTOM-1611. 木口×24.　　39b. 同　板目×60.　　39c. 同　柾目×120.

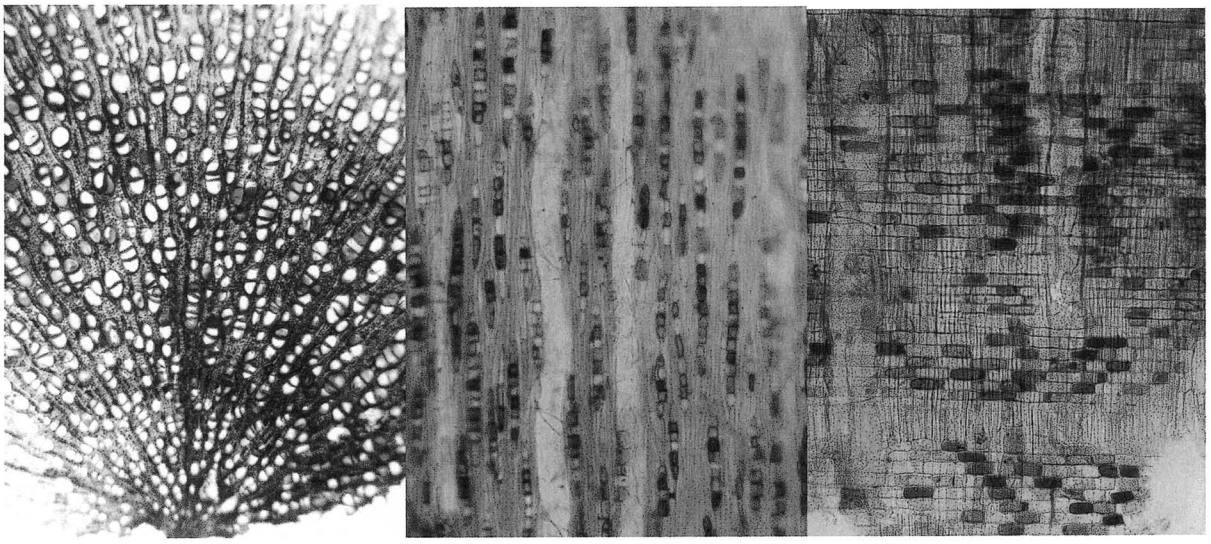
写真図版XIII



40a. カエデ属TOM-502. 木口×24.　40b. 同　板目×60.　40c. 同　柾目×120.

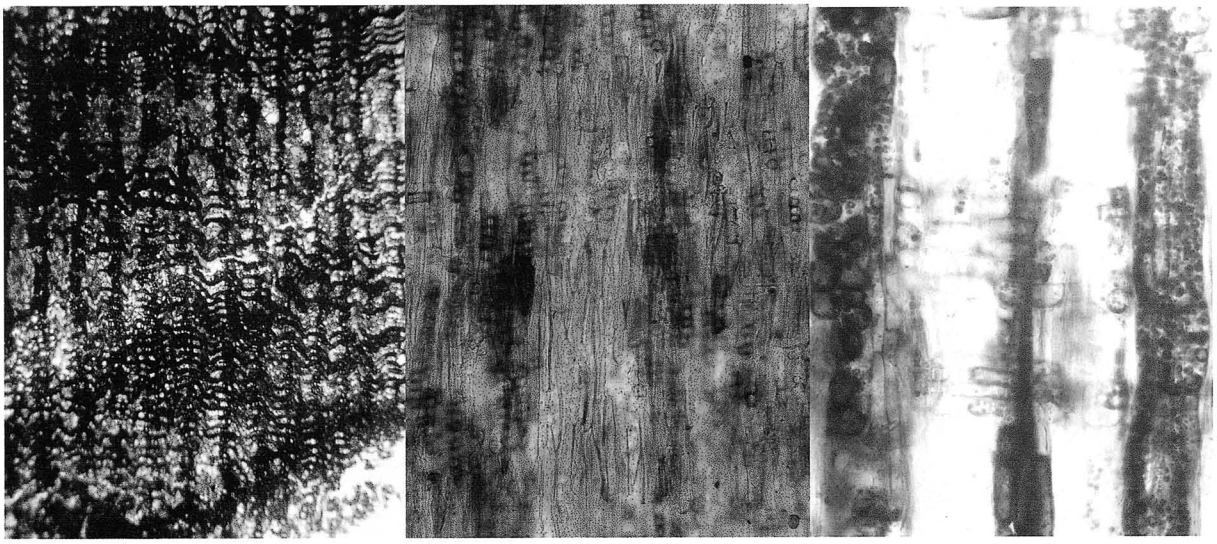


41a. トチノキTOM-1944. 木口×24.　41b. 同　板目×60.　41c. 同　柾目×120.

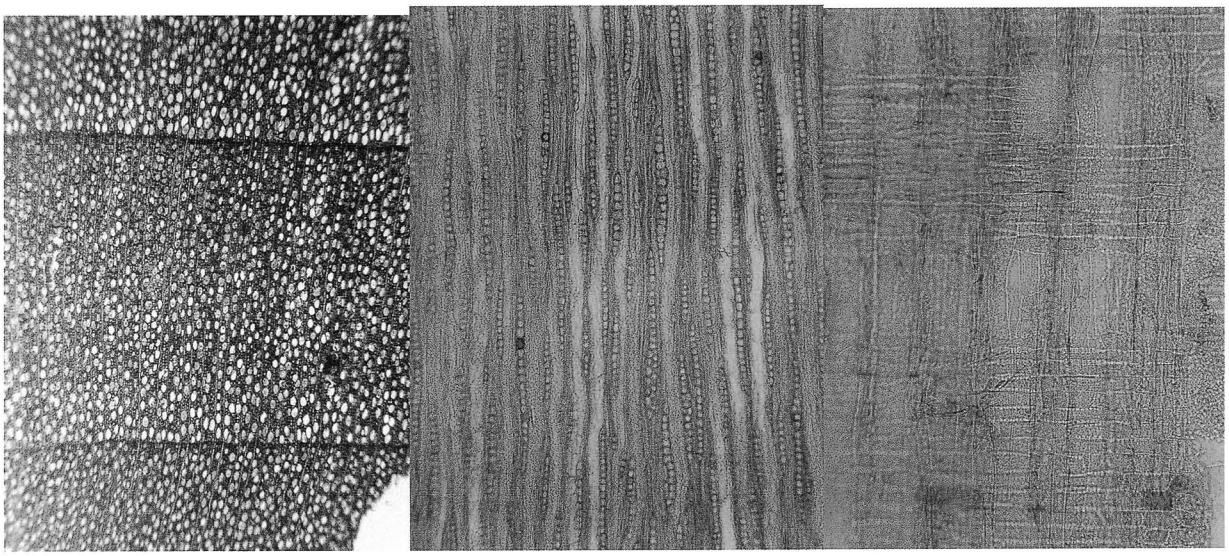


42a. トチノキ根材TOM-1905. 木口×24.　42b. 同　板目×60.　42c. 同　柾目×120.

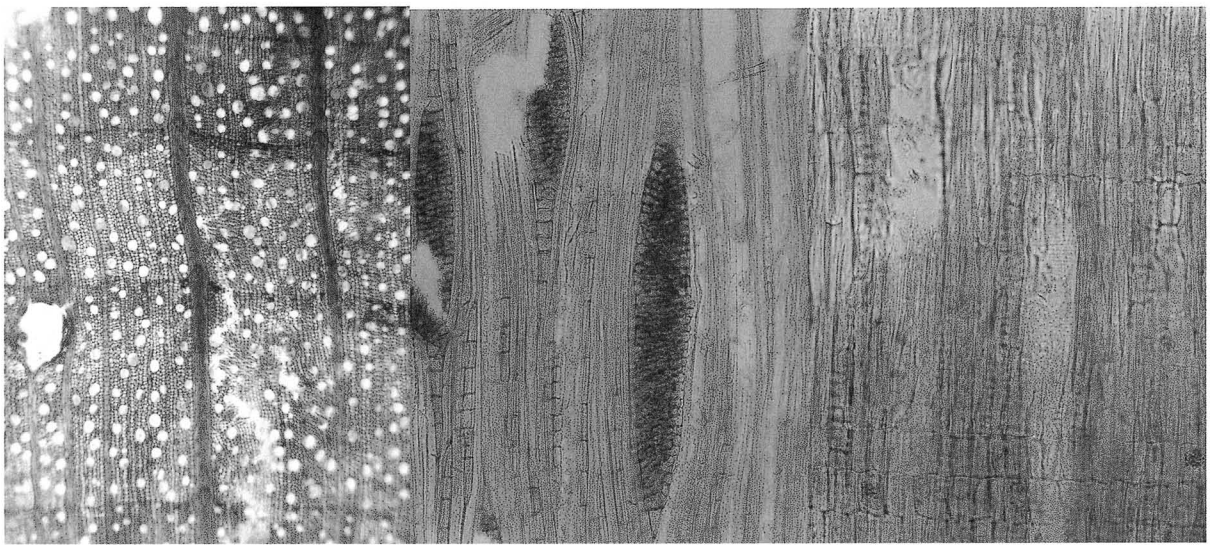
写真図版XIV



43a. トチノキ樹皮 TOM-1853. 木口×24.　43b. 同　板目×60.　43c. 同　柾目×120.

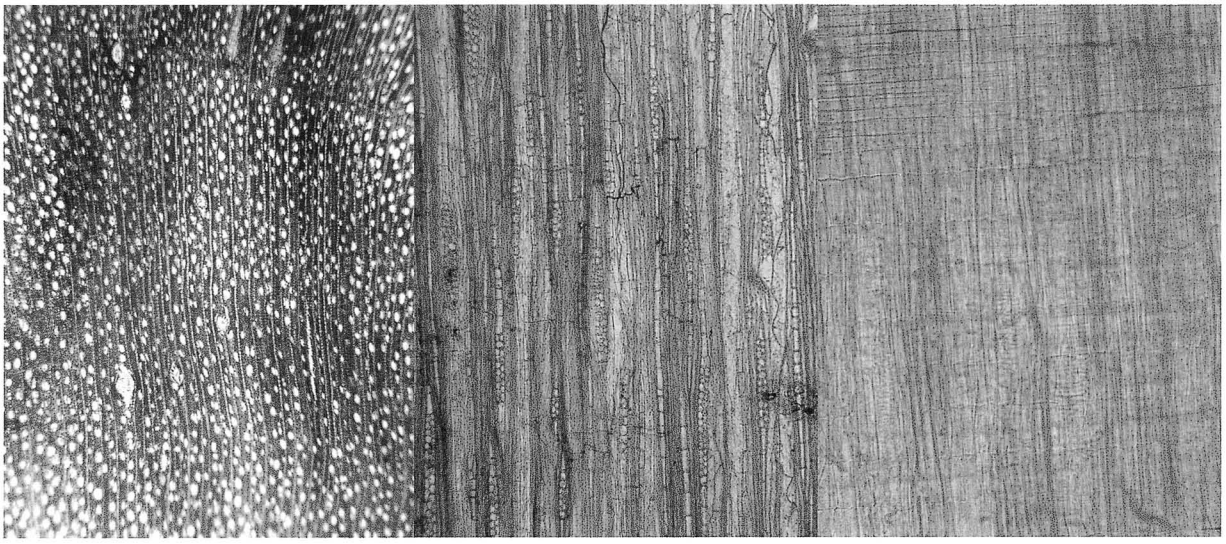


44a. ニシキギ属 TOM-1198. 木口×24.　44b. 同　板目×60.　44c. 同　柾目×120.

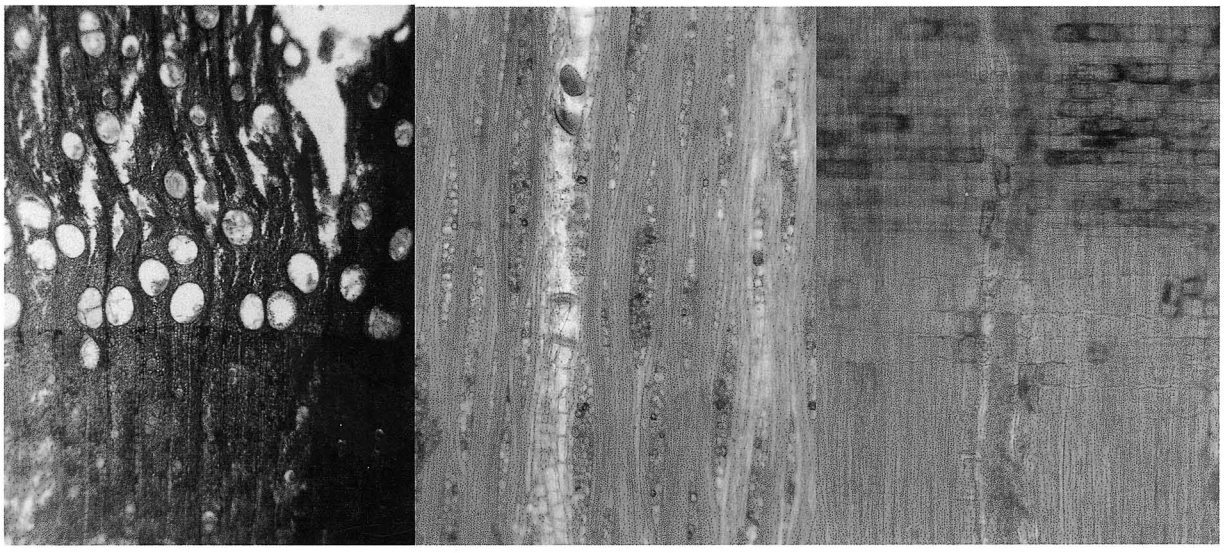


45a. ゴンスイ TOM-1616. 木口×24.　45b. 同　板目×60.　45c. 同　柾目×120.

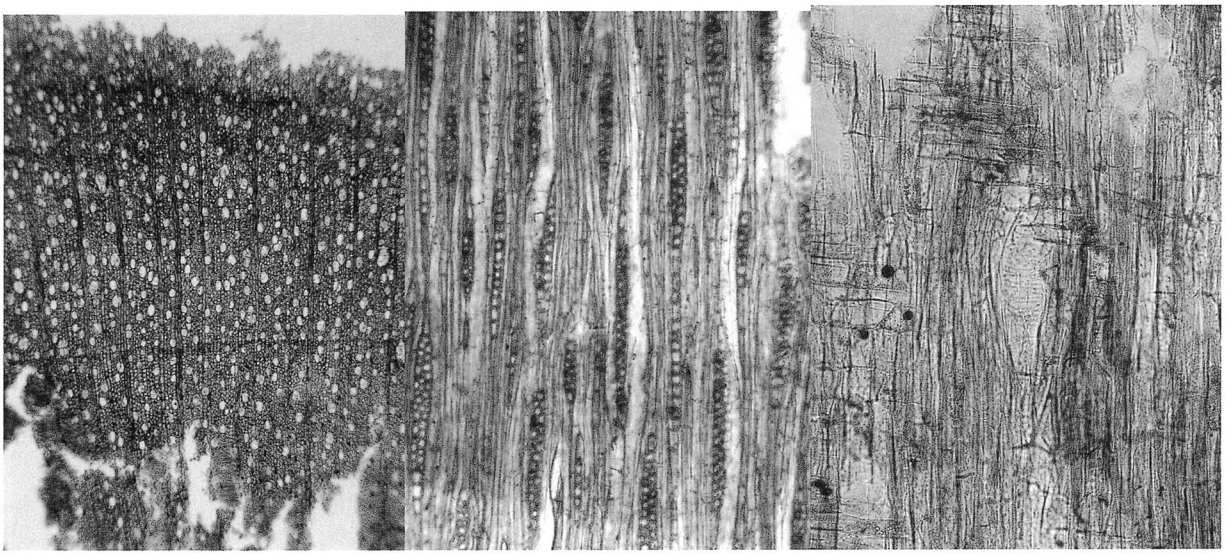
写真図版XV



46a. ミツバウツギTOM-1317. 木口×24.　46b. 同　板目×60.　46c. 同　柾目×120.

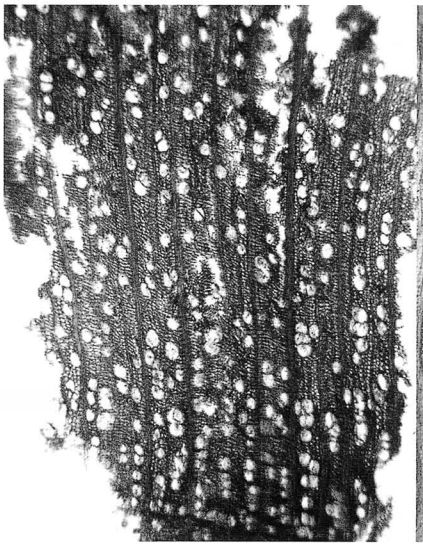


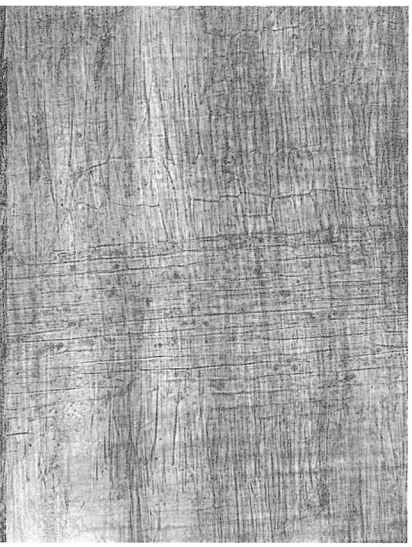
47a. ケンポナシ属TOM-274. 木口×24.　47b. 同　板目×60.　47c. 同　柾目×120.



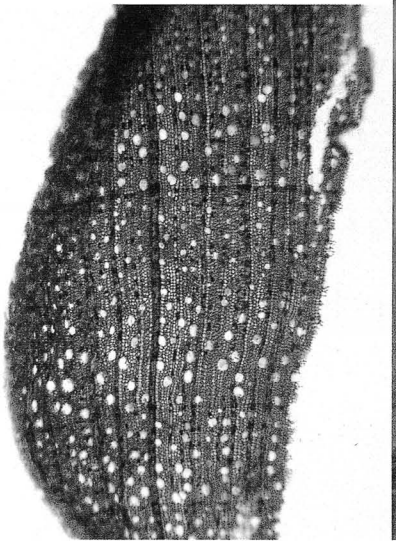
48a. キブシTOM-634. 木口×24.　48b. 同　板目×60.　48c. 同　柾目×120.

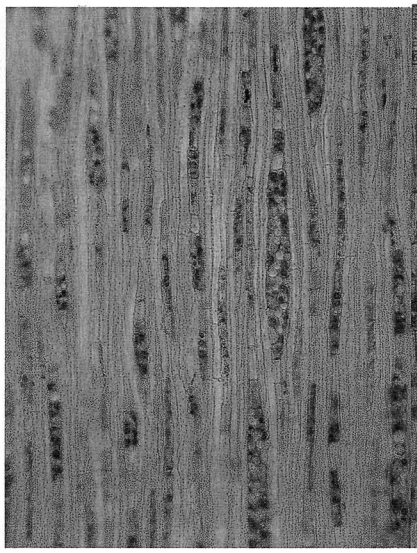
写真図版XVI

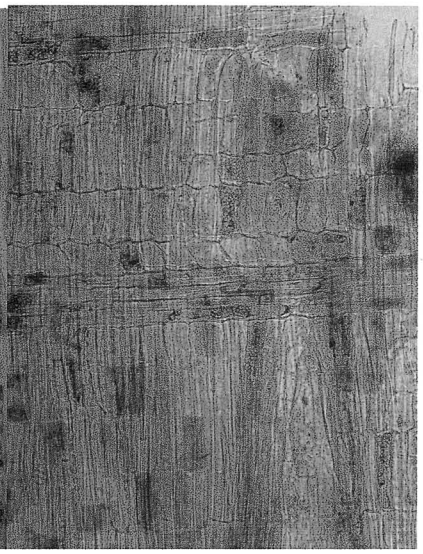




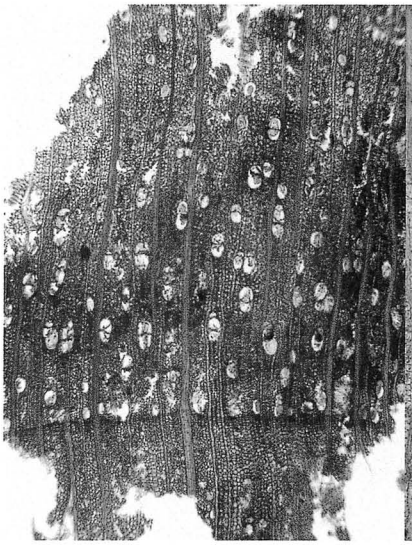
49a. ミズキ TOM-1034. 木口×24.　　49b.　同　板目×60.　　49c.　同　柾目×120.

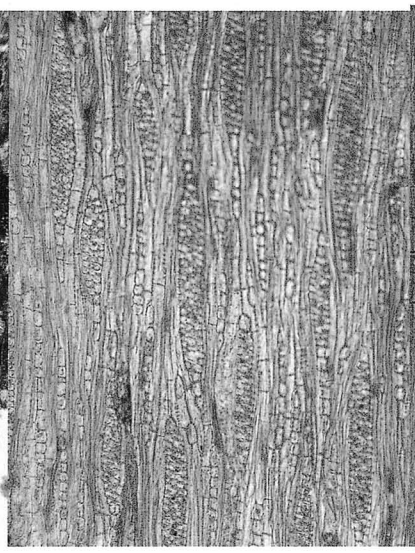


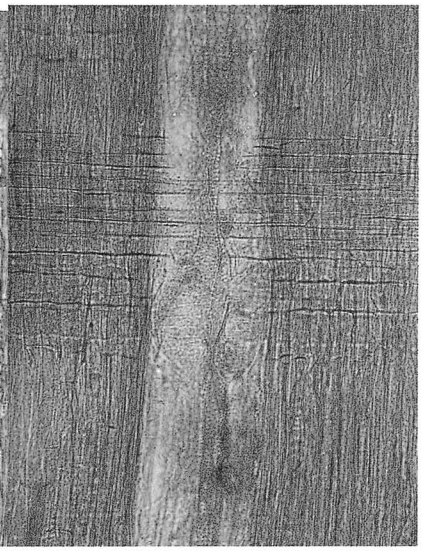




50a. クマノミズキ類 TOM-1988. 木口×24.　　50b.　同　板目×60.　　50c.　同　柾目×120.

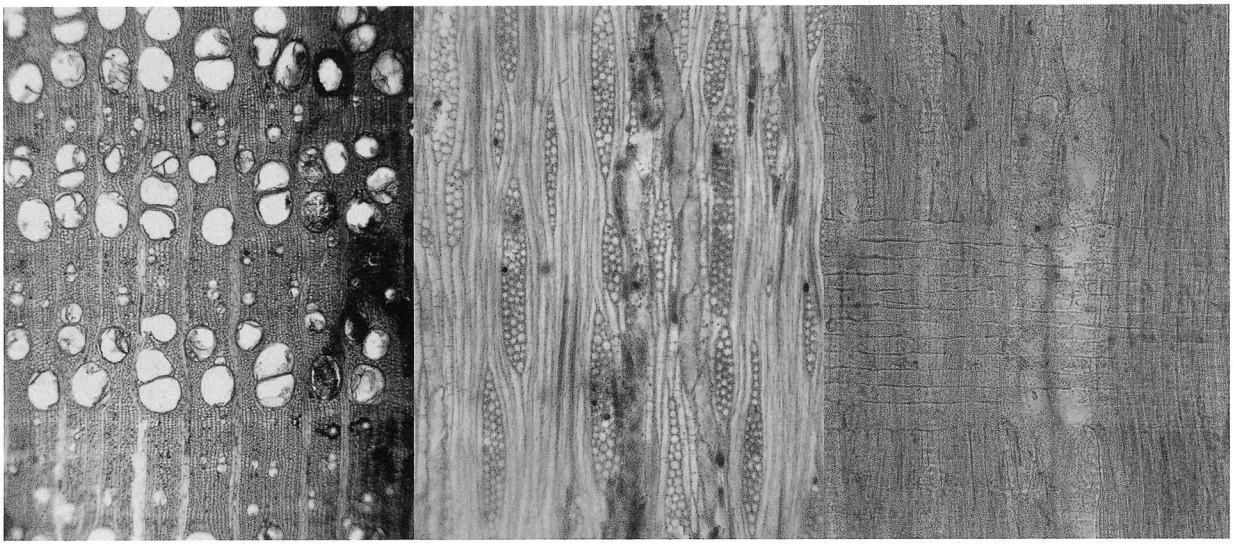




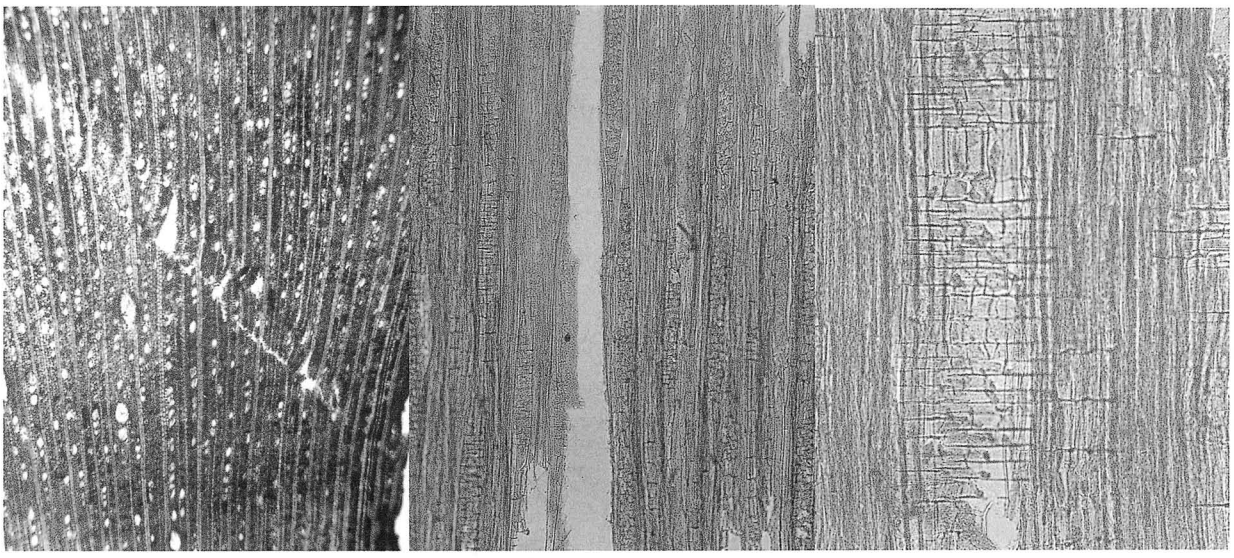


51a. エゴノキ属 TOM-1063. 木口×24.　　51b.　同　板目×60.　　51c.　同　柾目×120.

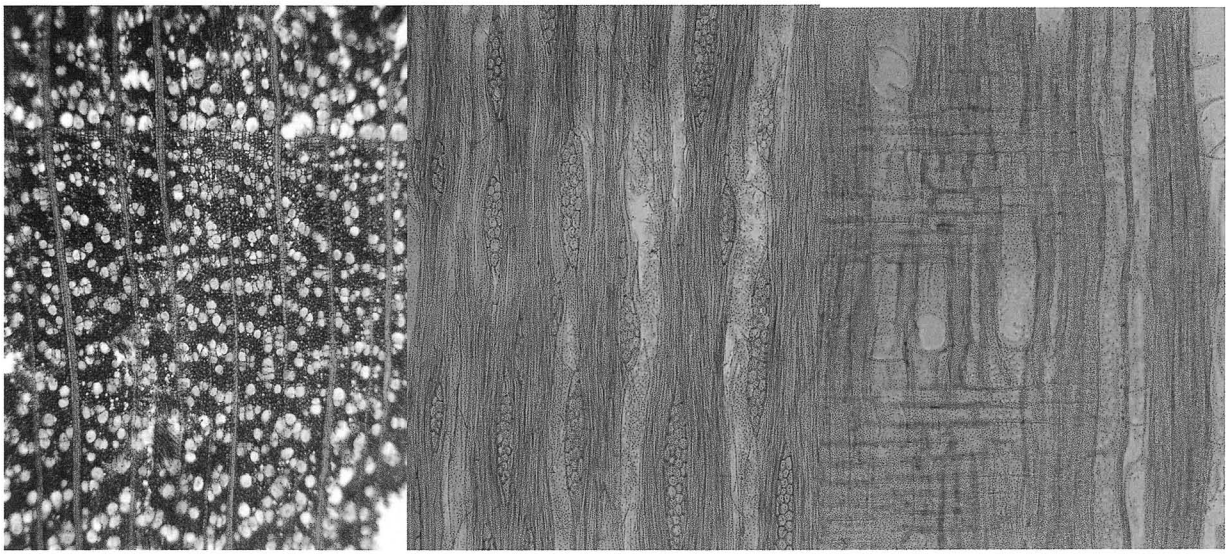
写真図版 XVII



52a. トネリコ属 TOM-965. 木口×24.　52b. 同　板目×60.　52c. 同　柾目×120.

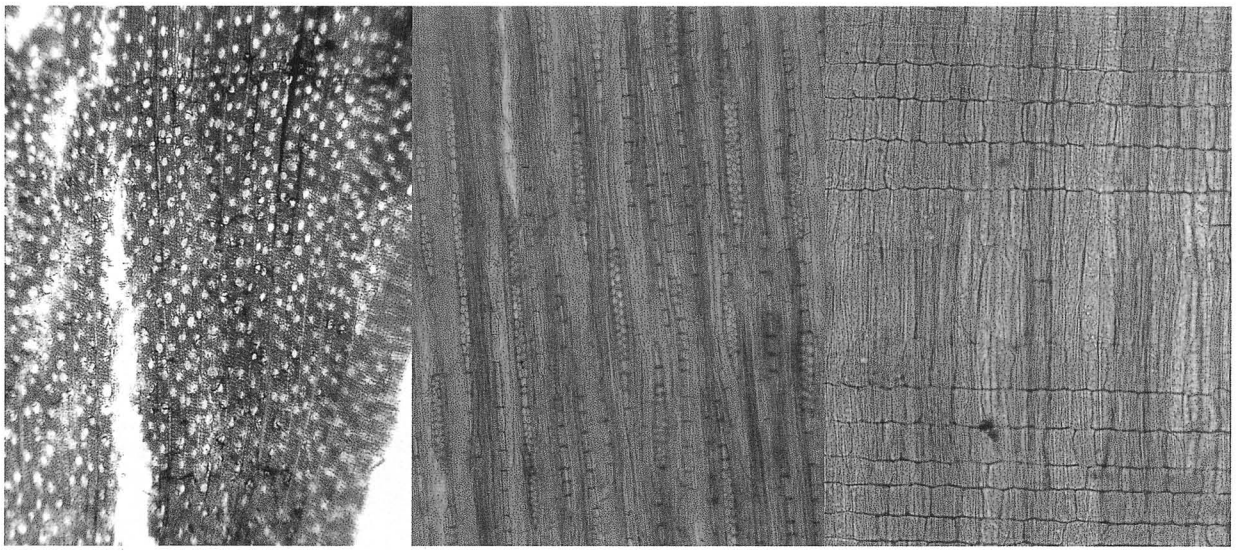


53a. ムラサキシキブ属 TOM-646. 木口×24.　53b. 同　板目×60.　53c. 同　柾目×120.

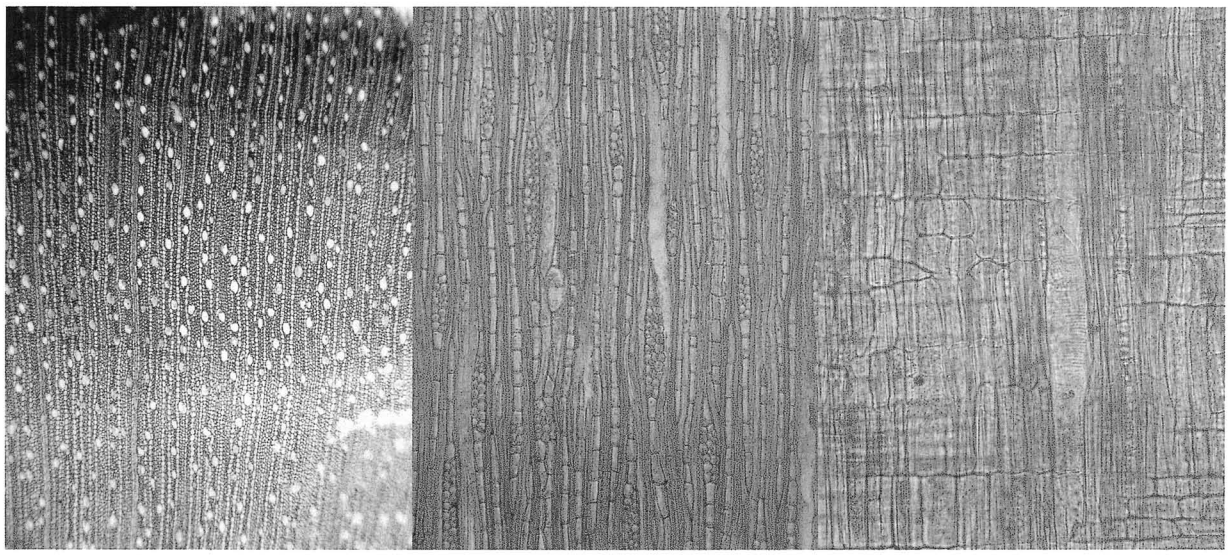


54a. ニワトコ TOM-1242. 木口×24.　54b. 同　板目×60.　54c. 同　柾目×120.

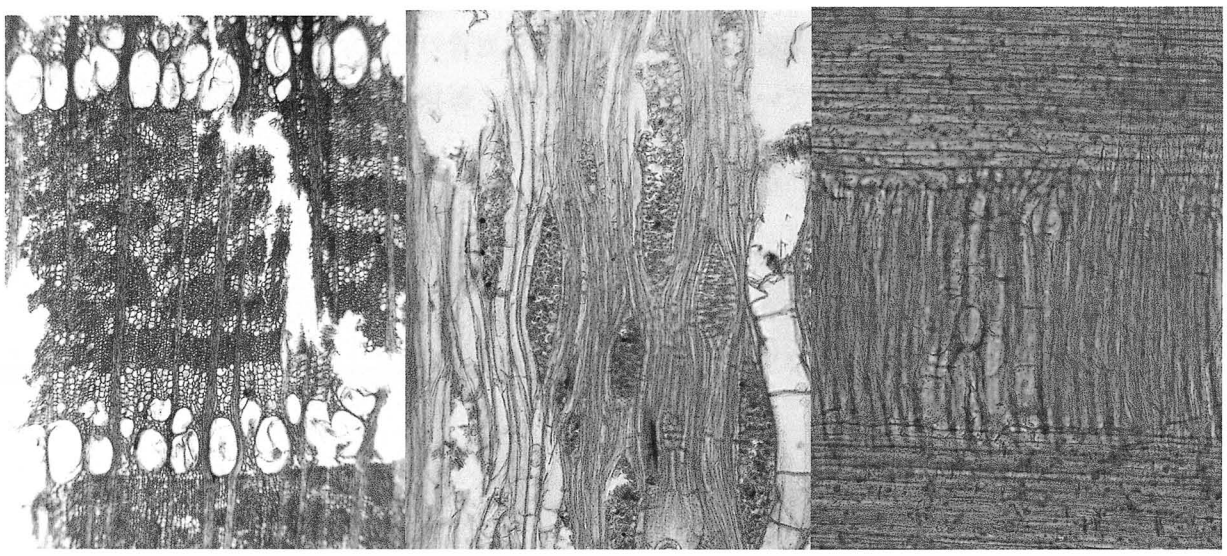
写真図版 XVIII



55a. ガマズミ属TOM-1609. 木口×24.　55b. 同　板目×60.　55c. 同　柾目×120.



56a. タニウツギTOM-952. 木口×24.　56b. 同　板目×60.　56c. 同　柾目×120.



57a. ハリギリTOM-1242. 木口×24.　57b. 同　板目×60.　57c. 同　柾目×120.

写真図版XVIII

5　桜町遺跡出土編物および縄の素材

井上　美知子（元興寺文化財研究所）・鈴木　三男（東北大学植物園）

桜町遺跡の縄文時代中期末～後期初頭の河道から比較的多数の編物、縄類が出土した。それらの大きさ、形態、編み方などについては遺物の記載にあるとおりだが、ことではそれに用いられた素材について、判明した範囲で記述する。

編物は本体の部分と縁部からなり、本体部分は縦横に素材が編まれているので、素材同定試料は仮にこれを縦、横として、同一個体からそれぞれを採取した。なお、集計に当たってはこれらを一括して編み材とした。縁部が残存している場合、縁を巻き付けている素材に芯がある場合は芯材とその上に巻いてあるものを区別して芯材と巻き材とし、その区別が認められない物は単に巻き材とした。

以上の取り方で編み物については編み材 56 点、巻き材 17 点、芯材 13 点、合計 86 点の素材をある程度同定することが出来た（報告書「木製品・繊維製品・植物編」50・51 ページの表 20、および本稿の表 1 参照）。なお、粗データで「マタタビ属？」のように確定した同定が出来なかったものも、この集計で「マタタビ属」に含めるなどの表現の簡素化を行った。

編み物で同定された植物種

1. カヤ

写真図版 I-1,2

年輪の目立たない均質な針葉樹材で、木材を裂いて、更に丸く削りを入れて籤状にしたものが用いられている。

2. ヒノキ科

写真図版 I-3,II-4

年輪が余り目立たない均質な針葉樹材で、年輪形態、仮道管の配列などからヒノキそのものである可能性が強いが、確証が得られていない。木材を裂いて、籤状あるいは柾目の帯状に加工して使っている。

3. マツ属複維管束亜属

写真図版 II-5,6

仮道管の太い針葉樹材で、分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁には鋸歯状の突起が著しいことからマツ属のうち、アカマツ、クロマツなどの複維管束亜属と同定した。木材を板目あるいは柾目の帯状に加工して利用している。

4. コナラ属コナラ節

写真図版 III-7,8

大道管と大きな放射組織を持つ広葉樹材で、大道管は年輪に沿って並ぶ環孔材である。材は板目、柾目、あるいは籤状として加工している。

5. ニレ属

写真図版 III-9,IV-10

年輪始めに大道管が並ぶ環孔材だが放射組織は4細胞幅程度で大きさが揃っていて同性。木部柔組織に結晶を持つ。年輪幅の広いところの晩材部だけが利用されている。

6. マタタビ属

写真図版 IV-11,12,V-13,14

年輪始めに数層の大道管があり孔圏外では中くらいの道管が散在する環孔材である。当年枝の蔓をそのまま用いている（写真11）のと、太い蔓を裂いて、木部を利用している例（その他の写真）がある。

7. カエデ属

写真図版 V-15,VI-16,17

年輪の目立たない散孔材で、道管は均一に分布する。材を削って籤状に利用している。

8. ムクロジ

写真図版 VI-18

やや大きめの道管が年輪の始めに並ぶ環孔材だが観察されたのは晩材部の部分である。材を削って籤状に利用している。

9. ケンポナシ属

写真図版 VII-19

やや大きめの道管が年輪始めに並ぶ環孔材で、晩材部の道管は厚壁で単独あるいは放射方向に数個複合する。放射組織は多列で異性。木材を裂いて籤状にして利用している。

10. トネリコ属

写真図版 VII-20

やや大きめの道管が年輪の始めに並ぶ環孔材で、晩材部ではケンポナシ同様、厚壁の道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する。放射組織は同性で背は低く、幅は2細胞。木材を裂いて籤状にして利用している。

11. 広葉樹散孔材

写真図版 VII-21

樹齢2年の散孔材の細枝を丸木のまま使ったもの。樹種は不明。

12. 細枝の髄

写真図版 VIII-22

木部が無く、髄の部分だけが出土。これは、素材から髄以外の部分を取り去って利用されたものと思われる。

13. 蔓 or 草

写真図版 VIII-23

上の「細枝の髄」ににるが、木部が残存している。これはアケビなどの木性の蔓などで肥大成長

していない当年の部分、あるいは蔓草などと思われるが保存が不良で詳細な同定は出来ない。

14. 樹皮

写真図版 VIII-24IX-25

横断面で細胞形態がほとんど観察できないほど薄く圧縮された組織構造をしており、縦切りでは細胞は確認できるものの形態が不明瞭である。桜皮や樺皮などの薄くはげる樹皮がこのような構造をしており、それらである可能性があるが、そもそもこれらは識別が困難である。

15. 竹笹類

写真図版 IX-26,27

1対の丸い後生木部道管とその内側に原生木部、外側に篩部があり、それら全体を厚壁の繊維組織が取り囲む維管束が均一に散在し、その維管束は外側で細く、内側で太い。イネ科タケ亜科の桿の組織であるが、内部構造から竹と笹の区別は出来ない。いずれも籤状に加工して使用されている。

編み物用材の傾向

ヒノキと思われる針葉樹、マツの帯状の編物、マタタビ類の蔓の編物、同定できていないが、蔓、草、あるいは髄の部分を利用した編物、竹笹類の籤状の素材、そして樹皮による巻きつけは、現在とも繋がる、非常にうなずける植物利用と言える。特徴的なのは環孔材の利用で、ナラ類、ニレ属、ムクロジ、ケンポナシ属、トネリコ属と、大きな複合放射組織を持つナラ類を除いては、互いによく似た材構造をしているものの、一般的に考えられる材質にはかなりの隔たりがあり、これらが同様の利用をされているのは興味深い。

縄の素材

出土した縄5点（台帳番号 51,52-1,52-2,53,54）について、試料を樹脂包埋し横断切片を光学顕微鏡で観察してその素材の同定を試みた。5点のうち、切片が作成できた部分は No. 53を除く4点はいずれも、恐らく円形と思われる植物の茎の表皮を含んだ弧状の部分である。

シダ類の茎あるいは葉柄

写真図版 X-1 ～ 4（No. 53）

本来円形に近いものが乾燥収縮により深く入り組んだ襞状を呈している（X-1）。写真 X-1 での遺物の縦の長さは 1.6㎜と、かなり細いものである。表皮は1層だが皮層の細胞との形態的分化は乏しく、皮層の細胞は多角形でやや厚壁、細胞間隙はほとんど無い（X-4）。皮層は 20 細胞層以上あり、その内側には完全に潰れた褐色の濃い部分がある（X-2）。この褐色の濃い部分は皮層の内層および篩部が潰れたものと推察される。褐色の濃い部分の内側に維管束（木部）が3箇所見られ、外形は、大きな台形状のもの、丸く小さいもの、二つ折りになった先の部分のものと、いずれも異なっている。この維管束を構成する各細胞には有縁壁孔が見られ（X-3）、仮道管であること、また、その有縁壁孔は水平方向に長い、階段状の配列をしていることが推察される。仮道管のサイズの変化から

維管束は中原型であることがわかる。これらの維管束のサイズ、配置から、円形の茎あるいは葉柄に、太さの異なる5～10本程度の維管束が、同心円状に配列した構造であったことが推定される。

本試料は切片が作成された範囲では完形ではないが、元素材を円形と仮定するとその三分の一程度がここに切片となっているように考えることが出来る。襞状になった部分はもともと襞状だったのではなく、写真X-1の一番左側の皮層部分（この部分は余り潰れていない）のように、平滑な表面をした円形に近い外部形態をしていたと考えられる。してみると直径3㎜ほどの素材であることが期待されるが、もっと大きい太い素材のほんの一部がここに見ることが出来たものである可能性は否定できない。

以上の形態、特に維管束の構造から本素材はシダ類の地上部の茎（根茎ではない）あるいは葉柄であることが考えられる。小矢部市付近で地上茎を持つシダ類には蔓性のカニクサがあるが、これがカニクサの茎であるかどうかは対照標本がないため、比較できていいない。また、葉柄であるとすると、ワラビなどの可能性も考えられる。

その他の縄素材

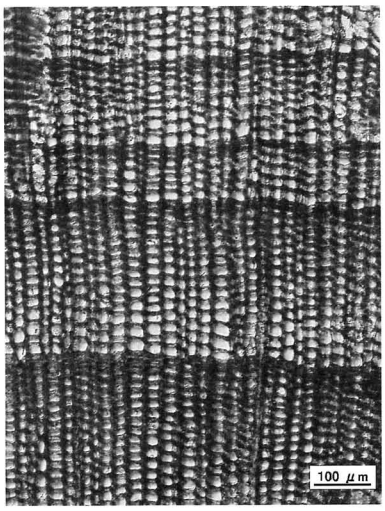
写真図版X-5,6(縄51)、7（縄52-1)、8（縄52-2)、9（縄54)

いずれも断面が弧状を呈する試料で、弧側に表皮があり、弦側は組織が壊れた状態となっている。表皮細胞は不整形でその内側の皮層組織の細胞とはっきりした形態の違いはない。皮層細胞は弦側に向かって大きくなるが、特に縄52-1では極端に大きくなり、縄51,54ではそれほどではなく縄53と同程度であり、縄52-2では潰れていてよく分からない。

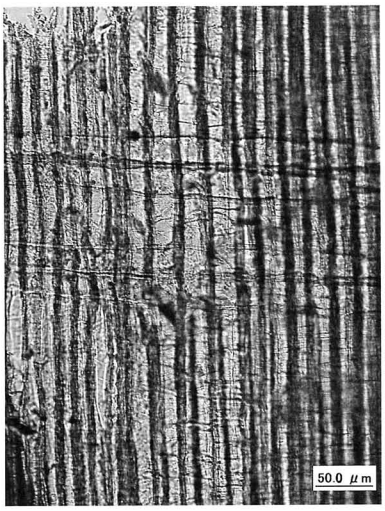
以上の形態は皮層細胞のサイズの違いはあるものの、いずれも縄53の皮層に良く一致し、同じ素材であるといえる。これらはおそらくは縄53と同様丸い茎あるいは葉柄が用いられたものの、分解を受け、皮層の一部が試料として観察されたものであると考えられる。

表1. 桜町遺跡出土編物の素材

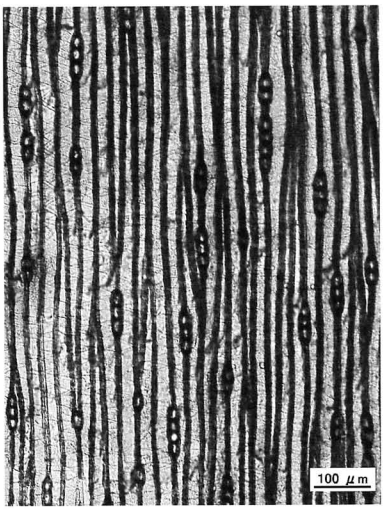
樹　種	本　体	縁　部		
	編み材	巻き材	芯材	合計
カヤ	2			2
ヒノキ科	8		1	9
マツ属複維管束亜属	2	3		5
コナラ属コナラ節	7		4	11
ニレ属	2	1	1	4
マタタビ属	23	1		24
カエデ属	2		2	4
ムクロジ	1			1
ケンポナシ属	1			1
トネリコ属			2	2
広葉樹	2		2	4
樹皮	1	12		13
竹笹類	5		1	6
総計	56	17	13	86



木口面

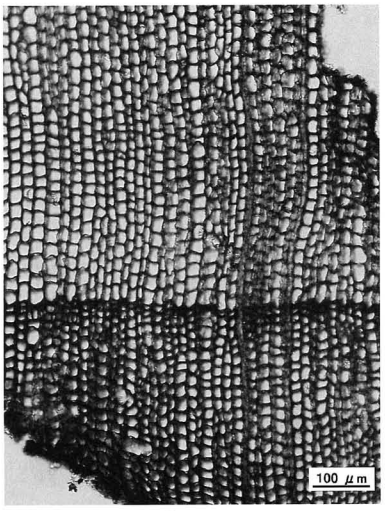


柾目面

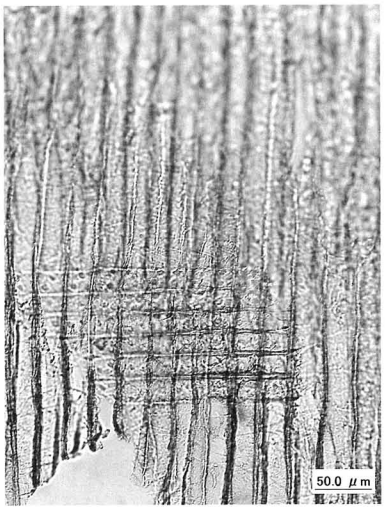


板目面

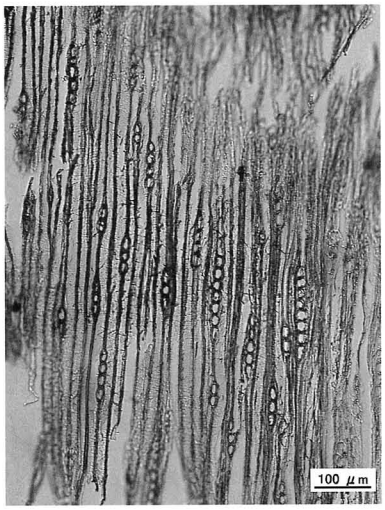
1. 編み物17縦・カヤ



木口面

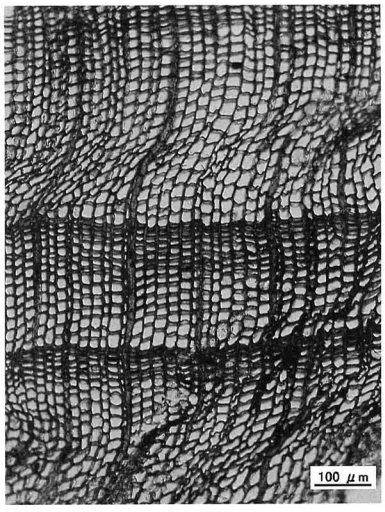


柾目面

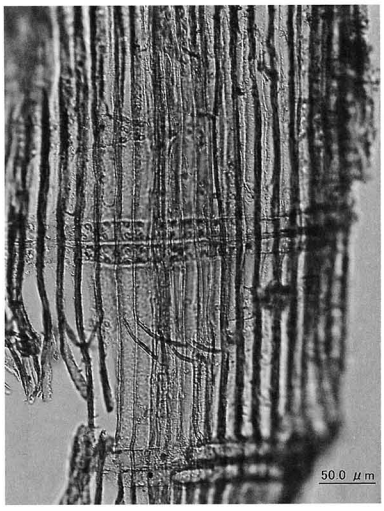


板目面

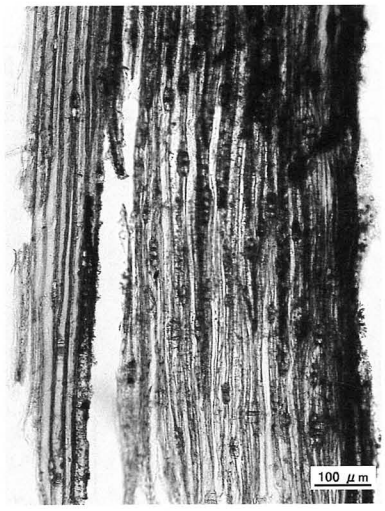
2. 編み物9横・カヤ



木口面



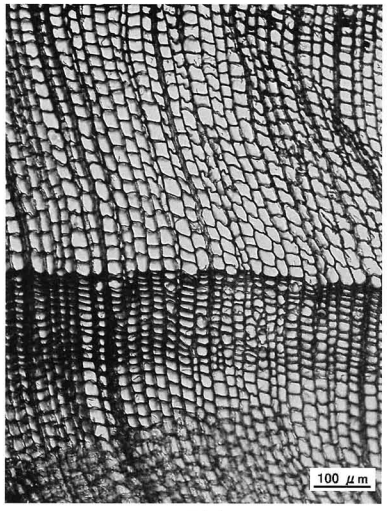
柾目面



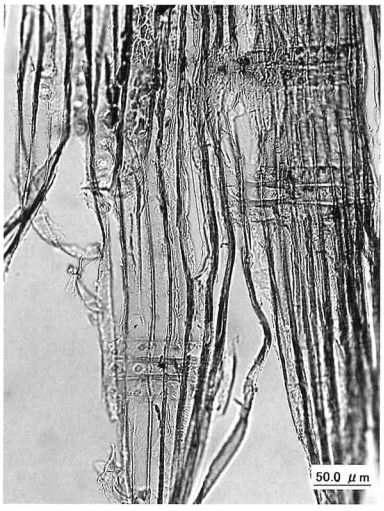
板目面

3. 編み物10縦・ヒノキ科

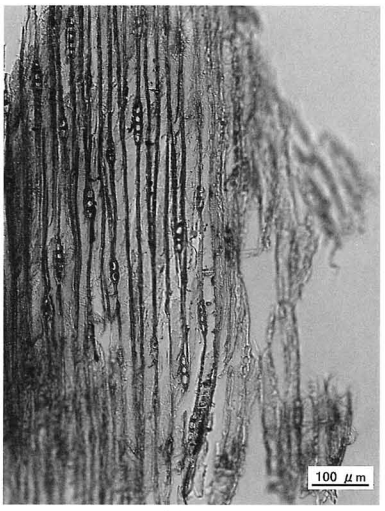
写真図版Ⅰ



木口面

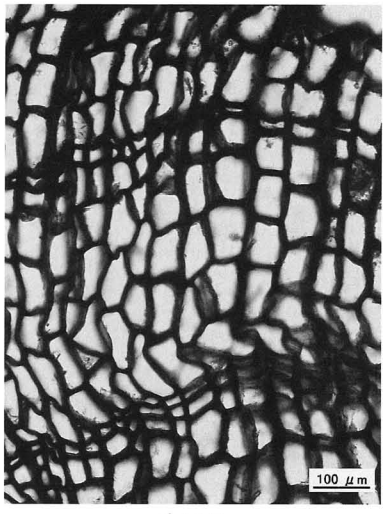


柾目面

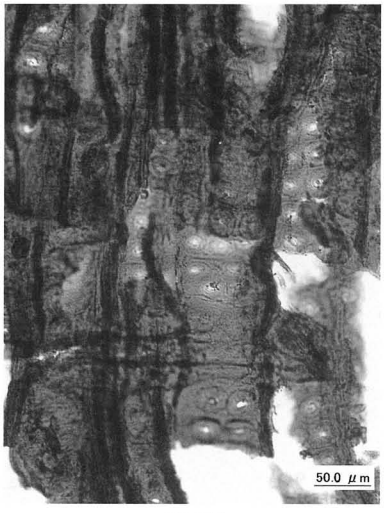


板目面

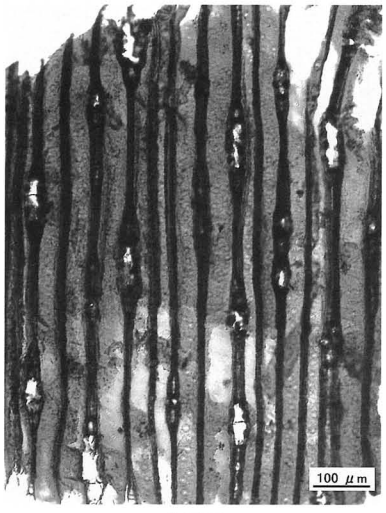
4. 編み物10横・ヒノキ科



木口面

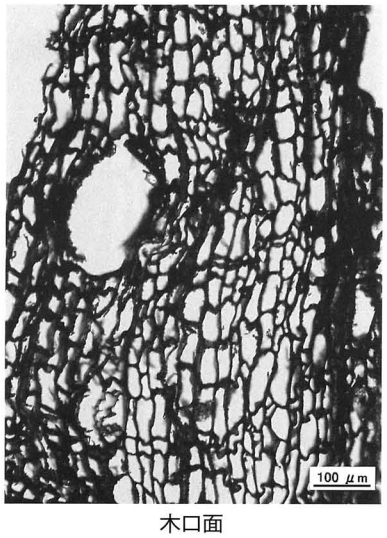


柾目面

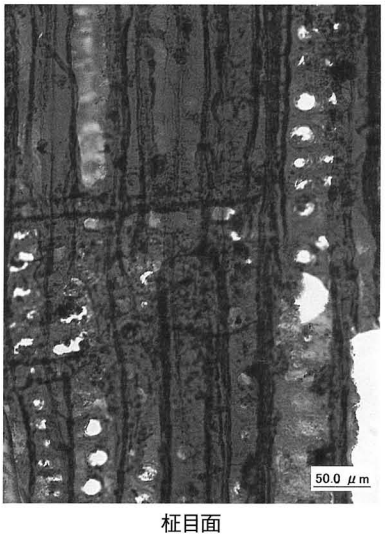


板目面

5. 編み物29縁・マツ属（二葉松類）



木口面

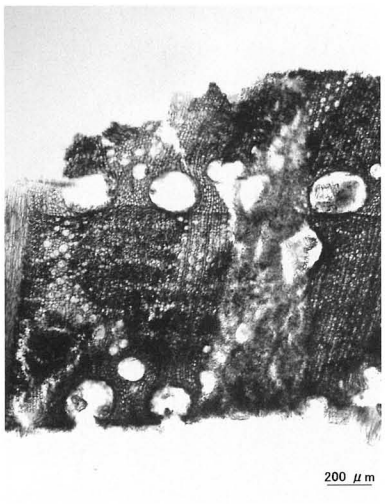


柾目面

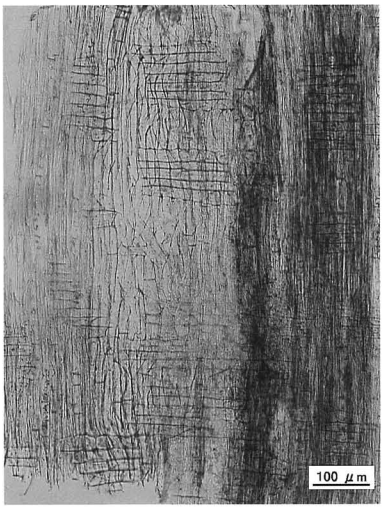
板目面

6. 編み物38横・マツ属（二葉松類）

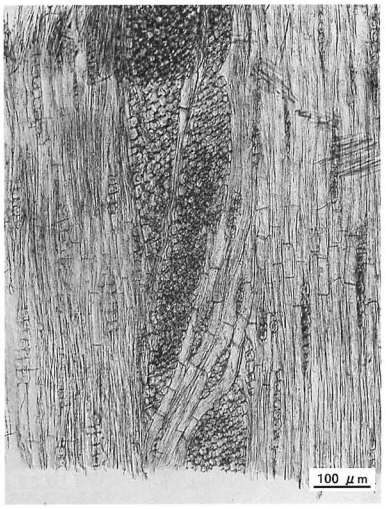
写真図版Ⅱ



木口面

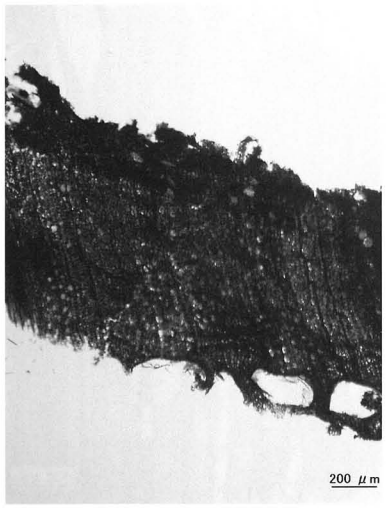


柾目面

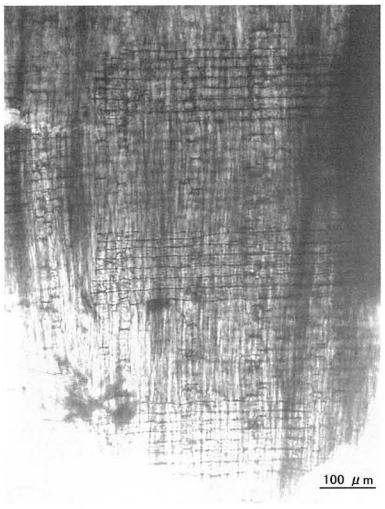


板目面

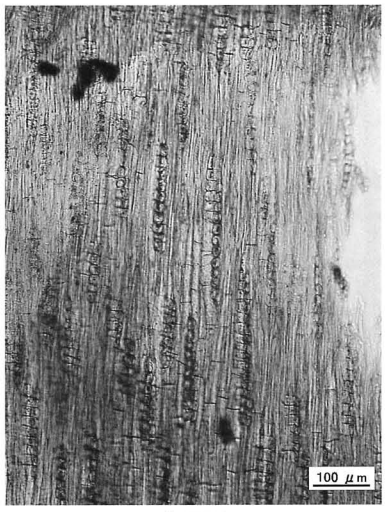
7. 編み物39芯・コナラ節



木口面

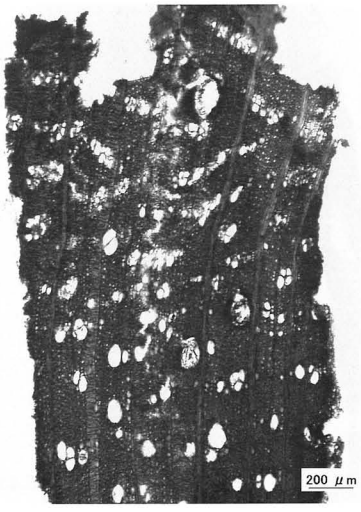


柾目面

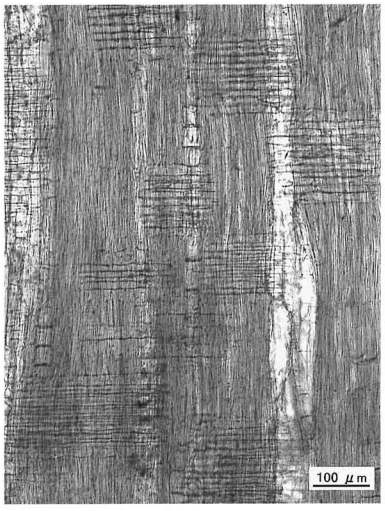


板目面

8. 編み物4芯・コナラ節



木口面



柾目面

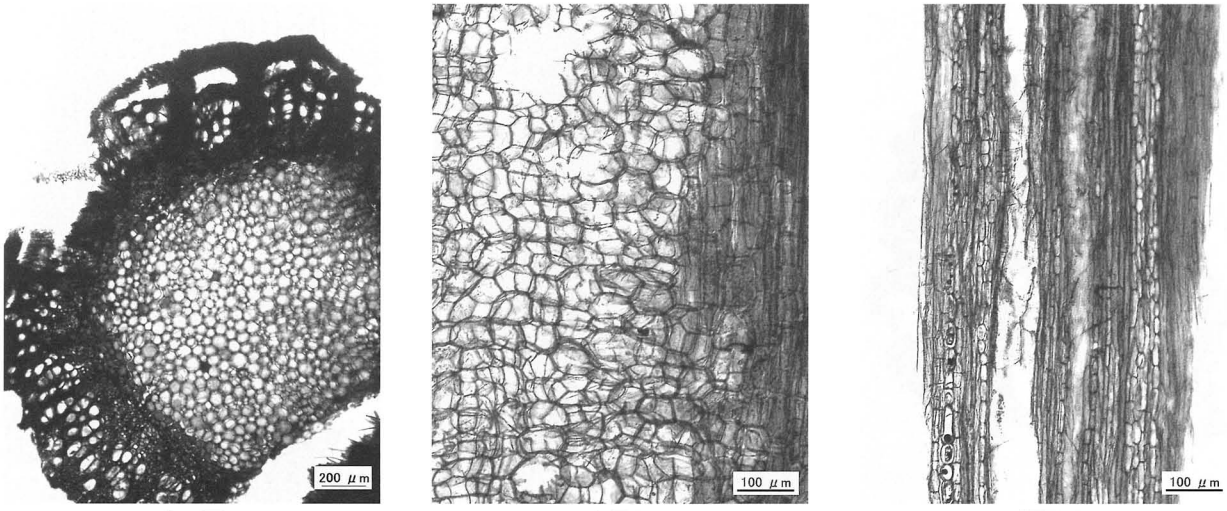
板目面

9. 編み物2芯・ニレ属

写真図版Ⅲ

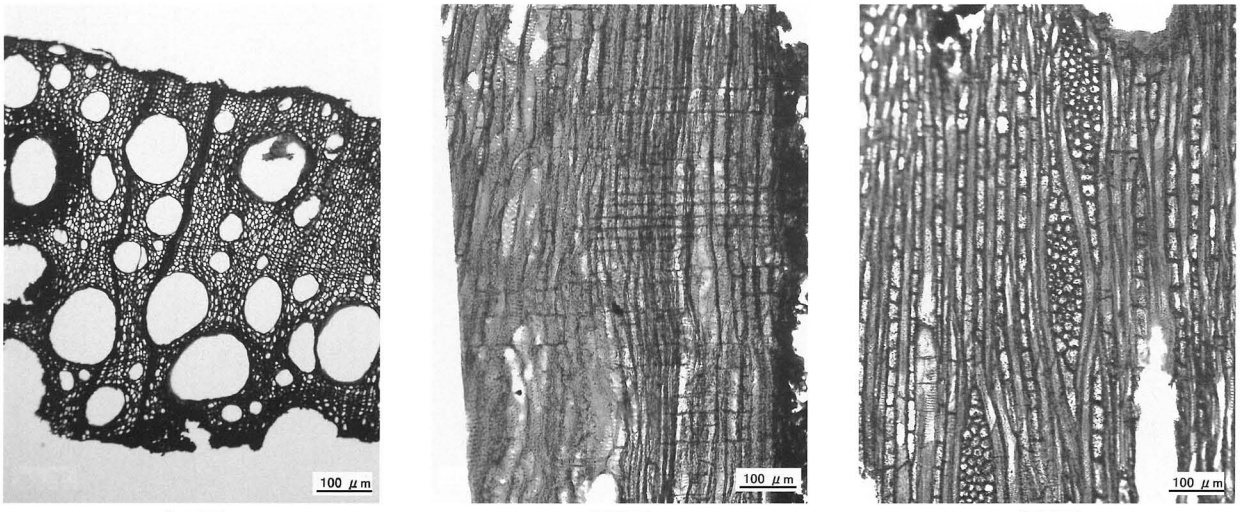
木口面　柾目面　板目面

10. 編み物7縦・ニレ属



木口面　柾目面　板目面

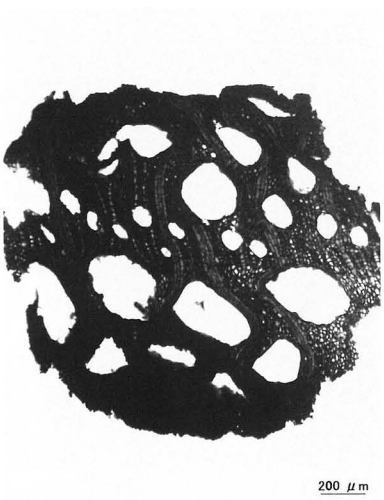
11. 編み物28部材・マタタビ属の当年枝



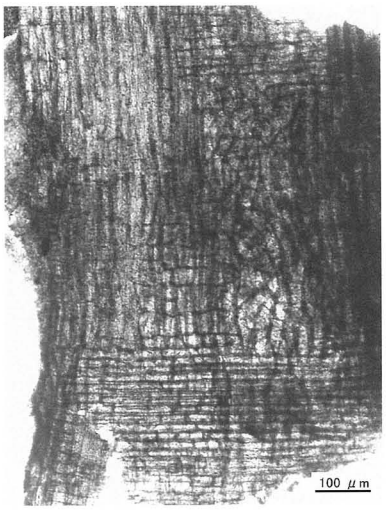
木口面　柾目面　板目面

12. 編み物30縦・マタタビ属

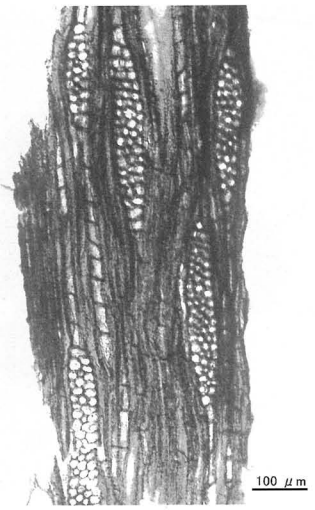
写真図版Ⅳ



木口面

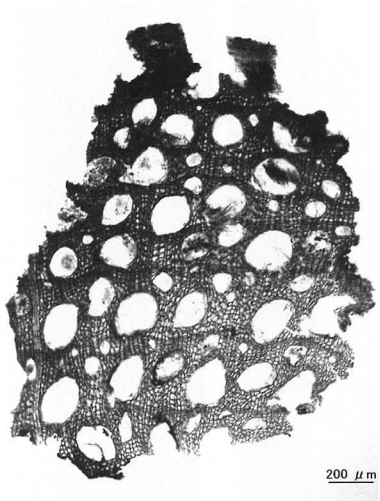


柾目面

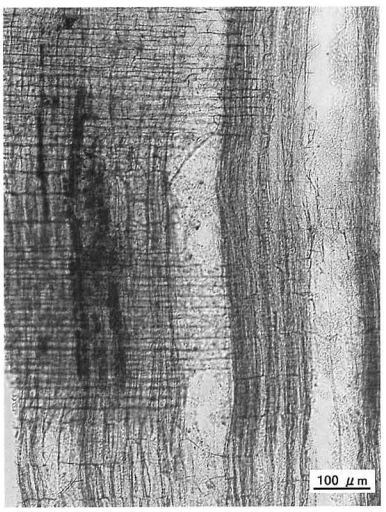


板目面

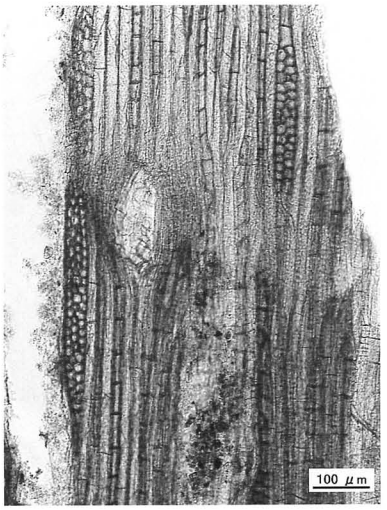
13. 編み物36縁・マタタビ属



木口面

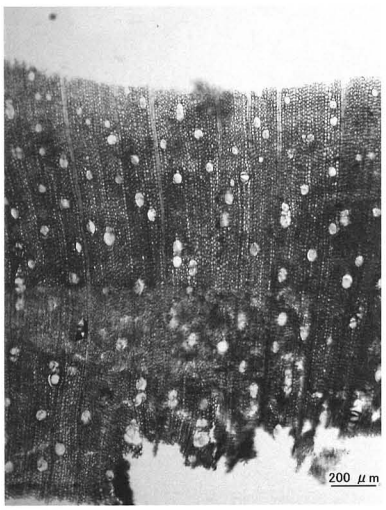


柾目面

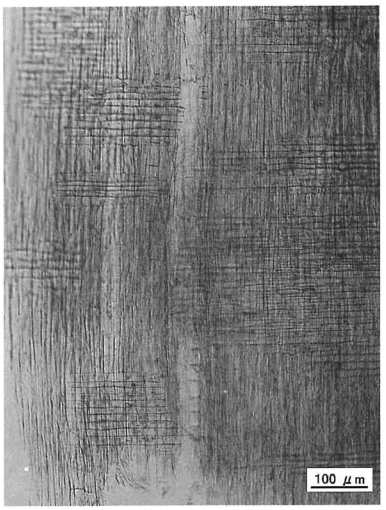


板目面

14. 編み物7横・マタタビ属



木口面

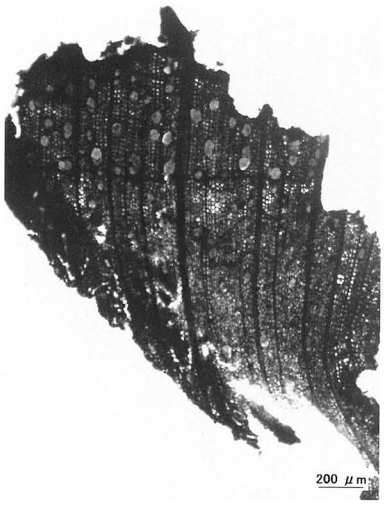


柾目面

板目面

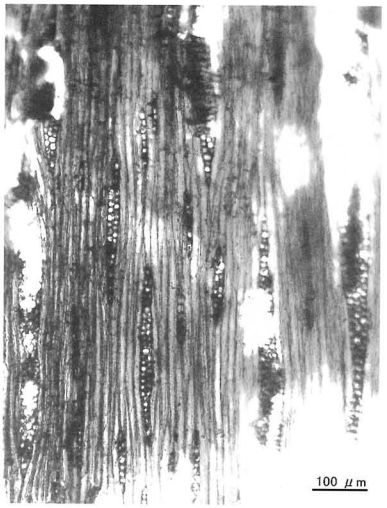
15. 編み物41芯・カエデ属

写真図版Ⅴ



木口面

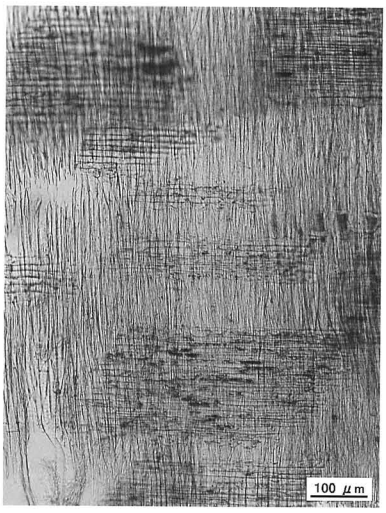
柾目面



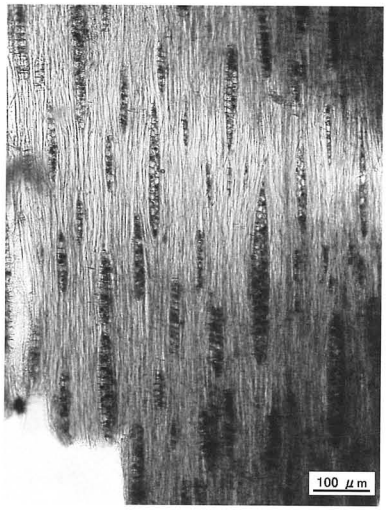
板目面

16. 編み物29芯・カエデ属

木口面

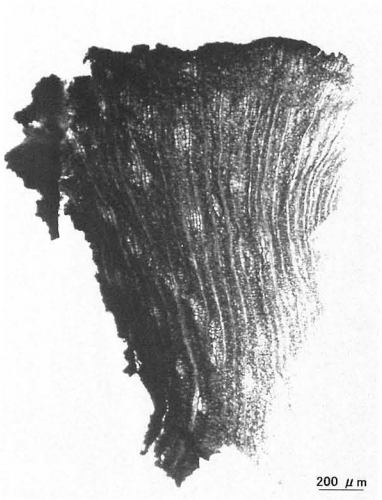


柾目面

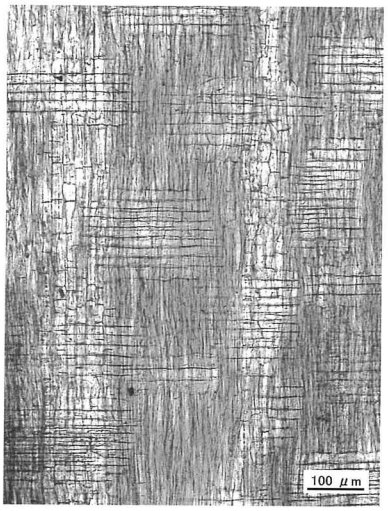


板目面

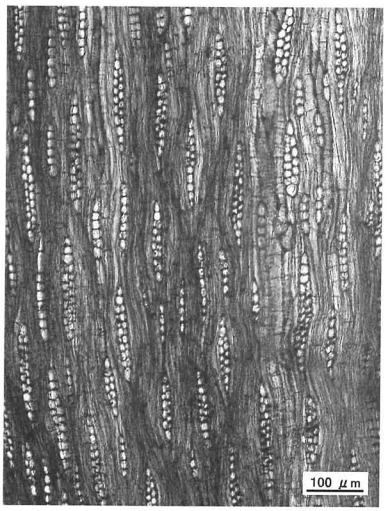
17. 編み物39横・カエデ属



木口面



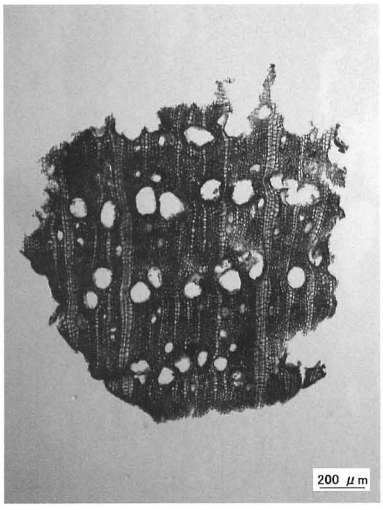
柾目面



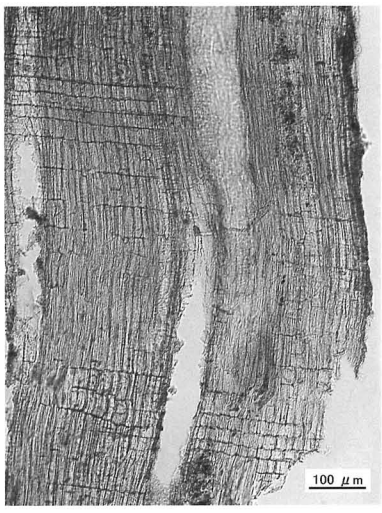
板目面

18. 編み物36本体・ムクロジ

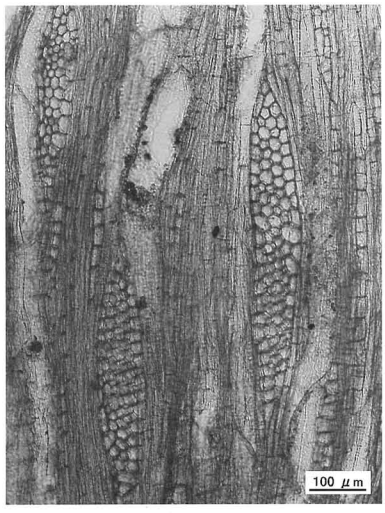
写真図版Ⅵ



木口面

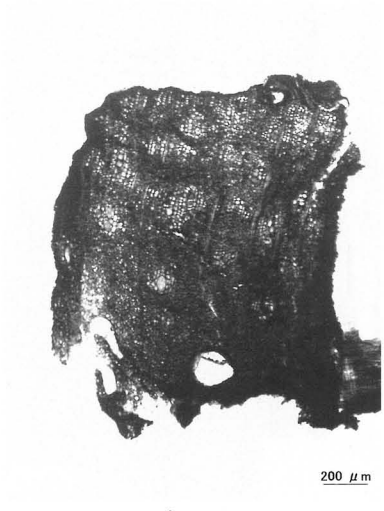


柾目面

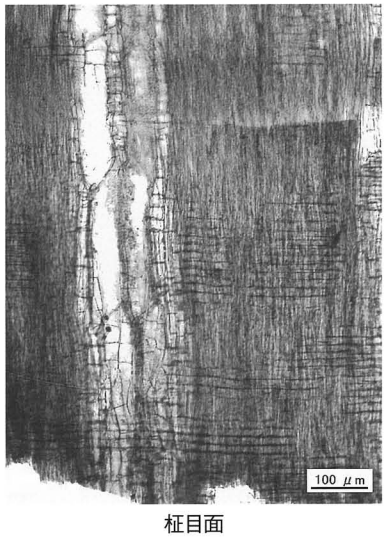


板目面

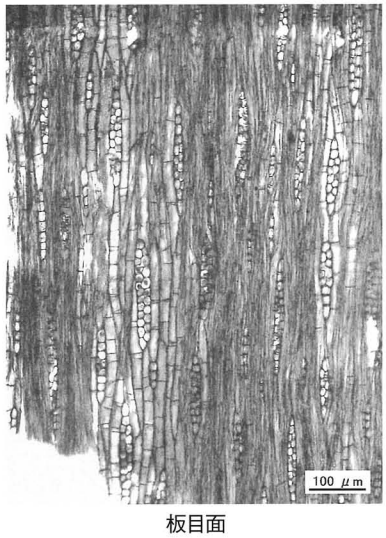
19. 編み物15縦・ケンポナシ属



木口面

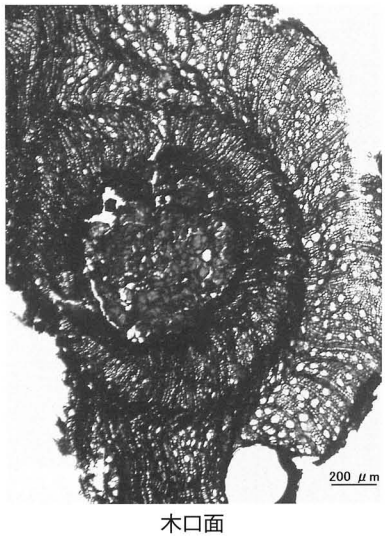


柾目面

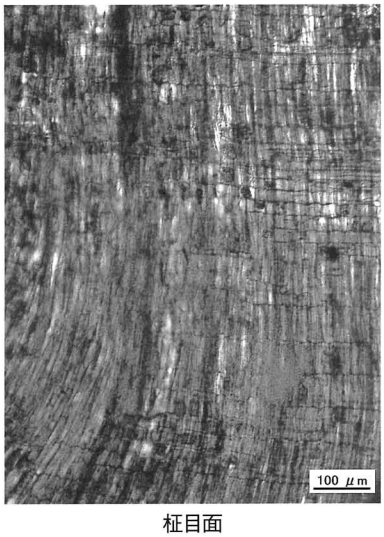


板目面

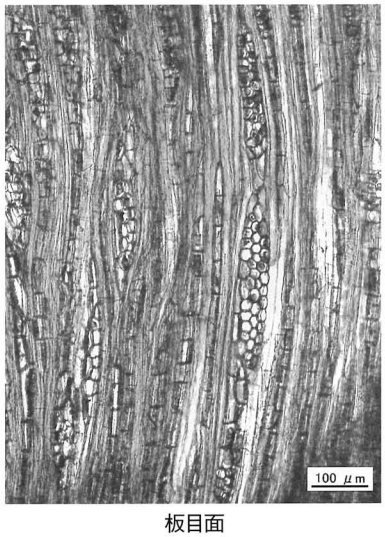
20. 編み物3芯②・トネリコ属



木口面



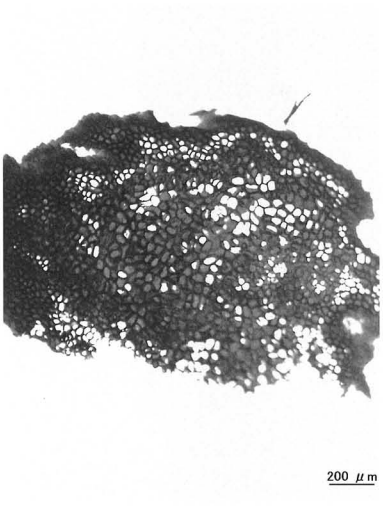
柾目面



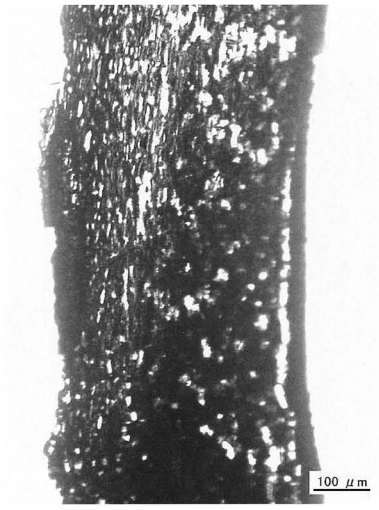
板目面

21. 編み物24芯・広葉樹散孔材

写真図版Ⅶ



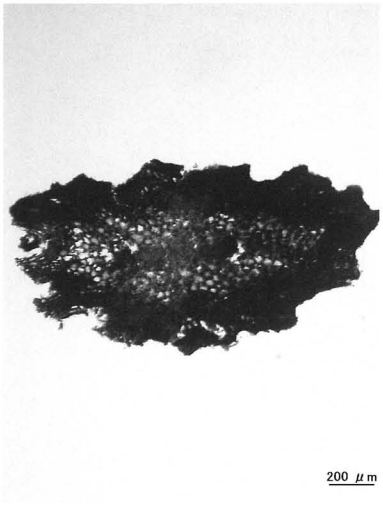
横断面



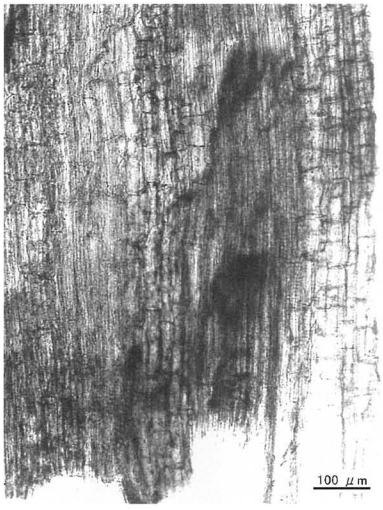
繊維繊維方向断面1

繊維方向断面2

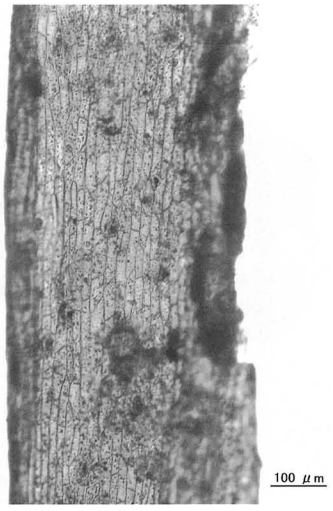
22. 編み物3縁・(細枝の髄部分のみ残存したもの)



木口面

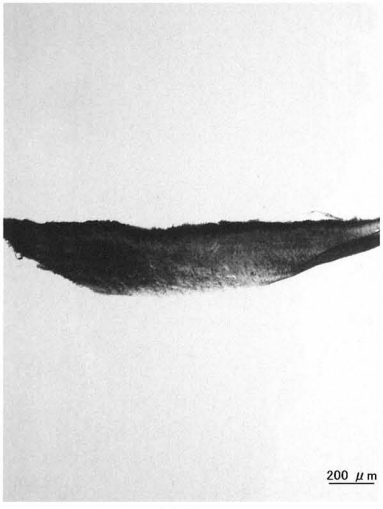


柾目面

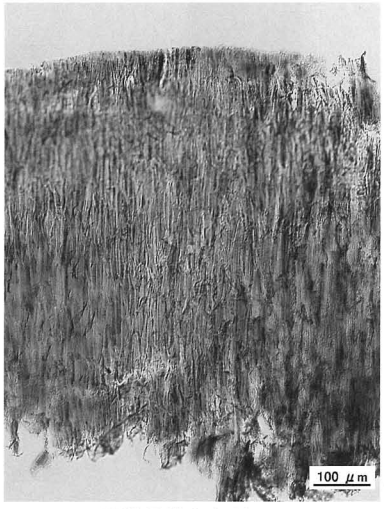


板目面

23. 編み物40横・蔓or 草本



横断面

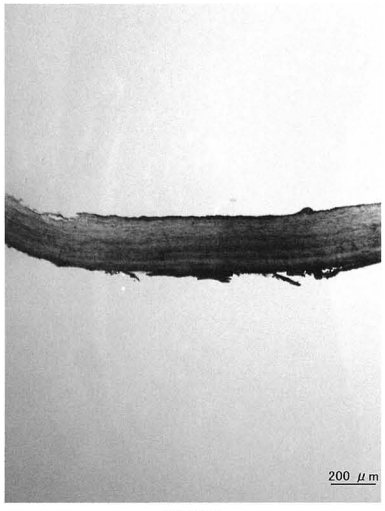


繊維繊維方向断面1

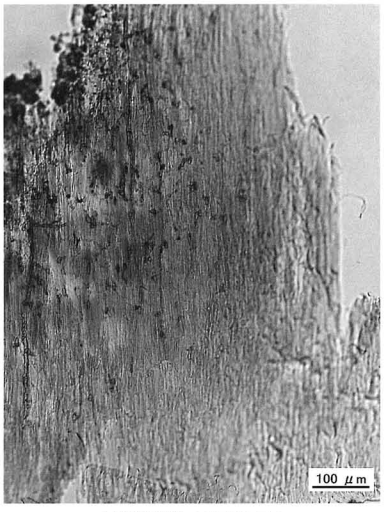
繊維方向断面2

24. 編み物27縁・樹皮

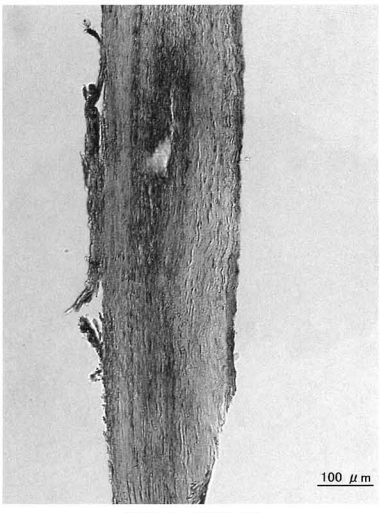
写真図版Ⅷ



横断面

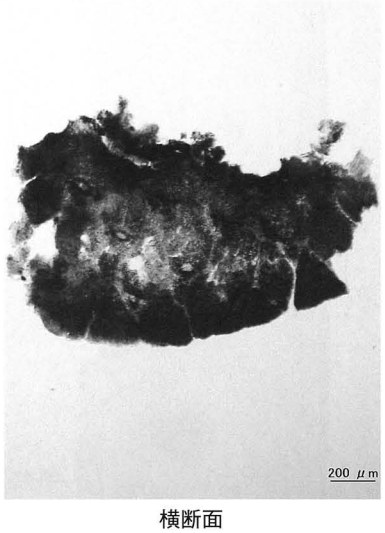


繊維繊維方向断面1



繊維方向断面2

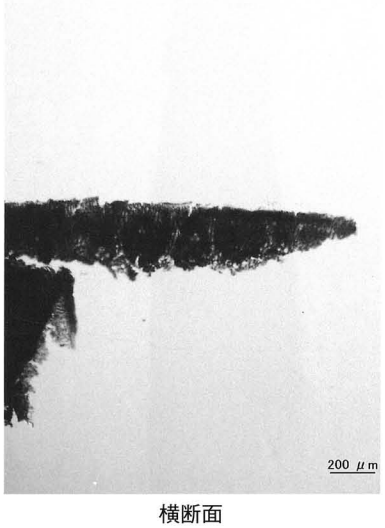
25. 編み物41縁・樹皮



横断面

繊維繊維方向断面1

26. 編み物40芯・竹笹類



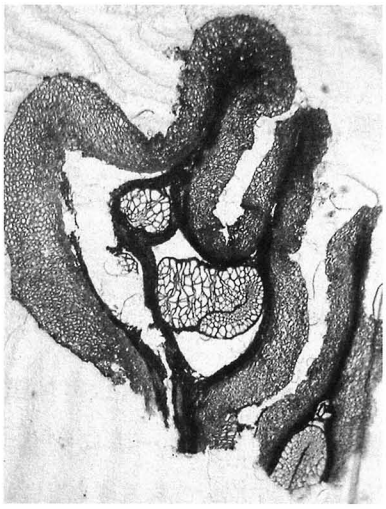
横断面

繊維繊維方向断面1

繊維方向断面2

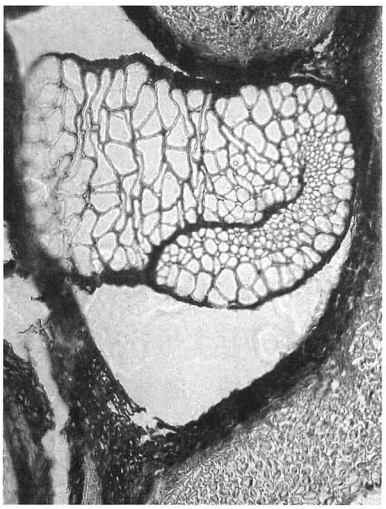
27. 編み物20横・竹笹類

写真図版Ⅸ

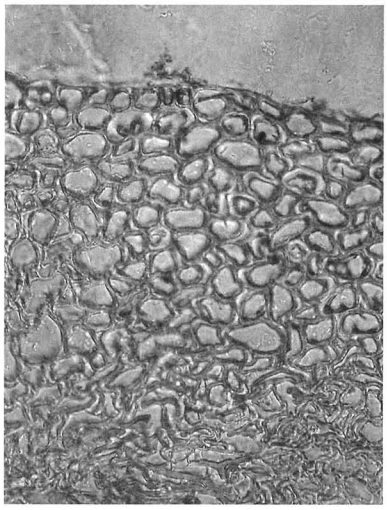


1. 縄53，横断面40倍

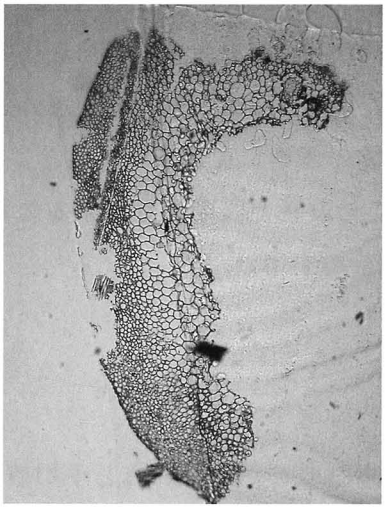
2. 同60倍



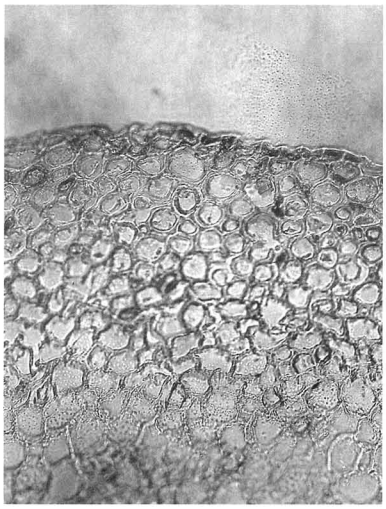
3. 同120倍



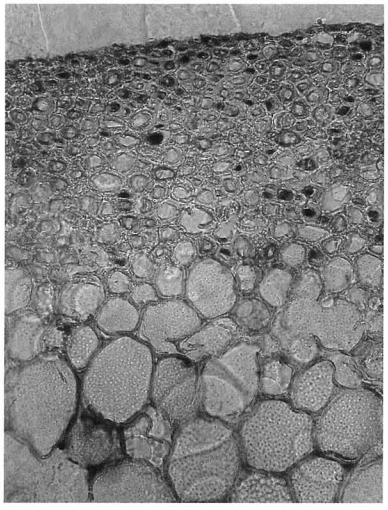
4. 縄53，横断面180倍



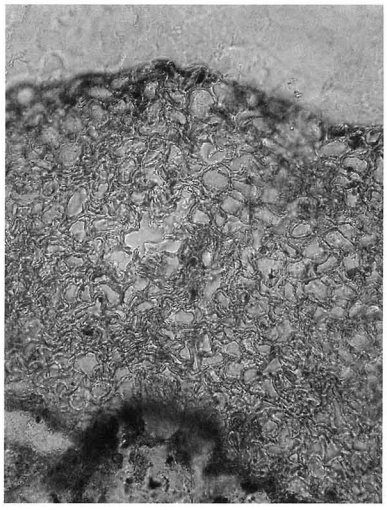
5. 縄51，横断面18倍



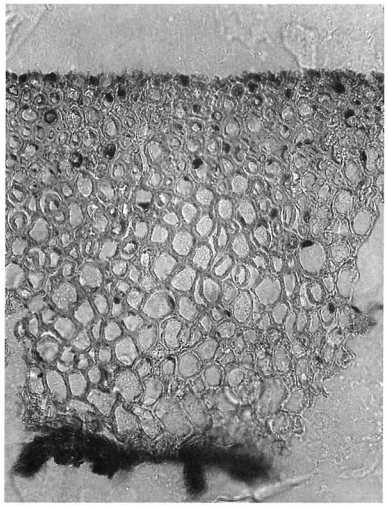
6. 同180倍



7. 縄52-1，横断面180倍



8. 縄52-2，横断面180倍



9. 縄54，横断面180倍

写真図版X

6　小矢部市桜町遺跡・漆塗り製品の科学分析

四柳　嘉章（漆器文化財科学研究所）

Ⅰ．分析の方法

漆製品はその品質の解明が、製作技術、用途、流通などの復元に大きな手がかりを与える。以下の分析方法を用いて、品質の解明をおこなった。

1）塗膜分析　塗装工程や材料の解明。漆製品の内外面数箇所から数㎜の塗膜片を採取し実体顕微鏡顕で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋し、その断面を研磨のうえプレパラートに接着。さらに研磨を加えて（♯100～3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行った[1)]。

2）赤外分光分析　塗料及び膠着液（剤）の同定。塗膜分析では間接的であるため、赤外線（普通赤外波長2.5～25μm、波数4000～400cm^{-1}）を固有の振動をしている分子（試料）に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT-IR）を用いた。

3）蛍光Ｘ線分析　赤色顔料の同定。試料にＸ線を当てると、元素特有のＸ線（特性Ｘ線ないし固有Ｘ線）が発生（放出）する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行うエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析を用いた。

Ⅱ．分析結果

1）塗膜分析

塗膜分析は１資料につき内外面各３点の試料を作成し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。以下、素地から塗装順に番号（①～）を付して説明する。赤色漆の色調表現はマンセル値によるもので、「4R　4／11」とあるものは、4Rは色相、4／11は明度／彩度である。№は小矢部市教育委員会の漆製品資料番号。ベンガラと表記したものは、全てパイプ状ベンガラ粒子。

［漆塗り土器］

◇№15（鍔付土器、中期後葉、顕微鏡写真図版１）

表面観察

大型の体部片で、内面赤色漆（ベンガラ）、外面黒色系漆。

塗膜分析

内面①漆層。層厚24～122μm。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚17～30μm（窪みの深いところでは83μm）。ベンガラ粒子は大きなもので径1.5×15μm。径1.5×5μm前後のものが粗く分散し、細かいものは径0.5μm以下の多角形粒子。

◇№16（器形不詳、中期？、図版なし）

表面観察

内外面赤色漆塗り（以下総赤色とする）の小片。

塗膜分析

内面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚39～49μm。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚29～58μm。ベンガラ粒子は①・②層ともに径1.5×7μm前後の粒子が粗く分散するが、大半は径1μm以下の多角形粒子。

◇No.58（鍔付土器？、中期後葉、図17、顕微鏡写真図版１）

表面観察

内外面研磨された鍔付土器？。下塗りの黒色地に赤色（ベンガラ）漆塗り。

塗膜分析

外面①黒色漆層。層厚14～88μm。針葉樹の炭粉粒子が沈殿。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚98～194μm。ベンガラ粒子は径1.5×7μmのものも粗く分散するが、大半は径1μm以下の多角形粒子。

◇No.63（鍔付土器、中期後葉、図17、顕微鏡写真図版５）

表面観察

鍔付土器の底部。総赤色（ベンガラ）漆塗り（底部裏を除く）。

塗膜分析

内面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚122μm前後。ベンガラ粒子は大きいものでも径1.5×3μm前後で、大半は径1μm以下の多角形粒子。

◇No.90（鍔付土器、中期後葉、顕微鏡写真図版１）

表面観察

鍔付土器の体部片。総赤色（ベンガラ）漆塗り（底部裏を除く）。

塗膜分析

内面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚24～68μm。ベンガラ粒子は径2×14μm前後、径2×6μm前後のもと、径0.5μm以下の多角形粒子からなる。長石などの鉱物が若干含まれている。

◇No.101（鍔付土器、中期後葉、図17、顕微鏡写真図版１）

表面観察

鍔付土器の体部片。総赤色（ベンガラ）漆塗りであるが、外面塗膜は大半が剥離している。

塗膜分析

内面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚39～98μm。ベンガラ粒子は径1.2×5～7μmのものも粗く分散するが、大半は径1μm以下の多角形粒子。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚29～34μm。ベンガラ粒子は径1μm以下の多角形粒子が大半で、下層よりも細かい。

◇No.102（鍔付土器、中期後葉、図17、顕微鏡写真図版１）

表面観察

鍔付土器の脚部か。脚部畳付けから外面が赤色（ベンガラ）漆塗り。

塗膜分析

外面①赤色漆層。層厚17～50μm。ベンガラ粒子は元来径1.5μmほどのものであるが、大半は径0.5μm以下の微細な多角形粒子。

◇No.104（器形？、中期？、図17）

表面観察

外面赤色（ベンガラ）漆塗りの小片。器形不詳。

塗膜分析

外面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚44～191μm。ベンガラ粒子の大きなものは、径1.5×7μmほどであるが、大半は径0.5μm以下の微細な多角形粒子。

◇No.109（器形？、中期？、図17、顕微鏡写真図版２）

表面観察

総赤色（ベンガラ）漆塗りの小片。器形不詳。

塗膜分析

外面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚29～74μm。ベンガラ粒子は、径1.5×5μm前後のものと、径1μm以下の多角形粒子。

◇No.112（鍔付土器？、中期後葉、図17、顕微鏡写真図版２）

表面観察

総赤色（ベンガラ）漆塗りの小片。器形は鍔付土器か。

塗膜分析

外面①漆層。層厚5～32μm。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚183～270μm。ベンガラ粒子の大きなものは、径1.2×15μmほどであるが、大半は径1μm以下の多角形粒子。

◇No.116（鍔付土器、中期後葉、図17、顕微鏡写真図版２）

表面観察

外面赤色（ベンガラ）漆塗りの鍔付土器で、鍔の内部まで丁寧に塗られている。

塗膜分析

外面①漆層。層厚54～267μm。ベンガラ粒子の大きなものは径1.5×20μmで、径1.5×3～7μmのものが粗く分散。大半は径0.5μm以下の微細な多角形粒子。

［漆容器など］

◇No.136（丸底土器、後期末～晩期、図17、顕微鏡写真図版４・８）

表面観察

内面に生漆が付着した丸底土器（粗製）で外面は無文。現状では部分的に生漆の大きな縮み皺が付着しているが、全体に漆が付着していたようであり、パレットよりも漆容器の可能性が高い。

塗膜分析

内面①生漆層。分析サンプルの最大層厚183μm。大小のゴム質水球の分散状況がよく観察できる。

◇№137（丸底土器、後期末～晩期、図17、顕微鏡写真図版４・８）

表面観察

小型の丸底土器（粗製）で外面は無文。内面全体はベンガラだけの塗りで、その上に肉眼では黒色にみえる生漆が付着し、部分的に大きな縮み皺が認められる。これを内面漆塗りとみるよりも漆容器とみたい。

塗膜分析

内面　①ベンガラ漆。層厚不明。②生漆層。分析サンプルの最大層厚490μm。№136同様に大小のゴム質水球の分散状況がよく観察できる。

［木胎漆器］

◇№121（把手付鉢、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版２）

表面観察

把付がついた総赤色（ベンガラ）漆塗り鉢。口縁は上部からみると偏円形で、長径19.3cm、短径16cm、器高7.0cm。把手は大きなもので、握りやすく造形されている（幅2.3cm、高さ5.7cm）。底部外面はあたかも樹皮を帯状に巻き付けたかのように彫刻された優品。赤色のマンセル値は7.5R　3.5／7（深緋）。ヨコ木取り（以下すべて同様のため省略）。樹種ケヤキ。

塗膜分析

外面①漆層。層厚不明。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚49～147μm。ベンガラ粒子の大きなものは、径1.5×5μmほどであるが、大半は径1μm以下の多角形粒子。

◇№122（脚部、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版２・７）

表面観察

外方にはりだした厚手の脚部。意匠は縦長帯状の彫刻が3単位？に配置されたもの。全体に黒色漆が塗られ（畳付けなど内面を除く）、彫刻部分と脚の裾回りには更に赤色（ベンガラ）漆塗りされている。赤色のマンセル値は、9R　3.5／8.5（赤錆色）。樹種トチノキ。

塗膜分析

外面①炭粉漆層。層厚10～29μm。炭粉粒子は沈殿しており、大きなものは径2×7μmだが、大半は径1μm以下の多角形粒子。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚90～110μm。ベンガラ粒子は、径1×5～7μmと、1μm以下の多角形粒子。

◇№123（皿、中期末～後期初頭、顕微鏡写真図版３）

表面観察

ゆるやかに開く皿状の薄手の木地に、総赤色漆塗りされたもの。赤色のマンセル値は、5R　3／4（マホガニー）。樹種ケヤキ。

塗膜分析

底部外面①漆層。層厚10μm前後。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚42μm前後。③赤色（ベンガラ）漆層。層厚20μm前後。②・③層のベンガラ粒子は、大半が径1μm以下の均質に破砕された多角形粒子。密度は上層（③層）がやや薄い。

◇№124（脚？、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版２）

表面観察

脚と考えられるもので、総赤色漆塗り。表面観察では黒色地に赤色（ベンガラ）漆塗りと判断されるが、分析サンプルでは下塗りが残されていない。赤色のマンセル値は9R　3.5／8.5（赤錆色）。

塗膜分析

外面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚7～24μm。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚19～32μm。ベンガラ粒子は2層ともに径1.5×5μm前後のものと、径１μm以下の多角形粒子。

◇№125（鉢、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版２・７）

表面観察

体部肩から外反する口縁部の鉢。黒色地に口縁部外面から内面は赤色（ベンガラ）漆塗り。内面は一部火熱を受け、口縁部には径5mmと径2mmの穿孔がみられる。穿孔については径2mmが虫食いの可能性があるとしても、径5mmは人工的な補修孔かもしれない。赤色のマンセル値は4R　4／11（臙脂）。樹種ケヤキ。

塗膜分析

口縁部外面①漆層。層厚12～24μm。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚34～96μm。ベンガラ粒子は径2×7μm前後のものと、径2μm以下の多角形粒子。

◇№126（鉢、中期末～後期初頭、顕微鏡写真図版３）

表面観察

鉢の口縁部だけに赤色（ベンガラ）漆塗り塗膜がかろうじて残存している。赤色のマンセル値は9R　3.5／8.5（赤錆色）。樹種ケヤキ。

塗膜分析

内面①炭粉漆層。層厚24～147μm。針葉樹の炭粉粒子が沈殿。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚32～3μm。ベンガラ粒子のブロックと石英などの鉱物粒子を含んでいる。③赤色（ベンガラ）漆層。層厚23～36μm。上層（3層）の密度はやや薄いが、ベンガラ粒子は２層とも大きなものは径2×5μm前後であるが、大半は径1μm以下の多角形粒子。

◇№127（片口鉢、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版３・８）

表面観察

長円形の先に片口がついた総赤色（ベンガラ）の鉢。口縁部よりも体部が膨らみ、片口部分は斜上方に開く。整形は入念に行われており、口縁部外面は隆線による横位区画内をやや削り、同様に体部も口縁部からゆるやかにカーブを描きながら縦位の区画が配置されている。赤色のマンセル値は7.5R　3.5／7（深緋）。樹種イヌガヤ。

塗膜分析

内外面①赤色（ベンガラ）漆層。層厚20μm前後。ベンガラ粒子は径0.5μm以下の多角形粒子。

◇No.128（鉢、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版３）

表面観察

斜上方に開く総赤色（ベンガラ）の鉢で、口唇部はフラット。体部に２つの穿孔を有するが、虫食いの検討も必要。赤色のマンセル値は9R　3.5／8.5（赤錆）。

塗膜分析

内外面①漆層。層厚12～31μm。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚64～105μm。ベンガラ粒子は径1.5×5μm前後と、径1μm以下の多角形粒子。

◇No.129（樹皮、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版３・７）

表面観察

楕円形に巻きつけられた樹皮製品で、最大幅は1.7cmほど（２点に分割）。樹皮の幅は2～35mm。全体に朱漆塗りされている（唯一の朱漆塗り）。朱のマンセル値は7.5R　5／12(赤丹)。

塗膜分析

外面①漆層。層厚24～147μm。②赤色（朱、HgS）漆層。層厚17～110μm。朱粒子は大きなもので径41×49μmの多角形、径10μmと1μm以下の多角形粒子が粗く分散している。③赤色（朱、HgS）漆層。層厚24～32μm。朱粒子は大きなもので径14×17μmの多角形、径7μmと1μm以下の多角形粒子が粗く分散している。

◇No.132（柱状品、中期末～後期初頭、顕微鏡写真図版３）

表面観察

半割の柱状品で、全体に茶黒色を呈している。樹種エノキ属。

塗膜分析

外面①木胎の表面から183μmほどが茶黒色となっている（黒色顔料なし）。自然の着色か膠着液によるものかは不明。

［結歯式堅櫛］

◇No.133（結歯式堅櫛、後期末～晩期、図16、顕微鏡写真図版３・８）

表面観察

頭（棟）部が蒲鉾形の総赤色（ベンガラ）の結歯式堅櫛。横架材がぐっと張り出したもの。歯は円形で径4～5cm。頭部では長方形に薄く削り出されている（幅1.5～2.0cm）。歯の素材は残っていない。赤色塗膜は光沢が全くなく、劣化がかなり進行している。赤色のマンセル値は9R　3.5／8.5（赤錆色）。

塗膜分析

①コクソ漆層。層厚は不明であるが、全体に植物繊維が分散している。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚68μm前後。ベンガラ粒子は径1μm以下。

◇No.134（結歯式堅櫛、後期末～晩期、図16、顕微鏡写真図版３・８）

表面観察

角状突起と透かし彫り文様を有する総赤色（ベンガラ）の結歯式堅櫛。歯先を欠くが残りの

良い優品である。歯は16本で棒状の丸い径は、下部で4～5mm、上部で1.8～2.0mm。構造的には角状突起を表現するために左右両端の歯を長くし、植物繊維の紐で横位にからげてつづった（かがった）もので、上部１本と下部３本は太い紐を使用している。歯はすべて頭頂部まで伸びており、これを削り込んで、中央の十字と上下左右の透かし彫り文様が加飾されている。現状の最大横幅9.65cm、最大縦長6.8cm。赤色のマンセル値は7.5Ｒ　3.5／6（印度赤）。

塗膜分析

歯部（下部の歯と歯の間）①コクソ漆層。最大層厚は343μm。全体に植物繊維が分散している。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚24～86μm。③赤色（ベンガラ）漆層。層厚49～62μm。②・③層のベンガラ粒子は径2μm以下の多角形粒子で、わりと均一に破砕されている。なお②・③層は部分によっては３層。

◇№135（結歯式堅櫛、後期末～晩期、図16、顕微鏡写真図版３・８）

表面観察

蒲鉾形頭部の総赤色（ベンガラ）結歯式堅櫛で、歯先を欠く。歯は現存７本であるが、元来は９本と思われる。棒状の歯径は5mm前後。構造的には歯部に対して、下部の表裏面に半載状の横架材を２本渡して、植物繊維の紐で横位にからげてつづり、頭部の歯は板状に薄く削り出されているので、細い紐で同様につづっている（頭頂部の周縁も）。現状の最大横幅5.6cm、最大縦長4.0cm。赤色のマンセル値は5Ｒ 3／4（マホガニー）。

塗膜分析

歯部（下部の歯と歯の間）①コクソ漆層。最大層厚は980μm以上。全体に植物繊維が分散している。②赤色（ベンガラ）漆層。層厚12～39μm。ベンガラ粒子は、径0.5μm以下の微細な多角形粒子。

［漆塗り丸木弓］

◇№131（丸木弓、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版１・４）

表面観察

ニシキギの樹皮をはいで丸木弓としたもので、推定全長約177cm、弓幹平均厚約２cm。弭は削り出して突起と窪み（樋）を作り、少し上部は補強のための糸巻き（植物繊維）がある。その幅は図16右端で約3.3cm、糸の太さは0.1～0.3mm、左端で幅約1.0cm。糸巻きは弭など数箇所に認められる。弓幹全体は漆塗りされ（１～２層、茶黒色）、糸巻き部分はいくぶん厚手の塗りとなっている。

塗膜分析

図16右上部（弭付近）糸巻き部分（顕微鏡写真図版１－131、左）①繊維層。繊維束の最大層厚は、タテ200μm、ヨコ250μm。②漆層。層厚は糸上部で14μm、谷部分で269μm。表層5～10μmが変質。

図16左中ほど下部（顕微鏡写真図版１－131、右）①漆層。層厚12～39μm。表層5μm前後が変質。図16右端糸巻き付近（図版なし）①漆層。層厚24～147μm。②漆層。層厚12～98

μm。表層20μm前後が変質。

［赤色漆塗り糸］

◇№130（糸、中期末～後期初頭、図16、顕微鏡写真図版７）

表面観察

やや弧をえがく赤色（ベンガラ）漆塗り糸。現存長約40mm、幅（太さ）2.5～3.0mm。断面観察からみた塗膜厚は100～300μmであり、3～4層の塗り重ねが考えられる。胎の繊維はほとんど残っていないが、厚さは1.5mm前後である。塗膜はなめらかな光沢があり、赤色のマンセル値は9R　3.5／8.5（赤錆色）。

塗膜分析

遺存量が少ないので未分析（赤外分光分析、蛍光X線分析、小結参照）。

2）赤外分光分析

漆の同定については、赤外線（普通赤外波長2.5～25μm、波数4000～400cm^{-1}）を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT/IR）を用いた（測定機器は日本分光製FT/IR420）。試料は２mgを採取しKBr（臭化カリウム）100mgをメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた（錠剤法）。条件は分解能４cm^{-1}、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを図１～６（ノーマライズ）に掲載した。縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（カイザー）。

図１は漆容器内面付着の、光学顕微鏡観察でも大小のゴム質水球が観察される生漆塗膜（①・③）の赤外線吸収スペクトル。生漆の基準データは岩手県浄法寺産（1990年製作、②）。①・③は1070～1030cm^{-1}のゴム質の吸収が増大し、③は1465～1375cm^{-1}付近がブロードとなっている。しかし、全体として3400cm^{-1}（水酸基、OH伸縮）、2925cm^{-1}（炭化水素の非対称伸縮振動）、2850cm^{-1}（炭化水素の対称伸縮振動）、1720～1710cm^{-1}（カルボニル基）、1650～1630cm^{-1}（糖タンパク）、1465cm^{-1}（活性メチレン基）、1280cm^{-1}（フェノール）を中心とした左右のショルダー（1215cm^{-1}、1375cm^{-1}）、1070～1030cm^{-1}（ゴム質）の吸収などから漆塗膜の特徴が認められる。

図２は木胎漆器ベンガラ漆塗膜の赤外線吸収スペクトル。基準データは岩手県浄法寺産精製漆塗膜（1992年製作、②）、金沢市米泉遺跡（縄文後・晩期、①）の劣化した生漆塗膜。④・⑤・⑤はベンガラの吸収も認められるが、1465～1375cm^{-1}付近がブロードで、1070～1030cm^{-1}（ゴム質）の増大から劣化の進行がうかがえ、全体として前述の漆塗膜同定要素を満たしている。

図３は赤色（ベンガラ）漆塗り糸（紐、③）の赤外線吸収スペクトル。基準データは岩手県浄法寺産精製漆塗膜（1992年製作、②）、金沢市米泉遺跡（縄文後・晩期、①）の劣化した生漆塗膜。ベンガラの吸収も若干認められるが、米泉遺跡（生漆、①）と近似した吸収を示している。

図４は土器に塗られたベンガラ漆塗膜の赤外線吸収スペクトル。基準データは岩手県浄法寺産精製漆塗膜（1992年製作、②）。1465～1375cm^{-1}付近がブロードで、1200cm^{-1}以下にベンガラの吸収も認められるが、全体として前述の漆塗膜同定要素を満たしている。⑥（№120、新崎式期）

は桜町遺跡の漆塗り土器としては最古例。

図５は土器に塗られた、肉眼では黒色にみえる生漆ないし半精製漆（黒色系漆とよぶ）で、内面や外面の赤色と黒色の塗り分けに用いられている。基準データは岩手県浄法寺産精製漆塗膜（1992年製作、①）と新潟県道下遺跡の劣化生漆（②）。道下遺跡のデータはゴム質の吸収が著しく、1465～1375cm^{-1}付近もブロード。しかしかろうじて1280cm^{-1}（フェノール）とその他の同定要素の吸収が認められ、顕微鏡観察においてもゴム質水球の分散が確認できた典型的な劣化生漆。③～⑦はこれに近似している。図６も図５同様にゴム質の増大が著しく、劣化の進んだ例。

３）蛍光Ｘ線分析

赤色顔料の分析は試料にＸ線を当てると、元素特有のＸ線（特性Ｘ線ないし固有Ｘ線）が発生（放出）するので、この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行うエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析を実施した。

分析対象：赤色顔料（図７～15）

使用機器：PANalytical／PW4025、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置。

使用管球：Rh ターゲット９Ｗ。

検出器　：高分解能電子冷却Si 半導体検出器。

測定条件：30kV、20 μA、フィルター　Kapton、100sec。

測定室雰囲気：大気。測定部径は１㎜。サンプルカップに入れて測定。

測定結果：赤色顔料の分析はすべて実施し、スペクトルは代表的なものを掲載した。朱（HgS）は№129（樹皮製品）ただ１例（図13）で、他はすべてベンガラ（酸化第二鉄、Fe_2O_3）。

Ⅲ．小　結

低湿地の桜町遺跡からは有機質遺物が多量に出土し、北陸における重要な縄文遺跡であることは論を待たない。遺構と遺物、出土状況をふまえた総合的な考察については本文を参照願うことにして、ここでは漆製品の科学分析結果と漆器考古学的な所見を付してまとめとしたい。

［塗装法による漆塗り土器の分類］（縄文中期後葉～後期初頭）

１）赤色漆と黒色系漆による２色塗り分けのもの　＜32点＞

Ａ）肉眼では黒色にみえる生漆ないしナヤシ（攪拌）が行われた半精製漆（以下黒色系漆という）が全体に塗られ、部分的に赤色（ベンガラ）漆が施されたもの。＜14点、顕微鏡写真図版5－26、同6－107＞

Ｂ）始めから塗り分けされたもので、赤色（ベンガラ）漆の下には黒色系漆がない。＜18点、顕微鏡写真図版1－58、同5－1・28・61、同6－114・115＞

２）赤色漆が塗られたもの（内面含む）＜71点＞

Ａ）黒色系漆の上に赤色（ベンガラ）漆が塗られたもの。＜10点＞

Ｂ）炭粉漆の上に赤色（ベンガラ）漆が塗られたもの。＜１点＞

Ｃ）ただちに赤色（ベンガラ）漆が塗られたもの。＜60点、顕微鏡写真図版1－90・102・108、同

2－109・112・116、同5－63・96、同6－98＞

3）黒色系漆が塗られたもの　＜6点＞

A）内外面　＜１点、顕微鏡写真図版6－118＞

B）外面（内面赤色２点）　＜３点＞

C）内面　＜２点、顕微鏡写真図版5－31＞

4）部分的に赤色漆塗りされたもので、胎色と赤色漆の塗り分け＜２点＞

以上、縄文中期後葉～後期初頭期の漆塗り土器について、塗装法の差異から上記のように分類した。赤色（ベンガラ）漆が塗られたもの（内面含む）が全体の約64％を占め、うち土器胎にただちに赤色（ベンガラ）漆が塗られたものは約85％、黒色系漆の上に赤色（ベンガラ）漆が塗り重ねられたものは14％である。次いで赤色（ベンガラ）漆と黒色系漆による２色塗り分けが、全体の約29％であった。これには、土器胎全体に黒色系漆が塗られた後、ある区画帯に赤色（ベンガラ）漆が施されたものと、始めから黒色系漆と赤色（ベンガラ）漆に塗り分けられたものとがある。前者が若干多い。黒色系漆だけで全体が塗られたものはごく少ない（約５％）。部分的に赤色（ベンガラ）漆で加飾されたものがまれにある（約２％）。ベンガラ漆は発色の悪いものや縮み皺はあまりないので、細かな破砕技術と精製漆の使用が考えられる。表面には付着物もあまりみられないので、十分な管理のもとに製作されたのであろう。他遺跡ではベンガラだけの場合（土器）、膠着液は膠の例が確認（赤外分光分析）されているが、ここではすべてが漆であった。ベンガラは全てパイプ状ベンガラ粒子。

前述の塗装法の差異については器形・文様・胎土などから詳細に検討する必要があるが、時期的には大半が中期後葉～後期初頭で、器形も鍔付土器が主体であることは、特定の器形に限って漆塗りされたことがわかる。なお、中期後葉～後期初頭期の漆パレット・漆容器・クロメ（精製）鉢・漆濾し布・赤色顔料調整具などが未検出なので、漆塗り製品は搬入品の可能性が高い。後期末～晩期に属する漆工具としては漆容器と思われるものが２点認められた。

［朱漆塗り樹皮製品］（№129、中期末～後期初頭）

唯一の樹皮製朱漆塗り製品（断面楕円形）で、塗装工程は漆層＋朱漆層＋朱漆層である。漆塗りされた樹皮しか残っていないが、１点はまっすぐで、いま１点は、直角に折れ曲がっている。この点からみると、弓の巻きつけでないことは明白であるが、用途は特定されていない。朱の使用としては古い事例に属する。

［赤色漆塗り結歯式堅櫛］（後期末～晩期）

櫛は赤色（ベンガラ）漆塗りの結歯式堅櫛が３点出土している。構造的には歯材に横木（横架材）を渡して糸で結束したもの２点（№133・135）、横木ではなく植物繊維の紐で横位にからげてつづった（かがった）もの１点（№134）で、前者の頭（棟）部の形態は蒲鉾形、後者は角状突起に透かし彫り文様。歯材は割り材ではなく円形である。赤色顔料はベンガラ粒子（１～２層）で、上塗漆の赤色顔料に朱を用い、その下層はベンガラという使い分けは認められなかった。櫛の一般的な成形法はモデリング材から次の４タイプに分けられる。

①類　地の粉（鉱物粒子）漆による成形

②類　刻苧（コクソ）漆による成形

③類　赤色（ベンガラ）漆による成形

④類　炭粉漆による成形

桜町遺跡ではすべて②類の刻苧（コクソ）漆による成形であった。新潟県元屋敷遺跡[3]では①～③類、新潟県寺地遺跡[4]では①・②類、富山県境Ａ遺跡[5]では②類、石川県新保チカモリ遺跡[6]では②類、石川県米泉遺跡[7]では①・②・④類と①類と④類の併用、石川県真脇遺跡[8]では④類が認められる。№134（角状突起に透かし彫り文様）は北海道・東北・関東地域との共通性が認められるが、角状突起については、鹿角に起源があると考えている[9]。

［漆塗り丸木弓］（№131、中期末～後期初頭）

ニシキギ製の漆塗り丸木弓（推定全長約177cm、弓幹平均厚約2cm）で、茶黒色を呈する。塗装工程は漆１～２層で、漆塗り弓としては簡素であり、実用品としての強度を保ったために糸巻（植物繊維）と漆塗りが施されたものであろう。

［赤色漆塗り糸］（№130、中期末～後期初頭）

やや弧をえがく赤色（ベンガラ）漆塗り糸（紐、現存長約40mm、幅2.5～3.0mm）で、貯蔵穴と推測される土坑から出土した。遺存量を考慮に入れて塗膜分析は実施しなかったが、断面観察から塗膜厚は100～300μｍであることから、ベンガラ漆の塗りは、３層前後と考えられる。胎の繊維そのものは、ほとんど残っていないが、空隙から厚さは1.5mm前後と推測される。こうした赤色漆塗り糸や結束糸（いわゆる糸玉）は、縄文早期以降、北海道・青森県・宮城県・山形県・福島県・新潟県・東京都・滋賀県の12遺跡から出土しているが、滋賀県１例を除けば東日本に中心をおく遺物である。塗装工程の具体例として新潟県青田遺跡[10]のケースを紹介したい。

青田遺跡（旧北蒲原郡加治川村大字金塚（かなづか）所在）は、低湿地という有機質遺物の保存には格好の条件から、丸木舟、櫂、簾、筌（陥穽（うけ　かんせい）具）、曲物、弓、漆製品などが多数出土し、縄文のタイムカプセルとして注目を集めている。新潟県教育委員会の協力を得て、赤色漆塗り結束糸（糸玉）、飾り弓、櫛、腕輪などの分析調査をおこなった。植物繊維を胎とする結束糸は撚り糸を20～30本ほど束ねて結び目を作ったものだが、1本の糸は上に生漆、さらに赤色（パイプ状ベンガラ粒子）漆が２～３層塗られていた。漆塗り糸を柔らかいうちに、束ねて結束したということになる。なぜこのような手の込んだことをしたのかが問題だが、束ねた本数に意味があるとしたら、結束後に漆塗りしたのでは、１本１本の形状がわからなってしまう。くっきりと見えるようにするには、面倒でもこうしたことをする必要があったのかもしれない。小林達雄國學院大學教授は沖縄・先島諸島の藁算（わらざん）に一脈通ずる、文字以前の記号ではないかとしている[11]。用途については腕輪や腰飾り、首飾りなどの装身具説もあるが、単独糸と結束糸を区別して検討する必要もある。

［木胎漆器］（中期末～後期初頭）

№121（総赤色漆塗り把手付鉢、ケヤキ）　内外面①漆層＋②ベンガラ漆層

№122（外面赤色漆塗り脚部、トチノキ）　外面①炭粉漆層＋②ベンガラ漆層

№123（総赤色漆塗り皿、ケヤキ）　底部外面①漆層＋②ベンガラ漆層＋③ベンガラ漆層

№124（総赤色漆塗り脚？）　外面①漆か＋②ベンガラ漆層＋③ベンガラ漆層

№125（口縁部外面から内面赤色漆塗り鉢、ケヤキ）　口縁部外面①漆層＋②ベンガラ漆層

№126（鉢、口縁部に赤色漆塗り塗膜痕、ケヤキ）
内面①炭粉漆層＋②ベンガラ漆層＋③ベンガラ漆層

№127（総赤色漆塗り片口鉢、イヌガヤ）　内外面①ベンガラ漆層

№128（総赤色漆塗り鉢）　内外面①漆層＋②ベンガラ漆層

№129（朱漆塗り樹皮製品）　外面①漆層＋②朱（HgS）漆層＋③朱（HgS）漆層

上記は塗膜分析からえられた塗装工程を整理したものであるが、針葉樹の炭粉粒子による漆下地は、№122（脚部、トチノキ）と№126（鉢、ケヤキ）の２例が確認できた。大半は漆層＋ベンガラ漆１～２層で、№127（片口鉢、イヌガヤ）は、意外にも木胎にただちにベンガラ漆層を１層塗っただけの簡素なもので、このやりかたは本例のみである。№127は樹種から搬入品の可能性が指摘されていたが[12]、塗装法からみても他の漆器とは異なっている。

木胎漆器はすべて赤色漆塗りで、赤色顔料はパイプ状ベンガラ粒子を使用し、器形は片口鉢・把手付鉢・脚付鉢？・通有の鉢・皿で、鉢が圧倒的に多い。ベンガラ漆塗り土器も鍔付土器が圧倒的である。換言すれば共同体全体のハレなどの場で使用されることの多い木胎鉢や皿そして醸造用容器ともいわれる鍔付土器こそは、赤色顔料が塗られるべきものであった。赤色は火の色・血の色、そして太陽の色であり、その循環から復活再生のシンボルとして神聖視されていたことは、古典や民族例をみるまでもなく世界的に共通した観念である。赤色顔料を漆に混ぜて塗ることによって、紫外線にあてない限りその麗しい光沢のある赤色は半永久的に保たれる。

赤外分光分析からは、塗られた膠着液（剤）がウルシ（ウルシノキ）の樹液を用いたものであることを、いくつかの劣化事例を提示して証明してきたが、木胎漆器、漆塗り土器を問わず、特徴的な吸収を示す紫外線暴露による劣化の事例は皆無であった。つまり、日中常時屋外で使用されたものではなく、屋内や夜の火焔のはためきのもとで使用されたと考えていい（北陸の赤外分光分析の事例としては新潟県元屋敷遺跡の報告[13]参照）。

以上、科学分析をおこなった漆塗り製品の分析結果と漆器考古学的視点から、要点を紹介してきたが、本報告にあたっては小矢部市教育委員会の前文化課長久々忠義氏、調査担当者大野淳也氏はじめ、調査員諸氏から何かとご便宜をはかっていただいた。厚く御礼申し上げたい。

注

1）本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うこととし、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

①赤色漆

赤色の主な顔料である朱（HgS）やベンガラ（Fe_2O_3）が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定ずみの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

②黒色漆と黒色系漆

黒色の顔料である炭素粒子（油煙・松煙・炭粉）や鉄系化合物粒子などを含むものを「黒色漆」、黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。なぜならば「黒色系漆」においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるからである。技術や材料科学の上からも両者の区別が必要となっている。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者を含んだもの）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

③下地の分類－漆下地と渋下地

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

2）南　久和・増山　仁ほか『金沢市新保本町チカモリ遺跡』石川県金沢市教育委員会、1986
塗膜分析は四柳嘉章「漆製品」『北陸自動車道調査報告・境Ａ遺跡総括編』富山県教育委員会、1992

3）四柳嘉章「新潟県元屋敷遺跡出土漆器の科学的分析」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸⅣ　元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』新潟県朝日村教育委員会・新潟県、2002

4）中里壽克「籃胎櫛類の技法」『史跡　寺地遺跡』新潟県青梅町、1987

5）四柳嘉章「漆製品」『北陸自動車道調査報告・境Ａ遺跡総括編』富山県教育委員会、1992

6）注２）に同じ

7）中里壽克「米泉遺跡出土陶胎漆器及籃胎漆器」『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター、1989、塗膜分析は四柳嘉章「漆製品」『北陸自動車道調査報告・境Ａ遺跡総括編』富山県教育委員会、1992、四柳嘉章「漆塗装身具の製作技法」『石川県考古資料調査・集成事業報告書　装身具Ⅰ』石川考古学研究会、1995、赤外分光分析は四柳嘉章「縄文時代における漆利用の科学的証明－INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON ORIENTAL LACQUERS（ISOL'93）の発表から」『石川考古』219号、1993

8）沢田正昭「塗彩土器の材質分析」『石川県能都町真脇遺跡』石川県能都町教育委員会、1986

9）四柳嘉章『漆Ⅰ』法政大学出版局、2006

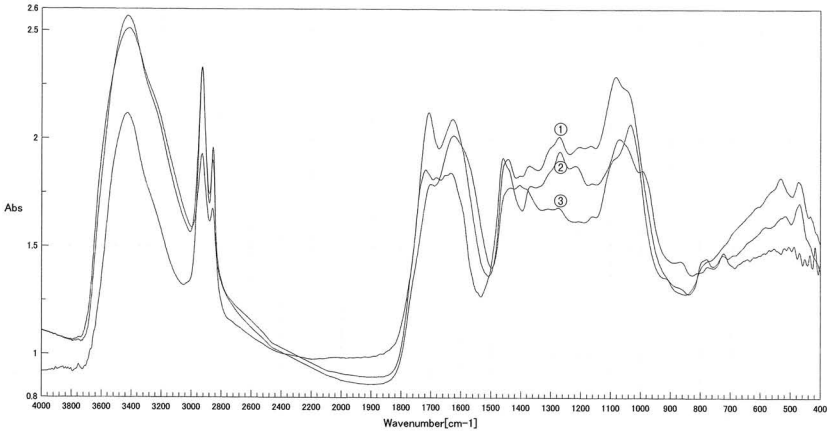
10）注９）に同じ

11）小林達雄「紐を手繰りて縄文世界－縄文時代における紐・糸・縄・綱－『考古学の学際的研究－濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ』岸和田市・岸和田市教育委員会、2001

12）鈴木三男・山田昌久「縄文時代の木の道具」『桜町遺跡調査概報』学生社、2001

13）注３）に同じ

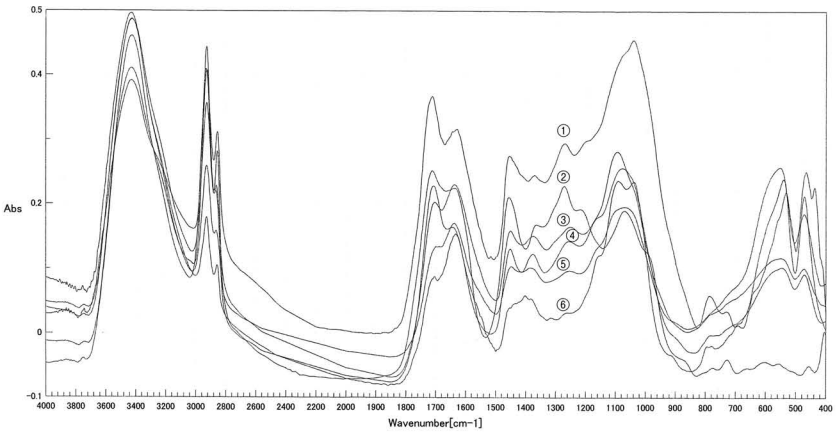
図1　赤外線吸収スペクトル（生漆）



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

① 桜町遺跡137漆P
② 生漆（1990－4,1級）
③ 桜町遺跡136漆P

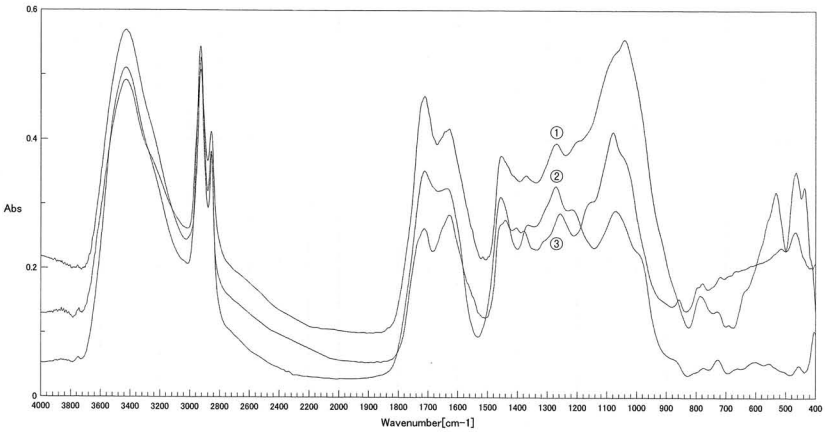
図2　赤外線吸収スペクトル（木胎漆器の赤色漆）



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

① 石川金沢市米泉遺跡漆液容器
② 精製漆（1992浄法寺産）
③ 桜町遺跡126鉢
④ 桜町遺跡125鉢
⑤ 桜町遺跡123鉢
⑥ 桜町遺跡115鉢

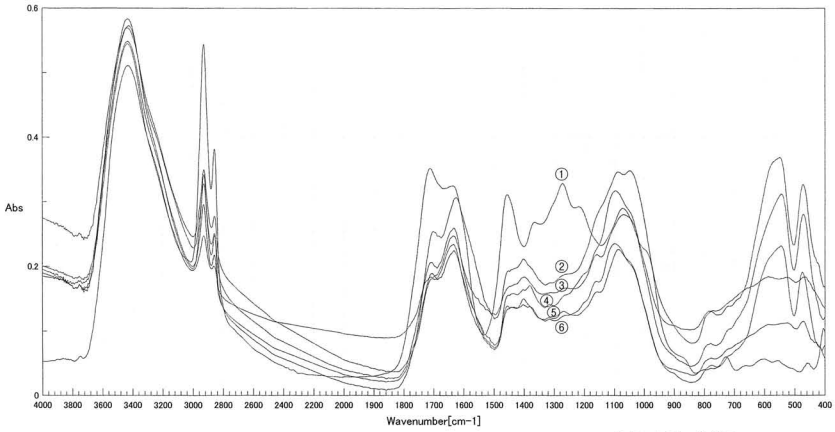
図3　赤外線吸収スペクトル（赤色漆塗り糸）



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

① 石川金沢市米泉遺跡漆液容器
② 精製漆（1992浄法寺産）
③ 赤色漆糸

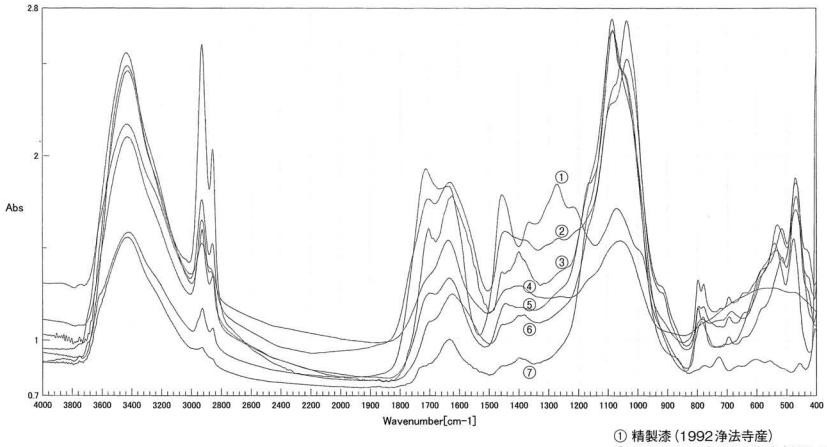
図4　赤外線吸収スペクトル（土器に塗られた赤色漆）



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

① 桜町遺跡1鉢外黒
② 桜町遺跡10鉢焼付
③ 桜町遺跡29鉢外赤
④ 精製漆（1992浄法寺産）
⑤ 桜町遺跡118鉢外黒色系
⑥ 桜町遺跡120新崎鉢

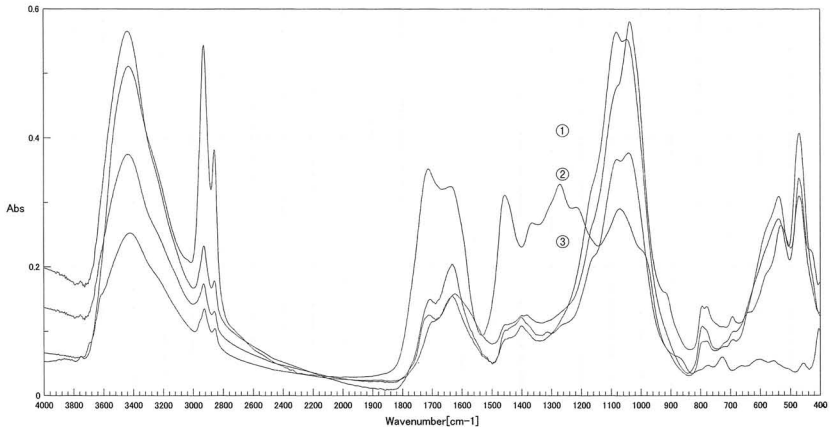
図5　赤外線吸収スペクトル（土器に塗られた黒色系漆）



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

① 精製漆（1992浄法寺産）
② 新潟田上町道下遺跡生漆（容器,10世紀）
③ 桜町遺跡31鉢内面黒色系
④ 桜町遺跡1鉢外面黒色系
⑤ 青田遺跡赤色椀輪298-34
⑥ 桜町遺跡15鉢黒色系
⑦ 桜町遺跡44鉢内面黒色系

図6　赤外線吸収スペクトル（土器に塗られた赤色劣化漆）



分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

① 精製漆（1992浄法寺産）
② 桜町遺跡15鉢黒色系
③ 桜町遺跡117鉢
④ 桜町遺跡119鉢外

図7　蛍光X線定性分析スペクトル（No.121）

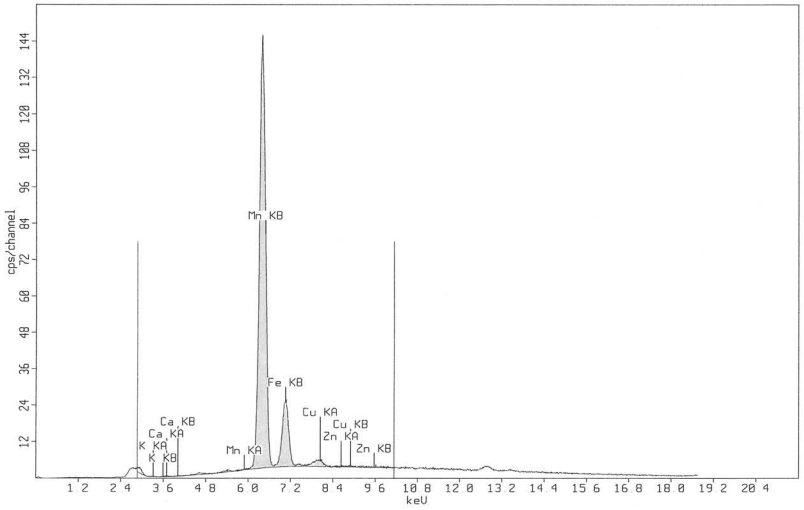


図8　蛍光X線定性分析スペクトル（No.122）

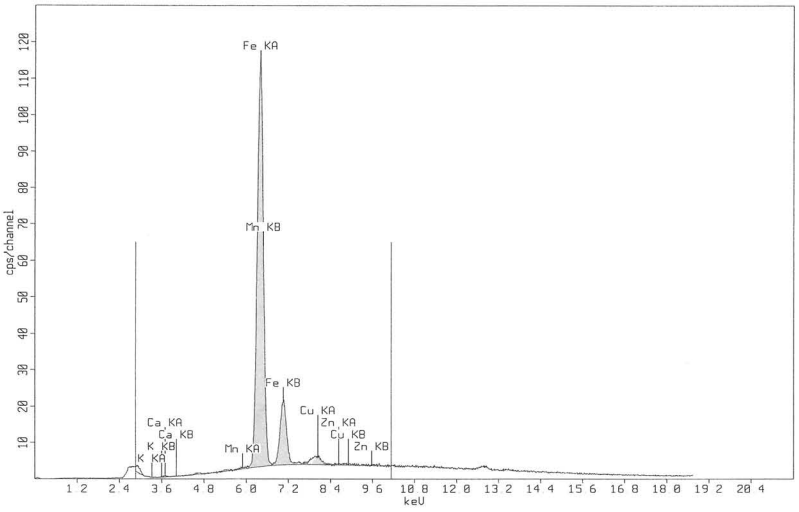


図9　蛍光X線定性分析スペクトル（No.123）

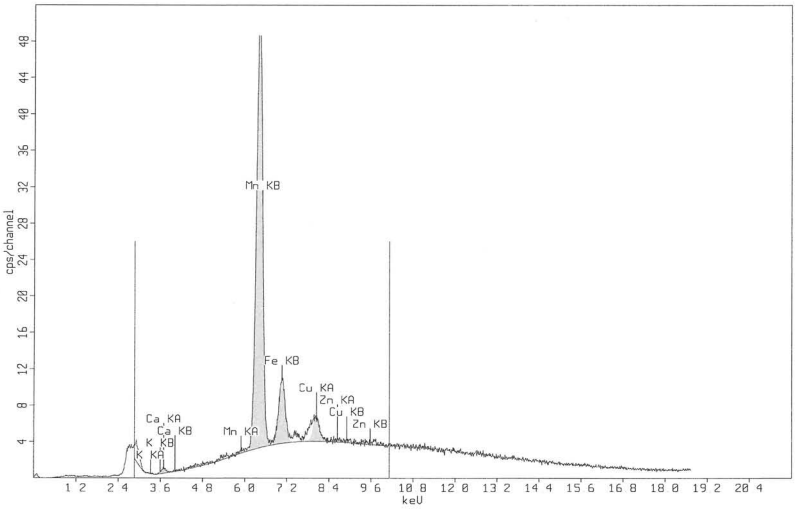


図10　蛍光X線定性分析スペクトル（No.125）

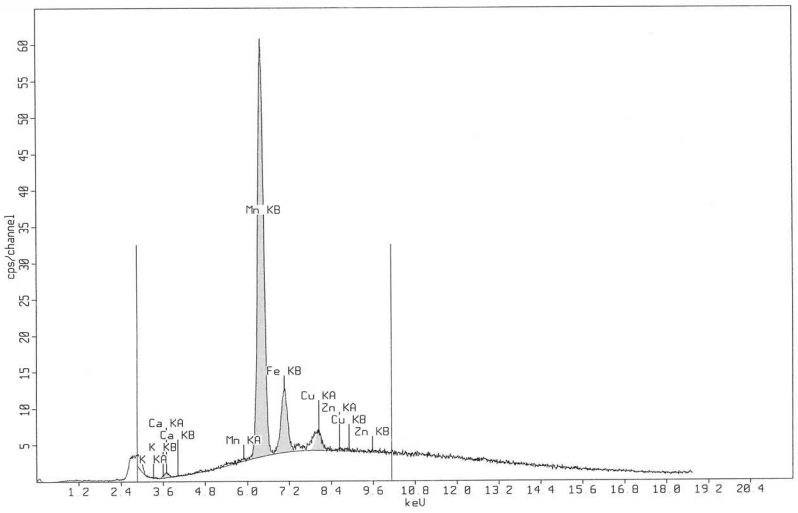


図11　蛍光X線定性分析スペクトル（No.127）

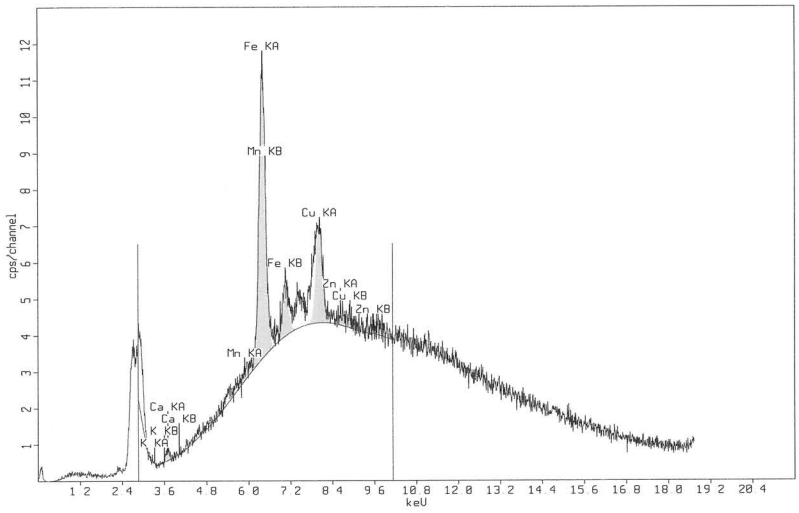


図12　蛍光X線定性分析スペクトル（No.128）

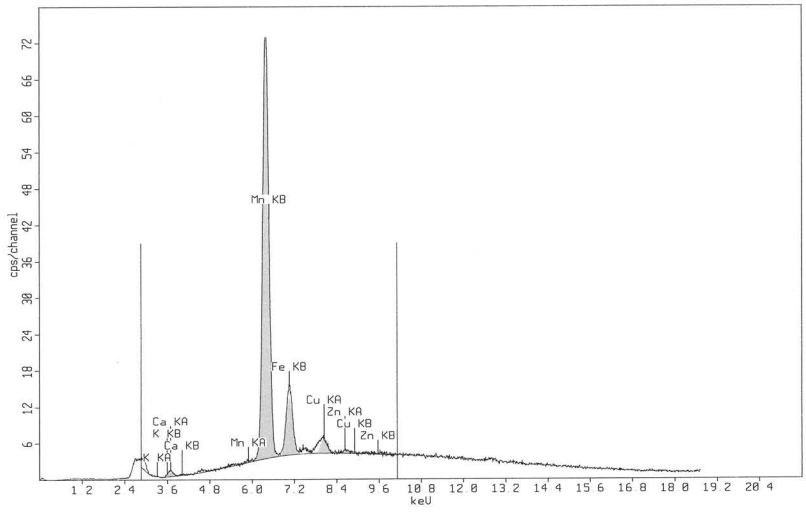


図13　蛍光X線定性分析スペクトル(No.129,朱)

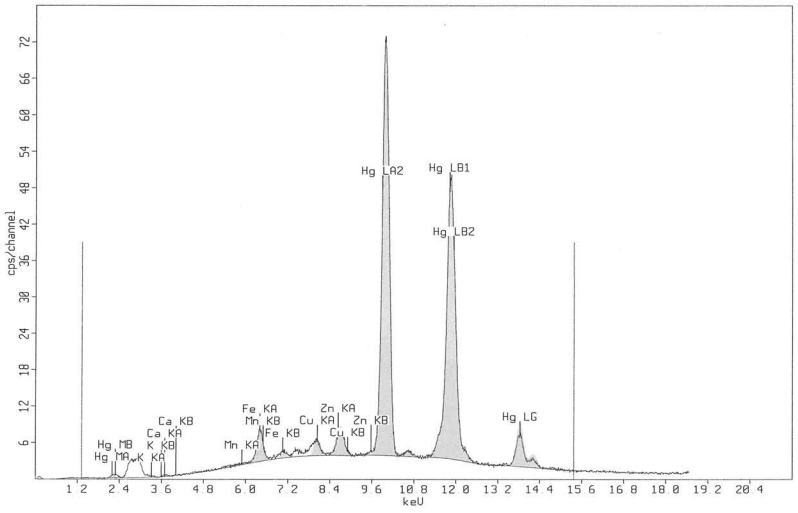


図14　蛍光X線定性分析スペクトル(No.134)

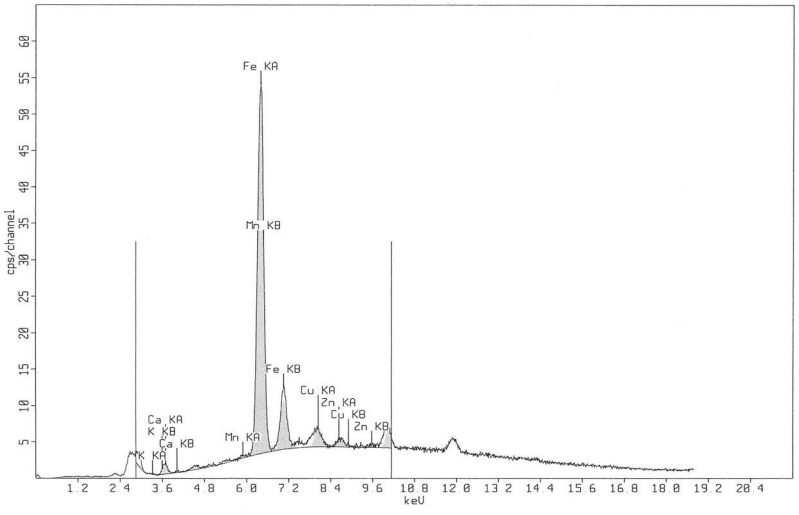
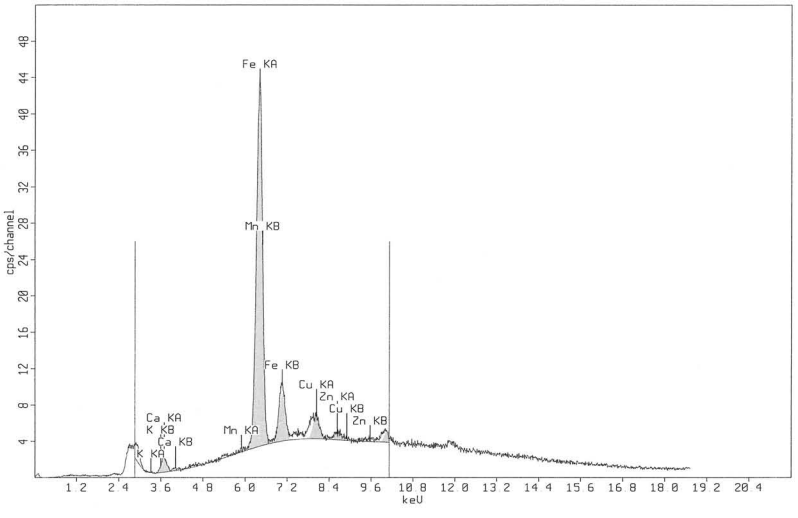


図15　蛍光X線定性分析スペクトル(No.135)



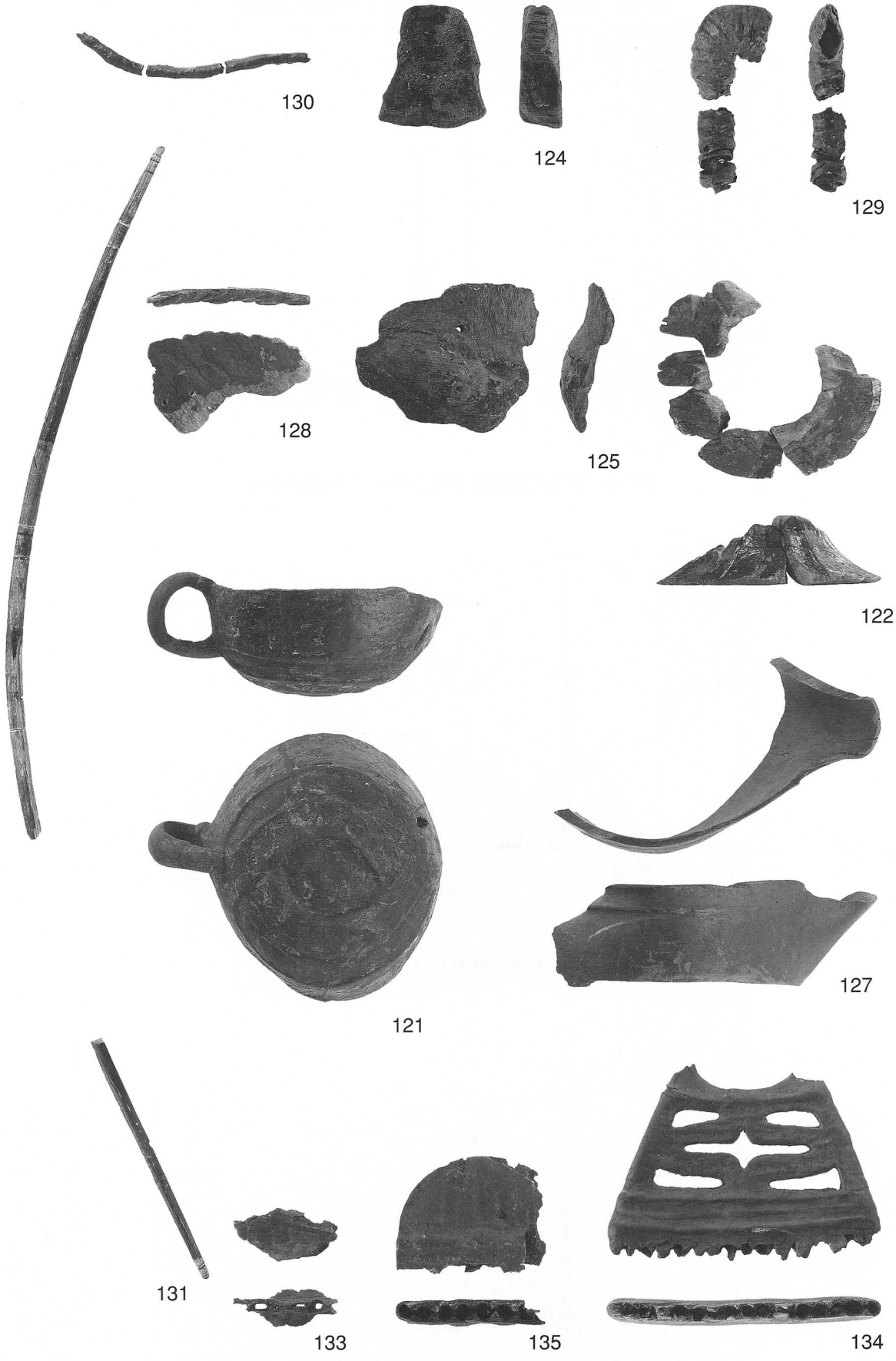


図 16　分析漆器写真

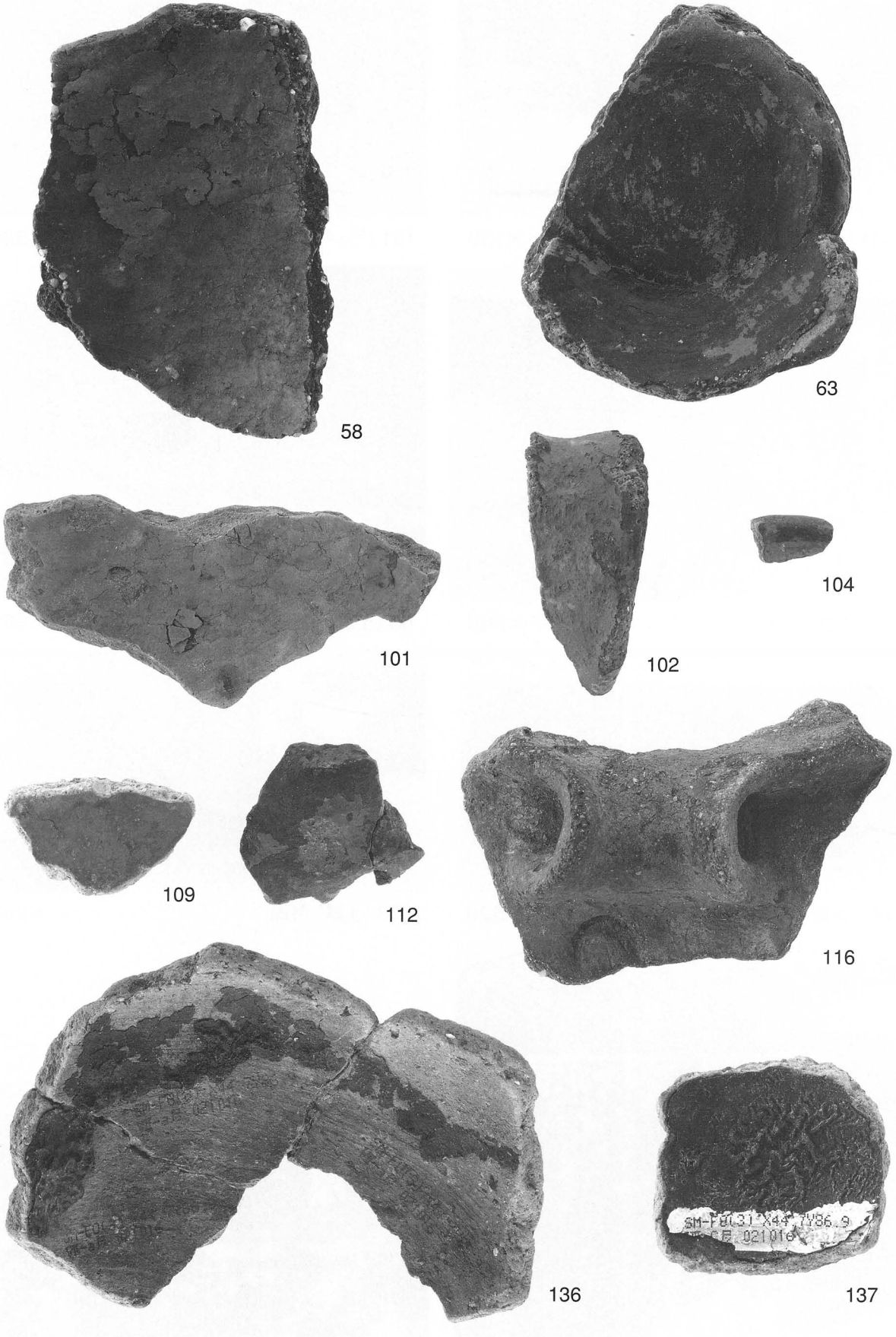
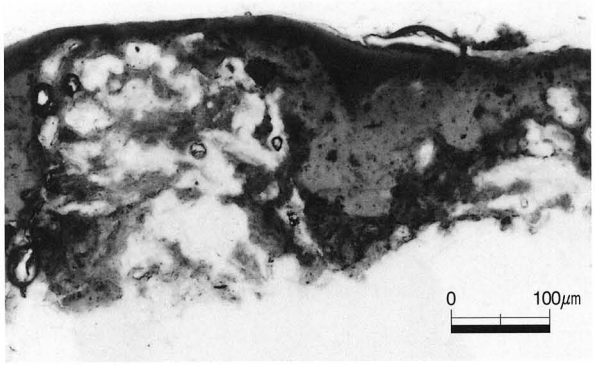
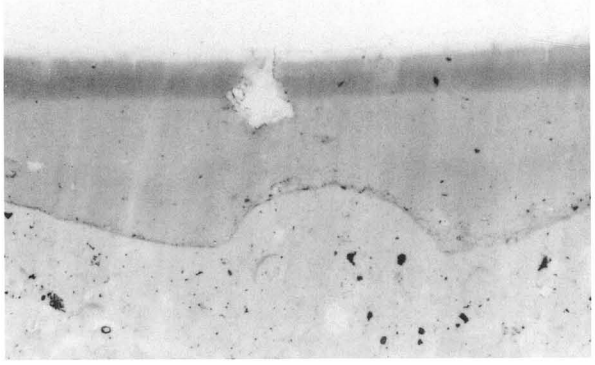


図 17　分析漆器写真

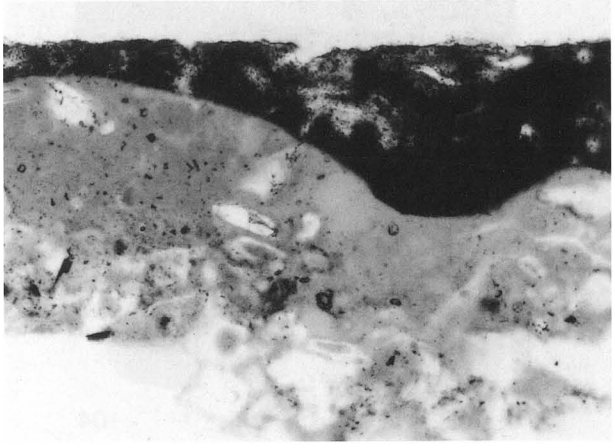
顕微鏡写真図版１　塗膜層断面



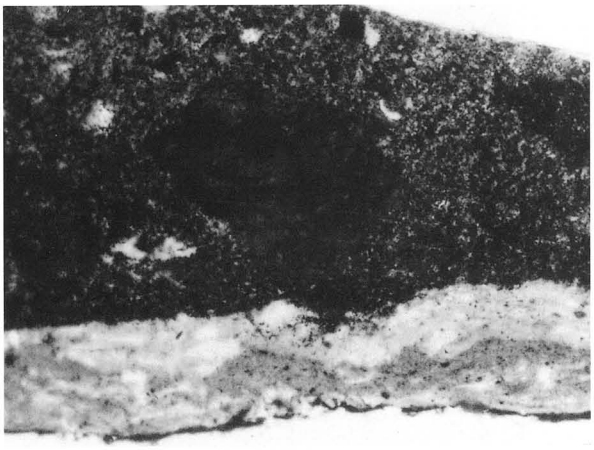
131（弓・弭部分の糸）　×130



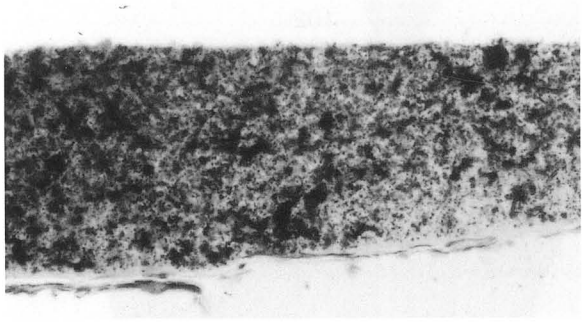
131（弓・弓幹端部の塗り）　×520



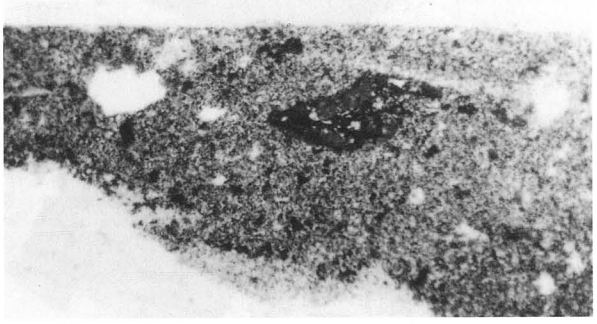
15（土器）内面　×260



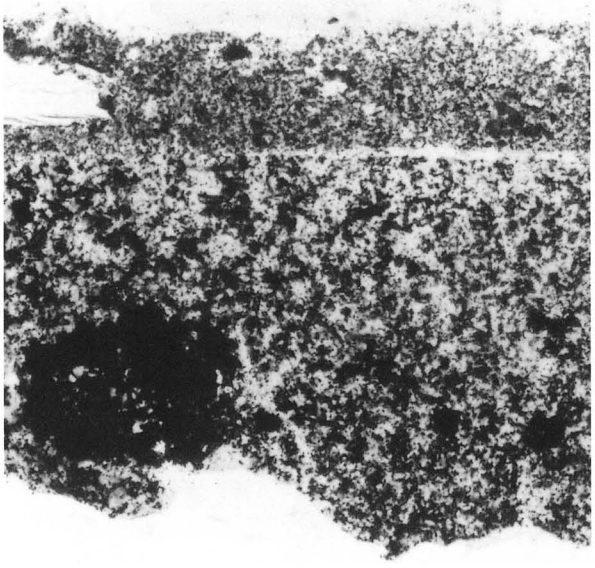
58（土器）外面　×260



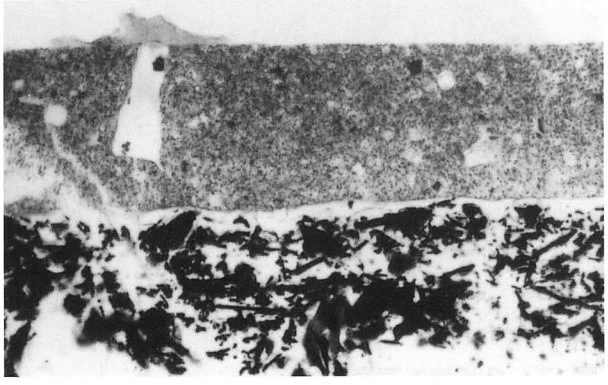
90（土器）外面　×520



108（土器）外面　×260

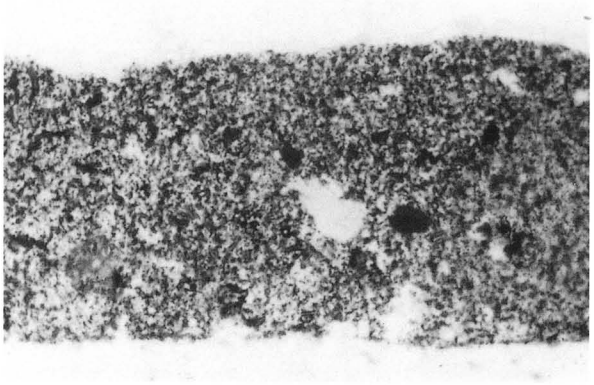


101（土器）内面　×520

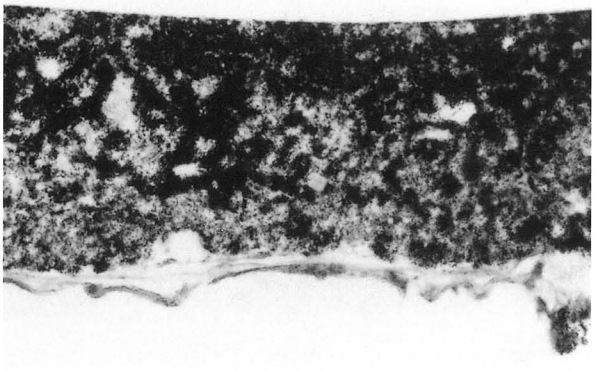


同左　×520

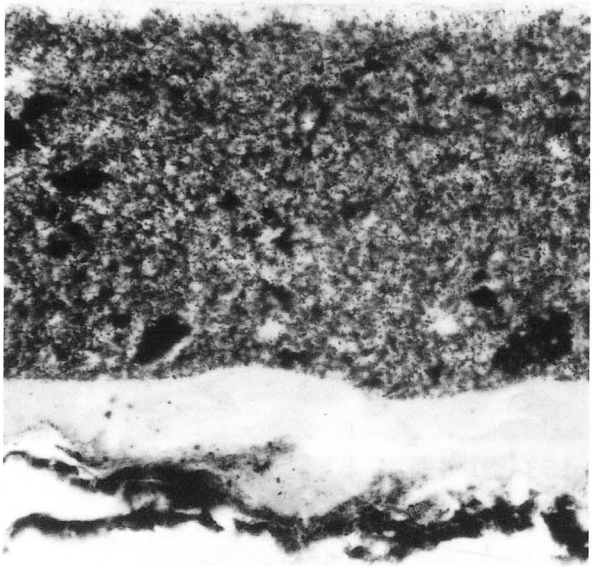
顕微鏡写真図版２　塗膜層断面



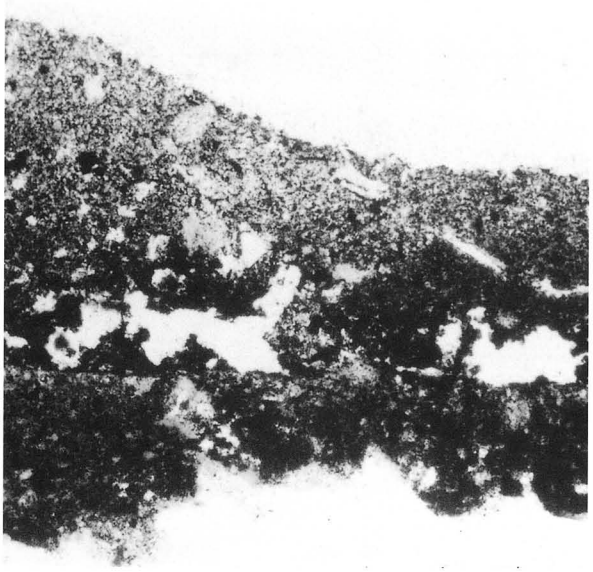
109（土器）外面　×520



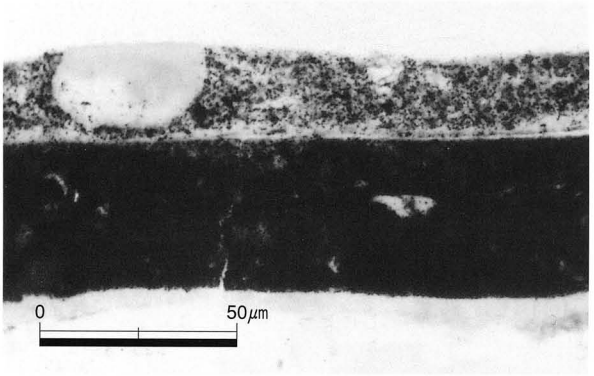
112（土器）外面　×260



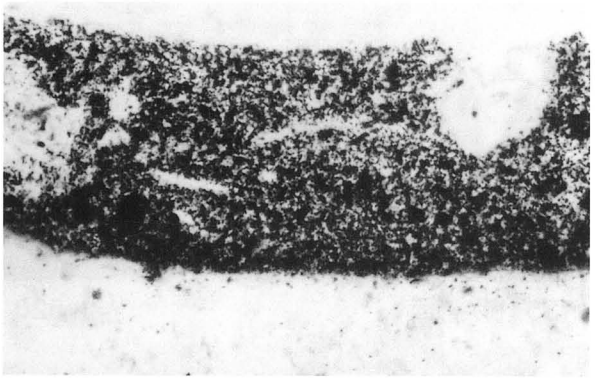
122（木胎）外面　×520



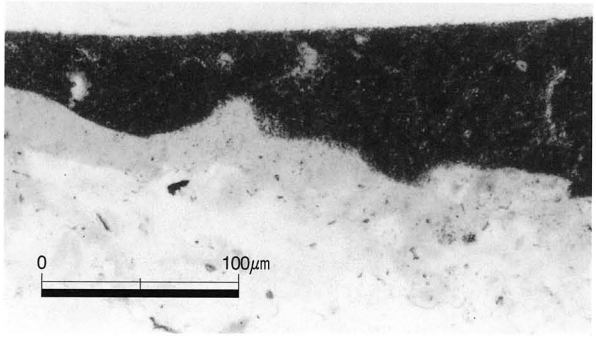
116（土器）外面　×260



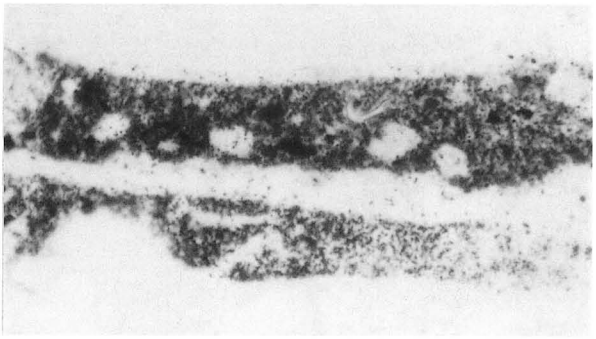
123（木胎）外面　×520



121（木胎）外面　×520

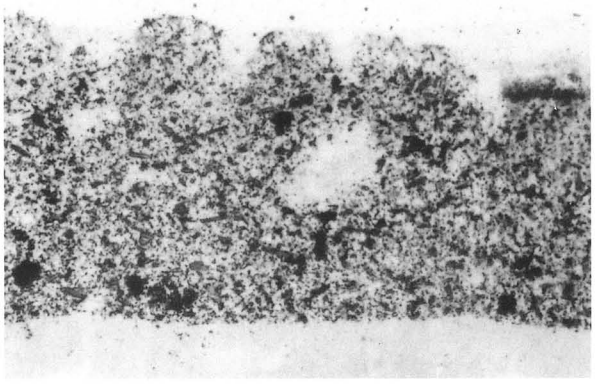


125（木胎）外面　×260

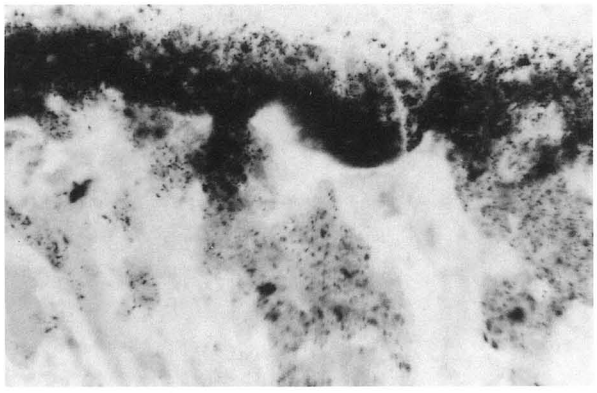


124（木胎）外面　×520

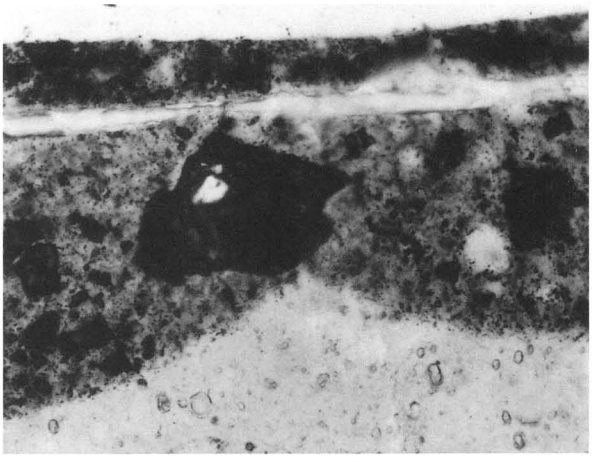
顕微鏡写真図版３　塗膜層断面



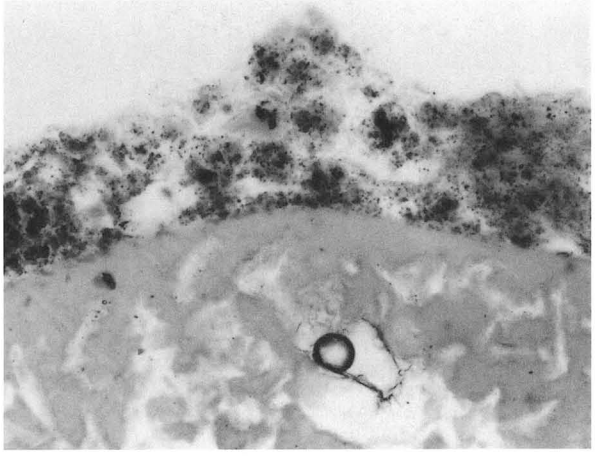
128（木胎）外面　×520



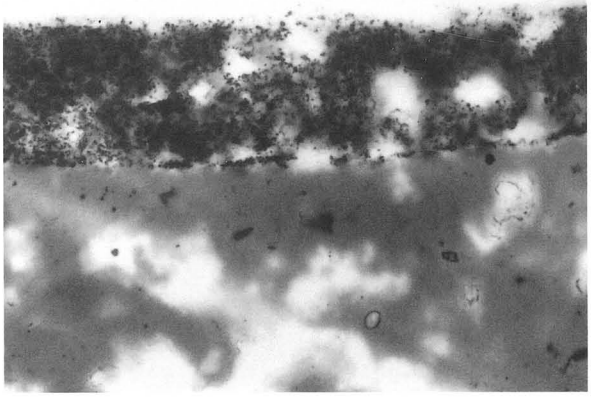
127（木胎）外面　×520



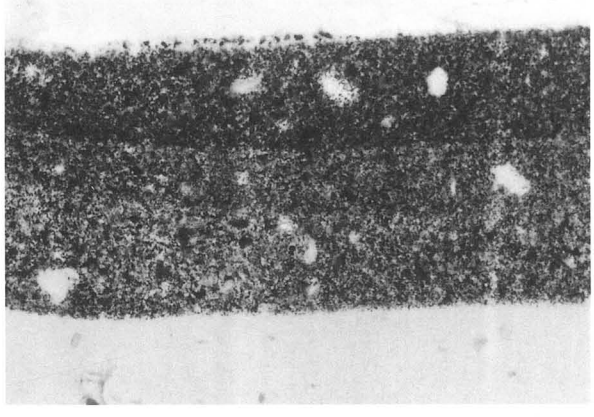
129（樹皮）外面　×520



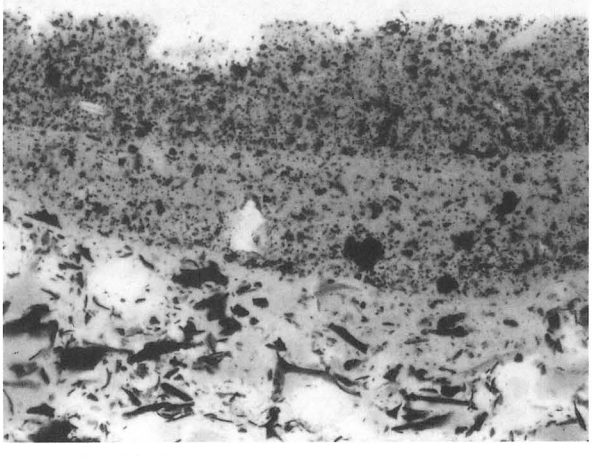
133（櫛）外面　×520



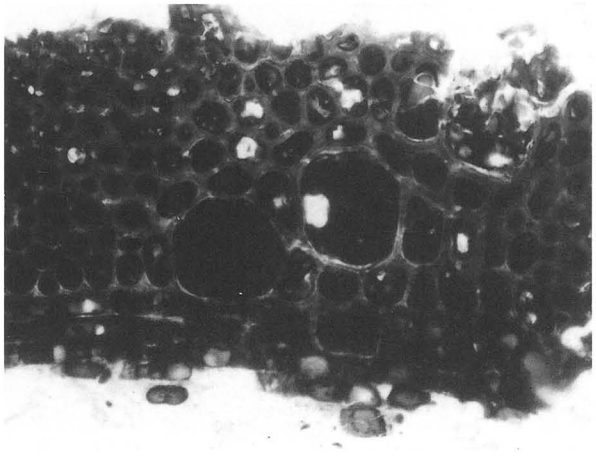
135（櫛）外面　×520



131（櫛）外面　×260

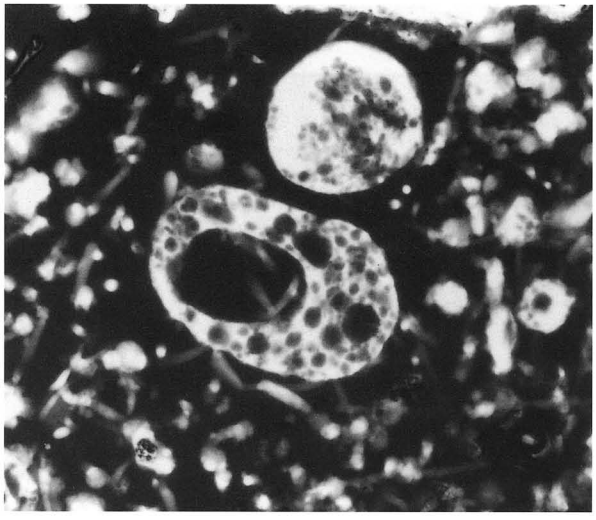


126（木胎）外面　×520

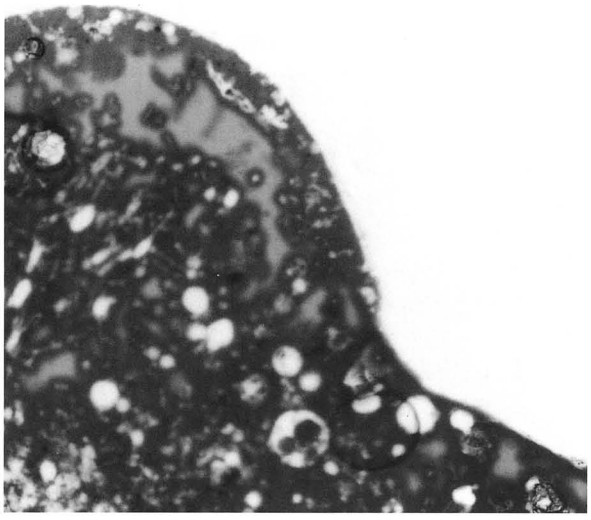


132（木胎、エノキ属）　×260

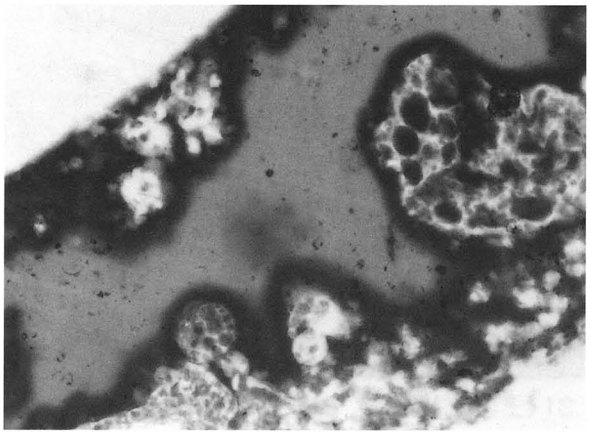
顕微鏡写真図版４　塗膜層断面・遺物表面



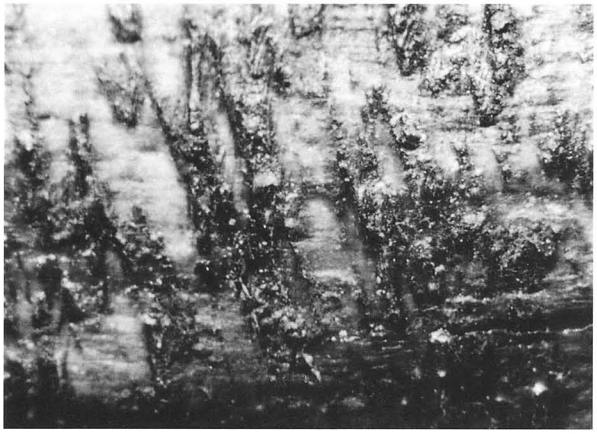
136（漆容器）内面　×260



137（漆容器）内面　×130

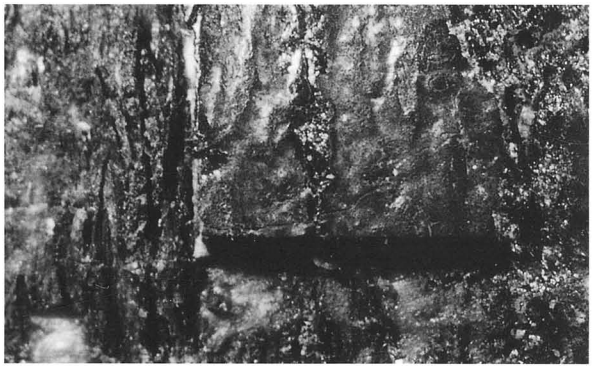


137（漆容器）内面　×260



131（弓・鏑巻部分の糸）　×13

131（弓・弭部分の糸）　×13

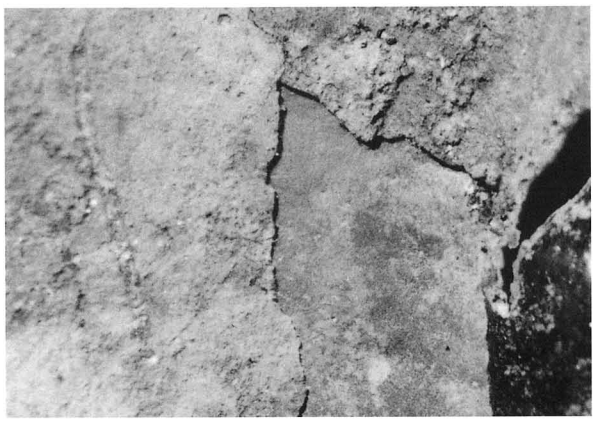


131（弓・弭部分の糸と塗り）　×13

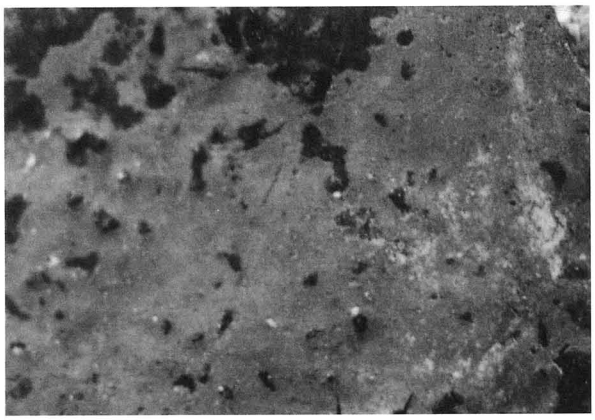
131（弓・樋）　×13

131（弓・弭部分の塗り）　×13

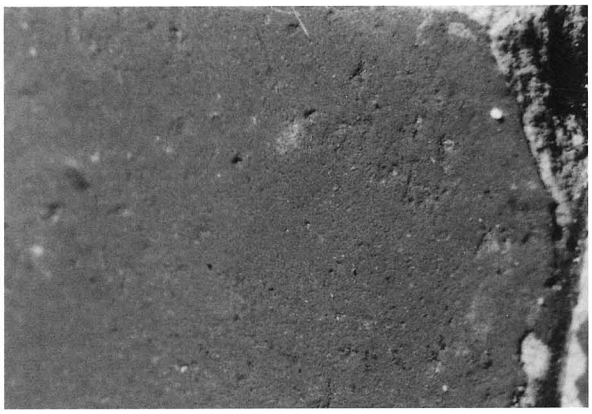
顕微鏡写真図版５　遺物表面



1（土器）外面　×13

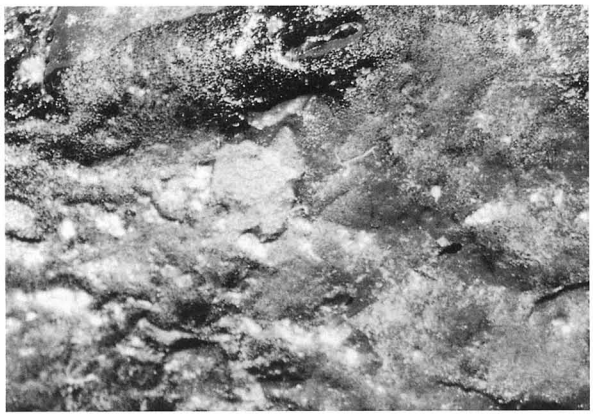


26（土器）外面　×13



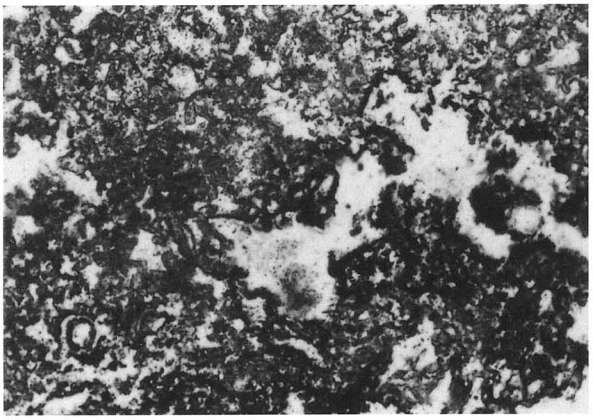
28（土器）外面　×13

31（土器）外面　×13

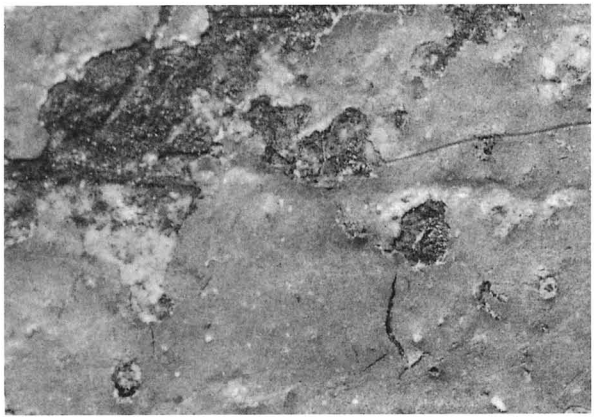


61（土器）外面　×13

63（土器）内面　×13

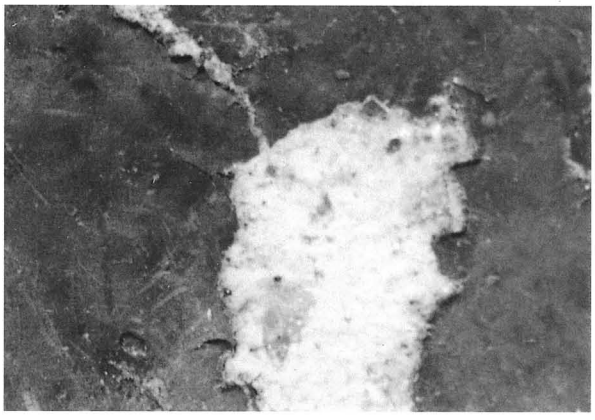


67（土器のパイプ状ベンガラ粒子）　×520

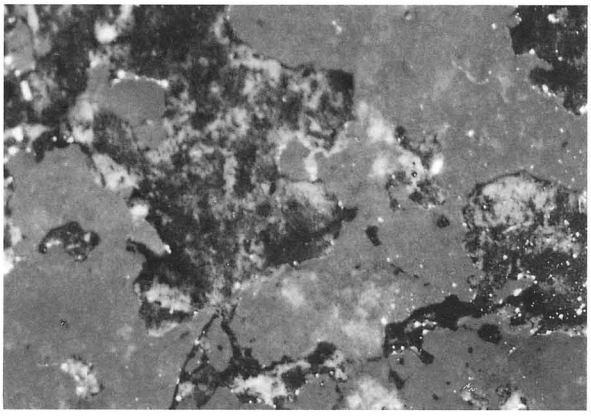


96（土器）内面　×13

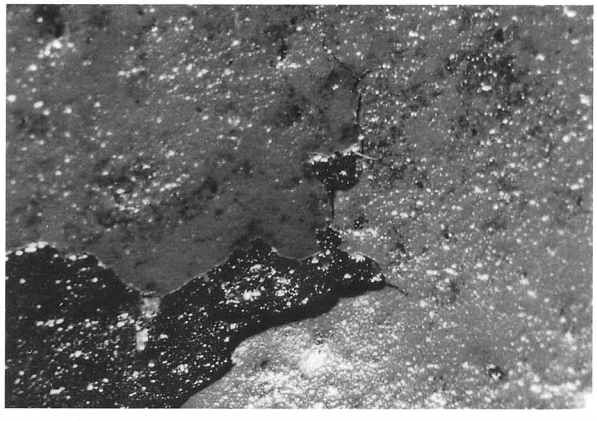
顕微鏡写真図版６　遺物表面



98（土器）内面　×13



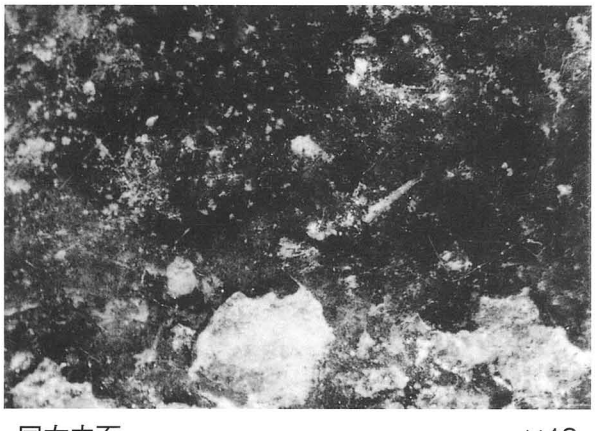
107（土器）外面　×13



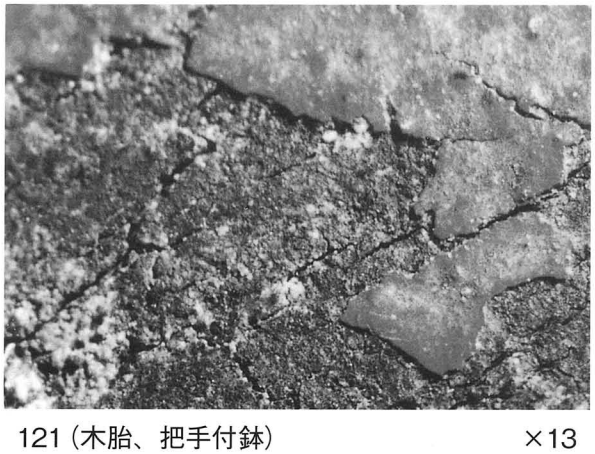
114（土器）外面　×13

115（土器）内面　×13

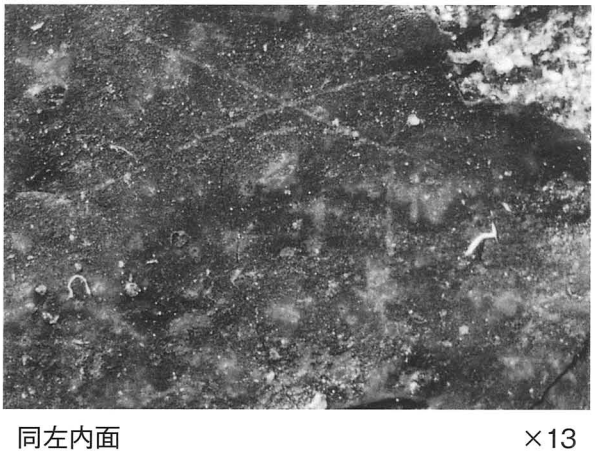
118（土器）外面　×13



同左内面　×13



121（木胎、把手付鉢）　×13



同左内面　×13

顕微鏡写真図版７　遺物表面・断面

129（樹皮）　×13

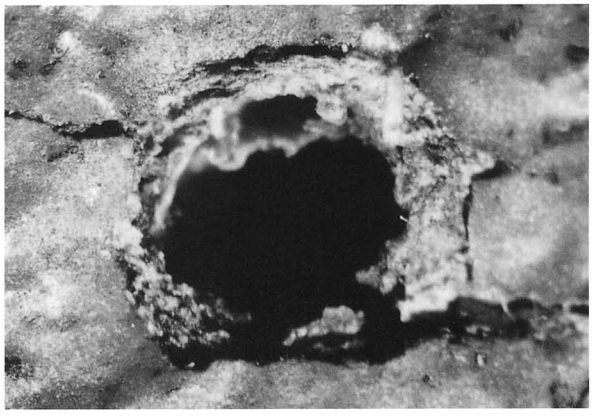
同左　×13

130（糸）断面　×26

同左外面　×13

122（木胎、脚部）外面　×13

同左　×13



125（木胎、補修孔）外面　×13

同左外面　×13

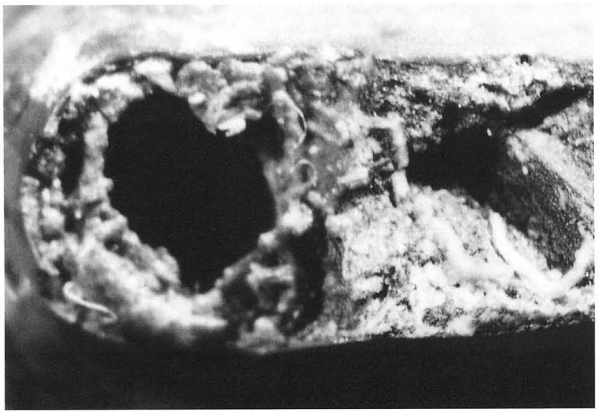
顕微鏡写真図版８　遺物表面・断面

127（木胎）外面　×13

133（櫛、歯）断面　×13

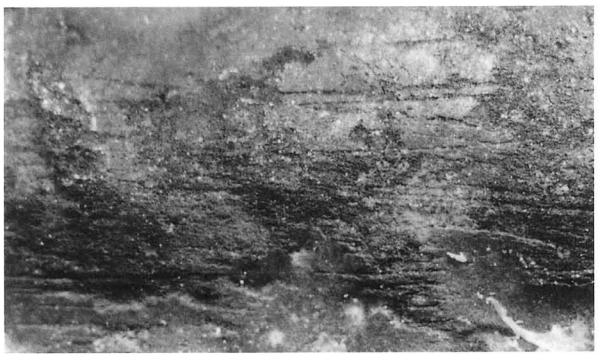
134（櫛）断面　×13

同左（頭部の歯）　×13

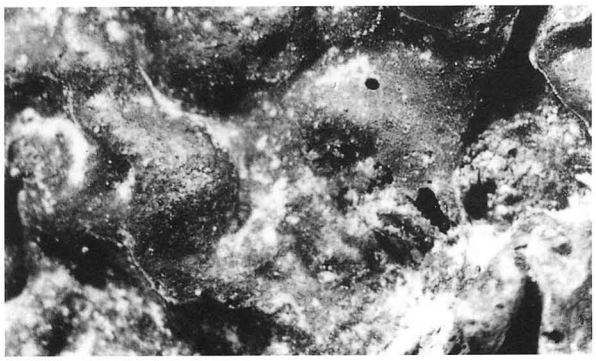


134（櫛、頭頂部の歯）断面　×13

136（漆容器）生漆　×13



135（櫛、横架材のかがり部分）　×13



137（漆容器）生漆　×13

第II章　考　察

1　桜町遺跡の変遷について

久々　忠義（富山県埋蔵文化財センター）

1．遺跡の広がり（図1）

桜町遺跡は、国道8号バイパスの建設に伴い、南北幅約20～40m、東西長さ約1㎞にわたって発掘調査が行われた。長い調査区であるため、便宜上、東から古苗代地区、鷺場地区、小三昧前地区、坂東地区、産田地区、中出地区、舟岡地区と呼び分けている。古苗代地区から中出地区までは、北側に子撫川が西から東へと流れていて、その河岸の微高地にあたる。舟岡地区は、南北を丘陵にはさまれた谷間にあたる。

それぞれの地区で発見された遺構や出土品は、時期や性格に違いがある。古苗代地区と鷺場地区では、江戸時代後半の水路が見つかっている。小三昧前地区・坂東地区・産田地区は、飛鳥時代から平安時代前期までの建物群が中心で、弥生時代、古墳時代、中世のものがある。中出地区と舟岡地区は、縄文時代が中心で、弥生時代、古墳時代、飛鳥～平安時代、中世のものがある。縄文時代の遺構や遺物は、舟岡地区の丘陵地に集中しており、平地の産田地区では、石錘2点と磨製石斧1点が出土しているだけである〔市教委1982・2003〕。

舟岡地区は、間口約100mの東に開口する谷で、約150m入ったところで西と南に二又に分かれている。この谷の中では、谷口から350mのところまで縄文時代の遺物包含層が続き、そこからさらに120m間をおいた丘陵斜面から縄文時代の遺物が出土している。そこを西端地区と呼ぶ。南の谷は、分岐点から150m入ったところまで遺物の出土が認められる。北は、谷口から240mのところまで（深谷地区）、丘陵沿いに遺物の出土が認められ、南は、谷口から310mの地点（雀谷地区）で、丘陵沿いに縄文時代の遺物が出土している。中出地区は、谷口から東へ120mのところまで縄文時代の遺物が出土する〔市教委1987・1989〕。桜町遺跡での縄文遺跡の広がりは、谷の中と谷口全面の東西460m、谷口から丘陵に沿って南北570mの範囲ということができる。

2．遺跡の地形

谷口の中出地区・第1調査区・第6調査区の高さは、28～30mで、東へ向かって下がっている。西北西と南西方向は、比高差54～77mの丘陵である。

谷中にあたる第2調査区・第3調査区の高さは、30～35m、谷奥にあたる第4調査区・第10調査区の高さは35～42mである。北東の谷口に向かって傾斜しており、西・南・東方向は、比高差50～72mの丘陵である。西端地区は59.6mの丘陵斜面である。深沢地区は、27.5～31m、雀谷地区は26～30mである。

谷口の北東160mのところに現在の子撫川が流れている。子撫川は、そこで川の流れが北から西へ大きく流れを変える。現在の川面の高さは21.83mである。谷口から川面までの間には、旧河川の跡とみられる段丘面が三面ほど認められる。谷口から30mのところに比高差1.45mの第1面

(27.35m)、55mのところに比高差2.18mの第2面(25.17m)、80mのところに比高差35cmの第3面(24.10m)がある。

谷から流れ出る縄文時代の川は、縄文中期中葉での谷口の川底面が26.15mである。また、中出地区の縄文中期前葉の生活面は26.4mである。第1面の高さはそれより高いので、第1面は縄文中期以降に形成されたものと考えられる。

谷口の第1調査区は、調査前はその西側部分が谷口より4mほど高くなっていた。調査の結果、その下から縄文時代の川や8世紀後半の川跡が検出され、そこをさけるようにその北側に11世紀後半の溝が流れている。そのようなことからこの高台は、9～11世紀前半の間に南側丘陵が地滑りしてできたものと考えられる。

3．遺跡の形成（表1）

桜町遺跡から出土した縄文土器には、早期・前期・中期・後期・晩期の各時期のものがある。その出土状況は次のとおりである。

早期

早期後半の楕円押型文土器、貝殻沈線文土器が出土している。今のところ、桜町遺跡で最も古い遺物となる。

楕円押型文土器は、谷口(第1調査区)を西から東へ流れる縄文時代の川底にあたる青灰色礫に含まれていた。摩滅した破片であり、南の高台から流れ込んできたものと考えられる。貝殻沈線文土器は、試掘調査で出土したもので、谷口から180m入ったところ（第8調査区と第9調査区の境）で、北側丘陵の裾部にあたる。出土したところは、地表面から深さ1.8mのところ(高さ33m)であり、一緒に出土した樹根のC14年代測定では、9,180±130年の数値がでている。この土器は、北側丘陵から落ち込んだものと考えられる。

前期

前期初頭の佐波・極楽寺式土器、前期中葉の朝日C式土器、福浦下層式土器、蜆ヶ森式土器、前期後葉の福浦上層式土器、朝日下層式土器が出土している。

佐波・極楽寺式土器は、谷口(第1調査区)の縄文時代の川の底、北側丘陵の裾(第8調査区)、谷口から150mほど入った谷中(第2調査区西端・第3調査区・第7調査区)から出土した。

北側丘陵裾では、地表面から深さ50cm～1.5mのところにある黒色土に含まれていたもので、一緒に出土した木材のC14年代測定では、6,100±100年の数値が出ている。谷口のものは、その南の高台から、北側丘陵裾のものは、その北側丘陵から落ち込んできたものと考えられる。その他は、古墳時代以降の川の中に流れこんだものと考えられる。

朝日C式土器は、谷口（第1・第6調査区）から出土している。

福浦下層式土器は、谷口の縄文時代の川の肩部（第1・第6調査区・中出地区）から出土している。川の肩部では、縄文中期遺構面より90cm下（高さ27m）から上に厚さ約20cmの黒色土の堆積が認められ、そこに含まれていたようである。その層のピート層のC14年代測定では、5,930年±120年

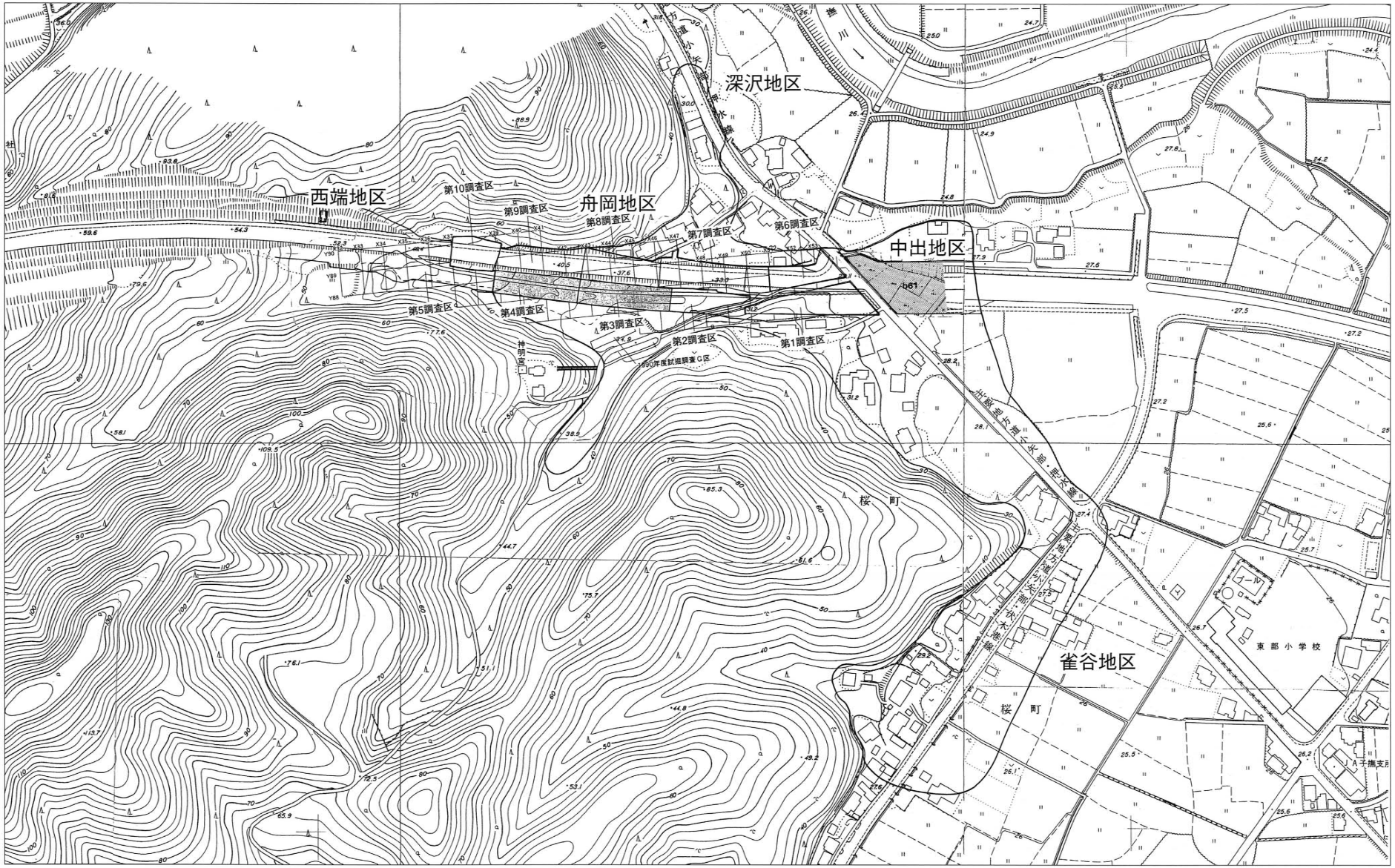


図1　縄文遺跡の広がり（S=1/5000）

の数値が出ている。

蜆ヶ森式土器は、谷口（中出地区・第１・第６調査区）から出土している。

以上、前期中葉の土器は、第１調査区西側では、後期初頭の地層の上に堆積しているところもあり、南側高台から滑り落ちてきたものもあると考えられる。

福浦上層式土器は、谷口（第１調査区・第６調査区）、谷中（第３調査区）、谷口から350m西のところ（西端地区）から出土している。西端地区は、丘陵を削る工事中に見つかったもので、地表下１～1.6m下にあったことから、山崩れにより埋まったものと考えられる。

朝日下層式土器は、谷口（第１・第６調査区）、谷中（第２調査区・第３調査区）から出土している。谷口のものは、南側丘陵裾から落ち込んできたもの、谷中のものは、第３調査区南側から流出したものと考えられる。

中期

中期初頭の新保式土器、中期前葉の新崎式土器、中期中葉の上山田・天神山式土器、古府式土器、中期後葉の古串田新式土器がある。

新保式土器は、谷口（中出地区・第１調査区・第２調査区・第６調査区）の、中州上や縄文時代の川の中から出土している。

新崎式土器は、谷口（中出地区・第１調査区・第６調査区）、谷中（第２調査区・第３調査区・第８調査区と第９調査区の境）、谷奥（第10調査区）、北側丘陵西裾（深沢地区）から出土している。谷口では、西寄りに多く出土しており、谷中と谷奥からの出土はわずかである。谷口から東へ50mのところにある個人住宅の建設に伴う調査では、地表下1.1～1.3mのところ（高さ26.4～26.8m）にある淡茶褐色土から多く出土している。東端では、そのあたりの高さが生活面であったと考えられる。

上山田・天神山式土器は、谷口（第６調査区）、谷中（第３調査区）から出土している。第６調査区では、古府式土器を含む川SD06内に一緒に含まれている。第３調査区では、古串田新式土器を含む川SD102内に含まれている。

古府式土器は、谷口（中出地区・第１調査区・第６調査区）の西側と中期中葉の川SD06の中から多く、谷中（第２調査区・第８調査区と第９調査区の境）、北側丘陵西裾（深沢地区）から出土している。中期中葉の川SD06は、南側丘陵の東裾から北へ流れる川で、第１調査区では、後期初頭の土器を含む川SD05と交差し、第６調査区では川の肩部に重なる。その川底の高さは26.95mである。SD06がどこから流れてきたのかが問題となる。南側の丘陵地に水源となるようなところは見られないので、谷中から南側丘陵の裾を通って流れてきた可能性がある。

出土した古府式土器に付着していた炭化物のC14年代測定では、4,440±40年前の数値が出ている。中出地区の後期初頭の土器を含む川の底（高さ26.15m）にある木組みは、C14年代測定では4,160±50年前の数値が出ている。SD06は、SD05ができる以前に流れていたものと考えられる。古府式土器は、第６調査区の貯蔵穴から出土しているものがあり、この頃から貯蔵穴が掘られた可能性がある。

古串田新式土器は、谷口（中出地区・第１調査区・第６調査区）と谷中（第２調査区・第３調査区）、谷奥（第４調査区・第８調査区と第９調査区の境）から出土している。

谷口ではSD05の底の砂礫から出土している。この砂礫は、この川ができて最初の堆積物となる。古府式土器からこの土器に移る間に、谷の流路に大きな変化があったものと考えられる。

谷中では、第３調査区東寄りを北東へ流れる川SD102から出土しており、この川がこの時期に流れていたものとみられる。

中期後葉～後期初頭

中期後葉の串田新式土器、後期初頭の前田式土器、岩峅野式土器、中津式系土器がある。

串田新式土器は、谷口（中出地区・第１調査区）、谷中（第２調査区・第６調査区・第３調査区・第３調査区南接地区）、北側丘陵西側裾（深沢地区）から出土している。この土器は、谷口の中洲上や川の岸に土器溜りを形成している。

前田式土器は、谷口（中出地区・第１調査区・第６調査区）、谷中（第２調査区・第３調査区南接地区）、北側丘陵西側裾（深沢地区）から出土している。この土器は、谷口の中洲上、川の中、谷口から少し上の川岸の土器溜りから出土している。

岩峅野式土器と中津式系土器は、谷口（中出地区・第１調査区・第６調査区）、北側丘陵西側裾（深沢地区）から出土している。この土器は、谷口の中洲上と川の中から出土している。

後期前葉

後期前葉の気屋式土器がある。この土器は、谷中（第２調査区・第３調査区・第３調査区南接地区）から出土している。点数はあわせて10点にとどまる。この時期は、子撫川の水位がさらに上昇したために、縄文人の活動域が谷の奥へ移ったことが考えられる。その後、谷口では、後期末から晩期の土器が出土するが、それは古代の水路に混じったものである。後期末には、SD05は土砂で埋まってしまったようである。

後期中葉

後期中葉の酒見式土器がある。この土器は、谷中（第３調査区）、谷奥（第10調査区）から10点ほど出土している。調査区東寄りを北東方向へ流れる川SD267から出土しており、この川がこの時期に流れていたものとみられる。

後期後葉

後期後葉の井口式土器、八日市新保式土器がある。井口式土器は、谷中（第３調査区）から、八日市新保式土器は、谷口（第６調査区）、谷中（第２調査区・第３調査区・第３調査区南接地区）、谷奥（第４調査区）、雀谷地区から出土している。

出土点数は、第３調査区でやや多い。谷口と第２調査区のものは、点数も少なく摩滅しているので、第３調査区から流れ出たものとみられる。

晩期前葉～中葉

晩期前葉の御経塚式土器、晩期中葉の中屋式土器がある。御経塚式土器は、谷口（第１調査区）、谷中（第２調査区・第３調査区・第７調査区西端）、雀谷地区から出土している。中屋式土器は、谷

表1 縄文土器出土状況

調査年			85	86 90	86 01 ～ 03	86	00 00 ～ 02	86	98 01	88 89	88 96 ～ 99	61 62	88	86
調査区			西端地区	第10地区	第4地区	第8地区	第3地区	第7地区	第2地区	第6地区	第1地区	中出地区	深沢地区	雀谷地区
時期		包含層高さ 土器型式	39.6 m	38.6 m	36.4 m	33 m	32.5 m	28.9 m	30.1 m	29.5 m	28 m	28 m	29 m	25 m
早期	後半	桜峠				▲								
前期	前葉	佐波・極楽寺				■	▲	▲	▲		▲			
	中葉	朝日C								▲	▲			
		福浦下層								■	▲	■		
		蜆ヶ森								▲	▲	▲		
	後葉	福浦上層	▲				▲			▲	▲	▲		
		朝日下層					▲		▲	▲	▲			
中期	前葉	新保							▲	▲	▲	▲		
		新崎		▲		▲	▲	▲	▲	●	●	●	▲	
	中葉	上山田・天神山					▲			▲			▲	
		古府				▲			▲	●	●	●	▲	
	後葉	古串田新			▲	▲	●		▲	●	●	●		
		串田新			▲		▲		▲	●	●	●	▲	
後期	前葉	前田・岩峅野							▲	●	●	●	▲	
		気屋						▲	▲					
	中葉	酒見・井口I		▲			●							
	後葉	井口II					▲							■
		八日市新保					●	▲	▲	▲				■
晩期	前葉	御経塚					●	▲	▲		▲			■
	中葉	中屋					●	▲	▲	▲	▲		■	■
	後葉	下野		■				■	▲					■
弥生	前期	柴山出村	■		■									

●遺構・多い　■包含層有りかやや多い　▲流れ込み

口（第１調査区・第６調査区）、谷中（第２調査区・第３調査区・第７調査区西端）、深沢地区から出土している。

出土量は、第３調査区が多く、包含層を形成しており、貯蔵穴も掘られている。谷口のものは、古代の溝に混じっているもので、流れ込みである。

晩期後葉～弥生時代前期

晩期後葉の下野式土器、弥生時代前期の遠賀川式土器、条痕文土器がある。

下野式土器は、谷中（第２調査区・第７調査区西端）、谷奥（第10調査区）から、遠賀川式土器は、谷奥（第４調査区）と西端地区から、条痕文土器は、谷奥（第４調査区）から出土している、第４調査区の遠賀川式土器と条痕文土器は、同一地点から出土している。理甕として出土しているものがあり、全体に残りのよい土器である。この時期は、谷奥が墓地として利用されていたことが推測される。

４．谷口の川の水位の変化（図２）

第１調査区の中を流れる川SD06は、上幅は約11.4m、深さ約1.4m、底幅約9.6mである。川の流路は、調査区の西寄りで北から第１調査区へ入り、すぐに東へ方向を変え、東端で北へ方向を変えて、第６調査区東端と中出地区西端をとおり、子撫川へ注ぐ。

川岸には串田新式土器・前田式土器を含む土器溜まりがあり、川の中や岸には木組みが設けられている。土器溜まりや木組みの設置高から、この川の水位の変化を知ることができる。

この川は、古串田新式土器の時代にできたものと考えられる。この頃は、川を流れる水の量はまだ少なく、川底を流れる程度であったようだ。

中期後葉（串田新式土器の時代）に入ると、川岸に土器が捨てられるようになり、SG01が形成された。それは、黒色土のなかに土器が混ざっている状況であり、捨てられたものには、有機質のものもあり、それが腐さって黒色土となっているものと考えられる。この土器溜まりは、流失していないから、当時の水量は少なく、流れもゆるやかであったものと考えられる。河口の川底には水溜め木組み（中出地区SX01）が設けられているが、同じ頃のものと考えられる。

ところが、後期初頭（岩峅野式土器・中津系土器の時代）になると、川の水位が上昇したようである。川岸に設けられた足場木組みSX02は、その木組みを固定する杭が、27.7mの高さに打ち込まれている。また、串田新式土器と前田式土器を含む土器溜まりSG04が、その下に位置する、水位は、最も高い時には28.6mに達したとみられる。その高さに水溜め木組みSX01が設けられているのである。川はそれまでに、砂や青灰色シルトが堆積している。この時までには、SG01は砂や青灰色シルトに覆われてしまった可能性がある。

砂や青灰色シルトはどのようにして溜まったものであろうか。上流から流れてきたものか、下流にある子撫川が運んできた可能性が考えられる。土砂は縞状に堆積していることから、上流から流れてきたものとすれば、水の流れはそうとうゆるやかであったであろう。下流から運ばれてきたとすれば、子撫川の水位が上がった時に堆積したものと考えられる。

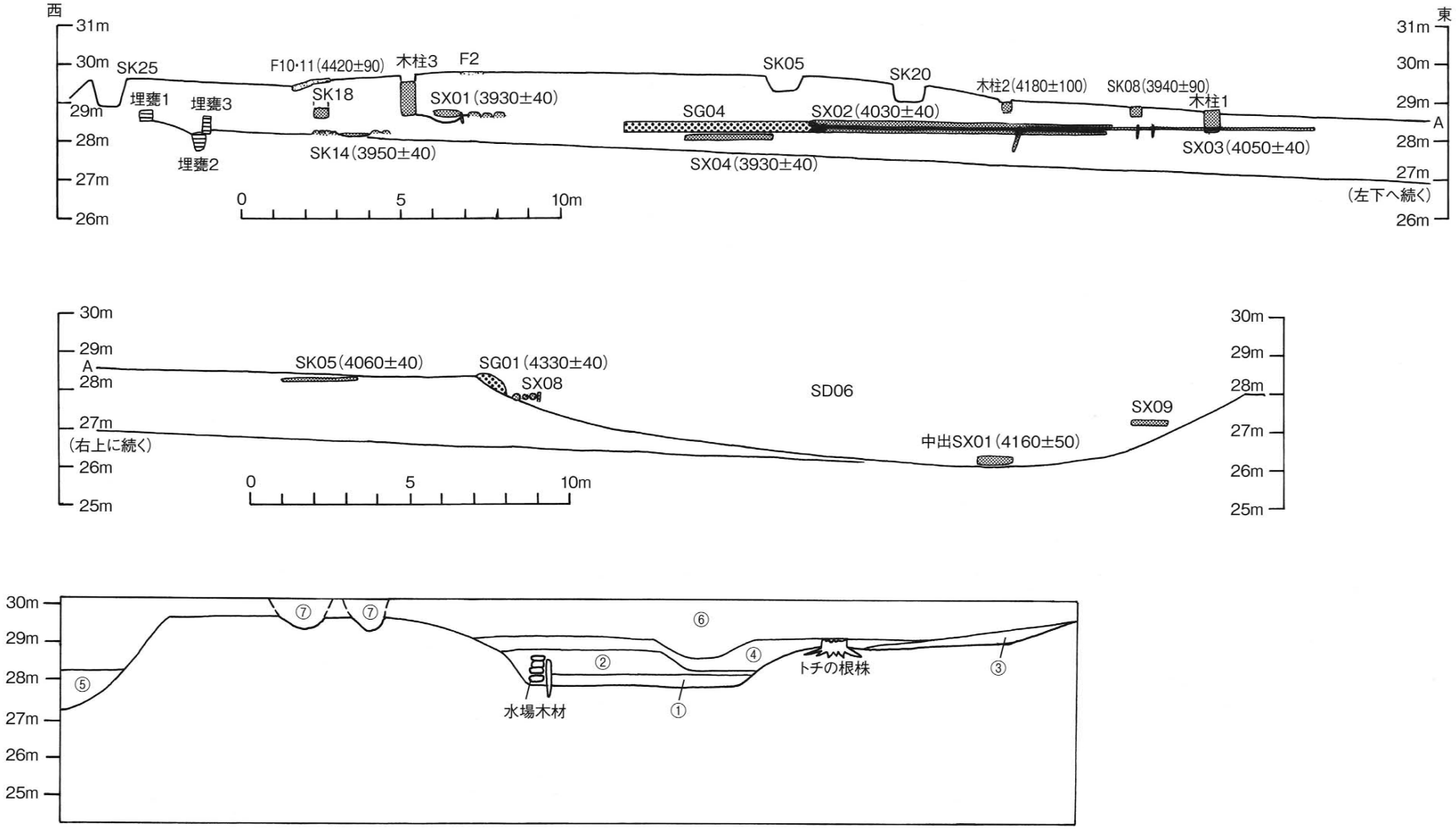


図2　土層の堆積時期

①縄文時代中期前葉～中期後葉
②縄文時代中期末～後期初頭
③縄文時代前期土層の流れ込み
④縄文時代晩期中葉までの堆積
⑤縄文時代晩期の堆積
⑥平安時代前期以降の堆積
⑦平安時代末の溝

SX01のC14年代は3,930±40年前、中出地区SX01のC14年代は4,160±50年前の数値が出ている。それが正しいとすれば、およそ230年間のできごとということになる。

川の中には、足場や水溜め木組みのほかに、木製品や木材が横たわっていた。それらは、木製品を作るためや貯蔵穴の構築その他の目的で水漬け保管されていたものであろう。縄文人は、谷口で、食料の採集、加工、貯蔵、木製品の製作などを行なっていたと考えられる。

それでは、彼らの住居はどこにあったのであろうか。谷口の中央の第6調査区の北側にあるのではないかと予想され、試掘調査が行われたが、中世以降の川の流路となっており、残ってはいなかった。そこは谷の中心であり、谷水の影響を一番受けやすいところである。人が日常寝起きする場所になったとは考えにくい。住居がこの近くに必ずあるというものではないであろう。例えば、谷口から西方2kmにある矢波牧遺跡では、前田式土器の時代の石組炉が見つかっている。そのように、集落は周辺の山間地に散在していた可能性が考えられる。仮に近くにあったとすると、南側の丘陵裾部であったかもしれない。川の南岸には、串田新式土器と前田式土器の埋甕が残されているのは、そのことと関係があるのかもしれない。そこは、現在住宅地であるが、平安時代にすでに地崩れとなっているところである。

参考文献

小矢部市教育委員会 1982『富山県小矢部市桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』
小矢部市教育委員会 1987『富山県小矢部市桜町遺跡―県道改良工事に伴う雀谷地区の調査―』
小矢部市教育委員会 1989『富山県小矢部市桜町遺跡―県道改良工事に伴う深沢地区の調査―』
小矢部市教育委員会 1990『富山県小矢部市桜町遺跡―船岡地区の重要遺跡確認緊急調査―』
小矢部市教育委員会 2003『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』
小矢部市教育委員会 2004『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅰ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ』
小矢部市教育委員会 2005『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅱ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ』
小矢部市教育委員会 2006『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書　縄文土器・石器編Ⅰ』
小島俊彰 2000「前田式土器様式と岩峅野式土器様式の諸型式」『大境』第20・21号　富山考古学会
小島俊彰 1974「北陸の縄文時代中期の編年―戦後の研究史と現状―」『大境』第5号　富山考古学会
桜町遺跡発掘調査団 2001『桜町遺跡調査概報』学生社
庄川町教育委員会 1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』

表２　遺跡のできごと

時期区分		土器型式・遺構 （C 14 年代）	遺跡のできごと
		（1万年前以前）	谷口が湖か沼であった。（青灰色縞状堆積） **寒冷**
早期	前半		谷口の湖沼堆積をえぐり砂礫が堆積する。 **温暖**
	後半	押型文・貝殻文 （9,180 年前）	谷口・谷中に黒色土が堆積するか。 黒色土の上に青灰色砂が堆積するか。
前期	前葉	佐波・極楽寺式 （7,450 年前）	谷口・谷中に黒色土が堆積するか。 **小康**
	中葉	朝日 C 式	黒色土の上に砂礫が堆積するか。
		福浦下層式	
		蜆ヶ森式	
	後葉	福浦上層式 （5,890 年前）	谷口に黒色土が堆積する。南丘陵から流出か。 コゴミ? **温暖・海面上昇**
		朝日下層式	
中期	前葉	新保式	谷口に淡茶褐色土が堆積する
		新崎式	
	中葉	天神山式	
		古府式・SD 06 （4,440 年前）	谷口に川 SD05 ができる。貯蔵穴が掘られる。 **安定**
	後葉	古串田新式	川 SD06 ができる。貯蔵穴が掘られる。
		串田新式 中出　SX01 SG01・04 （4,160 年前）	川底に水溜め木組みが作られる。 SD06 の川岸に土器溜まりができる。
後期	前葉	前田式・中津式 SX01 ～ 09 （4,000 年前）	SD06 の水位が上がり、青灰色シルトが堆積する。 水場木組みが作られる。
		気屋式	木組みの上に黒色土が堆積する。　**水位上昇** 人の活動が谷奥へ。
	中葉	酒見式	黒色土の上に褐色砂が堆積する。
	後葉	井口式	
		八日市新保式	谷中に水溜め木組みが作られ、貯蔵穴が掘られる。
晩期	前葉	御経塚式	
	中葉	中屋式	谷口に褐色砂の上に黒色土が堆積する。 谷中は環状木柱列が作られる。　**小康**
	後葉	下野式	谷奥に墓が作られる（埋甕）
弥生	前期	柴山出村式	谷奥に墓が作られる（埋甕）

2　桜町遺跡の縄文時代中期後葉から後期初頭土器の位置付け

小島　俊彰（金沢美術工芸大学）

はじめに

2005年12月、小矢部市教育委員会主催で「桜町遺跡縄文土器検討会」が行われた。石川・福井・岐阜・新潟・富山の実測図資料を持ち寄り、桜町遺跡出土資料の編年上の位置づけを話し合うものだった。この時、縄文時代中期後葉から後期初頭の興味深い資料が多いとかねがね評判だった桜町遺跡出土土器の図が、「土器溜まり」ごとに提示された。中期後葉から後期初頭の多数の資料が纏まって図化されていることに驚き、私の知見にない資料も多くてそれらを従来の編年表上に即座に位置づけることが難しくて戸惑った。また、『桜町遺跡調査概報』（桜町遺跡発掘調査団2001）では「捨て場」と表現していたものを遺構「土器溜まり」として扱い、地点ごとの出土資料に一括性を持たせる説明には反発感があり、「ＳＤ06の串田新式土器群を、桜町式として呼ぶことを提唱しておきたい」との検討会資料の小結文（久々2006）、あるいは検討会後に刊行された本報告書（小矢部市教委2006）で、串田新Ⅰ式と串田新Ⅱ式は明確に分離できないと述べ、さらに「蕨手状隆帯垂下の葉脈状文土器や肥厚口縁土器などは串田新式の系譜を引く土器で後期へ続くものである」と記されるなど、私が従来見做してきた編年案とはあまりにも相異なるので驚いた。

桜町遺跡の報告書発刊と検討会の影響は、2007年3月に群馬で開かれた縄文セミナーの会主催の検討会で早くも表れた。北陸地方について発表した寺崎氏は、当日資料の編年表に桜町遺跡の検討会で発表された桜町遺跡「土器溜まり」土器群の序列を紹介して組み込み、「串田新式はⅠ式・Ⅱ式の概念を踏まえながらも一括資料を重視し、Ⅰ式→Ⅱ式という既製の編年観にとらわれない編年の再検討が迫られている」と記している（寺崎2007）。従前から新潟県内の串田新式を拾い上げてその編年位置を言及していた氏の発言故に、私には重い言葉であった。その前年には、大杉谷式の研究を進めている木下氏の、北陸の中期末から後期初頭にかかる研究史を的確に捉えての発表（木下2006）があり、その中で「北陸編年の混乱は、域内での自律的系統的変遷を重視する伝統的編年観にある」との指摘や、「同一域内での複数系統の並列的関係が存在すること」を考えるべきことや、「串田新式と大杉谷式を対比的に論ずるには、同一基準を以って併行関係を云々する必要」、「双方に存在する要素を以って比較するのは必然」など、ここでも筆者が受け止めるべき指摘がされていた。

以下の小文は、このような見解や指摘を受けて、桜町遺跡報告書提示土器資料の分類を行うものである。報告書には、丁寧な「土器観察表」があり調査区ごとの出土土器についての解説もあるので、重複する作業であることを十分認識しながら、「型式は模式図が描ける」（小林1989）というその型式を今後作り上げていく絶好の資料が桜町遺跡にはあると感じて、混乱している北陸の中期末から後期初頭の編年を考え直す新たな出発点としての作業である。

以下、Ⅰでは、桜町遺跡出土土器の編年位置を示し易いようにと、富山県資料に限定しての中期

後葉土器の編年表を示す。Ⅱでは、桜町遺跡の報告書に提示された資料を地区や層位を離れて分類ごとに図を集め、編年上の位置づけを考える。Ⅲでは分類作業から浮かび上がった問題点と興味を持った事柄を取り上げる。

なお、桜町遺跡の分類資料図は本文中の第１図～第６図に示すが、磨消縄文施文土器はⅢの第10図で示す。最後に、富山県下資料を付図として載せておく。

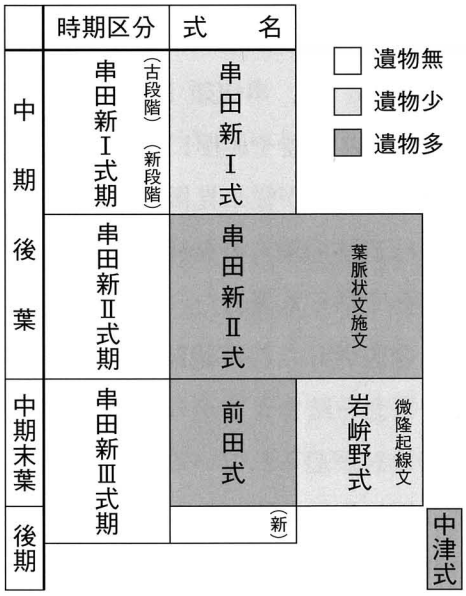
多くの報告書や研究論文などから図を転載したが、図版内に数多く入れるためなどで改変したものもある。お礼とともにお詫びする。図の縮尺は、第１図～第６図は1/8としたが不同のものもあり、詳細は原本で確認されたい。土器図の左下の黒丸（●）は、桜町遺跡出土を表している。

Ⅰ　編年表

ここでは、桜町遺跡出土資料の編年的位置づけを確認し易くするため、富山県下の資料を中心とした編年表を提示しておく。混乱に拍車をかけぬため、従前から私などが用いていた時期名や、様式名・型式名あるいは文様名などを組み込んでいる。今回扱う時期は、中期中葉の上山田・天神山様式後のものに限り、かつて古串田新式と呼んでいたものは触れない。

中期後葉から末葉の時期区分を、串田新Ⅰ式期・Ⅱ式期・（Ⅲ式期）とする。Ⅰ式期は大木９式期・加曾利ＥⅢ式期に対応する串田新Ⅰ式に当て、Ⅱ式期は同Ⅱ式に対応させる。（Ⅲ式期）は前田式・岩峅野式の時期であるが、前田式は串田新Ⅱ式からの、岩峅野式（微隆起線文系）は葉脈状文施文土器系の流れにあると考えている。

表１　桜町遺跡を主とした中期後葉の編年表



前田式（古）と岩峅野式は、中津式とは時期的に重ならないと考え、中期止まりとした。前田式（新）は高波式と共に中津式と重なると考え、後期初頭に位置づける。高波式については、Ⅲで触れる。富山県下では称名寺式や中津式と比定できる資料が従来は極めて少なかったこともあり、気屋式の直前は前田式という位置づけを優先してきた私にとっては、大改編である。しかし、後にも触れるが、編年表上で中津式に対応する前田式（新）や高波式が白抜き（出土が無い）になってしまったのは、新たな問題である。

北陸の中期末から後期初頭の研究史については、木下や西野氏の発表に詳しい（木下1985・2006、西野1987）。参照されたい。

Ⅱ　桜町遺跡からどんな土器が出土しているか

１群　貝殻腹縁文で飾った工字状文を口辺部に施しているもの（第１図1～5）

工字状に引かれた沈線文様を貝殻文で飾っている深鉢、第１図1～5である。この文様を胴部半ばまで幅広く施したもの1～3と、口縁に止めた4・5とに分けられる。

A　幅広く施文する１～3は、胴下部が円筒形で、口辺は外反するバケツ形器形である。口縁には低い突起が配され、隆線上や平面の区画内に、貝殻復縁文が施されている。1には、口縁部と胴部との2段文様構成になっているのが読み取れる。

B　文様帯の狭い4・5は、口縁に突起は持たない。器形はAとは異なり、5では胴半ばで膨らみ気味である。4の器形はAに近いが、富山県下での幅狭文様帯の出土例では、Bの仲間では珍しい例である（付図１－15～17対比）。

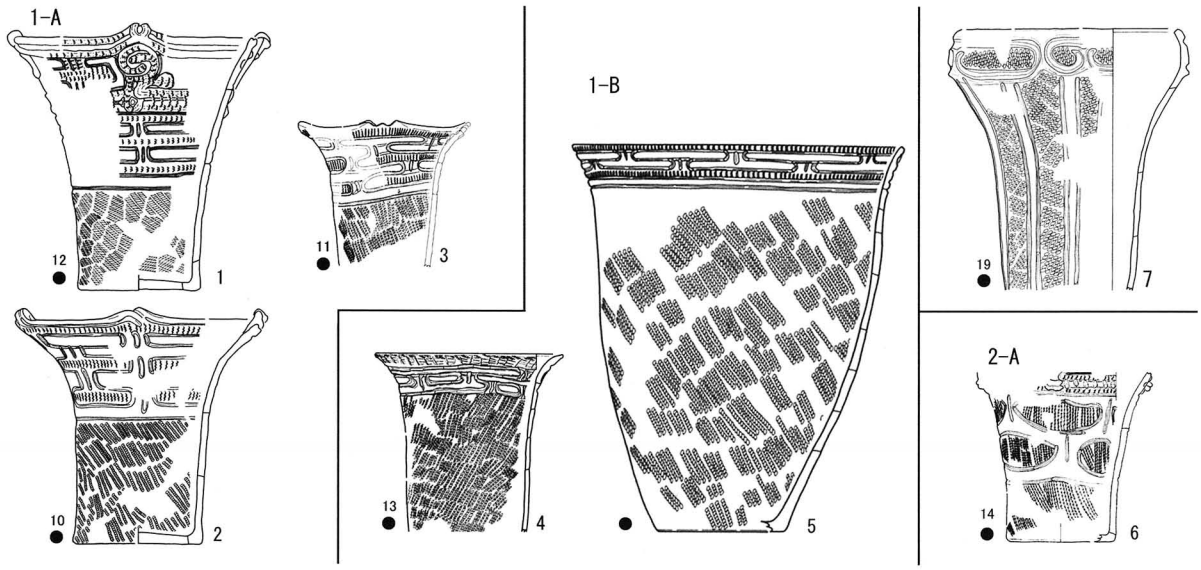
編年上の位置づけ　付図１上段に類似資料が並ぶが、これらの県編年表での位置づけは、串田新Ⅰ期の中でも古手になる。

２群　口縁にハシゴ状文、胴部に沈線区画文を配するもの（図１図6）

第１図6はバケツ形の深鉢で、口縁上部が欠損しているので見づらいが、口縁部には２本の隆線を横走りに貼りその間に縦の短沈線を連続させた「ハシゴ状文」が配されている。この中途には橋状把手も貼られている。胴部には沈線で楕円区画文が引かれ、この区画文の間に縦沈線を引いている。地文は、撚糸文である。

付図１の下段には、ハシゴ状文と区画文を持つ類似した資料が並べているが、中でも19・20は極めて近い。21（桜町遺跡）のハシゴ状文が直線配置と読めるので、20のような平縁に小突起が付くものと思われる。

編年上の位置づけ　先の１群Ａ－１よりも後出で串田新Ⅰ式期（新段階）と考えられる。



第１図　桜町遺跡出土の中期深鉢（串田新Ⅰ期）　縮尺：1/8

3群　U字状双頭突起をもつもの（第2図1～13）

U字状双頭突起を持つバケツ形器形の深鉢群である。この突起名は、小竹藪遺跡の資料（付図2－2）を検討していた沼田啓太郎と小島の会話から生まれたもので、Ⅱ式を代表する口縁飾りとして名づけたものである。現在は、串田新Ⅰ式期（新）には既に登場すると見ている（付図1－25など）。

A　口縁部に2本の隆線を配するものを集めた（1・2・13）。1は、突起の下位に橋状把手を持つ。胴部に沈線で山形やH状の区画が引かれ、区画内には幅広の貝殻文が充填される。口縁部にも、幅広の貝殻文が刻される。2は、口縁部に2本の隆線を口縁曲線に合わせて巡らせ、この間を繋ぐように短い弧状隆隆線（本稿では短弧隆線文）を貼り込んでいる。橋状把手はない。13は、U字状双頭突起をもつものと想定してここに収めた。隆線上には縄文が施され、隆線間には沈線で波状文が引かれている。胴部には、縄文を施文している。

これらの文様配置は、串田新Ⅰ式期のハシゴ状文施文の土器（付図1下段）と基本的には同じであるが、後出のものと判断している。1の特徴ある胴部文様は、本図の23・25に近い類例がある。2の短弧隆線文使用の資料は、付図2－2・3がある。本遺跡の葉脈状文使用のもの（第4図4～8）にも見られる。

B　3～7は、口縁部に隆線が1本張られているものである。U字状双頭突の基部に橋状把手がないので、4のように一連で走るものもある。3の隆線上は貝殻文が、4では刻みが施されている。

C　胴部に葉脈状文を配したもの（8～10）。U字状双頭突であることを優先して後に見る葉脈状文施文土器群から抜き出し、ここに収めた。隆線上の刻みは、8がヘラ、9は貝殻である。刻みの無い10は隆線の基に刺突を加えている。この土器片はU字状双頭突起の片方で、落ち込みからは短弧隆線文が下るようである。器面には条線が密集して施されているが、葉脈状かどうか確定できない。9には蕨手状隆線が見られる。

D　隆線を持たぬものであるが、小さなU字状双頭突起を持つものである（11・12）。

以上のものはそれぞれ胴部飾りでも違いを示しているが、串田新Ⅱ式期の中でも新しい位置づけが与えられると考えている。

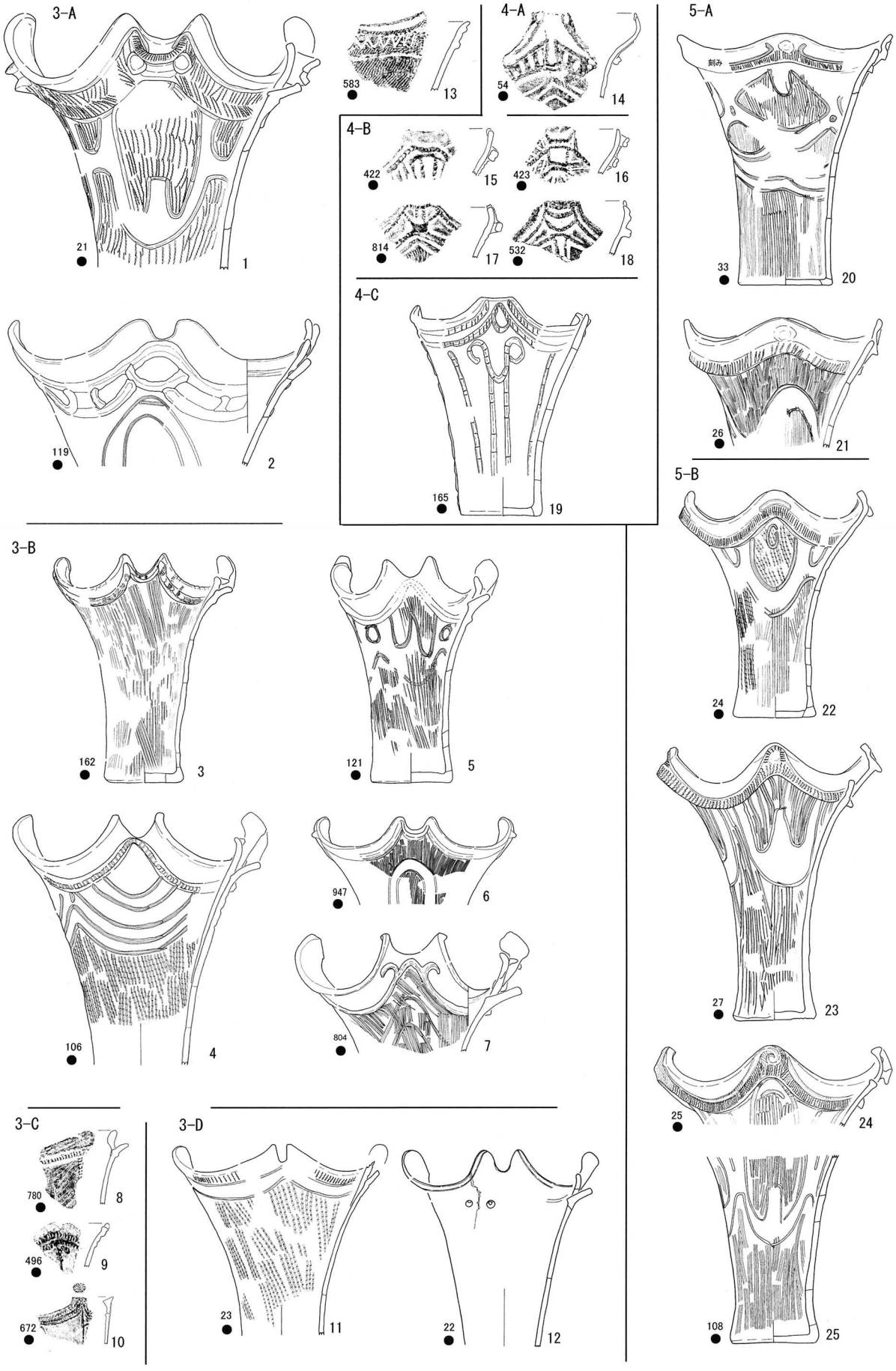
編年上の位置づけ　以上の3群A・B・Dは、バケツ形器形から串田新式の系統の中にあると推定し、橋状把手を持たないものが多いことや胴部の文様からⅡ式期、その中でも新しいところに編年されると考えている。葉脈状文を胴部に施文する3群Cも、同様に推定する。

4群　台形波頂をもつもの（第2図14～19）

台形波状の深鉢で、口縁部に2本の隆線を配しているものを集めた。

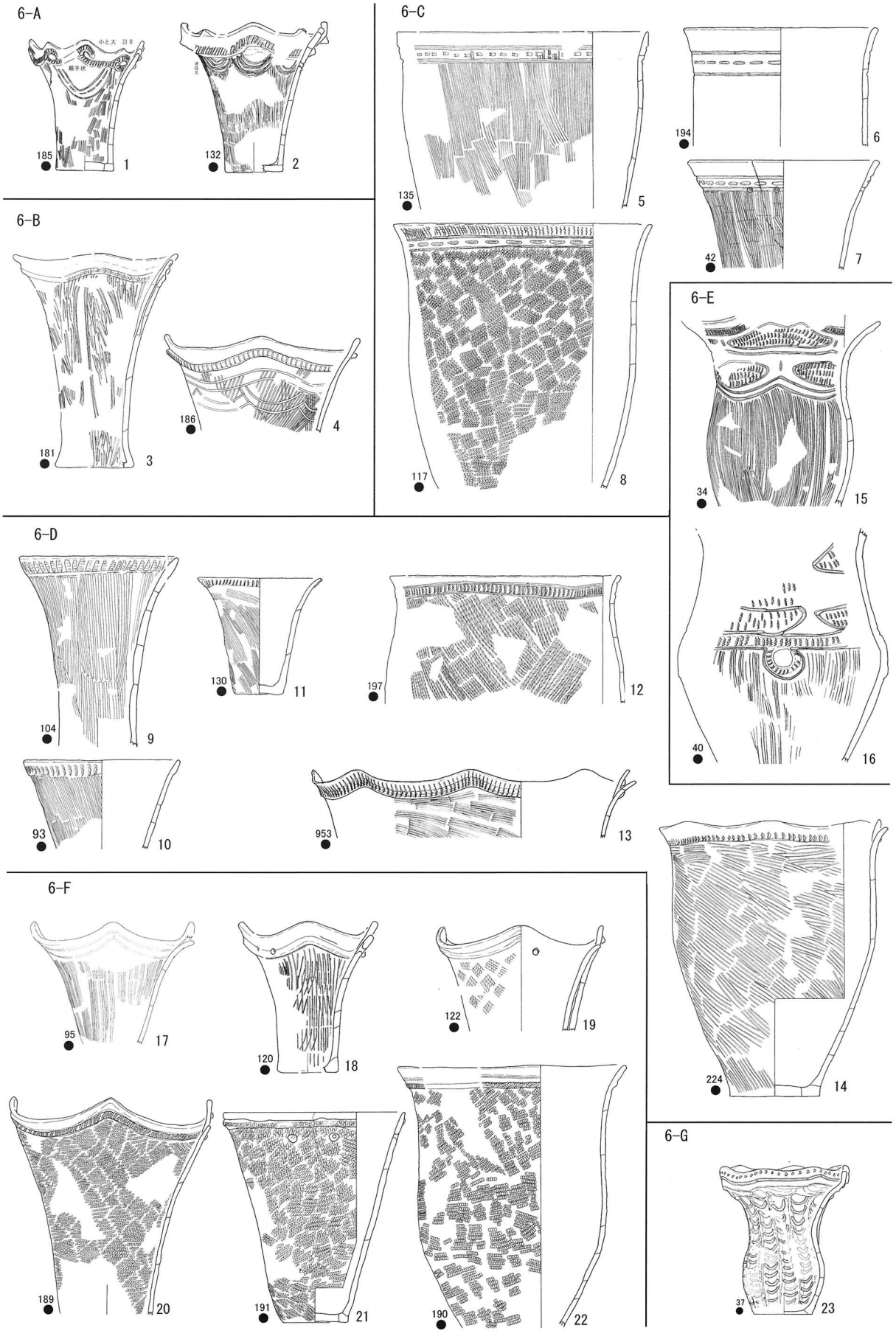
A　14は、口縁部にハシゴ文を置き、隆線上には縄文を転がしている。橋状把手を備えている。桜町遺跡では、少例である。

B　15・16もハシゴ文をもつが、隆線上は貝殻文施文となっている。17・18の隆線間は無文で、18は隆線上にも施文はない。



第２図　桜町遺跡出土の中期深鉢（串田新Ⅱ期）

縮尺：1/8



第３図　桜町遺跡出土の中期深鉢（串田新Ⅱ期）　縮尺：1/8

C　19は高低2種の波頂部を向き合わせ正面を示している深鉢である。口縁部の２隆線や胴部に垂下する隆線上には、貝殻文が施されている。

編年上の位置づけ　A・B（14～18）は、橋状把手を持つなどのことから串田新Ⅱ式期に位置づけるが、３群との関係などはまだ整理ができていない。C－19はⅡ式期新と考えている。

５群　円文飾りの緩やかな曲状波頂をもつもの（第２図20～25）

バケツ形器形の下部口縁に粘土を貼り付けて口縁の広がりを強調する群である。胴中央から下部では締まりを強め、底部縁が外に張り出し気味になることもあって、背高で流麗な器体となっている。胴部の地文は、縦条線が基本となっている。4個の曲状波頂部に環状の窪みを配することも、特徴である。

A　20・21は、口縁部の張り出し端部にヘラ刻みを施している。20の胴上部には、曲線区画文が配されている。図中央の区画文の上端がU形に落ち込んでいるのは、気に留めておきたい。

B　22～25は、口縁端部に貝殻文を施すものである。22の胴上部の区画文内には撚糸文が転がされている。地文にも撚糸文が混ざる。23は胴部が伸びた流麗な器体で、目を引く資料である。胴上部に引かれた無文の区画を、「山の字無文」と報告書では表している。この文様は、当図1にあることは、先に見た。口縁上部を欠く25にも、この山形無文が見られる。

編年上の位置づけ　この５群A・Bは、富山県内では初出である。その23と25の山の字無文は、22の文様とも共通点を見出せる。だが20の曲線区画文とは違いがあると思うが、そう思う一方で、20の曲線区画文上端のU状落ち込みは、山の字無文と結びつきが近いのではと考えたりもする。付図５－７に20と似た文様があり、この事例を用いれば20は串田新Ⅱ式期と判断できる。先に見たU字状双頭突起持ちの当図1と23・24の胴部文様の近接などからも串田新Ⅱ式期の中に位置づけができるので、A・Bともに同期に置こう。

６群　隆線や列点文・刺突文で飾ったもの（第３図）

先のU字状双頭突起の時期に近いその他のものを一括していて、それぞれが必ずしも関連をもつものではない。他群で扱うべきかと思うものも入っていて、細分作業としては拙いものとなっている。

A　口縁に曲隆線を配したもの（1・2）で、富山県内での類例は無いだろう。共に、高い波頂が４個、低い波頂が同じく４個の配置となっている。１の貝殻文を刻んだ隆線は、波頂の下で蕨手状に曲りながら一周する。胴上部には列点状の短線を挟んだ連弧状文を配する。２も胴上部に弧線文を配する。共に胴部には条線が引かれている。

B　口縁部に隆線１本を巡らすもの（3・4）。共に地文は条線で、３では縦に、４では横に間隔の荒い連弧線がひかれている。

C　口縁部に引かれた2本線の間に列点を配するもの（5～8）。8の口縁部の刻み目は、貝殻文である。列点を共有するので、串田新Ⅱ式期と位置づけできる。

D　口縁部に貝殻文を付したもの（9～14）。9～11は平口縁直下をやや肥厚させ、ここに貝殻文を付す。12は口縁部に引かれた2本線間に貝殻文を付す。胴部は撚糸文が施される。13は、多波頂をもつ。胴部には条線が引かれている。14は低く緩い曲状の波頂を6個もつ同膨らみの深鉢で、頚部に貝殻文を施す。

E　口縁部に沈線で区画を作り貝殻文を刻す、胴膨らみの深鉢である（15・16）。共に口縁部を欠いているが、区画文の間には縦短線を配している15は波状口縁のようだが、このような器形と文様を持つ類例を見ない。16は、区画文の下部に円形隆帯を配している。16は15と同じく曲線区画文を配するが、文様間に縦線を引いていない。胴部文様の区切り線が水平に引かれ、その下部に円形の隆帯文を貼っている。

F　口縁上部に沈線や隆線を配したもの（17～22）で、縄文や条線で器面を覆う。20～22は、隆線上に縄文が施されている。

G　23の1点である。本遺跡では珍しいキャリパー器形で、緩い曲線波頂が7個ある。胴部には隆線が垂下しその間に弧状の沈線が埋められている。

編年上の位置づけ　凡そ串田新Ⅱ式期新と位置づけておくが、6群C8とD9～11は注意しておきたい。C8は口縁上部にD9～11と類似した貝殻文の施文があり、その下部に串田新Ⅱ期に見られる平行線間に引かれた列点文がある。このことから、口縁上部の貝殻文施文が串田新Ⅱ式期にあることを認める資料だからである。

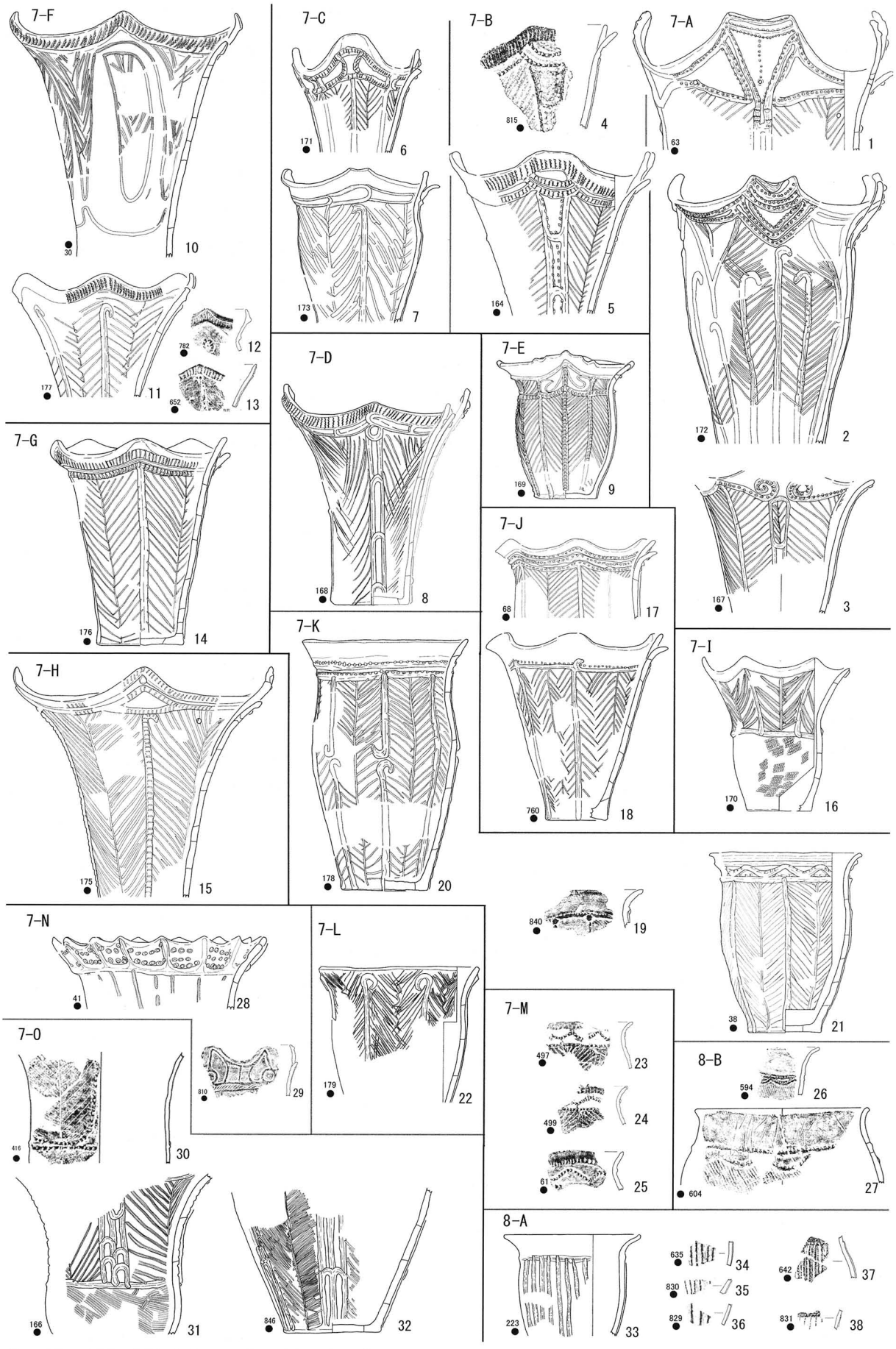
7群　葉脈状文を施したもの（第4図1～25）

葉脈状文を施文した深鉢は、実測図で示されたものが20点近くある（第4図）。本遺跡で発掘された諸系統の中では、最も仲間数が多い。葉脈状については、「文様の施文形式であって単なる中期の一型式に限定されるものではない」（沼田1966）との指摘もある（沼田1966）ので、葉脈状文に囚われないでの分類を試行しても見た。U字状双頭突起を持ち葉脈状文を施文しているもの3点を、U字状双頭突起を持つ深鉢群の中に置いている（第2図8～10）のは、その作業の残影でもある。あるいは、葉脈状文を施文したものを、バケツ形器形と胴部の膨らんだものとに二分することも行ってもみたが、その後の展開ができず廃した。結局、今回も葉脈状文を施文するものという旗印のもとに集めることになった。それが数の多さになったのかも知れない。

集めたものを見ると、そのほとんどが口辺部に隆線を貼り付けている。胴部の葉脈状文の主脈にも、第4図10以外は隆線が用いられている。器形は串田新式に多いバケツ形と、胴膨らみのものとが拮抗している。胴膨らみの隆線基部には第4図1～3・17～21のように隆線基部に刺突を加えているのに対し、バケツ形のものでは4・5に見るだけである。横位に葉脈状文が引かれているのは、29の口縁文様下部に辛うじて認定されるだけである。

A　刺突を伴う隆線で波状口縁部に施文するもの（第4図1～3）

1・2は中央がやや落ち込んだ台形波状の深鉢で、基部に刺突を施した隆線を口縁に沿って巡らせ、波頂部では刺突を伴った2・3本の隆線で三角状の文様を作る。1は、2本の平行隆線を胴部



第４図　桜町遺跡出土の中期深鉢（串田新Ⅱ・Ⅲ期）

縮尺：1/8

に下す。隆線２本の垂下は３にも見られ、短弧隆線で繋いだ区画文が作られている。１にも同様の区画文と読み取れる部位が残存するが、その部の隆線上には貝殻文が施されている。２には2本組の隆線垂下はないが、端部を曲げこんだ蕨手状の隆線を胴部に多数配していて、復元図からは早蕨の群生を表現したかのように感じられる。富山県下では蕨手状隆線文は少なく、このような密集配置のものは他に無い。

以上のようなものの富山県下における類例は、針原西遺跡（付図３－25）を挙げることができる。しかし針原西資料は胴部と口縁部の境を直隆線で区切っているという大きな違いが指摘できる。この胴部との直線区切り線を配した葉脈状文施文深鉢は、付図３－9の針原西B資料や小竹藪遺跡資料（付図３－27～29）に見ることができる。

B　口縁上部を貝殻文で飾りその下部に貝殻施文の隆線を巡らすもの（第4図4・5）

台形波頂をもつバケツ形の深鉢で、波頂下部の胴部に短弧隆線で繋いだ２隆線を下す。この垂下する隆線内側の基部には刺突が施されている。富山県内では、他に類例を知らない。

C　短弧隆線文を口縁部に一周させるもの（第4図－6・7）

２本の隆線を短弧隆線で繋いだ区画文様を、口縁部に切れ目無く一周させている深鉢である。この文様帯は波状口縁に合わせて曲線状であるが、7の文様下部隆線は直線的であるとも言える。口縁上部に空白部分が取られているのも、注意である。胴部に垂下された隆線上端は、7では蕨手状に曲げられている。口縁部の短弧隆線文は、2本線を繋ぐ短い弧状の隆線は、6では交互の向きで配置されているが、7では向きが一方向である。胴部資料31・32の短弧隆線も同方向向きである。５は交互の向きである。富山県内で口縁部の短弧隆線文に限って探せば、付図３－1～5・7・9などを挙げることができる。これらに用いられている短弧線は、いずれも交互に向きを変えている。付図3のものは胴部に葉脈状文が見られるが、波頂部で短弧隆線文帯は分断されている違いがある。付図2－2も分断されているが、3は一連と見て取れる。全く趣を異にするが、付図2－22は胴部が張り出す深鉢で、その頚部に短弧隆線文を配している。

D　口縁上部に貝殻文を施文しその下位に短弧隆線文を展開するもの（第4図8）

口縁上端部に貝殻文が施されているのは、7－B・Fと同じ。その下位には隆線2本が口縁の湾曲に合わせて走る。波頂の下位胴部にも２本の隆線が下り、短弧隆線文が繋いでいる。両方の短弧隆線は、7－C7と同じく同一方向向きである。口縁を飾る波頂４個は、高低それぞれ2個が対峙している。

E　口縁上部は無文とし頚部に文様帯を持つもの（第4図9）

口縁の突起は4箇所にあるが、図示のように１箇所では高く幅広となり、正面が示されている。文様帯の上の隆線は波長に従い曲状となるが、下段の隆線は直線状である。

F　口縁上部に貝殻文を施文し以下に葉脈状文を配するもの（第４図10～13）

10は、胴部に縦の長楕円区画を引いている。本群では珍しく、垂下する隆線を持たない。胴下部に文様区切りの波線が引かれているようだ。11は波頂が6個の深鉢で、胴部には蕨手状の隆線が垂下する。葉脈状文施文のものが貝殻文を用いることは少ないが、胴部が膨らむ器形の12にも1例

ある。この口縁上部の貝殻文は、BやDにも用いられているが、富山県下では、桜町遺跡以外に見当たらない。

G　口縁部に２条のヘラ刻み隆線を配するもの（第４図14）

ヘラ刻みを施した隆線２本を口縁部に配したものである。胴部には隆線を伴う葉脈状文を引いている。波頂を５個持つ深鉢である。２条のヘラ刻み隆線ということで似るものは、本資料下に示した15が挙げられる。付図2－15も2本線では合うが、これは隆線上を貝殻施文していることや、隆線が波頂部で連結を切っていることなどで違いがある。

H　２条のヘラ刻み隆線を口縁に配し波頂部では隆線を加えて直線とするもの（第４図15）

胴部に垂下する隆線先端は、小さく蕨手状に曲げられている。

I 葉脈状文が器上部に配されるもの（第4図16）

口縁上端と胴半ばに隆線を貼り、この区画内に葉脈状文を施している。下半は縄文施文である。本図10や30・31の胴最下部を無文としたものも珍しい。葉脈状文を器半ばで終えたものは富山県下でも他に無い。

J　基部に刺突を施した隆線を巡らす波状深鉢（第４図17・18）

17は６個の波頂をもつ口縁にあわせて曲線状３本の隆線を、18は幅広の無文口縁下に蕨手状の曲がりを加えた隆線１本を直線的に配している。これも富山県下では類例を知らないものである。

K　基部に刺突を施した隆線を巡らす平縁深鉢（第４図19～21）

19は、頚部に上側基部に刺突を施した隆線を巡らす。胴部には隆線が垂下され、その起点には円形のボタン状突起が貼られている。20は、刺突を加えた隆線を２本頚部に巡らせている。胴部に垂下する隆線には、胴部中央で向きの異なる蕨手状を配したものもある。21は、口縁部に２条の隆線を巡らす。20とは異なり、この間に波状の隆線を入れている。この波状隆線と下段の隆線上側には、刺突文が加えられている。

L　口縁直下から葉脈状文施文する平縁深鉢（第４図22）

先の20・21の口縁から頚部までを取り去ったかのような土器である。富山県内に類例を知らない。蕨手文隆線が先端の向きを違えて配されている。

M　口縁直下に刻みを加えた波状隆線を配するもの（第４図23～25）

いずれも胴が膨らむ器形である。口縁直下に波状に隆線が貼られ、胴部に葉脈状文が引かれている。21と類似点が大きい。23・24の口縁と隆線上には、貝殻文が施されている。富山県下では初見のものである。

N　口縁部を隆線区画で飾るもの（第４図28・29）

28は葉脈状文が見当たらない土器で、ここに収めるのは不具合なものである。刺突文と隆線区画から大杉谷式の窓枠区画文との関連に思いが至り、直接の比較は難しいのだがここに置く（付図３－32参照）。第４図29は区画文の下位に隆線を挟んで斜線が引かれていて、横位の葉脈状文とも見て取れ小竹藪遺跡の資料（付図３－27）との関連も思案しここに収めた。

編年上の位置づけ　葉脈状文を施文しているものの多くは、串田新Ⅱ式期に含まれると考えてい

る。理由の一つは、７群Ｂ～Ｄ（第４図）に串田新Ⅱ式期の短弧隆線文が見られることである。その二は、口縁部上端に貝殻文を施すことである。先に見た円文飾りの緩やかな曲状波頂をもつ５群Ｂ（第２図）の深鉢が貝殻文を持つが、この土器群を串田新Ⅱ式期と判定していて、同じ口縁部上端の貝殻文が７群Ｂ・Ｄ・Ｆにも見られるからである。

ところで、第4図葉脈状文施文土器の多くは波状口縁を持つ器形で、口縁部の文様は口縁の曲線に合わせてカーブしている。その中で、18は頚部に直線的に隆線を走らせ、胴部との区切り線とし口縁部は無文としている。19・20は平縁だが、頚部に区切り線として隆線を置いている。その19は隆起線下にボタン状の飾りを貼り付けているが、付図４－10・12～14にも同じものが見られる。この10・12～14は桜町遺跡の7群Ｍ（第４図23・24）に後続し、葉脈状文施文土器の中では新期と考えられる。また付図４－29・30にもボタン状飾りは見られるが、こちらは微隆起線文を用いた土器である。一考しておこう。

８群　微隆起線を用いるもの（第４図26・27・33～38）

微隆線文を施文した、胴の膨らむ土器群である。本遺跡での出土は少ない。

Ａ　胴部に微隆起線を縦に並べるもの（第４図33～38）

全体像が分かるのは33の1点であるが、小片の34～38も類似したものである。口縁部は無文で張り出し、頚部に微隆起線を1条巡らす。37・38では、その微隆起線の基部に刺突を施している。33の胴部に縦に貼られる隆線は、やや太目である。

Ｂ　頚部に微隆起線で弧文を連続させるもの（26・27）

Ａと類似するが、胴部には縄文が施される。

編年上の位置づけ　この８群Ａ・Ｂは、葉脈状文を用いている７群ＫやＭと似ている。８群Ａは、７群Ｋの頚部区切り線を１条にし、胴部文様を微隆起線に変えたものと見て取れる。８群Ｂは、７群K21やM23・24の口縁部文様を頚部まで下げて無文とし、胴部を縄文施文としたものと読む。微隆起線文は葉脈状文から変移したと考えられているが、この資料もそれを追認するものと言えよう。付図４－17～21当たる。報告書も、岩峅野式と位置づけている。石川では微隆起線文は極端に減少するが、本遺跡での少なさはその流れであろう。

９群　口縁下に2本沈線で弧線文様描くもの（第５図1～7）

少し張り出した胴部を持つ器形で、幅の狭い口縁部文様の下に連弧文を引くものである。

Ａ　口縁上部に隆線を用いた半円形の文様などを作り、この文様帯の下に１線を巡らした後に2本線による連弧文を配する（第5図1～3）。1の弧線区画の内側には貝殻文が施され、連弧文の間には逆Ｕ字状のちいさな沈線文様が見られる。胴部は縄文である。2・3は、口縁上部に隆線一本が巡りこの上部に半円形の弧隆線が貼られる。隆線上には、貝殻文が施される。連弧文の間には、半円文が置かれる。2には連弧文の下部に横線が見えるが、3にはそれが無い。この9－Ａの類品は氷見市の一刎前田遺跡と長坂貴船遺跡で知られていた（付図5－2・6）が、近年には射水市針原西Ｂ遺

跡でも類品が発掘されている（同図5－5）。

B　4は口縁上端部に貝殻文を施し、この下部に間に斜めの単線を連続した平行線を巡らす。以下の条線地文地に、連弧文を描く。肝心の連弧文はないが、器形や文様配置の似たものが本遺跡の6群C（第3図8）にあるが、極めて近い関係にあると予測される。

C　山形波頂をもつ第5図6・7は、肥厚している口縁端部に貝殻文を施す。この下位に連弧文を配する。6は沈線間に列点を引く。連弧文の間には、8Aと同じく小半円文が配されている。胴部と区切る、沈線と列点が配されている。

D　5は9－A～Cとは異なる口辺部が直立する器形で、やや肥厚した口縁部上端部をヘラで刻む。以下は縄文が施されていて見難いが三角状の区画文が連続して引かれている。

編年上の位置づけ　上記6の弧線文は前田式で尤も用いられる文様だが、両群の違いは口縁上部の文様帯が在るか否かと、弧線文の上下に区切り線が確り引かれるかどうかである。前田式への移行期と考える。

10群　頚部の平行沈線間に列点を施すもの（第5図8～16）

胴が張り出し口縁は外反する器形で、その口縁上半は無文とし頚部を巡る数条の沈線間に列点を施しているものである。平縁と波状口縁のものがあるが、波状のもの（8・9）は緩い曲線状の波頂を5個6個ともっている。平縁に見えるものでも、11・12のように低く畝っているものもある。胴部には、縄文が転がされる。

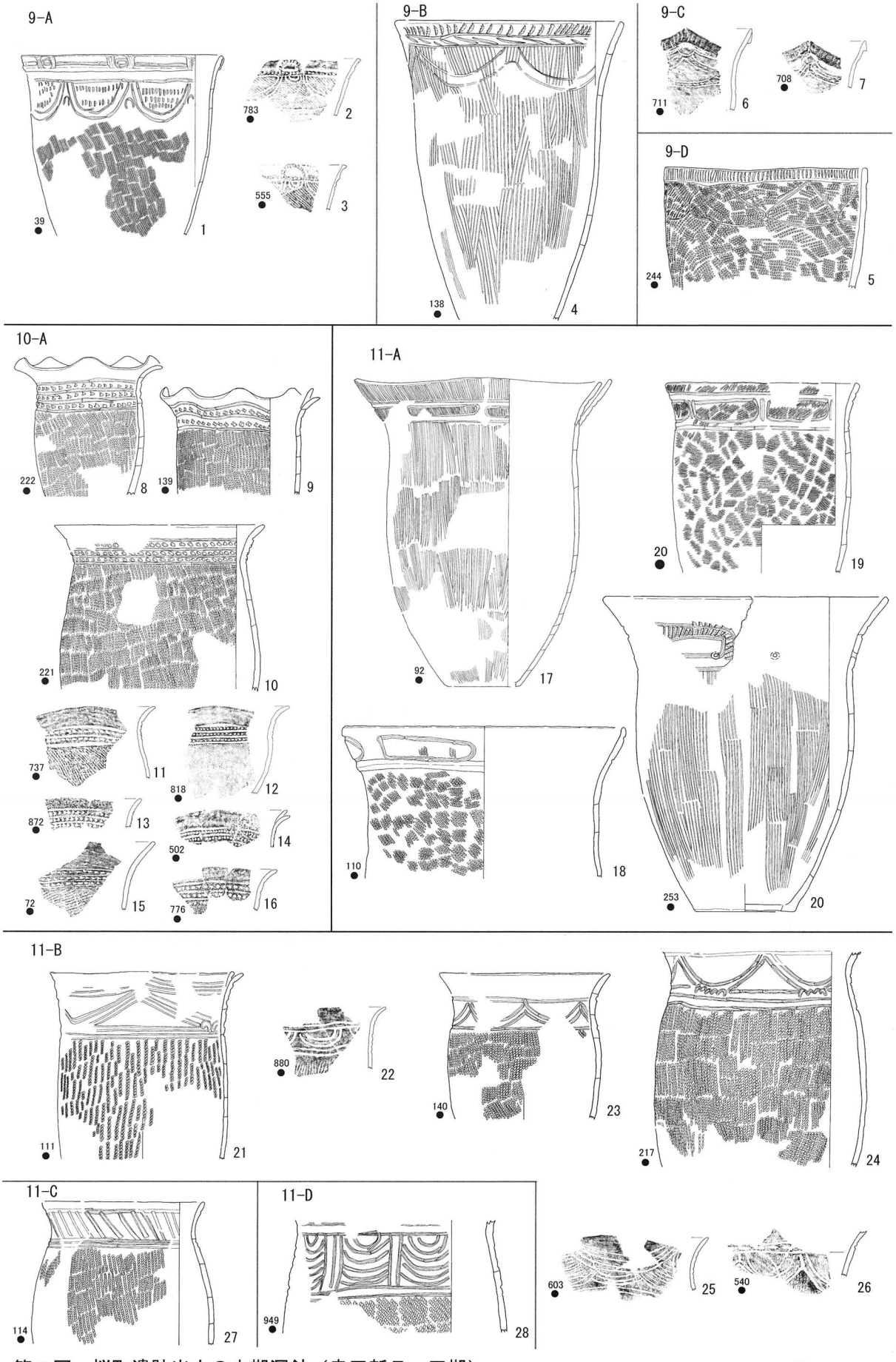
編年上の位置づけ　本遺跡では資料数が多いが、他遺跡では多いものではない。そのため位置づけは難しいのだが、報告書でも前田式に置いている。前田式の特徴に、頚部に幅を持って飾ること（第6図）、低く緩やかな波状口縁をもつもの（第6図1・6）があることを考えれば肯定できるだろう。

11群　口辺部に引いた平行沈線間に文様を配したもの（第5図17～28・第6図）

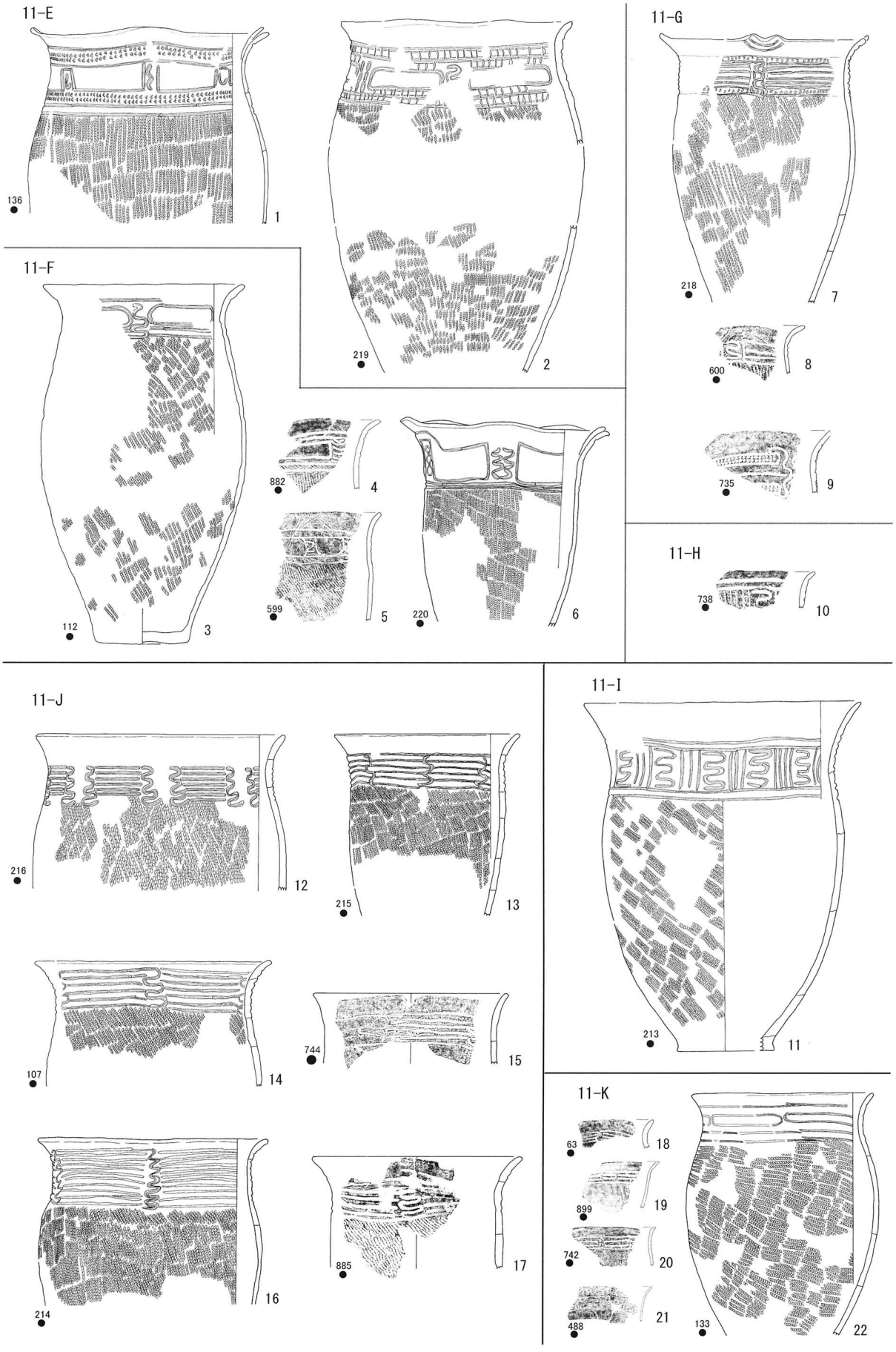
口縁部は外反し胴半ばで膨らむ器形の土器で、頚部を挟んだ平行線の間に文様が展開する。

A　頚部を挟む平行線の下部線が、頚部中央かあるいはやや上の部位に巡るものをここに集めているが、纏まりはよくない（第5図17～20）。17は口縁から胴下端まで条線が引かれ、沈線間を弧線で区切り変化を与えている。18は横長区画を描いているが、上部の通しの沈線を欠いている。19も口縁部に方形の区画を作り、この間に縦線を置いている。器面全体に縄文が転がる。20は口縁上部を無文としているが、通しの沈線を欠いている。頚部の区画文の構成は読み取れないが、貝殻文が加わっている。18・19に似たものは、付図5－31（長坂貴船遺跡）、32・34・37（針原西遺跡）に見ることができる。

B　平行線間に弧線文を連続させているもの（第5図21～26）である。21は口縁の張り出しが小さいためか、22や23のような口縁上部の無文部が無い。弧線下部に逆U字状文が辛うじて見えるが、このアクセントは24にも入っている。これに似るU字状文は、第5図1・2・3や6・7に見ることができる。関連する資料は、付図5－15～17・32、付図6－11にも見ることができる。



第５図　桜町遺跡出土の中期深鉢（串田新Ⅱ・Ⅲ期）　縮尺：1/8



第６図　桜町遺跡出土の中期深鉢（串田新Ⅲ期）

縮尺：1/8

なお25・26は弧線が見られるのでここに留めた小片であるが、他のものとは若干趣が異なっているものである。

C　平行線間に斜線を連続させているもの（第５図27）

上部の沈線は１本、下部は２本が引かれているが、共に上に上がり気味なので、口縁上部の無文部が狭くなっている。斜線は右下がりに引かれている。

D　縦線を２ないし３本組で間隔を置いて引き間に弧線を重ねているもの（第５図28）

富山県下では、出土例の無い文様である。口縁部を欠くが、文様全体が頚部より下がっている。

E　文様帯の中に無文区画を広く取りそれを縦位のＳ文で区切る仲間（第6図1・2）

上下の区切線に列点文や刻みを加えて過飾し、縦Ｓとは異なる文様を用いているものである。第6図1は、縦Ｓと区画内にしの字風の文様とが交互に、2は縦Ｓと列点文が交互の配置となるようだ。なお１は、低く緩やかな４波頂である。

F　Eと同じく、無文区画を広く取りそれを縦Ｓ文で区切る仲間（第6図3～6）

列点や刻みなどが無いものである。第6図6は縦Ｓが2本組で、隣の縦Ｓとは高さが異なっているものである。その為か区切りの上位線が途切れている。低く緩やかな５波頂の土器である。

G　文様帯の中に沈線を横走させ縦Ｓ文で区切るもの（第６図7～9）

第6図7は二つ山の突起をもち、区切り線に列点を加えている。

H　文様帯の中に縦線を連続させ縦Ｓ文で区切るもの（第６図10）

I　文様帯の中に縦Ｓ文と縦線３本を交互に配置したもの（第６図11）

口縁部の無文幅が広いのが目に付く。

J　縦Ｓ文と横走線を用いていて一見11Ａ～Ｉ・Ｋたちと似ているもの（第６図12～17）

だが、文様帯の上下を区切る意識が薄い点で大きな違いがある。微かに13・17の上下の線は一走しているようにも見えるが、区切りの意識は感じられない。位置取りも12・13・15・17は頚部にあるが、14・16は器形や文様幅の絡みもあるが、違和感を私は持つ。しかし付図５～７を通覧してみると、意外に口縁上部に無文部を幅広く占めるものが圧倒的と言えないことを確認せざるを得ない。微隆起線文を用いる岩峅野式土器（付図４－18～33）のイメージとの重なりがあったのだろう。縦Ｓ文も左右に縦線を引いて区切ることは無い。第６図12の２個を隣接させるのも珍しい。

K　口辺部に数条の沈線を横走させ所々で上下を連結するもの（第６図18～22）

22を代表とする。

編年上の位置づけ　10・11群Ａ～Ｋは、前田式である。三角形微隆起線（突線文）装飾の土器群と時期的には概ね重なると考えられている。串田新Ⅱ式期新に置いた９群Ａとの関連が今回明らかになったことで、前田式と串田新Ⅱ式期新の密着した前後関係の位置づけができる。2000年に前田式と岩峅野式土器を集成したことがある（小島2000）が、そのとき見出せなかった11群Ｊ・Ｋ、特にＪは数量もあり気になるものである。

Ⅲ　桜町資料の出土資料から

1　土石流と土器編年

桜町遺跡は、丘陵地の谷間にある。周囲の丘陵山地は砂岩と泥岩により構成されていて軟弱で、地すべりや土石流の災害を何度も受け埋没と開析を繰り返したようである。中期後葉の遺物が認められる谷口付近について、「串田新Ⅰ式期ごろの様相は、谷出口一帯を襲った二度目の土石流によって撹乱を受けているため判然としない」、と報告されている（大野2001）。

桜町遺跡出土中期後葉土器の編年を考える時、この土石流は大きな意味を持つ。串田新Ⅰ式期ごろの様相は判然とせず串田新Ⅱ期からの集落の様相はある程度掴むことができるという文面からは、上記土石流の発生は串田新Ⅰ期（新）からⅡ期（古）ということになるのだろう。桜町遺跡の出土土器には、串田新Ⅰ式の古手の土器は若干ある（第１図1～5）が、これに次ぐ串田新様式の中では最も華やかなⅠ式期（新）の土器（付図１下段参照）は、第１図6以外には見当らず、編年表上に空白が生じている。この期この地点で居住がなかった可能性も否定はできないが、土石流が集落を襲ったという考えは認知できる。そうだとすれば、第２図以後の土器は土石流襲来以後に堆積したことになり、中期後葉の土器編年の大きな指針となるのである。

ところが本報告書（久々他2005）では、この谷は土石流等の出水の影響を受けて複雑な堆積をしているとは書いているが、遺物出土地域（SG01）の埋積過程の説明には「比較的強い流れ」の表現はあるが、土石流は現れていない。

2　桜町遺跡資料の貝殻文使用から

貝殻腹縁文が桜町遺跡ではいろいろな土器に用いられていることを、先章で見てきた。貝殻文は串田新Ⅰ式の主文様と設定しているのだから、1群Ａ・Ｂ・Ｃ（第１図）に貝殻文が施文されているのは当然である。だが、縄文が施される設定の串田新Ⅱ式期と判断したものにも貝殻文が見られるので、疑義をもたれる向きもあろう。串田新式をⅠ式Ⅱ式に分けた当事者として、少し説明と弁解をする。

貝殻文を施文していてもⅠ式には入れられない判断材料は、幾つもある。Ｕ字状双頭突起を持つ３群Ａ～Ｄ（第２図）は、その中に貝殻文が見える（1・8～10・11）。波状深鉢の器形から、串田新式系統の土器と考えられるが、Ⅰ式期の標識となるハシゴ状文を欠くことや、胴部文様の「山の字無文」に新しさを読み取り、串田新Ⅱ期と考えている。円文飾りの緩やかな曲状波頂をもつもの（第２図20～25）の中で、５群Ｂ（22～24）は貝殻文で口縁端部を刻んでいる。富山県内初出の型である。23・25の胴部文様が３群Ａ（第２図1）と同じ山の字無文であり、３群Ａと５群Ｂ両者を同期と判断したい。20の胴部文様は、上記の諸例とは違いがあるが、区画文に無文部を貫入させるなど見逃せない接点もある。付図５－7はＵ字状双頭突起の形骸化したものだが、胴部の区画文に無文

部を貫入している。口縁部の隆線の基部に列点風の文様があることからも時期決定の参考資料となり、串田新Ⅱ式期と判断する。５群Ａ・Ｂ（第２図20～25）には、祖型の候補がある。例えば、富山市の古沢遺跡で1987年に発掘され一括廃棄または埋納資料と推定された10個体分の資料の中にある（付図１－33）。隆線上には縄文が転がされ串田新Ⅱ式の赴きだが、ハシゴ状文を持つ34の平縁深鉢も一括資料の仲間である。報告者古川は、串田新式のⅠ式とⅡ式の判断は上手くできないと編年組み立ての問題を指摘しながら、出土品をⅡ式の中でも古相と位置づけた（古川1988）。口縁部にハシゴ状文を持つ付図１－32も系統の古手の一つとして上げておく。能登の真脇遺跡にも、串田新Ⅱ式期に置いている関連資料がある（加藤1986）。このような変遷を遡る系列土器も顧慮し、５群Ａ・Ｂ共に串田新Ⅱ式期（新）に位置づける。土石流の発生推定期以後として、辻褄が合う。

串田新式設定当初から貝殻文が特徴に挙げられていたが、貝殻文が縄文に置き換わる時期があるのではと考えて、Ⅰ式とⅡ式の区分を提示したのは40年も前のことである（小島1964）。この時点でも、前田式土器や葉脈状文施文土器にも貝殻文が極めて少数だが用いられていることは知っていた。しかし桜町遺跡のような多数の貝殻文施文事例に出会うことがあろうとは、思いもしなかった。その後、貝殻文と縄文が同一器面隆線上に施された能登での事例や、前記の古沢遺跡から提起されたⅠ式Ⅱ式の編年問題などに十分な対応ができなかったことを深く自省している。桜町遺跡資料の分類を行った今、貝殻文があれば串田新Ⅰ式期であるという観方ができないことは明らかである。

しかし、一方では貝殻文が串田新式の主要器種（Ｕ字状双頭突起深鉢）に限れば、隆線上から消え去る流れを掴むこともできるので、型式ごとに貝殻文の用い方が違っていることや、Ⅱ式期に入ってからの再登用とも考えている。隆線上の縄文施文の始まりや無文化は、串田新式土器変移の目安には今も有効であり、貝殻文の施文を認めながらも串田新Ⅰ式とⅡ式の区切りは生かしておきたいと思っている。

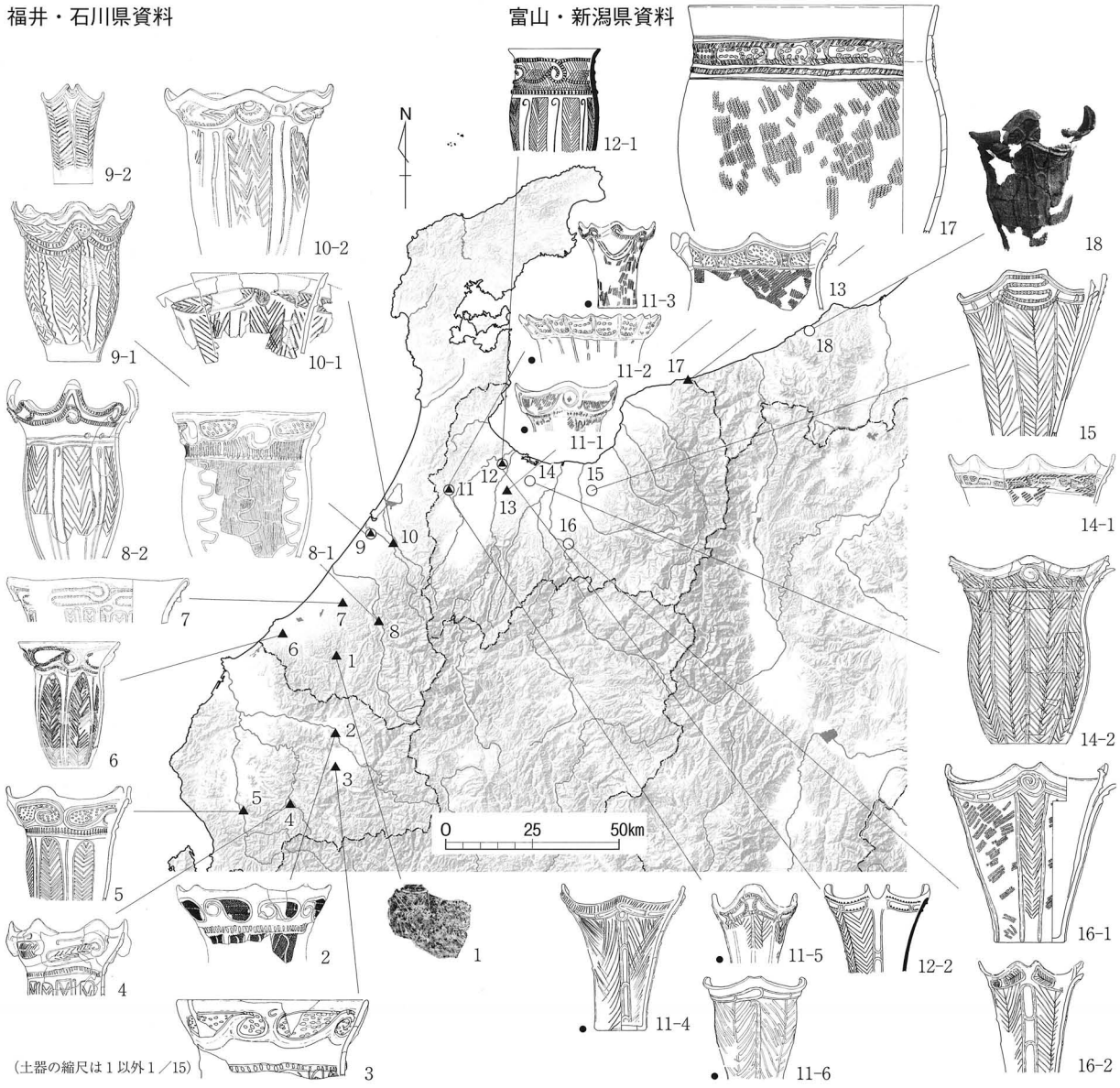
３　葉脈状文施文土器について

北と南の葉脈状文（第７図）　中期後葉の北陸では、葉脈状文がよく用いられる。時期や表現方法を無視して集めれば、北陸一円に分布する。葉脈状文といえば大杉谷式が思い浮かぶが、その大杉谷式の中で用いられる中心型式は、口縁部に隆起帯区画文をもつものである。この系統土器の分布については、主体的に分布する地域は北陸地方西部域（越前及び南加賀）で外縁地域にも類似資料が散見される、と木下哲夫は解説している（木下1996）。木下には具体的な資料名を挙げて説明したもの（木下1985）があり、それを基にして大杉谷式の代表型式の東への伸び具合を概観したのが第７図（左部分）である。1は大杉谷式の標識遺跡山崎遺跡で、この南に位置する越前では、2～5のような隆起帯区画文で飾るものが多い。３・５は区画内に刺突文を、４は矢羽状（葉脈状）文を施している。北上して石川に入った藤ノ木遺跡（6）や中海遺跡（7）・吉野ノミタニ遺跡（8－1）でも隆起帯区画文が用いられている。金沢市の笠舞遺跡資料（10－1・2）も、類例となる。上記のものとやや異なった渦文隆線を用いたものが、吉野ノミタニ遺跡資料（8－2）と北塚資料（9－1）に

見られる。隆線を積極的に刻むことも以南にはあまり見られなかった手法である。この２例と類似点を指摘できるのが、東の富山県高岡市の小竹藪遺跡資料（12－1）である。隆線上を刻むのも同じである。小竹藪資料は、胴部境の隆線も確り配されていて、大杉谷式との関係を読み取れそうである。しかし大杉谷式では区画文上部が口縁端部と結んだ隆帯であるのに、小竹藪資料では貼り付け隆線となっている違いを指摘できる。桜町遺跡資料（11－3）の渦巻き隆線を施した資料も、これらの仲間と見ておこう。串田新式の標識遺跡串田新遺跡の資料（13）や針原西遺跡資料（14－1）、富山県の東端に近い境Ａ遺跡資料（17）も、隆線貼り付けではあるが大杉谷式本来の隆起帯区画文の面影を見出せる部分がある。17では胴部との区画線を律儀に加えている。もう２点、桜町遺跡資料を関連資料として取り上げる。11－2は、上を塞がない区画文を作った中に刺突文を付しているものである。11－1は、報告書（小矢部市教委2006）で大杉谷式と報告されているものである。大杉谷式には隆起帯区画の中を福井県三室遺跡資料（2）のように縄文で飾る１系統があるが、それと判断したものである。今回は、この系統のものはこの２点以外を、割愛している。

同一期のものと限定せず、出土の多寡も示さない図となったが、大杉谷の隆起帯区画文をもつ主要１系統と関連しそうなものを組んでみた。金沢辺りまでは近似した資料の出土を見るが、富山へ入ると近似資料が極端に減少することは見てもらえよう。第７図右側には、大杉谷式の隆起帯区画文とは異り短弧隆線文で口縁を飾る、葉脈状文施文の土器を示した。先述の大杉谷式系のものとは編年上の同時性を守ってはいないが、比較資料として提示し分布の違いを概観するものである。口縁部に短弧隆線文をもち胴部に葉脈状文を施す土器として集まった９点は、桜町遺跡から東は新潟県糸魚川市の平畑遺跡間の資料である。これらの共通点の一つは、波状口縁を持つことである。波頂部を4個もつものがほとんどだが、２個のもの（15の二ツ塚資料）もある。口縁部には2本の隆線が巡り、この間に小さい弧状の隆線を嵌め込むのが文様の基本である。２本の隆線は、波頂部に飾りが入り一旦途切れるものが多い。桜町遺跡の３点（11－4・5・6）は、平行線を止めずに2本線を走らせている数少ないものである。11－4は口縁部上端に貝殻文を加えたものであるが、短弧隆線が右開き一方向である。短弧隆は向かいあう配置が多いから、特異性なものと指摘しておく。11－6が下位の隆線を直線的にしているのも、針原西遺跡資料（14）に見るだけの少ない事例である。その14は口縁部隆線の間に葉脈状文を配するが、同様のものは16（布尻遺跡資料）にも見られる。新潟県の平畑遺跡資料18の口縁部には太い矢羽状の施文がある。

最後に金沢市の北塚遺跡資料9－2に触れておく。今まで見てきた短弧隆線文系のものと似た感じであるが、口縁部には隆線１本が走るだけで、ここには短弧隆線文は配すことはできないが、波頂部下に隆線２本が下されてここには短弧隆線文が用いられてはいる。一応今回は富山色の仲間へ入れておく。このように、これらの仲間は南加賀や福井に入ることはない。



1．山崎（沼田1957）　2．三室（木下1996）　3．右近次郎（工藤1985）　4．常安王神の森（白川1997）　5．上平吹（桜井ほか1977）　6．藤ノ木（田嶋1985）
7．中海（山本1987）　8．吉野ノミタニ（米澤1997）　9．北塚（谷口1988，南ほか1977）　10．笠舞（南ほか1981，本田1987）　11．桜町（久々ほか2006）
12．小竹藪（小島1964）　13．串田新（高橋1982）　14．針原西（齋藤ほか2004）　15．二ッ塚（県教委1978）　16．布尻（柳井ほか1977）　17．境Ａ（狩野1991）
18．平畑（上越2004）

第7図　大杉谷式（口縁区画帯文系）深鉢と短弧線文系深鉢の広がり

葉脈状文施文土器の編年位置　富山県の中期後葉は串田新式で纏まっていて他様式の出土例は少なく、他地域と比較し組み合わせた編年を考えることは難しい。第７図を中心に福井から富山の中期後葉における地域性を見てきて、大杉谷式土器との関連を富山でも指摘できそうな資料の幾つかを指摘できたことは、今後の研究に大きく作用しそうである。だが、研究が一気に進んだ大杉谷式との位置づけを、今は云々することができない自分である。

大杉谷式の成立期は、加曽利ＥⅡｃ期～Ⅲ期に併行する段階と判断されている（白川1997）。富山県で葉脈状文の施文がいつ始まったのか、串田新Ⅰ式期には用いられているのか否かは、不明である。近年矢張下島遺跡の住居跡から、串田新Ⅰ式期の土器（付図１－10）が葉脈状文を施した資

料（付図4－1）と一緒に出土した（岡田2007）。しかしこの土器片と文様や器形で結びつくような例は県下では他に見ず、これを後の葉脈状文の初期資料とは認定できない。逆に串田新Ⅰ式期の葉脈状文の状況を感知できそうである。

ここで、葉脈状文施文土器の早いものとして引用されることがある朝日町下山新遺跡第1号住居跡出土資料（付図1－30　3－12・13）について、確認しておきたい。報告書では、「第4地点1号住居跡内出土の土器」として7点を図示し、本文中では「住居跡覆土内から出土したものの一部」と記した（富山県教委1973）。串田新式の器種を示したくて覆土出土の資料から選び出したものなのだが、引用された中で「一括遺物」となったものである。付図1－30は、串田新Ⅰ式（新）と今の私は考えている。3－12・13の葉脈状文施文土器2点の類例は、今に至っても見つかっていないが、串田新Ⅰ式（新）以後と推定する。

桜町遺跡の葉脈状文施文土器は、Ⅲの土石流で考察したようにその襲来以後のものとなり、短弧隆線文と組んだ施文になっている7群B～D（第4図）を手がかりにしても、串田新Ⅱ式期に編年位置を決めることができる。葉脈状文施文土器は、その後7群Mを経て微隆起線文（8群）へと移行していく。富山県下には、付図4－3・4のように列点文と組む沈線だけで描いた葉脈状文が微量にあり、桜町遺跡でも図は載せていないが1点ある。しかし、葉脈状文は微隆起線文施文の岩峅野式に変わり、前田式期には伴わないのが大勢であろう。

葉脈状文施文土器から岩峅野式への移行に関連して、ボタン状の飾りについて触れておく。ボタン状の突起飾りは、付図4－29（愛本新遺跡）や30（二ツ塚）のように、微隆線文を施した岩峅野式に見ることができる。図示していないが、東中江遺跡や岩渕久保平遺跡、新潟県の十三仏塚遺跡、飛騨の杉原瑞穂遺跡など、広がりも見せている。葉脈状文施文の土器でも、富山県では付図3の28（小竹藪遺跡）や付図4の10（布尻）・12～14（針原西B）、や、先に見た付図3－13の下山新遺跡資料などに施文されている。このように葉脈状文と微隆線文の施文土器にまたがる文様であり、両者の連続した繋がりを示すのである。

葉脈状文の終焉に関連して、第7図関連の記述と重複するが金沢市北塚遺跡の資料に触れておく。第14次の調査では、葉脈状文系土器が後期初頭の土器を比較的多く含む上層から検出されているので広義の串田新式と時間差が存在するように思われる（谷口1998）と紹介し、波頂を8個持つ深鉢（第7図9－1）を大杉谷式深鉢とし、後期初頭土器の流入と呼応し福井方面からもたらされたものと推測している。似たものは、白山市の吉野ノミタニ遺跡にもある（第7図8－2）。大杉谷式の深鉢とし波状口縁に刻み目を持つ隆帯のモチーフは少ないと記している（米澤1997）。2例を引き出したのは、桜町遺跡にも対比させたい資料、6群A（第3図－1・2）があるからである。波頂が大と小交互で計8個と、北塚・吉野ノミタニ資料と同じで、口縁部の曲線を取り入れた隆線文にも親近感を持つものである。さらに伸ばせば、付図3－35（小竹藪資料）の口縁部隆線文様が似ていること、特にノミタニ資料と小竹藪資料が口縁文様の下にもう1本の隆線を沿わせていることに注意したい。大杉谷式との関連をそれぞれに感じ、一方では地域による変移を思うのである。これらの時期については、串田新Ⅱ式期と考えている。

4　口縁を飾る突起の数（第８・９図）

串田新様式土器は器周に４個の突起を等間隔で配しているという意識は、早くから持っていた。ところが桜町遺跡の資料を見ていると、葉脈状文を施したものや前田式土器を中心に４単位を外した突起飾りが十数個も見られることから突起数に興味を持ち、桜町遺跡資料に対応する時期のものを福井・石川・富山に範囲を広げて集めてみた（第８図参照）。

その興味は、同図14の桜町遺跡資料や12・13の口縁部文様に大杉谷の面影を求め始め、４単位以上の突起飾りの原点は大杉谷式土器にあるのではと推測したことから湧いてきたものである。十分な集成はできていない。特に福井県は常安王神の森遺跡のみに止まっているが、眺めておきたい。

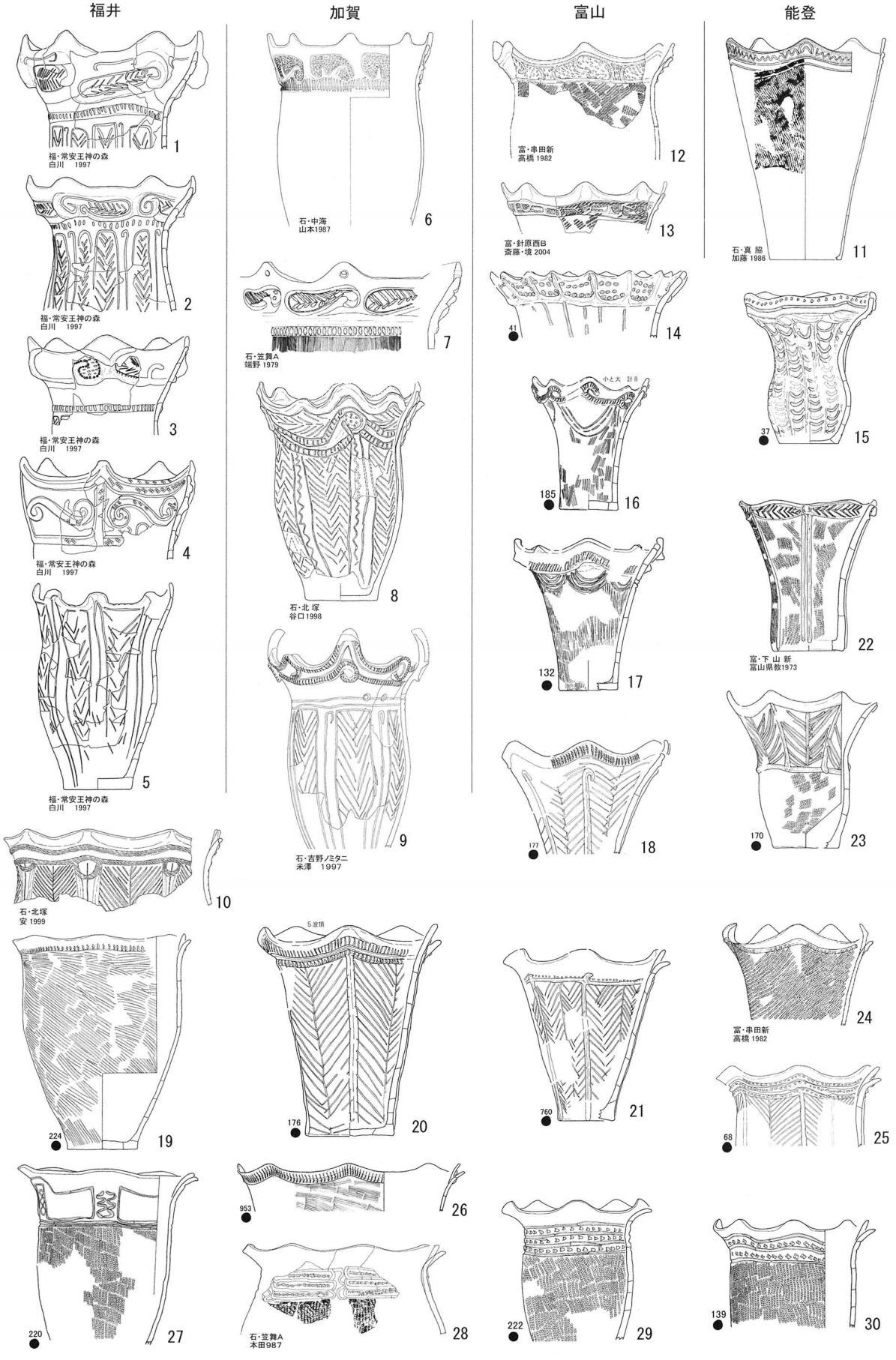
常安王神の森遺跡からは、５点を抽出した。1・２は５単位、３・４は６単位、５は小突起が８個である。２は中期後葉の第１段階、３・４は同後葉段階、５は中期末に、１は中期中葉に置いている（白川1997）。思ったほどの数量は無く、それぞれを桜町遺跡や富山県下のどの群と並行するものか決めれない。

石川県の６・７は、共に６単位の突起をもつ。口縁部の文様は大杉谷式と、また富山の12・13（６単位）とも接点がありそうに見える。11は能登の真脇遺跡の５単位資料で、串田新Ⅱ期期新に位置づけされるものである。10は、５か６単位である。縄文を転がした隆線などから、串田新Ⅱ式期に置く資料である。８・９の突起は、大突起４個と小突起4個が交互に配置される。突起は８個ずつだが、単位としては４である。同じような口縁飾りは、16・17の桜町遺跡資料にも見ることができる。

富山の14は、15個の小突起が付く。15は7単位、22・23は６単位、20・21・24は５単位、18・25は６単位である。装飾の少ない大きめの深鉢19・26は、６単位のゆったりした流れの波状突起で飾っている。前田式の27は５単位で、28は8単位。ゆったりとした波状突起で飾る。26・30も前田式土器で、単位は５か６のチューリップ型装飾口縁の資料で、図示していないが石川県笠舞遺跡や高波遺跡にも、類似資料がある。

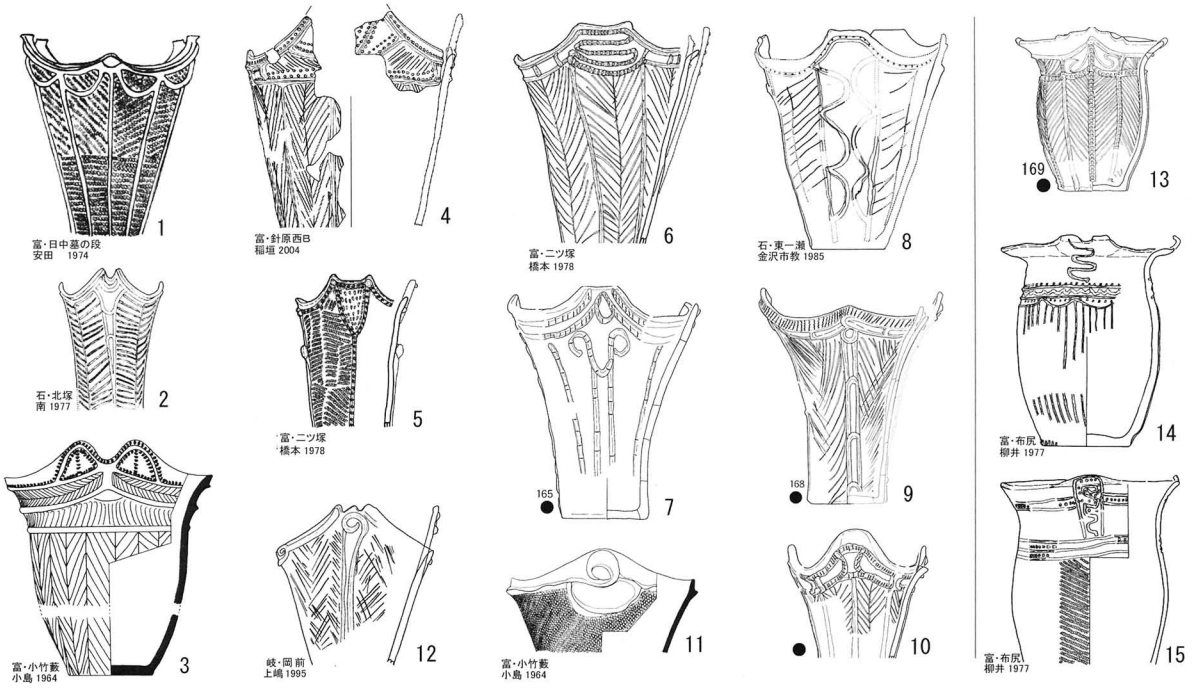
提示した全資料の突起数数は、以下の通りである。５単位・６単位は各10資料、７単位が１資料、８単位が２資料、15単位が１資料である。縄文土器の突起数について山内氏は、器周上の単位数を一、二、三、四、五、六、八と七抜きで書き挙げている（山内1964）が、第8図の15は、その七単位である。

福井・加賀から富山方面への影響ではとの予測は実らなかったようだが、串田新様式土器の４単位への拘りを改めて感じ取った。また、確認した４単位以外の突起をもつものが多いことは、北陸の中期後葉土器の一つの特色として取り上げられるかと思ったりしている。



第8図　器一周に5個以上の波頂を持つ深鉢（福井・石川・富山）

●は桜町出土　縮尺：不同



第９図　器一周に１・2個の波頂を持つ深鉢（石川・富山・岐阜）　　●は桜町出土　縮尺：不同

二個と一個のもの　４単位以上の突起を持つ中期後葉の深鉢を見てきたが、一個のものと対向する二個のものがまだ残っている。これらは土器の正面を示すようにも見えるので、各土器様式の特徴となる可能性も高く興味深い資料となる（第９図）。管見では、福井県での事例は無いようである。

堂々と正面を示すものが、桜町遺跡から１個出土している（第9図13）。ただしこれは突起が４箇所にある。1個は図の正面にあるもので、高い突起の左右に2個ずつ小突起を付加し、正面を示している。対向する裏正面には小山二つを連結したものを、正面と裏正面の間には小山1個をそれぞれ置いて対置させている。布尻遺跡出土の岩峅野式の同図14は、波頂の中央に落ち込みを作った突起を1個だけ配していて、その下のＳ字状の微隆起線文も一箇所だけの配置で、正面を飾っている。展開写真から、この状況が確認できる（狩野1988）。岩峅野式土器には、他にも同様の正面を持つと思われるものがあるが、欠損部分があって確認がとれないので外してある。同じ布尻遺跡出土の前田式土器15は、1箇所だけ口縁部を持ち上げ、その下部にＳ字状文を施し正面を示したものである。

残る１～12は対向した２突起を持つものだが、正面を持つと解釈するかどうかは難しい。だが、土器と人が向き合う位置が意識されることになることは、読み取れよう。大きな２突起の間に小突起を配するもの多いが、それを欠くもの、不明のものもある。１～３は、大突起の波頂部がU字状双頭突起のように落ち込むものである。１ではその大突起が図では見えないが、間に配された小突起が理解されよう。３の大突起は見易いが、小突起が配されていたか不明である。11も、小突起の存在は不明である。４から７は、小突起を確認できる。８～10は、小突起が高さを保持しているものである。石川県では金沢市の２・８資料で、加賀南部や福井には見当たらないようだ。12は飛騨の岡前遺跡資料であるが、飛騨では類例が極めて少ないだろう。

5　桜町遺跡の前田式土器（第５図・第6図）

前田式は、大きくは串田新様式の流れにありその最終段階のものと、私は思案している。「大きくは」とは、串田新Ⅰ・Ⅱ式土器が持っていた隆線文様を欠如することや、深鉢の主たる器形が胴部の張るものになることなど、大きな違いもあるからである。その直前と読み取れる資料が、桜町遺跡の資料中にある（第５図）。平縁深鉢の口縁部に幅狭い文様帯を置き、その下に連弧文を２本の沈線で描く９群である（1～7）。この幅狭い口縁文様帯を消し去って無文とし、胴部との区切り線を連弧文の下部に配せば21～28の前田式である（付図５参照）。この変移過程から、串田新式最終段階の位置づけとしている。

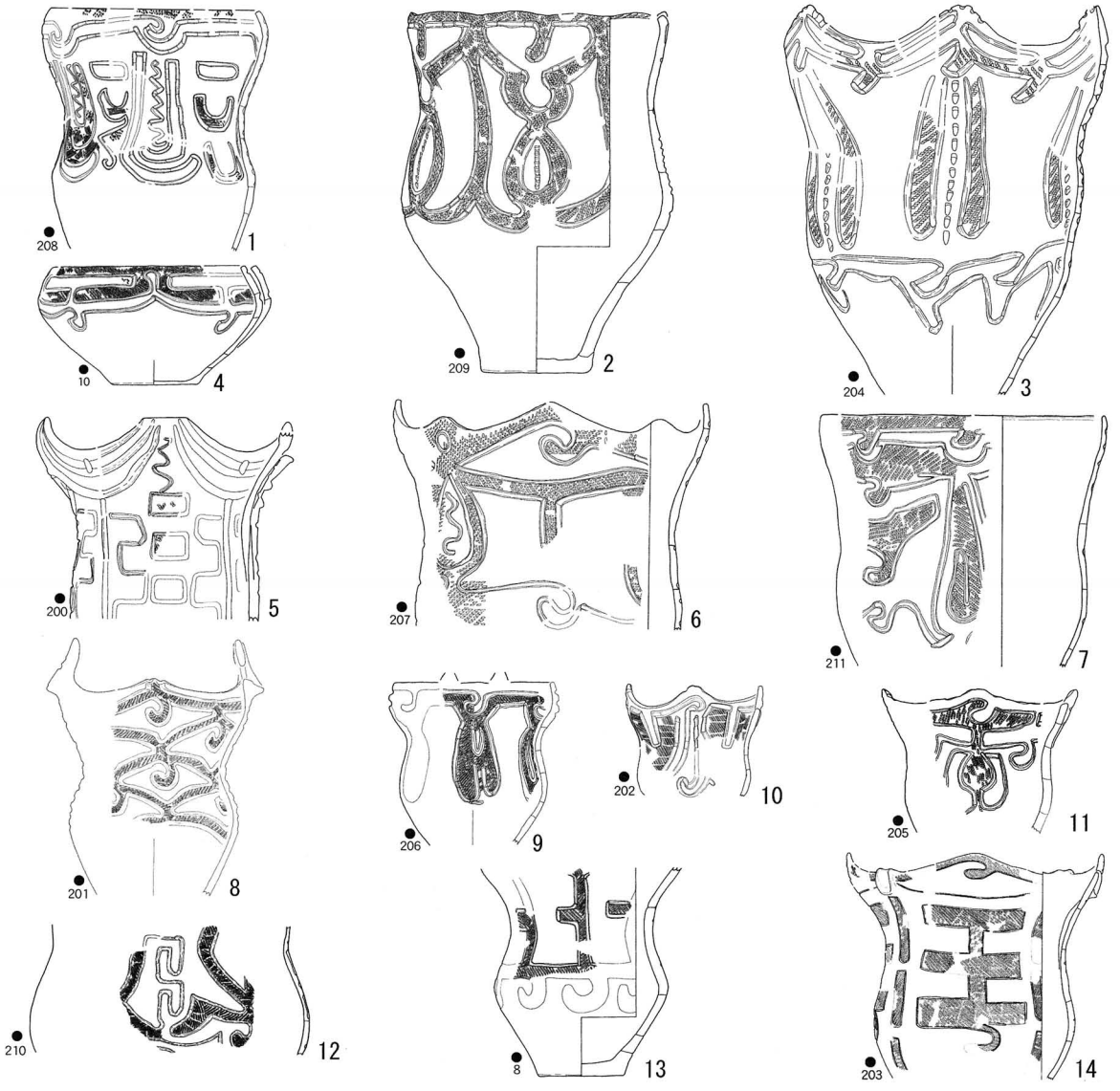
11群Ｅ～Ｊ（第６図）は、前田式に盛んに用いられる縦位のＳ字状文を持つものである。Ｊ（同図12～17）は、Ｅ・Ｆのような長方形区画を用いず上下の区画線も引かない富山県内では類例のないものである。Ｋ（同図18～22）も、県内では初見例である。

この前田式を、古と新２段階に現在は分けている。付図６と同７の1～21が古段階、付図７の22～26が新段階である。その新段階資料が桜町遺跡から全く出土していないことは、注意したい。

6　桜町遺跡の「中津式」（第10図）

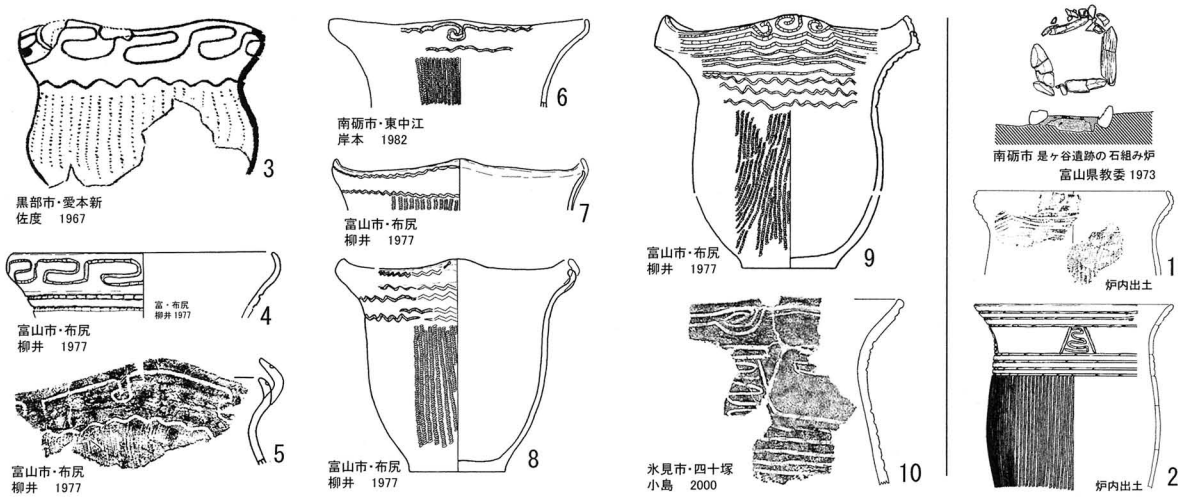
磨消縄文施文の土器は、石川県では1968年に白山上野遺跡で発見がされて、その後の資料増加もあって中津式や称名寺式と位置づけられていた。しかし富山県内では磨消縄文施文土器の出土は極めて少なく、桜町遺跡で第10図1・4の資料が1988年に出土し、翌1989年の日本考古学協会富山大会にあわせて出版した小冊子に実測図が載り（伊藤・山森1989）、ようやく話題となった。

1997年、再び磨消縄文土器が桜町遺跡で出土した。土器捨て場の串田新Ⅱ式層上からの出土で、調査主任の伊藤氏は中津式と思いつつも「称名寺・中津系」と述べている。時折現場に足を運んでいた私はこれについては判断材料を持たず、「富山や新潟にはほとんどないものだ」としか発言していない。積極的に情報を集めた伊藤の気持ちは中津式に固まって行ったようだ（北日本新聞社1999）。「桜町遺跡おやべ展図録」に載せられた１点の深鉢（第10図２）には、瀬戸内地方で使われていたと説明がある（小矢部市1998）。2001年出版の『桜町遺跡調査概報』に、泉氏と小島の対談が載る（桜町遺跡発掘調査団2001）。その中で小島の問いかけに泉は、「発掘されていた資料を、古いタイプの中津式と言っている」や、「中津式と並行する関東の称名寺式の前半部分を中津式そのものと最近は言っている」と説明している。司会の伊藤は、「桜町遺跡の中津式土器が西日本で作られたか、北陸で作られたものか」と問うが、泉は「近畿中心部ではなく、文様的にも器形的にみても福井かそのあたりと言え、少なくとも琵琶湖よりも東側のエリア」、と答えている。この折に泉は、「桜町遺跡の中津式に伴うものは前田・岩峅野式ですね」と、後期初頭に両式を当時置いている私に確認を求めるが、「桜町遺跡の整理で検証されるだろうが前田式であることは間違いない」と私は答え、「気屋式へ移る契機は中津式にあるだろう」と続けている。この頃の私は前田式を新旧に二



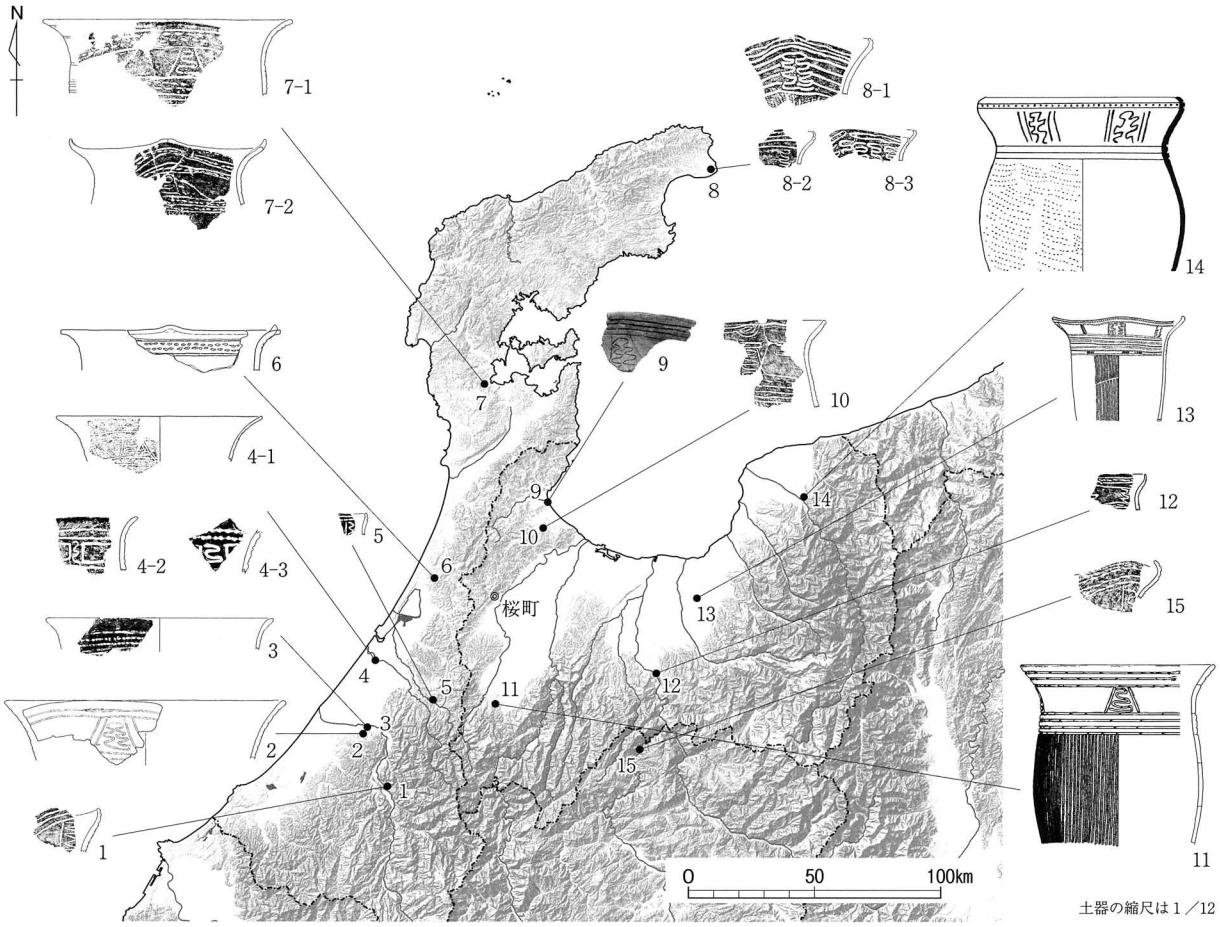
第10図　桜町遺跡の中津式土器

縮尺:不同



第11図　前田式(新)と高波式土器

縮尺:不同



1．吉野ノミタニ（米澤1997）　2．庄ヶ屋敷A（西野1997）　3．宮竹うっしょやま（西野1999）　4．北塚（沢田ほか1999，南1977）　5．東市瀬（南ほか1985）
6．気屋（米澤1996）　7．大津くろだの森（久田2002）　8．高波ふるや（杉畠1977）　9．朝日貝塚（小島2002）　10．四十塚（小島2002）　11．是ヶ谷（小島1973）
12．布尻（柳井1977）　13．二ッ塚（県教委1978）　14．愛本新（佐渡1967）　15．杉原瑞穂（河野1996）

第12図　前田式（新）土器の広がり

分し始めていたのだから、説明不足な答えである。

その後、桜町遺跡では第10図に示すように、多くの磨消縄文土器が出土した。北陸全域でも出色の出土量だが、従来ほとんど資料のなかった富山県での出土だから驚かされる。

2005年12月の「桜町遺跡縄文土器検討会」に参加した冨井氏は、丁寧な一文を寄せている（冨井2006）。桜町遺跡の「中津式土器」については、各個体それぞれについてはいろいろな解釈ができるので一括りで捉えることは難しいが、称名寺式の中の西日本の影響を受けて成立した一群で、中津式というよりは称名寺式Ｉａ類と呼ぶべきものが多いように思われると記している。「桜町遺跡の中津式土器」を考えるには、東海地方との関係を確認した方が良いと、当然先行する串田新式ころの北陸地方と東海地方の繋がりを、岐阜県店町資料を串田新式そのものとも言えると取り上げ論じてもいる。この岐阜の串田新式のことについては、後に触れる。

7　桜町遺跡の「中津式土器」と並ぶ在地土器（第11・12図）

「桜町遺跡の中津式土器」と並ぶ在地土器は何だろう、明らかにしたい課題である。土器溜まりSD06の出土状況から第10図５の中津式と第４図の5や7・8など葉脈状文を施した土器などが一緒に出土していることに意味を求め、一群とする考えが示されている。しかし葉脈状文施文土器などを串田新Ⅱ式の中に留まるとした筆者には、意味ある一群とは思えない。5や7・8など葉脈状文を施した土器が前田式と並ぶこともないと推定している。ましてや先述のように前田式に新古を認める立場からは、中津式と並び立つことは容認できない。中津式と並ぶものは、前田式新と高波式であると今は見做している。

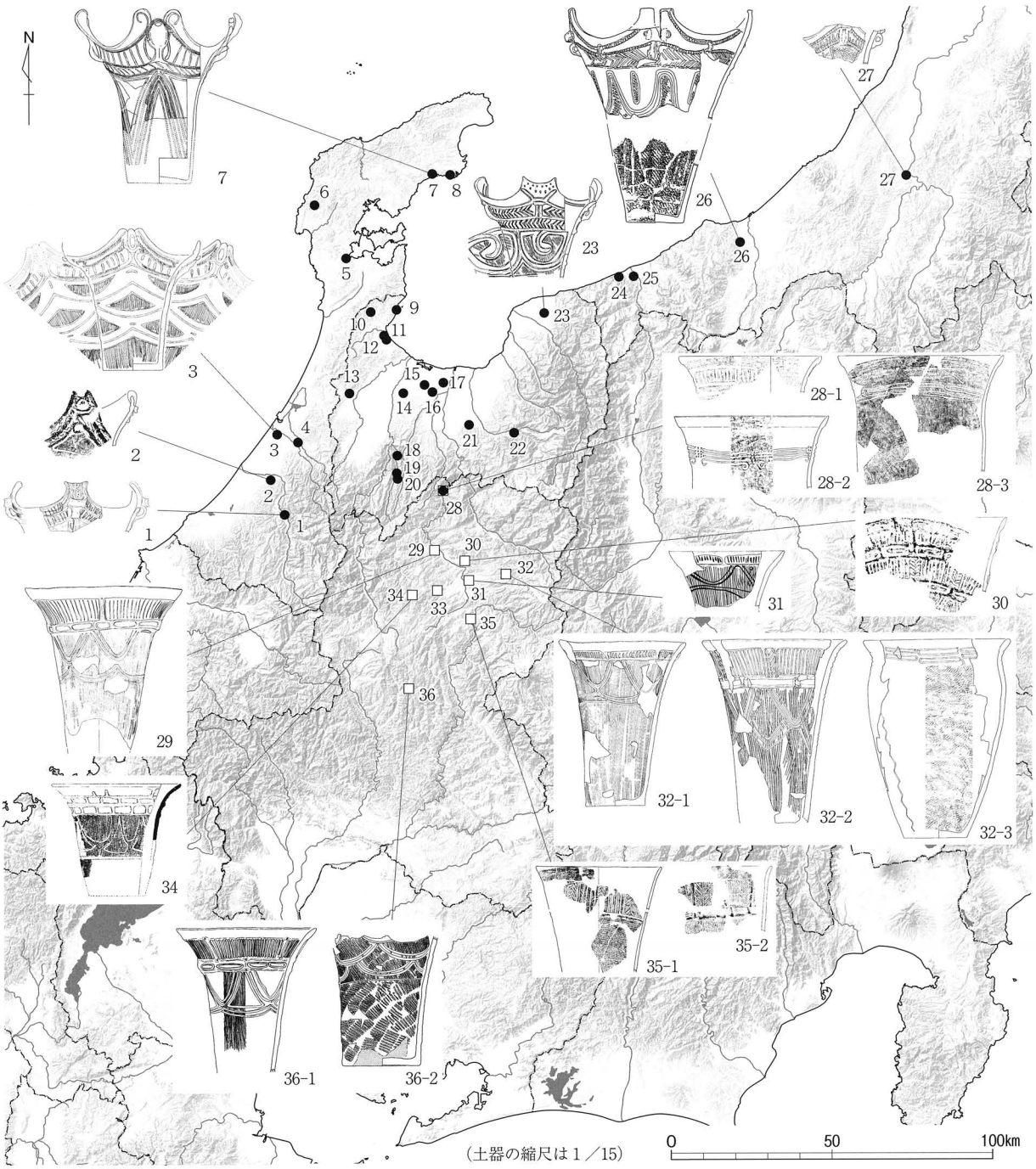
第11図１・２は、上に示した是ヶ谷遺跡の石組炉に敷かれて出土した出土したものである。内湾する土器（1）が一緒に出土したので、２とともに新式と位置づけることとなった。10は２と類似点の多いものだが、口縁が微妙に内湾していることや、口縁直下の沈線文様が違いである。

1や３～９のような内湾した土器は古くに能登の型式高波式と呼ばれていたが、北陸全体の型式として前田式内に小島は組み込んでしまった。その後に、真脇遺跡の前田式は中期と後期に振り分けて考え高波式の再検討を提示した西野（1987）や加藤（1993）、気屋式の古段階として気屋Ⅰａ式を提唱した米澤1989などの研究があり、外反器形の系列のものを前田式新と、内湾器形のものを能登の型式に限定しない高波式として並列させる（表１参照）。これらを桜町遺跡の「中津式土器」と並ぶものと考える。特に高波式の口縁部内湾器形が前田式古の中には見当たらず、口縁上部を飾る「つ」の字状の沈線文が両者にあることからの思いである。第11図の10が、第10図１と同じ楕円文をもつことも挙げられよう。

ところが、編年表（表１）で見るように、桜町遺跡では前田式（新）と高波式の資料は、白抜きになっている。該当するものが桜町遺跡資料には無いのである。第12図に前田式新の分布図を示したが、東は黒部市愛本新遺跡から西は白山市吉野ノミタニ遺跡となる。高波式も、同様な分布になる。桜町遺跡はその圏内になるのだから、出土があって然るべきなのだが。後続する気屋式が出土していないことがヒントになるのだろうか。

8　串田新式の分布と飛騨の土器（第13図）

ハシゴ状文型式の広がり　最後に、串田新様式土器の広がりを見ておきたい。土器様式の分布範囲は、どの型式を取り上げるかによって違ってくる。諸形式のそれぞれの広がりを掴んだ上で、それらを統括した分布図が描かれることも必要である。今回は、串田新様式土器の中で最も特徴あるハシゴ状文で口縁を飾るバケツ状器形の深鉢で、Ｕ字状双頭突起や把手を備えた型式（仮にハシゴ状文型式）の分布を示す（第13図上段）。この型式は、桜町遺跡で土石流が起きた串田新Ⅰ式期新からⅡ式（古）期に当たるものなので、桜町遺跡で該当するのは第２図14の１点だけであるが、富山県内では大境洞窟や北代遺跡・下山新遺跡など、ほぼ一円に亘っている。桜町から北側に位置す



1．吉野ノミタニ（米澤1997）　2．長滝（松山1993）　3．笠舞（南ほか1981）　4．北塚（南1977）　5．大津くろだの森（久田2002）　6．馬渡B（加藤ほか1999）
7．宇出津崎山（高堀1972）　8．真脇（加藤1986）　9．大境洞窟（小島2002）　10．一刎前田（神保2002）　11．朝日貝塚（小島2002）　12．岩上（小島2002）
13．桜町（久々ほか2006）　14．串田新（高橋1982）　15．針原西（齋藤ほか2004）　16．古沢（古川1988）　17．北代　18．高沼（岡田2004）　19．矢張下島（岡田2007）
20．岩渕久保平（小島2004）　21．東黒牧上野（狩野1995）　22．花切（狩野1988）　23．下山新（富山県教委1973）　24．長者ヶ原（藤田ほか1964）
25．岩野B（糸魚川市1986）　26．新田畑（大平2001）　27．城之越（新潟県教委1991）　28．杉原瑞穂（河野1996）　29．中野山越（戸田1996）　30．荒城神社（野村1994）
31．垣内（田中1991）　32．岩垣内（上原2000）　33．上岩野（上原2005）　34．門端（大野1983）　35．堂之上（戸田1997）　36．店町（高橋ほか2005）

第13図　串田新式（ハシゴ文型式）と飛騨の土器

る能登にも、大津くろだの森遺跡や真脇遺跡、宇出津崎山遺跡に類似資料を見る。

西側の加賀では、金沢市域に北塚遺跡と笠舞遺跡にハシゴ状文型式の出土例がある。さらに西の手取川扇状地を北間近に見る長滝遺跡から出土した断片資料（2）が、今指摘できる西端の資料である。波頂部が台形状ではあるが、手取の谷へ入った吉野ノミタニ遺跡の資料（1）も、西端部の

一例として取り上げておく。

東の新潟県内では、串田新様式土器の探索を積極的に行った寺崎が、上越地方で13遺跡、中越地方で6遺跡、下越地方で5遺跡の計24遺跡を数えている（寺崎2006）。中葉のかつて古串田新式と呼んだものも含んではいるが、この多さと広がりは従来の知見とは異なるものである。ここでは先に限定した諸要素をもつハシゴ状文型式のみに限定して寺崎の集成資料から引き出すと、上越で３、中越で１と、当然のことだが該当資料出土遺跡数は減少する。上越の長者ヶ原遺跡では複数の該当資料があり、岩野Ｂ遺跡にも好資料がある。寺崎が、富山だと評価する状況だ。上越市新田畑遺跡の資料（26）は、口縁部最上段の隆線が余分であること、１段のハシゴ状文にも関わらず下部隆線を水平にしていることなどから富山のハシゴ状文状文型式とは違うと違和感も持つが、取り決めたハシゴ状文状文型式の諸条件を全て満たしていることに面白さを感じている。さらに遠く離れた中越小千谷市の城之越遺跡資料（27）は、新田畑遺跡資料とは逆に、正に富山方面の作りである。波頂部が欠損していてＵ字状双頭突起かは定かではないが、ハシゴ状文型式として扱っておく。

南の岐阜県内では、探索しているハシゴ状文型式出土遺跡は、飛騨市杉原瑞穂遺跡僅か1遺跡（28）である。富山との県境間近で、流れ下って富山で神通川となる宮川沿いである。資料28以外にも富山県内の資料と峻別できない様子の串田新様式土器の出土は多く、該当するハシゴ状文型式資料も複数ある。先に見た新潟県の情勢を重ねて考えれば、杉原瑞穂遺跡以南にも串田新式土器は広がっても良いと思うのだが、該当する資料は私には探せていない。しかし該当資料（ハシゴ状文型式）の西端資料が、石川県の手取川辺りを境に消え去ることを思えば、遠く上越近くまで伸びている新潟の状況こそが問われるべきなのかも知れない。

中期後葉の飛騨の一様式

岐阜県における串田新式土器の広がりは、ハシゴ状文型式が杉原瑞穂遺跡止まりと記したが、それ以外の串田新式系の土器もほぼ杉原瑞穂遺跡で止まっていると見ている。

しかし、異なった見方がある。桜町遺跡の検討会資料に郡上市店町遺跡出土の土器（第13図36－1・2）が登載されていた。急いで報告文に当たると、２点は「串田新式系の土器」と位置づけられていた。同時に検出された石組み炉跡を加曾利Ｅ３式並行期の屋内炉として一般的なものと書いていて、「串田新式系の土器」も同期と考えているように受け取れる（高橋2005）。串田新式土器がそこまで広がるものかと、驚いた。同時にこのような土器に以前出会ったこと、串田新式に似ていると感じたことも思いだした。今は、串田新式ではないと判断する。

簡単に串田新式土器と飛騨の土器研究の流れを追う。店町類似の土器（34）は、門端遺跡で早くに発見されているが、串田新式とは記述はされていない（大野1983）。店町類似資料を積極的に串田新式と位置づけたのは、中野山越遺跡の報告である（戸田1993）。店町類似資料（29）などを、「串田新式（沈線文系）土器群」と記している。連弧文が胴部に見られることが根拠の一つになっている。翌年の荒城神社遺跡の報告書では、中期末の土器の１類（30など）を串田新式や前田・岩峅野式の影響を受けたものではあるが在地色の強いものと説明し、飛騨における中期末の指標となる可能性を持った土器群という見方を示した（野村ほか1994）。杉原瑞穂の報告書（河野1996）では、

分類の中で店町類似資料（28－1・2）を串田新式と共通する文様構成が見られると書くが、串田新式の枠には入れずその後に置いている。

1997年の堂之上遺跡の報告では、かつて中野山越の資料（29）を串田新式と位置づけた戸田が19号住居跡出土の資料（35－1）を大杉谷系土器群とし、29号住居跡出土の資料（35－2）などは沈線文系とまとめ、同住居跡の土器群を「飛騨地域中期末の土器様相」と書いている（戸田1997）。

岩垣内遺跡の報告書（上原2000）では、住居跡から得られた資料（32－1～3）などを中期最終段階（曽利Ⅳ式期）と位置づけている。32－2と重なって出土した32－3を伊那谷系結節縄文土器と説明する中で、32－2を「類似の串田新式（沈線文系）土器」と記すが、戸田（1993）からの引用で自らは店町類似土器を串田新式とは書いていない。上岩野遺跡の報告では、中期末葉から後期初頭の土器を、「この地方（飛騨地方）独特の土器群（様式）」と記す（上原2005）。

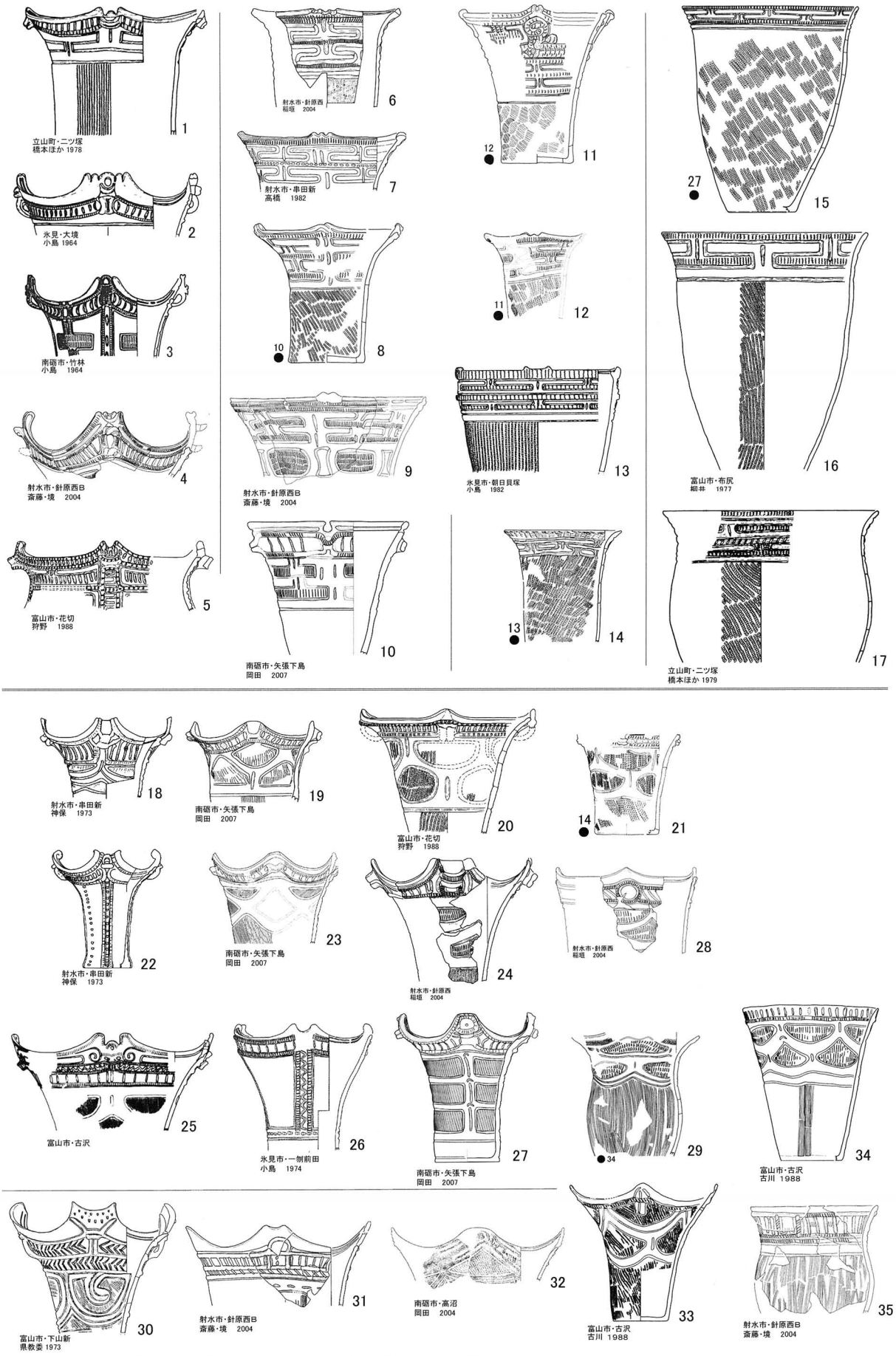
店町類似土器は、背高のバケツ形器形や口縁部のハシゴ状文に似た文様、胴部の連弧文などに、串田新式土器との類似点を感ずることもできよう。だが、店町類似土器群が波状口縁や橋状把手を持たぬことや主文様のハシゴ状文の異なりなど、大きな違いを見る。具体的に北陸のどの型式と類似するのかと問われて具体例を示すことは難しい。

また店町類似の土器群には1型式ではなく複数の型式が認められ、それらを纏めた一様式を認めるのは容易ではないだろうか。飛騨を貫く分布からも、それは認められよう。

Ⅳ．おわりに

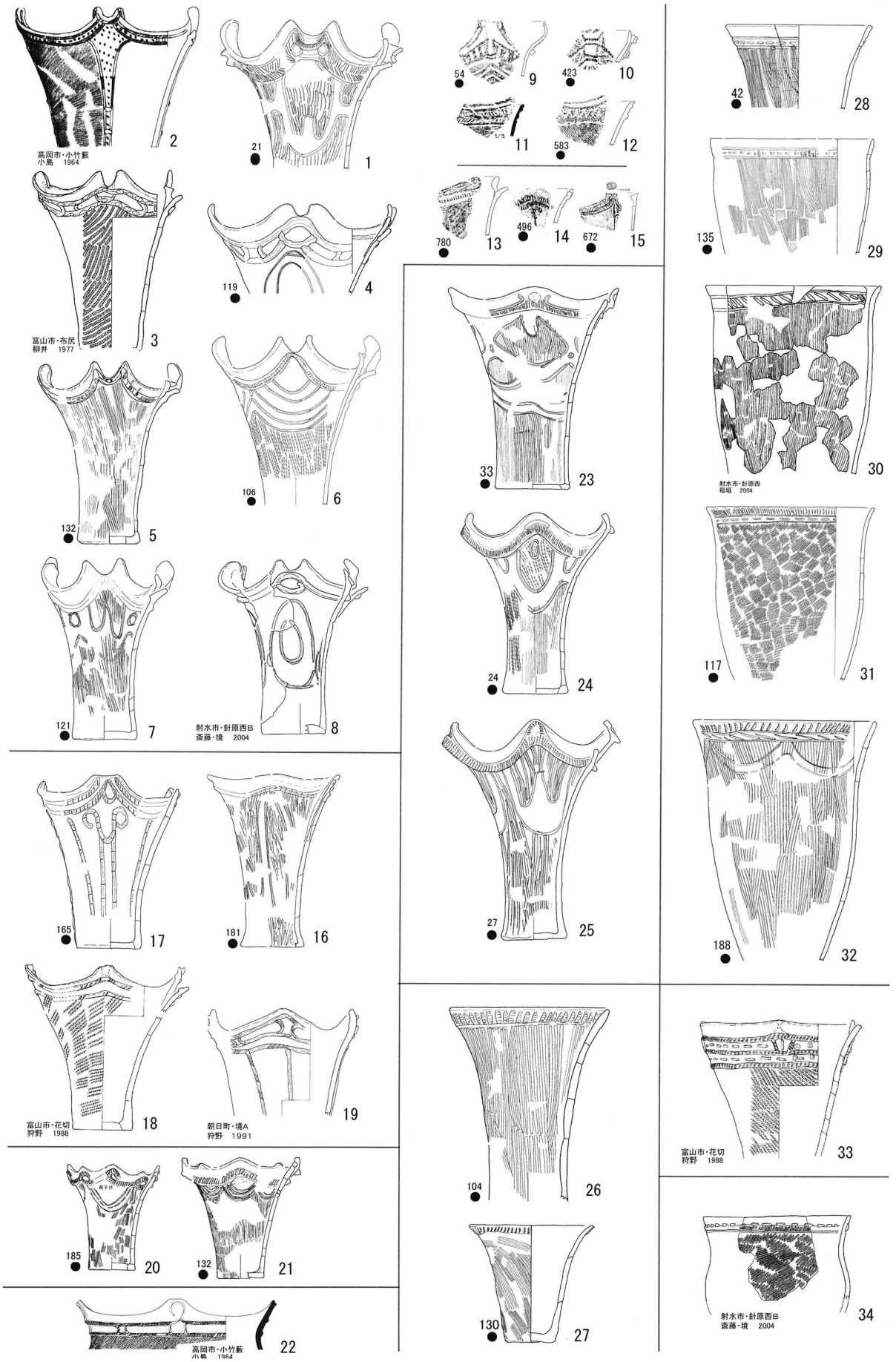
桜町遺跡の中期後葉から後期初頭の膨大な土器量と初見資料の多さに圧倒され、どのように理解すればよいのか動揺してしまった。さらに、地点を異にした土器溜まりの土器の違いから土器の編年が組まれ、「串田新Ⅰ式とⅡ式は明確に分離できない」や、「蕨手状隆帯垂下の葉脈状文土器や肥厚口縁土器などは後期へ続く」と結論づけられたのには、困惑した。そこで、どのような土器が出土しているかを把握することが第一、と始めたのが今回の作業だった。該期のこれまでの編年には批判も寄せられてもいたので、自分の思いは一旦捨てて新たな目で桜町資料に当たる思いであったが、作業が進む中で加越能から離脱できず従来の枠組みに押し込んでいる自分が見えてきた。軌道修正を試みたが上手くいかず、最終的には表１の編年表のように収めることとなった。桜町遺跡の資料は初出のものが不思議なほど多く、また図化されたものも多い今までに無い稀有の資料だ。それに対する分類や考察が十分に行えなかったことを自戒している。今後は地域枠を広げ諸型式を認定しながら、北陸の土器様式を具体的に深めて行きたい。

このような機会を与えていただいた、小矢部市教育委員会にはお礼を申し上げる。また、多くの図を転載したが、関係の皆様にはお礼を申しあげる。諸資料の分布図作成には、岡田一広氏の力添えを得ている。お礼を申し上げる。



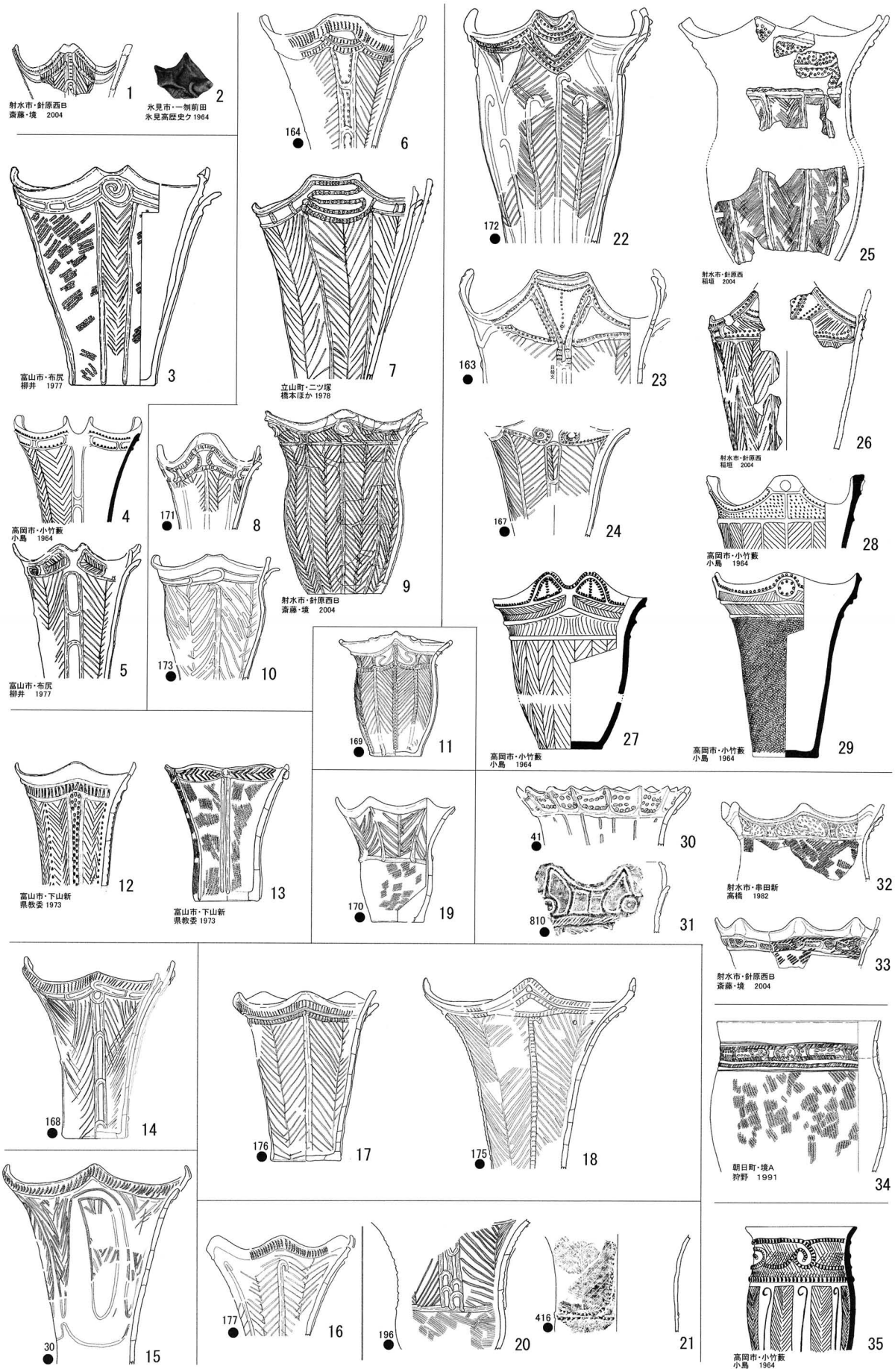
付図1 富山県下の中期後葉の深鉢（串田新Ⅰ・Ⅱ期）

●は桜町　　縮尺:不同



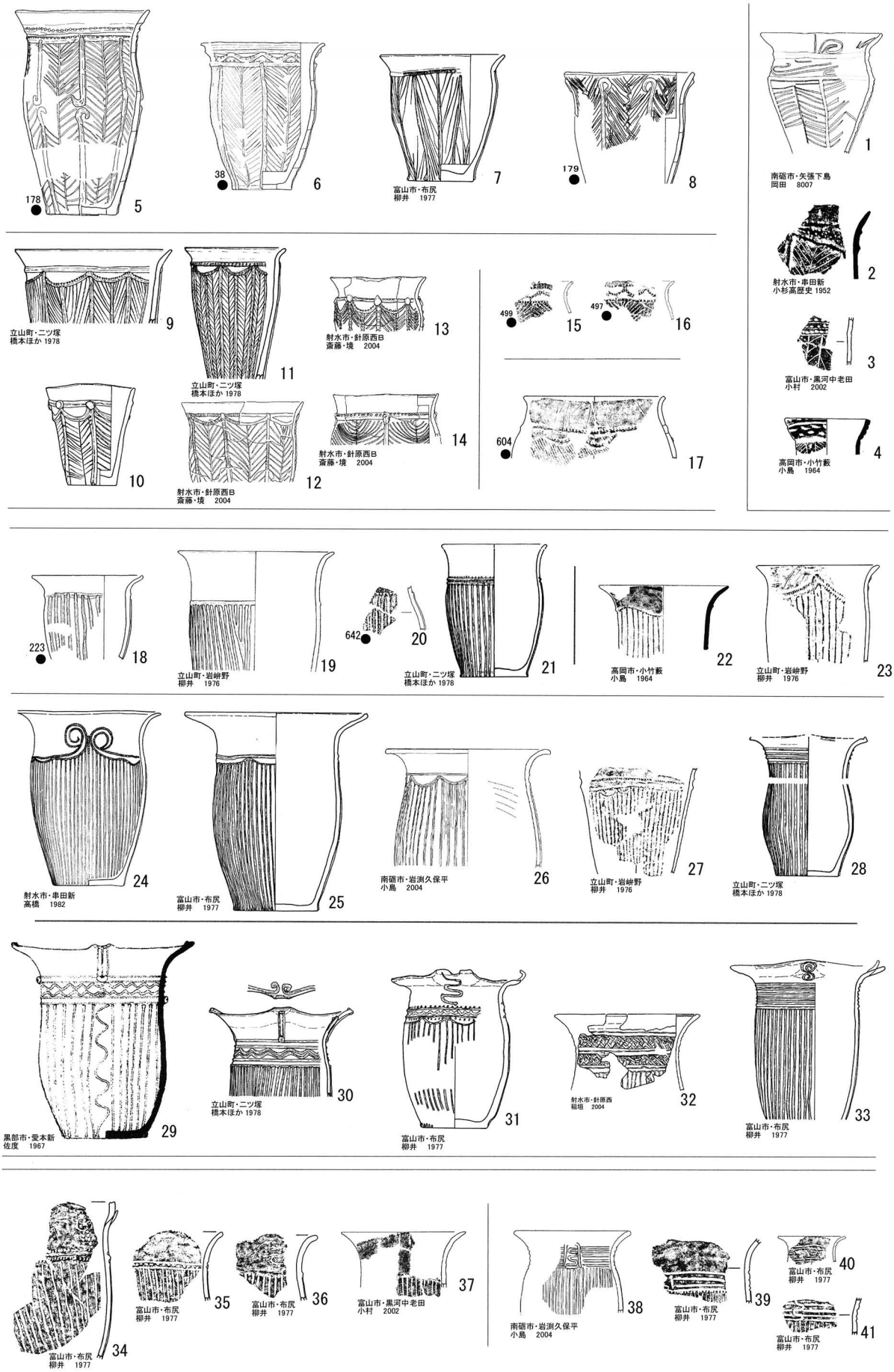
付図２ 富山県下の中期後葉の深鉢（串田新Ⅰ・Ⅱ期）

●は桜町　　縮尺:不同



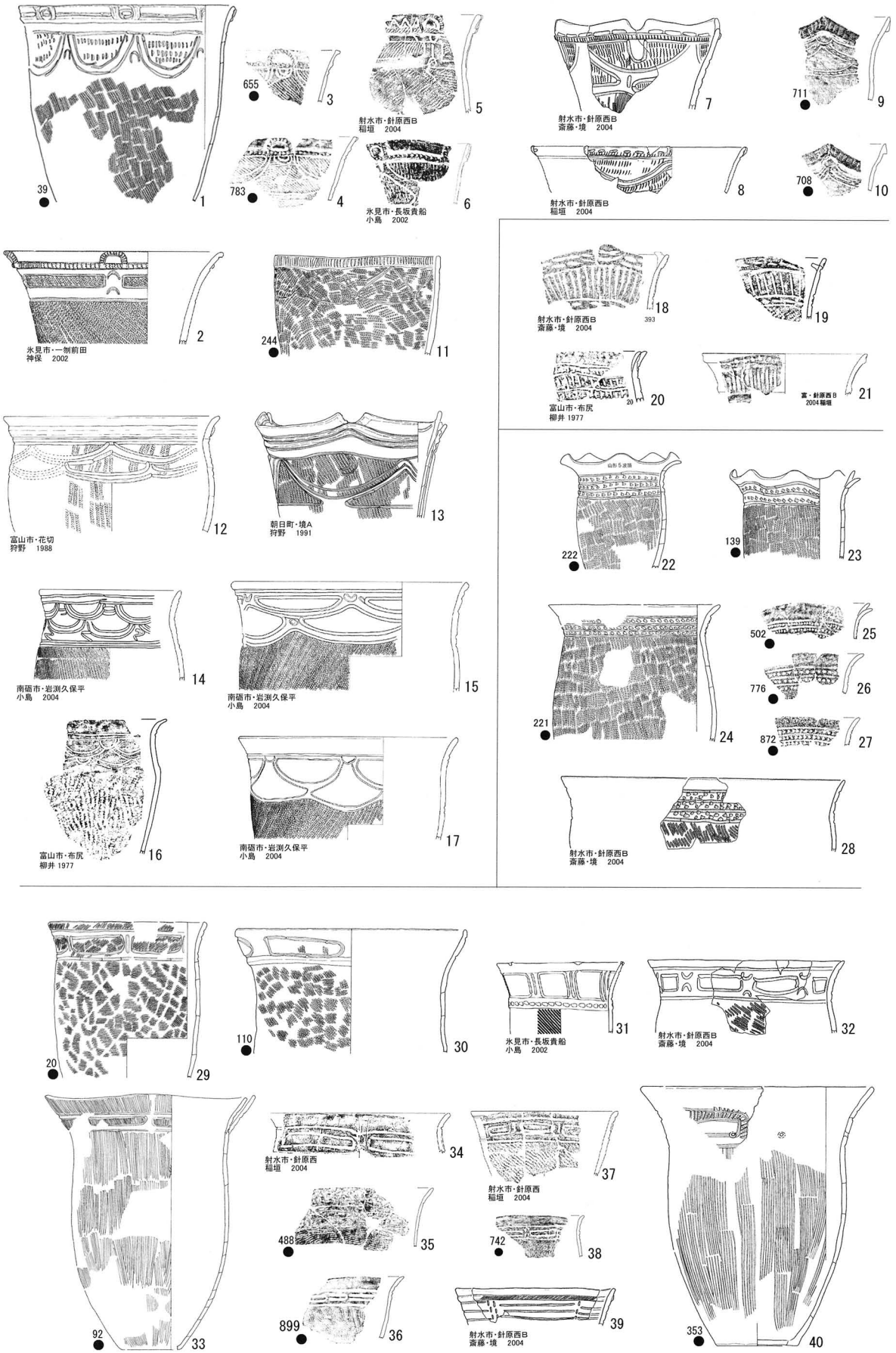
付図3 富山県下の中期後葉の深鉢（串田新Ⅰ・Ⅱ期）

●は桜町　縮尺:不同

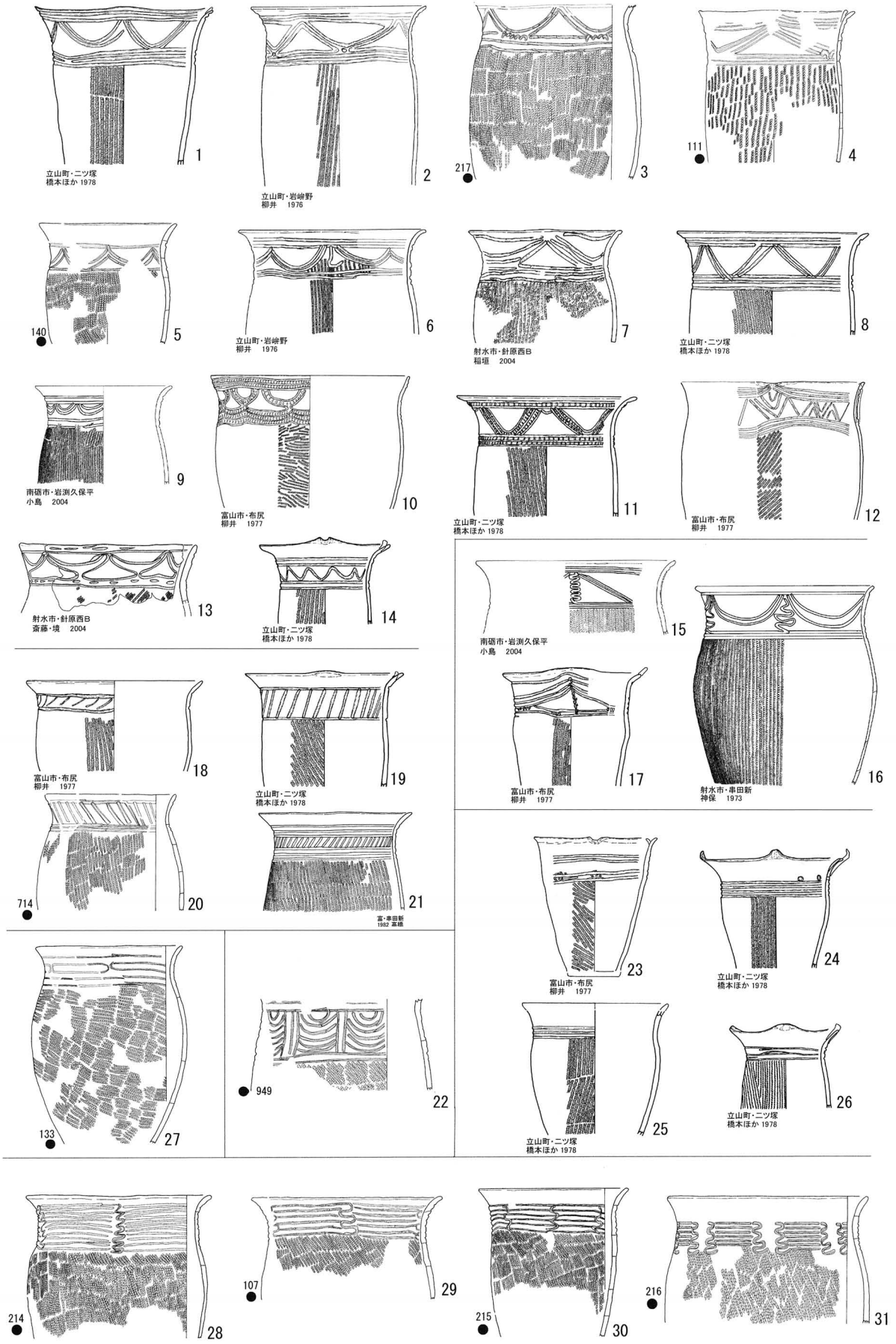


付図4　富山県下の中期後葉の深鉢（串田新Ⅰ・Ⅱ期）

●は桜町　　縮尺:不同

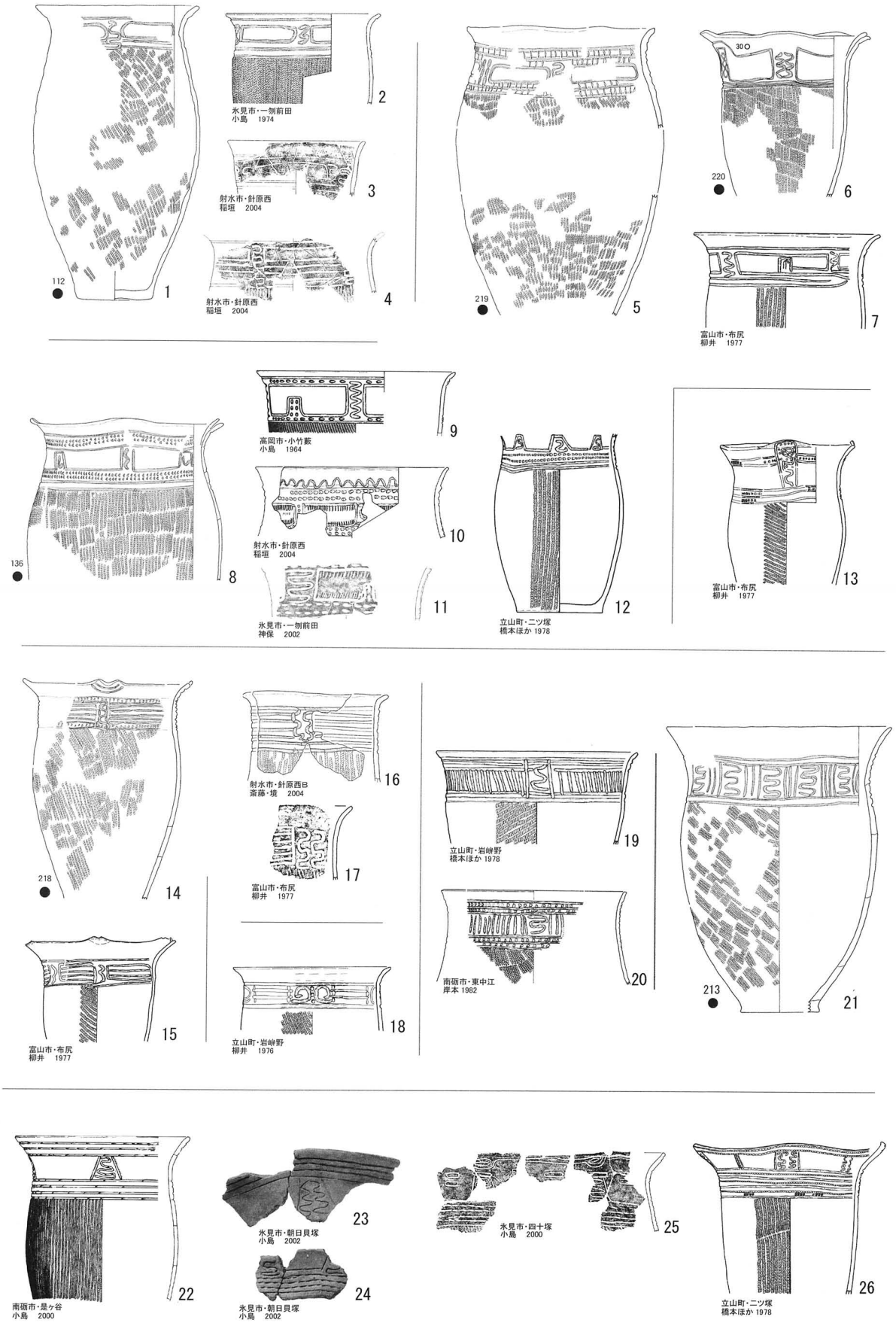


付図５ 富山県下の中期後葉の深鉢（串田新Ⅰ・Ⅱ期）　　●は桜町　　縮尺:不同



付図6 富山県下の中期後葉の深鉢（串田新Ⅰ・Ⅱ期）

●は桜町　　縮尺:不同



付図7　富山県下の中期末葉・後期初頭の深鉢

●は桜町　　縮尺:不同

引用参考文献

富山県立小杉高等学校地歴班　1952　『串田新遺跡調査報告書』
沼田啓太郎　1957　「石川県の縄文式土器」『県下の貝塚と古墳』石川県図書館協会
山内清男　1964　『日本原始美術　1』講談社
小島俊彰　1964-a　『高岡公園小竹藪縄文遺跡』高岡市教育委員会
小島俊彰　1964-b　「北陸の中期後半に於ける一文様について」『若木考古』第70号　国学院大学考古学会
富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1964　『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』
高堀勝喜　1965　「縄文文化の発展と地域性－4北陸－」『日本の考古学』Ⅱ　河出書房
佐度忠作　1967　『宇奈月町の石器と土器』　宇奈月町史編さん委員会
吉岡康暢・高堀勝喜　1968　「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址第1・2次調査概報」『石川考古学研究会々誌』第11号
高堀勝喜　1972　「四　宇出津崎山遺跡」『能都町史　第三巻　歴史編』
神保孝造　1973　「2.　縄文地区」『富山県大門町串田新遺跡発掘調査概報』富山県
杉畠孝博　1973　「輪島市大沢遺跡」『石川考古学研究会々誌』第16号
小島俊彰　1973　「Ⅲ3．是ヶ谷遺跡」『富山県福光町鉄砲谷・向山島・是ヶ谷遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
富山県教育委員会　1973『富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報』
安田良栄　1974　『立山町日中墓の段遺跡調査報告書』立山町教育委員会
小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年　－戦後の研究史と現状－」『大境』第5号　富山考古学会
柳井　睦　1976　「4遺物　土器」『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
杉畠孝博　1976　「第一章第二節　一 高波ふるや遺跡」『石川県珠洲市史』
小林達雄　1977　『日本原始美術体系　Ⅰ』講談社
桜井隆夫ほか　1977　『上平吹遺跡』福井県教育委員会
桜井隆夫ほか　1978　『後野遺跡』和泉村教育委員会
柳井　睦　1977　「Ⅱ 3 縄文時代中期後葉～後期前葉の土器群について」『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』大沢野町教委
南　久和ほか　1977『金沢市北塚遺跡』金沢市教育委員会
橋本　正ほか　1978　『富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
小島俊彰　1979　「第5章　縄文土器・土製品」『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会
端野英子　1979　『金沢市笠舞A遺跡調査報告』石川県教育委員会
南　久和　1981　「Ⅴ1　土器」『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会
西野秀和　1982　『辰口町下開発茶臼山古墳群』辰口町教育委員会
高橋修宏　1982　『串田新遺跡Ⅳ』大門町教育委員会
岸本雅敏　1982　「Ⅳ C 縄文時代中期末の土器」『東中江遺跡』平村教育委員会
高堀勝喜　1982　「第二章 四 宇出津崎山遺跡」『能都町史』第三巻
大野政雄　1983　『門端縄文遺跡発掘調査報告書』清見村教育委員会
南　久和　1983　「北陸の縄文時代中期後葉の編年観について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号石川考古学研究会
小島俊彰　1983　「〝串田新Ⅰ式、Ⅱ式の編年観は逆転するか〟」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号石川考古学研究会
米澤義光　1983　「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土々器再見」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号

上越市立総合博物館　1984 『掘り起こされた先史のくびき』
森　秀典　1984 「北陸の縄文時代中期後葉“串田新式”に関する編年試論」『大境』第８号　富山考古学会
中村準一・田嶋正和　1985 「第４章第１節　(1) 土器」『藤ノ木遺跡』加賀市教育委員会
南　久和ほか　1985『金沢市東市瀬遺跡』金沢市教育委員会
工藤俊樹　1985 「右近次郎遺跡出土中期後葉土器群の検討」『右近次郎遺跡 Ⅱ』大野市教育委員会
木下哲夫　1985-a 「第３章１－Ｐ～Ｕ」『右近次郎遺跡 Ⅱ』大野市教育委員会
木下哲夫　1985-b 「まとめ　第16群土器～第20群土器について」『右近次郎遺跡 Ⅱ』大野市教育委員会
木下哲夫　1985-c 「大杉谷式小考」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
加藤三千雄　1986 「第６章第１節 13　第13群土器　前田式期」『石川県能都町　真脇遺跡』能都町教育委員会
本田秀生　1987 「Ⅴ１土器」『金沢市笠舞Ａ遺跡（Ⅲ）』石川県立埋蔵文化財センター
西野秀和　1987-a 「Ⅵ２　笠舞Ａ遺跡出土土器の位置について」『金沢市笠舞Ａ遺跡（Ⅲ）』石川県立埋蔵文化財センター
西野秀和　1987-b 「第一章二　長滝遺跡」『辰口町史』第二巻
山本直人　1987 「第３章　第１次調査の遺構と遺物」『小松市中海遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
狩野　睦　1988 「Ⅲ３．Ａ　土器」『富山県大山町花切遺跡発掘調査概要』大山町教育委員会
狩野　睦　1988 「串田新・大杉谷式土器様式」『縄文土器大観 3』小学館
古川知明　1988 「Ⅳ Ａ　古沢遺跡」『昭和62年度　富山市埋蔵文化財発掘調査概要』富山市教育委員会
小林達雄　1989 『縄文土器大観 4』小学館
伊藤隆三・山森伸正　1989 「富山県小矢部市桜町遺跡（舟岡地区）の発掘調査」『縄文時代の木の文化』富山考古学会縄文時代研究グループ
米澤義光　1989 「気屋式土器様式」『縄文土器大観 4』小学館
狩野　睦　1991 「３．土器各節」『北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町編６　境Ａ遺跡土器編』富山県教育委員会
田中　彰　1991 「第４章　遺物」『垣内遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
岐阜県博物館　1992 『特別展　飛騨のあけぼの　展示図録』
野村宗作ほか　1993 「第４章　第１節　縄文土器」『荒城神社遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター
松山和彦　1993 「Ⅰ　長滝遺跡の調査（1990年度）」『岩内遺跡・長滝遺跡発掘調査報告』石川県埋蔵文化財センター
小嶋・北野ほか　1993 『岩内遺跡・長滝遺跡群発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財センター
加藤三千雄　1993 「Ⅱ（６）高波遺跡」『能登縄文資料』山内清男考古資料６　奈良国立文化財研究所
戸田哲也ほか　1993 『中野山越遺跡発掘調査報告書』古川町教育委員会
沢田まさ子　1994 「第４章 第１節 縄文時代の遺物」『北塚遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
上嶋善治・谷口和人ほか　1995 『岡前遺跡』岐阜県文化財保護センター
上嶋善治　1995 「第５章　まとめ」『岡前遺跡』岐阜県文化財保護センター
谷口和人　1995 「第４章第４節２　包含層出土の縄文土器」『岡前遺跡』岐阜県文化文化財保護センター
狩野　睦　1996 「串田新式土器」『日本土器辞典』雄山閣出版
河野典夫ほか　1996 『岐阜県吉城郡宮川村杉原瑞穂遺跡調査報告書』宮川村教育委員会
米澤義光　1996 「第４章　出土遺物」『宇ノ気町気屋遺跡』宇ノ気町教育委員会
白川　綾　1997 「常安王神の森遺跡出土縄文時代中期後葉～後期初頭時群の検討」『常安王神の森遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財センター
米澤義光　1997 「第４章 第１節 土器」『吉野谷の石器時代（Ⅲ）』吉野谷村教育委員会
戸田哲也　1997 『堂之上遺跡』久々野町教育委員会

西野秀和　1997 「Ⅲ　庄が屋敷Ａ遺跡」『能美丘陵東遺跡群　Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター
西野秀和　1998 「第６章　宮竹うっしょやまＡ遺跡　Ⅲ」『能美丘陵東遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
谷口宗治　1998 『金沢市北塚遺跡　―第14次発掘調査報告書―』金沢市埋蔵文化財センター
小矢部市教育委員会　1998 『桜町遺跡 ～縄文の森に吹く風を感じて～』小矢部市桜町遺跡おやべ展図録
安　英樹　1999 「第３章 第３節１縄文土器」『金沢市北塚遺跡・北塚古墳群』（財）石川県埋蔵文化財センター
加藤三千雄　1999 「第４章　第１節　縄文土器」『馬渡Ｂ遺跡』門前町教育委員会
北日本新聞社　1999 『いのちの森　縄文・桜町遺跡』
上原真昭　2000 「第５章　第１節　縄文土器について」『岩垣内遺跡』財団法人 岐阜県文化財保護センター
小島俊彰　2000 「前田式土器様式と岩峅野式土器様式の諸型式」『大境』第20・21号
桜町遺跡発掘調査団　2001 『桜町遺跡　調査概報』学生社
大野淳也　2001 「Ⅰ二　遺跡をめぐる環境」『桜町遺跡　調査概報』学生社
久田正弘　2002 「第４章　第２節　２・谷出土土器」『田鶴浜町大津くろだの森遺跡』（財）石川県埋蔵文化財センター
神保孝造　2002 「一刎前田遺跡」『氷見市史７』資料編五 考古　氷見市
小島俊彰　2002 「四十塚遺跡」『氷見市史７』資料編五 考古　氷見市
小島俊彰　2002 「朝日貝塚」『氷見市史７』資料編五 考古　氷見市
布尾和史 2004 「北陸縄文中期土器編年の概要一遺構出土資料を中心に－」『シンポジウム　縄文集落研究の新地平３　－勝坂から曽利へ－』縄文集落研究グループ セツルメント研究会
白川　綾　2004 「縄文系土器群と縦位帯縄文・結節縄文を有す土器群につい　-越前地方における縄文時代中期中葉～後葉の一断相-」『栃川遺跡』朝日町教育委員会
久々忠義・塚田一成・中井真夕　2004 『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅰ 弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ』小矢部市教育委員会
大野淳也・中井真夕・吉川純子　2005 『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅱ 弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ』小矢部市教育委員会
寺崎裕助　2005 「新潟県の串田新式土器・古串田新式土器」『新潟考古学談話会会報』第29号
上原真昭　2005 「第５章　まとめ」『上岩野遺跡』財　岐阜県教育文化財団文化財保護センター
高橋健太郎・纐纈　茂　2005 「店町遺跡出土の埋設土器について」『美濃の考古学』第８号　美濃の考古学刊行会
久々忠義　2006 「桜町遺跡の中期末・後期初頭の土器について」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
寺崎裕助　2006-a 「新潟県における古串田新式土器の様相」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
寺崎裕助　2006-b 「中津式と思われる土器」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
山岸洋一　2006 「糸魚川市遺跡出土の串田新式土器」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
米澤義光　2006 「石川県（加賀）の概要」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
可児直典　2006 「石川県（能登地域）の概要」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
冨井　眞　2006 「桜町遺跡出土の中津式土器を考えるために」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
久々忠義・塚田一成　2006 『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文土器・石器編Ⅰ』小矢部市教育委員会

木下哲夫　2006-a 「福井県・岐阜県の様相」『桜町遺跡縄文土器検討会資料集』小矢部市教育委員会
木下哲夫　2006-b 「北陸地方の中期末から後期初頭にかけての土器型式」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅣ』予稿集　縄文社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
寺崎裕助　2007 「新潟県下越地方の縄文中期末から後期前葉の土器様相」『中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
岡田一広　2007 「第３章　遺物」『矢張下島遺跡調査報告』南砺市教育委員会

3　桜町遺跡の縄文後期末から晩期の土器変遷について

酒井　重洋（富山県埋蔵文化財センター）

1　はじめに

北陸の縄文後期から晩期にかけての編年は、昭和30年代に発掘調査が行われた石川県野々市町御経塚遺跡、金沢市八日市新保遺跡（現新保チカモリ遺跡）、中屋遺跡の調査成果を基に、高堀勝喜・沼田啓太郎により八日市新保式・御経塚式・中屋式が設定された［沼田1956・高堀1964］。また、翌年高堀は、『日本の考古学』にそれぞれの形式の特徴は「三叉状連結文」、「入組まない三叉状文」、「入組三叉文」を主文様としているとして、北陸の晩期前葉の編年を示した［高堀1965］。

1967年には、出崎政子が富山県高岡市勝木原遺跡の報告書で「玉抱き三叉文」を特徴とした一群の土器を八日市新保式後半に位置づけ共存するとして「玉抱き三叉文」をもって晩期とし、北陸内での地域性を解いた［富山県立高岡工芸高校1967］。また、湊晨は、富山市岩瀬天神遺跡の三叉文様の土器から晩期は、三叉文をもってとして岩瀬天神期が晩期の始まりであるとした［湊1972］。岩瀬天神式の提唱にあたっては、山内清男の大洞Ｂ式細分が影響しているようである［山内1964］。しかし、両意見とも北陸東部の地域色とされ、北陸内での共通認識は得られなかった。このことは、富山県内の比較資料が少なく内容が把握されていなかったことも原因であろう。富山県内では、高岡市中川遺跡の資料をもって中川式（中屋式並行期）が提唱された［湊1972］。この資料は、倉田一郎が陸奥式土器の南進資料として報告したもの［倉田1930］と、後に市営プール建設の際に出土した資料があり、中川式としたのは、後者の資料である［小島2001］。また、富山市杉谷遺跡の資料から杉谷式が藤田によって提唱されたが、現在の中屋式、下野式の一部を含む土器群であり、いずれも定着していない［藤田1973］。

1983年には、御経塚遺跡の報告書が刊行された。その中で高堀勝喜は、「連結三叉状文」出現以前を八日市新保１式、従来の八日市新保式を２式として晩期に組み入れた。また、勝木原遺跡で示された玉抱き三叉文を特徴に持つ一群を御経塚３式（現在の１式）として位置づけている。同時に御経塚式、中屋式、下野式の細分案も合わせて提示されている。一方、同年刊行の押水町上田うまばち遺跡の報告書で、西野秀和が「西日本の滋賀里系土器との対比により八日市新保式は後期に位置づけられるのでは」との疑問を投げかけ、翌年刊行された鶴来町白山遺跡の報告書では、八日市新保式を後期として編年案を示した［西野1984･1985］。

その後に刊行された金沢市新保本町チカモリ遺跡の報告書や、『縄文土器大観』所収の「北陸晩期土器様式」などの南久和による編年［南1986･1989］、西野による金沢市米泉遺跡報告書［西野1989］などでは、晩期は御経塚１式（玉抱き三叉文の出現）からとされている。また、中屋式後半の土器について、大洞Ｃ１式期を含むとしている。久田正弘は、能都町真脇遺跡の報告書の中で八日市新保式を３つに分け、３段階目を勝木原・御経塚式にあて八日市新保式末期には２つの形式が並存するとした［久田1986］。しかし、北陸の中では玉抱き三叉文を施文する八日市新保式土器の

存在は知られており、その位置づけについては指摘されてはいたが、具体的な考えは示されてはいなかった。また、この年、御経塚遺跡Ⅱの報告書が刊行され、後期から晩期の資料が報告されている［吉田 1989］。

1992 年には、朝日町境Ａ遺跡の報告がされている。その中で筆者は、晩期初頭に位置づけられた岩瀬天神式（期）について出崎、湊報告により紹介された富山県東部の土器や岩瀬天神遺跡出土品は、東北の縄文後期の瘤付系土器や勝木原式、御経塚式を含む土器群であり、これらの土器を理解するには富山県東部にみられる瘤付系土器や大洞系土器の影響の強い土器群の理解が必要と考え分析を試みた。しかし、古川智明ほかの岩瀬天神遺跡の報告で岩瀬天神式の過大解釈と取られたことは、遺憾であった［宮田 1995・富山市教委 2003］。

1994 年に林謙作を代表とする「縄文晩期前葉 - 中葉の広域編年 -」では小島俊彰・西野秀和・筆者が北陸の編年を検討している［小島・西野・酒井 1994］。この編年表の中で御経塚遺跡の報告の１式は、玉抱き三叉文をもつ１群（勝木原式）を高堀同様に置き換えたものであり、御経塚式と勝木原式をどのようにするかが問題となったが、併記することとした。その中で、西野は波状口縁深鉢の波頂部の山形から台形への変化から後期と晩期の画期を求めている。また、南は『編年』の中で、八日市新保１・２式をそれぞれＡ・Ｂ細分し４段階の編年観を示している［南 2001］。そして５段階に「出」字文に玉抱き三叉文が充填されるものを挙げ、晩期御経塚１式としている。また、中屋式を大洞Ｃ１式並行期としてＣ１式を２分して中屋１・２式（各ａ・ｂ期に２細分）とし、中屋３式は大洞Ｃ２式とする考えを示している。

布尾和史は金沢市藤江Ｃ遺跡の報告書で、南の編年を基本にした４細分案を提示し、その中で八日市新保２式４期（南Ⅱｂ期）では、山形波状と台形波状にはそれぞれ複雑化した三叉文が使用されることや文様要素の共通性から同一段階で玉抱き三叉文や八日市新保的な三叉文が共伴し両波状口縁深鉢で共存していたとの認識を示し、一部を御経塚１式に含めて位置づけている［布尾 2002］。また西野は「八日市新保式土器再考」のなかで、藤江Ｃ遺跡の土器について、布尾の細分案の八日市新保２式（南ⅡＢ期、布尾４期）を従来の後期末から晩期御経塚１式に位置づける考えを示した［西野 2003］。また、八日市新保２式の画期は菱形抉りの発生あるいは山字文の単線が直線から微妙に湾曲して弧線状になる段階としている。

2002 年には、石川県津幡町の北中条遺跡の報告書が刊行され、後期末は八日市新保２式、晩期は御経塚式として従来の位置づけとなっている［津幡町 2002］。詳しい説明はなされていないが報告の中では、台形波状の波頂部文様を単独の三叉文、連結三叉文、玉抱き三叉文を含めて御経塚式の古い部分と位置づけている。また、2006 年には、加賀市小杉遺跡の報告がなされた［石川県 2006］。この遺跡も藤江Ｃ遺跡、北中条遺跡同様に後期から晩期の遺跡であり、晩期初頭の資料が増加している。

西野は、「橿原遺跡出土縄文土器検討会」の資料の中で、従来の八日市新保２式の新しい部分と玉抱き三叉文、大きな三叉文を持つ一群を勝木原・御経塚１式として示し、玉抱き三叉文以後を御経塚２式としている［西野 2005］。

このようにこれまでの研究成果みると八日市新保式から御経塚式への変遷過程が問題となっており玉抱き三叉文を含めた三叉文の変化を、今回の桜町遺跡の資料から整理してみたい（なお、本稿で使用する土器番号は、報告書「縄文土器・石器編Ⅱ」の土器番号と同一のものである）。

2　八日市新保式から御経塚式へ

八日市新保式は、井口式から続く西日本の凹線文系土器であり口縁部が有段あるいは無段で波状口縁となる深鉢と平縁のものがある。文様は、口縁部と胴部括れ部に数条の沈線を巡らせ、区切る手法を基本としている。

区切り手法（寸断文）は、縦沈線・対弧文・楔形・菱形・圧痕など多種である。２式になると高堀が提唱した連結した三叉文状となる。この三叉状文は、特に波状口縁頂部を中心の文様として発達し、八日市新保２式判定の主要文様の要素となっている。また、胴部は胴周沈線と寸断文が引かれるだけで条痕または無文帯になることが一般的であり西日本の沈線文系土器の影響が強くみられる。このことが、波頂部への文様施文として現れ、発達したとも考えられる。

連結三叉状文と向い合せに施される従来の東北の三叉文との違いは、連結三叉状文は、本来文様の単位を分割するためのものであり、主文様の中心を形成するものではない。それは、凹線文土器以来の胴部の寸断文の流れの中から作り出された文様と考えられるからである。胴部文様として使用される場合は連続して組み合わせて用いられるため文様を付加しても連続性が保たれるが、波頂部など狭い部分で施文する場合には、文様の端に三叉文がくるという現象が生じるのである。そのためにみつけ出されたのが短い単線の先端に三叉文を付加して使用する方法であり、新たな施文法の発見である。また、八日市新保２式では波頂部を２区画として意識していることから、中央に沈線を引くことにより区画を分割している。その結果、できたのが「工・山・出」字状文である。このような施文方法は、波頂部の三叉文、玉抱き三叉文にも共通な手法と捉えることができる。このようにみると台形波状は、波頂部を２区画化することで広く作り出されるようになり、文様施文を多彩にしたと考えられる。

3　大きな三叉文の波状口縁深鉢について

近年の調査では、台形波状口縁波頂部に大きな三叉文（南の同角三叉文、逆Ｔ字の三叉文で抉るように施される）が外面や内面にみられる例が増えている。また、ほとんどに沈線を沿わせるか縄文を施していることが特徴である（この三叉文は、これまであまり注意されていなかったが勝木原遺跡でも多数報告されている）。波頂部は面を取り仕上げる 508･545 などと丸で平らに作る例 159･546･742 などがある。これらの祖形としては、波頂部を沈線で飾る 533 ～ 535･537 や、瘤付土器の波頂部にみられる三叉文があげられよう。この三叉文については、どのような経過で取り入れられていったのかははっきりしないが、富山県東部の本江遺跡（Ｊ型）や境Ａ遺跡の後期後半の土器などにみられる様相とつながるのか、あるいは別の系統として成立するのかが問題となる。

三叉文の例は 155･146･545･546 などが上げられ、後に御経塚式の主文様として波頂部、弧

線文との組み合わせや連結させるなどの変化を付けることにより胴部文様として成立する168·170·792·795。

三叉文を取り入れることにより器面への加飾性が増し、御経塚式の特徴となっている。胴部文様が寸断文だけであった八日市新保式からの大きな変化である。また、特定の胴部文様を持たなかったため、この文様は縦横に自由に展開して御経塚式独自の文様を作り出してゆく。また、御経塚2式になると胴部には、帯縄文に区画された端部が組み合う入り組み文などが施される例も多くなる(39·742・氷見市四十塚遺跡例)。波頂部に施される三叉文は単独施文が多いが、波頂部間を連結し結ぶ107や上下に向かい合わせて工の字状に配置する742などの変化があり、中央部を穿孔するものもある。御経塚式のほぼ全時期に見られる文様である。このほか、梅原落戸遺跡では、2単位の波状口縁で胴部に入り組み文と小さな三叉文をもつ例があり、口縁端部はヒダ状となる。この例は、御経塚2式の最終段階ぐらいか［福光町1994］。

この大きな三叉文をもつ深鉢の分布は、県内に広くみられ境A遺跡［富山県1991］·坪野遺跡［入善町1986］・本江遺跡［滑川市1979］・岩瀬天神遺跡［富山市2002］・八町遺跡［酒井2000］・中山中遺跡［酒井2003］・勝木原遺跡［高岡工芸高校1967］・四十塚遺跡［氷見市史2004］などに類例がある。また石川県では、北中条遺跡・御経塚遺跡・新保町チカモリ遺跡・小杉遺跡・犀川鉄橋遺跡［米沢他1982］・藤江C遺跡・真脇遺跡［高堀他1986］、福井県では左開遺跡［南1986］・下糸生脇遺跡［福井県埋文1999］などにみられ、北陸から関東・近畿にいたる中部圏に広く分布する土器である［岡田2006］。

従来の八日市新保式とは別系統の土器であり、北陸晩期土器の成立に深くかかわっていると考えられる。

4　連結三叉状文について

八日市新保1式では、胴周沈線区切り手法は連結三叉状文にならず2式になって多用される。始めは中心の沈線を太くしそれを区切る縦文様を強調することから始まり、「H」字状の手法から端部を強調した三叉文風に変化し、波頂部では「工・山・出」字状に複雑化し、端部を三叉状文に変化させることとなる。この変化については、西野・南・布尾などの検証がありここでは述べないが、桜町遺跡においても同様の変化がうかがわれ、西野が提案した「台形波状」をもって晩期としたいという提案と布尾が示した「八日市新保4期（南Ⅱb期）では、山形波状と台形波状にはそれぞれ複雑化した三叉文が使用されることや文様要素の共通性から同一段階で玉抱き三叉文や八日市新保的な三叉文が共伴し両波状口縁深鉢が共存している」との認識がありこれらを含めて、位置づけを考えてみたい。

八日市新保式に見られる連結三叉文の端部は、縦沈線140·141から「＜・(」142·143、37図、そして三角抉りの短い三叉文151·153へと変化すると考えている。そして弧線状の区切りは、楔形抉りの祖形の一つになると思われる。また、端部の三叉文は、三叉文だけが独立し、短い抉り込み三叉文705·724となり玉抱き三叉文710に変化する。三叉文は、短く連結しない三叉文で沈線で描

かれるもの508と抉るような三叉文724がありいずれも玉を抱くものがある。このほか、八日市新保式の影響が残る連結する玉抱き三叉文にも両者があり長く連結する208･209･707･713と短く連結を繰り返す161･212･711がある。また、三叉文の抱く玉は単円161と重円160の２種類の例がある。この玉は、重円に変わり、沈線のものが長く御経塚式で使用される。

三叉文の中が玉にならず弧線を腹合わせ「()」に施文する156･508･524などや１条の沈線を引く488～494など古い要素を残す例もある。

713･707をみると二つの異なった三叉文が内面と外面にみられることから、玉抱き三叉文と三叉文だけのものは同時に存在する時があるようである。また、三叉文間に多条の縦沈線を引く497･521例がある。北中条遺跡では、玉抱き三叉文と多条線区切りが同時に施される例（121 Pの407）や桜町遺跡では「工・出・山」字状の八日市新保式的な棘の付く連結三叉文と同時施文される154･483があり、文様の組み合せは多様である（このような例は藤江C遺跡・北中条遺跡などにもみられる）。この現象を考えると八日市新保２式の「工・山・出」字文からその文様内への三叉文の侵入、玉抱き三叉文への変化として捉えられるのではないだろうか。

152･153･483･494･547をみると「出」字文は三叉文の先端が尖り長く延びている。153と157は、文様構成は異なるが、内面の作りは同じで波頂部を三角に抉るようして作り、内面の三叉文を意識しているようである。

「出」字文だけをみると154･485･712に近いが、玉抱き三叉文が施文されないことから152などが先行すると考える。連結三叉状文をみると縦沈線で区切り「H」状の140、やや膨らみを持たせて三叉文状になる142～145、「リボン」状の149･150･152などがみられ、142･144･149･150では、三叉状文間に沈線が引かれる。152･153･483の胴周沈線区切りは「人」字状となっている。しかし、連結三叉状文端部は包み込むようにはならない。おそらく、玉抱き三叉文以前のものだろう。

151･154･155などでは、同角の三叉文端部となっており、晩期とされる三叉文と同様である。また、三叉文の中は玉が施されてはいないが玉抱き三叉文と同じとみることも可能であろう。724では、連結三叉文と小さな抉るような三叉文が同一器面に施文されている。この三叉文、連結三叉文、玉抱き三叉文の関係をどのようにとられるかは微妙だが、いくらの時間差を持つと考える。

次に波状口縁深鉢の頂部文様をみると、付加文様を持たずに「山・工」字状文が付けられている143･436～438･482などと、棘状の波長部の長い三叉文が付く153、玉抱き三叉文が付いた154･485などがある。後者では、台形波状となり、口縁部文様帯が波頂部を中心にした文様単位に変わり、口縁部を廻る平行沈線を取り込んだ文様を構成している。この文様構成は、波頂部に大きな三叉文を持つもの146･155･547･494にもみられる新しい要素と考えられる。この他に142･144･149～151のような低い山状の波状口縁を持つ深鉢がある。154は波頂部に穴を穿ち沈線で縁取りする。

いくつかの個体について共通点を探してみると153と154は、棘状の三叉文を持つ。連結三叉文は口縁部が同じ形で胴部は、153が人字状の寸断文である。485も棘状の三叉文をもつもので、玉抱き三叉文、円形刺突、三叉文が配置されている。この他547･712は「出」字文の棘が付くタイプ

である。

712は三叉文に対峙して玉抱き三叉文状に配置している。波状口縁の作りをみると152·153のように台形になりつつあるが、端部の面取りが不十分でやや丸みが残っている。しかし、154·724などでは端部の面取りがはっきりし内側に曲げ込まれるように変化している。波頂部はより強くひねられ中心が窪む形となり、内面に凹線を沿わせるもの160や三叉文を施すもの713もあらわれ始め、縄文帯を持つようになっている。また、大きな三叉文が内面に付けられたりして加飾性が増すようである。

波頂形の変化は、

①丸みのある山形波状140·141

②丸みのある台形波状143·145·152

③台形波状151·547

④部面取りで角ばった台形波状146·153·154·160

⑤双頭の台形波状161

に変化している。

①は八日市新保1式から2式古段階、②は2式古段階から中段階、③は2式中から新段階、④八日市新保式2新～御経塚・勝木原1式古段階、⑤御経塚・勝木原1式新に位置づけられる。

5　玉抱き三叉文について

三叉文については、連結するもの155·160と短く施文する710·724例がある。724は両者を持っている。この短い三叉文は抉るような描き方である。この手法は、154·485などの「出」字文に付く棘状三叉文と共通の施文法である。また、あまり抉り込まずに施文する161·712·711がある。

このタイプの三叉文は、159·508·762など新しいものに受け継がれてゆくが、短く抉るような三叉文は、比較的短時間でなくなり後へは続かないと思われ、玉抱き三叉文が取り入れられた初期段階にみられるようである。また、519のような「リボン状」の連結三叉文でも同様であろう。157·162は、玉の部分に粘土を張り付けて瘤状にする例で、鉢207·900も同様である。玉抱き三叉文は、146・158·159·161·508·713·742からしだいに中の玉を意識しない三叉文739·762·763·766へと変化している。

161·159·508にみられる玉抱き三叉文には、フ状沈線が添えられ、周りを囲むようにひし形の文様を構成している。このような文様構成は、158·763·769·981·1000などがあり、巻き込むようにつながる三叉文へ変化する。

158では、口縁部文様帯に列点が添えられ、逆「T」字状の三叉文様、内面には、三叉文と凹線が配置されている。新しい要素を持つが、胴部には玉抱き三叉文を残している。また帯文様帯が未発達であり、御経塚・勝木原1式から2式への過渡的な様相を示す土器であろう。

158の波頂部文様は、重円文を持つ769·763や中央で2分割された1000のような三叉文に変化すると考えられる。この土器1000の下段の文様は重円の玉抱き三叉文となっている。この玉抱き

三叉文は、重円になるものやＳ字状の780･839入り組み文風となるものなどがみられる。入り組み文になる例は、この後に発生する171･173などのクランク状の入り組み文の祖形とも考えられる。

Ｓ字状の入り組み文は御経塚遺跡・四十塚遺跡・中山中遺跡などに例がある。また、158などの巻き込むようにつながる三叉文は、大洞B2式段階にみられる三叉文である［小林2004・2005］。

玉抱き三叉文は御経塚２式段階までみられるが、いわゆる魚眼文的な三叉文とは異なった重円772・773あるいは巻き込むような三叉文994につけられる玉など後出的なものである。また、この魚眼文的な三叉文が消失する段階以降に御経塚文様167･170がはっきりとした形で現れてくるようである。このことから２式段階を魚眼文のような玉抱き三叉文を持つものと持たないもので分離することも可能であろうか。

６　口縁部ヒダ状の深鉢

桜町遺跡では特に目立つのがこの深鉢である。口縁部を内外面から交互に押え、ヒダ状に作るもので平円が多いが、波状口縁もみられる620。163･164･607･618などでは、縄文帯・沈線文が施されるものがある。また、内面には、１・２条の凹線が引かれる。611～614のように口縁部に隆帯を貼り付ける例もある。また、連結する三叉文を持つ601･623や三叉文と弧線を連続して施す164などがある。県内では、梅原落戸遺跡・勝木原遺跡・岩瀬天神遺跡など、石川県では新保町チカモリ遺跡・梓川鉄橋遺跡・御経塚遺跡・横北遺跡［石川県1977］。藤江Ｃ遺跡などに類例がある。藤江Ｃ遺跡例は、玉抱き三叉文を施す。このほかに平縁・小波状で口縁部を内側に押し入れる285･295･585～600がある。素文系のものが多いが、玉抱き三叉文・連結三叉状文などを施すものもある。内面には、凹線・円形の押圧が施される例が多い。148･149にもみられるこの押し入れる手法は、八日市新保式の波状口縁の内側へ窪める押圧から続く手法である。この手法は、石川・富山・福井などにもみられる。

ヒダ状口縁深鉢は御経塚式、後者は八日市新保２式・御経塚式にみられる。平円でヒダにならない深鉢819～838もほぼ同様な形態を持つ。このような例は条痕のものにもみられ、ヒダ状の1448、一か所を内側に窪める1417･1420･1423がある。1448は中屋式の小波状口縁の変化したものと考えられる。他は御経塚式であろう。

７　波頂部の三叉文が非対称の深鉢

741・762～766　三叉文と入り組み文を組み合わせて施文するもので、波頂部の文様が非対称となる。このような文様構成をするものは、境Ａ遺跡で多くみられる北陸東部の特徴的な土器である。おそらく、瘤付土器の影響で生まれたものと考えられ、御経塚式の入り組み文の祖形となった土器であろう。

類例としては風野遺跡［宇奈月町2001］、岩瀬天神遺跡、中山中遺跡などにある。中でも風野遺跡例は好例で楕円文を斜めに配して三叉文を沿わせている。大洞Ｂ１式併行期のものである。桜町遺跡例は、762がやや古くその他は新しいものであろう。

8　弧線文と三叉文を組み合わせた文様の深鉢

Ｔ字状または小さな三叉文と弧線文を組み合わせて胴部文様を作るもので御経塚式の典型的な文様である 168･170。縦、横自由に文様を展開させることにより鶏頭状 795 になったり、上下に合せることにより「工」字状の文様 789･797 になったりしている。また、玉を抱く三叉状文（連結する場合もある）を施す 779･782 などもある。弧線文を連結させて三叉文を添える 790･792、弧線文が連続する 789、上下から交互に組み合わせる 791 など多彩である。

168 では、縦の入り組み文（あやくり文、縦・横に「Ｓ」状の文様を交互に組み合わせて沈線で施文する入り組み文）に小さな三叉文を添えている。

あやくり文は、796･854 と 172 のような例があり、三叉文が添えられる。また、弧線文に三叉文が付けられる 223（鉢）･790･792 がある。791 の弧線文からの変化あるいは、大洞式の羊歯状文の幹を単純化した文様であろうか。また、中屋式のあやくり帯縄文ともかかわっている。

この時期と考えられる 168･169･172 では、内面の凹線がすでに形骸化していることなどから御経塚３式とする。また、口縁部下に設けられる無文帯は丁寧に磨かれ、縄文帯に比べ一段低くなり、段差を持ち作られている。このような手法は、中屋１・２式まで受け継がれていく。石川県では、御経塚遺跡［高堀 1964･83］に類例がある。

9　クランク状の帯縄文の深鉢

173 は波頂部に入り組み状文を施し、端部が玉抱き三叉文風に巻く文様と波頂部をつなぐように連結三叉文、胴部には、クランク状の帯縄文を設ける。このクランク状文は交互に配置する瘤付土器の入り組み帯状文からの変化である。帯縄文、列点帯がすでに完成しており 158 に比べると新しい要素を持つが玉抱き三叉状文と連結三叉文を併せ持つ過渡的な土器である。

波頂部と同じ文様は 774・776 にみられるが他の遺跡では類例がない。このクランク文様は、174･190 など中屋１式に引き継がれてゆく。

10　入り組み文深鉢

「Ｆ」あるいは「人」字状の三叉文様を２つ組み合わせることにより作り出される文様で、あやくり帯縄文に変化するとする南の考えがある［南 2001］。

あやくり文は大洞式の影響で作り出されたと考えられ、口縁部と胴部に文様帯を持つがしだいに胴部に降下する。174 ～ 176･178･181･848･851 ～ 853 などである。

器形は口縁部が大きくゆるく開く下膨れであった御経塚式から「く」字状に折れる中屋式の器形となる。また２単位のＢ突起が付けられることから大洞 B-C 式的な要素が強くなる。178 は、２段にあやくり文を施しているが、前段階の 172 に比べれば器形や、文様帯の違いがはっきりと読み取れるだろう。また、あやくり文につけられていた三叉文はこの段階では消滅し、沈線が施されている。176 も 178 同様のあやくり文の崩れた形のものに沈線を施している。

「Ｆ」字状の入り組み文、あやくり帯縄文への変化の最初であろうか。そのため文様内への縄文

施文は帯を形成していない。この変化をたどると 168・172（御経塚３式）→ 176･178（中屋１式）→ 181（中屋２式）･175 と変化する。175 は口縁部文様帯を残すことからやや古い様相を残している中間的なものであろう。

あやくり帯縄文 175 では、枝支部分が三角に擦り消されて三叉文の名残となっている。中屋１式の特長であろうか。また､あやくり帯縄文内への列点文施文例が少なく遺跡差とみることができる。この後は、端部が巻き込む「Ｆ」字状の入り組み文や半肉彫状の入り組み文となり、鍵の手文と伴に中屋式の主文様の一つとなる。

中屋２式では、「Ｆ」字状の入り組み文 177･179･181、鍵の手文 1121 となる。胴部は丸みを帯びた形となりくの字状の口縁部となる。また、胴上部に無文帯を持つ 177･190 などや頸部に列点を施す 112･190 などもみられるようになる。「Ｆ」字状の入り組み文では半肉彫状に表現する 1026･1075 などや端部を巻き込む 1062･1065･1072 などの種類がみられる。また、多段化した胴部文様 1121･1137 がみられるのもこの時期である。このほか羊歯状文の崩れた 182･184･186･1095 などもある。また、粘土を貼り付けたサンゴ状突起が盛んに付けられる。

中屋３式では、くの字口縁が短くなり 191 ～ 193･196、立ちはじめて内面に肥厚する 195･196 が現れる。文様は、列点文 195･196･1130･1136・鍵の手文 189、191･1165 のようなＳ字状文（Ｆ字状の入り組み文の崩れた）が多くなり、入り組み文は少なくなる。胴部の帯状文は幅が狭くなり列点文と縄文帯で多段化するものもみられる。口縁部は、縄文、条痕、無文になり、頸部に列点文を施すものが多くなる。また、短いくの字口縁を持つ 1174 ～ 1184･1186 のような鉢と壺の中間的な器形が増加する。

11　条痕文深鉢

条痕の深鉢は、大きく口縁部がゆるく内屈する 294･1409 ～ 1416、アサガオ状に外反する 223･1429･1437、口縁部を内面から摘み上げる 1426･1427、大きく外反し口縁部が立つ 1430 ～ 1146 などがある。1409･1415 などは上部から押さえて小波状とする。1410･1411 はヘラ状工具で刻み、小波状とする。平縁深鉢は、御経塚式から中屋式に伴うが、御経塚式では口縁部を小波状にすることはなく小波状のものは中屋式であろう。

くの字口縁深鉢 296 ～ 299・1440 ～ 1447,1449 ～ 1445 は器形の変化が、有文のもの同様に変わると考えられ、長く伸びる口縁から短いものに、内面への刻み 1443・1445 から口縁上部への刻みに変化する。御経塚１・２式では、284・285・295 など内面に凹線を持つ無文深鉢がみられることからおおむね中屋式に伴うと考えられる。条痕は、横または斜めが一般的で、口縁部横、胴部を斜条痕として変化を付ける 1440・1444 などの例もみられるが縄文施文はほとんどない。

12　羊歯状文について

羊歯状文を施す例は、くの字口縁の深鉢、鉢、注口、蓋がある。搬入品は、注口と思われる 1282･1283･1287 の３点、鉢が 1286･1288 の２点ある。1288 は、大洞 B-C １式である。そのほかは、

蓋、深鉢である。また、蓋にはよく使用される文様である。深鉢の器形には、立ち気味のくの字口縁の 182·183·187·1086·1089 などと、くの字に強く外反する 186 ～ 184·1095·1098 がある。

羊歯状文をみると珠文が形成されるもの 1083·1089、葉脈部分が沈線化したもの 1086、列点化したもの 184 ～ 186·1078、幹の部分がＬ字状に表現される 182·187·1095·1099、列点文として表現される 183·1098、列点文間にＳ字状に表現される 191·1096 などいろいろな変化がみられる。

184·185 では、連続する三叉文の上下に列点文を施し羊歯状文としている。この２点を三叉文に列点文が加わった古い要素とみることも可能であるが、胴部に羊歯状文が下ってきていることから新しい要素と考えている。また、186 では、沈線化した葉脈部分の上下に列点が施されている。胴部をみると 182 では網目状撚糸文、183·187·1095·1098 では、条痕が施されている。

このようにみると珠文を形成するのは、搬入品とした 1288 や 1083·1086・1089 などわずかに過ぎない。また、列点文やＬ字状文を施す 182·183·187·1095・1098 などでは、中屋１式以降みられなくなる口縁部文様帯が残る。このＬ字状文様は、羊歯状文の幹の変化したものか口縁部の波状沈線の変化したものなのかはっきりしないが列点文と伴に存在している。

御経塚遺跡では、口縁部に祖型的な羊歯状文を持つ（御経塚Ⅱ第 126 図 3)、口縁部に祖型的な羊歯状文、胴部に端部のかみ合う羊歯状文が施される例（同第 127 図 2）や胴部に羊歯状文の古い形態と考えられる文様を持つ例（同第 125 図 1)、羊歯状文端部に三叉文が施される例（同第 127 図 1）などがあり東北の羊歯状文をそのままの形で文様帯や施文位置を受け継いでいることは少ないようである［吉田 1998]。このことや単純な供範関係を示す出土例がないことも編年的な位置づけを明確にできない要因となっているのが現状あろう。

珠文を形成するものは御経塚３式（1282·1283·1288)、中屋１式に、それ以外の羊歯状文系の文様は中屋２式 183·1095·1098·1099·1108 に伴うと考えられる。

羊歯状文の北陸への貫入は、出土する羊歯状文の形態から御経塚３式ではそれほど多くなく中屋１式から急速に始まるようである。

13　大きく直線的に外反する平縁浅鉢について

北陸の後期末から晩期中屋式まで系譜がたどれる浅鉢で北陸の晩期を代表する器種である。

井口式では、くの字に内側に折れる口縁に凹線文を持つ浅鉢であったが、八日市新保１式では端部が短くなり、沈線文へと変わる。また、口縁部をめぐる沈線の区切り手法も深鉢同様のものがみられる 267·268。口縁部の短くなる傾向ははますます強まり外側を向く面に２～３条の沈線、連結する三叉状文、粘土紐貼り付けなどによる加飾を行う 269·270·1341 ～ 1353。

浅鉢は、文様帯がしだいに口縁部上面へと移動していき中屋１式以降では、逆三角形状の平坦な形となる 1381 ～ 1386。また、御経塚１・２式では、内面に沈線を持つ 1361 ～ 1365。これは、深鉢や波状口縁浅鉢にみられる内面凹線施文と共通の手法である。口縁部文様は、連結三叉状文と粘土紐の張り付けが基本であるが、文様単位はしだいに短く複雑な構成となり、サンゴ状突起がつけられるものもある。中屋２式以降は減少する。

このほか口縁端部を丸くおさめる外反器形の鉢がある 277·900 ～ 919。御経塚・勝木原１式新・御経塚２式に位置づけられる浅鉢で、内面への加飾に特徴があり、玉抱き三叉文を施す 901 ～ 903·906·913、凹線を持つ 904·906·912·915、三叉文の 914·916 などがある。

900 は、口縁端部が内側に折り込まれ、端部に波状文、外面に連結三叉状文と瘤がつけられる。901 では、内面に交互に配置された短い玉抱き三叉文、口縁部には粘土紐の貼り付けと連結三叉状文がみられる。御経塚２式であろう。918 は、２連突起が付けられ頂部を刻むもので八日市新保２式。特に桜町遺跡では、八日市新保２～御経塚２式にかけての浅鉢の量が多い。

14　波状口縁浅鉢について

大きくゆるい山形の波状口縁で直線的に開き、口縁部でくびれ外反する 197 ～ 200、やや尖り気味で山形文を施す 630·632 と胴部で折れて立ち上がり頸部から外反するやや深い 201·202·638·639 がある。197·198 は 198 に１条の沈線が付加される以外に文様構成に違いがほとんどみられない連結した三叉状文である。器形をみるとくびれがやや強く、口縁端部がつまみ上げられる 198、くびれがゆるく端部が丸く仕上げられる 197 が両者の違いであろう。また、201 は口縁部文様は 197・198 と同様で胴部文様帯には上下から付けられた楔状の三叉状文がみられる。202 は口縁部が無いためはっきりしないが、胴部に楔状の三叉状文を持つ文様帯が２段あることから 201 と同様であろう。

199 は波頂部中央に連結する三叉状文、口縁部の沈線は２条の縦沈線で区切りブリッジを張り付け、上に楔状の三叉状文を施している。197 ～ 202 については八日市新保２式の新段階と考えている。200 は波頂下にブリッジが付く鉢である。胴部に２段の文様帯を持つ。波頂部には、フ状沈線に囲まれた玉抱き三叉文、ブリッジには端部を三叉状にした工字状文（上下からの楔状文の変形か）が、ブリッジ両側には、弧線文の中心に玉を抱かない短い三叉文が施されている。胴部沈線には、楔状（人字状）の寸断文が施される。このようないくつかの文様を組み合わせ施文する例は、浅鉢では 878·882（いずれもブリッジが付く、882 は中実）が八日市新保２c 式～御経塚・勝木原１a 式段階。八日市新保式文様と東日本的な三叉文様が同一器面に交雑する状態となっている。深鉢の棘状になる三叉状文は浅鉢の「工」字三叉状文の末端変化の使い分けと考えれば同時性を示している。また、抉りこむような連結三叉状文の 896 や連結三叉状文と三叉文を組み合わせた 898、連結三叉状文だけの 897 など浅鉢の中には深鉢の文様構成と同じものがあり、深鉢・浅鉢共通の文様の特徴となっている。

波状口縁浅鉢では、内面への加飾が増加する。この傾向は、外反する平縁浅鉢や深鉢の内面加飾と共通している。文様は外面に施文される連結三叉状文や玉抱き三叉文の 876·877・884・887 や凹線と三叉文や円文を施す 881 ～ 894 がある。御経塚・勝木原１式新段階から２式にかけてと考えておきたい。

御経塚２式の波状口縁浅鉢は少なく 223·224·930 の３例である。器形は胴下半から立ち、頸部から外反する 223·224 と丸みを帯びた胴部の 930 がある。波頂部は台形の 224·930 と小さな山形の 223

である。

223は胴部に弧腺文と三叉文を交互に配し内面に沈線、三叉文を持つ。224は波頂部に渦巻き文と三叉文、胴部は帯状列点文間に十字文と弧腺文を交互に配している。波頂間では文様が縦配置となり、内面には凹線が施される。930は三叉文から変化したT 状文を正逆に配置し工字文風にしている。この3例の浅鉢は、201→200などから系譜がたどられるもので、中屋式の有段鉢226·228や大型の1221·1222などに変化すると考えられる。また、大型の鉢では、波状口縁が残る。

15　平縁浅鉢について

碗状の形となるもの

八日市新保1・2式では半球状の器形の401、胴上部で内側に折れる400、口縁が内屈する417などの形がある。文様には綾杉文風の400·401、連結三叉文状の408·416、多条沈線をT字状の三叉状文で区切る411～415、楕円文を区切る417や楔状の三叉状文の473がある。

八日市新保2式から御経塚・勝木原1式のものでT字、楔状三叉状文は新しい要素。格子状、列点文を持つ例は1式から2古式。この浅鉢はしだいに重線化し、三叉（状）文の抉りが大きく深くなり玉を抱く692·697·699などの例がみられるようになる。文様帯は、口縁部に付く例がほとんどで胴部文様帯は持たないがまれに口縁部文様帯が2段となる例がある682。また、700などは橿原文様と比較されるタイプだが木の葉状のモチーフは刻みによる文様帯で上下2段に分けることはなく、時期差がみられることから直接関係しているかどうかは疑問である。この浅鉢類は、御経塚・勝木原1式に伴うと考えられる。

玉抱き三叉文・連結する三叉文を施す浅鉢

丸い球胴の浅鉢で玉抱き三叉文・連結玉抱き三叉文・連結三叉文を施す浅鉢で、口縁部から底部まで文様を施す205·206·208と口縁部と胴部2段に文様帯を持つ203·204·212、1段の210·213·216がある。

208は、2段の抉りこむような連結玉抱き三叉文状の文様を交互に配し、胴下半に6単位の円文を抉り出す。この玉は2重沈線で描かれ中心を凹めるもので、深鉢160と共通した手法である。重円を持つ玉抱き三叉文210·961·971·970は、御経塚1・2式を通して長く文様として使用される。205·209·210·961は弧状沈線を添わせるもので三叉文が連結する209・210とそうでない205·206がある。また、弧状沈線間に玉抱き三叉文を入れる211·956·964～967·970や三叉文や玉抱き三叉文を並行に施文する949·950·959·960·962·963などがある。964·967·970は同じ文様モチーフである。211·212は弧線文と玉抱き三叉文、217は弧線文と三叉文を組み合わせた文様を施文する例で船形となる。弧状沈線間に玉抱き三叉文を入れるものを含めて御経塚・勝木原1～2式。

玉抱き三叉文がなくなると渦巻状の入り組み文様924（玉を持つ渦巻きもある975·980）や、フ字状モチーフに三叉文を組み合わせた220·968·974·976などに変化する。

203·204は連結する三叉文で文様を構成する例で、口縁下に連結三叉文、下の弧線にはT字三叉文の変容と思われる棘状三叉文がみられ、下の帯状文は格子目文となる203。204は、口縁と

胴部の楕円文内に連結する長い三叉文と、短いリボン状の三叉文を施す。御経塚・勝木原１式。213･216は連結する三叉文が縦文様化して213では棘状に三叉文が付けられる。この土器の系統は、203などか、682･695などの多重沈線と三叉文を組み合わせるものか。深鉢では、213にみられる棘状三叉や弧線文と組み合わせる三叉文は、２式段階であり浅鉢も同様であろう。また、933･936･937･941など棘状三叉文、925･927･928･931･932などＴ字状文の浅鉢は、211･212に後続して出現する。

221･222は弧線と三叉文を組み合わせた文様を縦に配置するもので、211では文様の配置が不規則となっている。また御経塚・勝木原１・２式では、三叉文をフ字状沈線で囲む手法が多くみられ、文様の特徴の一つとなっている。

219は帯状のフ字状文を縦に２個つなげて並べる文様で単独の三叉文が施されている。この縄文帯文様は、注口土器や蓋などにみられることが多い。218も同様に向かい合うフ字状文の鉢でブリッジが付けられる。御経塚３式。

214･215･220は直線的に開く浅鉢で、沈線と列点文を組み合わせて文様を描く214･215、玉抱き三叉文状に描く220がある。215では、穿孔されており255のような蓋とも考えられたが、口端部に縄文が施されることから鉢とした。このほか920･922･923のような無文で口縁部に突起が付くものがあり、御経塚２式であろう。

938はあやくり文の浅鉢で御経塚３式。933･935は上下から連続して三叉文で刻み、波状文とするもので御経塚２・３式。

半円形で丸みを帯びた中屋式の浅鉢

入り組んだフ字状文・列点文・鍵の手文が施されるもので作りは丁寧である。1193･1195･1199･1200･1209などがそれにあたり中屋１式であろう。

抉るようなフ字状文・鍵の手文・Ｓ字状文などが施される1187･1189･1190･1194･1197･1198などで中屋２式にあたる。1191･1192のＳ字状文は、中屋２～３式にかけて。

231･1188･1201･1202･1207･1210など列点文、フ字状文、鉤状文をもつものは３式である。内外面を丁寧に磨き内面にサンゴ状突起がつけられる1211～1219や素文の229･234～237なども多くなり、大型の鉢で、口縁端部が四角くなり連結三叉状文・粘土紐を張りつけ加飾する279などの鉢は少なくなり３式ではほとんど無くなる。このほか1292～1307の大洞Ｃ１式の雲形文などを施した模倣品、搬入品が伴う。

227･232･233･1174～1186は列点文･鍵状文が施される短く折れるく字状口縁の鉢で中屋２・３式。

16　蓋について

255･1248はつまみの付かないもので、三叉状文で４分割し、３対の穴が穿たれる255、列点文が施される1248がある。いずれも御経塚２式段階。

256･1240～1243･1247は御経塚２・３式に伴うもので帯文様でひし形や方形文で加飾する256･1240･1241、鋸歯文の1243、Ｔ字状文の1242･1247などがある。

中屋式では、丸みを帯びて広がる263と直線的に開く260があり、鍵手文261・1265・1260・1267、S字状文257、フ字状入り組み文258・260・264・266・1258・1257、列点文263・265・1270・1251・1256、羊歯状文259・1271・1272が施される。羊歯状文の蓋では、御経塚式に伴うものはよくわからない。

17　晩期後半の土器について

大洞C２式からA’式までの土器が見られるが出土量はそれほど多くない。

下野式には1469～1472・1479～1486・1489・1491～1495・1502～1505・1507がある。ほとんどが深鉢で壺1507が１例ある。縦条痕1469・1495や沈線文1492・列点文1485・1494・列点とS字状文の1502などがほとんどでありおおむね下野１式である。また、1471・1475・1469・1478・1488・1499などの細かい条痕を施す例がありこの時期にはあまりみられない。

1459・1463・1465は東海系の壺で1459は五貫森式段階、あとの２点は指頭沈線を施す例でやや新しいもの。

大洞A式併行期（下野２・長竹式）の鉢（1456）・浅鉢（1458）・壺（1461・1468）である。

このほか口縁がゆるく内屈する条痕の深鉢1476・1477・1490・1506などが同時期であろう。1462は、浮線渦巻き文系の壺胴部で方形の沈線文が施される。

1460は工字文系文様の浅鉢。1466は指頭沈線を施す口縁部片で器種は不明である。1467は粗い矢羽状の条痕が施される深鉢口縁部で、胎土は赤褐色の色調で飛騨系の条痕文土器と考えられる。この他に、網目状浮線文土器1507（氷１式）が１例ある。

18　編年的位置づけ

後期末から晩期にかけては、八日市新保式文様・三叉文様をもつ土器が混在するようである。北陸の三叉状連結文と東北の三叉文を直接つなぐ例はないが、八日市新保２式のある段階になると三叉文が流入し始めているようである。この段階は、おそらく２式の早い段階で、波頂部の山・工・出字状文の末端につけられる三叉状文が抉るあるいはなでるように三叉状文を描くようになる時期であろう。

次に、三叉状文の末端が棘のように伸びたり、中間に棘状三叉文が施されたりする。この段階で、台形波状がはっきりとした形となる。

次は、棘を持つ三叉状文（153・547）、三叉文に重円文が加えられた文様（154・485）となっている。また、胴部は連結する三叉文となるものが見られる（154・155）。また、内面への加飾は未発達である。波頂部の棘状の三叉状文は、瘤付土器最終段階から晩期とされる土器の口縁部文様帯にみられる波頂や波頂間の弧線文の中間にある三叉文を意識した施文方法とも見ることができる。155では、波頂部の山状三叉文のあり方が瘤付土器に見られるものと同形である。

この段階で玉抱き三叉文風となるものは、157・162・浅鉢があり、瘤状の玉が施されている。153・157は、内面の波頂部分を山状に作る手法が同じとし同時期とした。この段階では、勝木原遺跡などの典型的な玉抱き三叉文は入らないようで、八日市新保式の要素が強く残されている。この

様相は、北陸西部の特長であろうか。この段階から御経塚・勝木原１式の始まりと考えたい。

次の段階は、三叉文・連結三叉文・玉抱き三叉文が主文様として使われ、波頂部に大きな三叉文をもつ深鉢が成立する。いわゆる御経塚式成立の前段階である。八日市新保式の要素は残るが、次第に形骸化する。波状口縁は、大きな台形となり、玉抱き三叉文や三叉文が施される。口縁端部に縄文帯がはっきりとみられるようになるもの、大きな三叉文をもつ波状口縁上部を平らにつぶすものが目立つのもこの段階である。

深鉢は、口縁部文様帯の下に無文帯がめぐり、胴部は玉抱き三叉文があらわれる。胴下半は無文か縄文となり、条痕は少なくなる。

また・三叉文に弧線を沿わせることから変化した三叉文を囲むフ状沈線文がみられる(159･161･200)。160は、重円となる玉抱き三叉状文がみられるが棘状三叉文を持たず新しい要素である。同様の文様を施す鉢208がある。短単位の三叉文と連結する三叉文・玉抱き三叉文が同時にみられることも特徴である。

御経塚２式古段階では、波頂部にみられた三叉文が巻き込むように変化し始めている。波頂部は、中央がくぼみ双頭なるものと丸く突起状になるものとなり、内面には凹線と三叉文を施す例が多くみられる。また、フ状沈線を組み合わせた三叉文が文様として多く使われることも特徴となっている。158は、巻き込むような三叉文とフ状沈線、Ｔ字状三叉文を組み合わせた文様構成で、列点を施している。地文の縄文と列点文帯は未発達となっている。また、胴部には連結する玉抱き三叉文が施される。また、胴部破片では玉抱き三叉文を残す156などがあることからこの段階までみられるようである。大きな三叉文を波頂部に持つ深鉢も同様に組み合った配置の三叉文がみられる739･742などに変化する。このほかに平縁深鉢で、164のような三叉文と弧線を組み合わせたものや163のようなさざなみ波状のものなどが１式後半から２式にみられる。284･285･295のような、無文で磨き仕上げ・ヘラケズリ調整の波状深鉢が多くなるのも２式の特徴である。780･781のような巴文風になる入り組み文や994状の重円になる胴部文様は、御経塚式の特徴とされる文様だが、桜町遺跡ではよい例がなく比較できないが２式段階であろう。

御経塚２式新段階になると玉抱き三叉文がなくなり新たに三叉文と弧線文を組み合わせた167･170･792などが新たに加わる。158などの流れをくむ173では、縄文帯や列点文帯が成立している。浅鉢では、１式段階ですでにＴ字三叉文や玉抱き三叉文と弧線文を組み合わせた文様がみられるが、深鉢ではやや遅れて取り入れられるのであろうか。また、御経塚式の胴部の縦文様づかいや鶏頭状文様795が始まるのもこの段階であろう。胴部の三叉文は、Ｔ字状三叉文以外は文様間にみられる小さな抉るような三叉文となりこれまでの三叉文は使われなくなる。また、Ｔ字状三叉文を連続させた「工」字状文やクランク状の帯入り組み文が多くみられるようになるのも２から３式にかけてである。

御経塚３式では、これまでの文様に加えて168･172などにみられる文様間に小さな三叉文を施すあやくり文が表れる。また、口縁はしだいに平縁化し、内面への加飾が少なくなり、波状口縁は突起として残るものが多くなる。御経塚遺跡「高堀1983」(P116-2) では、縦のあやくり文とフ字状

入り組み文が同一固体に施される例がみられ、胴部のフ字状入り組み文には、小さな三叉文が施されている。また、フ字状入り組み文の口縁部文様帯が成立したのは大洞B－C式段階と考えられ、御経塚式から中屋式への過渡的な様相を示している。このほかあやくり文を口縁部文様帯に施す例は、氷見市朝日水源地遺跡、フ字状入り組み文例が富山市布尻遺跡にあり、いずれも三叉文を伴っている。

中屋1式になると小さな三叉文はなくなり、フ字状入り組み文・あやくり文・未発達なあやくり帯縄文・鍵状入り組み文が主文様となる。また、口縁部文様帯は2式段階でなくなる。口縁部に刻みを入れるものがあれわれるが、外面端部へのきざみが一般的であるがしだいに口縁頂部へ施すようになり内面にハ字状に開くものがみられるようになる。

羊歯状文については、在地的な変化が激しく対比することは難しいが184·185·1086·1089などが伴うのか。また、182·187·1095のような口縁部文様帯を持つものも同様であろうか。羊歯状文については、列点化したものを含めて中屋1式から2式の幅を持たせておきたい。

中屋2式では、列点文とフ状の入り組み文（組み手文）、あやくり帯縄文、鍵手を文組み合わせた文様が主文様となる。く字口縁深鉢は最大径が胴上部になり、フ状入り組み文では幅広く抉るように描き出す例が多くなる。羊歯状文深鉢は、183·1098のような列点文となり存在するようである。

中屋3式では、深鉢の口縁端部がしだいに短くなり、立ぎみになり始め、比厚する例がみられるようになる。また、押し引きや刺突による列点文が多用される。胴部文様は、フ状入り組み文・S状文・鍵の手文などに加えてフック状の鈎の手文がみられるようになる。特に浅鉢・壺などでは、大洞式系の雲形文を模倣した文様が目立つようである。また、有文系の深鉢、浅鉢のなどでは、胴下半部に条痕を施したものが増え始める。中屋2式以降では、小型の鉢、壺が増加し、丹念に磨かれ、仕上げる例が多い。

条痕の深鉢は、ほとんど斜行条痕となり直線的に開く223や緩く立ぎみにすぼまる294、くの字状に折れる296～298などがある。両者ともに口縁部を上部から押圧し小波状とする1409～1416や1440～1449、端部を刻む1449～1452などがある。平縁のものでは端部を平らにする1421·1422·1424、内面を強く押えて外につまみ出す1425～1427、内屈する深鉢には1428～1439があり、端部を尖らせる1429·1433·1435、丸く納める1437～1439ものなどの種類がみられる。平縁の深鉢には、御経塚3式・下野式を含むと考えられる。　1417·1420·1423は口縁部を外面から中へ押えるもので、内面に凹線を持つ1423は御経塚2式、1417·1420も同様か。

19　搬入品・模倣品と考えられる土器について

大洞式系の土器を除くと8点みられる。1273·1274は、貼り付け隆帯を持つ波状深鉢で、縦に2条の隆帯を貼り付け円形刺突と列点を施す1273と頸部に張りつける1274がある。貼り付け隆帯の類例としては、御経塚遺跡に井口式段階のものがみられる。八日市新保式に伴うと考えられ、東海系の土器か。1275は、内外面が磨き仕上げされた土器で、胎土は黄茶褐色である。「入」字状の突起が付くが一部欠損している（岡田憲一氏から滋賀里2式段階で胎土は近畿のものではないとの御

教示を受けた)。

瘤付土器は、４点３個体が出土している。いずれも瘤付土器３～４段階とされるものである。八日市新保２式に伴うと考えられる。いずれの土器も共伴関係は不明である。瘤付土器後半のものは北陸東部（境Ａ遺跡など）では一定量（新潟系を含む）が確認されたが北陸西部での出土例は少なく、１遺跡で２・３点であろう。

20　まとめ

桜町遺跡出土の土器群について、これまでの編年を基に考えてみた。その結果、八日市新保２式をａ・ｂ・ｃの３段階、御経塚・勝木原１式をａ・ｂの２段階、２式をａ・ｂ・ｃの３ 段階にそれぞれ細分した。また、御経塚３式・中屋１式を大洞Ｂ-Ｃ式古・新式並行期に、中屋２・３式を大洞Ｃ１式 古・新式並行期とした。

八日市新保式は、端部が三叉状にならない連結する「Ｈ」字状のものを２ａ式、連結文の端部が三叉状となり「一文字・山」字状となるが両側から三叉文風に対峙しないものなどを２ｂ式、連結三叉文の端部が棘状となったり、三叉文となったもの、瘤を玉抱き三叉文風にしたものなどを２ｃ式とした。 この変化は、八日市新保式の２ｂ段階で三叉文を意識し始め、連結する区切り文に三叉文が取り入れられた段階を想定してその変化を考えている。また、三叉文・棘状三叉文・玉抱き三叉文が全て同時に貫入して使用されるのではなく時間差を持っていると考えられたからである。棘状三叉文については、前にもふれたが、東北の晩期初頭とされる土器例の口縁部文様態に棘状の三叉文があり、位置や形が良く似ており、あるいはこの文様を意識している可能性がある。

玉抱き三叉文については、瘤の上に円形刺突を施し、三叉状文がめぐるタイプ(157･162･200･207･880･900）が古く、重円（160･208･485）となるものが出現し、いわゆる玉抱き三叉文に変化すると考えた。この変化は、浅鉢・深鉢に同じようにみられる。

西野が指摘した台形波状については、八日市新保２ｂ式段階から顕著となり初め、２ｃ式段階から波頂部や内面への加飾性が増し、御経塚２式まで続く。

御経塚・勝木原１ａ式では、八日市新保式の文様は残るがしだいに半肉彫状の三叉文系文様に変化する。また、大きな半肉彫状の三叉文をもつ波状口縁深鉢が土器組成に組み入れられるのもこのころからであろうか。八日市新保式から御経塚式への転換期である。波頂部には、八日市新保式文様と次期を飾る三叉文様が同列に加飾される 485 などがみられるのもこの段階であろう。浅鉢をみると半肉彫状の連結する三叉状文に重円の玉を抱く 208、連結はしないが重円の両側に半肉彫状の三叉文を配する 699 などは、同じ手法である。

御経塚・勝木原１ｂ式では、玉抱き三叉文・三叉文・在地的な連結三叉文と弧線状の沈線を組み合わせた文様となる。三叉文は連結しないものと連結するものがみられ、小さく抉るように表現される。中心の玉は前者と同様に２種類ある。また、弧線文から変化したフ字状の沈線が現れ、２b 式まで続く。

御経塚２ａ式では、三叉文はしだいに端部が巻き込むようになり、抉るような三叉文は少なくな

るが、玉抱き三叉文や連結する三叉文が引き続き使用される。また内面への凹線や三叉文よる加飾が盛んとなる。弧線文と三叉文を組み合わせた211･212などの鉢が現れる。ひだ状の口縁を持つ深鉢は２式に最も盛んに使用される。また、無文の深鉢がみられるようになるのも特徴的である。

御経塚２ｂ式では、従来の御経塚式にみられる入り組み文、鍵状入り組み文、小さな三叉文、Ｔ字三叉から変化した棘状文などや縦文様帯（浅鉢）が出現する。また、重円になる玉をもつ三叉状入り組み文など多種類の文様がみられる。

御経塚２ｃ式では、渦巻状の入り組み文は少なくなり、Ｔ字状三叉文と弧線文を主文様とした文様構成に変わる。深鉢では内面への加飾は引き続き行われれるが、簡素となる。また、良い例は示せないがＴ字三叉状文と弧線文を組み合わせた鶏頭状文様や縦文様構成が胴部にみられるのもこの時期からであろう。晩期に入っても引き継がれた八日市新保式文様などはなくなる。大洞Ｂ式新段階と考える。また、素文の深鉢は、ナデ仕上げか斜行条痕施文となる。

御経塚３式では、これまでの凹線などによる内面加飾がなくなり、三叉文をもつあやくり文や縄文帯で区画され出現する。フ字状の入り組み文もあると考えられるが良い例はない。また、大洞Ｂ-Ｃ式古段階の羊歯状文が伴うと考えられる。

中屋１式では、フ字状入り組み文・あやくり文・鍵状入り組み文などが主文様となる。文様（入り組み弧線文）に添えられた小さな三叉文はなくなり、大洞Ｂ-Ｃ式の影響をうけて口縁部文様帯が作られる。また、羊歯状文が胴部に下りみられるのはこの時期である。

中屋２式では、あやくり帯縄文・フ字状入り組み文・鍵状入り組み文・Ｓ字状文などが主文様となる。また、羊歯状文は列点化する。県東部では、胴部文様が多段化する例がみられるが西部では少ない。

中屋３式では、主文様はあやくり文を除き２式と変わらないが、く字深鉢は口縁が立ち始め、しだいに短くなり胴部の膨らみが緩くなる。２式同様大洞Ｃ１式の雲形文をもつ鉢・壺などが器種に加わる。フック状の鈎状文や列点文を多段化した文様がみられるようになるのもこの時期である。中屋２・３式は、大洞Ｃ１式段階と考える。

21　おわりに

桜町遺跡の後期末から晩期の土器は北陸東部の土器とはかなりの違いがみられる。これまで、勝木原式土器は北陸東部を代表するものと思い込んでいたが、立地からみても北陸西部に位置し様相もまた同様であることに桜町遺跡の整理を通じて気がついた。また、石川県下を始めとして西日本の影響下に生まれた八日市新保式の影響は強く晩期にまで残り、その後に成立する御経塚式では瘤付土器・大洞式系文様を受容し、御経塚式・中屋式を生み出し北陸東部にも浸透させている。

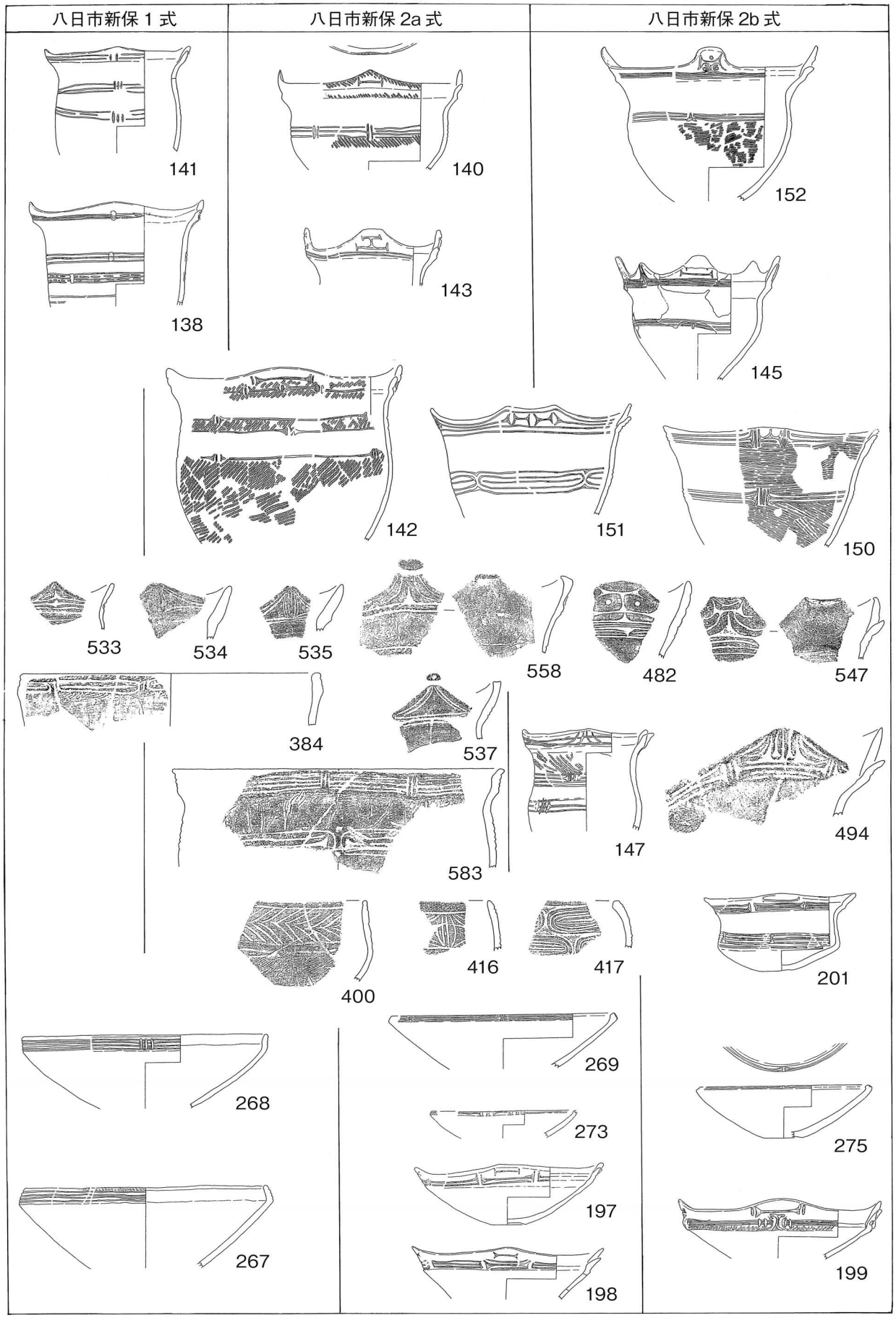
八日市新保式から御経塚式への変化の中で大きな手がかりとなったのが、波頂部に大きな三叉文をもつ深鉢である。この三叉文（深鉢）を受け入れる中で御経塚式が成立して行く過程がはっきりとしたのではないかと考える。また、口縁部をヒダ状にする深鉢の存在を明らかにすることができた。この土器は、10数年前に富山県南砺市（旧福光町）梅原落戸遺跡出土品にヒダ口縁と波頂部

に大きな三叉文をもつ土器があり注意したのが始めであったが、ようやくその正体を知ることができた。また、北陸西部と東部では土器や主文様などに違いがあることを改めて感じている。

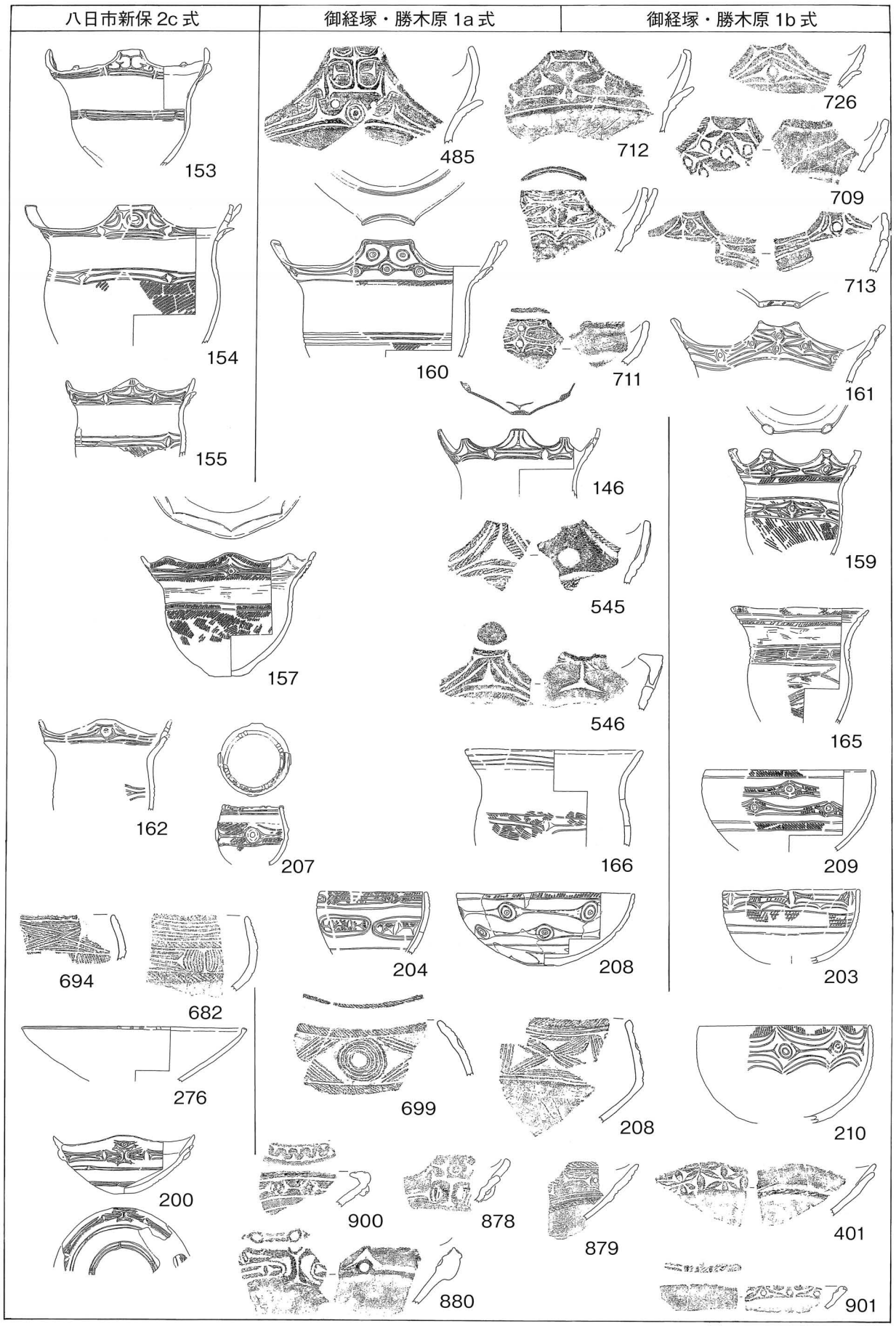
引用・参考文献

赤沢徳明ほか 1999『下糸生脇遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
安孫子昭二 1980『瘤付土器様式から亀ヶ岡様式への変遷過程』考古風土記第 5 号
宇奈月町教育委員会 2001『風野遺跡』
大沢野町教育委員会 1977『富山県大沢野町布尻遺跡』
御経塚遺跡出土土器検討会事務局編 2006『御経塚遺跡出土土器検討会資料』
倉田一郎 1930「越中国高岡に於ける石器時代遺跡」『人類学雑誌』第 45 巻第 5 号
小島俊彰 1979「本江遺跡」『滑川市史　考古資料編』滑川市史編纂委員会
小島俊彰 1981「井口式土器」『縄文文化の研究 4』有山閣
小島俊彰 2001「倉田一郎そして昭和 5 年」『大境』第 22 号　富山考古学会
小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994「北陸の土器編年」『縄文晩期前葉－中葉の広域編年』
小林圭一 1999「東北地方　後期（瘤付土器）」『縄文時代』第 10 号　縄文時代研究会
小林圭一 2004・05「岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡出土の晩期縄文土器（前編）（後編）」『研究紀要』第 2 号・第 3 号　財団法人山形県埋蔵文化財センター
小林圭一 2006「山形県天童市宮田遺跡から採集された縄文時代晩期前葉の注口土器」『研究紀要』第 4 号　財団法人山形県埋蔵文化財センター
（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　勅使塚・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告書』
酒井重洋 1976「富山県眼目新丸山Ａ遺跡」『大境』第 6 号　富山考古学会
酒井重洋 1986「井口村井口遺跡出土の縄文晩期土器」『大境』第 10 号　富山考古学会
酒井重洋 2000「富山市長岡針原遺跡（八町遺跡）出土の遺物」『大境』20·21 号　富山考古学会
縄文セミナーの会 1992『第 5 回 縄文セミナー縄文時代晩期の諸問題』
縄文セミナーの会 2004『第 17 回縄文セミナー晩期中葉の再検討』
鈴木克彦 1980「亀ヶ岡式土器の羊歯状文に関する考察」『考古風土記』第 5 号
高橋龍三郎 1999「東北地方　晩期（亀ヶ岡土器）」『縄文時代』第 10 号　縄文時代研究会
高堀勝喜 1964「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『押野村史』
高堀勝喜 1965「縄文文化の発展と地域性－北陸－」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社
高堀勝喜ほか 1983『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
高堀勝喜ほか 1986『真脇遺跡』能都町教育委員会
高堀勝喜・西野秀和 1983『上田うまばち遺跡』押水町教育委員会
津幡町教育委員会 2002『北中条遺跡Ａ区』
出崎正子 1967「北陸地方の縄文晩期についてⅠ」『大境』3 号　富山考古学会
戸田哲也 1982「飛騨における晩期縄文土器の様相」『信濃』第 34 巻 4 号
富山県教育委員会 1991『北陸自動車道遺跡調査報告書 - 朝日町編 6 －』「境Ａ遺跡土器編」
富山県教育委員会 1992『北陸自動車道遺跡調査報告書 - 朝日町編 7 －』「境Ａ遺跡総括編」
富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブ 1967『勝木原遺跡Ⅰ』
富山市教育委員会 2003『富山市岩瀬天神遺跡発掘調査報告書』
中島俊一・湯尻修平 1977『松任市長竹遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会
永峯光一 1967『佐野遺跡』長野考古学会
永峯光一 1967「氷遺跡とその研究」『石器時代』9 号
永峯光一編著 1998『氷遺跡発掘調査資料図譜』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
奈良県立橿原考古学研究所編 2005『橿原遺跡出土土器検討会資料』
西田郁乃ほか 2006『加賀市小杉遺跡』石川県教育委員会
西野秀和ほか 1985『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

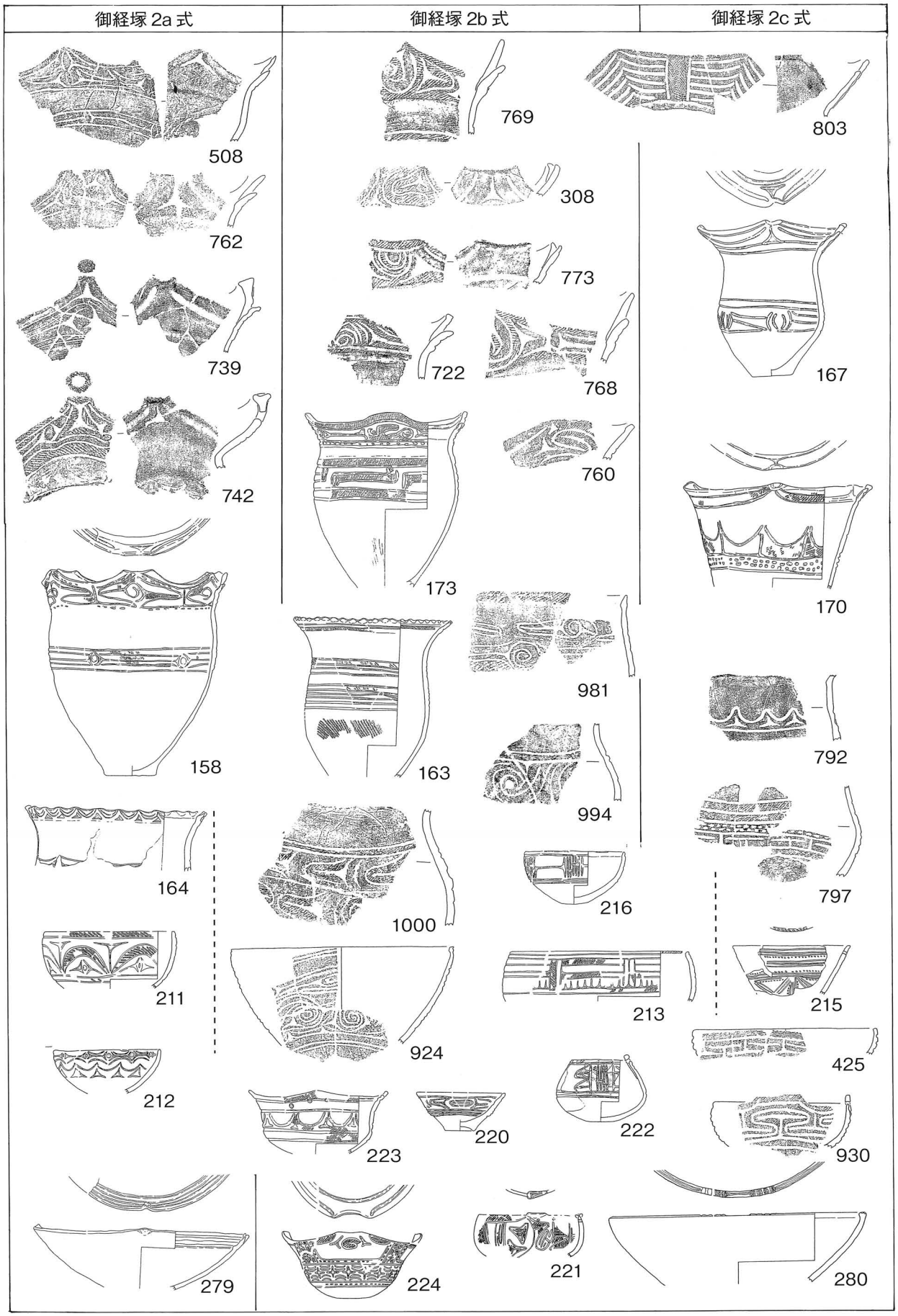
西野秀和ほか 1989『米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
西野秀和 2003「八日市新保式土器再考」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
入善町史編纂室 1986「坪野遺跡」『入善町史　資料編 1- 自然・考古 -』
布尾和史ほか 2002『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅳ・Ⅴ縄文時代編』石川県教育委員会
沼田啓太郎 1956「旧石川郡安原村中屋遺跡調査報告」『石川考古学研究会会誌』第 8 号
氷見市史編纂委員会 2014「四十塚遺跡」「朝日水源地遺跡」『氷見市史 7 資料編 5』氷見市
福光町教育委員会 1992『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ』
福光町教育委員会 1994『梅原出村遺跡群Ⅱ・梅原上村遺跡群Ⅱ・梅原落戸遺跡群Ⅰ』
藤田富士夫 1973『富山市杉谷（61・81・64 番）遺跡」富山市教育委員会
古川知明 2005「湊晨先生と岩瀬天神遺跡」『大境　第 25 号』富山考古学会
増子康眞 1988「東海からみた北陸における弥生土器成立の過程」『大境』第 12 号　富山考古学会
湊晨 1972『富山県史－考古資料編－』
南久和ほか 1986『新保本町チカモリ遺跡－土器編－』金沢市教育委員会
南久和ほか 1992『金沢市中屋サワ遺跡』金沢市教育委員会
南久和 1989「北陸晩期土器様式」『縄文大観』小学館
南久和 2001『編年－その方法と実際－』南書会
宮田明 1995「富山市岩瀬天神遺跡出土の縄文土器について」『富山市考古資料館紀要』第 14 号
山内清男 1964「縄文土器総論」『日本原始美術 1』講談社
山本孝一ほか 2004『四方谷岩伏遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
山本直人 1986『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
吉岡康暢 1971「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第 56 巻第 4 号
吉田淳 1982『御経塚遺跡Ⅱ』野々市町教育委員会
吉田淳ほか 2003「第一部　考古　第一章　縄文時代」『野々市町史　資料編 1』野々市町
米沢義光 1982『金沢市犀川遺跡鉄橋遺跡第 1・2 次発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター
米沢義光ほか 1989『犀川鉄橋遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター



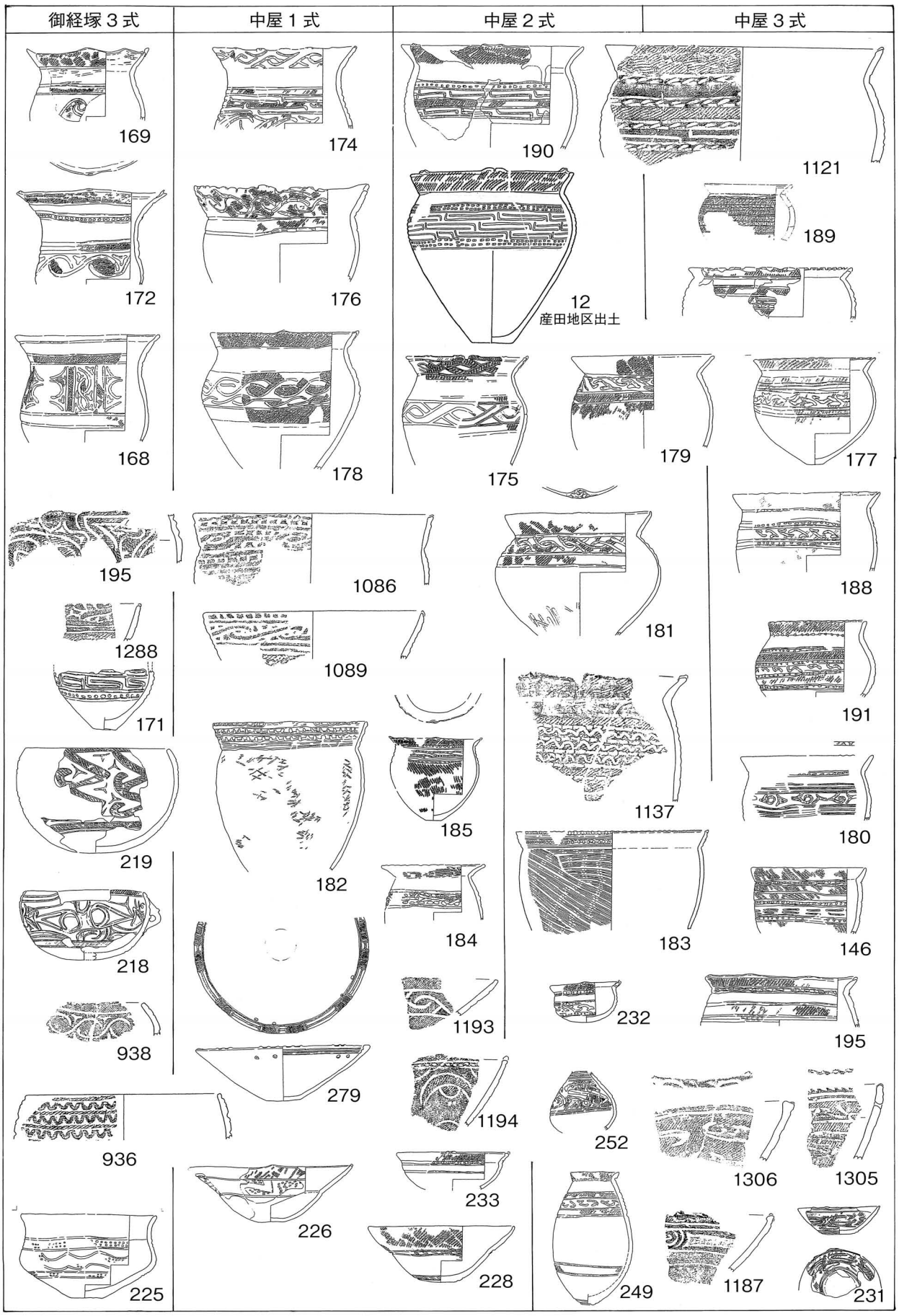
第1図　桜町遺跡出土土器の変遷図1　（S＝1/8）



第2図　桜町遺跡出土土器の変遷図2　（S＝1/8）



第3図　桜町遺跡出土土器の変遷図3　（S＝1/8）



第4図　桜町遺跡出土土器の変遷図4　（S＝1/8）

4　桜町遺跡の石器・石製品の様相について

山本　正敏
(財)富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所)

桜町遺跡出土の縄文時代中期から晩期にかけての石器類の概要については、すでに2冊の報告書でまとめられているとおりである。これに加え、桜町遺跡の石器に見られるいくつかの特徴について若干の考察を行って石器のまとめとしたい。

(1)　磨製石斧について

はじめに

桜町遺跡から出土した各種の遺物のうち、この遺跡の歴史的価値を高めたのが様々な木製建築部材であることは、衆目の一致するところであろう。そして建築部材の伐採から加工にいたるまでには、各種の磨製石斧が最も重要な道具として使用された。もちろん木材の分割に木製の楔を用いたり、部材の細部加工や仕上げ加工にスクレーパー類や剥片、時には砥石なども使ったりした可能性があるが、作業の主役を務めたのが、様々な形態・大きさの磨製石斧であることは言をまたないであろう。以下桜町遺跡の磨製石斧の様相についてその特徴をまとめておく。

石器組成に占める割合

工具としての磨製石斧は、生業活動すなわち食料獲得や広義の食料生産と直接結び付かない性質の道具である。そのため一集落から出土する石器総数の中に占める磨製石斧の割合というものは、本来的に大きく変わるものではないと考えられる。もし変動の要素があるとすれば、磨製石斧に用いる石材の種類による破損率の差と、生産地からの距離に概ね比例する完成品の入手機会頻度の差によるものであろう。

桜町遺跡から出土した石器総数2,959点に対して磨製石斧は303点であり、その占める割合は10.2%となる。全国的な比較は行っていないが、この組成率はかなり高いものとみられる。縄文時代前期以降、北陸地方の集落遺跡では一般的にみて、磨製石斧の組成率が高い傾向にあると考えられるが、さらに細かく地域ごとに比較してみると、富山県内では平均15%以上の組成率を示し、20%を超えることも多い。

一方、新潟県や石川県では一部で20%を超える遺跡もあるが、平均5%前後であり、福井県では5%以下がほとんどである。このことは、蛇紋岩製磨製石斧の大量生産地に近いという地域的な特性を示すものであろう。すなわち富山県内では磨製石斧の流通量が多く、入手機会が豊富であったことを示している〔山本1989〕。

その中でも桜町遺跡の10%程の組成率というのは、富山県内でもやや低く、蛇紋岩製磨製石斧の生産地から比較的遠隔地にあるという地理的位置に見合う数値であろう。ただ南方10.4キロメートルにある後期初頭の単純遺跡である南砺市(旧福野町)安居五百歩遺跡では約20%であり〔福野町教委1990〕、これと比べるとやや低い。なお石器組成全体の特徴については別に後述する。

形態的特徴

桜町遺跡から出土した磨製石斧は、石材の如何にかかわらずほとんど全てが定角式のものである。北陸地方の縄文時代の磨製石斧は、早期後葉から前期にかけての時期は側面がやや丸味を帯びた偏平な定角式に近い形態が主流をなし、これに乳棒状のものが加わる〔山本2005〕〔石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター2004〕（註1）。中期から晩期までは各時期を通じて、定角式がほとんどを占めており、伐採具に乳棒状磨製石斧を多用する太平洋側とは対照的である。桜町遺跡の磨製石斧の形態は北陸地方においてごく一般的なものということができる。

なお定角式の磨製石斧であっても、前期から晩期にかけて形態的な変化を生じている。磨製石斧を平面形態からみれば、中期前葉から後葉にかけては短冊型を呈するものが基本であり、後期以降は徐々に基部がすぼまり、側縁が二等辺三角形状に開く形態へと変化する。桜町遺跡の磨製石斧もこれら両者及びその中間的なものなどがあり、変化に富んでいる。これは中期から晩期にかけてほぼ継続的に営まれた桜町遺跡の特徴とも一致する（第1図）。

使用石材

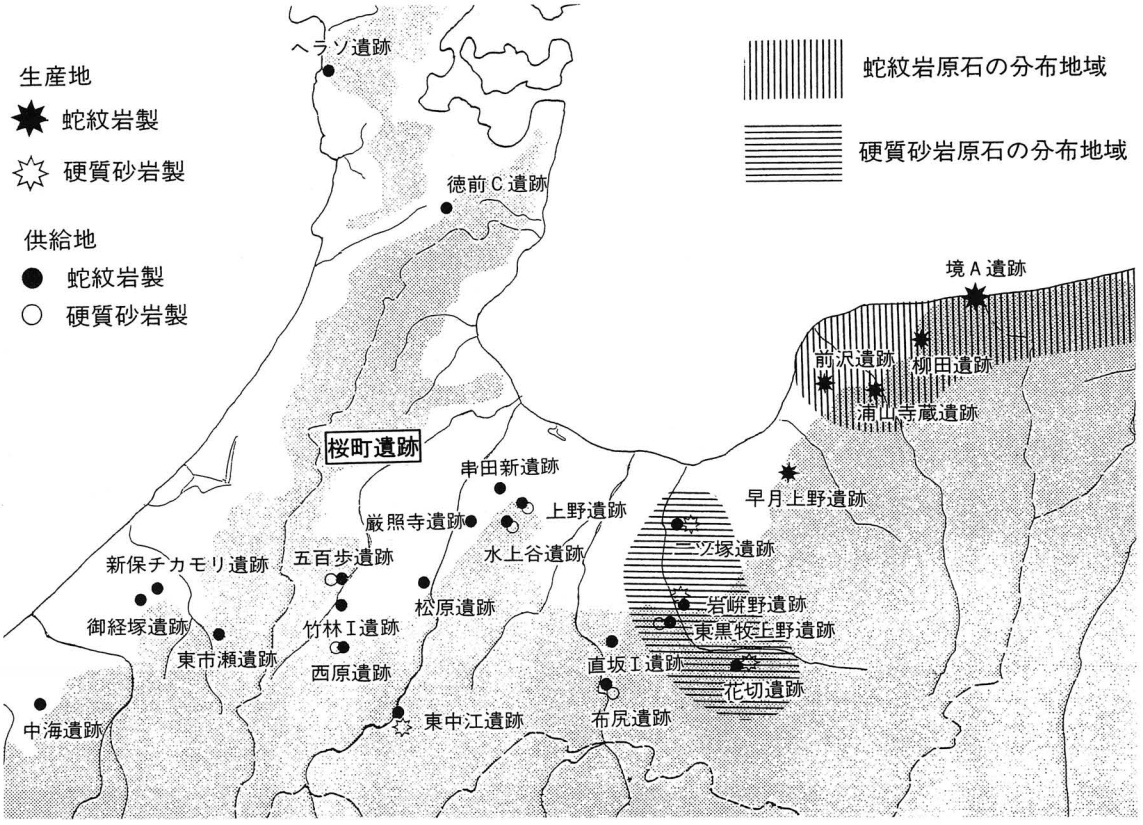
桜町遺跡から出土した磨製石斧の石材については、石材構成表のとおり、全地区を合わせると蛇紋岩系が181点（59.7%）、安山岩系が54点（17.8%）、頁岩系14点（4.6%）、流紋岩系13点（4.3%）などとなり、蛇紋岩系が6割を占める。その他の石材では安山岩系が2割近くを占め、他に頁岩系や流紋岩系がやや目立つ程度である（註2）。

次にこれを、県道東側平野部の「中出地区」（中期前葉～末葉が主体）、谷口付近の「舟岡中期地区」（中期後葉～後期初頭の舟岡第1・第6調査区など）、谷奥の「舟岡晩期地区」（後期後葉～晩期後葉の舟岡第3・第4調査区など）に大きく地区割りして傾向をみてみる（註3）。安山岩系・頁岩系・流紋岩系などでは地区ごとに若干のばらつきがみられるが、蛇紋岩は各地区とも60%前後を占めており、時期ごとの大きな変動は認められない（第1表）。桜町遺跡では中期から晩期まで各時期を通じて蛇紋岩製磨製石

第1図　様々な形態の磨製石器

第１表　桜町遺跡出土磨製石斧の石材構成表

石　材	全体合計	比率	中出地区	比率	舟岡中期	比率	舟岡後晩	比率
蛇紋岩	181	59.7%	29	64.4%	64	60.4%	85	60.7%
安山岩系	54	17.8%	4	8.9%	19	17.9%	31	22.1%
頁岩系	14	4.6%	0	0.0%	4	3.8%	10	7.1%
流紋岩系	13	4.3%	3	6.7%	2	1.9%	6	4.3%
千枚岩系	6	2.0%	4	8.9%	1	0.9%	1	0.7%
凝灰岩系	6	2.0%	1	2.2%	2	1.9%	2	1.4%
砂岩系	5	1.7%	0	0.0%	4	3.8%	0	0.0%
変輝緑岩	5	1.7%	0	0.0%	5	4.7%	0	0.0%
ドレライト	4	1.3%	1	2.2%	0	0.0%	2	1.4%
菫青石フォルンフェルス	2	0.7%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.4%
曹長岩	2	0.7%	0	0.0%	2	1.9%	0	0.0%
石英斑岩	1	0.3%	0	0.0%	1	0.9%	0	0.0%
デイサイト	1	0.3%	0	0.0%	1	0.9%	0	0.0%
ひすい	1	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.7%
緑泥片岩（軟玉）	1	0.3%	1	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
変はんれい岩	1	0.3%	1	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
滑石	1	0.3%	1	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
不明	5	1.7%	0	0.0%	1	0.9%	0	0.0%
	303		45		106		140	



第２図　磨製石斧の生産地・供給地［富山県埋蔵文化財センター1992による］

斧を安定的に入手していたことがわかる。

参考までに後期初頭の南砺市安居五百歩遺跡における磨製石斧の石材をみると、全37点の内、蛇紋岩製が23点(62%)、凝灰岩・砂岩系が11点(30%)、その他不明3点(8%)となる。あきらかに蛇紋岩製が優勢であり、この割合は桜町遺跡と類似する〔福野町教委1990〕。ちなみにさらに西方の石川県御経塚遺跡(縄文後・晩期)では蛇紋岩製の磨製石斧は35%程度である。占有率が低くなり、他の石材が優勢になる〔野々市町教委1983〕。蛇紋岩製磨製石斧の生産地からの隔たりを如実に表している。

桜町遺跡では、斧として機能性や耐久性に優れ、美麗さを兼ね備え、入手機会に比較的恵まれた蛇紋岩製磨製石斧を多用し、様々な建築部材等を製作していたものと考えられる。

磨製石斧の生産地

蛇紋岩製磨製石斧の大量生産遺跡である朝日町境A遺跡での資料分析及び考察〔山本1990及び山本1991〕の中で、磨製石斧製作には豊富な原材料(原石)、豊富で効率的な石製工具類(敲石・砥石・台石など)、蓄積された技術力(技術伝統)が必要であることを述べたが、基本的な考えは今も変わらない。

縄文時代中期以降、特定の地域で特定の石材を用いた磨製石斧の大量生産が行なわれ、その製品が広範囲に分布することが知られている〔富山県埋蔵文化財センター1992〕(第2図)。例えば富山県東部の魚津市周辺以東から新潟県頸城地方の糸魚川付近までの地域は定角式の蛇紋岩製磨製石斧の一大生産地域となっている〔富山県教委1973、同1974、同1977、黒部市教委1975など〕。

また常願寺川中・下流域では灰緑色の硬砂岩製磨製石斧の生産地域となっている〔富山県教委1976、大山町教委1988など〕。これらの地域の縄文時代中期〜晩期の集落遺跡では磨製石斧の原石や未完成品、石製工具類が相当量出土するのが通例となっており、自家消費量を超える磨製石斧の生産が顕著に認められる。

生活に必要な磨製石斧を自集落内で製作したとすれば、石器組成の中に製作途中の破損品を中心とする未完成品や原石、剥片類、石製工具類(敲石・砥石・台石等)が相当量含まれるはずである。そのような観点から桜町遺跡の石器組成をみると、磨製石斧の未完成品がほとんどなく、さらに石製工具類の組成量が特別多いということもないので、この遺跡では磨製石斧の製作をほとんどしていないと結論づけることができる。すなわち、木材加工に必要な磨製石斧については、完成品として流通している製品にほとんど頼っている状態である。その多くは富山県東部地域の蛇紋岩製磨製石斧であり、これに常願寺川流域の硬砂岩製磨製石斧やその他の産地のものが混ざっているものと考えられる。

以上のようなあり方は生産地を離れた遺跡ではごく一般的である。個々の磨製石斧の生産地を確定させる作業は大量生産遺跡の確認と科学的な石材同定作業が必要となるが、この分野での研究はまだ不十分である。

(2) 石刀の製作について

はじめに

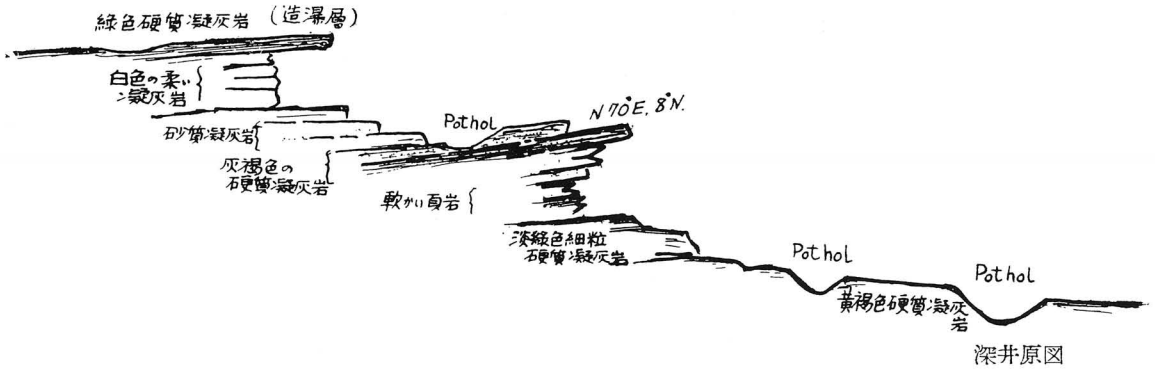
舟岡地区の第3調査区では環状木柱列が発見され、周辺からは縄文時代後期末葉から晩期中葉までの良好な土器資料が得られた。またこの地区を中心に同時期に属すると考えられる石刀の未完成品が大

量に出土した。大部分が製作途中の欠損品と見られ、石刀製作の様々な段階の資料が含まれており、この製作工程を復元する上で貴重なものである。以下にその特徴をまとめておきたい。

石材の採取

石刀の材料となったのは、灰色ないし淡い黄褐色を呈する凝灰岩系の石材で、石刀の素材としては比較的柔らかい。パリノ・サーヴェイの岩石学的鑑定結果では頁岩(第三紀) あるいは凝灰岩系とされている。ここではとりあえず「凝灰岩系」の石材と呼んでおきたい。

この石材は遺跡の北側を流れる子撫川から採取することが可能なようである。遺跡から少し遡った宮島地区では一の滝、二の滝として有名な子撫川の川底に、層状に堆積した硬質凝灰岩や柔らかい頁岩が露出している(第3図)。このような岩盤露頭地から板状の石材を取り出して石器素材とした可能性が高い。またこれに由来する棒状あるいは偏平楕円形状を呈する河原の転石を利用した可能性もある。



第３図　一の滝とその甌穴群の地質断面図［小矢部市役所 1971 による］

石材の加工第１段階（荒割段階）

発掘品の中で、加工の初期段階の資料はほとんどなく抽出が難しい。短く折れた資料で荒い加工を施したものが数点あるが、かなり太いもので、石棒への加工も可能である。さらなる検討が必要と思われるので、無理に荒割段階の資料と位置づけることは控えておきたい。

上述のものを除けば、初期製作段階の確実な資料はほとんど無いと言ってもいい。そのため、最初の石材形状がよくわからない。もし子撫川の転石を採取したものとすると、第４図のような棒状の大型石材から加工していった可能性がある。この資料は表面の風化が激しいが、部分的に敲打状の加工が見られるもので石棒の未完成品の可能性が高い。また岩盤から板状の石材を採取し加工した可能性もあるが、いずれにせよ資料的裏付けが弱い。

第４図　石棒未成品の可能性が高い資料

打製石斧などがそうであるが、石器素材とな

る原石が大きくて、製作の初期段階で不要な石片や残核が大量に出る場合は、集落内ではなくて、露頭地や河原などの原石採集地で初期の加工作業を行う場合が一般的であろう。荒割や板状剥片素材の製作など短時間で終えることのできる作業は採集地で行った方が効率的であり、特別な理由がない限り大きくて重い原石をわざわざ集落内に運び込むことはないと考えられる。そのために集落内に製作初期段階の資料が遺存する可能性はかなり低くなる。

石材の加工第２段階（剥離整形段階）

粗く加工された板状あるいは棒状の素材に対して、まず石製の敲打具（敲石）で調整剥離を加えて細長く加工していく。この段階の代表的な資料は第5図1～6までに示してある。細長い石材の両側縁から剥離を加えて、石斧状の両面加工品を形作る。この典型例が同図1である。一見すると縄文時代草創期の局部磨製石斧の研磨前未完成品と見間違うほどである。ある程度粗い整形加工を加えたあと、次第に細かな整形加工に変わっていく。

石材の加工第３段階（敲打整形段階）

剥離による整形が進むと、次には敲打による整形を行う。敲打整形段階では、大まかには、平坦な背の部分と刃部を作り分けるものもあるが、区別が明瞭でないものもある。前者では第5図7・8、後者では10～12が相当する。

石材が柔らかいこともあって、石材加工の2及び3の段階である、剥離・敲打整形段階で折れてしまうものが相当数あったものと考えられる。また剥離整形から敲打整形へと一律に変わるものではなく、両整形技法を必要に応じ、錯綜させることもあったであろう。

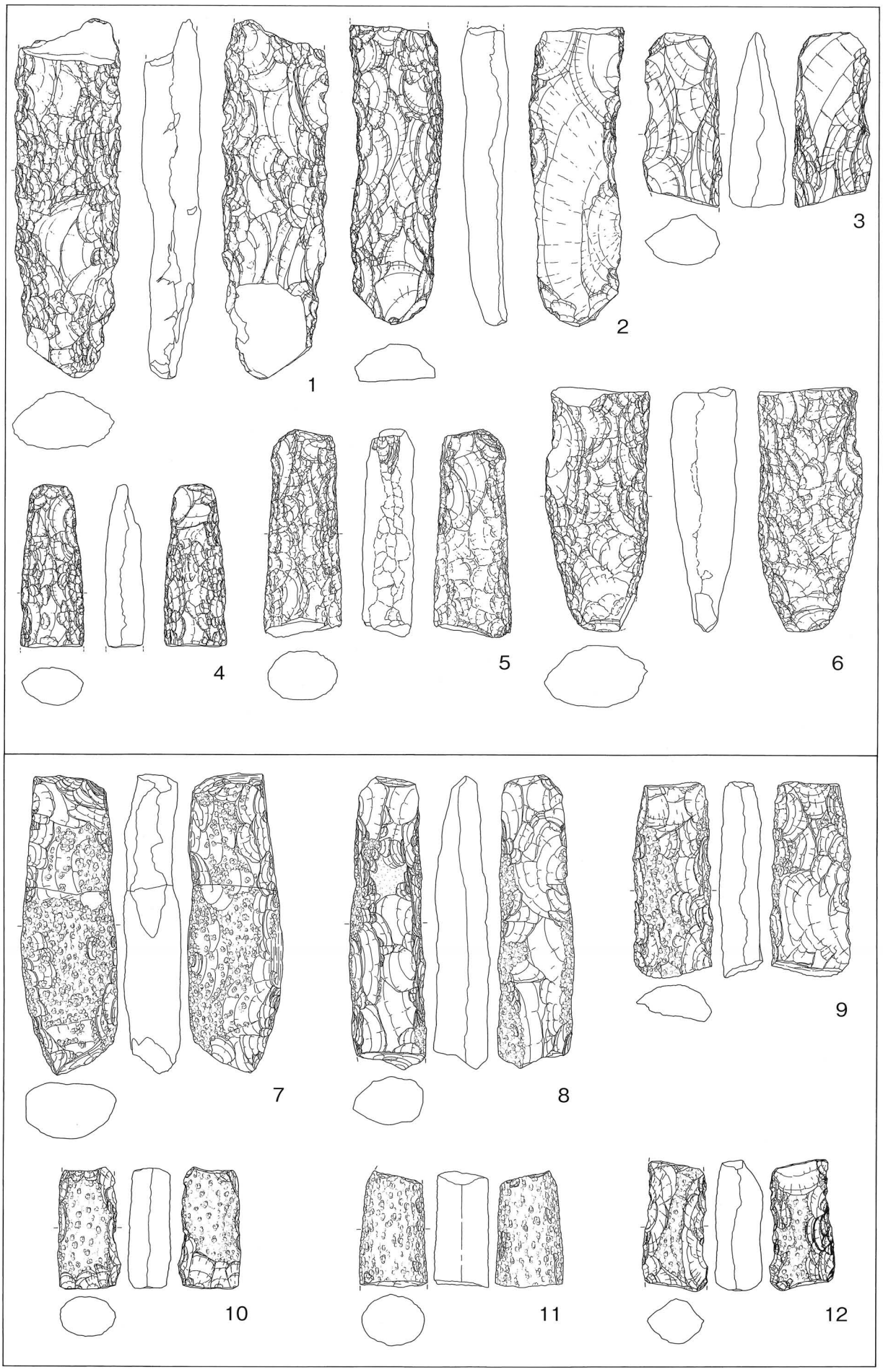
石材の加工第４段階（研磨整形段階）

何とか剥離・敲打整形を終えたものは、仕上げの研磨整形を行って完成させる。剥離・敲打痕を残し、さらに研磨痕が残る資料は多くない（第6図上段）。剥離・敲打整形に比べ、破損する割合が少なかったことを示している。研磨整形によって、明瞭に刃部と背を作り出し、基部の整形も行う。

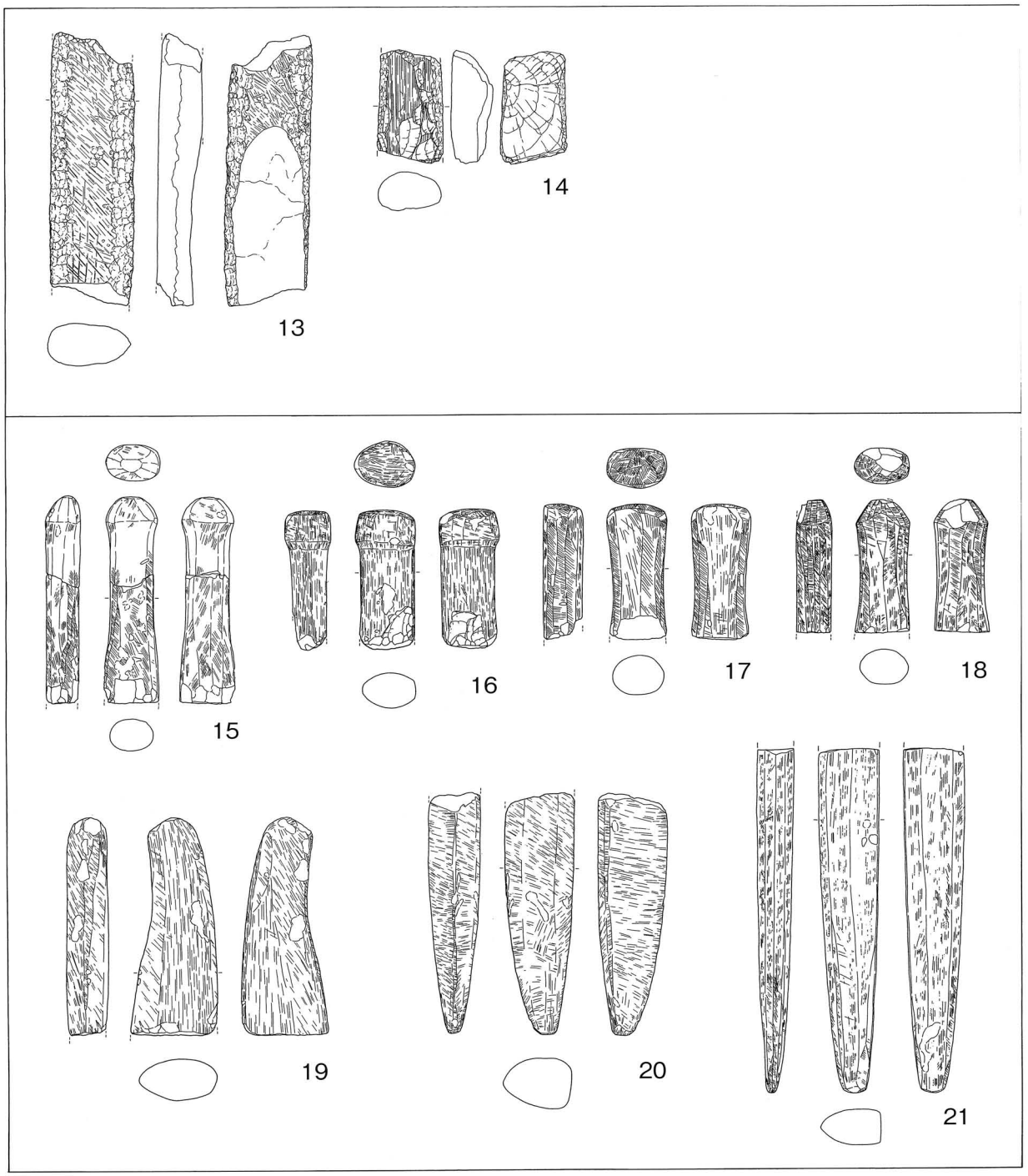
第6図15～21に示した資料は一応完成品に分類できるものである。一部には完成直前に折損したものが含まれている可能性があるが、現実的には分類が困難で、これらを一括して完成品としておく。短く折れた資料が多いのは、使用中の折損の可能性が高い。朝日町境A遺跡を初め、他の遺跡でもこのような資料が多いので、もしかしたら、祭祀の時に折断する行為が行われたのかも知れない。

完成品の流通

相当量の石刀未成品や調整剥片類が出土しており、桜町遺跡で自家消費量を超える石刀が製作されて、完成品が周辺地域に流通していたことはほぼ間違いない。今後は周辺集落からの桜町製石刀の出土例を確認してその広がりや流通時期の確認などを行って、縄文時代における石製品流通の実態を通しての各集落間、各地域間交流の様子を明らかにしていかなければならない。なお肉眼的な観察による判断ではあるが、他遺跡からの出土例として、石川県御経塚遺跡の3点がある（註4）。今後さらに資料を確認していけば、桜町製石刀の出土例は増えるものと考えられる。桜町遺跡の石刀は他の石材も若干出土しており、これらは他地域で製作されたものがもたらされたと考えられる。



第５図　石刀の製作工程（上段は加工第２段階、下段は加工第３段階）



第６図　石刀の製作工程（上段は加工第4段階、下段は完成品）

（3）石器組成について

はじめに

発掘調査で得られた一群の石器の種類と数量比率を石器組成とする。石器組成はそこで行われた様々な活動の内容を示しており、特に生業活動を推定する際の重要な指標となる。また縄文時代中期以降に盛んになる、特定石器の大量生産と製品の流通を抽出することも可能で、それぞれの集落や、時には一定地域の特性を明らかにする上でも重要な指標となる場合がある。

もちろん生業活動に用いる道具が、石器のみからなる場合はほとんどなく、当然骨角器や木器製の生産用具も存在している。本来的にはこれらも含めて考察すべきであるが、有機質の道具類は遺存する例が限られているため、遺跡間の比較によって、特定集落の生業活動の普遍性と特殊性を描き出すには、確実に出土する石器類の組成を比較することによって、ある程度可能になってくる。そのような限界性をもふまえて、桜町遺跡の石器組成を見ていくことにする。

石器類の主要な用途

なお石器組成の分析に入る前に、桜町遺跡から出土した石器の種類とその主要な用途を簡単にまとめ、第2表のように整理しておきたい。石器用途の研究はまだまだ不十分で、研究者間での見解の相違もあるので、一つの仮説として見ていただきたい。また石器種類を用途別にまとめると、第3表のようにまとめられよう。

地区ごとの石器組成の特徴

桜町遺跡は主体的には中期末葉から後期初頭の時期に形成された地点、後期末葉から晩期中葉にかけて形成された地点等、いくつかの時期差を有する地点から成り立っている。地区単位で出土した石器群がそれぞれの時期の特徴を反映していると考えられるので、まずは地区ごとの比較を行う。若干の時期的な混在はあるかもしれないが、大勢的な傾向は確認できるであろう。既刊の遺構編および石器土器編を参考に、先述の地区分けに従い、石棒や石刀、装身具類といった精神文化に係わる道具を除いた直接生産用具類について、それぞれの地区ごとに石器組成をまとめ、さらに参考資料として南砺市安居五百歩遺跡と石川県野々市町御経塚遺跡を加えたものが第4表である。これをさらに詳しく見てみよう。

縄文中期の中出地区の石器組成をみると、石錘の多さが目を引く。北陸の中期、特に古府式期以降に規格的な石錘が爆発的に増えるのはサケ・マス漁に関連するという指摘〔高堀 1972〕があり、石錘の用途を網漁の錘とみれば、サケ・マスが大量に遡上する河川に添う台地上に立地する桜町遺跡のような集落では、一般的な傾向であろう。また一方、擦石や凹石、敲石といった堅果類の加工具や、根茎類の採取具とも考えられる打製石斧が石錘に次いで多くを占めている。

おそらく、中期における生業としては、各種の植物性食料の採集と、サケ・マスを中心とする漁労と、罠猟を主体とするシカ・イノシシなどの大型獣の狩猟が中心であったと考えられる。鳥類や小型獣の狩猟に用いる弓矢の重要性はやや低いとみられる。

中期末から後期初頭を中心とする舟岡第1・6調査区では、なんといっても打製石斧の出土量の多さ（46%）が際だっている。また石錘の占める割合が大きく減少し、同様に擦石・凹石・敲石も相対的に減少傾向にある。打製石斧の多さを別にすれば、その他の石器の組成は普遍的なあり方であろう。石鏃は相変わらず少ない傾向にあり、磨製石斧は中出地区と同様十数%の高率を占める。ほぼ同時期の安居五百歩遺跡と比較しても、打製石斧の多さは気になる。

後期末から晩期を中心とする、舟岡第3・4調査区の石器組成をみると、石鏃の組成比率が第一位となり、中期～後期初頭の様相と一変する。僅かの差でこれに次ぐ出土があったのは打製石斧で、これは中期末～後期初頭の傾向を引き継いでいるものであろう。また石錘は極端に少なくなり、擦石・凹石・敲石類もやや減少する。

第２表　主要石器の主な用途

石器種類	主要な用途	石器種類	主要な用途	石器種類	主要な用途
石鏃	狩猟具	石槍	狩猟具	石匙	解体具、調理具
大型削器	解体具	石錘	漁労具	浮子（軽石製）	漁労具
打製石斧	根茎類の採取具、土工具	凹石	堅果類の加工具	擦石	堅果類の加工具
石皿	堅果類の加工具	敲石	工具、堅果類の加工具	磨製石斧	工具
砥石	工具	台石	工具	石錐	工具（穿孔具）
※祭祀具及び装身具は下表にまとめてある					

第３表　用途別の分類

主要な用途	石器の種類
動物・鳥類等の狩猟具及び解体具、調理具	石鏃・石槍・石匙・大型削器
漁労具	石錘・浮子
根茎類の採取具	打製石斧の一部
堅果類の加工具、調理具	凹石、擦石、石皿、敲石の一部
工具	磨製石斧、打製石斧の一部、敲石の一部、砥石、台石、石錐
祭祀具	石棒、石刀、石剣、石冠、御物石器
装身具	けつ状耳飾、勾玉、管玉、丸玉、垂飾品

第４表　石器組成

遺跡名	桜町遺跡全体		桜町遺跡中出地区		桜町遺跡舟岡地区①		桜町遺跡舟岡地区②		安居五百歩遺跡		御経塚遺跡	
時　期	中期～晩期		中期		中期末～後期初		後期末～晩期中葉		後期初頭		後期末～晩期中葉	
石器種類	個　数	構成比率	個数	構成比率	個数	構成比率	個数	構成比率	個数	構成比率	個数	構成比率
石鏃	496	19.2%	8	3.3%	35	5.4%	448	32.6%	6	3.4%	766	11.4%
石槍	2	0.1%			1	0.2%	1	0.1%				
石匙	3	0.1%			3	0.5%			1	0.6%	6	0.1%
打製石斧	872	33.8%	17	7.1%	299	46.1%	427	31.1%	27	15.1%	2732	40.6%
礫器											363	5.4%
石皿	36	1.4%			17	2.6%	13	0.9%	2	1.1%	268	4.0%
擦石	79	3.1%	38	15.9%	19	2.9%	15	1.1%	1	0.6%	1675	24.9%
凹石	181	7.0%	40	16.7%	42	6.5%	78	5.7%	31	17.3%	32	0.5%
石錘	266	10.3%	74	31.0%	92	14.2%	34	2.5%	55	30.7%	273	4.1%
浮子											114	1.7%
磨製石斧	303	11.8%	33	13.8%	95	14.6%	140	10.2%	38	21.2%	77	1.1%
砥石	46	1.8%	6	2.5%	9	1.4%	23	1.7%	6	3.4%		
擦切石器	2	0.1%					2	0.1%				
敲石	163	6.3%	21	8.8%	27	4.2%	86	6.3%	12	6.7%	147	2.2%
台石	7	0.3%	1	0.4%	2	0.3%	2	0.1%				
石錐	71	2.8%					69	5.0%				
大型削器	6	0.2%	1	0.4%	3	0.5%	2	0.1%				
掻器	2	0.1%					1	0.1%			273	4.1%
楔形石器	2	0.1%					1	0.1%				
異形石器	13	0.5%			2	0.3%	11	0.8%				
不定形石器	7	0.3%			3	0.5%	1	0.1%				
二次加工ある剥片	20	0.8%				0.0%	19	1.4%				
計	2577		239		649		1373		179		6726	

このことから、桜町遺跡の後期末～晩期の時期における生業活動は、中期のころと比べるとかなり変化していることが読み取れる。すなわち網漁法の衰退すなわちサケ・マスの資源減少が考えられ、さらには、石鏃の大量保有にみられるような鳥類や小型獣などへの過度の依存は、これも大型獣の資源減少が影響しているのかも知れない。さらに植物性食料の加工具類の相対的減少は、後期以降の気候の冷涼化に伴う堅果類の内容変化による可能性もある。またそれとともに打製石斧の高率は、その機能を考えると、食糧資源としての根茎類への依存の高さとみることもできよう。後期以降の集落数の減少と気候の冷涼化との関連や、自然及び人為による資源枯渇などが石器組成にも反映している可能性が高い。

後期末～晩期地区の石器組成を同時期の石川県御経塚遺跡のそれと比較してみると、共通点と相違点がある。共通点としては、打製石斧の組成比率が高いことや石錘の組成比率がやや低いこと、相違点としては桜町遺跡では石鏃が多く、御経塚遺跡では擦石が多いことなどである。また生業活動とは直接結びつかないかも知れないが、磨製石斧の組成率に差があるのは、蛇紋岩製磨製石斧の生産地域からの距離に反比例するものであろう。

同じ時期の遺跡であって、地理的に余り離れていなくても、石器組成が相違する場合がある。これは、集落の立地場所の違いや、大遺跡と小遺跡といった集落規模の違いなども影響しており、残された石器組成からそれぞれの集落における生業活動の内容を復元するのは簡単ではないが、資料の蓄積と適切な分析手法の確立によって、解決できる部分もあろうかと思う。さらに、花粉分析による植生復元や出土獣漁骨・種子類の同定作業など他分野の成果との照合によって、さらに精度を高めていくことが期待できよう。

（4）小結

いくつかの項目について、桜町遺跡の縄文時代石器の特徴をまとめてみた。桜町遺跡の石器は中期から晩期にいたる集落遺跡の一般的な内容を備えており、ある意味では縄文時代石器の代表的な内容を有するものといえよう。狩猟具としての石鏃があり、漁労具としての石錘があり、また堅果類加工具としての凹石や擦石があり、石鍬としての機能を持つ打製石斧があり、木材加工具としての磨製石斧がある。また縄文人の精神文化に深い関わりを持つ石棒、石刀、石製装身具、岩版も揃っている。まさに縄文人の道具箱として素晴らしい内容を持っている。

それぞれが桜町遺跡の人々の豊かな生活を支え、文化を育んできた貴重な資料である。そしてまたこのような石器の内容を分析することにより、縄文時代前期から晩期へと数千年にわたって断続的に営まれたこの桜町の人々が、時代の変化や厳しい自然条件の変化に何とか適応してきた様子を垣間見ることができた。また桜町遺跡を特徴づける建築部材の、加工具としての磨製石斧の特徴を明らかにし、さらに石器をただ使用するばかりでなく、近在の資源を活用して石器を製作する姿も石刀の製作資料を通して確認することができたことも大きな成果といえる。

以上まとめた内容は、限られた時間の中での不十分なものに過ぎないが、出土した石器について、今後もさらに様々な視点からの研究を継続することによって、桜町の縄文人の姿をより鮮明に浮かび上がらせることができよう。

註

（註1） 乳棒状磨製石斧との比較から、定角式を広義に捉えれば、北陸地方の早期末葉から前期にかけての磨製石斧の多くは定角式の中に含められるかも知れないが、石斧側面の面取りがある程度明瞭になる中期前葉以降の石斧を典型的な定角式磨製石斧と捉えておきたい。

（註2） 岩石名称については、パリノ・サーヴェイの鑑定結果をもとにしている。この中で安山岩系に分類された石材には、富山県の常願寺川流域の磨製石斧生産遺跡〔富山県教委 1976 など〕で、硬砂岩と分類された石材に類似するものが含まれており、今後検討が必要である。

（註3） 舟岡第2地区は中期と晩期の資料の混在が顕著で、地区ごとの比較の際には除外して考察する。

（註4） 大野淳也氏の実見による。

参考文献

石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター　2004 『三引遺跡Ⅲ (下層編)』
大山町教育委員会　1988 『富山県大山町花切遺跡発掘調査概要』
小矢部市役所　1971『小矢部市史』
黒部市教育委員会　1975 『富山県黒部市枕野遺跡緊急発掘調査報告書』
高堀勝喜　1965 「縄文文化の発展と地域性－北陸－」『日本の考古学　Ⅱ』 河出書房
富山県教育委員会　1973 『富山県下山新遺跡　第1次発掘調査概報』
富山県教育委員会　1974 『富山県下山新遺跡　第2次発掘調査概報』
富山県教育委員会　1976 『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』
富山県教育委員会　1977 『富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』
富山県教育委員会　1987 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編3－』
富山県教育委員会　1990 『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編5－境A遺跡石器編』
富山県埋蔵文化財センター 1992 『斧の文化　平成4年度特別企画展』
野々市町教育委員会　1983 『野々市町御経塚遺跡』
福野町教育委員会　1990 『安居五百歩遺跡Ⅰ』
山本正敏　1989 「北陸における縄文時代の磨製石斧」『縄文時代の木の文化』 富山考古学会
山本正敏　1991 「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」季刊考古学第 35 号　雄山閣出版
山本正敏　2005 「富山県内の縄文早期・前期の磨製石斧」大境第 25 号　富山考古学会

5　北陸地方における岩版類について ―桜町遺跡出土品を中心として―

大野　淳也（小矢部市教育委員会）

1．はじめに

桜町遺跡の縄文時代を中心とする調査区からは、白色の凝灰岩質の石材を用いた岩版に類する石製品が14点出土しており（註１）、一遺跡の出土数では北陸地方で最多である。このような遺物は従来、北陸地方では出土することが稀であったため、個別に報告されることはあってもそれ以上の研究は低調で、同種の石材を用いた東北地方縄文晩期の亀ヶ岡文化における象徴的器物である岩版との関係が漠然と推測されるだけであった。しかし近年では、北陸地方において桜町遺跡例も含めた同種の遺物の出土例が増えてきており、周辺地域との具体的な対比を行うことも可能な状況となってきている。

そこで本稿では、桜町遺跡からこのような遺物が多量に出土したことの背景をさぐるため、北陸地方や隣接する諸地域における類品を集成してその様相を概観し、それらの分布状況等から推察される地域間の関係について検討したい。さらに、このような器物を用いた儀礼・祭祀やその性格についても、若干の私見を述べたい。

2．対象とする遺物とその名称について

桜町遺跡から出土した当該石製品には、隅丸方形の板状ものや楕円形の小さな礫状のもの、下部に脚部状の表現をもつもの、全体的に分厚い卵形のものなどの形態的なバラエティーがみられる（第３図）。しかし、これらには全体として扁平な形態をもつこと、顔部表現と見られる盲孔をもつものが多いこと等、石材以外にもいくつかの共通する特徴があり、関係する遺物として分析することが可能なものと考えられる。そこで本稿では、これら形態的差異をもつ石製品について「白色を呈する凝灰岩質の石材を用い、偏平な形態を持つ」という共通定義によって、一括して取り扱うこととする。

このような白色の石材を用いる縄文時代の遺物で、平面形態が隅丸方形や楕円形を呈しかつ偏平なものについては、一般的に「岩版」と呼ばれることが多い。しかし、現在のところ岩版という名称で類型化されている東日本地域の後期前半に属する三角形や円形を呈するもの（児玉2001・長田2004）や、晩期のもの（稲野彰子1983b）と比較した場合、桜町遺跡出土の資料には後期前半の円形の岩版に似たものがある一方、晩期の岩版と類似した特徴をもつものもあり、さらには両者の範疇から外れるようなものも含んでいる。このため、本稿では多様な形態をもつ当該遺物を一括する名称として、岩版を含むより大きな遺物群全体を指す意味で「岩版類」を使用する。

なお、同様の多様な形態をもつ遺物について一括して取り扱った先例に、小杉康による福島県薄磯貝塚出土品の報告がある（小杉1988）。小杉は、同貝塚出土の多様な形態や文様をもつ石製品に対し、それらが岩版との関係が深いものとみて、彼の先行研究（小杉1986）において提唱した隅丸

長方形または楕円形を呈する土版と岩版の総称「タブレットＢ」を適用し、それらがすべて石製であることから「石製タブレットＢ」の名称を使用した。また、典型的な岩版あるいはそれに準ずるタブレットＢの一群以外に、同一の素材を用いた「境界領域に属する一群」、「範疇外の一群」、「未加工の一群」についても一連の儀礼行為の中で用いられた可能性のある関連遺物として取り扱い、これら４群をもって「石製タブレットＢ群」を設定した。「タブレット」という名称は、モースが大森貝塚から出土した土版を報告する際に用いたのがその初例であるが（E.S.Morse 1879）、モースの報告の中では、比較対象として例示した石製のものについても同じ名称を用いており、材質を問わず「文様をもつ扁平な形態のもの」を指す意味であったとみられる。小杉が用いた用語も、このモースの用法にならったものと理解されるが、関東地方を中心として分布する内湾四辺形や方形の形態をもつ土版（タブレットＡ）と東北北部から関東地方にかけて分布する隅丸長方形または楕円形を呈する土版と岩版（タブレットＢ）の２類を分けて取り扱う点に違いがある。つまり、小杉が薄磯貝塚の資料について用いた「石製タブレットＢ群」とは、「隅丸長方形または楕円形を呈する岩版、および同石質の関連する遺物」の総称と理解され、本稿において用いる「岩版類」とは基本的に同義の名称であると考えられる。後述するように、桜町遺跡出土の資料は概ね小杉の「石製タブレットＢ群」に含まれるような内容をもっており、時期的にも重なる両者は関係が深いものと考えられる。

３．岩版の研究略史

岩版類について検討をおこなうにあたり、その主体である「岩版」の研究史について、本稿に関係するものを簡単に振り返っておきたい。先にもふれたとおり、岩版という名称で類型化されている縄文時代の遺物には、大きく分けて後期前半と晩期の二時期のものがある。

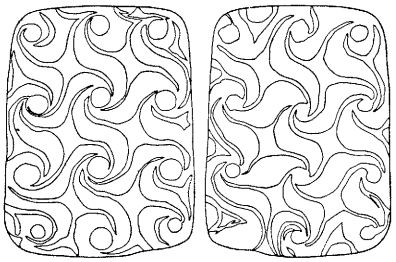
(1) 晩期の岩版

まずは研究の歴史が長い晩期の岩版についてふれる。これに類する遺物である土版について最初に言及したのは、前述のようにモースである（E.S.Morse 1879）。モースは大森貝塚出土の土版を報告するにあたり、「ほかに適当な名前がないのでタブレットとよぶ」とした。この報告では、大森貝塚出土の土製のものと米国シンシナティ出土の石製のものを共にタブレットと呼称して比較しており、モースによるこの用語の対象は、材質や洋の東西を問わない幅広いものであったと推察される。そしてその用途の可能性として「①輪投げに似たゲームに使った投擲物」、「②権威のしるし」、「③護符あるいはまじない札」の３案を示した。

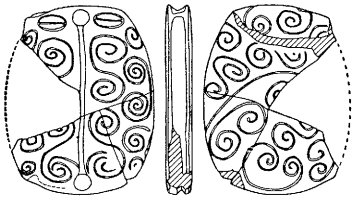
その後、タブレットという用語はそのまま継承されることはなく、土製のものには「土版」、石製のものには「岩版」という、材質を表す名称が用いられるようになった。一方、土版と岩版の材質以外の要素である形態や文様については、早くからその類似が認識され、両者は共通した性格をもつ遺物として認識されてきた。そしてその用途については、モースにより提示された３つの可能性から、次第に「護符説」に絞られるようになった（大野1897など）。

特に土版・岩版と土偶との関係を強く主張した大野延太郎（雲外）は、その系譜についても、土

偶から退化したものであると考えた（大野1901）。このような大野の説については、中谷治宇二郎など一部の学者から「土偶と土版・岩版は別形式である」との指摘があったが（中谷1929など）、以後も根強く支持され続けた。また、その分布については、関東地方と東北地方に発見が多いこと、東北地方と比べると関東地方には土版が多く岩版が少ないことなどが認識されるようになった（池上1933）。



第1類（野面平遺跡・青森県）



第2類（藤株遺跡・秋田県）

第１図　晩期の岩版（縮尺１／４）

このようななか、土版と岩版の型式分類と編年によって、その位置づけを明確にするような研究をおこなったのが天羽利夫である。天羽は土版と岩版を一つの編年案のもとに統合し、岩版については６類、土版については２類の編年案を示した（天羽1965）。そしてその中で、発生形の第１類が岩版に限られることを明らかにし、その段階には人面表現などの土偶と類似する形態的特徴がまったく認められないことから「土版・岩版は直接土偶とは何ら形態的に関係なく発生した」とした。また、その第１類が東北地方北部の馬淵川流域を中心に分布することから、「土版・岩版は亀ヶ岡文化によって産み出された遺物である」と結論づけた。これ以降、岩版と土版については同一形式として取り扱うことが定着し、土偶とは無関係に東北地方で発生したこと、人面付きのものは例外的なものであること、土版は岩版よりも後出して関東地方まで及んだことなどが通説化した。天羽が発生形とした岩版第１類についてはその後、小林達雄が大洞Ｂ２式に該当することを指摘し、それより古い大洞Ｂ１式段階の岩版が別に存在することを示した（小林1967）。小林が挙げた最古段階のものの中には、宮城県沼津貝塚の資料（第９図・90）のような眼部表現をもつものを含んでおり、天羽が主張した発生段階での人面表現の有無の理解にも一石を投ずるものであった。しかし、挙げられた資料群が以後の段階のものに比べて斉一性が無く、異形であったためか、その後に岩版の分布や編年をさらに詳細にした稲野彰子による研究（稲野彰子1983b）等では積極的に取り扱われることはなかった。

その後、この沼津貝塚の資料を「タブレット」の初現形として再び取上げたのが、前にもふれた小杉康の研究である。小杉は、中空土製品に関連する遺物として土版・岩版を扱うなかで、沼津貝塚の資料を含む異形なもののグループを「タブレットＢ」の最古段階に位置づけ、その成立については中空土製品からの影響があったとした。ただしその編年案では、沼津貝塚のものを含む最古のグループと、天羽の第１類岩版を含むグループとは別の系列として配置しており、小林のような一系の流れとして理解した訳ではないようである。また小杉は、この論文においてタブレットには「線刻」、「敲打」、「回転穿孔」、「打ち欠き」、「ナゾリ」、「加熱」、「打ち割り」の７つの代表的な変形行為が認められることを指摘し、こうした単位行為が連続する儀礼行為が存在したと推定した（小杉1986）。

東北地方における岩版・土版の変遷についてはその後、斎藤和子による新たな研究があった。斎藤は、天羽の型式分類に基づく各段階の岩版・土版にみられる「身体表現」について、眼部表現以外にも盲孔や正中線を含めて取り扱い、その有無や表裏の文様構成等を統計的に解析した。その結果、身体表現がまったくみられない第１類岩版と、土偶の一部と共通する身体表現が数多くみられる第２類の間には大きな画期があり、この段階で岩版・土版は土偶との関係が深い遺物に変容したと主張した。また、第４類と第５類の間にも画期を認め、この後の段階では再び身体表現の意味を失った型式に変化するとした（斎藤2001）。かつて天羽は、眼部などの明確な顔面表現をもつ資料だけを挙げ、その数量が少ないことから、土版・岩版における土偶的表現は例外的なものと理解した。しかし、斎藤のように文様要素を広げて身体表現と解釈した場合、土偶などと結びつく身体表現は第１類以外の各類に認められ、この種の遺物の大半に通有のものであったとみることも可能である。

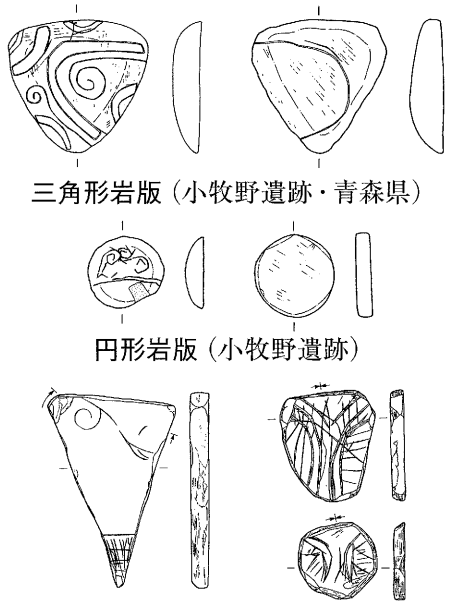
このような研究の流れの中で、晩期の岩版については明確な顔面表現をもつ沼津貝塚例のような資料と、身体表現をもたない第１類岩版との関係をどのように捉えるかが、その成立過程を考える上で再び重要な問題となってきている。この問題に関して稲野彰子は、2004年の論文において沼津貝塚の資料を取り扱い、第１類岩版との間には形態や身体意匠の有無、変形行為の有無といった差異が認められること、両者を繋ぐような資料も無いこと等から、別系統の遺物であるとした。また、沼津貝塚の資料の類例として桜町遺跡出土の厚手の資料（第３図・14）をとりあげ、第１類岩版に先行する遺物であり、類品が東北地方南部から北陸地方にかけて分布することを示した（稲野2004）。

以上のように晩期の岩版については、土版も含めて東北地方や関東地方を中心とする東日本地域に分布する祭祀関連遺物として認識され、その変遷についてもこの地域内で系統的に変化することが想定されてきている。しかしその初現段階については、沼津貝塚の資料等の位置づけをめぐって異論があり、なお未解決の問題を残している。

(2) 後期前半の岩版

後期前半の岩版については、三角形の板状の形態をもつ「三角形岩版」を中心として、1960年代から注目され始めた（江坂1964）。その後70年代には、同様の形態で中期後半期以降に盛行する三角形土偶・土版との関連が指摘され（葛西1970）、さらには土製のものと石製のものについては同一形式内における個体の差異にすぎないとする晩期の岩版と同様の捉え方もされるようになった（成田1974）。また、三角形土版と三角形岩版の全国的な集成をおこなった金子拓男は、その用途について「土偶の変形またはそれに近い性格を持つもの」と考えた（金子1983）。

このような捉え方をされてきた三角形岩版に、新たに円形・楕円形のものも加えて一括し、「縄文後期前半の岩版類」として捉え直したのが児玉大成である（児玉2001）。彼はまずその先行研究において、後期初頭～前葉の時期に三角形岩版が青森県を中心とした日本海側に多く分布すること、その範囲が十腰内Ｉ式土器の分布範囲と概ね一致することを指摘し、その性格については大規模な配石遺構や環状列石と関係した「葬送儀礼あるいは季節や経年の祭祀の時に使用された可能性」を考えた（児玉1997）。その後、同時期の円形を呈する資料についても岩版類に位置づけ、三角形岩版とともに北海道南部、青森県、秋田県、岩手県に分布することを示した（児玉2001）。また、そ



第２図　後期前半の岩版（縮尺１／４）

の製作技法には研磨による成形を主とする「小牧野型」と、剥離による成形を主とする「伊勢堂岱型」の二種類があり、その製作者には青森湾周辺や岩木川流域で「小牧野型三角形岩版」を主体的に製作する集団、米代川流域で「伊勢堂岱型三角形岩版」や「三脚石器」を主体的に製作する集団、雄物川流域で「小牧野型円形岩版」を主体的に製作する集団の三者があるとした。そしてこれら岩版類の用途については、前稿で提示した性格のほか、製作の中心地と目される青森湾周辺や岩木川流域から遠く離れた遺跡から出土する岩版類については「携行する護符として用いられた可能性」を考えた。

その後、後期前半の岩版類について、さらにその対象を広げて検討したのが長田友也である。長田は、新潟県アチヤ平遺跡で多量に出土した「線刻礫」について検討するなかでその類例の集成をおこない、東北地方北部の岩版類との関係性を明確にすることにより、後期前半の岩版類の分布が新潟県域を含む東北地方南部にまで広がることを示した（長田2004）。また、その分布や文様の系統から、東北地方北部から新潟県域に至る岩版類の南下経路についても言及した。

以上のように、後期前半の岩版には大きく分けて三角形のものと円形のものとがあり、ともに東北地方を中心に分布する祭祀関連遺物であることが認識されてきている。なかでも、東北地方北部の青森県や秋田県にその出土が多く、盛行の中心地であると想定されている。また、その性格については、三角形岩版と同一形式と捉えられる三角形土版を中心に土偶との関係が指摘されているが（金子1983）、基本的に頭部や手足を突出させずに省略する形態をもつことからは、立像土偶とは異なる「胴体像」（伊藤2005）としての性格をもつものと考えられる。しかしその終末については、後期後半段階での様相が明確に把握されておらず、後出する晩期の岩版との関係も含めて不明な点が多い。

４．桜町遺跡出土の岩版類

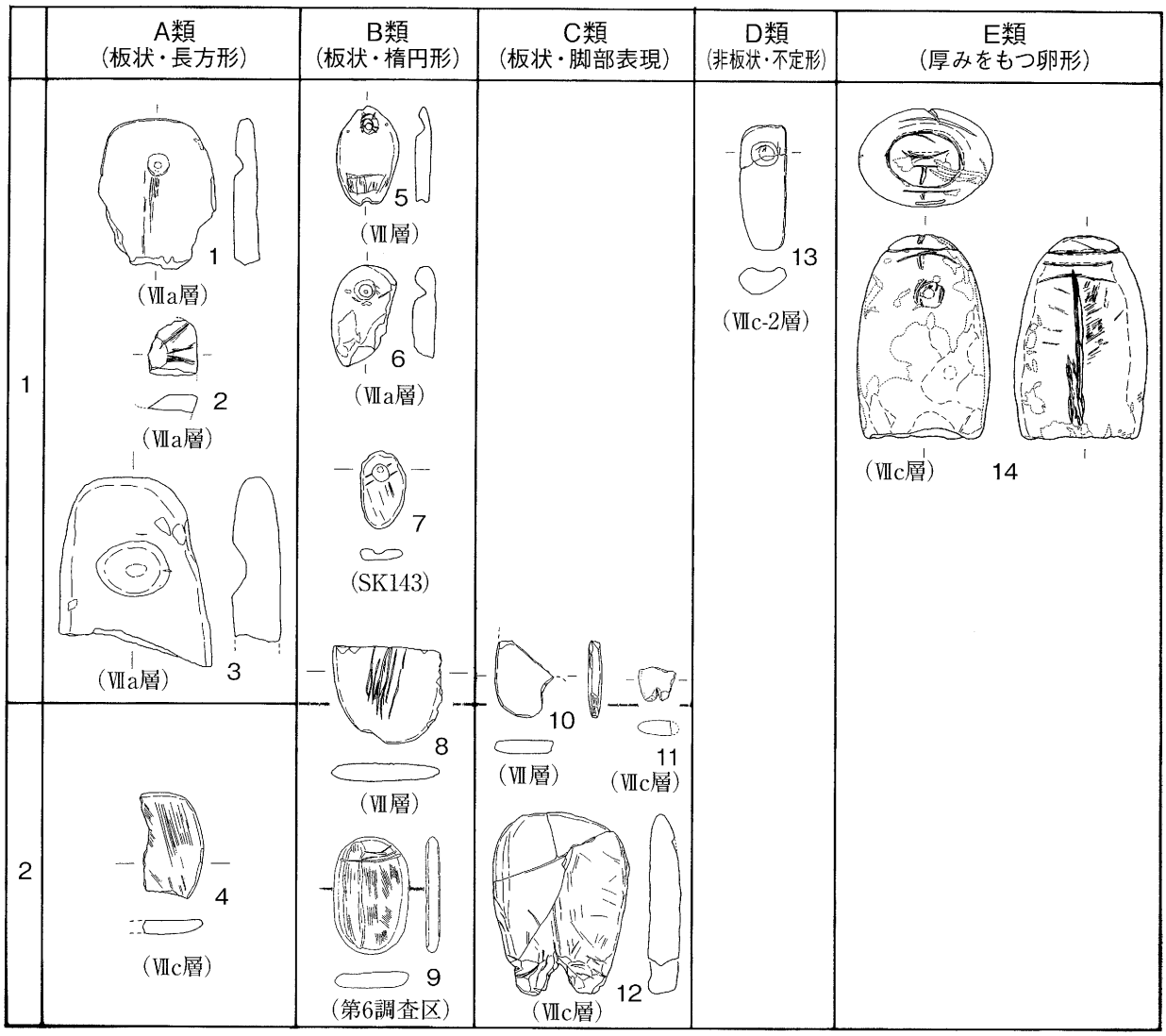
(1) 分類とその特徴（第３図）

多様な形態のものを含む桜町遺跡出土の岩版類について分析をおこなうにあたり、まずはその形態によって5類に大分類し、さらに身体表現の一部とみられる盲孔の有無によって２種に細分類した。

Ａ類としたものは、平面形が隅丸長方形で板状の形態をもつもので、４点出土している。盲孔の有無によって、さらに１類と２類に分類できる。盲孔をもつＡ１類には、縦方向の擦痕がみられるもの（１）、盲孔の周囲に放射状の線刻がみられるもの（２）、厚手のもの（３）がみられる。盲孔をもたないＡ２類は１点のみであり（４）、平面を中心に研磨によるものとみられる擦痕が認められる。この類はいずれも破片で出土しており、完形のものはない。

Ｂ類としたものは、平面形が楕円形で板状の形態をもつもので、５点出土している。盲孔をもつＢ１類が３点、盲孔をもたないＢ２類が１点、全体の約半分とみられる破片のために盲孔の有無が確認できないものが１点ある。これらには、「パンツ状文様」（小杉1988）と呼ばれる線刻を下部にもつもの（５）ともたないもの（６～９）がある。５には、パンツ状文様のほか盲孔部の両横に小さな刺突が認められる。また盲孔の内部には、その内面に沿って線状になぞったような痕跡が認められる。このような痕跡は、６の盲孔部にもわずかに認められる。９は、片面の上部に横方向の沈線による区画をもつ。また、やや左寄りに幅１cmほどの縦方向の凹みが溝状に認められる。８には、縦方向の線刻が数条認められる。擦痕は５・６・８では裏面に、７では両面に顕著に認められる。

Ｃ類としたものは、板状を呈しながらも下部に脚状の表現が認められるもので、３点が出土している。盲孔をもたないＣ２類が１点のほか、破片であるために盲孔の有無が確認できないものが２点出土している。なお、Ｂ１類に分類した５の下部にも若干の窪みが認められ、これを積極的に評価すればＣ１類とすることも可能であるが、脚部を明確につくり出す他の３点とは若干異なる表現とみられることから、本類には入れなかった。脚部の表現方法は三者三様で、股状の部分を比較的



第３図　桜町遺跡出土の岩版類とその分類　（縮尺１／４）

なだらかに大きくとるもの（10）や線状に切り込むもの（11）、Ｖ字状に切り込んで先端部をさらに外側から削り込んで足先を区画するもの（12）がある。いすれも表裏両面に擦痕が顕著に認められる。

Ｄ類としたものは、板状ではなく、断面形が台形のような不定形となるものである。盲孔をもつＤ１類の完形のものが１点のみ出土している（13）。盲孔のある面は平らだが、裏面は左右２方向から研磨を受けて変形している。上部に比べて下部の幅が細くなる形態についても、この両方向からの研磨によるものである可能性がある。

Ｅ類としたものは、平面形が楕円形で厚みをもち、卵形の形状を呈するものである。盲孔をもつＥ１類が１点のみ出土している（14）。稲野彰子によって沼津貝塚の資料に類似するものとして取り扱われたもので（稲野2004）、下部を欠く大きな破片資料である。上部を一周する沈線で区画し、表裏両面の上部および頂部の３ヶ所に背反する弧線の内部を彫り去った「連結三叉文」を施文する。表面の盲孔の内部には、Ｂ類の一部でもみられた線状のナゾリ痕が認められる。また、頂部から盲孔の上にかけて、縦方向の短沈線が認められる。裏面には、連結三叉文の下に縦方向の長い沈線をもつ。この沈線は鋭い刃物によって引かれたとみられる断面がＶ字形のもので、同一線内に４回以上の施文単位が認められる。またその下部にはさらに、浅くこの線をなぞったような短沈線の集合が認められる。全体的に裏面には細かな擦痕をもつ平滑な部分が多いが、表面は敲打によるものとみられる面の荒れが多い。また表面の下部には、回転穿孔の跡とみられる窪みが認められる。

(2) 出土状況と時期の比定

縄文時代を主体とする舟岡地区から出土した14点の岩版類のうち、13点は後期末～晩期を中心とする時期の遺構・遺物の集中した第３調査区から出土している。残りの１点（９）は中期末～後期初頭を中心とする時期の遺構・遺物の集中した第６調査区からの出土であるが、同調査区周辺でも少量ながら晩期の土器や石刀の破片などが出土しており、この岩版についても高位にある第３調査区方面から流されてきた晩期の遺物である可能性が高い。

ここではまず、第３調査区出土の13点について、その出土状況を確認しておく。土坑からの出土となっている１点（７）のほかは、すべて遺物包含層からの出土である。なお、この１点についても調査時に出土状況を確認したものではなく、遺構と直接関係するものであるかは不明である。この土坑は、後期末～晩期前葉頃のドングリを主体とした貯蔵穴群と、晩期中葉の環状木柱列の柱穴群が重なり合う地点に位置する不定形の穴であり、他には僅かな土器片が出土しているだけで、その用途が判明していない遺構の一つである（小矢部市教委2005）。またこの地区では、大部分の土坑や柱穴が遺物包含層を掘込んで形成されており、出土遺物が包含層からの混入である可能性がある。一方、他の12点が出土した遺物包含層は、自然流路の右岸部一帯に厚く堆積した黒色土で、大量の土器や石器を含む捨て場を形成していた。出土遺物には後期前葉のものも少量含んでいるが、主体となるのは後期末から晩期後葉の時期のものである。土質は黒色シルトが主体で、含有物の違いなどにより、上位のⅦａ層と下位のⅦｃ層の２層に細別される。さらに、流路跡等の低いところでは、下位に炭化物を多く含むⅦｃ－２層の堆積も部分的に認められた。岩版類の出土層位を確認

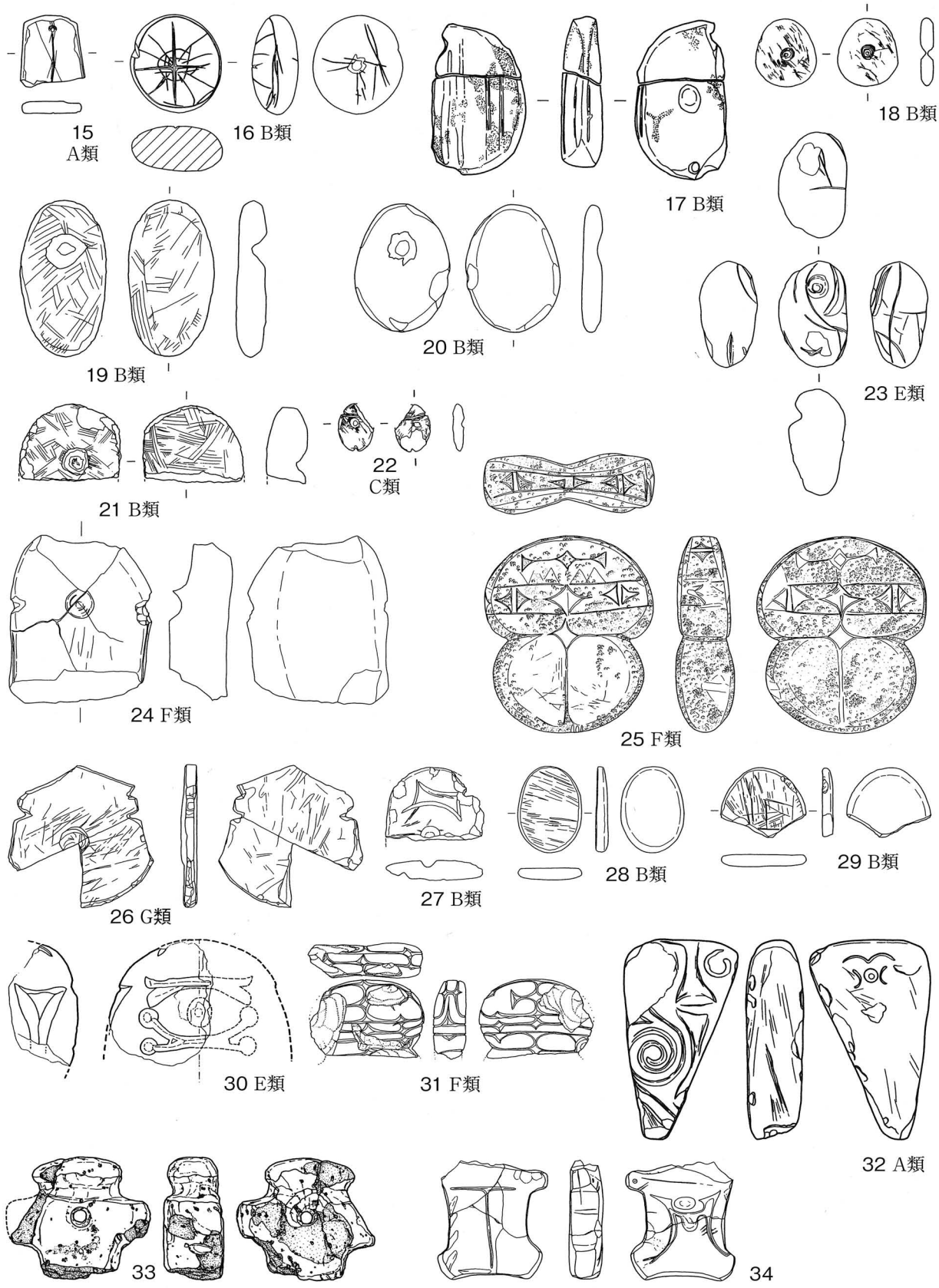
すると、C類、D類、E類は遺物包含層の下層であるⅦc層やⅦc-2層から出土しており、A類、B類には上層のⅦa層からの出土のものも認められる（単にⅦ層となっているものは、細かな分層をおこなう前の試掘時に出土したものである）。このことからは、A類やB類が他のものに比べて後出したものであるとみることもできる。しかし、各層から出土した土器の時期をみると、下位の層からより古いものが多く出土する傾向がある一方、新しい時期のものの混入もみられることが判明しており、注意が必要である。これは、この捨て場が自然流路の斜面に位置することから、水流等による撹乱・再堆積が頻繁にあったことがその理由と考えられる。このような状況のため、出土層位からの岩版類の時期の特定は困難であり、遺物包含層の主体的な時期である後期末～晩期後葉という広い時期幅の中でしか捉えることはできない。

次に、岩版類に施文された文様から時期の推定をおこなう。桜町遺跡出土の岩版類には盲孔以外に文様をもたないものが多いが、B1類に分類した5とE1類に分類した14には、他の文様を有する。まず、5に施された沈線文であるが、この文様は後期から晩期の土偶や岩偶などの遺物に認められる「パンツ形文様」との類似を指摘できる。しかし、この文様は比較的長い間にわたって使用されるものであり、この文様だけでは細かな時期の比定は出来ない。ただし、北陸地方においては一般的な文様ではないことから、他地域との関係を考える際には指標となるものである。一方、14の3箇所に施文のみられる「連結三叉文」は、北陸地方に特徴的な文様と考えられるもので、同様の文様を施文する土器の編年的位置から、八日市新保2式～勝木原・御経塚1式土器（小島・西野・酒井1994、西野2003）の属する縄文時代後期末～晩期初頭頃の時期を想定できる。この1点のみから出土した岩版類全体の年代を推定することは難しいが、計14点という一遺跡でのまとまった出土量や、うち13点が自然流路右岸の捨て場からに限られる出土状況、各類にみられる身体表現等の共通性からは、長期にわたって用いられたものとは考え難く、ほぼ近接した時期の資料群であると考えられる。無文のものなどを含めると時期はもう少し下る可能性があるが、概ね後期末～晩期前葉頃までの時期幅に収まるものと考えたい。この年代幅は、岩版類が多く出土した捨て場下層のⅦc層・Ⅶc-2層の主体的遺物の年代とも一致し、また、これらの層の上部から掘り込みが確認される環状木柱列遺構等の柱穴群の時期が晩期中葉頃であると推定されることとも矛盾しない。

5．北陸地方における岩版類

(1) 北陸各県の岩版類とその特徴

次に、桜町遺跡から出土した岩版類が周辺地域においてどのように位置づけられるのかをみるため、北陸地方の縄文時代後期～晩期を主体とする時期の遺跡から出土した岩版類の集成をおこなった。集成にあたっては、その形状と石質に注目した。形状については、偏平な板状を呈するものを基本とするが、桜町のE類との関係から、一部に厚みをもつものも含めた。石質については、白色を呈する凝灰岩質のものを主体とした。なおここでは、北陸地方の範囲を北陸系の土器が主体的に出土する地域に限定し、石川県・富山県・新潟県上越地域の遺跡の出土品を取り扱った（註2）。同



第４図　北陸地方出土の岩版類と関連遺物　（縮尺１／４）

【石川県】15：白山遺跡、16：チカモリ遺跡、17･33：真脇遺跡、18～23：六橋遺跡、24：御経塚遺跡、25：酒見新堂遺跡
26･34：乾遺跡・【富山県】27～29：早月上野遺跡、30：北代遺跡・【新潟県上越地域】31：寺地遺跡、32：籠峰遺跡

様の条件をもつ福井県内の遺跡についても類例をさがしたが、現在のところ明確な資料は確認できていない。

こうした基準による集成の結果、管見にふれた岩版類出土遺跡数は、桜町遺跡を含めて12遺跡、出土点数は32点となった。このうち14点は桜町遺跡出土で約半数を占めるが、その他の遺跡では数点ずつの出土にとどまる。以下、各県ごとに概観する。

石川県（第４図：15～26・33・34）

７遺跡から12点の岩版類の出土を確認した。

Ａ類は、白山市の白山遺跡から盲孔を有する１類が１点出土している（15）。下半部を欠く破片資料で、両面に擦痕が認められる。表面の盲孔の下には正中線とみられる縦方向の沈線を有し、数度のなぞり痕が認められる。また、側縁部には、敲打によるものとみられる小さな窪みや剥離が認められる。

Ｂ類は、盲孔を有する１類が、金沢市のチカモリ遺跡から１点、小松市の六橋遺跡から４点、能登町の真脇遺跡から１点の、計６点が出土している。チカモリ遺跡出土のものはやや青みがかった凝灰岩製で、片面の中央に盲孔をもち、その周囲には不規則な直線状の線刻がみられる（16）。裏面には線刻によって二重の円を描き、その中心に十字状のやや深い線刻を施す。また、その線刻の間にも浅い線を放射状に描く。六橋遺跡出土のものには完形品が３点（18～20）、破片資料が１点（21）ある。いずれも盲孔以外には文様が無く、両面には明瞭な擦痕が認められる。18は両面に盲孔を有する稀有な例である。真脇遺跡出土の17は、一側面を欠く破片資料である。表面に上下２つの盲孔をもち、一方の盲孔の上部を一周する沈線によって区画する。裏面には４本、側面には２本の縦方向の沈線を施す。

Ｃ１類は、六橋遺跡から１点出土している（22）。上部と下端部の一部を欠く破片資料で、下端部に小さな切込みを入れて脚部を表現している。片面に盲孔を有し、その上部を一周する沈線によって区画する。両面に明瞭な擦痕が認められる。

Ｅ１類は、六橋遺跡から１点出土している（23）。上部に盲孔を有し、その周囲を中心に細い線刻を施す。また、盲孔の右横と左側面の下部の２箇所には、切りつけたような深い線刻をもつ。表面の下部と裏面の上部には敲打痕が認められる。

石川県内ではまた、上記のＡ～Ｅ類に分類される以外の形態的特徴をもつ岩版類も出土している。志賀町の酒見新堂遺跡では、楕円形を２つ繋げたような「ダルマ形」を呈する岩版類が１点出土しており（25）、このようなくびれを持つ形態のものを新たにＦ類として分類することとする。完形の資料で、盲孔を有しない。主体となる文様は両面の上半部にあり、横方向に平行する沈線の間や上下に菱形や三叉状の陰刻を規則的に配する。片面では、この平行沈線の上部に鋸歯状の薄い線刻文もみられる。また、平行沈線間に陰刻を並べた文様帯は、頂部側面にもみられる。全体的に細かな敲打痕を有するが、鋸歯文のある面の下部には研磨痕がみられる。Ｆ類に属するとみられる資料はもう１点、野々市町の御経塚遺跡からも出土している（24）。約４cmの厚みをもつ大型のもので、片面の上部に盲孔を有する１類である。盲孔をもつ表面は平滑であるが、裏面は左右２方向から研

磨を受けて変形している。両側面には半円状の抉り込みによるくびれをもち、その下には縦方向の沈線が認められる。裏面の変形からはＤ１類に分類することも可能で、変形行為の前後でその分類が変わり得る可能性を想定できる資料である。図示していないが、下部の割れ面付近には擦り切り痕が明瞭に認められる。

白山市の乾遺跡からは、上部に２段の抉り込みをもつ非常に薄い岩版類が１点出土しており（26）、こうした特徴をもつものを新たにＧ類として分類する。一部を欠損する破片資料であるが、中央部に盲孔をもち、上部左右に２段の抉り込みがあったものとみられる。両面に擦痕が認められる。

この他に、岩版類の定義からは外れるが、腕をつくり出す「岩偶」が２点出土している。人体表現をもつ石製品として岩版類とも関連する可能性があることから、参考資料として挙げておく。33は、真脇遺跡から出土した軽石製のもので、中央に貫通孔をもち、その上部を一周する沈線によって区画する。両側部には腕状の突出部をもつが、その一方の先端と下半部を欠く。34は、乾遺跡から出土した白色の凝灰岩製のもので、頭部と左手を欠損する破片資料である。表面に盲孔とＭ字状の文様、裏面にはＴ字状の沈線文をもつ。

富山県（第４図：27～30）

桜町遺跡以外に２遺跡から、４点の岩版類の出土例を確認した。Ｂ類とＥ類がある。

Ｂ類は、魚津市の早月上野遺跡から３点出土している（註３）。盲孔を有する１類が１点（27）、有しない２類が１点（28）、破片のために盲孔の有無が確認できないもの１点（29）がある。Ｂ１類の27は下半部を欠く破片資料であるが、断面の上に盲孔が半分ほど確認できる。盲孔の上部には、連結三叉文状の沈線区画が認められるが、上下を逆とした場合、パンツ状の文様の区画となる可能性もある。下半部のほかに、側面の一部も人為的に欠いている。Ｂ２類の28は、片面を平滑に研磨した完形資料である。同様の研磨は、盲孔の有無を確認できない29でも確認できる。

Ｅ類は、富山市の北代遺跡から１類の破片資料が１点出土している（30）。出土したのは上半部のさらに1/4ほどの部分とみられるが、全体を復元すると、長さ16cm 以上、幅約13cm、厚さ６cm 以上となる大型のものであった可能性がある。盲孔の上下と頂部に連結三叉文の一部とみられる文様をもち、側面にはそれよりも大きい三叉文を配する。また、盲孔下部に配された三叉文の２つの端部には、ともに回転穿孔によるものとみられる未貫通の円孔が付されている。

新潟県上越地域（第４図：31・32）

２遺跡から２点の岩版類の出土例を確認した。Ａ類とＦ類がある。

Ａ類は、上越市の籠峰遺跡から１類が１点出土している（32）。隅丸長方形を一方の対角線で切断したような形状の、約半分の破片資料である。表面上部には盲孔を、その上部には弧線をつなげた眉状の沈線文、左右には背反する弧線を配して顔部を表現する。裏面には、縦位方向に対向する三叉文や渦巻文を施文するが、側縁部では途切れている。側面には明瞭な研磨痕が認められることから、施文後に形状が改変されている可能性がある。

Ｆ類は、糸魚川市の寺地遺跡から１点出土している（31）。下半部を欠く破片資料で、残存部分には盲孔は認められない。平行沈線上に菱形や三叉状の文様が連結する文様を全面的に施文する。

片方の側縁部には、敲打によるものとみられる欠損がある。

(2) 分布と時期

以上のように、北陸地方においてはA～G類に分類される7種の形態的特徴をもつ岩版類が確認された。各類別にみると、A類が石川県・富山県・新潟県（上越）、B類・C類・E類が石川県・富山県、D類が富山県、F類が石川県・新潟県（上越）、G類が石川県に分布しており、富山県で未確認のF類・G類以外については、いずれも桜町遺跡がその分布の中心となっている。

このうち、出土した遺跡の時期幅によってその所属時期をほぼ確定できるのは、G類とした石川県乾遺跡出土のものである（26）。この遺跡は、晩期末～弥生前期頃の配石遺構を中心とする遺跡で、その他の時期の遺構・遺物は確認されていない。共伴する遺物の時期幅が限られることから、この時期への位置づけが可能なものと考えられる。現在のところこの1点のみの例であるが、晩期末頃に特徴的なものの可能性がある。

次に、岩版類に施された文様を手がかりとした場合、F類には後期後半に位置づけ得る要素が認められる。石川県酒見新堂遺跡と新潟県寺地遺跡から出土したF類にみられる菱形や三叉状の陰刻の配列からなる文様の時期については、八日市新保2式土器の連結三叉文との類似から、ともに後期末頃に限定する見方もできる。しかし、酒見新堂遺跡からは現在のところ後期中葉の酒見式期の遺物しか出土しておらず、出土した岩版類（25）にも平行沈線間の文様区画や鋸歯文を伴うなどのやや古い文様要素が認められることから、後期中葉まで遡る遺物である可能性が指摘されている（戸澗2001）。また、その両面にみられる細かい敲打調整痕についても、加賀・能登地域で加曽利B式併行期に伴うとされる「敲打製磨製石斧」との共通性が指摘されている。このようなことから、酒見新堂遺跡出土例については、該期まで遡る可能性をもつ後期後半の遺物として位置づけることとする。一方、寺地遺跡出土の岩版類（31）の文様については、並行する沈線上に陰刻を配する「出字状文」のような文様構成をもつことから、後期末～晩期初頭の時期に位置づけることが妥当であろう。このように、F類については桜町遺跡出土の岩版類と同時期か、やや先行する時期が推定される。

また、E類としたうちの富山県北代遺跡出土のもの（30）には、連結三叉文とみられる文様の断片が3箇所に施文されており、桜町遺跡出土のE類（14）と同じく後期末～晩期初頭頃に位置づけ得るものと考えられる。そのほかA類では、新潟県籠峰遺跡出土のもの（32）の裏面に渦巻状の線刻等の文様が認められる。欠損部があるために確定はできないが、この渦巻文はさらに上方に続いて「S字文」の一部をなしていたとみることもでき、そうであれば、同様の文様をもつ東北地方の「第2類岩版」（天羽1965・稲野1983）との対比から、晩期前葉の大洞BC式期に位置づけ得る可能性がある。ただし、A類については文様を有しないものも多く、形態的に類似した東日本地域の岩版が晩期後葉まで存続することなどからは、さらに広い時期幅をもつ可能性もある。

以上のように、北陸地方の後・晩期の遺跡から出土する岩版類のうち、F類は後期後半、E類は後期末～晩期初頭、G類は晩期末葉に位置づけられる可能性がある。A～D類については詳細な時期の比定をおこなう積極的な材料に欠けるが、大きくは出土した各遺跡に共通する時期幅である、

後期末～晩期前葉頃までの間に収まるものと推察される。

6．他地域における岩版類の類例

これまでみてきたように、北陸地方には白色の凝灰岩を用いた岩版類が散発的ながらも広く分布しており、その時期は縄文時代後期後半から晩期にわたるものと推定される。しかし、このような板状の石製祭祀具をつくり出すような伝統的要素はそれ以前の北陸地方の遺跡・遺物には認められず、その出土の背景には他地域からの影響を考えざるを得ない。

そこで本項では、北陸地方への岩版類の波及について他地域との関係をみるため、北陸以外の各地の岩版類を対象に集成をおこなった。集成にあたっては、北陸地方の岩版類について想定される後期後半～晩期前葉頃の時期に属する資料を中心とし、形態についてもA～G類と似た特徴をもつ資料のみを取り扱うこととした。石質については、白色を呈する凝灰岩質のものを中心とするが、一部に砂岩質や泥岩質のものも含めた。

なお、形態的に北陸地方のA類やB類に分類できる同種の遺物として、東北地方や関東地方に特有の文様をもつ晩期の岩版があるが、天羽や稲野による集成が既にあることから（天羽1965、稲野1982・1983a・b）、ここでは割愛した。また、E類に属する資料の一部についても同じく稲野による集成があるが（稲野2004）、これについては稲野の用いた資料に筆者が新たに知り得た資料を追加して紹介する。

《東北地方》

東北地方は、後期前半の岩版とともに、晩期の岩版も数多く分布する地域であり、その発生地とみられている地方である。しかし、晩期の岩版についてみると前葉以降の時期ものが多く、北陸地方のE類やF類から推察される後期後半～晩期初頭に属する資料は意外と少ない。以下、北陸地方と類似した岩版類の出土例について、各県ごとに概観する。

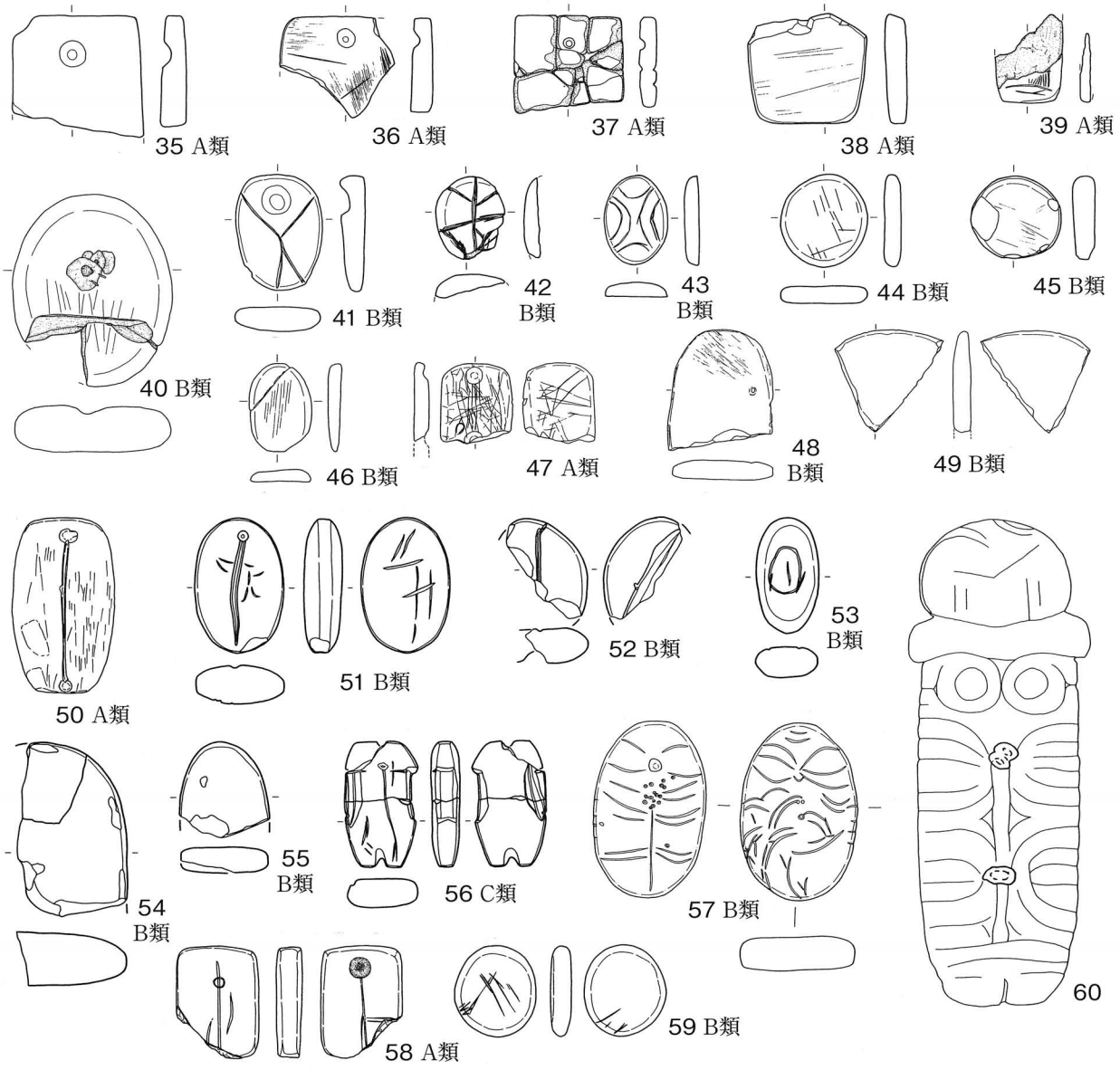
青森県（第5図）

6遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類の出土を確認した。この中には晩期の岩版を多量に出土した三戸郡三戸町の泉山遺跡、田子町の石亀遺跡、八戸市の八幡遺跡、是川中居遺跡を含むが、これらの遺跡の出土品については形状がわかる一部のものだけを取り扱う。A類、B類、C類がある。

A類は、泉山遺跡、石亀遺跡、是川中居遺跡、青森市の長森遺跡から出土している。35～39は泉山遺跡のもので、晩期前葉の時期を中心とする遺物とともに出土している。35～37は表面の上部に盲孔をもつ1類、38・39は破片であるため盲孔の有無が確認できない資料である。39にはパンツ状の線刻の一部が、36や38には明瞭な擦痕が認められる。47は石亀遺跡出土のもので、破片ではあるが片面の上下2ヶ所に盲孔が認められる1類である。上下の盲孔の間に数度にわたってなぞったような正中線状の線刻がみられるほか、両面に擦痕が明瞭に認められる。同遺跡では、晩期前葉から中葉にかけての遺物が出土している。50は是川中居遺跡出土のもので、片面の上部と下部に盲孔をもつ1類である。2つの盲孔の間には正中線をもつ。縦方向の明瞭な擦痕のほか、赤彩の痕跡も認められる。同遺跡からは後期～晩期後葉の遺物が出土しているが、晩期前葉～中葉の時期

のものが主体である。58は長森遺跡出土の１類で、下部を欠く破片資料である。表裏ともに正中線をもち、表面ではその上部に盲孔を、裏面では正中線に若干重なる上部の位置に円形の沈線文を配する。晩期前葉の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

Ｂ類は、泉山遺跡、石亀遺跡、八戸市の八幡遺跡、青森市の源常平遺跡、長森遺跡から出土している。40～46は泉山遺跡出土のもので、40と41は片面に盲孔をもつ１類、42～46は盲孔をもたない２類である。40の盲孔部には敲打痕が認められる。41～43には身体部位を表現したような線刻が、44～46には明瞭な擦痕が認められる。48と49は石亀遺跡出土のものである。ともに破片であるため盲孔の有無が確認できない資料であるが、48にはやや不規則な位置に回転穿孔による未貫通の小孔がみられる。51～55は八幡遺跡出土のもので、51は表面の上部に盲孔をもつ１類、53は盲孔



第５図　東北地方出土の岩版類と関連遺物①・青森県　（縮尺１／４）

35～46：泉山遺跡、47～49：石亀遺跡、50：是川中居遺跡、51～56：八幡遺跡、57：源常平遺跡、58･59：長森遺跡、60：土井Ｉ号遺跡

をもたない２類、他は破片であるため盲孔の有無が確認できない資料である。51と52には正中線が、53には楕円形の沈線文が認められる。54と55には文様がみられないが、報告書掲載の写真では擦痕が明瞭に認められる。いずれも、晩期前葉の時期を中心とする捨て場より出土している。57は青森市の源常平遺跡出土のもので、表面の上部に盲孔をもつ１類である。大洞Ｂ式期の住居跡の床面から出土している。盲孔の上部には眼部表現ともみられる弧線、下部には正中線をもち、その左右にほぼ２条１対となる弧線文が配されている。また、盲孔と正中線の間を中心に、回転穿孔によるものとみられる未貫通の小孔が集中して認められる。裏面では、上部に表面と同様な弧線、下部にはほぼ２条１対となる弧線文が不規則に配され、中央部には回転穿孔によるものとみられる未貫通の小孔が認められる。59は長森遺跡出土の２類である。晩期前葉の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

Ｃ類は、八幡遺跡から１類が１点のみ出土している（56）。上部の一部を欠くほかはほぼ完形の資料で、表面の上部には盲孔を、その下には正中線をもつ。一側面には縦方向に長い抉り込みがみられ、もう一方の側面には同様な抉りを入れるためのものとみられる切り込みが認められる。上下２ヶ所にも切り込みが認められ、下部のものは脚部を表現したものとみられる。晩期前葉の時期を中心とする捨て場より出土している。

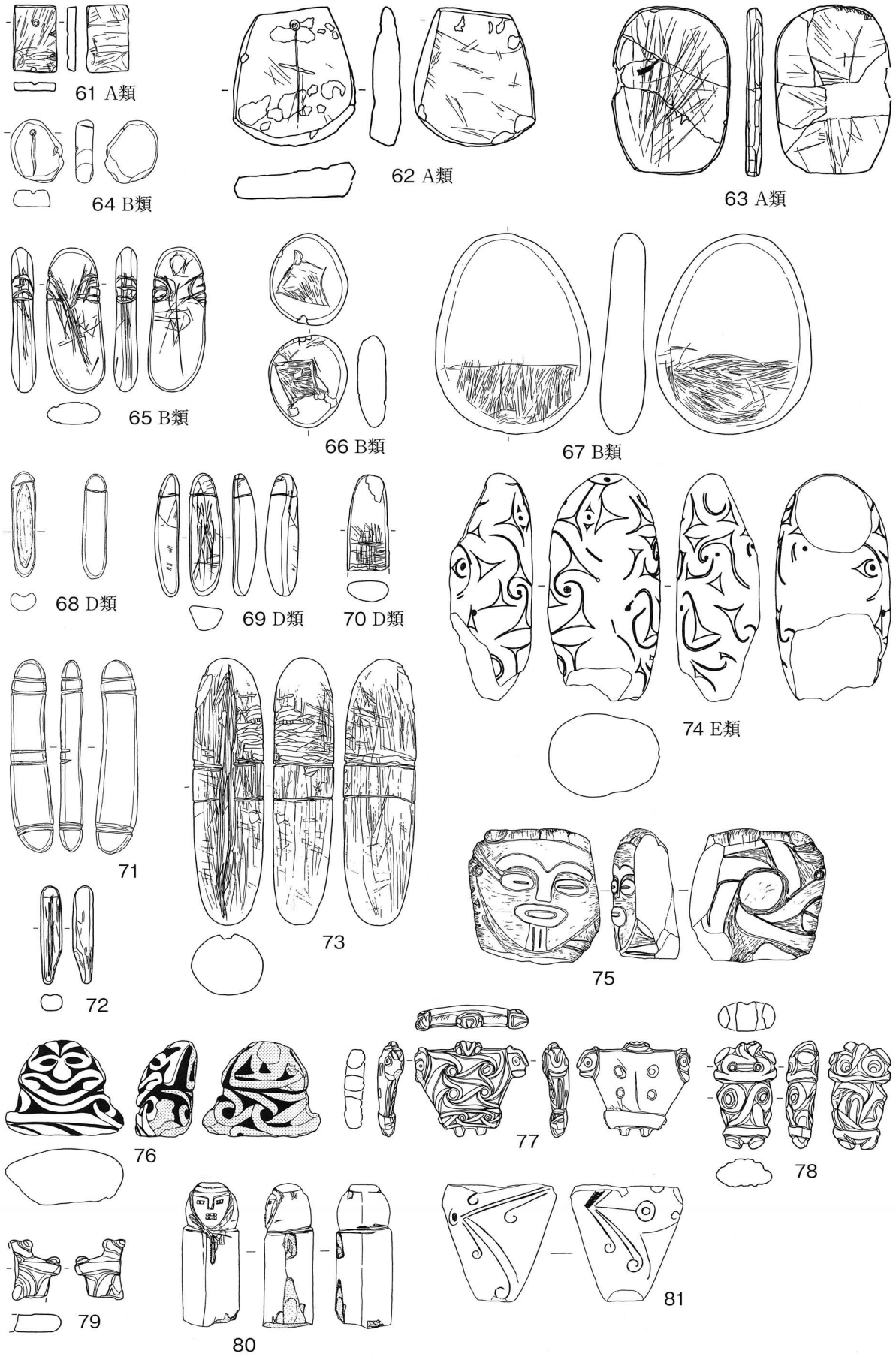
この他に、北津軽郡板柳町の土井Ｉ号遺跡からは、岩版類と同じ白色の凝灰岩を用いた「岩偶」が１点出土している（60）。文様構成や敲打痕を有する点に本稿で扱う岩版類との類似がみられることから、参考資料として挙げておく。扁平で縦長の形態をもつもので、一端に丸く大きな頭部をつくりだす。頭部の下には腕または肩の表現ともみられる左右への張り出し部があり、表面ではその下に円文と三叉文からなる胸部表現がみられる。胸部の下には二本の正中線が平行して引かれ、正中線の左右には重弧線文と三叉文が交互に配されている。同様の文様表現は、裏面にもみられる。下端部には、脚部を表現したものともみられる縦方向の切り込みがある。表面の正中線上には、上下２ヶ所に敲打によるものとみられる凹みが認められる。

秋田県（第６図）

５遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類の出土を確認した。Ａ類、Ｂ類、Ｄ類、Ｅ類がある。

Ａ類は、大館市の家ノ後遺跡から１類が３点出土している。61は、表面の上部に盲孔をもち、表裏面とも下半部にパンツ状の意匠を描く。東北地方の晩期の岩版に特徴的にみられる直線的な辺からなる方形を呈する資料であるが、文様構成では典型的な東北地方の岩版の類型から外れる資料である。62は、やや不整形であるが、表面に盲孔と正中線をもつ。63は、側面を面取りした楕円形に近い形態をもつ。図には描かれていないが、盲孔と正中線をもつという（註４）。いずれも擦痕が全面に認められる資料で、出土した捨て場の同一層位からは、主として晩期前葉の時期の遺物が出土している。

Ｂ類は、北秋田市の向様田Ｄ遺跡から１類が１点、白坂遺跡から２類が３点出土している。64は向様田Ｄ遺跡出土の１類で、周囲全面にわたって研磨を受けた不整形な資料である。変形行為後の形態である可能性が高いが、現状からＢ類に分類する。表面に盲孔と正中線をもつ。出土した遺物



第６図　東北地方出土の岩版類と関連遺物②・秋田県　（縮尺１／４、ただし 81 は縮尺不同）

61 ～ 63：家ノ後遺跡、64：向様田Ｄ遺跡、65 ～ 67・69・70・72・73・76 ～ 79：白坂遺跡、68・71・75：藤株遺跡、74：中小坂遺跡、80：湯出野遺跡、81：才の神遺跡

集中地点からは、主として晩期前葉の時期の遺物が出土している。65～67は白坂遺跡出土の２類である。65は縦長の楕円形を呈する資料で、上部の両側縁に弧線と短沈線からなる腕部様の表現をもつ。表面には正中線のほか、円形を描いたとみられる２つの線刻が上部と中央部に認められる。66は表裏面の中央部にパンツ状の意匠を、67は同じく表裏面の下部に腰蓑状の意匠を描く。65～67が出土した地区からは、主として後期末～晩期前葉の時期の遺物が出土している。

Ｄ類は、北秋田市の藤株遺跡から１点、白坂遺跡から２点出土している。いずれも盲孔をもたない２類である。68は藤株遺跡出土のもので、完形品である。上部を一周する沈線で区画しており、１面には縦方向の溝状の抉り込みがみられる。69・70は白坂遺跡出土のものである。69は完形品で、断面は不整な台形を呈する。上部を一周する沈線で区画し、一面に縦方向の擦痕がみられる。70は下半部を欠く資料で、片側にのみ平坦面をもつ。平坦面の上部とみられる位置に横方向の沈線をもち、その近辺に縦横の擦痕がみられる。またこの両遺跡では、断面形が方形や楕円形を呈する石棒状の資料も出土している。71は藤株遺跡、72と73は白坂遺跡出土のものである。71と73は凝灰岩、72は砂岩を素材とするもので、ともに横方向の沈線をもつことから、他のＤ類とも関係する資料と考えられる。

Ｅ類は、鹿角郡小坂町の中小坂遺跡から１点出土している（74）。厚みをもつ扁平な卵形を呈し、玉抱き三叉文や入組三叉文などの文様を全面に施す。上部と下部に大きな欠損部があるため、盲孔の有無は確認できない。掲載した報告書の実測図では表現されていないが、表裏面の中央部と一側面に敲打痕をもつことや文様とは直接関係しない不特定な位置にも多数の回転穿孔による小さな円孔を有することなどが、稲野彰子の観察により確認されている（註５）。文様からは、晩期前葉の大洞Ｂ２式期に属するものと推定される。

この他に、藤株遺跡と白坂遺跡、そして由利本荘市の湯出野遺跡からは、異形の「岩偶」が出土している。人体を表現した石製品として岩版類との関係も想定されるため、参考資料として挙げておく。75は藤株遺跡出土のもので、凝灰岩製の頭部だけの破片資料である。表面には逆三角形の輪郭のなかに目・鼻・口を浮彫りし、顔を表現している。右側頭部には貫通孔、頭頂部右側には未貫通の穿孔がある。裏面にはＳ字状入組文が浮彫りされている。76～79の白坂遺跡出土のものも凝灰岩製で、明確な顔面表現をもつもの１点（76）と、東北地方の「第１類岩版」と同様の文様をもつ胴部に僅かに突出した頭部・肩部・脚部がつく抽象的な形態のもの３点（77～79）の、計４点が出土している。浮彫的な手法によるＳ字状入組文あるいは三叉状文から、晩期前葉に属するものと推定される。80は湯出野遺跡から出土している円筒形の石棒状のもので、石材は「泥岩と思われる」と報告されている。上部を一周する沈線によって区画し、その中に楕円形の輪郭とともに目・口・鼻からなる顔部表現がみられる。下部を欠く破片資料で、側面にも打撃を受けて剥離したような欠損部がみられる。同遺跡からは、後期末～晩期の遺物が出土している。

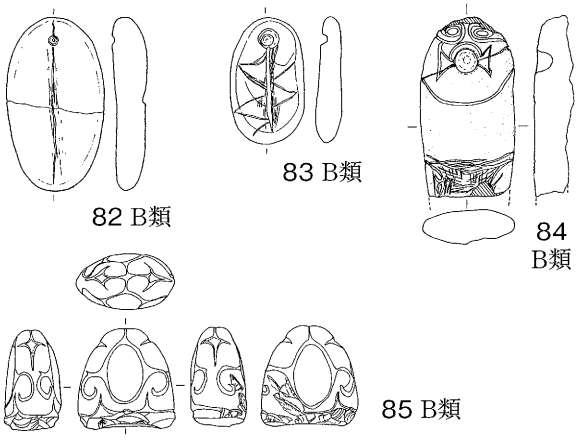
また、男鹿市の才の神遺跡からは、三角形あるいは台形となるような形状の岩版が１点出土している（81）。小林達雄によって大洞Ｂ１式期の岩版として挙げられたものの一つで（小林1967）、表裏両面に沈線による弧線文や円文が配される。上下部を欠くため不明な点が多いが、残存部の台形

を呈する形状からは、三角形岩版の系譜を引くものと推察される。

岩手県（第７図）

３遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類４点の出土を確認した。Ｂ類とＥ類がある。

Ｂ類は、盛岡市の手代森遺跡と萪内遺跡から出土している。手代森遺跡では23点の岩版の出土が報告されているが、そのうち楕円形の２点が北陸地方のものと類似する（82・83）。いずれも表面の上部に盲孔を有する１類で、正中線をもち、83にはその両側に関東地方の岩版・土版にみられるような鋸歯状の沈線文が認められる。これらは、文様が少ないことから未製品とみられているが、文様が多いものとは系統が異なる可能性もある。文様をもつものには東北地方の「第２類岩版」に分類されるものが多く、晩期前葉の大洞ＢＣ式期に属するものと推定される。84は萪内遺跡出土のもので、表面の上部に盲孔をもつ１類である。下端部と頂部を欠く破片資料であるが、下部割れ面の上にパンツ状の線刻が認められる。中央から上を弧線によって区画し、その中にある盲孔の左右には三角形の線刻を施す。盲孔の上部には二重の楕円沈線文が左右に配され、眼部表現とみられている。供伴遺物が不明であるが、出土した地区では後期末～晩期初頭頃の遺構等が検出されている。



第７図　東北地方出土の岩版類③
岩手県（縮尺１／４）

82･83：手代森遺跡、84：萪内遺跡、85：泉屋遺跡

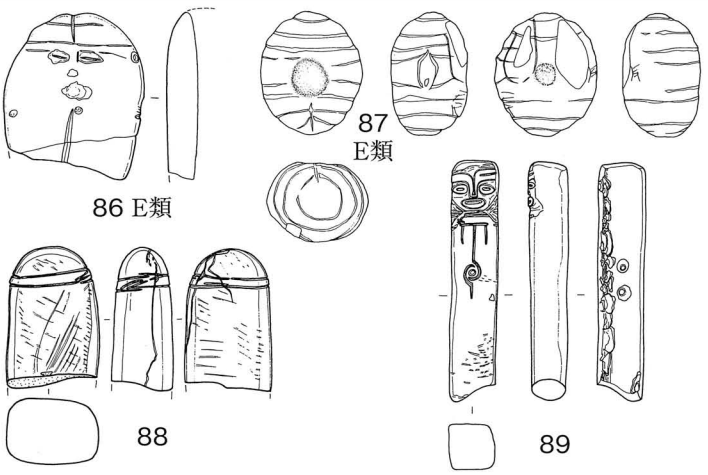
Ｅ類は、西磐井郡平泉町の泉屋遺跡から１点出土している（85）。下半部を欠く破片資料であるが、厚みをもつ卵形の形状のものと推定される。欠損部が大きいため、盲孔の有無は確認できない。文様は表裏とも同様で、楕円文や棘状文、菱形文などが左右対称に配される。周辺からは後期末～晩期初頭頃の遺物が出土している。

山形県（第８図）

２遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類２点の出土を確認した。いずれもＥ１類である。

86は、村山市の宮の前遺跡出土のもので、下半部と裏面を欠く薄い破片資料である。報告書（(財)山形県埋蔵文化財センター1995）では薄い板状になるように図上復元されていて、Ｂ類のようにもみられるが、実見によりかなりの厚みをもつＥ類となることを確認した。なお石材についても軽石と報告されているが、白色の凝灰岩であることを確認している。上部を２本の並行する沈線によって区画し、その上に十字状に交差する沈線が施文される。平行沈線の下には、眼部表現とみられる２つの窪みと、口を表現したとみられる盲孔を配している。盲孔の下には正中線をもつ。右上部と左下部、そして正中線のすぐ上の部分の３箇所に、回転穿孔によるものとみられる浅い穴が認められる。捨場中の、後期末～晩期初頭の廃棄単位が位置するグリッドから出土している。87は、同じ

く村山市に所在する作野遺跡出土のもので、偏平な卵形を呈する資料である。表裏両面に凹みをもつが、これが回転穿孔によるものか敲打によるものかは、公表されている実測図からは判断できない。横方向に８本の平行する沈線をめぐらすが、中央付近の２本は側面で縦方向の弧線と連結し、玉抱三叉文風の文様を形成する。表面の一端には縦方向の短沈線も認められる。文様から、晩期初頭～前葉頃のものと推定される。



第８図　東北地方出土の岩版類と関連遺物④
山形県　（縮尺１／４）

86･88･89：宮の前遺跡、87：作野遺跡

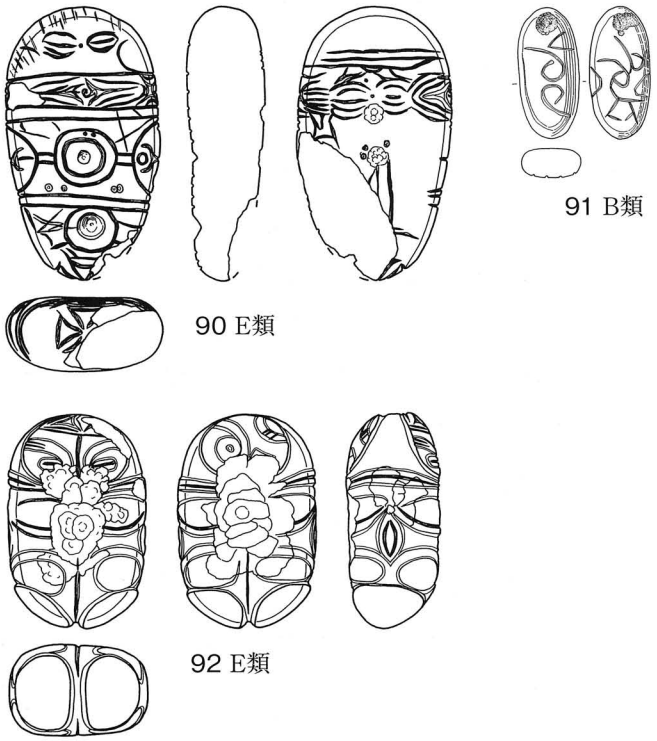
この他に、宮の前遺跡からは、石棒状の石製品で上部に人面を彫刻した「岩偶」が１点出土している（89）。下部を欠損する破片資料であるが、角柱状の一面の上部に目、鼻、口を浮き彫りして顔面を表現し、下部には玉抱き三叉文をもつ。裏面では、一方の角の部分に敲打によるものとみられる連続した潰れのほか、中央部に２ヶ所の回転穿孔による小孔がみられる。敲打や回転穿孔等の痕跡をもつことから、同様の痕跡をもつ岩版類との間に、何らかの関係を有する可能性がある。

宮城県（第９図）

３遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類３点の出土を確認した。Ｂ類とＥ類がある。

Ｂ類は、大崎市の中沢目貝塚から１類が１点出土している（91）。泥岩製で、両面の上部に敲打による盲孔をもち、片面には入組三叉文状の線刻、もう片面には入組まない弧状の線刻が認められる。文様から、晩期前葉の大洞ＢＣ式期のものと推定される。

Ｅ類は２点あり、いずれもＥ１類に分類される資料である。92は、東松島市の里浜貝塚（台囲地区）から出土した完形の資料である。楕円形で、非常に厚い形態をもつ。上部を隆帯によって区画し、顔面と後頭部を一段高い円形に作り出す。隆帯には沈線が伴う。顔面は上部に三叉



第９図　東北地方出土の岩版類⑤
宮城県（縮尺１／４）

90：沼津貝塚、91：中沢目貝塚、92：里浜貝塚

文を描き、眉状の表現と遮光器状の目を陽刻で表現する。体部には両面に正中線をもち、その両側に弧線文と連結三叉文、楕円文を対称的に配置する。中段の連結三叉文は側面部で紡錘形の弧線文を挟み、玉抱三叉文風の文様を形成する。下端部には左右に楕円形の隆起部を作り出し、脚部を表現する。表裏両面の中央部には、明瞭な連続する敲打痕がみられる。文様から、後期末～晩期初頭頃の時期に属するものと推定される。90は、石巻市の沼津貝塚から出土した資料である。先にふれたとおり、小林達雄によって晩期初頭の大洞Ｂ１式期に位置づけられた資料である。楕円形で、非常に厚い形態をもつ。裏面を中心として下部に欠損が認められるが、ほぼ全形のわかる資料である。表面は横方向の沈線によって大きく４段に区切られ、最上段に遮光器状の眼部と口、２段目に弧線による縁取りを伴う玉抱き三叉文を描く。３段目と４段目はそれぞれ盲孔を中心として円形文、三叉文を描く。３段目には、やや変則的な位置に回転穿孔による小さな円孔が６ヶ所みられる。裏面は上部を横断する三本の沈線によって区画し、その下に表面から連続する三叉文と弧線文を横位に描き、下部に縦方向の沈線を描く。裏面の中央部には２ヶ所に明瞭な敲打痕がみられ、その脇にも回転穿孔による３つの小さな円孔がみられる。底面には三角形を十字状に組み合わせた文様を沈線で描く。

福島県（第10図・11図）

３遺跡で、北陸地方のものに類する岩版類の出土を確認した。なかでも、いわき市の薄磯貝塚では、後期末～晩期前葉頃の層位から北陸の遺跡で見られるような様々な形態的バラエティーをもった岩版類が200点ちかくも出土しており、注目される。その出土量は全国的にみても群を抜いており、この遺跡が該期の岩版類を用いた祭祀の中心地であったとも推測されている（小杉1998）。このようなことから、この段階での北陸への岩版類の波及についてもその主たる発信地であったことが考えられ、桜町遺跡との間にも関係があった可能性をもつ遺跡である。ここではまず、その薄磯貝塚を個別に取り上げ、その後に他の遺跡の資料について概観する。

薄磯貝塚出土資料（第10図）

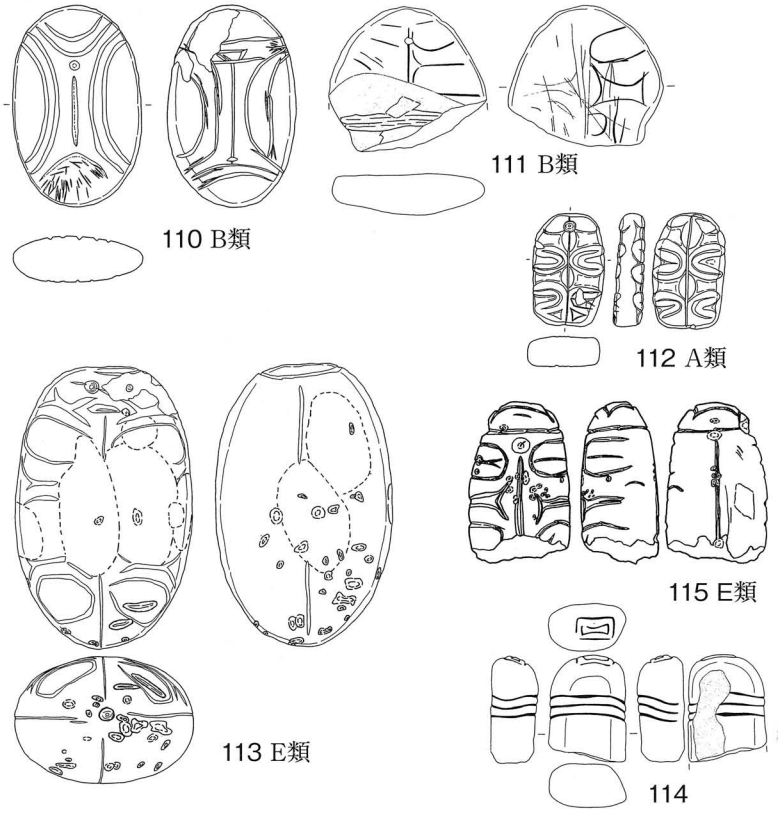
いわき市の薄磯貝塚（Ａ地区貝塚）からは、様々な形態の岩版類が大量に出土している。出土した岩版類の正確な数量は不明であるが、報告書では194点の資料が報告されており、素材のようなものを含めれば、その総数は200点を超えるものと推察される。またその数量とともに、様々な形態や文様表現をもった資料を含んでいることにも特徴がある。文様をもつもののうち、最も数量が多く代表的なものは「パンツ形文様」と呼ばれる台形状の沈線区画文を持つ一群であるが（94～97・109）、その他にも、東北地方北部の「第１類岩版」と共通した文様をもつもの（93）や、関東地方の土版と共通した文様をもつものなどがある。形態には、楕円形・方形の板状のものや、手や足の表現をもつもの（108・109）、不定形のもの（106）、厚みをもつ卵形のもの（107）などがある。不定形のものが相当あり、単純に北陸地方の類型に当てはめることは難しいが、Ｂ類に該当する楕円形のものが圧倒的に多い。また、少量ながらＡ類やＣ～Ｅ類にあたるものも存在しており、桜町遺跡出土の岩版類にみられる諸形態はすべて存在する。また、盲孔やパンツ形文様などの身体表現をもつものが多いこと、敲打や打ち欠きなどの故意によるものとみられる変形行為の痕跡が数多く

第10図　東北地方出土の岩版類と関連遺物⑥・福島県薄磯貝塚　（縮尺1／4）

認められることも桜町遺跡出土品と共通する特徴である。これらの所属時期は、出土層位等から後期末～晩期前葉とみられている（小杉1998）。

その他の福島県出土資料（第11図）

薄磯貝塚以外に２遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類５点の出土を確認した。A類、B類、E類がある。



第 11 図　東北地方出土の岩版類と関連遺物⑦
福島県（縮尺１／４）

110 ～ 114：宮畑遺跡、115：西方前遺跡

A類は、福島市の宮畑遺跡から1類が１点出土している（112）。表裏両面に正中線をもち、その両側には連結三叉文状の陰刻と外に開くU字型の浮彫りを交互に配する文様構成が左右対称にみられる。表面の上部には盲孔をもつ。完形の資料であるが、図や写真による観察では左上部や右下部が磨り減っているようにみられ、施文後に形状の改変を受けている可能性がある。文様構成からは、晩期初頭～前葉を中心とする時期のものと推定される。

B類は、同じく宮畑遺跡から１類が２点出土している。110は、裏面の上部に小さな欠損が認められるはかはほぼ完形の資料で、表面は上下・左右にそれぞれ背反する弧線が施文される。左右と上部が二重弧線であるのに対し、下部は単独の弧線となっており、その区画内には細密沈線が充填されている。中央には正中線をもち、その上部に盲孔が配される。裏面は、左右と下部が二重弧線で、上部は２本の直線によって区画している。中央に正中線をもち、その上に逆三角形の沈線文が施文されている。文様から年代を推定することは困難であるが、出土した調査区からは主に後期後葉から晩期中葉までの遺物が出土している。111は、下半部を欠く破片資料である。表面には正中線をもち、その上部に眼部表現とみられる２本の沈線と、口を表現したとみられる盲孔が配されている。正中線の左右には、U字状または三叉状になるとみられる沈線が配されている。裏面には、何度か引きなおされたとみられる細い正中線の右側に、U字状の区画と連結三叉文状の方形区画の線刻が上下に配されている。正中線の左側にも連結三叉文状の線刻が認められるが、二次的な研磨によるものとみられる摩滅により、かなり薄く細い線となっている。表面下部の割れ面付近には、途中までの擦り切り痕が明瞭に認められる。112によく似た裏面の文様構成からは、晩期初頭

～前葉頃を中心とする時期のものと推定される。

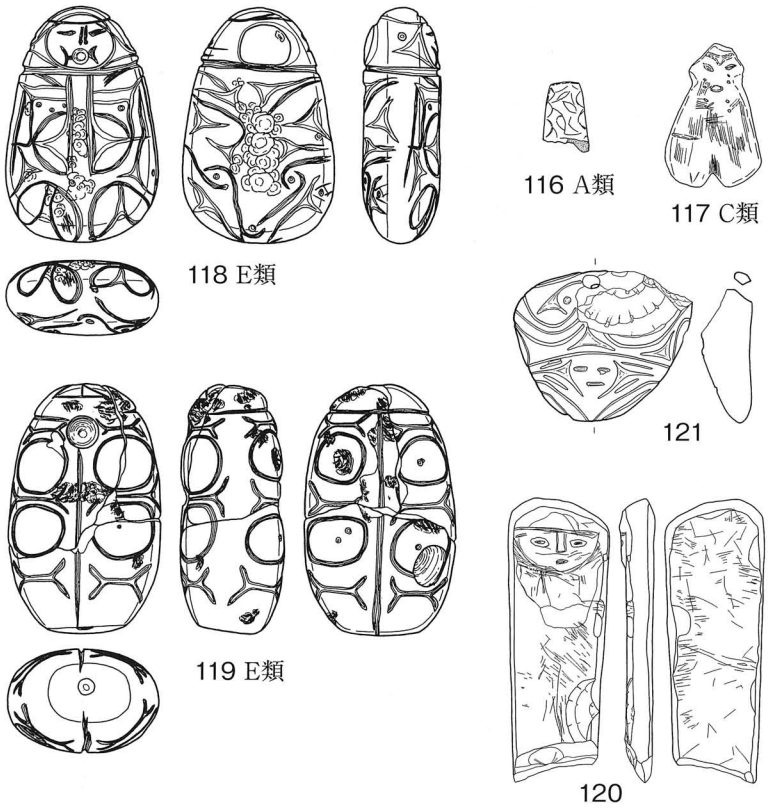
E類は、宮畑遺跡から１点、田村郡三春町の西方前遺跡から１点出土している。いずれも盲孔を有する１類で、桜町遺跡出土のE類に極めてよく似た卵形を呈するものである。宮畑遺跡出土の113は、長さ11.3cm、幅7.1cm、厚さ5.1cmのかなり大型の完形資料である。頂部をほぼ一周する沈線によって区画し、表面にはその下部に目と口からなる顔部表現がみられる。表裏と両側面に正中線をもち、表面ではその左右に連結三叉文と楕円沈線文を交互に配する文様がみられる。表裏両面の中央部付近では擦り面が大きく認められ、そのために文様が摩滅している。施文後の二次的な研磨によるものとみられる。底部中央には穿孔をもつ。また、下部を中心として敲打痕が多数みられるほか、表面右上部には打撃によるものとみられる欠損も認められる。文様構成から、後期末～晩期初頭頃の時期のものと推定される。西方前遺跡出土の115も、頂部を一周する沈線によって区画し、表面にはその下部に盲孔を配する。頂部には、連結三叉文あるいはパンツ状文様となるような沈線による方形区画が施文されている。表裏ともに正中線をもち、表面ではその左右に三叉文とU字状の沈線文を組み合わせた文様がみられるが、裏面では他の文様は認められない。また、不規則な位置の小孔が表面の両側部で２ヶ所認められるほか、裏面の右上には掻き取られたようなやや大きな窪み状の欠損がある。表裏両面の中央部には明瞭な敲打痕がみられる。全体的に、裏面には細かな擦痕が認められる平滑な面が多いが、表面は敲打によるものとみられる面の荒れが多い。また裏面の大部分には黒色のスス状のものが付着しており、火を受けた痕跡とみられる。下半部を欠く大きな破片資料である。出土した層位からは、後期末から晩期中葉の遺物が出土している。

この他に宮畑遺跡からは、岩版類と同じ白色の凝灰岩を用いた石棒が１点出土している。岩版類と関係を有する可能性があるため、参考資料として挙げておく。114がその資料で、扁平な棒状の上部を３本の並行する沈線によって区画し、頂部には沈線による長方形の区画内に、連結三叉文状の沈線文が施文されている。下部を欠く破片資料で、側面にも打撃を受けて剥離したような欠損部がみられる。

新潟県中越・下越地域（第12図）

新潟県北部の中越・下越両地域は、晩期において東北地方の亀ヶ岡文化に属する遺物が主体的にみられる地域であり、同文化圏の南端部に位置する。この地域では２遺跡から、北陸地方のものに類似した岩版類４点の出土を確認した。A類、C類、E類がある。

中越地域では、三条市の赤松遺跡からA類とC類が各１点採集されている。A類は一端を欠く破片で、厚さ約１cmの板状の資料である（116）。平面形は割れ面の側が広く、台形状の形態であった可能性がある。表裏両面に沈線による入組文が配されており、東北地方における第１類岩版の新段階または第２類岩版と対比できる時期のものと推察される。両面とも盲孔は確認できない。C類は、盲孔をもつ１類である（117）。厚さ1.8cmの板状で、頂部の一部を欠くほかはほぼ完形である。菱形のような形状の頭部と、下部に向かって直線的に広がる体部からなり、体部下端をV字形に切り込むことによって脚部を表現している。頭部には盲孔による口と短沈線による眼部、T字状の浮き彫りによる眉・鼻の表現がみられる。また、下部を中心として表裏両面に縦方向の擦痕が明瞭



第12図　東北地方出土の岩版類と関連遺物⑧
新潟県 中越・下越地域　（縮尺１／４）

116･117：赤松遺跡、118～120：元屋敷遺跡、121：熊登遺跡

に認められる。石材は褐色を呈する泥岩とみられている。採集品のために時期の判別は困難であるが、周辺の調査では後期末～晩期初頭と、晩期中葉の二時期の遺物包含層が確認されている。T字状の眉・鼻の表現が後期後半以降の山形土偶にみられる特徴に似ることや、東北地方の晩期前葉の岩版と対比できるようなA類があることを考えあわせれば、117のような岩版類も後期末～晩期初頭頃に属する可能性が高い。

下越地域では、岩船郡朝日村の元屋敷遺跡からＥ１類が２点出土している。118は3.9cmの厚みをもち、偏平な卵形を呈する完形資料である。上部を２本の一周する沈線によって区画し、その間に目・口・鼻からなる顔部表現がみられる。表面には対向する三叉文や楕円形の沈線文、裏面には小円孔を抱く入組文と三叉文が施されており、これらの文様から後期末～晩期初頭の時期に属するものと推定される。表面の胸部や側頭部の、文様とは関係しない不規則な位置に回転穿孔による小孔が認められるほか、表裏両面の中央に明瞭な連続する敲打痕がみられる。119は、桜町遺跡出土のＥ類に極めてよく似た卵形を呈する資料である。３つの大きな破片からなるが、接合によって完形資料となる。頂部をほぼ一周する沈線によって区画し、表面においてはその上部に三角形の沈線文、下部に盲孔を配する。表裏ともに正中線をもち、その左右に連結三叉文と楕円沈線文を交互に配する文様構成がみられる。下部は平坦な面をもち、その中央付近に深さ５㎜ほどの穿孔がある。また、118にみられたような不規則な位置の小孔が表面では１ヶ所、裏面では５ヶ所で認められるほか、裏面の左上と右下には回転穿孔によるものとみられるやや大きな円孔がある。表裏両面の中央部に明瞭な敲打痕がみられる。連結三叉文等の文様から、後期末～晩期初頭の時期に属するものと推定される。

この他に、異形の岩版が同じく朝日村内の熊登遺跡と元屋敷遺跡から各１点ずつ出土している。上記の岩版類とは石材が異なるため、ここでは参考資料として挙げておく。121は熊登遺跡出土の岩版で、粘板岩製と報告されている。やや歪な三角形の板状を呈し、片面にのみ文様が配される。文様は中央に横断する沈線によって上下に二分され、上部には玉抱き三叉文や重弧線文、下部中央

には顔面が表現される。顔面の両脇には三叉文が配されており、短沈線による眼部表現とともに元屋敷遺跡の118との共通性が認められる。中央上端には、両面穿孔によるものとみられる貫通孔が１ヶ所ある。また右上部には、打撃によるものとみられる欠損部が認められる。その形態から三角形岩版に類するものとみられるが、文様からは後期末～晩期初頭の時期に属するものと推定される。三角形岩版の系統が本稿で取り扱う岩版類に平行する時期にまで継続していたことを示すものとして貴重な例である。120は元屋敷遺跡出土の長い板状を呈する岩版で、頁岩製である。上部の顔となる部分を円形に浮彫りし、その中にさらにＴ字状の眉と鼻、粒状の目を浮彫りによって表現している。口は横方向の短沈線によって表現される。Ｔ字状の眉・鼻の表現をもつことから、後期後半以降の時期のものと推定される。

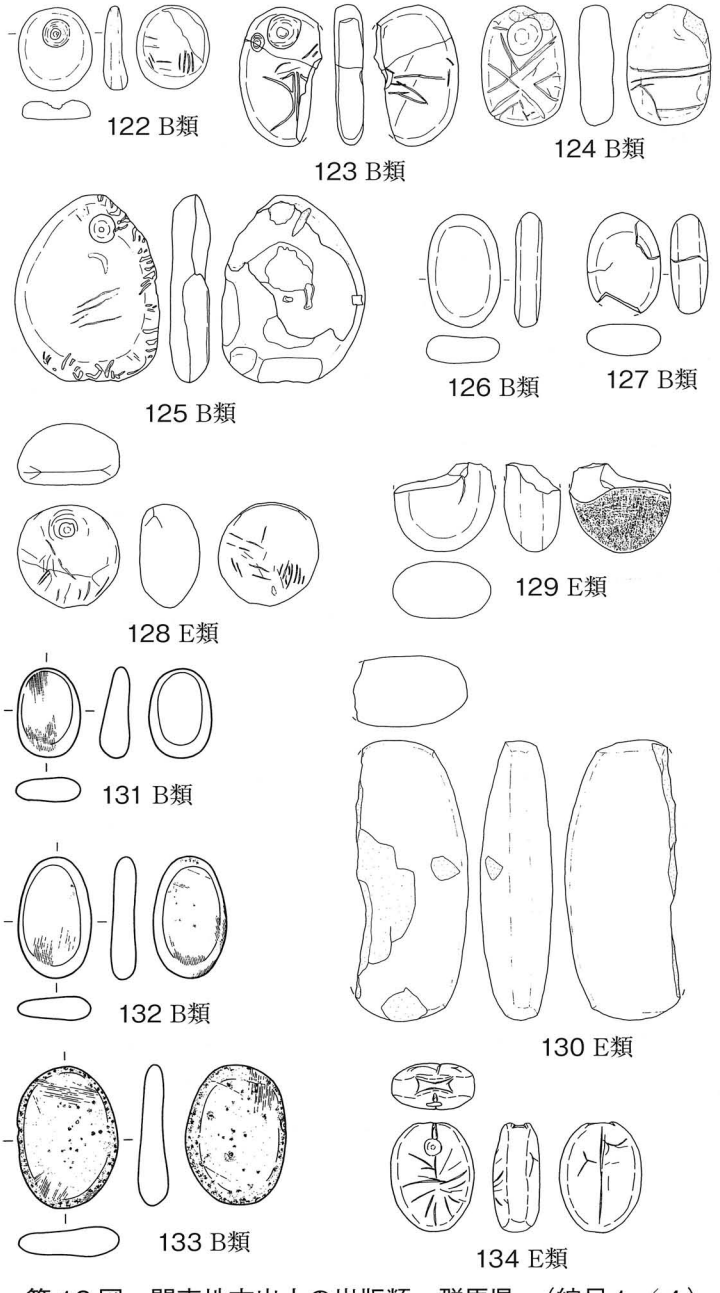
《関東地方》

関東地方は、東北地方と並んで晩期の岩版・土版が数多く分布する地方であるが、晩期前葉以降の時期に属するこの地域特有の文様をもつ定型化したものが主体で、北陸地方の岩版類と類似した特徴をもつ資料は少ない。ここでは管見に触れた群馬県の出土例を挙げる。

群馬県（第13図）

３遺跡で、北陸地方のものに類する岩版類13点の出土を確認した。Ｂ類とＥ類がある。

Ｂ類は、１類が渋川市の滝沢遺跡から４点、２類が滝沢遺跡から２点と同市の六万遺跡から３点出土している。122～127は滝沢遺跡出土品である。122はほぼ円形を呈する資料で、表面の上部に盲孔をもち、裏面には擦痕とみられる線状痕が確認できる。125は左側面と下部に線状痕が多数認められるやや歪な形状をもつ資料で、表面の上部に盲孔をもつ。左側面と下部の線状痕は、形状改変によるものの可能性がある。全体にくすんだ灰色を呈しており、火を受



第１３図　関東地方出土の岩版類・群馬県　（縮尺１／４）

122～130：滝沢遺跡、131～133：六万遺跡、134：茅野遺跡

けた可能性がある。裏面は大部分が欠けている。123は楕円形の左半部を欠く破片資料で、表面の上部に盲孔をもつ。盲孔の下部には、正中線と弧線などからなる文様が配される。盲孔の脇には、回転穿孔によるとみられる小円孔が１ヶ所みられる。背面には横方向の線刻をもつ。124は上部を一部欠くほかはほぼ完形の資料で、表面の上部に盲孔をもち、その下部に放射状に広がる沈線文を配する。裏面には平行する横方向の沈線文がみられる。126・127は２類である。131～133は六万遺跡出土の２類で、擦痕とみられる線状痕が認められる。

Ｅ類は、滝沢遺跡から３点と榛東村の茅野遺跡から１点の計４点出土している。128～130は滝沢遺跡出土品である。128は完形品で、片面が半球状を呈する厚みをもった資料である。表面の上部に盲孔をもつ１類で、頂部には連結三叉文状の線刻が認められる。表裏両面の下部には、擦痕とみられる線状痕が多数認められる。129も厚みをもった資料であるが、約半分の破片の為に盲孔の有無は確認できない。片面には格子状の線条痕が認められるが、意図的なものであるかは図だけからは判断できない。130は大きな卵型を呈する資料で、一側面を欠く。文様がまったく認められない２類である。134は茅野遺跡出土の完形品で、厚みをもつ資料である（註６）。表面の上部に盲孔をもつ１類で、下部には放射状に広がる短沈線や弧線からなる文様が配される。裏面には正中線をもち、その両側に斜め方向に相対する三叉文を描く。頂部には、桜町遺跡出土の14と同様の連結三叉文状の陰刻をもつ。頂部から盲孔の上にかけて、縦方向の短沈線が認められる。文様からは、後期末～晩期初頭頃の時期のものと推定される。

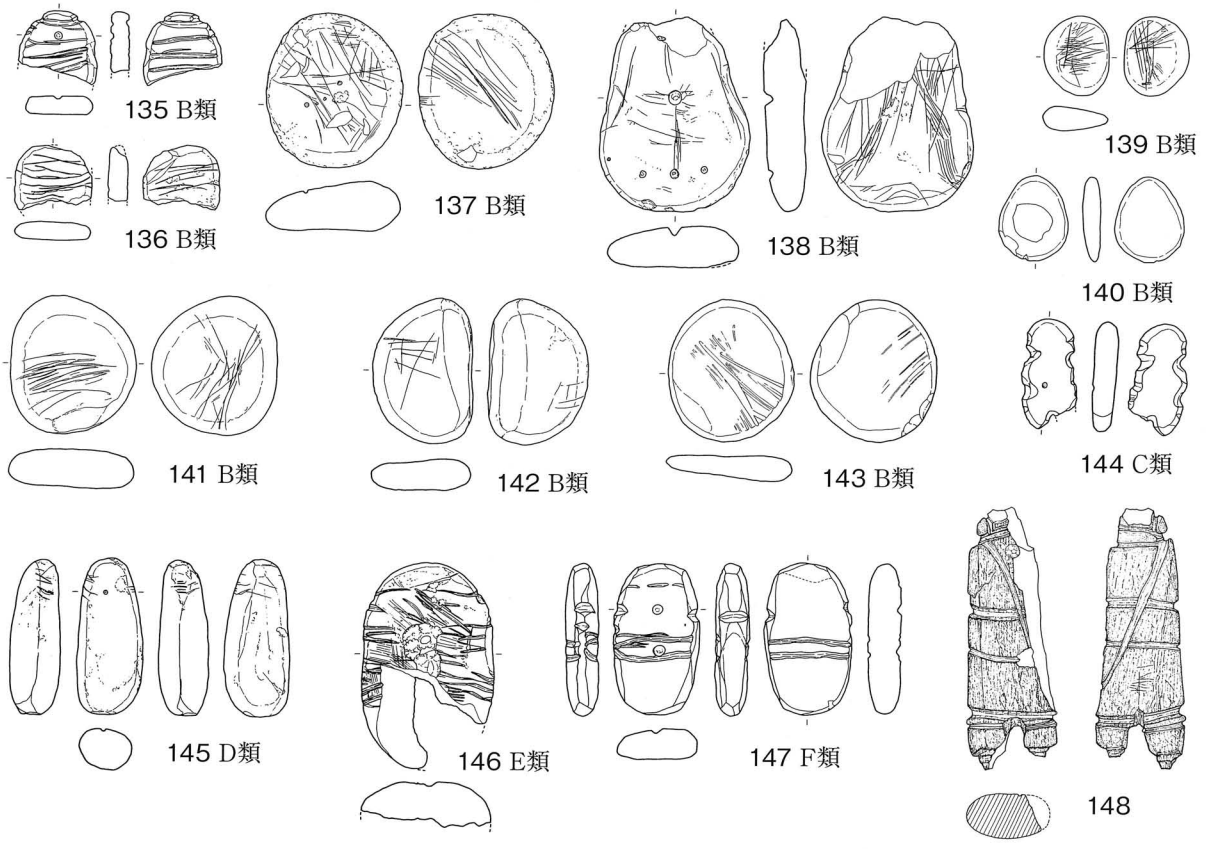
《東海地方》

東海地方では、三重県の遺跡において、岩版類のややまとまった出土がみられる。

三重県（第14図）

松阪市の天白遺跡において、北陸地方のものに類する岩版類13点の出土を確認した。Ｂ類・Ｃ類・Ｄ類・Ｅ類・Ｆ類がある。全て砂岩製で、後期後半の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

Ｂ類は、盲孔を有する１類が３点、有しない２類が５点、破片のために盲孔の有無が確認できないものが１点ある。Ｂ１類の135は下半部を欠く破片資料だが、表面の上部に盲孔が確認できる。盲孔の上部には、一周する沈線がめぐり、頂部を区画している。また、盲孔の下部には横方向の沈線を多条に施す。同様の条線は裏面にも認められる。137は、片面に４つの小円孔が並んだ状態でみられる完形の資料である。未貫通の円孔には、ある程度決まった位置に配される人体意匠とみられる盲孔と、不特定な位置に穿たれる変形行為の一環とみられる回転穿孔の２種類があるが、この資料の円孔はその判断が難しいものである。ここでは一応、他の３つの孔とはやや離れて中央部に位置する円孔を人体意匠の盲孔とみて、１類に分類する。表裏両面に擦痕とみられる多数の線状痕がある。138は、下膨れの洋ナシ形の平面形をもつものであるが、楕円形に近い形態であることからＢ類として扱う。上部を欠損する資料で、中央部に盲孔をもつ。盲孔の下には正中線とみられる数条の浅い線刻があり、その下には回転穿孔によるものとみられる小円孔が横方向に３つ並ぶように配されている。裏面には「ハの字」状の線状痕のほか、斜め方向の擦痕が認められる。全体的に煤けたような黒色を呈しており、火を受けている可能性がある。Ｂ２類の139～143には、ともに



第14図　東海地方出土の岩版類と関連遺物・三重県　（縮尺1／4）

135～147：天白遺跡、148：佐八藤波遺跡

擦痕とみられる線状痕が確認できる。盲孔の有無を確認できない136には、1類の135によく似た横方向の多条の沈線文がみられる。

C類は、やや異形なものが1点ある（144）。縦長の楕円形の両側面に大きく3段の切り込みを入れた形状のもので、頭部・腕部・下半身を区分して人体を表現したものとみられる。下方にも縦方向に切り込みをもち、脚部を表現したものとみられる。片面の中央からやや外れた位置には未貫通の小円孔が1つ認められ、人体を表現した意匠の一部の可能性がある。

D類は、盲孔を有する1類が1点ある（145）。棒状の楕円形を呈する資料で、両側縁に稜のある不定形の断面をもつ。上部の両側縁には多条の線刻がみられる。

E類は、盲孔を有する1類が1点ある（146）。片面が剥離した破片資料であるが、残存部からかなりの厚みをもつ卵形のものであったと推定されることから、E類に分類する。上部を沈線で区画し、その下に横方向の多条の沈線を施す。全体的に強く赤化しており、火を受けた痕跡とみられる。

F類は、盲孔を有する1類が1点ある（147）。隅丸長方形を呈する板状の形態の両側縁に、浅い刻みを入れたくびれ部をもつ。盲孔は、表面中央部付近の上下に2ヶ所みられる。表面では上方の盲孔の上に点線状の沈線が施されているが、裏面では認められない。一方、下方の盲孔を挟んで描かれる横方向の並行する沈線については、裏面でもほぼ同様の位置に平行する2本の沈線が描かれている。

この他に、伊勢市の佐八藤波遺跡からは、緑色片岩を用いた「岩偶」が１点出土している。148がその資料で、卵形の形態の下に脚部がつくものである。北陸地方ではこのような形態の岩版類はみつかっていないが、Ｃ類とＥ類の特徴を併せ持つ折衷型の資料とみることも可能であるため、参考資料として挙げておく。全体を横方向の沈線によって上下に大きく５段に区画し、表面の２段目に盲孔をもつ。右上半部を大きく欠損するが、表面ではこの割れに沿うように左上部から襷状に沈線が施されており、意図的な打ち割りに際して割れの方向をコントロールするための補助線であった可能性がある。

《近畿地方》

近畿地方では、岩版類の出土例は少ない。ここでは管見に触れた滋賀県と京都府の出土例を挙げる。

滋賀県（第15図：149）

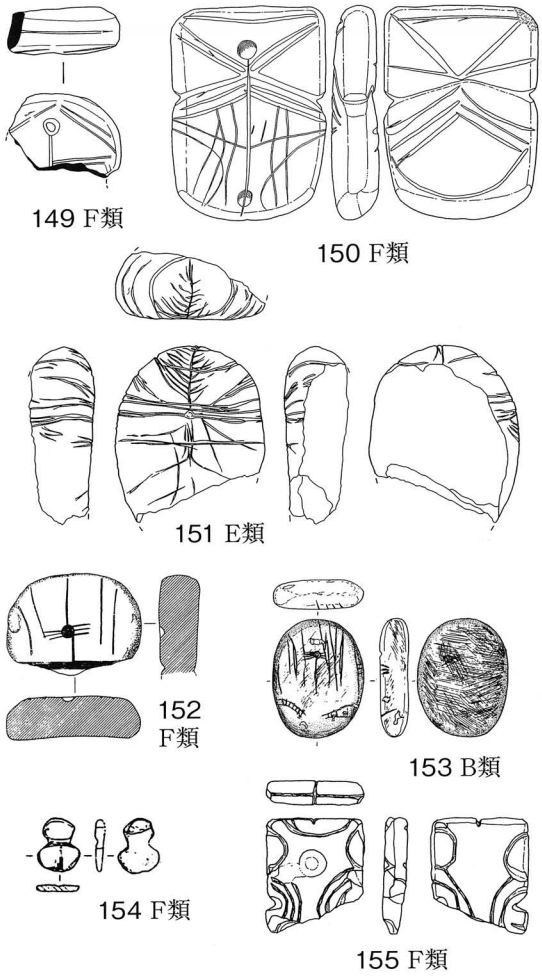
大津市の穴太遺跡からＦ１類が１点出土している。砂岩製で、半分以上を欠く破片資料である。盲孔の下部に正中線をもち、周囲には斜行する沈線が菱形状に配されている。頂部にも沈線がみられる。後期後半の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

京都府（第15図：150）

京丹後市の桑飼下遺跡からＦ１類が１点出土している。砂岩製で、完形品である。隅丸長方形を呈する全体形はＡ類に似るが、両側面に小さなくびれ部を有し、なおかつそれが沈線によって繋がれて強調されていることから、Ｆ類の要素が強いものとみられる。表面には上下の２ヶ所に盲孔を有し、それを結ぶように正中線が引かれている。上半部には放射状にひろがる８本の沈線文をもち、下半部には弧線を用いたパンツ状の文様をもつ。裏面には、上下を直線と弧線で画されたなかに、12本の沈線が放射状にひろがって配されている。裏面の右上部には、敲打痕がみられる。後期中葉の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

《中国・四国地方》

中国・四国地方でも、岩版類の出土例は少ない。ここでは管見に触れた島根県・山口県・高知県の出土例を挙げる。



第15図　西日本出土の岩版類　（縮尺１／４）

【滋賀県】149：穴太遺跡・【京都府】150：桑飼下遺跡
【島根県】151：原田遺跡・【山口県】152：岩田遺跡
【高知県】153：大宮・宮崎遺跡、154：片粕遺跡
【大分県】155：釘野千軒遺跡

島根県（第15図：151）

雲南市の原田遺跡から、Ｂ１類が１点出土している。デイサイト製で、裏面と下半部を欠いた破片資料である。横方向の平行沈線と、放射状に広がる斜行沈線とが交差する文様構成をもつ。縦横の沈線が交差する中央部に盲孔をもつ。部分的に赤化しており、火を受けている可能性がある。晩期前葉～中葉の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

山口県（第15図：152）

熊毛郡平生町の岩田遺跡から、Ｆ１類が１点出土している。砂岩製で、下半部を欠く破片資料である。表面に盲孔と正中線をもち、その両側に縦方向の沈線を配する。盲孔部には、横方向の沈線も数条認められる。表面では、両側縁のくびれ部を繋ぐように太い横方向の沈線が引かれている。後期後半の時期を中心とする遺物包含層より出土している。

高知県（第15図：153・154）

２遺跡から、北陸地方のものに類する岩版類２点の出土を確認した。Ｂ類とＦ類がある。

Ｂ類は、四万十市の大宮・宮崎遺跡からＢ１類が１点出土している（153）。砂岩製で、完形の資料である。盲孔と正中線を中心とした文様が片面のみにみられる。報告書では盲孔を下部に位置するように図示しているが、本稿では他の遺跡で一般的なように盲孔を上部に位置するものと判断する。このようにみた場合、下部に位置する弧状の線刻は下半身を表現したものと推測される。

Ｆ類は、土佐清水市の片粕遺跡からＦ２類が１点出土している（154）。長さ2.7cm、幅2.2cm、厚さ4mmのかなり小型の資料で、表面のくびれ部には横方向の沈線、下半部には正中線をもつ。採集品のために時期の判別は困難であるが、周辺の調査では後期前葉から中葉の時期の土器が多く出土している。後期後半以降の岩版類では一般的でない粘板岩製であることを考えあわせれば、やや古い時期のものの可能性がある。

《九州地方》

九州地方では、凝灰岩などの白色を呈する石材を用いた岩版類の出土例はほとんど知られておらず、管見に触れたものは大分県の出土例１点のみである。一方、石材を別とすれば、形態的にＡ類・Ｂ類・Ｃ類・Ｅ類等との間に類似点が認められる「軽石製岩偶」と呼ばれる祭祀具が、南九州地域において数多く出土している。

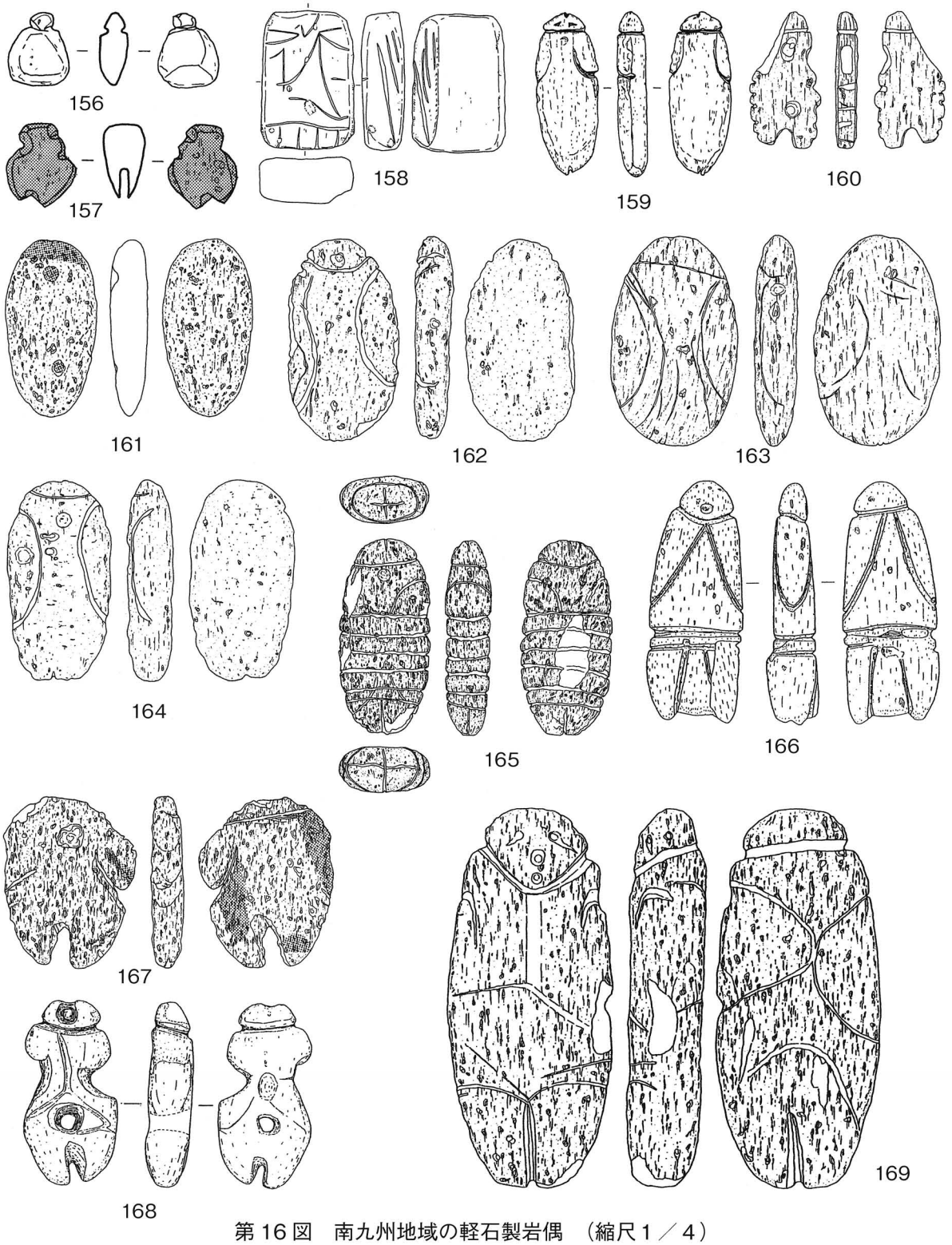
大分県（第15図：155）

玖珠郡九重町の釘野千軒遺跡から、Ｆ１類が１点出土している。珪質泥岩製の約半分を欠く破片資料で、割れに近い側面部に抉り込みがある。表面には盲孔と弧線文が、裏面には弧線文のみ、上面には横方向と縦方向の沈線が交差して認められる。上面の縦方向の沈線は、刻みのようにもみられる。土坑からの出土品で、同遺構では流れ込みの形で後期後半の時期を中心とする土器が出土している。

南九州地域（鹿児島県・宮崎県）の軽石製岩偶（第16図）

南九州地域には「軽石製岩偶」と呼ばれる身体意匠をもった石製品が分布しており、その石質から日本有数の火山地帯であるこの地方に特徴的な遺物とみられている。寒川朋枝による集成（寒川

2001）によれば、鹿児島県と宮崎県南部の９遺跡から76点が出土しており、後期後半～晩期初頭の時期のものと考えられている。なかでも、鹿児島県垂水市の柊原貝塚では55点が出土しており注目される。



第16図　南九州地域の軽石製岩偶　（縮尺１／４）

【鹿児島県】156･157：草野貝塚、158：武貝塚、159：大龍遺跡、160～165・167：柊原貝塚、166･168：上加世田遺跡
【宮崎県】169：竹ノ内遺跡

北陸地方の岩版類と比較した場合、A類、B類、C類、E類の各類に似た形態をもつものが認められるほか、E類とC類の折衷形のものや、腕部を明確につくり出したものなどの北陸には無い形態のものも存在する。

7．各類の分布と特徴からみた系譜と地域間交流

(1) 各類の分布と所属時期

前項までの集成により、青森県から大分県までの各地域において北陸地方でみられたような岩版類の分布があり、南九州地域の宮崎・鹿児島両県では岩版類に似た形態的特徴をもつ軽石製品の分布が確認された。このような遺物各類の分布と所属時期を確認すると、以下のようになる。

A類：北陸地方以外に、東北地方の青森県・秋田県・福島県・新潟県（中越）において分布が認められた。また南九州地域には、軽石製のもので類似した形態をもつものがある。後期に遡る確実な例は認められず、概ね晩期前葉頃に属するものとみられる。

B類：北陸地方以外に、東北地方の青森県・秋田県・岩手県・宮城県・福島県、関東地方の群馬県、東海地方の三重県、中国地方の島根県、四国地方の高知県において分布が認められた。また南九州地域には、軽石製のもので類似した形態をもつものがある。所属時期は後期後半から晩期前半を中心とするものが多い。

C類：北陸地方以外に、東北地方の青森県・福島県・新潟県（中越）、東海地方の三重県において分布が認められたが、その出土量は少ない。また南九州地域には、軽石製のもので類似した形態をもつものがある。所属時期は後期後半から晩期前半を中心とするものが多い。

D類：北陸地方以外に、東北地方の秋田県・福島県、東海地方の三重県において分布が認められた。C類と同様、その出土量は少ない。所属時期は後期末から晩期前葉を中心とするものが多い。

E類：北陸地方以外に、東北地方の秋田県・岩手県・宮城県・山形県・福島県・新潟県（下越）、関東地方の群馬県において分布が認められた。また南九州地域には、軽石製のもので類似した形態をもつものがある。所属時期は後期末から晩期初頭を中心とするものが多い。

F類：北陸地方以外に、東海地方の三重県、近畿地方の滋賀県、中国・四国地方の山口県と高知県、九州地方の大分県において分布が認められた。西日本地域に広域に分布するが、その出土量は少ない。所属時期は後期後半のものが中心である。

G類：現在のところ、北陸地方以外での出土例は確認できていない。晩期末頃のもの１点だけが確認されている。

(2) 各類の特徴からみた系譜

次に、各類の分布や形態的特徴、文様などから、その系譜について考えてみたい。以下、順不同となるが、まずはB類から述べる。

B類

各類のうち、分布が最も広範でなおかつ出土量が多いのはB類であり、このような楕円形の形態のものが、後期後半～晩期前半期の岩版類において中心的なタイプであったとみることができる。

表1　岩版類および関連遺物出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	岩版類の時期	岩版類の種類							関連遺物	参考文献
				A	B	C	D	E	F	G		
1	長森遺跡	青森県青森市	晩期(前)	1	1							青森市教委1985
2	源常平遺跡	青森県青森市	晩期(初?)		1							青森県教委1978
3	土井I号遺跡	青森県北津軽郡板柳町	晩期								岩偶	小杉1986・板柳町教委1993
4	是川中居遺跡	青森県八戸市	晩期(前～中)		1							保坂1972・八戸市博1988
5	八幡遺跡	青森県八戸市	晩期(前)		5	1						八戸市教委1988
6	泉山遺跡	青森県三戸郡三戸町	晩期(前)	5	7							青森県教委1996
7	石亀遺跡	青森県三戸郡田子町	晩期(前～中)	1	2							(財)古代學協會1997
8	中小坂遺跡	秋田県鹿角郡小坂町	晩期(前)					1				秋田県教委1988
9	家ノ後遺跡	秋田県大館市	晩期(前)	3								秋田県教委1992
10	向様田D遺跡	秋田県北秋田市	晩期(前)		1		2					秋田県教委2005
11	藤株遺跡	秋田県北秋田市	晩期(前)				1				岩偶	秋田県教委1981
12	白坂遺跡	秋田県北秋田市	後期末～晩期(前)		3						岩偶・石棒?	秋田県埋文1994
13	才の神遺跡	秋田県男鹿市	晩期(初)								三角形岩版(晩期)	小林1967
14	湯出野遺跡	秋田県由利本荘市	後期末～晩期								岩偶	秋田県教委1978
15	手代森遺跡	岩手県盛岡市	晩期(前)		2							(財)岩手県埋文1986
16	萪内遺跡	岩手県盛岡市	後期末～晩期(初)?		1							岩手県教委1982
17	泉屋遺跡	岩手県西磐井郡平泉町	後期末～晩期(初)?					1				(財)岩手県埋文1993
18	宮の前遺跡	山形県村山市	後期末～晩期(初)					1			岩偶	(財)山形県埋文1995
19	作野遺跡	山形県村山市	晩期(初?)					1				村山市1981
20	中沢目貝塚	宮城県大崎市	晩期(前)		1							東北大学考古研1984
21	沼津貝塚	宮城県石巻市	晩期(初)					1				小林1967・小杉1986・稲野2004
22	里浜貝塚	宮城県東松島市	後期末～晩期(初)?					1				稲野2004
23	宮畑遺跡	福島県福島市	後期末～晩期(前)?	1	2			1			石棒(凝灰岩製)	福島市教委2005・2006
24	西方前遺跡	福島県田村郡三春町	後期末～晩期(前)?					1				三春町教委1987
25	薄磯貝塚	福島県いわき市	後期末～晩期(前)	1	◎	2	○	○			岩偶	小杉1988・1998
26	六万遺跡	群馬県渋川市	晩期		3							外山1999
27	滝沢遺跡	群馬県渋川市	晩期(初～中)		6			3				外山1999・2000
28	茅野遺跡	群馬県北群馬郡榛東村	後期～晩期					1				榛東村教委1991・2005
29	元屋敷遺跡	新潟県岩船郡朝日村	後期末～晩期(初)?					2				朝日村教委2002a・稲野2004
30	熊登遺跡	新潟県岩船郡朝日村	晩期(初)								三角形岩版(晩期)	横山1976・1980・八木2001
31	赤松遺跡	新潟県三条市	後期末～晩期(初)?	1		1						中村孝1981・小熊1997
32	籠峰遺跡	新潟県上越市	晩期(前)?	1								中郷村教委2000
33	寺地遺跡	新潟県糸魚川市	後期末～晩期(初)						1			新潟県青海町1987
34	早月上野遺跡	富山県魚津市	後期～晩期		3							富山県教委1975・1976
35	北代遺跡	富山県富山市	後期末～晩期(初)					1				富山市教委2001
36	桜町遺跡	富山県小矢部市	後期末～晩期(前)	4	5	3	1	1				小矢部市教委2006・2007
37	真脇遺跡	石川県鳳珠郡能登町	後期(中)～晩期(中)		1						岩偶(軽石製)	能都町教委1986・2002
38	酒見新堂遺跡	石川県羽咋郡志賀町	後期(中)?						1			戸澗1998・2001
39	チカモリ遺跡	石川県金沢市	後期(中)?		1							金沢市教委1984
40	御経塚遺跡	石川県石川郡野々市町	後期(中)～晩期						1			野々市町教委1983
41	乾遺跡	石川県白山市	晩期(末)							1	岩偶(凝灰岩製)	(財)石川県埋文2001
42	白山遺跡	石川県白山市	後期(中)～晩期	1								石川県立埋文1985
43	六橋遺跡	石川県小松市	後期～晩期		4	1		1				石川県立埋文1997
44	佐八藤波遺跡	三重県伊勢市	後期後半～晩期(初)?								岩偶	伊勢市教委1990
45	天白遺跡	三重県松阪市	後期後半		9	1	1	1	1			三重県埋文1995
46	穴太遺跡	滋賀県大津市	後期後半						1			滋賀県教委1997
47	桑飼下遺跡	京都府京丹後市	後期(中)?						1			平安博1975
48	原田遺跡	島根県雲南市	晩期(前～中)		1							島根県教委2006
49	岩田遺跡	山口県熊毛郡平生町	後期後半						1			潮見1960
50	大宮・宮崎遺跡	高知県四万十市	後期(中)		1							西土佐村教委1999
51	片粕遺跡	高知県土佐清水市	後期(中)?						1			高知県教委1975
52	釘野千軒遺跡	大分県玖珠郡九重町	後期後半?						1			大分県教委1996
53	竹ノ内遺跡	宮崎県宮崎郡清武町	後期?								軽石製岩偶	寒川2001
54	西ノ平遺跡	鹿児島県薩摩川内市	?								軽石製岩偶	寒川2001
55	大龍遺跡	鹿児島県鹿児島市	後期後半								軽石製岩偶	寒川2001
56	草野貝塚	鹿児島県鹿児島市	後期								軽石製岩偶	寒川2001
57	武貝塚	鹿児島県鹿児島市	後期後半								軽石製岩偶	寒川2001
58	上加世田遺跡	鹿児島県南さつま市	後期末～晩期(初)?								軽石製岩偶	寒川2001
59	小廻遺跡	鹿児島県霧島市	後期?								軽石製岩偶	寒川2001
60	塚ヶ段遺跡	鹿児島県曽於市	晩期(初)								軽石製岩偶	寒川2001
61	柊原貝塚	鹿児島県垂水市	後期後半～晩期(初)?								軽石製岩偶	寒川2001

第17図　岩版類および関連遺物出土遺跡位置図　（番号は表1に対応）

このタイプは、後期前半の岩版類、とくに研磨による成形を主体とする「小牧野型円形岩版」と形態的に類似しており、さらに両者には擦痕をもつ小さな礫状のものが多いこと、有文と無文の二者が存在する等の共通した特徴もあることから、同一の系譜上にあるものと推定される。

両者を比較した場合、①後期前半の岩版類には片面が球状となるものもみられるが、B類は両面とも平滑な形状をもつこと、②B１類にみられる盲孔の表現が後期前半の岩版類には認められないこと、などの相違点も認められるが、これらは時期の違いによる特徴の変化の結果とみることもできよう。なお、後期前半の岩版類において片面が球状になる形態のものは三角形岩版に多く、円形岩版では少量であるという（児玉2001）。円形岩版には表裏両面を平滑に研磨するものが多く、B類にみられる同様の特徴についても、円形岩版から受け継いだものである可能性がある。

一方、盲孔については、後期前半の東日本の岩版類にはその存在が認められず、これ以降の時期に新しく加わった特徴と推察される。盲孔は、その多くが片面の一方の端に寄せた位置に配されており、E類などに稀にみられる眼部や鼻などの表現を付加する例を参考とすれば、口を表現したも

のが多いと理解される。盲孔だけを配するものは、口を代表させて顔部を象徴的に表現したものであろう。なお、前段階の岩版にみられる身体的表現としては、後期前半の新潟県アチヤ平遺跡や元屋敷遺跡から出土した線刻礫のなかに「腰ミノ」状の人体文と考えられる線刻をもつものがあり、アチヤ平遺跡での分析によれば、人体文をもたないものよりも後出するという（長田2004）。このような文様が後期前半の新しい段階で現れたとするならば、後期後半以降の岩版類にみられる顔部表現もまた、身体表現を文様として顕在化するという同じ変化の流れのなかで現れたものと考えられる。なお、顔部の表現方法をみると、盲孔以外に眼部や鼻などを有するものの分布は東北地方南部までの地域に限られ、盲孔のみの顔表現しか確認できないそれより南（西）の地域とは、表現方法に地域差があった可能性がある。伊藤正人は、土偶や土面の顔表現の消長について検討するなかで、東海地方以西の西日本地域の後期の土偶には「顔の表現が無かったり、不明瞭だったりという点で強い共通性」をもつことを指摘し、「汎西日本に顔への拒絶（禁忌）が存在した」と推定している（伊藤2005）。仮にこのような状況があったとした場合、西日本の土偶におけるタブーが岩版類の顔部表現にも現れているのかもしれない。

現在のところ、後期前半の岩版類との時期的接点である後期中葉に属するＢ類の事例は明確に抽出できていないが、石川県チカモリ遺跡出土のＢ１類（第４図･16）には、後期前半の秋田県域の円形岩版に特徴的な文様とされる十字状の線刻（長田2004）とともに、前半期のものに無い盲孔が認められることから、両者をつなぐ後期中葉の資料の可能性がある。

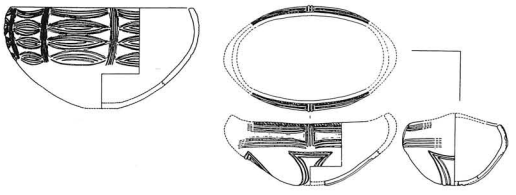
分布についてみると、後期前半の円形岩版の分布が新潟県以東の東日本地域に限られるのに対し、後期後半以降に属するＢ類は北陸・東海地方、中国・四国地方にまで、断片的ながらもその分布を拡大している。さらに、こうした遺物が多出する地域にも変化がみられ、盛行の中心地が青森県を中心とする東北地方北部から、福島県薄磯貝塚を中心とする東北地方南部へと移ったことが推察される。

また、薄磯貝塚出土の一群に特徴的にみられる「パンツ形文様」については、先にもふれた後期前半の新潟県アチヤ平遺跡や元屋敷遺跡出土の岩版類などにみられる「腰ミノ」状の線刻から継続するものとの指摘もあり（長田2004）、これらの遺跡がともに東北地方南部に位置することからは、こうした文様がこの地域の岩版類に特徴的なものであった可能性がある。このような見方が可能であれば、桜町遺跡や萪内遺跡等から出土したＢ類にみられる類似した文様についても、東北地方南部からの影響とみることができる。なお、このような「パンツ形文様」をもつＢ類には、青森県今津遺跡の晩期中葉（大洞Ｃ２式期）に時期が限定される捨て場から出土した例もあり（青森県教委1986）、この種の岩版が該期にまで継続して存在したことがわかる。

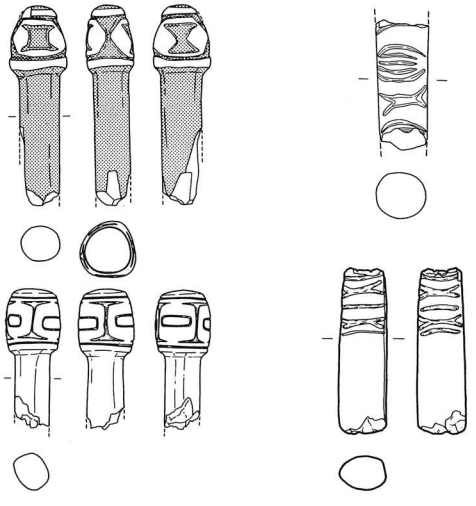
Ｆ類

Ｂ類においてその様相がやや不明瞭な後期中葉の岩版類ついては、Ｆ類のなかに該期へ遡り得るものが認められる。Ｆ類は、その一部に晩期初頭にまで下る可能性のあるものを含むが、後期中葉～後期末までに時期が限定できるものが大半である。北陸以西の西日本地域に分布がみられ、その形態的特徴から、同じく西日本の後期の遺跡から出土する分銅形土偶との関係が想定できる。西日

本におけるこのような土偶と岩版類の関係については、既に中村健二の指摘があるが（中村2000）、ここではＦ類岩版を中村のように西日本の地域的な遺物とするのではなく、東日本地域の後期岩版類と西日本地域の分銅形土偶とが折衷したものとして捉えることが重要と考える。Ｃ類を除く後期の岩版類と分銅形土偶とはともに、身体表現をもちつつも手足を表現しない「胴体像」（伊藤2005）としての特徴をもっており、こうした特徴が示す性格を共にする両者が接近し、融合した結果、Ｆ類のような岩版が成立したものと考えられる。西日本を中心とする分布状況から「西日本型岩版」として位置づけることができよう。



八日市新保2式土器（鉢）



小谷型石刀　　橿原型石刀

第18図
Ｅ類に類似した形態・文様構成をもつ遺物

Ｅ類

Ｆ類とは反対に、北陸地方以東の地域に分布するのがＥ類である。北陸地方以外には、東北地方（南半部が中心）と関東地方（群馬県）、そして東海地方（三重県）に分布がみられる。その厚みをもった卵形の形態とともに、「連結三叉文」と呼ばれる文様をもつものが多いことが特徴として挙げられる。今回集成したＥ類では、14・30・90・92・113・119・128・134に連結三叉文およびそれに類する文様がみられる。最も多い文様の組み合わせは、92・113・119の体部にみられるような連結三叉文と向かい合う弧線、あるいは楕円文とが、縦方向に交互に配置されるものである。このような文様配置はＡ類やＢ類の一部にも確認できるが、北陸地方の後期末の在地土器である八日市新保２式土器の鉢文様に類似するものがあり、関係が推察される（第18図）。同様の文様配置はまた、後期末～晩期前葉の北陸地方から近畿地方に分布する「橿原型石刀」（後藤1986・1987）の一部にも認められ、北陸地方に起源を持つ文様要素であるとの見方を補強できる。90の体部文様については、小杉康によって中空土製品との類似が指摘されているが（小杉1986）、下部に認められる十字状の文様は八日市新保２式の鉢底部に散見される特徴的な連結三叉文に類似している。現在のところ、Ｅ類の分布は東北地方南部に多い状況にあるが、このような北陸由来と考えられる文様要素をもつものが多いことからは、その発祥地を北陸地方に求め、「北陸型岩版」と呼ぶことを提唱したい（註７）。

またＥ類を北陸地方発祥のものとみた場合、その特異な形態の祖形候補の一つとして、同時期の北陸にあった「小谷型石刀」（後藤1986・1987）の把頭部の形態との類似を挙げることができる。小谷型石刀は「胴張りの円柱ないしはそれにちかい形状を呈する」把頭部をもつ石刀で、その把頭部の頂部や下部を一周する沈線で区画するのが普通である。14・86・113・115・119に認められる胴張りの円柱状の形状や頂部を一周する沈線の存在はこうした特徴と一致しており、刀剣形石製品の把

頭部の意匠を取り入れたものである可能性がある。F類と同様の、岩版類と他形式遺物とが融合したタイプとして位置づけたい。

D類

D類は、その不定形な形態から、他の類からの変形の可能性があるものを含んでいるが、縦方向に長い棒状のものが多く、一平面の裏側に左右方向から研磨を加えられて断面が台形または三角形となる形態のものが多い。こうした特徴からは、刀剣形石製品の刀身部の形態などとの類似が指摘でき、E類における把頭部形態との類似と併せ、岩版のなかに刀剣形石製品の形態が取り入れられた類型と考えられる。

A類

A類は、南九州の軽石製のものを除けば、北陸地方と東北地方にのみ分布が認められる。なかでも東北地方に多く、時期や形態を同じくする「第1類岩版」や「第2類岩版」も加えれば、東北地方北部がその分布の中心となる。また、その形態について詳しくみると、北陸地方のものは長辺の中央付近が最も広がる隅丸の方形を呈するのに対し、東北地方では直線的な方形となるものも含んでおり、より方形への意識が高いものとみられる。このようなことから、方形を基調とする岩版類については東北地方北部に祖形をもつ可能性が高いものと推察される。そして同地方においてその祖形となり得るものをさがした場合、角（隅）をもつ岩版という共通する特徴から、後期前半に盛行した三角形岩版との関係が想定される。三角形岩版には、日本海側の地域を中心として台形に近い形態をもつものの存在も指摘されており（児玉2001・長田2004）、そうした形態のなかからA類のような方形の岩版が発生したものと考えたい。またこう考えた場合、晩期初頭のものとされる秋田県才の神遺跡の岩版（81）は、その形態と両面への施文を併せ持つ特徴などから、後期の三角形岩版と東北地方晩期の「第1類岩版」との間を繋ぐものとして位置づけられる可能性がある。

C類

後期後半以降の岩版類には、外形では身体的特徴を表さないものが多いが、例外として挙げられるのが、脚部表現をもつC類である。数は多くないが、東北、北陸、東海地方から散発的に出土しており、こうした岩偶的な要素を強くもった板状石製品が、広い地域で用いられたことが理解される。これは、後期後半以降の岩版類が顔部表現を取り入れるなど、「ひとがた」の特徴を強く表現するものに変化していったことに関係し、その延長線上に、時として「胴体像」としての岩版の範疇をこえるものがつくり出されたことを示していると考えられる。このようなことからは、岩版を用いる儀礼・祭祀や岩版がもつ性格にゆらぎが生じていたことも想定されるが、出土量が少ないことからは、あまり大きな流れとはならなかったものとみられる。東北地方北部では晩期前葉以降、五体を明確に表す「馬淵川型岩偶」（稲野裕介1983）が出現し、地域的な広がりをみせるが、このような岩偶が出現する前段階としてC類のような岩版類を位置づけることも可能かもしれない。

G類

G類の確認例は、現在のところ北陸地方の1点のみであり、このタイプが普遍的なものであるかは未だ判断できない。所属時期も、ほかの岩版類とは異なる晩期末のものであり、どのような系譜

をもつものであるかは不明である。同時期の遺物で似た特徴をもつものを強いて挙げれば、近畿地方の縄文時代終末期の台状土偶のうち、頭部を二段の切り込みによって表す「長原型土偶」（大野2000）との類似を指摘できるが、部分的な特徴の一致であり、関係を想定するまでには至らない。今後、類例の増加を待って再度検討すべきものと考える。

(3) 各類の分布からみた地域間の交流

次に、各地における岩版各類の分布から、地域間の関係について考えたい。

A～G各類のうち、東北地方にその分布の中心が求められるのがA類とB類である。前述のようにA類は東北地方北部に、B類は東北地方南部にその分布の中心が想定でき、B類が多く確認されている北陸地方には、東北地方南部から岩版類を用いる儀礼・祭祀が導入されたものと推察される。

また、東北地方南部において北陸系と考えられる文様や形態をもつE類の分布が確認されることから、両地域のこのような石製品を用いる儀礼・祭祀に関する情報の伝達や交流は一方向ではなく、双方向のものであったと推察される。E類には、刀剣形石製品の把頭部の意匠を取り入れたとみられるものがあるが、北陸地方の縄文人が自らの代表的な祭祀具である石刀の意匠をもとに造形し、逆に東北地方南部に向け発信した岩版のタイプとも考えられる。さらに、岩版類と刀剣形石製品とのこうした形態的類似に着目すると、棒状の形態に明確な顔部表現がついた異形の岩偶（80・89）や長い板状を呈する同様の資料（60・120）との間にも関連が想定できる。このような資料は、主に東北地方の日本海側の地域を中心に分布することが指摘されており（稲野1998）、北陸地方のE類などとも関係を有する可能性がある。またこのような石製遺物の分布状況からは、刀剣形石製品の形態、特にその把頭部に顔（頭部）を意識するようなイメージが日本海側の地域に共通してあったことも推察される。

脚部表現をもつC類については、散発的な出土にとどまっているためにその分布の中心地等については不明確であるが、東北、北陸、東海の各地方に分布しており、これらの中心に位置する北陸地方の縄文人がその分布に重要な役割を果たしたことは確実であろう。同様のことはまた、よく似た分布を示すD類についても想定できる。

関東地方の岩版類については、北関東の群馬県の例を挙げるにとどまったが、B類とE類の分布を確認できた。このような遺物に関しては従来、東北地方からの影響が重視されてきているが、今回取上げたものの中には連結三叉文とみられる文様をもつものも含まれており、北陸地方からの影響についても考慮する必要があるものと思われる。また、無文のものが多く含まれることも、北陸地方の岩版類と共通する特徴である。

一方、北陸地方と東北地方の岩版類の間にみられた共通性のうち、A類を除いたB・C・D・E類、そして北陸地方と西日本に共通するF類とのセット関係が認められるのが、東海地方の三重県である。現状では岩版類の出土は天白遺跡に限られているが、このような複数のタイプを共有することや地理的条件からは、東海地方に岩版類をもたらしたのは北陸地方の人々であったと考えられる。天白遺跡からは八日市新保式などの北陸地方の土器も出土しており、両地域間の交流はかなり直接的なものであったとみられる。しかし、中間地点である飛騨や美濃などの地域では、他の石製祭祀

具の形式を北陸地方と共有する一方、岩版類は確認されないという排他的な状況も存在する。

西日本との関係については、F類のほかには若干のB類の分布が中国・四国地方でみられるのみである。これらの地域の岩版類についても、北陸や東海地方からその情報がもたらされたものと推定できるが、その出土量は少なく、局地的な受容にとどまったものとみられる。

そのようななか、北陸地方の岩版類との形態的な類似が強く認められる「軽石製岩偶」が多数分布している南九州地域との関係が注目される。両者には、A類・B類・C類・E類といった複数の形態や顔部表現をもつことなどに類似点が認められるが、異なる石材を用いる点や、両地域間の距離の隔たりが大きい点にやや問題がある。しかし、両者がほぼ同時期の後期後半～晩期前葉頃を主体とする遺物であることや、北陸産のヒスイを用いた装飾品が南九州地域でも出土していること等からは、両者間にはある程度の関係があったものと考えられる。近年では、九州地方の後晩期に特徴的な玉類とされる「三万田式垂飾り」や「T字孔管玉」が中国地方の日本海側や北陸地方に分布するとの指摘（藤田1998）や、九州地方で盛んにつくられた結晶片岩様緑色岩製の玉類が北陸地方にまでもたらされているとの指摘もあり（註8）、両地域のこうした玉類を主体とした交流が、石製祭祀具の類似の背景にあるのかもしれない。また、こうした石製祭祀具についての類似は南九州地域と北陸地方の間だけでなく、東海地方のものとの間にも認められることから、南九州地域と東海地方との直接的な関係も想定される。三重県の佐八藤波遺跡で採集された「岩偶」（148）は、南九州で出土する軽石製岩偶と非常に近い形態をもっており、高知県におけるB類の存在等も考えあわせるならば、太平洋側の黒潮に沿ったルートでの両地域間の交流が存在した可能性も指摘できよう。

以上、岩版類の特徴と分布からみた地域間の交流の可能性について考えたが、このような遺物の広い分布に関して、北陸地方が果たした役割や影響が大きなものであったことが確認できたと思う。そして、こうした要因を北陸地方の中に求めるならば、縄文時代の東西文化の接点に位置するという地理的な特性と、ヒスイ等の特産品をもつという特殊条件が大きく作用したものと考えられる。特に、後期後半の岩版類の広範な分布には、同じく精神文化に関連する器物であるヒスイ製品の東西日本への流通先と一致する部分が多く、関係が深いものと推察される。

8．岩版類の性格について

最後に蛇足ながら、岩版類を用いた儀礼・祭祀やその性格について、若干の私見を述べたい。

研究史でも若干ふれたが、小杉康は岩版類に認められる代表的な7種類の変形行為に着目し、それらを①「文様図形を表現している沈線や窪みなどをさらに反復的になぞり重ねたり、回転穿孔で一層深めたりすることによって文様の特定部位を強調化する変形行為」、②「文様や形態の特定部位に擦り消しや敲き窪め、傷付けなどが加えられる変形行為」、③「打ち欠きや打ち割りなどの全体的な破壊へといたる変形行為」、④「加熱」の4つに整理した上で、これらを組み合わせた儀礼が存在したことを推定した（小杉1986・1998）。小杉はこのように岩版類に残された痕跡を「連続的な儀礼行為の過程」として捉え、その執行目的が一対一対応的なものではないと指摘した。本稿で取り扱った岩版類についても、このような変形行為の痕跡が顕著に認められるものを多く含んでおり、

筆者もまた小杉にならってこれらを「連続的な儀礼行為の過程」を示すものと捉え、その性格を考える手がかりとする。

ここではまず、本稿で取上げた岩版類に顕著に認められる「擦痕」と「敲打痕」とに注目したい。これは小杉が挙げた７つの代表的な変形行為のうち、「線刻」と「敲打」と呼んだものにあたるが、その痕跡からは、岩版類に対する「摩擦・研磨」と「連続する打撃」を伴う行為が想定できる。通常、石器や石製品に対するこうした行為は、その製作段階におこなわれたものとみられることが多い。しかし、ここで取り上げる「擦痕」・「敲打痕」はそれとは異なり、岩版類が一定の形態や文様を備えた後に加えられた痕跡で、このような石製品を用いた儀礼・祭祀のなかでおこなわれた「何らかの意味をもつ行為」の結果と推測されるものである。岩版類に対するこうした行為が何を意味するものであったかを読み取ることは困難だが、Ｅ類の14・92・113・115・118・119・146に認められる擦痕・敲打痕の付される位置等には、擦石や凹石といった、いわゆる「敲磨器」と総称される石器との類似点が認められ、その行為のなかにこのような利器の使用法や形態についての要素が取り込まれていた可能性がある。また、擦痕に限れば、後期前半の小牧野型岩版などにも認められる特徴であり、こうした「摩擦・研磨」を伴う行為が後期前半から少なくとも晩期の前葉頃まで一貫して、岩版類を用いる儀礼のなかでおこなわれた特徴的な行為であった可能性がある。このような行為を重要視すれば、小牧野型円形岩版やＢ２類に多く認められる擦痕だけをもつ例についても未成品ではなく、儀礼・祭祀の中で実際に用いられたものとみることもできよう。岩版類が軟質の石材を用いた「石製品」としてつくられ続けた要因には、この時期にこうした「摩擦・研磨」を伴う儀礼行為が盛行し、その対象物として石製のものが求められたことがあるのかもしれない。

また、岩版類以外にも、縄文後・晩期の祭祀具とみられる石製品には「擦痕」や「敲打痕」が顕著に認められるものが多く存在しており、それらの痕跡が祭祀的な行為そのものと結びつく可能性についても、既に先学によるいくつかの指摘がある。御物石器についての橋本正（橋本1976）、石冠についての堀越正行（堀越1979）、石棒についての山田康弘（山田1994）、そしてこれらに草創期の線刻礫までを加えて、縄文人に通有のしぐさとして形式をこえた共通性を指摘した宮尾亨の論考（宮尾1998）等がそれである。筆者は岩版類に認められる摩擦・敲打痕もまた、これらの一群に加えられるべきものであり、宮尾の指摘したように、縄文時代の祭祀具に相関する行為であった可能性が高いものと考える。そして、岩版類に対しておこなわれた儀礼行為と、石刀・石冠・御物石器等を用いる北陸地方の儀礼・祭祀の行為との間にこうした共通点があったからこそ、当時の北陸縄文人にも岩版類のような器物が受け入れられものと考えたい。また、Ｅ類のような石刀の意匠を取り込んだとみられる岩版がつくられたことの背景にも、こうした摩擦・敲打を伴う「摩擦系祭器」（橋本1976）としての共通性があったものと推察される。

次に、岩版類にみられるもう一つの重要な特徴として、その文様に注目したい。なかでも特に重要であったのは、その例の多さから、盲孔による顔部などの身体意匠の施文であったと推察される。２類のような盲孔をもたないものも含むことからは、岩版類においてこのような身体表現は必ずしも必要なかったものとも考えられるが、こうした表現が、同様の石製品として直接の系譜関係が想

定される後期前半の岩版類や、それらと関係が想定される中期以降の三角形土版（土偶）などに度々認められる「省略した身体意匠」から発展・拡大したものとみられることからは、やはり岩版類における重要な要素の一つに位置づけるべきであろう。また、先述のように方形のA類が三角形岩版から変化したものと考えた場合、A類の一部をなす晩期の「第１類岩版」もまた、身体的な性格を有しているとみなければならない。従来、晩期岩版の初現形とされる「第１類岩版」には身体的な特徴は認められないと理解されてきているが（註９）、これは頭部や手足を省略して胴体のみを表現した三角形岩版の性格や表現方法の伝統が、その分布の中心地であった東北地方北部で生み出された「第１類岩版」により強く残ったために、その身体的な性格が表面上からは読み取り難くなっているためとも考えられる。これはまた、後期後半以降の岩版類の多くが形態上だけでは上下の判断ができない点対称の形態、すなわち盲孔や正中線を欠いたものでは身体的特徴をとらえることができない形態のものに変化していることとも関係があろう。そのようななか、秋田県白坂遺跡出土の「岩偶」には、台形を呈する胴部に「第１類岩版」と同様の文様が施文されたものがあり（77）、「第１類岩版」が胴体像としての身体的な性格をもっている可能性を示す例として挙げることができる。「第１類岩版」に後続する「第２類岩版・土版」の段階では、眼や口などの顔部表現をもつものの存在が普遍的になっており（斎藤2001）、顔部（頭部）を表現しない三角形岩版以来の表現方法の伝統は失われていったものと推察される。

このような身体表現が、何を意味するものであったかについて推定することは困難だが、岩版類を用いた儀礼・祭祀の中で登場することが必要とされた「何らかの人格」であったことは確かであろう。そして、岩版類における全体形状が手足を欠く胴体だけのもので、顔も定かには描出しない抽象的なものに終始していることからは、その表現対象が祖霊や精霊などの、儀礼の時点では姿形をもたない抽象的な人格であったものと考えたい。特に、岩版類の出土する遺跡が後期から晩期にかけて比較的長期間にわたって存続した拠点的遺跡に多いことからは、そのような累代の祖先をもつ集団の祖霊を表現したものの可能性が高いものと思われる。岩版類の身体意匠にそうした霊的なイメージが重なると仮定した場合、岩版類は霊の「依り代」として用いられたものとも想定され、前述した「摩擦・研磨」と「連続する打撃」を伴う行為は、そうした霊を儀礼・祭祀の場に呼び出したり、送ったりするための行為であったとも考えられる。そしておそらくは儀礼・祭祀の終了に際して、さらに「打ち欠きや打ち割りなどの全体的な破壊へといたる変形行為」や「加熱」などの行為がその場に応じて選択的に執行され、岩版類は最終的に捨て場などへ廃棄されたのであろう。

以上のように、本稿で取り扱った岩版類には「摩擦系祭器」と「抽象的な胴体像」という、少なくとも２つの性格が重層的に内包されていた可能性があり、それらは他の器物の性格とも相関して、ある目的や思惑に対応した儀礼・祭祀において使用されたものと考えられる。

なおここで、所属時期や分布範囲の違いから本稿ではほとんど取上げなかった土版について、岩版類との関係から少しだけふれることとしたい。土版のうち、関東地方の人面付土版の成立については、東海地方の分銅形土偶からの影響とみる伊藤正人らの指摘がある（伊藤・川合2000）。分銅形土偶と関東地方に分布する糸巻形の土版（小杉の「タブレットA」）との間にはともに中央部がく

びれる形態的類似があり、また土製であるという共通点も有することから、このような指摘については頷ける点が多い。また、土偶からの影響については、タブレットAだけにとどまらず、関東地方において岩版から派生したとされる「土製タブレットB」の盛行にも関係した可能性がある。土製タブレットBに関する従来の考え方には「関東地方では、岩版に適するやわらかい原石がないために、岩版を模した土版がつくられた」（芹沢1960）とするものがあるが、本稿でみたように晩期岩版と同様の石材を用いた岩版類は広い時期・地域において認められるものであり、各地において求めれば、同様の素材が入手できたことを示している。このようなことからは、関東地方における土版の盛行の理由を石材の有無から判断することには無理があり、むしろ同じ土製品である土偶との親縁性にその理由を求める方が妥当であると思われる。そして土版の場合、その製作工程等にも研磨や敲打といった行為が関わる度合いは低く、その性格のなかに後期の岩版類について想定された「摩擦系祭器」としての意義が占める割合は少なかったのではないかと考えられる。こうしたことからは、関東地方の土版の盛行の裏には「胴体像」としての土偶に近い性格のみを重視するという、東北や北陸地方などとは異なる意識や儀礼形態があったのではないかとも推測される（註10）。稲野彰子によれば、「３類から５類の間、岩版は主に日本海側の、土版は太平洋側の河川の流域に分布するという地域性が認められる」という（稲野1983b）。稲野はこの差について「労力の軽減」という意味での石製から土製への製作工程の変換があり、その変換の時期が日本海側と太平洋側では異なっていたことを推測するが、上記のように考えるならば、それを用いた祭儀の性格の違い（あるいは形態差）の表徴であるとも捉えられる。そして、日本海側の地域に晩期の後半にまで石製のものが長く残ることの背景に、石製品を必要とするような儀礼・祭祀の様式があったとすれば、それは本稿で取り扱った後期の多様な岩版類からつながる、この地域における祭祀の一つの特徴とみることができるだろう。

９．おわりに

以上、後期後半から晩期前葉にかけての時期の岩版類について資料を集成し、いくつかの検討をおこなった。その結果、この時期の岩版類が地方ごとの形態的差異を含みながらも、東日本から西日本にわたる広い地域に分布していることが明らかとなり、各地域間においてこのような器物を介した交流が存在したものと推定された。また、これらの類型の一部には「後期前半の岩版」と「晩期岩版」にそれぞれ類似した特徴をもつものがあり、それらを二時期の岩版の間をつなぐものとして位置づけることができるのではないかと考えた。こうした位置づけをすることにより、岩版類の後期前半から晩期への変化についての大きな流れをある程度把握できたのではないかと思われる。

そして最後に、岩版類に残る行為の痕跡や文様から、こうした器物を用いた儀礼・祭祀の行程や推定される性格を示したが、これについては不明な点が多く、今後の課題としたい。

また、後・晩期以外の時期にも、今回取り扱った岩版類に類似した石製品が存在することが知られている。縄文時代草創期に属する愛媛県上黒岩岩陰遺跡出土の線刻礫（阿部1993）や、前期に属するとみられる秋田県提鍋遺跡出土の盲孔をもつ岩偶（鳥海町教委1998）などがそれであるが、こ

れらの先行する時期の遺物と後・晩期の岩版類との関係の検討についても、類似資料の蓄積に待つところが大きく、今後の課題である。

桜町遺跡での岩版類の出土から始まったこのような遺物についての探索は、筆者の当初の思惑をはるかに超える時期・範囲にまで及ぶこととなった。当然、筆者には馴染みの薄い地域の資料にまで手を出すこととなり、それらについては多くの誤認や見落としなども存在することと思われる。特に、晩期の岩版の成立については旧来の考え方とは異なる捉え方をする結果となった。門外漢によるまったく的外れな指摘である可能性もあるが、北陸地方からみた一考察としてご寛容いただき、今後各方面からのご意見を賜りたい。また本稿を契機として、調査時に見落とされることが多かったと思われるこのような遺物についての認識が少しでも深まり、類例の増加や議論の活発化につながることがあれば望外の幸いである。

〈謝辞〉

本稿作成にあたり、以下の方々・機関にお世話になった。御芳名を記して、感謝申し上げる。(50音順、敬称略)
五十嵐 睦・伊藤正人・稲野彰子・稲野裕介・植松暁彦・遠藤正夫・大坪志子・岡村道雄・長田友也・鹿島昌也・金子昭彦・狩野 睦・久々忠義・小島俊彰・小林圭一・小林達雄・斎藤弘道・斎藤義弘・酒井重洋・神保孝造・高田秀樹・高橋保雄・滝沢規朗・田村浩司・西井龍儀・西野秀和・布尾和史・野村忠司・久田正弘・福岡道子・古川知明・堀江 格・三宅敦気・向井裕知・村木 淳・山口博之・山本正敏・吉田 淳・渡辺 誠・(財) 石川県埋蔵文化財センター・板柳町教育委員会・金沢市埋蔵文化財センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター・榛東村教育委員会・富山県埋蔵文化財センター・富山市教育委員会・新潟県朝日村教育委員会・野々市町教育委員会・福島市教育委員会・(財) 福島市振興公社文化財調査室・三春町教育委員会・(財) 山形県埋蔵文化財センター

〈註〉

註1．桜町遺跡ではこの他に、中出地区からも同種の遺物が1点出土している（小矢部市教委2006）。縄文時代の遺物である可能性が高いが、奈良時代の竪穴住居跡からの出土品である為（小矢部市教委2003）、今回は検討の対象から外した。

註2．富山県内では、高岡市勝木原遺跡からの出土品と推定される岩偶も1点報告されているが（駒見1981）、その由来等に不明な点が多いことや、類似する遺物が現状では認められないことから、本稿では取上げなかった。

註3．富山県教委が1974年と75年に実施した緊急発掘調査の際の出土品だが、報告書には未掲載の資料である。山本正敏氏より実測図の提供を受け、富山県埋蔵文化財センターの許可を得て掲載した。

註4．稲野彰子氏のご教示による。

註5．稲野彰子氏のご教示による。

註6．茅野遺跡出土の岩版の図は、筆者が榛東村教育委員会の許可を得て図化・掲載したものであるが、榛東村による遺物編の本報告が未刊行である為、実測図の転載は原則として禁止である。

註7．筆者が「連結三叉文」と呼称した岩版類等の文様には、①「背反する弧線の間を面的に彫り去った蝶ネクタイ形の彫刻文」（14・92・112・134）、②「1条の横線の両端を二股にした沈線文」（30・113・119・128）、③「内湾する四辺形の輪郭のみを描いた沈線文」（27・111・114・115）の3種類があるが、本稿で集成した資料においてはこれらが同様の文様構成の中で区別無く、同じ文様要素として使用されている。このような3種類のモチーフを同一視して用いる例は、八日市新保2式～勝木原・御経塚1式期の波状口縁深鉢形土器の波頂部文様などに確認できる一方、他の地域の土器文様等では確認できない。このことから、これらの「連結三叉文」は北陸地方由来の文様であると推察される。

註8．大坪志子氏のご教示による。

註9．稲野氏の近年の研究（稲野2005）では、第1類でも新段階のものには盲孔・正中線をもつ例があるという。

註10．モースは、土版にも顕著な摩滅痕のあることを報告しており（E.S.Morse 1879）、土製品に対しても摩擦・研磨等を伴う行為がおこなわれた可能性がある。

〈補遺〉

脱稿後、秋田県横手市の虫内Ⅰ遺跡出土資料中にも北陸地方の岩版類と似た石製品があることを知った。報告書（秋田県教委1998）で「線刻礫」と報告されているものの一部で、写真のみの掲載であるために断面形態を含めた判断が難しいが、B類やC類に分類されるようなものを含んでいるとみられる。縄文時代後期後葉から晩期前葉の時期の捨て場から出土している。

〈参考文献〉

青森県教育委員会 1978『源常平遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会 1986『今津遺跡・間尺遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会 1996『泉山遺跡Ⅲ』
青森市教育委員会 1985『長森遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会 1997『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
秋田県教育委員会 1978『湯出野遺跡発掘調査概報』
秋田県教育委員会 1981『藤株遺跡発掘調査報告書』
秋田県教育委員会 1988『中小坂遺跡発掘調査報告書』
秋田県教育委員会 1992『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家ノ後遺跡－』
秋田県教育委員会 1998『虫内Ⅰ遺跡』
秋田県教育委員会 2005『向様田D遺跡』
秋田県埋蔵文化財センター 1994『白坂遺跡発掘調査報告書』
朝日村教育委員会ほか 2002 a『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』
朝日村教育委員会ほか 2002 b『アチヤ平遺跡上段』
阿部義平 1993「上黒岩の線刻礫」『月刊 考古学ジャーナル』第358号　ニュー・サイエンス社
天羽利夫 1965「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」『史学』第37巻第４号　三田史学会
E.S.Morse 1879『Shell Mounds of Omori』
池上啓介 1933「土版岩版の研究－特に土版岩版の形式及び分布状態に就て－」『上代文化』第10号
石川県立埋蔵文化財センター 1985『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（Ⅱ）』
石川県立埋蔵文化財センター 1989『金沢市米泉遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1997『六橋遺跡』
（財）石川県埋蔵文化財センター 2001『松任市乾遺跡発掘調査報告書』
伊勢市教育委員会 1990『佐八藤波遺跡発掘調査報告書』
板柳町教育委員会 1993『土井Ⅰ号遺跡』
伊藤正人・川合剛 2000「東海地方の中・後期土偶」『土偶研究の地平－「土偶とその情報」研究論集（４）』 勉誠出版
伊藤正人 2005「顔の輪廻－土偶と土面の西東－」『古代学研究』第168号
稲野彰子 1982「関東地方における岩版・土版の文様」『史学』第52巻第２号　三田史学会
稲野彰子 1983 a「岩版・土版出土遺跡－東北・関東地方－」『考古遺跡・遺物地名表－原始・古代－』 柏書房
稲野彰子 1983 b「岩版」『縄文文化の研究』第９巻　雄山閣
稲野彰子 2004「岩版の周辺」『時空をこえた対話―三田の考古学―』 六一書房
稲野彰子 2005「馬淵川流域における岩版・土版第１類と第２類」『北上市立博物館研究報告』第15号
稲野裕介 1983「岩偶」『縄文文化の研究』第９巻　雄山閣
稲野裕介 1998「亀ヶ岡文化における岩偶（１）」『列島の考古学』
岩手県教育委員会ほか 1982『盛岡市萪内遺跡』
（財）岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 1986『手代森遺跡発掘調査報告書』
（財）岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 1993『泉屋遺跡発掘調査報告書』
江坂輝弥 1964「日本石器時代における岩偶の変遷」『日本考古学協会　昭和39年度群馬大会発表要旨』
大分県教育委員会 1996『大分県埋蔵文化財年報４－平成６（1994）年度版－』
大野　薫 2000「近畿地方の終末期土偶」『土偶研究の地平－「土偶とその情報」研究論集（４）』 勉誠出版
大野延太郎 1897「土版ト土偶ノ関係」『東京人類学会雑誌』第12巻第131号
大野延太郎 1901「石器時代土偶系統品と模様の変化に就て」『東京人類学会雑誌』第16巻第184号
小熊博史 1997「岩偶・岩版」『縄文時代の信仰－土偶と石棒－』科学博物館資料シリーズ№７　長岡市立科学博物館

長田友也 2004「新潟県アチヤ平遺跡出土の線刻礫（岩版）についての考察」『三面川流域の考古学』第３号
小矢部市教育委員会 2003『桜町遺跡発掘調査報告書　弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ』
小矢部市教育委員会 2004『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅰ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ』
小矢部市教育委員会 2005『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文遺構編Ⅱ　弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ』
小矢部市教育委員会 2006『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文土器・石器編Ⅰ』
小矢部市教育委員会 2007『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文土器・石器編Ⅱ』
葛西　励 1970「三角形岩版考」『郷土誌うとう』第74号　青森郷土会
金沢市教育委員会ほか 1984『金沢市新保本町チカモリ遺跡 - 石器編 - 』
金子昭彦 2001『遮光器土偶と縄文社会』　同成社
金子拓男 1983「三角形土版・三角形岩版」『縄文文化の研究』第９巻　雄山閣
高知県教育委員会1975『高知県片粕遺跡』
小島俊彰・西野秀和・酒井重洋 1994「北陸の土器編年」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』北海道大学
小杉　康 1986「千葉県江原台遺跡及び岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品－所謂亀形土製品、土版、岩版の型式学的研究と用途問題・素描－」『明治大学考古学博物館館報』第２号
小杉　康 1988「石製タブレットＢ群」『薄磯貝塚』いわき市教育委員会・いわき市教育文化事業団
小杉　康 1998「縄文時代の儀礼と祭祀」『平成10年度春季特別展 縄紋の祈り・弥生の心－森の神から稲作の神へ－』大阪府立弥生文化博物館
(財) 古代學協會 1997『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』
児玉大成 1997「三角形岩版について－小牧野遺跡を中心として－」『青森県考古学』第10号　青森県考古学会
児玉大成 2001「縄文後期前半の岩版類と大型配石遺構」『渡島半島の考古学』
小林達雄 1967「縄文晩期における〈土版・岩版〉研究の前提」『物質文化』第10号　物質文化研究会
駒見和夫 1981「富山県出土の岩偶について」『富山市考古資料館報』№５
斎藤和子 2001「岩版・土版の身体表現について－土偶との関わりから－」『人類学雑誌』第108巻第２号
寒川朋江 2001「南九州の軽石製岩偶」『縄文・弥生移行期の石製祭祀具３』考古学資料集18
潮見　浩 1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号
滋賀県教育委員会ほか 1997『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
島根県教育委員会ほか 2006『原田遺跡（２）- ２区の調査 - 』
榛東村教育委員会 1991『茅野遺跡概報』
鈴木克彦 1980「岩版・土版の研究序説」『調査研究年報（1979年度）』第５号　青森県立郷土館
芹沢長介 1960『石器時代の日本』　築地書館
鷹野光行 1977「関東地方の土版の分類について」『古代文化』29－10
鳥海町教育委員会 1998『提鍋遺跡（鳥海町統合中学校建設用地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査概報）』
東北大学文学部考古学研究会 1984『中沢目貝塚－縄文時代晩期貝塚の研究－』
戸澗幹夫 1998「富来町酒見新堂遺跡出土の異形石器」『石川れきはく』№48　石川県立歴史博物館
戸澗幹夫 2001「富来町酒見新堂遺跡出土の異形石器」『能登半島の考古学』石川考古学研究会々誌第44号
外山和夫 1999「滝沢遺跡および六万遺跡の岩版類」『赤城村歴史資料館紀要』第１集
外山和夫 2000「滝沢遺跡の岩版類－その２－」『赤城村歴史資料館紀要』第２集
富山県教育委員会 1975『富山県魚津市早月上野遺跡第１次緊急発掘調査概報』
富山県教育委員会 1976『富山県魚津市早月上野遺跡第２次緊急発掘調査概報』
富山市教育委員会 2001『北代縄文通信』第８号
中郷村教育委員会 2000『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ - 遺物編 - 』
中村健二 2000「近畿地方における縄文時代後期土偶の成立と展開」『土偶研究の地平－「土偶とその情報」研究論集（４）』　勉誠出版
中村孝三郎 1981『赤松遺跡発掘調査報告書』　下田村教育委員会
中谷治宇二郎 1929『日本石器時代提要』　岡書院
成田英子 1974「日本石器時代における土版・岩版の研究」『遮光器』８号　みちのく考古学研究会
新潟県青海町 1987『史跡 寺地遺跡』
西土佐村教育委員会 1999『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』
西野秀和 2003「八日市新保式土器再考」『立命館大学考古学論集Ⅲ』

能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986『石川県能都町真脇遺跡』
能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 2002『石川県能都町真脇遺跡2002』
野々市町教育委員会 1983『野々市町御経塚遺跡』
橋本　正 1976「御物石器論」『大境』第６号　富山考古学会
八戸市教育委員会 1988『八幡遺跡発掘調査報告書』
八戸市博物館 1988『縄文の美 - 是川中居遺跡出土品図録 第2集 - 』目で見る八戸の歴史５
原河英二 1995「宮城県における岩版・土版について」『仙台市博物館調査研究報告』第15号
原河英二 2001「東北地方における岩版・土版に関する一試案」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告４』
福島市教育委員会 2004『宮畑遺跡（岡島）- 確認調査報告 - 』
福島市教育委員会ほか 2005『史跡 宮畑遺跡 - 史跡整備発掘調査報告１ - 』
福島市教育委員会ほか 2006『宮畑遺跡３（岡島）- 福島工業団地造成予定地埋蔵文化財発掘調査Ⅳ - 』
藤田富士夫 1998『縄文再発見 - 日本海文化の原像 - 』　大巧社
平安博物館 1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』
保坂三郎 編 1972『是川遺跡』　中央公論美術出版
堀越正行 1979「船渡貝塚と土偶・石冠形土製品」『史館』第11号　史館同人
三重県埋蔵文化財センター 1995『天白遺跡』
南　久和 1998「三叉状文」『市史かなざわ』第4号　金沢市史編さん事務局
三春町教育委員会ほか 1987『西方前遺跡Ⅱ　土製品・石製品篇』
宮尾　亨 1997「縄文人のしぐさ」『國學院大學考古学資料館紀要』第13輯
宮尾　亨 1998「縄文人のしぐさ（承前）」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯
村山市 1981『村山市史編集資料』第９号　作野遺跡遺物集成　村山市史編さん委員会
八木勝枝 2001「第Ⅲ章 遺跡各説・６ 熊登遺跡・（４）石製品」『三面川流域の考古学』第１号　奥三面を考える会
（財）山形県埋蔵文化財センター 1995『宮の前遺跡第２次発掘調査報告書』
山田康弘 1994「有文石棒の摩滅痕」『筑波大学先史学・考古学研究』第５号
横山勝栄 編 1976『熊登遺跡』新潟県岩船郡朝日村教育委員会
横山勝栄 1980「新潟北部における土版・岩版の存在とその意義」『考古風土記』第５号　私刊（鈴木克彦）

〈岩版類ほか実測図の出典〉

第１図　稲野彰子1983ｂ
第２図　（三角形岩版・円形岩版）　青森市教委1997
　　（線刻礫）　朝日村教委ほか2002ｂ
第３図　１～４，６～８,10～14　小矢部市教委2007
　　５，９　小矢部市教委2006
第４図　15　石川県立埋文1985
　　16　金沢市教委ほか1984
　　17　能都町教委ほか2002
　　18～23　石川県立埋文1997
　　24　筆者実測図
　　25　戸澗2001
　　26,34　（財）石川県埋文2001
　　27～29　山本正敏氏実測図
　　30　富山市教委2001
　　31　新潟県青海町1987
　　32　中郷村教委2000
　　33　能都町教委ほか1986
第５図　35～46　青森県教委1996
　　47～49　（財）古代學協會1997
　　50　八戸市博1988掲載写真より作成
　　51～56　八戸市教委1988
　　57　青森県教委1978
　　58,59　青森市教委1985
　　60　板柳町教委1993掲載図に加筆
第６図　61～63　秋田県教委1992
　　64　秋田県教委2005
　　65～67,69,70,72,73,76～79　秋田県埋文1994
　　68,71,75　秋田県教委1981
　　74　秋田県教委1988
　　80　秋田県教委1978
　　81　小林1967
第７図　82,83　（財）岩手県文化振興事業団1986
　　84　岩手県教委ほか1982
　　85　（財）岩手県文化振興事業団1993
第８図　86　（財）山形県埋文1995掲載図を修正
　　87　村山市1981
　　88,89　（財）山形県埋文1995
第９図　90,92　稲野2004
　　91　東北大学考古研1984
第10図　小杉1988

第11図　110　福島市教委2004
111　福島市教委ほか2006掲載図に加筆
112　福島市教委ほか2005
113　福島市教委2004掲載図に加筆
114　福島市教委ほか2006
115　三春町教委ほか1987掲載図に加筆
第12図　116,117　小熊1997掲載写真より作成
118,119　稲野2004
120　朝日村教委ほか2002 a
121　八木2001
第13図　122,123,125～129,131～133　外山1999
124,130　外山2000
134　筆者実測図
第14図　135～147　三重県埋文1995
148　伊勢市教委1990
第15図　149　滋賀県教委ほか1997
150　平安博物館1975
151　島根県教委ほか2006
153　西土佐村教委1999
154　高知県教委1975
155　大分県教委1996
第16図　寒川2001
第18図　（八日市新保２式土器）　野々市町教委1983
（小谷型石刀）　石川県立埋文1989
（橿原型石刀・上）　石川県立埋文1985
（橿原型石刀・下）　野々市町教委1983

6　桜町遺跡出土木部遺物の検討

山田　昌久（首都大学東京大学院人文科学研究科）

はじめに

桜町遺跡から発見された木部遺物群（本論では、人類が使用したもの＝木材、それ以外の自然埋没のものも含めた呼称＝木部遺物・資料、とした。）は、器具材から構築部材そして非使用物におよぶ多様のものが含まれている。人類は生活資材の多くを植物によってまかなってきたので、考古学の遺物研究のなかでも、生活の復原のためには木部遺物群研究が必要不可欠な存在となる。

たとえば、現在私たちが生活に多用している化石資源は、つい３世代前の日本においては、ほとんどが植物資源によって賄われていた（図１）。光・熱のエネルギー、衣服、調理用品、風呂・洗面用品、日用品、調度用品、そして建築土木用資材などと、その利用範囲は膨大であった。

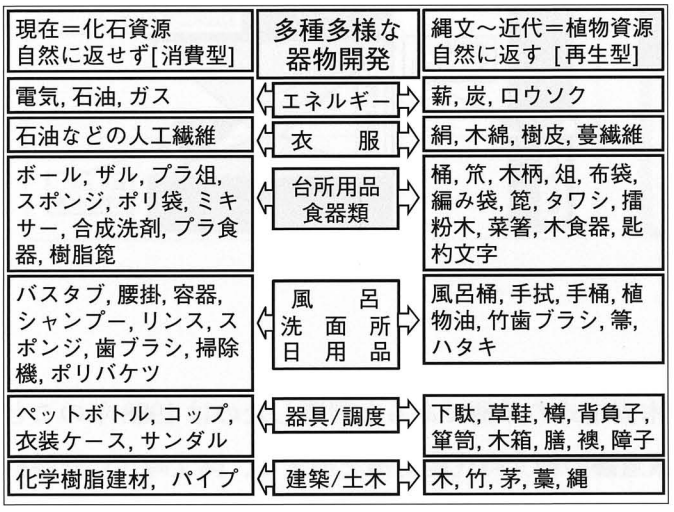


図１ 現在と過去の生活資材の資源差比較

しかし、現代の考古学研究の構想は、「遺跡発見資料の観察・分類研究」をどう展開するかという慣習の運用から成り立っているので、植物資源に対する研究もその慣習の延長で展開されてきている。この方法的未成熟は、出土木部遺物群の研究の場で、齟齬を生じさせている。スギの多く生育していた土地とコナラ属を基本とする土地とでは、同じ「腰掛」や「形代」と考えられる遺物が、別形状・別加工で製作されることがある。素材と技術運用が連動したためである。また、ひとつの遺物に転用を繰り返した結果の変形が蓄積されることがある。また、ある資源が器具や施設の用材に使用されたり、繊維を取り出して再組織して糸や布そして衣服へと加工され使用されたり、燃料や光などのエネルギーとして使用されたり、というように、複合利用されていた実態を研究するための手法開発も立ち遅れている。

現在のように考古学の遺物研究が、類型化と機能判定とに終始しているのであれば、過去の人類生活や経済実態の理解はおぼつかなく、結局はキーワードを近代社会人類学から借用した、「採集経済」「生産経済」や「遊動社会」「定住社会」といった予定調和に収束先を頼るしかない。

木部遺物群には他の遺物には無い、そうした近代考古学の限界に起因する「研究の閉塞状況」を打破する研究法を生み出す、時間・効率・環境に関する情報が内包されている。そこで、桜町遺跡の出土木部遺物から、そうした問題について検討する方法的模索を行なってみたい。

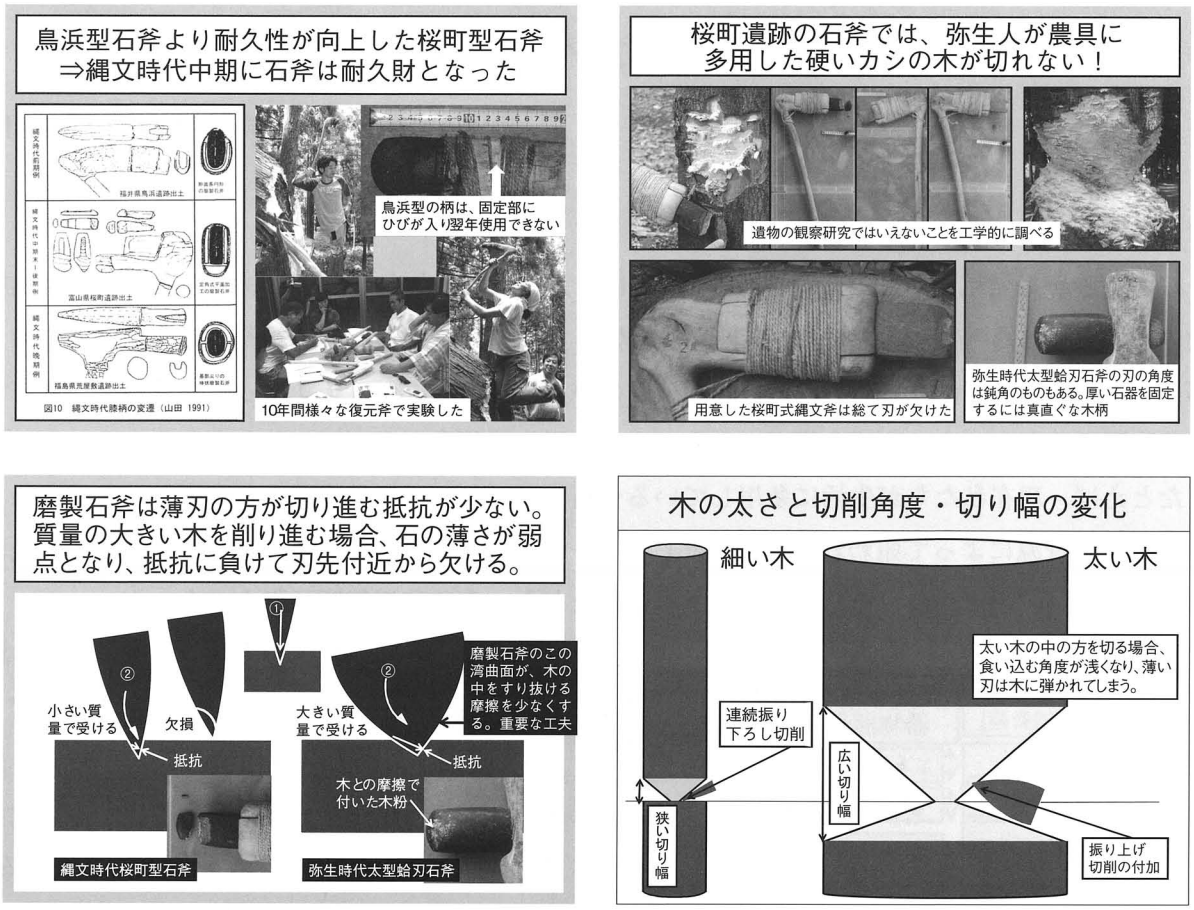


図２ 桜町型柄装着石斧の効力の位置づけ

１．紀元前３千年紀以降の木工具開発

桜町遺跡で発見された膝柄を、山田が添え木固定式の斧柄であると判断したのは1988年のことであった。その後、福島県番匠地遺跡や荒屋敷遺跡の縄文時代晩期例を加えて、縄文時代に斧膝柄を３つの種類に区別し、滋賀県滋賀里遺跡の縄文時代晩期の斧直柄を加えて、伐採具の種類がほぼ掌握された。また、新潟県大武遺跡や東京都下宅部遺跡、そして青森県是川遺跡などでの発見例によって、固定法や斧基部形状と柄固定部との関係についての情報が蓄積された。

では、こうした紀元前３千年紀からの木工具開発は、いったい何を求めての変化だったのだろうか。それを追求するために、私はこの10年間科学研究費補助金などを得て、実験考古学を行ってきた（図２）。「実験考古学による遺跡発見器具の効力と資源利用の研究」という研究課題の追求の結果、以下のことが判明した。

①日本における磨製石斧使用時の人々による、石斧の耐久性確保⇒「器具」を「長期保有」するという構想を実現させた工夫。

②伐採効率と伐採対象木の堅さ・太さに対応する石斧形状・固定形状の設計⇒切削作業面への石斧刃進入角度の工夫と、切削時の木部抵抗に対応する刃部応力創出の工夫。

まず、桜町遺跡で確認された「添え木使用で石斧を固定する」ことによって、ソケットを刳り貫いてそこに石斧基端部を納める鳥浜型の場合よりも、ソケット裂けによって生じる石斧着脱作業や長期使用を妨げる要素、が改変された。実験実施の結果、打撃時の斧身の圧力により鳥浜型柄が1年でソケット割れを起こすことが一般的であったのに、桜町型柄の場合では2年3年と継続使用ができた。鳥浜貝塚で石斧柄未成品が完成品よりも圧倒的多数が遺跡に残されているのは、桜町遺跡以降の時期の添え木固定式石斧柄使用時には無い現象である。この背景には、添え木方式固定による柄の耐久性の向上と、添え木部分を交換することで、器具管理作業量の縮小が図られた技術改変があったとすることができる。

一方、紀元前3千年紀以前は、丸木舟や大型容器以外には大径木を使用する場面が少なく、10～20cm程度の木を伐採することが一般的であった。また、東日本ではクリで多くの構築物を作っていたことが判明しているが、実験の結果、クリは群生する他の構造体用材とし得る落葉広葉樹よりも、少ない打撃回数で伐採できることが分かった。この時点では、石斧で作業しやすい木、人力で運ぶことができる芯持ち小径木、が木部資源と見なされていたと考えられるのである。

しかし、縄文時代晩期からは、特に北陸地方で50cmを超える太さ、時には90cm以上の太さの構築物が多数発見されている。太い木と関係が恒常化していたと考えられる。分割用の木箭も少数ながら出土例がある。そして、60cm以上の太さのアカガシ亜属材を使用した木製鍬がどの集落でも発見されるようになる突帯文期以降、堅い木の伐採・加工が始まり、また1～2mのスギ大木の伐採も行なわれるようになる。つまり、人類はこの頃から「堅い木・太い木の伐採に耐えうる石斧」が必要になったのである。桜町遺跡でも検出された、縄文時代晩期の環状配置の分割木材群は、「大径木を割る新技術の誇示」が内在された施設址と考えられる。

図2に示したように、添え木固定方式の桜町型斧は、石斧身が定角式と呼ばれる厚みのあまり無いものを固定するので、石斧の刃部も角度が鋭角に（薄く）作られている。この斧でアカガシ亜属の木を伐採したところ、用意した4点の復原品総てが、数回～数十回で刃先がかけてしまった。打ちつけ方にももう少し工夫が必要だった可能性はあるが、同じ時に行なった太型蛤刃石斧は、刃角が大きい（厚い）ため、刃の欠損はほとんど無く、20本近くのアカガシ亜属の木々を伐採することができたので、欠損はやはり刃部の厚みと相関すると言いうるだろう。

縄文時代後期以降、定角式磨製石斧のほかに、①厚みのあるゴロッとした磨製石斧、②基部が尖った磨製石斧、が認められるようになる。前者は、番匠地遺跡や荒屋敷遺跡で発見された上から被せるような添え木の柄が対応する。石斧身の厚さは刃角の広大につながった。後者は、下宅部遺跡・是川遺跡で発見された、桜町遺跡の石斧基端部が柄の斧装着台部中軸部に作られた削り残し部の面と衝突対応するようになっていたものを、基端部から側縁部にかけての傾斜をもって設置面として、衝突圧を木部で直接受けることを避ける形への改変である。太い木や固い木の伐採には、打撃回数増に対する刃部・基端部双方への工夫が必要であったと考えられる。

そして、最終的には装着孔に磨製石斧を着装する、太型蛤刃石斧用直柄への転換が図られた。石斧刃部を鈍角になるまでにすると、石斧身の厚みは円に近いものとなり、重量増による振り難さと

太い身を固定するには、穴差し込み固定の直柄の方が安定感・着脱自由度双方が勝ることになる。磨製石斧には穴差し込み固定痕跡のある事例が各地で発見されており、直柄が縄文時代前期から存在したことを物語っている。しかし、直柄斧出土例の比較研究からは、縄文時代後期から晩期のものと、弥生時代のものとが系統が同じか異なるのか議論が分かれるところであるが、いずれも、石斧の作業効果改変に向けたものと考えられる。おそらく丸木舟用などの大径木伐採に特別に用いる縄文時代の少数例と、鍬鋤を日常品として竪木大径木伐採を恒常化した弥生時代例との差異を説明する研究が必要となるのであろう。また、堅い木の伐採に対するためには、膝柄の柔軟材のしなりによる衝撃応力から、太さのある装着孔部での衝撃応力の確保が必要になったため、柄材もクヌギやアカガシ亜属材へと変化する。福岡県正福寺例と滋賀県滋賀里例の直柄材の用材差は、大径木随時伐採から竪木大径木常時伐採への移行時期を議論する鍵となる可能性が内在している。

太い木を伐採する場合と細い木を伐採する場合とでは、太くなるにつれて作業量は相乗的に大きくなる。また、石斧の刃部は、あまり浅い角度では切削作業面に食い込むことが出来ずに木部に弾かれてしまうので、切削幅を広げて打撃角度を確保することが必要となる。そこで、切削体積が木の太さの３乗にとどまらずに、除去する下方部も切削する必要が生じ、作業量を増加させることになる。紀元前３千年紀までの小径木利用は、伐採作業量を抑える意味も合ったと考えられる。胸高直径１ｍのスギの伐採には26,000 ～ 30,000 回程度の打撃が必要であり２日程度の時間をかける必要がある。しかし、桜町遺跡で多用されていた 10 ～ 20cm 程度のクリであれば、400 ～ 700 回程

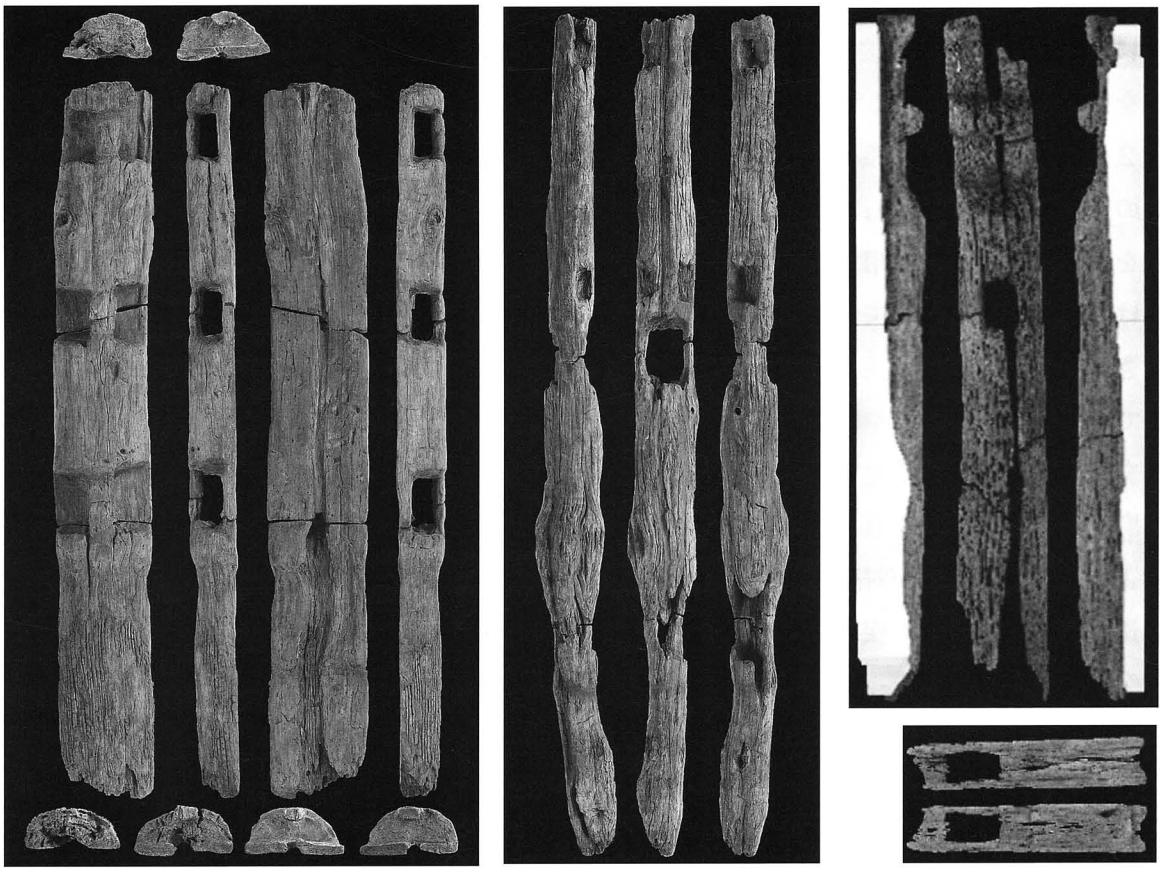


図３　桜町遺跡出土の仕口材

度の打撃で伐採することができる。土葺き屋根の30本程度の木を調達して構築する竪穴住居の用材調達であれば15,000回程度の打撃、つまり、1日仕事で材調達が可能であった。これが、桜町遺跡の時期の石斧木工であったといえる。ここに、この時期の技術力と経済性の議論の、基礎となる数値情報が提供できるようになった。

2．仕口加工と石鑿

桜町遺跡出土材で注目されたもうひとつの点は、仕口加工の存在である。それ以前は、奈良県唐古遺跡の高杯などの器具や、山木・登呂遺跡などの出土構築部材に、木組を達成するための加工が見られたことから、仕口・継ぎ手の萌芽が弥生時代に見られるとされてきた。この技術発揮の背景には、鉄器による加工正確性の確保と、水分調整をした木材の加工による組み合わせ後の大きな材変形を防ぐ関連技術の存在との、両者の存在があるものと考えられていた。

出土構築部材に対しての観察研究からでは、水分調整の技術発揮が在ったか無かったかの判断は困難であるし、仕口面は組み合わせ時や構築後の圧力で潰れたりしていて鉄器加工か石器加工かの判断はやはり難しい。そこで、一般的には石器では仕口の加工が出来ないのではないかとされてきたのである。ところが、桜町遺跡出土の縄文時代中期末～後期初頭の木材の中には、仕口加工のある遺物が複数確認された。1980年代末には貫のある柱が出土し、高床建物が縄文時代にあった可能性が、遺物を根拠に議論できるようになったのである。

しかし、桜町遺跡の遺物特徴として、クリの芯持ち材、および半割材に加工が成されていることは、これらの加工が石器で行なわれた場合、水分調整を経ないで加工が成された場合は、仕口で組んだ後に材変形が起こり、構造体が変形する恐れについて検討する必要がある。また、木の安定化を図ったとして水分調整をした後の石器加工の精度に、どの程度正確性があるのかについての実証的なデータは無い。鉄刃の場合と異なり、刃先を薄くした場合素材強度が鉄に劣るため、切削時の木部の抵抗に耐えられない石斧は、刃を薄く鋭利に仕上げることができない。その結果、加工面の仕上がりに差が生じることが予測される。加工効果には、樹種･水分量も影響を及ぼす因子となる。

こうした問題は、石器の形状観察や使用痕観察によってでは、解決することはできない。そこで、

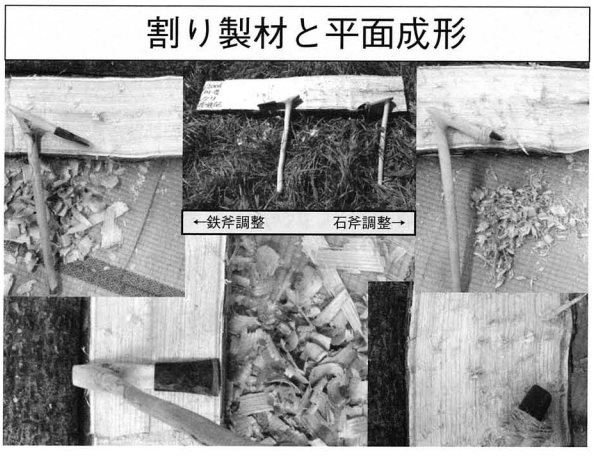


図4 石器と鉄器による平面成形と方形穴加工

各樹種の木を水分率を変えて実際に加工し、その貫や段の造作成果を示すことで、石器加工時の用材選択や水分調整作業の有無についての検討しようと考えた。そして、宮城県川渡にある東北大学のフィールド実験センターで2年間をかけて、クリ・オオヤマザクラ・ケヤキ・コナラ・スギ・アカマツの6樹種を、伐採後数週間以内の含水率40%程度の状態の時と1年以上保管して20%台以下の状態の時に、平坦面成形加工や貫・段の加工が、石器でどの位正確にできるのかを実験してデータを収集した。

図4は、伐採直後のクリを木箭で割った後に、石刃と鉄刃の手斧で平面成形したもの（左）と、石鑿と鉄鑿で方形穴を加工したもの（右）の、比較写真である。ここでは総ての実験結果を呈示することはできないが、クリ材の場合は含水率の高い場合と低い場合で、石器での方形穴加工に作業時間に違いが生じたが、加工精度には余り大きな差は生じなかった。鉄器の穴加工は石器より極端に作業時間が短くなり、加工面の平坦仕上がりや谷線稜線の直線的仕上がりが高精度になる。しかし、石器でも時間さえかければ、材を組み合わせることが十分可能な加工効果が得られることが分かった。

一方、スギ材の場合は、石器による方形穴加工の際に含水率の高低で大きな違いが生じた。石鑿の刃の鈍さは、含水率の高い場合ではある程度切削が可能であったが、含水率を下げた木材では、やわらかく脆い夏材部の切削時に、刃部が少し磨滅すると木部を切り込む際に、周辺材が潰れたり剝ぎ取られたりして、直線や平坦面を成形しにくくなった。

これらの一連の実験から、針葉樹材を安定化させて変形を抑えた上で（水分調整して）仕口や継ぎ手による構造体製作は、石器加工では困難な作業で鉄器加工の開始によって運用が進んだと考えられた。クリの芯持ち材や半割材は、乾燥収縮時に回旋する木理によっての捩れが起こりやすい。桜町遺跡のクリ芯持ち材に貫や合掻きが施されたということは、当然材の安定化作業（木殺し）を経た材に対する加工であったと考えられる。かつて、滋賀県滋賀里遺跡において検出された芯持ち材や半割材に対して、「あたかも貯木されたかのような」と報告されたことがあるが、こうして論を進めてくると、「貯木」は単なるストックではなく、今の宮大工の方々の言う「水漬け乾燥（木を寝かせて木材としての安定化を図ること）」の知識が、縄文時代に在ったことが提示された遺跡であったと再考してみる必要がありそうだと考えられる。

3．出土木部遺物群に関する検討

桜町遺跡から出土した構造材関連の木部遺物群は、水利施設や護岸施設の構築に再利用されたものや、廃棄木、そして製品化されたもの、というように複数の経路をへて沢周辺に埋没していたものである。貫のある柱も最初は高床建物の柱であったとされているが、発見時は水枡構成材として再利用されていた。基本的には人類の関与した木材であるといえる。こうした遺物の呼称決定は難しい。最初の用法の一部がうかがえるだけに、水利施設の構成材と報告しただけでは説明が十分でないし、逆に高床倉庫の柱と言ってしまうと、変形を受けたその遺物をやはり十分説明したことにはならないからである。また、検出された状態は最終的な利用時点での集合であるので、多経路の

用材が混在するため、遺構を構成する一括遺物の意味が、複雑な入手過程（伐採時期や地点の不一致性）を考慮する必要がある。

そこで、桜町遺跡における木の利用状態を、そうした遺跡条件を前提とした上で、大枠での傾向をつかむ調査を行なった。取ったデータは、①木取り（樹芯からの距離･材を取る方向）、②年輪数、③樹種、④節の有無、の４項目に関するものである。目的は、利用した木部に内包された、時間情報や環境情報・材質と材使用法を議論することにある。この様な施設にも、やがて新潟県青田遺跡で成功した構築年代研究が行なわれる必要があるが、その際になすべき前作業を示すことにも通じる調査とも位置付けられる。

調査形態はサンプル調査で、取り上げた木部資料群の中から木部の観察ができる、121 点に対してランダムサンプル調査を行なった。ここには、木の樹種ごとのタフォノミー研究がまだ熟成されていないという問題点がある。結果として観察資料の樹種に、偏りが生じた可能性が皆無だとは言い切れない点が０とは言えない。これまで桜町遺跡のような低湿地の遺跡から発見された木部遺物は、ほとんどの場合かなり脆く柔らかい木も３方向の切片採取がなされている。一方、実験考古学では炭化木は燃焼時の燃え尽き方にかなりの差があり、残存物からの比率研究には注意しなければならない可能性が高いことが判明した。ここでは、非炭化の木部資料の場合は、材変形による木取り径の復元に関する信頼性の問題はあるものの、組成比率に関する危険性はひとまず無いこととして論を進めることにしたい。

調査結果は表１～３に示した。表の記載項目は、本調査のためのサンプル番号、遺物名［転用］（木取り）としたのは木部遺物の利用時の形態や付加された加工、調査年、出土地点、遺物台帳の登録番号、木取り部位、年輪数、節の有無、樹種、所属時期、報告書の遺物番号、である。また、1980 年代の調査遺物は、保存期間が長かったために、総ての資料の計測条件が同じだとは、厳密に言うことは出来ない。表内の地点（遺構）は省略した記載なので、必要に応じて報告文との照合をお願いしたい。

まず樹種をみると、中期末以前の資料はクリはやはり多いものの、イヌガヤ・エノキ属・ハンノキ属・カツラ・カエデ属など多様性があることが指摘できる。これは人類の森林関与の形が、まだ特定種偏重に傾斜していないことが指摘できるが、前歴のない木部の利用と考えることもできる。これはおそらく地点生育木利用の問題として理解する必要がありそうである。さらに、人類悲関与の木部資料が混在しているものと考えられる。それに対して、中期末～後期初頭の遺物はクリへの集中が 95％と際だっており、ケヤキ・コナラ節・ムクノキ・カツラ・ヤブツバキが各１例確認されるのみである。

年輪数を見ると、中期末以前の資料には 20 年以下のものが目立ったのに対して、中期末～後期初頭の資料には、若干の数年生のもの、同じような 10 ～ 20 年の資料に加えて 40 から 60 年生のもの、最大で 91 年生のもの、までが確認された。そして晩期のものは 38 ～ 69 年生のものまでであり、遺構の性質もあるが、比較的長年生の木を使用していたことが分かった。中期末～後期初頭の木部資料は、同時期の遺跡たとえば埼玉県寿能遺跡の資料と比較すると、年輪数はやや多い傾向を

番号	遺物名[転用](木取り)	調査年	地点(遺構)	遺物番号	部位	年輪数	節の有無	用材種	時期	報告番号
001	芯持ち材	1998	SX19	No.278	樹芯～4．0cm	20	×	イヌガヤ	中期末以前	22
002	芯持ち材	1998	SX19	No.280	樹芯～4．5cm	15	○	エノキ属	中期末以前	24
003	放射線面分割材	1998	SX19	No.279	樹芯～7．2cm	28	×	クリ	中期末以前	26
004	芯持ち材	1998	SX19	No.283	樹芯～4．4cm	15	○	ハンノキ節	中期末以前	25
005	芯持ち材	1998	SX19	No.282	樹芯～4．6cm	18	×	クリ	中期末以前	23
006	放射線面分割材	1998	SX19	No.281	樹芯～7．5cm	30	×	クリ	中期末以前	27
007	放射線面分割材	1998	SX19	No.277	樹芯～8．1cm	33	×	クリ	中期末以前	28
008	芯持ち材	1997	第一遺構面	No.273	樹芯～11．0cm	33	○	クリ	中期末～後期初頭	06
009	芯持ち材	1997	第一遺構面	No.274	樹芯～14．1cm	53	×	クリ	中期末～後期初頭	07
010	芯持ち材	1997	X51,95 Y86.05	No.275	樹芯～14．1cm	46	×	クリ	中期末～後期初頭	09
011	芯持ち材(芯付近腐れ)	1988	X52.9 Y87.2	No.131	樹芯から12～27cm	61	×	クリ	中期末～後期初頭	04
012	芯持ち材(芯付近腐れ)	1988	X52.6 Y87.2	No.134	樹芯から10～26.5cm	77	○	クリ	中期末～後期初頭	05
013	放射線面分割材	2001	SK145	No.310	樹芯～24．0cm	46	×	クリ	晩期中葉	17
014	放射線面分割材	2001	SK119	No.306	樹芯～26．0cm	58	×	クリ	晩期中葉	11
015	放射線面分割材	2001	SK121	No.307	樹芯～34．0cm	69	○	クリ	晩期中葉	12
016	放射線面分割材	2001	SK186	No.312	樹芯から7．0～22．0cm	38	×	クリ	晩期中葉	13
017	放射線面分割材	1998	SX17	No.300	樹芯から7．0～21．0cm	59	×	カツラ	中期末以前	81
018	放射線面分割材	2001	SK197	No.311	樹芯～21．0cm	63	×	クリ	晩期中葉	16
019	放射線面分割材	2001	SK136	No.309	樹芯＝31．0cm	50	×	クリ	晩期中葉	15
020	放射線面分割材	2001	SK134	No.308	樹芯～23．0cm	51	×	クリ	晩期中葉	14
021	放射線面分割材	1988	SD06	No.218	樹芯～7．0cm	13	×	クリ	中期末～後期初頭	131
022	放射線面分割材	1997	SX02	No.082	樹芯～13．0cm	24	○	クリ	中期末～後期初頭	47
023	芯持ち材	1988	SD06	No.114	樹芯～11．1cm	56	×	クリ	中期末～後期初頭	93
024	芯持ち材	1997	SX01	No.077	樹芯～7．0cm	22	○	クリ	中期末～後期初頭	30
025	放射線面半割材(成形)	1997	SX03	No.001	樹芯～8．8cm	23	○	クリ	中期末～後期初頭	113
026	放射線面分割材	1997	SX01（2）	No.089	樹芯～14．5cm	61	○	クリ	中期末～後期初頭	178
027	放射線面分割材	1997	SX02	No.081	樹芯～6．5cm	18	○	クリ	中期末～後期初頭	45
028	放射線面半割材(成形)	1998	SX14	No.083	樹芯～17．5cm	88	×	クリ	中期末～後期初頭	179
029	芯持ち材（柱）	1988	SX09	No.113	樹芯～11．0cm	33	○	クリ	中期末～後期初頭	1
030	放射線面半割材(貫穴)	1997	SX04	No.087	樹芯～15．5cm	27	○	クリ	中期末～後期初頭	112
031	放射線面分割材(半割)	1997	SX02	No.289	樹芯～22．0cm	58	×	クリ	中期末～後期初頭	43
032	放射線面分割材	1997	SX02	No.007	樹芯～15．5cm	64	○	クリ	中期末～後期初頭	42
033	放射線面分割材(半割)	1997	SX04	No.073	樹芯～19．0cm	63	×	クリ	中期末～後期初頭	97
034	放射線面分割材(半割)	1997	SX01(2)	No.085	樹芯～12．8cm	57	○	クリ	中期末～後期初頭	36
035	放射線面分割材(半割)	1997	SX01(2)	No.290	樹芯～23．0cm	80	×	クリ	中期末～後期初頭	35
036	芯持ち材	1997	SX02	No.002	樹芯～9．0cm	28	○	クリ	中期末～後期初頭	40
037	放射線面分割材(半割)	1997	SX01	No.333	樹芯～20．5cm	42	×	クリ	中期末～後期初頭	107
038	中空丸木材	1998	SX14	No.96－1	樹芯から5．0～14．5cm	54	○	クリ	中期末～後期初頭	52
039	中空丸木材	1998	SX14	No.96－2	樹芯から5．0～14．5cm	52	○	クリ	中期末～後期初頭	53
040	中空丸木材	1998	SX14	No.003	樹芯から5．0～30．0cm	55	○	クリ	中期末～後期初頭	111
041	放射線面分割材	1997	SX01	No.080	樹芯～14．5cm	12	○	クリ	中期末～後期初頭	31
042	芯持ち材(整形・成形)	1998	SX14	No.4－1	樹芯～15．0cm	43	×	クリ	中期末～後期初頭	56
043	芯持ち材(整形・成形)	1998	SX14	No.4－2	樹芯～11．0cm	58	×	クリ	中期末～後期初頭	57
044	芯持ち材	1997	SD135	No.036	樹芯～7．0cm	30	○	ケヤキ	中期末～後期初頭	243
045	放射線面分割材	1997	SX02	No.302	樹芯～13．5cm	50	○	クリ	中期末～後期初頭	48
046	放射線面分割材	1997	SX02	No.072	樹芯～18．5cm	46	×	クリ	中期末～後期初頭	—
047	芯持ち材	1988	SX08	No.115	樹芯～6．8cm	14	○	クリ	中期末～後期初頭	95

表１　桜町遺跡出土縄文時代木材木取り観察表（その１）

番号	遺物名[転用](木取り)	調査年	地点(遺構)	遺物番号	部位	年輪数	節の有無	用材種	時期	報告番号
048	放射線面分割材	1988	SD06	No.177	樹芯～7．0cm	14	×	クリ	中期末～後期初頭	106
049	放射線面分割材	1988	SD06	No.119	樹芯から5．0～9．6cm	21	×	コナラ節	中期末～後期初頭	208
050	放射線面分割材 (木表面整形板)	1988	SD06	No.198	樹芯～10．5cm	48	×	クリ	中期末～後期初頭	195
051	放射線面分割材	1988	SD06	No.166	樹芯～8．0cm	32	×	クリ	中期末～後期初頭	165
052	放射線面分割材(板)	1987	SX01	No.140	樹芯～10．5cm	30	×	クリ	中期末～後期初頭	70
053	芯持ち材	1997	SX01	No.079	樹芯～7．9cm	26	○	クリ	中期末～後期初頭	32
054	放射線面分割材(半割) (木表面整形)	1987	SX01 (SM-ND)	No.138	樹芯から3．0～17．5cm	42	×	クリ	中期末～後期初頭	75
055	放射線面分割材(半割)	1988	SD06	No.212	樹芯～10．2cm	13	○	クリ	中期末～後期初頭	—
056	放射線面扇形分割材	1988	SD06	No.160	樹芯～8．1cm	28	○	クリ	中期末～後期初頭	129
057	放射線面扇形分割材	1988	SD06	No.169	樹芯～10．0cm	39	○	クリ	中期末～後期初頭	128
058	芯持ち材	1988	SD06	No.170	樹芯～8．5cm	23	○	炭クリ	中期末～後期初頭	90
059	板：放射線面分割材 (半割・両面整形)	1988	SD06	No.198	樹芯～10．1cm	42	○	炭クリ	中期末～後期初頭	195
060	芯持ち材	1988	SD06	No.181	樹芯～9．0cm	9	○	炭クリ	中期末～後期初頭	91
061	年輪界分割材 (両面整形)	1988	SD06	No.193	樹芯から2．5～10．5cm	30	×	クリ	中期末～後期初頭	190
062	芯持ち材(二面整形)	1988	SD06	No.182	樹芯～10．2cm	46	○	クリ	中期末～後期初頭	99
063	放射線面分割材 (半割・木表整形・貫成形)	1988	SD06	No.186	樹芯～13．0cm	35	○	炭クリ	中期末～後期初頭	98
064	芯持ち材	1988	SK02	No.205	樹芯～9．5cm	35	○	炭クリ	中期末～後期初頭	—
065	芯持ち材	1988	SX08	No.115	樹芯～7．0cm	17	○	クリ	中期末～後期初頭	95
066	柱・芯持ち材 (端部凹成形)	1988	SX08	No.116	樹芯～5．5cm	27	○	クリ	中期末～後期初頭	94
067	放射線面分割材 (枝払い)	1988	SX08	No.117	樹芯～7．0cm	14	○	クリ	中期末～後期初頭	96
068	放射線面分割材 (木表整形)	1998	X52.7,Y85.6	No.287	樹芯～6．2cm	22	×	クリ	中期末～後期初頭	162
069	放射線面分割材 (木表整形)	1997	SX01(2)	No.286	樹芯～12．0cm	53	○	クリ	中期末～後期初頭	191
070	放射線面分割材(板)	1997	SX01(2)	No.284	樹芯～14．2cm	80	×	クリ	中期末～後期初頭	192
071	年輪界分割角材	1988	SD06	No.228	樹芯から5．0～10．5cm	32	×	クリ	中期末～後期初頭	139
072	放射線面分割材(半割)	1988	SD06	No.229	樹芯～3．7cm	41	×	ムクノキ	中期末～後期初頭	104
073	放射線面分割材(成形)	1988	SD06	No.225	樹芯から3．0～5．5cm	7	×	クリ	中期末～後期初頭	173
074	放射線面分割材(半割)	1988	SD06	No.224	樹芯～4．5cm	8	×	クリ	中期末～後期初頭	101
075	放射線面分割材(扇形)	1988	SD06	No.244	樹芯～4．3cm	15	×	クリ	中期末～後期初頭	152
076	年輪界分割角材	1997	SD06	No.288	樹芯から3．5～12．0cm	66	×	クリ	中期末～後期初頭	150
077	放射線面分割材(板)	1997	SX01(2)	No.88－2	樹芯～10．6cm	51	×	クリ	中期末～後期初頭	37
078	年輪界分割角材	1988	SD06	No.184	樹芯から5．5～9．4cm	29	×	クリ	中期末～後期初頭	140
079	年輪界分割角材	1997	SX04	No.299	樹芯から3．6～8．5cm	15	×	クリ	中期末～後期初頭	137
080	年輪界分割角材	1998	SX17	No.300	樹芯から14～17．5cm	51	×	カツラ	中期末～後期初頭	81
081	年輪界分割角材	1998	SX14	No.271	樹芯から9．8～14．0cm	35	○	クリ	中期末～後期初頭	55
082	芯持ち材	1997	SX01	No.336	樹芯～4．0cm	67	×	ヤブツバキ	中期末～後期初頭	—
083	年輪界分割材(板目板)	1997	SX01	No.338	樹芯から3．0～8．5cm	40	○	クリ	中期末～後期初頭	—
084	放射線面分割材(半割)	1997	H10	No.348	樹芯～5．5cm	18	○	クリ	中期末以前	—
085	放射線面分割材(半割)	1997	SX02	No.343	樹芯～10．0cm	21	×	クリ	中期末～後期初頭	—

表２　桜町遺跡出土縄文時代木材木取り観察表（その２）

番号	遺物名[転用](木取り)	調査年	地点(遺構)	遺物番号	部位	年輪数	節の有無	用材種	時期	報告番号
085	放射線面分割材(半割)	1997	SX02	No.343	樹芯～10．0cm	21	×	クリ	中期末～後期初頭	—
086	放射線面分割材(半割)(一側縁除去)	1997	SX12	No.354	樹芯～7．1cm	11	×	クリ	中期末～後期初頭	—
087	放射線面分割材(扇形)	1997	H10	No.345	樹芯～5．7cm	24	×	クリ	中期末以前	—
088	年輪界分割材(板目板)	1997	H10	No.344	樹芯から4．0～8．5cm	38	○	クリ	中期末以前	—
089	放射線面分割材(半割)	1997	SX13	No.365	樹芯～6．6cm	22	○	炭クリ	中期末～後期初頭	—
090	柱？（芯持ち材）	1997	SX01	No.076	樹芯～11．7cm	91	○	クリ	中期末～後期初頭	33
091	放射線面分割材(扇形)	1997	SX04	No.326	樹芯～7．5cm	38	○	クリ	中期末～後期初頭	—
092	年輪界分割材(板目板)	1997	SX02	No.272	樹芯から1．0～7．0cm	27	×	クリ	中期末～後期初頭	—
093	放射線面分割材(半割)	1997	SX04	No.291	樹芯～7．9cm	33	○	クリ	中期末～後期初頭	117
094	放射線面分割材(半割)	1997	H10	No.347	樹芯～9．5cm	23	○	クリ	中期末以前	—
095	芯持ち材(太さ整形)	1997	SX01	No.075	樹芯～9．5cm	26	○	クリ	中期末～後期初頭	34
096	芯持ち材	1998	SX16	No.303	樹芯～9．0cm	19	○	カエデ属	中期末以前	79
097	放射線面分割材(半割)(木表製形)	1997	SX13	No.086	樹芯～16cm	53	×	クリ	中期末～後期初頭	118
098	年輪界分割材(板目板)	1997	SX04	No.325	樹芯から4．5～8．0	14	○	炭クリ	中期末～後期初頭	119
099	放射線面分割材(半割)	1997	SX01	No.070	樹芯から3．0～15．0cm	32	○	クリ	中期末～後期初頭	164
100	放射線面分割材(半割)(両面製形)	1997	SX01	No.071	樹芯～19．8cm	63	○	クリ	中期末～後期初頭	193
101	放射線面分割材(半割)(木表整形)	1997	SX02	No.006	樹芯～8．3cm	28	○	クリ	中期末～後期初頭	50
102	芯持ち材(欠き込み)	1997	SX01	No.077	樹芯～7．3cm	24	○	クリ	中期末～後期初頭	30
103	放射線面分割材(半割)	1997	SX02	No.082	樹芯～8．8cm	26	○	クリ	中期末～後期初頭	47
104	中空分割材(半割)	1997	SX01	No.092	樹芯から9．0～15．1cm	32	×	クリ	中期末～後期初頭	116
105	中空分割材(半割)	1997	SX01	No.091	樹芯から5．0～12．5cm	29	×	クリ	中期末～後期初頭	115
106	放射線面分割材(半割)	1997	H10	No.107	樹芯～5．0cm	12	○	クリ	中期末以前	83
107	放射線面分割材(半割)(木表製形：欠込み成形)	1988	SD06	No.165	樹芯～13．2cm	56	×	クリ	中期末～後期初頭	198
108	放射線面分割材(半割)	1988	SD06	No.206	樹芯～7．5cm	25	×	クリ	中期末～後期初頭	175
109	放射線面分割材(半割)	1988	SD06	No.239	樹芯～7．0cm	13	×	クリ	中期末～後期初頭	110
110	放射線面分割材(扇形)	1988	SG01	No.237	樹芯から5．0～11．5cm	54	×	クリ	中期末～後期初頭	125
111	放射線面分割材(半割)(木表製形)	1988	SD06	No.262	樹芯～9．5cm	18	○	クリ	中期末～後期初頭	176
112	放射線面分割材(半割)(両面製形)	1988	SD06	No.231	樹芯から5．5～11．0cm	32	×	クリ	中期末～後期初頭	177
113	年輪界分割角材	1997	SX01(2)	No.090	樹芯から4．5～13．5cm	39	×	クリ	中期末～後期初頭	159
114	放射線面分割材(半割)(両面製形)	1988	SD06	No.223	樹芯～9．0cm	45	×	炭クリ	中期末～後期初頭	171
115	放射線面分割材(扇形)	1988？	SD06	No.222	樹芯～9．0cm	36	○	クリ	中期末～後期初頭	—
116	放射線面分割材(半割)	1988	SD06	No.248	樹芯～5．1cm	21	○	クリ	中期末～後期初頭	109
117	年輪界分割材(板目板)	1988	SD06	No.251	樹芯から3．0～5．5cm	5	×	クリ	中期末～後期初頭	174
118	年輪界分割材(板目板)	1988	SD06	No.187	樹芯から4．8～9．0cm	24	×	クリ	中期末～後期初頭	166
119	年輪界分割材(板目板)	1988	SD06	No.164	樹芯から9．5～12．0cm	28	×	クリ	中期末～後期初頭	160
120	放射線面分割材(半割)(木表成形)	1988	SD06	No.163	樹芯～6．8cm	12	○	クリ	中期末～後期初頭	196
121	放射線面分割材(扇形)	1988	SD06	No.176	樹芯～5．6cm	25	×	クリ	中期末～後期初頭	136

表３　桜町遺跡出土縄文時代木材木取り観察表（その３）

指摘できる。これは利用形態の違いも考慮しなければならず、東京都下宅部遺跡の杭群などのように、利用形態によっては全く使用木の樹種や年輪数が異なることがある。

桜町遺跡の資料の場合は、芯持ち丸木材が多い寿能遺跡をはじめとする他の縄文時代遺跡例と異なり、半割材や分割角材・柾目や板目板に分割・成形した材など、製材作業を経た材が多い点が特徴である。その結果、木取りの復元径に20～30cm台の資料が比較的多く確認されたと考えられる。それは、年輪数にも影響し、40～60年生の木材が多い一因となっている。部位の項目から樹芯からの距離を検討すると、樹芯部を持つ遺物（0～と表記したもの）が多く存在する。これは、芯持ち材のほかに半割材あるいはさらに分割作業を放射線面に加えた材も含まれるが、この資料群にも40～60年生の材が確認できる。

同じことは晩期の資料にもあてはまる。新潟県青田遺跡の建物址の芯持ち材の多い柱根群は、桜町遺跡の環状配置分割柱群と比較すると、太さ年輪数ともに小さい傾向にある。

このように数値情報の傾向には、多様な決定因子を考慮する必要がある。しかしここでは、桜町遺跡の中期末～後期初頭の木部資料の「他の同時期の資料と比較してやや太く年輪数も多い傾向」は、仕口のある構造材（なかに成形板や半割材がある）にはより太い伐採木が要求された、と位置づけておきたい。木取り部位は芯持ち例と分割例の両者ともに、10cm台から20cm台が多く80％近くがこの太さの中に治まる。桜町遺跡では、クリに集中した構築部材利用・分割製材（一次利用の時からのものと、沢周辺に転用した際のものの区別がし難いものもある。）が確認されたが、芯持ち材の傾向は十数年生から30年生、とすることができ、分割材のほうは年輪数が多い傾向にあるとすることが出来るのである。部位の項目からは、それらに樹芯部が存在しない材が多いことが指摘できる。

４．桜町遺跡の木部用材法とその関連施設

では、桜町遺跡の木部用材法はどのような特徴を持っていると位置づけられるのだろうか。弥生時代以降の分割製材構想とどこが異なるのであろうか。それを検討するために表４を示した。

表４は、静岡県登呂遺跡のスギ材を同様に分析した報告と比較したグラフである。一見して分かるように、登呂遺跡での部位情報からは、240cmに及ぶ径の木が使用されていたことを示している。また、そのような太さの木の各部位が遺跡に残されていることが示されている。弥生時代の山陰東部から北陸地方、滋賀県琵琶湖沿岸地方、静岡県東部から神奈川県西部地方、の遺跡から発見される木部資料にはスギ材が多く、その太さは直径100cm以上になるものも少なくない。

弥生時代の人類は、完新世の日本列島に起こった、降水量の増加や山塊の崩落などに起因する土砂の移動堆積で生成された盆地・平野に生育地を広げたスギを大量に使用する、分割技術を駆使した製材構想で木を利用することになったものと考えることが出来る。縄文時代の中期末～後期初頭の出土木部資料には、このような樹種選択と製材法は確認できず、分割器具もまれにしか認められない。桜町遺跡の傾向が、若干太めの木を使用したとしても、それは里山クリ林（＝近隣林）を利用した小径木利用の段階にあったことが明らかである。これは木との交渉に関連する技術水準、とし

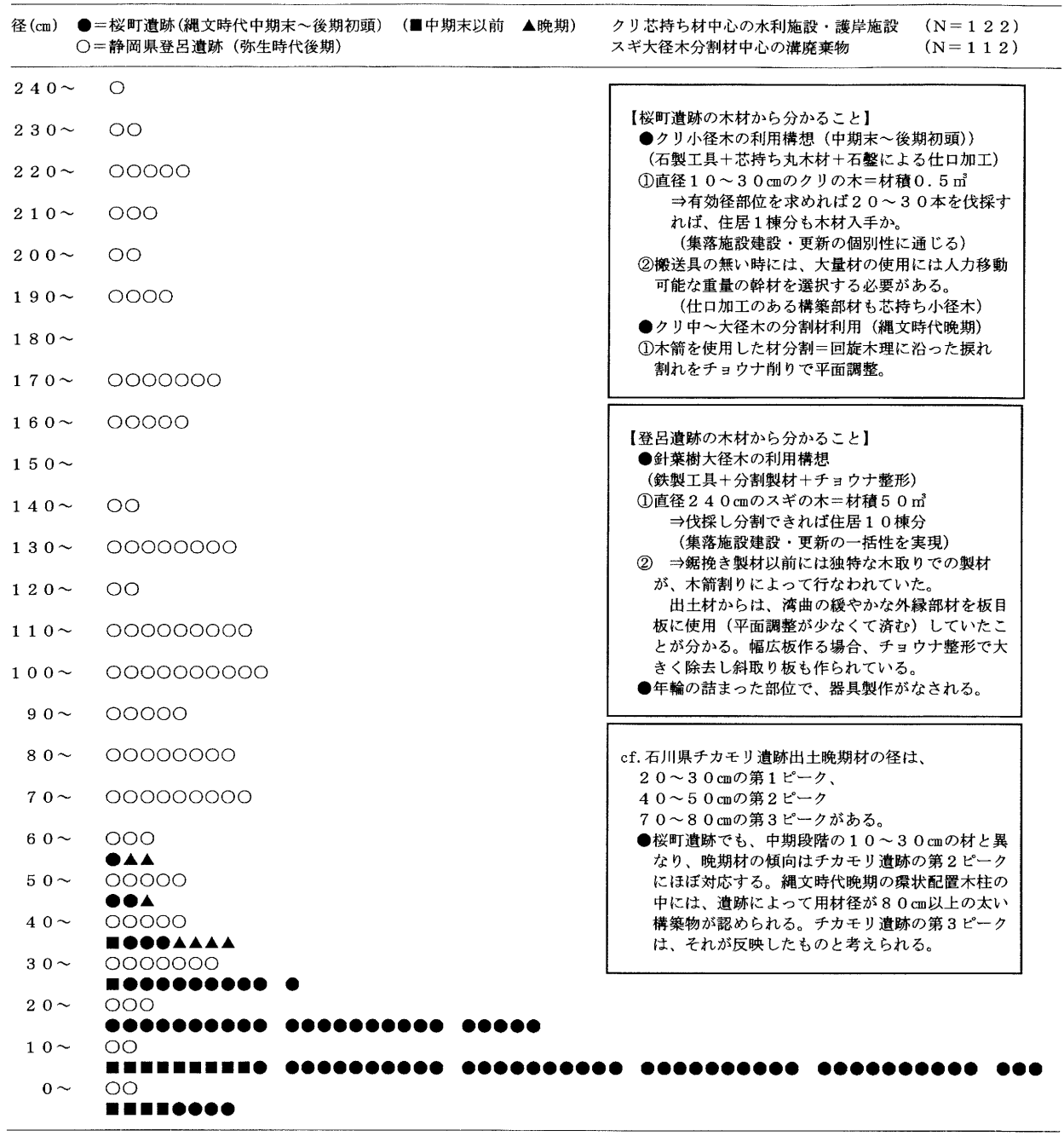


表４　桜町遺跡と登呂遺跡の使用材比較グラフ

て、①斧（両刃切削膝柄）の使用、②橇などの重量・大型物資陸上運搬具の未使用という段階における、木部資源判断が反映したものと位置づけられる。里山クリ林の継続利用は、森林更新期間の短時間化（１～２世代の時間）での人類＝森林関係を創出したと考えられる。そして、大径木を日常使用しないこうした木との交渉実態が、半割材までの小径木遺物が圧倒的であることからは、先に示した低搬送力経済に加えて、製材に関する技術の低さが規定した用材経済であった、とすることができるだろう。すなわち、分割具（木箭・掛矢）の非標準配備で行ない得た用材計画と考えることが出来るのである。

桜町遺跡例によって示される里山経済（地産地消）経済と、登呂遺跡例によって示される大径木

利用の用材経済は次のように対比できると考えられる。スギ大径木使用は、長時間の森林更新期間、つまり数世代というような時間をはるかに越える、長期間蓄積資源の切り崩し利用といえる(図５)。こうした用材径材と桜町遺跡のそれを比較すると、以下のように整理できる。

桜町遺跡型の用材が地産地消経済だとすれば、登呂遺跡型の用材は産地切り替え（伐採地の変更）型経済ということになる。縄文時代の集落は、小型ながらも海浜部から平野・台地・丘陵・山間地など、様々な場所に成立させることができて、しかも多数の土器型式の継続期間継続することができた。しかし、スギ大径木を使用した弥生時代の集落は、産地切り替えが可能な空間計画（たとえば大きな河川を利用した上流域隣接森林の確保）など、継続や規模拡大のための集落立地を規定する要素が変更されたことと考えられる。

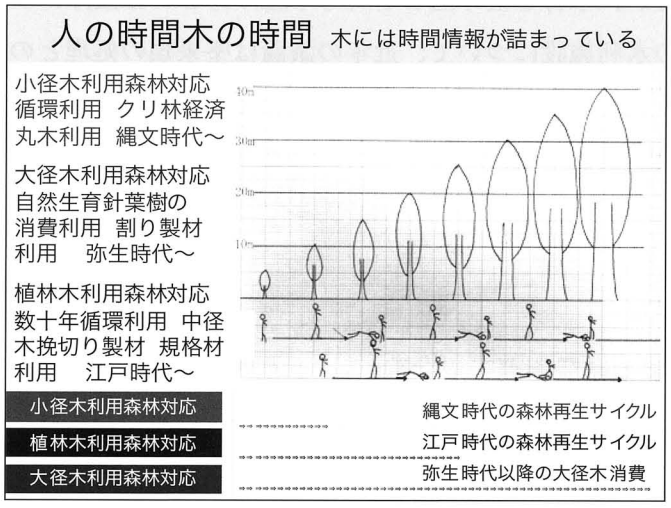


図５ 人の時間と森林資源の形成時間

また、桜町遺跡のような小径木型の用材は、木１本の有効材積が0.3～0.5㎥であるから、必要材積約５㎥である土葺きの竪穴住居であれば、１棟の建設に20～30本の木を伐採する必要が生じる。胸高直径15～20cm程度のクリの木であれば、伐採時間は10分強であるから、300分＝５時間つまり１日仕事で用材調達搬送が可能な作業であったということになる。これは単純な時代差の問題ではない。実際は、弥生時代の東日本や九州でも施設用材が、コナラ節・クヌギ節の小径木でまかなわれた、地産地消型であった事例も少なくなかった。

一方、登呂遺跡のようなスギ大径木型の用材は木１本の有効材積は50㎥であるから、同じ様な住居を作ったと仮定した場合、木１本を伐採すれば10棟分の建設資材が一括入手されることになる。胸高直径１ｍほどのスギを石斧で伐採した際のデータでは、25000打撃約２日間で倒木できたが、径200㎝となると切削体積はその８倍となるから、１週間あるいはそれ以上の時間が必要な伐採作業となり、さらに製材時間も見込まなければならない。鉄斧の普及と大径木利用は連動するのである。

このような用材経済を考慮して、縄文と弥生、というよりクリ小径木利用での村建設、スギ大径木での村建設という実態を考えてみよう。縄文時代や弥生時代の他の地域の小径木利用型での村建設、つまり地産地消型の集落建設は、前述のように個々の施設ごとに材調達を行ないうる、「個別性原理」で建設・更新が行なわれた姿を描き出すことができる。それにひきかえ、大径木利用での村建設産地変更型によって、しかも「一括原理」での建設・更新か、あるいは他の製品生産部門と連動した用材調達、がなされた地域と位置付けることが出来るのである。桜町遺跡の中期末～後期初頭の仕口材は、基本的には径40㎝以下の小径木を素材とし、芯持ちもしくは分割の材に加工さ

れたものであった。①あばれやすいクリ材の安定化技術、②仕口加工時の木材含水率、③構築時の木材含水率、の問題からは、石器加工による木工と木造構造体の実態にせまる情報群が得られたのである。

また、クリ材の安定化のために、芯持ちの丸木のまま水漬けなどで長期間の木殺しをするとなると、その施工地の議論が必要なことが見えてくる。縄文遺跡のどこにそのような場所を求めることが出来るであろうか。桜町遺跡の今回の調査では、石剣石刀なとの水利用の必要な磨製石器製作の場としての「水枡」施設が明らかになってきたが、木材を漬け込む場所も木組みあるいは護岸によって製作されていたと考えられる。縄文時代の水利施設について、近年の議論は堅果類の処理との関連のみで「水さらし場」という呼称が与えられているが、用材経済についての知識が全く欠如した議論といわざるを得ない。桜町の護岸・水枡施設群の役割を考える時、こうした視点も必要になってきたといえるであろう。

引用文献

湖西線関係遺跡発掘調査団（1973）『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』

福井県教育委員会（1979）『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地使役の調査１—』

いわき市教育文化事業団（1988）『久世原館・番匠地遺跡の調査概要Ⅱ』

小矢部市教育委員会（2001）『桜町遺跡—北陸の縄文遺跡－』，学生社.

新潟県教育委員会（2004）『日本海自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集

久留米市教育委員会（2005）「正福寺遺跡」『発掘された日本列島2005』，文化庁.

八戸市教育委員会（2005）『是川中居遺跡４』八戸市

山田昌久（2000）「縄文建築とクリ林経済」『木造建築フォラム〈縄文時代の木造建築〉』，木造建築フォラム

山田昌久（2000）「縄文集落の居住原理と用材調達空間」『人類誌集報2000』 東京都立大学考古学報告５

山田昌久（2005）「低地遺跡に見る縄文人の技術」『水辺と森と縄文人—低地遺跡の考古学—シンポジウム』，新潟県立博物館

山田昌久（2006）「弥生時代平野スギ大径木利用構想—静岡県登呂遺跡出土材からの用材法復元」『登呂遺跡整備事業報告書総括編』，静岡市教育委員会。

なお、実験データの詳細については『人類誌集報』（1997～2007）首都大学東京（東京都立大学）考古学研究室報告２～12を参照してください。

7　桜町遺跡出土建築材の考察

宮本　長二郎（東北芸術工科大学）

1. はじめに

桜町遺跡の縄文時代後期初頭の河川堆積土層中から出土した木製品のうち、建築材または建築材である可能性のある材について、材種別に分けて考察を加える。但し、本書の分類による構造物としての建築・土木・記念物の建築以外の部材を含み、考察結果の当否は将来の新たな知見に委ねたい。

当遺跡出土建築部材は、日本建築史上最古であり、かつ種類が多く、先進文化圏である中国大陸との建築交流と、日本建築の技術的発展を窺うことのできる資料として極めて重要である。

しかし、残念乍ら部材取上げ直後の実測図は少なく、保存処理後の写真と実測図を用いているが、発掘調査開始以来の長期間に、出土部材の多くは折損・欠損・変形等により、出土時点の形状を大きく損じている部材が多い。このような建築部材の扱いは、当遺跡のみならず、過去40年余に亘る研究生活に於て、多くの遺跡で経験した事実である。大形材の多い建築材の宿命ともいえるが、幸いにも当遺跡の多くの建築部材の出土時に立合うことができ、その時の写真、略測図、調査担当者による写真、実測等の記録を活用して以下の記述を進めた。

出土木製品は出土直後の実測、写真、観察記録を残すのが原則であるが、当遺跡のみならず農工具等の木製品出土が多く、最も扱い難い広葉樹の大形建築材が実測もされずに破損、廃棄される例が、時代の差に関わらず多い。この事実は、行政発掘調査のために、出土遺物の多少に関わらず一定面積の調査を進めねばならず、また、長期間に亘る調査のために調査担当者、遺物管理作業員の入替え、および、多量の出土遺物のための収蔵場所の変更に伴なう遺物の移動による損傷等、遺物にとっての悪条件が重なり、遺物の早期記録の原則が一部の部材に止まったことは、今後の教訓とすべきであり、私自身の反省としたい。大形建築部材の記録方法として、古建築の調査法は平面・断面・架構のスケッチ図に、実測寸法を詳細に記入する方法が応急処置として参考になる。

出土建築部材のうち、針葉樹は出土材の折損は少ないが、出土量の多い広葉樹材は移動の都度、部分欠損や折損があるために、考古学上の精緻な実測に先駆けて、建築学上の実測法による略図と寸法計測があれば、建築復原には充分であり、さらに出土直後の部材の4側面の詳細な観察記録があれば申し分ない。

以上は、桜町遺跡の発掘調査当初から関わり続けた者としての反省であり、今後の教訓として生かしたい一念で記した。学術史上に画期的な成果を上げた桜町遺跡出土建築部材について、出土例の多い弥生・古墳時代の出土建築材との比較検討を考慮しつつ、番号順に部材ごとの復原考察を進め、さらに、柱・桁・梁の主要部材を、弥生時代以後の出土材との比較から、縄文時代の建築構造の可能性について考察した（なお、本稿で使用する資料番号は、報告書「木製品・繊維製品・植物編」の木製品番号と同一のものである）。

2. 各個解説

1材（図版２）

全長295.2cm、径24.6×24.0cmの円柱材。柱頭部の桁を受ける仕口を欠く以外は完存する。下端部を尖頭形とする打込式掘立柱で、柱下半部の腐蝕状況から掘立深さは90cmと推定。中央部の枘穴は成15.0cm、幅12.0cm、枘穴の上部と柱頭下部の2ヶ所には、柱心より外側に、枘穴中心線の左右に振り分けて成8cm、幅3cm、深さ7cm 程の横桟穴を設ける。

以上の形式から当材は高床建築の桁行中柱材で、床大引枘穴心までの地上高85cm、枘穴心から柱頭まで120cm、横桟穴の心々間隔は80cm、大引枘穴上部及び柱頭と横桟穴の間隔がほぼ等しく、柱頭仕口は欠込みまたは出枘が折損したものと思われる。なお、上層の壁形式は横桟の間に縦横に木舞を配って草壁とする形式に復原できる。

40材（図版２）

全長381.6cm、径16.8×16cmの芯持円材で出土材中最も長い。一端部寄りの2ヶ所に、幅12cm、深さ3cm 弱の欠込みがあり、その心々間隔は78cm。欠込仕口寄りの端部は折損する。欠込仕口の形状は弥生時代以後の桁と梁、又は梁同志を組む相欠仕口と類似することから、当材と2本の円梁を直交させたキ字状梁が想定される。欠込仕口間の中央を梁の中心として、残存端部までの長さ2.9m ×2＝5.8mが梁の全長となる。

キ字状や井桁状梁組は、北九州の弥生時代大形竪穴住居に想定される形式で、梁が細いためにその交点に、キ字状梁は2本、井桁状梁は4本の支柱を梁の交点に立てて梁を受ける形式であり、縄文時代の日本海沿岸地方において、円形平面の中・大形竪穴住居に発生した梁組形式であることを同材は示している。

29材（図版２）

上端部は未発掘区にかかり、鋼矢板で切断、下端部は折損する。全長340cm、径45.0×25.0cmの半円材であるが、平旦面は割れ膚でもと円柱である。中央の角穴は成20cm、幅17cm、角穴から下半部は芯腐れにより表面の厚さ4～6cmのみ残存する。この角穴から下半部の空洞化は1材と共通し、高床建築として生きている期間中に発生したようである。下端部は掘立柱の根腐れに依る折損状況を示し、角穴は高床の大引を受ける枘穴とすれば、枘穴から下の残存長さ195.0cmは床高を示す。

上端部の凸起付き弧状繰形と、その下方の角穴との間にほぼ等間隔に一辺約6.5cmの浅い方孔が、三ヶ所にあり、円柱側面を全周していたとすれば、四面中央とその間に各1個の合計8個配置する連珠文様形式に復原できる。

弧状繰込を中心にして上部にも連珠飾りを下部と対称位置に設け、角穴上端を折返して柱頭とすれば、枘穴から柱頭まで170cmとなる。

なお、上端部から下端にかけての中央割れ目は検出時には無く、取上げ後の欠損である。

30 材（図版３）

全長271.8cm、径15×12cmの芯持円材。一端部は半円欠込仕口の中央で折損、他端部は腐蝕による欠損状況を示すが、半円欠込仕口で折損ののち腐蝕した可能性がある。欠込仕口の中央に凸起を部分的に残す状況は、渡腮仕口であった可能性を示す。

両端部が同形の仕口であったとすれば、桁材として、残存長さがほぼ桁行柱間を示す。桁材であるとすれば垂木を縄で結ぶ形式であり、その縄の圧痕が腐蝕折損端から53cm、欠込仕口端部から55cmの位置に認められ、両圧痕間164cmを3等分すると54.67cm、すなわち、両端部を柱心として柱間を5等分する位置に垂木を配ったと考えられ、中央2本の垂木位置にも僅かに圧痕が認められる。

桁材裏面の中央部には桁中軸線の片側に寄せて11.0×3.0cmの平枘穴があり、両端部にも同形の同一軸線上に平枘穴の半分が残るはずで、平枘穴底部らしい痕跡が認められる。

31 材（図版３）

全長341.4cm、径28.5×12.3cmの半円柱材。上端部の中央に幅7.5cm、縦42cmの欠損あり。下端部は折損。上端から128.0cm下方の方形穴は成16cm、幅13cmの大引枘穴である。枘穴の上方と柱頭の下方に桟穴痕跡を残し、桟穴心々間隔は65cm、柱頭と桟穴心、枘穴と桟穴芯々間はともに30cm、桟穴の成は8.0cm、幅は欠失して不明、深さは上方6cm、下方8cmである。桟穴は右方にのみ残存し、左方にはないことから、当材は隅柱であったことを示す。

なお、現状は右側桟穴に対応する左側の表面は欠失して、桟穴の有無を実証できないが、出土時に確認ずみである。また、枘穴上部の穴と下端寄りの穴は出土後の欠損で、上端部の欠込部分も検出時の幅4～6cmの割目状が拡大し、弥生時代の輪薙込仕口状になっているが、当初の柱頭仕口は明らかでない。

下端部の60～70cmは、腐蝕による膚荒れを掘立部の状況を示すものとすれば、枘穴心までの地上高は1.4m 程に想定できる。

35 材（図版３）

全長300cm、幅37.2cm、厚19.2cmの半円材。43材と同形式で、両端部は欠込仕口部で欠損し、一端部にその仕口痕跡を残すのみであるが、仕口間隔も43材と同寸と認定できる。

36 材（図版３）

全長197.4cm、径26.1×11.6cmの板目板材。一方の側面中央と両端部に心々86cmの等間隔に長方形の枘穴を設ける。枘穴は径14～15×5cm、深さ8cm 程である。但し、中央と一端は同軸線上にあるが、他端の枘穴は幅の半分程が残り、端部を切断する。

年輪から判断して、2個の枘穴は半円柱の片側面に設け、他端の仕口は出土時には他の枘穴と同成で、幅は半分程が残り、円柱の中軸線上の穴が半裁された状況であったが、現状は材端部側の枘穴側面が、材の取り上げ後に折損欠失している。

したがって、当材は円柱を転用する際に断面を半分割して厚板に整形して水場に用いたものとすれば、下端部の中軸枘穴は梁行方向の床大引、他の2つの枘穴は外寄りに設けた高床上層部の妻壁間渡用の大入包込枘穴であるとすれば、桁行間渡穴は欠失した半円材に設けたものと考えられる。

42材（図版３）

全長220cm、径33×16cmの半円柱完形材である。下端部約70cm全面に腐蝕痕が認められ、下端から60～75cmの特に腐蝕が大きい部分が掘立柱の地表面に当る。したがって、地上高は150cmとなり、その中央と上下の3ヶ所に貫穴を設ける。貫穴は半円柱の平滑面に平行に穿つために半円側面側は細いブリッジ状となる。貫穴の心々間隔は56.5cm、成14cm、幅6cm、平坦面と貫穴間の厚さ4cmである。

179材（図版４）

42材と同形式の貫穴付き半円柱の断片。　全長123.6cm、径37.4×13.4（推定18.0cm）cm、両端折損して貫穴2ヶ所が残存するが、ブリッジ部分が欠損する。貫穴心々間隔57.0cm、貫穴成17.0cm、同幅は不明であるが、間隔・成ともに42材と類似する寸法であることから、当材も上端の貫穴と下端の掘立て部が欠失した同形材と想定される。

但し、42材と異なる点は当材の方が径が太いことと、半円側面の貫穴間に弧状繰込みを設ける点である。弧状繰込みによる材の強度不足を補うために、42材よりも径を太くしたものであろう。

178材（図版４）

全長109.5cm、径28.8×7.8cm、半円柱クリ材。腐蝕・欠損著しく、当材単独では旧形状を推定し難いが、42材と同形材とみなせば、ブリッジ部を欠く貫穴2ヶ所と、貫穴間の弧状繰込みが辛うじて残存する状況が窺え、貫穴間隔も同じである。

43材（図版４）

全長310.2cm、幅42.0cm、厚14.4cmの半円材。両端部厚を約6cmと薄くして、一端部の平坦面には幅12cm、深さ2cmの欠込みがあり、他端部はこの欠込仕口部分で切断または折損したものとすれば、仕口心々間隔は約300cmとなる。

この欠込は当材を板材として使用した可能性を示し、建築部材としては桁行2間の床板が、中央で切断、折損したもの、あるいは仕口部のみの欠損とすれば、桁行1間の高床材、または祭壇等の天板などの用途が考えられる。

桁行柱間3mは高床建築としては大形であり、出土柱材29がこの半円断面の床板材に対応するものと思われるが、半円面を上面とすることから、実用的な建物でないことを示している。

45材（図版４）

全長132.3cm、幅14.7cm、厚7.2cmの半割円柱。柱頭の出枘は半円側面に沿って2.0～2.5cm幅の切

込みを入れて径9cm 程の多角形断面の出枘を造出しているが、折損して高さは0～2.5cmのみ残存する。下端部は大引枘穴部で折損したものとすれば、当材は高床建物の上層柱となる。また、折損部のやや先細りの腐食状況を掘立柱の地表面直下を示すものとすれば、平屋建物の側柱となる。

出枘の径が柱径の細さに較べて太いことと柱頭部の20度余の傾斜角度を円材として保っていたとすれば、当材は出枘を下端にして土台上円孔に約65度の傾斜角で立つ二股状の架構材である可能性も考えられるが、他の出土柱材と比較して径は1・31材よりやや細く、床上高がやや高い高床円柱材で、欠失半円部に桟穴が存在した可能性がある。

47 材（図版４）

全長228.0cm、径18.4×8.2cmの半円材。2次転用時に円材を半割して、一端を篦状に削り、他端は折損。折損端部から80cmの欠損部には検出時に目途穴が残存していたが、取上げの際に壊れて復元不能となる。この目途穴から篦状端部から72cmの位置には幅10cm 程の浅い欠込みと、両端部を旧目途穴位置での切断とすれば、位置関係がほぼ3等分する約75cm 等間隔位置にあり、垂木配置に関わる痕跡を示すものと思われる。

なお、桁材として半円断面の例は弥生時代以後にはなく、金沢市中屋サワ遺跡出土材（縄文晩期）に目途穴位置で半分割して杭に転用した円桁の例がある。

49 材（図版４）

全長134.0cm、幅27.2cm、厚6.4cmの板材。両端折損、角穴径27.0×14.0cm、角穴に接して中央に幅16.0cm、深さ3.0cmの欠込があり、同じ深さの欠込が約58cmの内法間隔で折損端部に認められる。背面は割れ面を示し、2分割とすれば復原厚は約13cmの五平材となり、角穴径とほぼ等しい。

五平材に角穴を穿つ建築部材は、弥生時代以後には台輪材や桁・梁材としての出土例があり、角穴には相欠仕口を伴う形式が多い。それに対して、当材の角穴は相欠仕口を伴なわず、五平材とほぼ同径であり、心々75cm 間隔に並ぶ欠込仕口と合わせて、建築以外の構造物である可能性もあるが、あえて当材を台輪材とみなして考察を進めると、角穴は五平造出柱に落し込むための穴、隣接する欠込みは根太受けで、根太上板敷きとする形式が考えられる。

五平柱の径が太いために桁行台輪を用いない造出柱形式で、弥生時代以後の造出柱はこの形式が発展した可能性がある。

50 材（図版４）

全長93.6cm、断面13.8×4.6cmの板目板材である。板の短辺の一側面全体にU 字溝を引通し、他側面はU 字溝と相対する円形凸面を示し、当初断面は15.0×6.5cmであった。

現状は写真と断面図からも明らかなように表面の剥離面が多く認められるが、出土時の断面は左右対称形であり、出土以後、保存処理までの期間における剥離と反りによる変形が顕著である。

出土時点から当材は2材に折れていたため、一方の材の凸側面を他方のU 字溝側面に重ね合わせると

合致することから、樋部倉矧仕口の古式を示す壁板材とみなした。現状のU字溝の形状は、クリ材の放射状組織と年輪に沿う剥離によるV字状断面を示す個所が部分的にあり、またU字溝の上面は乾燥等によってV字状に開くなど、出土時点と異なる形状は、出土後の長年月に亘る期間と保存処理時の変形とみなさざるを得ず、以上の相異点は出土直後の写真と比較すれば明らかである。

なお、弥生・古墳時代に数点の樋部倉矧板材が出土（注1）しているが、凹凸部は円弧形から鎬形への変化過程を示し、縄文時代の流れを汲むものといえる。

56・57材（図版4）

56・57材の出土状況は旧河川の河底に流失した状況で、両材は10～15cm間隔に並行し、両材の上部に薄板材が密着して、正方形断面の組合せ木樋であったが、河底部の材は無く、残存する2材の上面に密着する薄板材は取上げ不可能な状態であり、河床に接した板材は欠失している。

木樋の全長は246.0cm、板厚5.0cmで、一端は2材ともL字状に造り出して木樋先端を塞ぐとともに2材のL状造出しの間隔7.5cmを明けて樋の開口部とする。L状造出しをもつ2枚の側板を挟む形の2枚の蓋板のうち、残存していた1枚の下方3分の1は腐蝕欠失していたが、L状頭部や板側面との接合は丁寧で、側板厚の内側半分を欠込んで蓋板を嵌め込む形式である。側板頭部の蓋板受けは直角の欠込みではなく、斜めに欠込んで蓋板木口部分を受けている。この欠込みは両側板とも頭部付近にのみ残り、他の部分は外側の突起部が欠失して、蓋板残存部分の板当り面に朱色が認められる。

この蓋板受けの部分に残る朱色は、木樋を朱色に塗っていたことを示し、頭部の贅沢な木取りと開口部の特異な形式とともに、当材が祭祀に関わる木樋であることを示している。

41材（図版5）

全長241.0cm、径10.8×9.5cmの叉柱完形材。柱頭部の叉木は、弥生時代以後の竪穴住居の主柱や平屋建物の側柱に採用された形式であり、出土例も多い。当材の下端切断部は当初を示し、掘立柱としての根腐れが認められないことから、柱材としての使用期間は短かかったのであろう。

掘立柱の地中部分は木材腐朽菌による劣化以外は地上部よりも劣化が少ないのが一般的であり、当材でも下端部60cm程は劣化が認められず、上方程劣化が進んでいる状況からみて、掘立深さ60cmとみなすと、地上柱高181cmとなる。この高さは竪穴住居の主柱としては小形であるが、掘立柱建物の側柱としては妥当な高さであろう。

46材（図版5）

全長125.0cm、頭部径23.5×12.0cm、下部80cmの径19.0×7.0cmの半円叉柱材。頭部の叉木を含む約45cmは白太を残して、下方は白太を削り取ったものと思われる。下端の折損部を掘立柱の根腐部とすれば、当材は柱頭叉木で大引丸太を受ける基台式高床建築で、基台上に丸太校倉造とする形式や、一廻り規模の小さい土台建築を組む形式が想定される。

丸太校木は青森県三内丸山遺跡に出土例（縄文時代中期末）がある（未報告）。また、112材は土台

として利用可能な材であり、46材を112材の円孔と組合せて基台式高床に復元することも可能であろう。

なお、下端部から30cmと58cmの位置の半割側面端部の窪みは、円材を分割する際の楔痕跡であろうか。

110材（図版５）

全長379.8cm、断面38.0×15.0cmの半円材で、端部や側面に欠損部分はあるが、完形材と認められる。上端部の複雑な形状は掘立柱の根腐れによる折損の可能性もあるが、半割面と平行する深さ15cm、幅4cmの欠込みを加工に依るものとすれば、柱材の可能性がある。

但し、柱材であるとしても中間に仕口痕跡がなく、平屋建物としては、高過ぎることから、遺構として検出されている円形平面に半円柱を配置する祭場結界柱、または方形平面配置の場合は群馬県矢瀬遺跡（縄文時代後～晩期）に例があり、柱頭仕口の形式からは後者の可能性が高い。

なお、半円柱頭に十字輪薙込仕口をもつ例が滋賀県宮前遺跡出土W11材（弥生中期）にあり（注2）、縦平梁を下木、縦平桁を上木に組合せる形式である。110材は縦平桁が縄文時代まで遡る可能性を示す資料でもあり、単なる腐蝕痕とすれば29材に対応する床板材の可能性もある。

112材（図版５）

全長305.0cm、径31.0×9.5cmの半円材。一端折損、平坦面は割れ膚を示してもと円材である。残存端部から120cm余の位置と折損端部に円孔（径15.0cm）があり、その心々間隔は173.0cmである。但し、円孔は出土時に正円形、折損端部は半円部を残し、現状は取上げ後の部分欠損により多少変形している。

当材を円桁とすれば円孔は柱頭枘穴となる。枘径15cmは29材の柱径45cmには妥当な太さであるが、桁径の半分の枘穴径は構造的に不適当である。但し、円孔間隔は柱間寸法として妥当で、当材を土居桁として、柱下端の円枘を受けた可能性はあり、叉柱46材に対応する基台式高床建築が想定される。

113材（図版５）

当材は網代状薄板材や縦桟材とともに組合う間柱材として出土した半円材である。全長309.0cm、径16.0×4.5cm。材の形状は下半部を細く楕円断面として下端部をグリップ状に造り出し、上端部が薄くなる形状は櫂に類似する。断面寸法からみて半円材を2分割に板取りして櫂状に造り、さらに間柱に転用した可能性もある。

上半部中央にある貫穴状仕口は、出土時に貫穴を見落して渡腮仕口と誤認したものである。半円材に貫穴をもつ形式は42材と同じであることから、転用前の当初形式は半円柱で、下半部の細い部分は掘立時の根腐れを整形した名残り、上端部の手斧痕は貫穴部を削り落した痕跡と考えられる。

貫穴の形状は成11.0cm、巾1.6cmで、この穴の上半部6.5×0.8cmのみ貫通する修復状況は、出土直後の部分写真とは異なる。写真ではブリッジ部側面の穴幅が大きく、両側の穴の隔壁の一部が後の腐蝕で貫通したもので、貫穴とするには幅が狭過ぎ、修復後の形状を含めて建築材としての用途は考えられず、1･31材と同様の桟穴が腐蝕の進行により桟穴が拡がり、桟穴間の隔壁の一部が薄く開いた状況を示す。

また、上端部の篦上はつり部を桟穴部とみなせば、桟穴間隔約80cmは31柱材と同じである。

但し、1・31材と異なる点は、桟穴と直交して設ける大引枘穴が無いことであり、大引枘式高床建築にはならないが、高床建築の床支持方法としては最も単純な際束（添束）式高床とすれば問題はないが、残念乍ら際束式は大引を支持する束を親柱に添えて掘立てる形式であるために、柱に痕跡が残らず、平面的にも確認例が極めて少ないが、際束根を残す例が弥生時代に2例あり（注3）、その形式は縄文時代に発生していた可能性はある。

164材（図版５）

全長92.5cm、断面25.0×5.0cmの板目板材。一端部に約37度の勾配をもつ傾斜切断面を建築材として解釈すれば、切妻屋根の切妻部板壁材とも考えられるが、次に記す繰込み側面を当初痕跡とすると2次切断面を示す。

板材両側面の短辺側には、傾斜端部と反対側の端部から約20cmを残して2cm程の繰込を入れて板幅を狭くしている。このような繰込凹面は、弥生時代の出土建築部材では出入口の蹴込板にみられる形式であるが（注4）、当遺跡出土の柵柱やY字材、大形柱材側面に繰込みを設ける例が多く、本例も板材としての転用前の円材のときのもの、或いは当初から板材として利用したものと考えられるが、当初材の性格は分からない。

193材（図版５）

全長75.6cm、幅21.6cm、厚さは中央部を4cmとして、両端に向い薄くなる太鼓板で、端部厚1.5cmである。長辺側面のうち欠損部の大きい一辺は半裁された可能性がある。

弥生時代後期の出土例として、福岡市雀居遺跡出土の机天板材は4辺を薄くして枠板溝に嵌込む。現存例としては大仏様仏堂の板扉に太鼓板を用いる例がある。縄文時代の出土木製品に板溝をもつ柱材や枠板材の出土例はないが、机等の家具、建具材に使用された板材と、横板壁である可能性を指摘しておく。

3. 高床建築構造（図版１、表１）

柱材として確実な出土材は1・29・31・36・41・46材の6例のほかに、検出されたが取上げ不可能のため、遺構平面図に記録が残るA材を含めて7例ある。

A材は全長340cm、径30cmの円柱で中央部の枘穴は成15cm、幅12cm、桟穴は柱頭部と枘穴上部の2ヶ所に左右の桟穴が腐蝕拡大して連なる状態で、桟穴心々間隔は95cmである。

7本の柱材は41材を除いていずれも高床建築材であり、大引貫枘式（1・29・31・A）、大入包込枘式（36）、基台式（41）の3種類の高床建築の存在が明らかになった。但し、36・46材の2例は高床でない可能性も否定できず、高床建築材とした場合の構造形式を想定した。

大引貫枘式は桜町遺跡における高床建築の主流形式であり、その建築上の特徴について、弥生時代の類例との比較から明らかにする。

大引貫枘式と大引貫式はともに、柱に角穴を穿って、これに大引材両端を挿入して根太・床材を支持す

る形式である。大引貫枘式は大引本体を丸太材として、その両端に角枘を造出して、角枘を柱に貫通させる形式で、大引貫式は縦長の長方形断面の大引を柱に貫通す形式である。なお、包込枘式は枘穴が貫通しない形式で壁の間渡しを受ける。

以上の大引材の形式差により、柱に穿つ枘穴の成と幅の比がどのように変化しているかを表1に示した(注5)。

桜町遺跡出土柱材4例の枘穴成に対する幅の割合は80～85%である。これに対して原の辻遺跡出土大引材2例のうち、弥生中期の大引材は61.5%、同後期47.2%を示し、時代の下降に伴なって貫枘式の枘径は縦長になる傾向を示す。

島根県松江市上小紋遺跡出土材（弥生後期後）の貫穴比率は28.6%、同時代の岡山市津島遺跡出土柱材の貫穴比率と、同遺跡出土貫材断面は一致して29.2%を示す。

以上の出土材例に依れば、時代の下降に伴なって貫穴比率が縄文時代の80%台から、弥生時代後期後葉の30%弱まで低下する様子を示しているが、大引貫の比率については時代による変化は少なく、縄文時代に出現していたとしても貫穴比率は3割前後であったと思われる。なお、枘幅の柱径に対する比は縄文時代と弥生時代で変化なく40%前後以上、50%以下とするものと、津島遺跡の6.7%は別系統かも知れない。

表1　床大引枘穴比率

遺　跡　名	時　期	柱径	a × b 枘（穴）径	b / a × 100	b / φ × 100
桜町　1	縄文後期初頭	24.6 ㎝	15 × 12 ㎝	80.0 %	48.8 %
29		45.0	20 × 17	85.0	37.7
31		28.5	16 × 13	81.0	45.6
A		30.0	15 × 12	80.0	40.0
壱岐原の辻　5	弥生中期		13 × 8	61.5	
3-12	弥生後期		18 × 8.5	47.2	
松江市上小紋 58	弥生後期後	15.0	21 × 6	28.6	40.0
岡山市津島	弥生後期後	14 ～ 16	13.7 × 4	29.2	26.7

4. 桁材（表2）

桜町遺跡出土の桁材30・47材と金沢市中屋サワ遺跡出土桁材はいずれも円桁である。縄文時代の柱と円桁の仕口は、中屋サワは不明であるが、桜町30材と同じ包込平枘と想定される。円桁と垂木の結合は、最も径の細い桜町30材が結縄式で、他の2例は桁に目途穴を設ける。桜町47材の垂木間隔75㎝は、他の2例の50㎝余の間隔に較べて広く、材径が30材よりやや太い程度であることから、垂木1本置きに目途穴を設け、中間の垂木は目途穴を省略したものと考えられる。

弥生時代以後の円桁出土例は少なく、平桁が主流で、平桁の上端外角に目途穴を設ける例が普及して奈良・平安時代まで続く。これに対して、目途穴付き円桁の出土例は表記の2例のみで、結縄式は表記の1例以外にも柱仕口の枘穴をもつ材が数例あるが、柱頭欠込仕口や叉柱で受ける結縄式円桁は全く仕口のないことから、径15cm 以下の丸太材としての出土例も桁材の可能性を考慮する必要があり、縄文時代

についても同様である（注5）。

表２　円桁材

遺跡　材 NO.	時　期	全長	柱径	柱仕口	垂　木		梁仕口
					仕口	間隔	
桜町　30 47	縄文後期初	271.8 cm 228.0	15.0 cm 18.4	平枘	縄圧痕 目途穴	54.0 cm 75.0	渡腮か
金沢市中屋サワ	縄文晩期	172.0	30.0		目途穴	53.0	不明
松江市上小紋 66	弥生後期後	117.0	(17.0)	平枘穴	目途穴	33.0	不明
福岡市湯納　238	古墳初頭	445.9	19.0	角枘穴	(目途穴)	49.4	不明
福岡市湯納　70	古墳初頭	341.8	13.6	角枘穴	なし		なし

桜町30材には渡腮らしい円弧状欠込みと突起の一部が認められる。30材を桁として、これに組合う梁材は30材とほぼ同径の円梁で、その先端部には径の半分以下の幅の切込みを幅と同寸の深さとするのが一般的である。

但し、渡腮仕口の円桁出土例は弥生・古墳時代にはなく、奈良～平安時代に1例（浜松市梶子北遺跡）あるのみである。しかし、梁材で幅の狭い欠込渡腮仕口をもつ円梁は4遺跡（福岡県金山90-7、静岡県南谷132、池ヶ谷109-1、岡山市津島184・185）にあり、時期は弥生時代後期～古墳時代前期に集中している。但し、弥生時代以後の円梁材の出土総数25例中の4例であり、他の21例の円梁の桁仕口は幅が広く、深さの浅い欠込み部を円桁上に乗せる形式である。出土例の時期も弥生後期から古墳前期に集中して、その前後の時期の出土例が少ない傾向にある。この集中時期の建築材の傾向は、少なくとも弥生時代前～中期を受け継ぎ、古墳時代以後は古墳文化の移入に伴なう新しい建築技術―総柱型高床建築―の発生はあるが、縄文時代以来の伝統的木造建築技術の基本は継承しているとの前提に立って桁と梁の組合せ仕口の変遷を考えると、渡腮仕口は貫・枘仕口などとともに大形建築の高度な技術、欠込仕口は広く一般的に普及した技術として6900年前の中国河姆渡遺跡の時代に発生し、大型建築が発生する縄文時代前期には、その技術が日本に導入された可能性はある。

5. 貫工法

柵柱材は完形の42材と折損材の178・179材の3例である。178・179材は腐蝕が著しいが、完形の42材との相似形から同形材と判断した。3例とも半円柱で、半円断面の平坦面に並行に上下3段の貫穴をもつ。42材は貫穴間の半円側面に繰形を設けないが、他の2例には、貫穴間の半円側面に弧状繰形を施している。

柱側面に繰形を設ける例が当遺跡に多いが当材のように同一柱材に弧状繰形を設ける例と設けない例は陰と陽を表わしている可能性があり、当遺跡を含めて縄文時代後・晩期に増加する半円柱による方形・円形平面の掘立柱遺構の復原の一資料となる。

柵柱42材には上下3段の貫穴がある。柱間を貫で固める工法は、かつて禅宗建築の導入に伴なって鎌

倉時代以降に普及したとされたが、弥生・古墳時代の出土建築材には，前期の大引貫穴以外に、軸部固めの貫穴付き柱材の出土例が増えている。

三重県6大A遺跡出土角柱1108材（弥生後期～古墳中期）は一辺10.5cmの角柱に背違貫穴（10.5×2.8cm）を2段に設ける（注6）。

神戸市小路大町遺跡（6c後～7c前）出土の円柱39材には柱頭下50cmに貫穴（13.5×4cm）とその下方2ヶ所に壁小舞穴が両側面にあり、直行する一側面の柱頭下95cmには大入貫穴（13×3×5.5cm）があることから、この柱は平屋建側柱で大入貫は間仕切の存在を示している。また、40材は角柱（径7cm）で上端部は折損しているために確かではないが、中央部に小貫穴（7～8×3cm）を約1cmの間隔を置いて背違に組む形式である（注7）。

京都府長岡宮跡大蔵推定地の礎石下から検出された柱材（8c）は、平城宮の建物の移築廃材であり、足固貫と想定される十字貫穴がある（注8）。

以上の弥生時代後期以後の出土建築材には背違貫や十字貫のように十分に発達した工法が成立しており、小路大町遺跡では桜町遺跡と同様に（貫通）貫と大入貫が共存している事実は、貫使用の軸部固めの技術が縄文時代以来の伝統を引くことを物語っている。

但し、貫による軸部固め工法は縄文時代の建築に採用されていた可能性は認められるが、今後の出土例に期待し、背違貫工法については、これまでの定説より大きく遡って、遅くとも古墳時代中期には成立しており、十字貫工法については、現存する奈良・平安時代の寺院建築にはないとされた貫工法の最も進んだ技法が平城宮の宮殿・官衙建築に使用されていたことになり、背違貫工法とともに古代建築の構造技法についての従来の考えを根本的に改めなければならないといえる。

6. 結　語

はじめに記したとおり、出土木材は出土直後に詳細な観察記録、写真、実測図を作成するのが原則であるため、出土後や保存処理後に大きく変形した部位については、出土時に立合うことの出来た部材について、私自身のメモ、略測図、写真等によって復原的に記述を進めた。また、考察部分は弥生時代以後の出土建築部材や、現存建築を含めた建築工法の変遷についての、これまでの研究成果をベースにして解釈を加えた。

縄文時代の出土建築材は、その時代の長さに比して出土例が極めて少ない。しかし、桜町遺跡は多種多様な建築部材が出土している点で、弥生時代以後の各遺跡にひけを取らない。その情報量は本文に記したように、弥生～古墳時代に継承される例が多く、高床建築の柱材が多いことも弥生時代以後と共通している。

縄文時代の掘立柱遺構は方形、多角形、亀甲形平面の高床・平屋建物、柵、独立柱、2本柱などの遺構例がとくに墓域を中心して検出されることが多い。桜町遺跡出土の建築材はまさに、こうした平面遺構の復原に使われた資料であり、いわゆる梁間1間高床建築が縄文時代に成立して、弥生時代の祭殿や倉庫建築の主流として継承される点においても、縄文時代から弥生時代への建築文化の連続性を実証するものとして桜町遺跡出土建築材の価値は極めて高い。

注

（注１）島根県上小紋 56 材（弥生後期後）、三重県六大Ａ 1249・1250 材（弥生後期から古墳中期）、埼玉県諏訪木 190 材（古墳前期）

（注２）円柱頭部の十字欠込みは福岡市那珂久平 161 材（弥生後期）・高畑 509 材（弥生末期）の２例がある。

（注３）際束の柱根を残す２例は福岡県築紫野市隅・西小田遺跡（弥生中期）、福岡市雀居ＳＢ 50（弥生後期）がある。

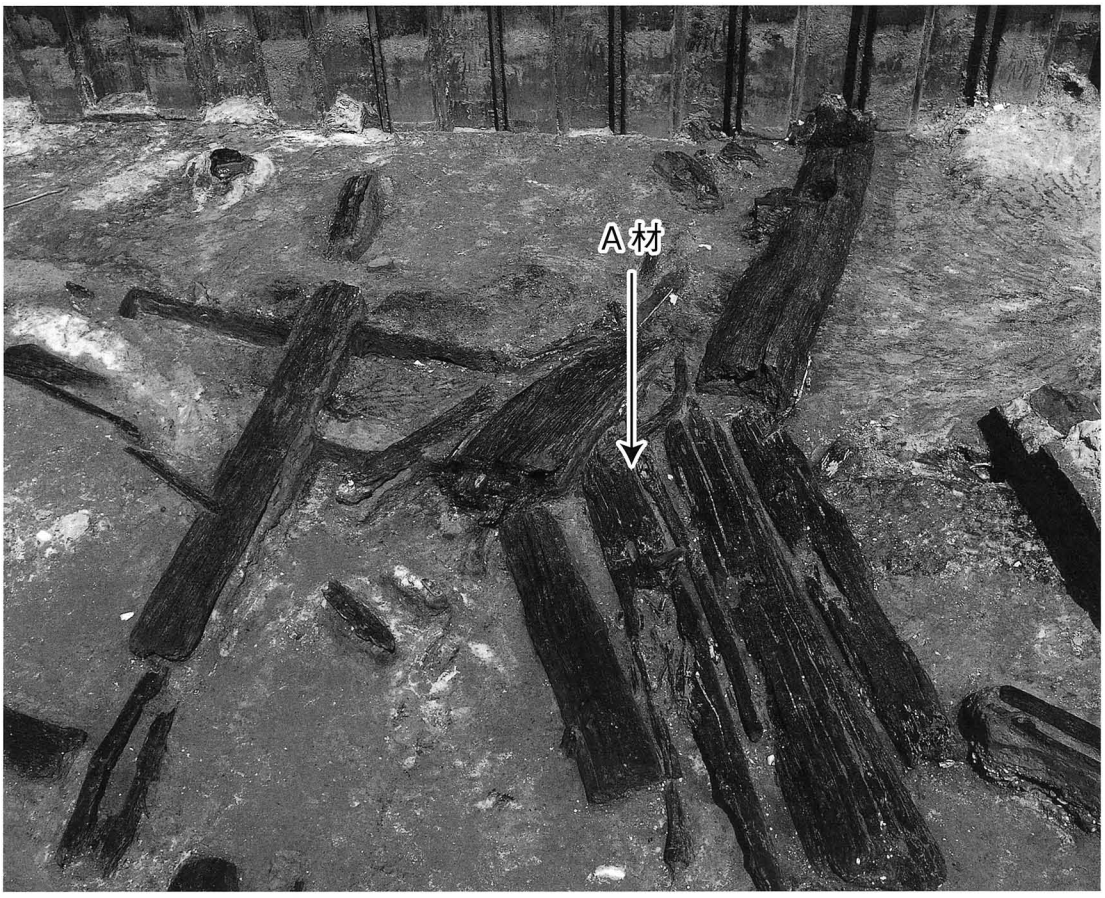
（注４）弥生・古墳時代の建築材で部材側面に繰込みを設けるのは出入口下部の小脇板間に設ける蹴込板上部にあり、岡山市津島 176 材（弥生後期後）、島根県大倉Ⅳ 192 材（古墳中～後期）の出土例がある。

（注５）表１・２の資料出典
「津島遺跡４」2003 年　岡山県教育委員会
「原の辻遺跡緊急調査報告書Ⅳ」1998 年　長崎県教育庁
「原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第３集」2002 年　長崎県教育庁
「北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」1987 年 島根県教育委員会
「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集」1977 年　福岡県教育委員会
金沢市中屋サワ遺跡出土材は金沢市埋蔵文化財センターで筆者が略実測して得た資料である。

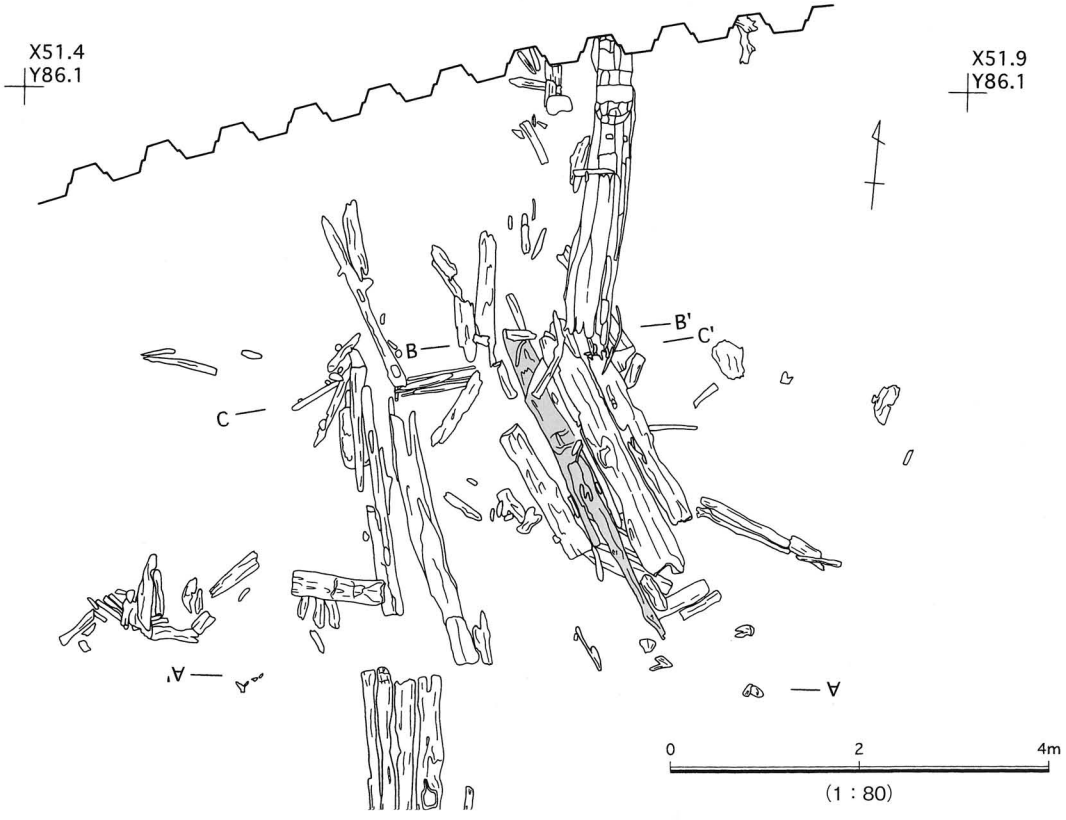
（注６）「六大Ａ遺跡発掘調査報告（木製品編）」2000 年　三重県埋蔵文化財センター

（注７）「小路大町遺跡 第４次調査発掘調査報告書」2004 年　神戸教育委員会

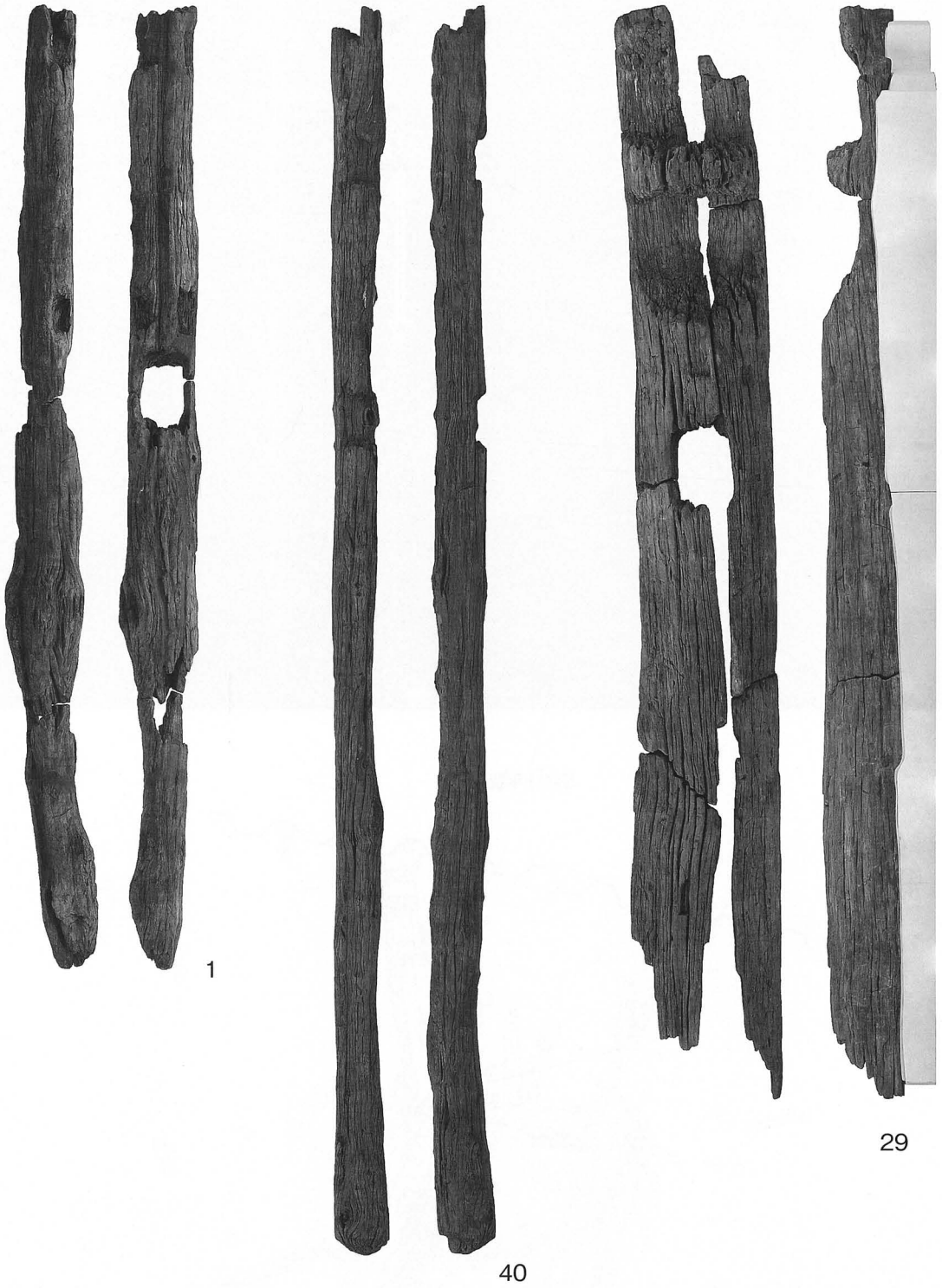
（注８）「長岡宮跡第 231 次発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第 32 集』1991 年　㈶向日市埋蔵文化財センター



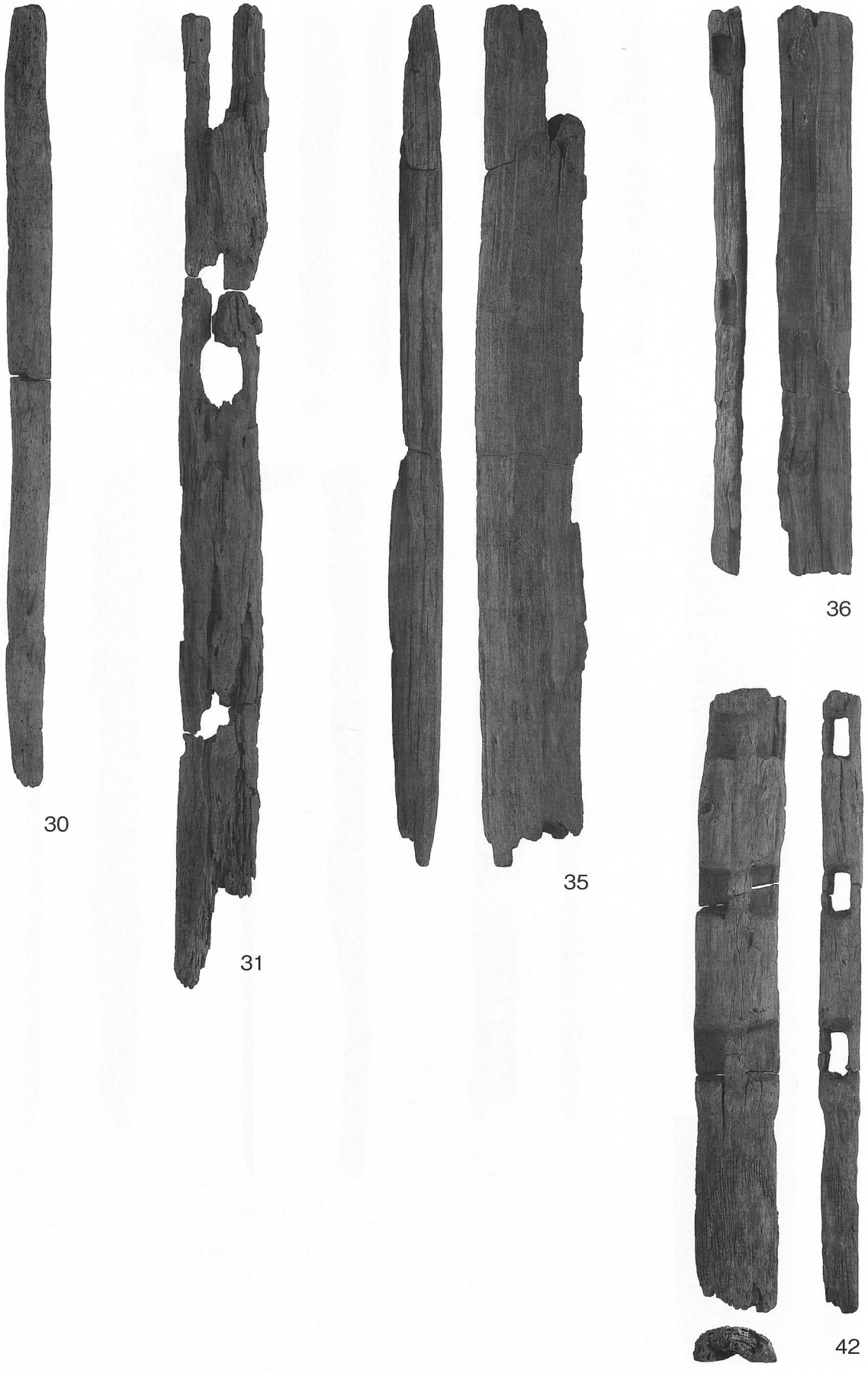
SX01平面図



図版1　A材

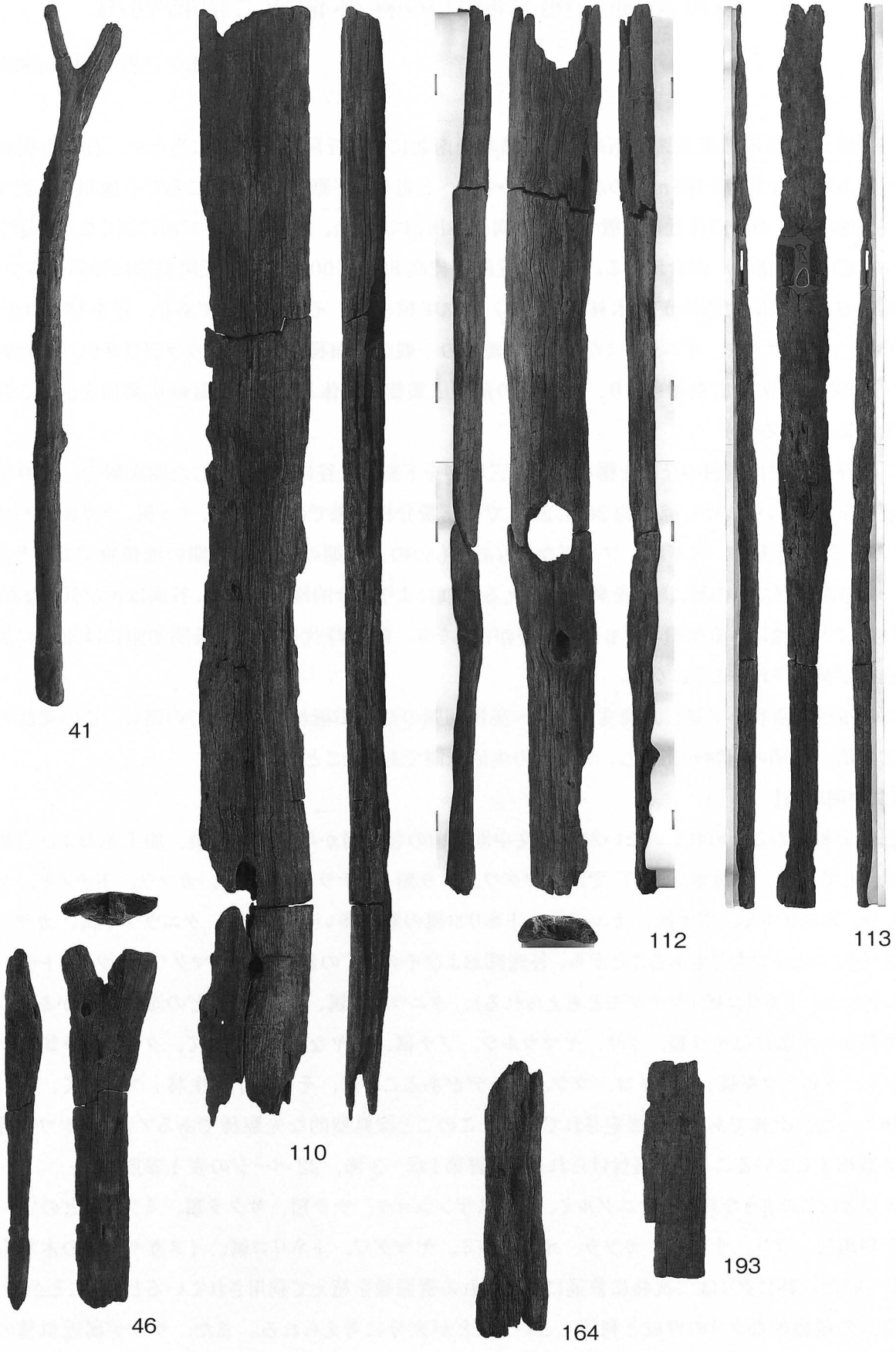


図版２　１材、40材、29材



図版３　30材、31材、35材、36材、42材

図版４　178材、179材、43材、45材、47材、49材、50材、56材、57材



図版５　41材、46材、110材、112材、113材、164材、193材

8　桜町遺跡の縄文時代の森林植生と植物利用

鈴木　三男（東北大学植物園）

富山県小矢部市桜町遺跡は石川・富山県境を南北に走る丘陵地の東縁に当たり、石動市街地の北西にある城山（標高 186m）の北麓に西から東へと走り、平野部に出たところで子撫川に合流する小谷（西の谷）の出口付近に位置する。標高は谷出口で 28m、幅約 100m で西に高くなり、途中で南から北の谷（南谷）が合流する。周囲の丘陵は標高 80 ～ 100m ほどで丘陵斜面は傾斜がきつい。谷周辺の丘陵地は大部分が雑木林（二次林）とスギ植林地、それに竹藪であり、雑木林はコナラ、ミズキ、クリ、ケヤキ、オニグルミなど、この地方の一般的な樹種からなり、ウラジロガシ、ヒサカキ、シロダモなどの常緑広葉樹もあり、暖温帯の落葉広葉樹を主体とし、一部常緑広葉樹を混じる森林植生となっている。

この谷の基盤は周囲の丘陵を構成する第三紀層を下刻した谷に厚く堆積した湖成層で、その年代測定はなされていないが、標高約 26m、25m での花粉分析結果ではトウヒ属、モミ属、ツガ属、マツ属、カバノキ属が優先し、スギ属、ブナ属などもあるものの、氷期の寒冷な時期の堆積物であると言える。この湖成層はその後、流路を頻繁に変える流れにより部分的浸食を受け、谷底は再び低くなるが、その後は土石流による埋積なども進んで谷が浅くなり、縄文時代中期末～後期初頭には流路に沿った遺構が構築されることになる。

この湖沼堆積物を下刻し、縄文中期末～後期初頭の遺構が構築されるまでの間も、この遺跡では縄文早期、前期の遺物が出土し、人びとの生活空間であったことが分かる。

【縄文中期以前】

花粉分析はおこなわれていないが、縄文中期以前の包含層からは、種子類、加工木および自然木が出土している。自然木（表 2）ではヤマグワ、ナラ類（コナラ節）、クリ、カツラ、トチノキ、ヤマウルシ、オニグルミ、ブナ属、カエデ属、トネリコ属の順で多い。その他、タニウツギ属、カヤ、ヤブツバキ、ニワトコなどもあることから、谷底部およびその直ぐの斜面にはヤマグワ、カツラ、トチノキ、オニグルミ、トネリコ属（ヤチダモと考えられる）、タニウツギ属、ニワトコなどの湿性の林があり、斜面中部から上部にはナラ類、クリ、ヤマウルシ、ブナ属、カヤなどが、そして、クリ、ナラ類、ヤマウルシ、タニウツギ属、ニワトコ、フジ、ヌルデがあることは、それが「原生林」ではなく、人の手が加わった二次林であったと推定されている。このことは典型的な先駆種であるアカメガシワの種子が多数出土していることでも裏付けられる（本書第Ⅰ章－ 3 節、22 ページの表 1 参照）。

人びとはこのような林からオニグルミ、カラスザンショウ、ナラ類、サクラ類、ミズキなどの実、種子を利用し、クリ、ナラ類、カツラ、オニグルミ、ヤマグワ、トネリコ属、イヌガヤなどの木材も利用していた。特にクリは二次林に普通に期待される資源量を超えて利用されていると言うことができ、縄文人の積極的なクリの育成と利用、ということが充分に考えられる。また、ササゲ属近似種の出土は栽培豆の導入、栽培を示していると考えられる。

【縄文時代中期～後期初頭】

桜町遺跡が最も栄えた時期であり、人びとによる広範な自然への介入が考えられる。この遺跡での花粉分析は、ある堆積物が良好な地点で下位から順に上位に向かって連続して試料を採取し、時間経過に伴う植生等の変遷を追う、というやり方はなされていなくて、遺物包含層があるとその部分のサンプルを分析する、という手法のみがなされているため、時期毎の植生の復元と言うよりはその地点での植生復元に留まる。その結果は報告書「縄文遺構編Ⅰ」（小矢部市教委 2004）55 ページの表 5 および 56 ページの図 3 に示されているが、ここでは、それら花粉分析がなされたサンプルのうち、試料に汚染の可能性が強く考えられる 2 サンプルを除いた 8 サンプルの結果を簡略にまとめて表 1 とした。

縄文中期～後期初頭の花粉分析結果は、表 1 に示されているように、縄文中期の堆積物から、31,38 の 2 サンプル、縄文中期末から後期初頭にかけての堆積物から 15,28,51 の 3 サンプルがある。これらを概観すると、クリが 40％程度を占め、それ以外ではトチノキが非常に多く、次いでマツ属、ハンノキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属（ナラ・クヌギ類）が目立つ。

この時期の自然木（表 2）でもクリが 4 割近くあり、トチノキ、カツラ、ヤマグワ、ニワトコ、ナラ類、カエデ属などで、量比や検出された樹種に多少のちがいはあるものの、この時期の森林植生は、クリへの集中度が著しく増している点を除いては、上述の縄文中期以前の様相と基本的には変わらない。緩い流れにある水場遺構の堆積物はその流域にある種実類のいわば貯金箱のようなもので、これを調べることは植生復元に大きな力を発揮する。当遺跡では SX-11,12,13（2）、19 などの水場遺構からかなりの量の種実類が出土しており（本書第Ⅰ章－ 3 節、27 ページの表 6 － 2 参照）、縄文人により利用可であっても利用されていないもの及び利用されないと考えられるもの（同表 4 の「その他」）にはオニグルミ、トチノキ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ミズキ、クマノミズキ、ヤマブドウ、カナムグラ、ミツバウツギなどの他、カヤ、イヌガヤ、コナラ、ナラガシワ、ブナ、ハクウンボク、ホオノキなど 39 種類にもおよび、実に多彩な種が見つかっており、当時の森林が多様性に富んでいたことがわかる。

このような森から人びとは、木材としてクリを非常に良く用いていたことが明らかとなり、まさに「縄文のクリ文化」といえる。クリ材は建築材、施設材、器具材とあらゆるところに利用され、また、燃料材としての利用も多い（本書第Ⅰ章－ 4 節、64 ページの表 3 参照）。クリ材は特に水湿に強いことから水場遺構などにうってつけだったのだろう。縄文人はその他、スギ、オニグルミ、イヌガヤ、ナラ類、トチノキ、カツラなどを様々な用途に用い、特に石斧柄（および石斧押さえ具）にはヤブツバキ、ナラ類、クマノミズキ類を、刳物にはケヤキ、トチノキを、堀棒にはムラサキシキブ（属）、飾り弓にはニシキギ属（マユミ?）、曲げ棒・弓状素材にはイヌガヤを、と言う具合に特別な用途にはその材質を吟味して特に樹木種を決めて利用していることが明白となった（本書第Ⅰ章－ 4 節、65 ページの表 4 参照）。表 4 はこの時期の繊維製品の素材をまとめた表である。サルナシあるいはマタタビとも考えられるマタタビ属の蔓を、そのまま、あるいは太いものを裂いて利用しているものが一番多く、その他、様々な樹木が使われている。これらに比して竹笹類の利用が意外と少ないのが目を引く。また、縁部の巻き材には樹皮が使われているが残念ながらその樹種の同定は出来ていないので、今後の研

究課題といえる。一方、縄の素材の同定結果も掲載されているが、それにはシダ植物の茎あるいは葉柄であることが記載されており、今後、種類の特定が出来ることが望まれる。

これら木材利用とともに、食料等への種実の利用も積極的に図られている。表3は縄文時代中期及び中期末～後期初頭の包含層、土壙、貯蔵穴、水場遺構などから産出した種実化石の種類を量の多寡にかかわらず種類のみをまとめたものである。ここには利用痕のあったものが15種類、利用痕はないが利用可能と考えられているものが22種類、その他（利用可能とは考えられていないもの）が9種類ある。利用痕があったものの中心はクリ、オニグルミ、トチノキ、コナラ（及びコナラ属）などで主食を構成している。またササゲ及びその近似種の存在は栽培がおこなわれていたことを強く示唆する。一方、利用可とされたものには様々な野生植物が含まれるが、ブナのように可食であるにも関わらず、他のおおくの縄文遺跡でも利用したと言える痕跡がほとんど無いものもある。

【縄時代文後期～晩期】

この時期の花粉分析は3サンプルでなされている。それによるとクリが13.3～50.0%と大きく変動しながらも最も優先し、次いでトチノキが9.4～38.1%、マツ属が5.9～22.7%と変動しながらも多い。その他、ニレ属 - ケヤキ属、ハンノキ属、スギ属、ナラ・クヌギ類と比較的多い（表1）。この時期の自然木はほとんど出土しなかったが、加工木（表2）ではクリが出土数の半分近くを占め、枝材、半割材、ミカン割り材、板目板、木片、樹皮などであり、特に半割材は円形木柱列を構成するもので、石川県の真脇遺跡、チカモリ遺跡などとの共通性がある。その他、トチノキ、オニグルミ、スギ、ナラ類、イヌガヤなど8樹種の材が使われているが、前の時期と比べて樹種構成自身に大きな違いはない。これは花粉分析結果でも同様であり、特段の相異は見あたらない。

この時期の遺構等には貯蔵穴と判断された土壙が18基あり、内容物は10基が堅果類、2基がオニグルミ、1基がトチノキである（報告書「縄文遺構編Ⅱ」小矢部市教委2005）。これらの貯蔵穴には底板や側板、蓋があるものもあり、各種の木材と樹皮が使われていた。貯蔵穴の内容物を分析した吉川は、オニグルミは量は少なく、また割られたものも少なくないことからこれを貯蔵していたのではなく、後から廃棄あるいは混入したものと考えている。また、トチノキは入っていた実の量は少ないが完形であることからからこれの貯蔵穴であると判断している。堅果類の10基の貯蔵穴には100粒以上、数千粒に及ぶドングリが入っており、それらの樹種は、コナラ、ナラガシワ、ミズナラ、クヌギ又はアベマキのコナラ亜属の各種と、ウラジロガシ又はツクバネガシ、アラカシ、およびそれ以外の種の可能性も含んだアカガシ亜属と多様であり、しかも、コナラ亜属だけのピットもあれば、穴の中でアカガシ亜属とコナラ亜属が別れて、あるいは混じってあるピットもある。現在の分布から見るとウラジロガシ又はツクバネガシとされたものはウラジロガシである可能性が強い。また、ナラガシワは現在の北陸地方ではまれな樹木であるが桜町遺跡の谷の上流の国道脇に1本の大木がある。これが縄文時代に実を利用した木の子孫で、かつては多数あったものが今ではこれだけになってしまった、と言うことかもしれない。

このように晩期での植物利用は、クリは勿論あるもの、あく抜きが必要な多種類の堅果類とトチノキに重点があったと考えられる。これら貯蔵穴以外から産出した種実類は利用痕のあるものが11種、

利用可能な種類が9種、その他が6種ある（表4）。利用痕があるとされたものの中にはアサ、イネ、ソバなど、明らかに栽培植物であるものが含まれるが、これについてはイネ、ソバとも産出量が1点しかなく、吉川は混入の可能性が否定できないとしている（本書第Ⅰ章－3節参照）。後世の混入であるかどうかは放射性炭素による年代測定が有効かもしれない。

【桜町遺跡の縄文時代の森林植生と植物利用】

以上見てきたように桜町遺跡では縄文時代早期から人びとの活動の跡がみられ、花粉、種実、木材の化石から、遺跡周辺の丘陵斜面にはクリ、コナラ、ナラガシワなどのナラ類、ブナなどが、遺跡のある谷沿いにはカツラ、トチノキ、オニグルミ、トネリコ属、サワグルミ、モクレン属、ミズキなどの高木層からなる落葉広葉樹の林があり、それにはカヤなどの針葉樹がまれに混じり、ヤマグワ、カエデ属、アカメガシワ、カラスザンショウ、イヌエンジュ、イヌガヤ、ヤブツバキなどの中～小高木、ヤマウルシ、ニシキギ属、ニワトコ、タニウツギ属などの低木が生え、フジ、ツルアジサイ、イワガラミなどが木にからみついていた林相が推定される。これは現在の小矢部市付近に拡がる雑木林（二次林）とよく似た組成であり、縄文時代以来、同じような林が続いてきたものと考えることが出来る。そして、この林は部分的には樹木の伐採により二次林化し、カラスザンショウ、アカメガシワ、エノキ属、ナラ類、ヤマウルシなどが多めであったと思われる。クリについては縄文中期から晩期まで、花粉分析結果では常に高率で存在し、木材利用、種実利用の多さから、単に二次林で自然に増えた個体を利用したものではなく、積極的にクリが多くなる手段を講じてそれを活用したことが充分考えられる結果であった。

スギは氷河期の終わりとともに本州日本海側の多雪地に広く生育しており、福井県鳥浜貝塚遺跡の例を見るまでもなく、北陸の地でも縄文人にとって重要な木材資源であったと考えられている。本遺跡からは縄文時代中期～後期初頭の掘立柱建物の部材としての出土があり、また花粉分析結果でも数％～10％程度のレベルでコンスタントに産出が見られることから遺跡周囲での自生を考えるむきがあるかもしれない。スギ自生の可能性は考えられないことはないが、それにしては花粉の産出量は決して多いとは言えないこと、木材利用の頻度が小さい、毬果等の出土が見られなかったことは、少なくともこの遺跡のある谷の中及びその斜面には生えておらず、木材は少し離れた自生地から供給されたものであると考えるのが妥当である。

木材以外の植物利用では、食用、薬用、繊維素材等に利用可能な多様な野生植物の存在と、特に堅果、クルミ、トチの実の利用が目立つ。縄文遺跡での食料としての植物利用の一般的傾向として、縄文時代前期～後期にはクリに集中し、後期以降、特に晩期にトチノキの利用が多くなる傾向があるといえ、最近の調査結果ではトチノキの利用は中期末まで遡るようだ。東日本の縄文後期～晩期の遺跡ではトチの実を加工したり、水さらししたとおもわれる遺構、剥いた種皮が大量に堆積した「トチ塚」などが知られている。本遺跡では晩期の遺構でトチノキの実の貯蔵穴及びトチの実を伴う水場遺構が判明した。しかし、中期末～後期初頭の段階では、流路沿いにトチノキの樹根が多く見つかり、また、種子、果実も比較的多く出土して、そこにトチノキの樹林があったことが十分考えられるにもかかわらず、トチノキが積極的に利用された徴候はつかめていない（本書第Ⅰ章－3節参照）。

これは資源としてはあったものの、あく抜き技法が未だ普及していなかったため利用できなかった、あるいはクリが充分な資源量があって他のものに依存する必要がなかったのか、今後の検討課題となろう。

当遺跡から検出された栽培植物と見なしうるものにササゲ属を含むマメ科の種子、アサ、イネ、ソバがある。イネ、ソバに関しては上述のごとく後世からの混入を考えるとして、豆類、アサを栽培植物として挙げることができるが、その量はやはり少なく、これらの植物が遺跡のある谷の中で栽培されていたとは考えにくい。 そのように見てくると、この遺跡のある谷は縄文時代を通して谷底の部分が水を使った生業の場として、一部居住域として、あるいはシンボリックな祭祀の場として利用されてきたものの、周囲の斜面は二次林～自然林の状態であって、発掘された木質遺物の程度の高さ、量の大きさに比して、人為による環境の改変の程度はそれほど大きくはなかったと言うことが出来る。

表 1. 桜町遺跡の縄文時代の花粉分析結果概要

時　期	縄文中期		縄文中期末～後期初頭			縄文晩期		
樹　種	31	38	15	28	51	56	10	26
クリ属	35.8	36.3	40.2	35.9	40.9	50.0	13.3	23.1
トチノキ属	22.8	29.2	24.2	45.6	15.1	9.4	19.5	38.1
マツ属	14.6	11.3	3.1	3.3	13.2	5.9	22.7	9.9
ニレ属 - ケヤキ属	8.1	2.4	7.8	1.5	4.4	3.5	11.7	2.0
ハンノキ属	2.4	6.5	2.7	3.7	7.5	3.1	3.9	9.2
スギ属	4.1	3.6	1.2	1.5	8.2	6.3	9.4	2.7
コナラ属コナラ亜属	3.3	3.6	5.1	3.3	5.0	5.2	4.7	5.1
クルミ属	2.4	1.2	6.3		1.3	5.9	0.8	0.3
コナラ属アカガシ亜属	4.1	3.6	1.2		1.3	2.1	1.6	1.7
ブナ属		0.6	0.4	0.7	1.3	1.7	0.8	1.0
ヤナギ属		0.6	0.4	0.7		1.1	1.6	1.7
モミ属			1.2	0.4	0.6		2.3	0.7
クマシデ属ーアサダ属			1.6			0.7	2.3	
上記樹種合計	97.6	98.8	95.3	96.7	98.7	95.1	94.5	95.6
木本花粉総数	123	168	256	270	159	286	128	294

表 2. 桜町遺跡の縄文時代の木質遺物の樹種組成概要

	縄文中期以前		中期末～後期初頭		後期末～晩期
	加工木	自然木	加工木	自然木	加工木
樹　種	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
クリ	50.0	10.6	71.8	36.8	57.1
トチノキ	2.6	9.8	2.1	14.2	8.2
コナラ属コナラ節	6.4	13.6	2.2	2.9	1.5
カツラ	6.4	9.8	1.3	6.7	0.6
ヤマグワ	3.8	14.7	0.6	3.3	2.0
オニグルミ	3.8	6.0	2.4	2.1	2.0
トネリコ属	3.8	3.4	0.6	3.3	0.9
カエデ属	2.6	4.5	1.0	2.9	0.9
イヌガヤ	3.8	1.1	3.8	2.1	0.6
ヤマウルシ	2.6	6.8	0.3	1.3	
ブナ属	2.6	4.5	0.2	0.4	
スギ		0.4	2.7	1.7	0.9
ニワトコ		1.5	0.3	3.3	0.3
ヤブツバキ		1.5	1.6	0.8	
ムラサキシキブ属			1.3	0.8	1.2
上記樹種合計	88.5	88.3	92.2	82.8	76.1
試料数合計	78	265	628	239	343

* 本表は「桜町遺跡出土の縄文時代の木材の樹種とその利用」（本書第I章－４節）表１より作成

表 3. 種実データに基づく桜町遺跡の縄文時代の植物利用

種類	利用痕	利用可	その他	種類	利用痕	利用可	その他
縄文中期～後期初頭							
オニグルミ	○			コハクウンボク		○	
カラスザンショウ	○			サクラ属サクラ節		○	
クマノミズキ	○			ナラガシワ		○	
コナラ	○			ニワトコ		○	
サンショウ	○			ハウチワカエデ近似種		○	
トチノキ	○			ヒメコウゾ		○	
ハクウンボク	○			ブドウ属		○	
ミズキ	○			ブナ		○	
ムクロジ	○			ホオノキ		○	
ヤブツバキ	○			ミツデカエデ		○	
ヤマブドウ	○			ムクノキ		○	
コナラ属	○			ヤマグワ		○	
クリ	○			ヤマボウシ		○	
ササゲ属	○			ヤブデマリ		○	
ササゲ属近似種	○			アカメガシワ			○
フジ属		○		カナムグラ			○
アカガシ亜属		○		ミツバウツギ			○
アサダ		○		ウリノキ			○
イヌガヤ		○		クサギ			○
イヌコウジュ属		○		コブシ			○
カヤ		○		ツリフネソウ			○
キカラスウリ		○		トウバナ属			○
キハダ		○		ノブドウ			○
縄文中期～後期初頭　全 46 種				合計種類数	15	22	9
縄文後期～晩期							
ミズキ	○			サンショウ		○	
アサ	○			タラノキ		○	
イネ	○			ナラガシワ		○	
オニグルミ	○			ニワトコ		○	
クリ	○			ハクウンボク		○	
コナラ属	○			ムクロジ		○	
サワグルミ	○			ヤマブドウ		○	
ソバ	○			アカメガシワ			○
トチノキ	○			イヌシデ			○
マメ科	○			エゴノキ			○
ムクノキ	○			カナムグラ			○
クマノミズキ		○		ガンピ属			○
サクラ属サクラ節		○		ミツバウツギ			○
縄文後期～晩期　全 26 種類				合計種類数	11	9	6

* 本表は吉川報告（本書第I章－3節）の表2～7より作成

表 4.　桜町遺跡出土編物の素材

樹　種	本体 編み材	縁部 巻き材	縁部 芯材	合計
カヤ	2			2
ヒノキ科	8		1	9
マツ属複維管束亜属	2	3		5
コナラ属コナラ節	7		4	11
ニレ属	2	1	1	4
マタタビ属	23	1		24
カエデ属	2		2	4
ムクロジ	1			1
ケンポナシ属	1			1
トネリコ属			2	2
広葉樹	2		2	4
樹皮	1	12		13
竹笹類	5		1	6
総計	56	17	13	86

* 本表は「桜町遺跡出土編物および縄の素材」（本書第I章－5節）表1の転載である。

第Ⅲ章　総　括

1　発掘調査結果のまとめ

大野　淳也（小矢部市教育委員会）

1．遺跡の概要

縄文時代を中心とする区域である舟岡地区は、遺跡の西端部、東に向けて開口する開析谷の中に位置し、標高は30～50mを測る。この地区で実施した調査は1983（昭和58）年の用水管埋設工事に伴う小規模な本調査が最初であるが、その後は国道８号バイパスの建設に先立つ試掘および本調査を1986（昭和61）年から2003（平成15）年までの間実施し、途中に５年間の中断期間を挟みながらの13年間で延べ約22,500㎡を発掘調査した。その結果、縄文早期～晩期の遺物、中期末～後期初頭（約4,000年前）の遺構群、後期末～晩期（約3,000年前）の遺構群等を確認した。

2．縄文時代中期末～後期初頭の概要

（1）遺構について

谷の東側出口付近の低地に流れていた川跡部分を中心に、トチ・クリ・クルミなどの堅果類の灰汁抜きや虫殺しの処理に関するとみられる溜桝状の水さらし場遺構３基、水辺の作業足場とみられる木組み２ヶ所、木器の加工や貯木の跡とみられる木材集積地点５ヶ所、炉跡と見られる焼土群（10ヶ所）、クルミなどの入った貯蔵穴と見られる大型土坑群（約40基）、木柱根を伴う土坑15基、捨て場などの遺構を検出した。

土坑から検出した柱根には、直径が70～80cmの大型のもの、45～50cmほどの中型のもの、20～30cmほどの小型のものがあるが、いずれのものにも規則的な並びは認められず、建物の柱とするには難しい点がある。川岸で検出された小型のものには水辺の作業に関わる立木や柵のようなものであった可能性が、微高地上で検出された大型のものと中型のものにはトーテムポールのような独立した柱であった可能性が指摘されている。柱穴等の遺構からは建物の存在が断定できない一方、水辺の木組みや貯木状態にあったと見られる木材群には、建築材として使用されたと考えられる、仕口加工のある木材が含まれていた。なかでも、高床建物の柱と見られる材などは、縄文時代の建物の上部軸組構造を具体的に示すものとして注目される。

（2）遺物について

出土遺物には、縄文土器、土偶・耳飾等の土製品、建築部材・漆塗鉢・櫛・弓・石斧柄等の木製品、カゴ・ザル・縄等の繊維製品、磨製石斧・打製石斧・石鏃・石錘・石匙等の石器、石棒・玉類等の石製品、それにトチ・クリ・クルミ等の堅果類やコゴミ、ヒョウタン等の植物遺体や各種動物の骨等の動物遺体がある。

木製品には柱材や板材等の建築部材、鉢や土掘り具等の器具とこれらの製作工程を伺うことができる各段階の未成品がある。

磨製石斧は、これらの木材を加工するのに用いられたと考えられ、原石は富山・新潟県境付近から採取されたとみられる蛇紋岩製のものが主体である。磨製石斧を装着した斧柄は、幾つかの部品を

組合せて構成される「組合せ式の柄」と考えられ、消耗する石斧の換装に適したものとなっている。繊維製品にはカゴやザル等の編物類や縄、漆塗り糸の残片等がある。

これらの遺物は、縄文時代中期末～後期初頭の川跡やその周辺から出土しており、その出土状況や種類から、堅果類のさらし・煮沸等の加工、狩猟・漁労による捕獲物の解体・加工、木材の保管や加工等の様々な作業が水辺でおこなわれていたことがわかる。

3．縄文時代後期末～晩期の概要

（1）遺構について

中期末から後期初頭の遺構群が見つかった谷の入口部からさらに西に入った谷の中程の部分では、後期末～晩期にかけての遺構群を検出している。この時期の遺構群も当時の川跡を中心として分布しており、木枠状の水さらし場遺構１基、貯木の跡とみられる木材集積地点１ヶ所、堅果類の貯蔵穴18基、環状木柱列２基、捨て場などを検出した。

水さらし場の木組みの内部からは、ドングリやトチノミ等を検出しており、これらの灰汁抜きに用いられた施設と見られる。

環状木柱列は、半截形の柱根を伴う円形配置の柱穴群からなる、縄文時代晩期の北陸地方に特徴的な遺構である。桜町遺跡で検出したものは、10本の柱からなるＡ環と、８本の柱からなるＢ環の２棟で、柱の本数は異なるが、柱穴がめぐる円の直径はどちらも約6.2mである。ほぼ同一の場所に位置しており、建て替えの結果と考えられる。木柱列の時期は、柱穴から出土した最も新しい土器片から、晩期中葉の中屋式期と考えられる。

（2）遺物について

この時期の出土遺物には、木柱列の柱根・漆塗櫛等の木製品、土器・土製品、磨製石斧・石鏃・石錘等の石器・石製品、水さらし場や貯蔵穴から出土した堅果類等の植物遺体がある。

このうち石製品には、翡翠製の小玉等の装飾品や、石棒・石刀・石冠・岩版等の祭祀に関連すると考えられる器物を含む。特に石刀類は、軟質の凝灰岩の原石を荒割りしたものから、剥離による成型、敲打による整形、砥石と水を用いて仕上げる研磨の各段階のものがあり、製作工程が伺える。

貯蔵穴に残っていた堅果類は、ウラジロガシまたはツクバネガシ、アラカシなどのアカガシ亜属と、コナラ、ナラガシワ、ミズナラ、クヌギまたはアベマキなどのコナラ亜属のいわゆるドングリ類が大半で、他に少量ながらトチノミ、オニグルミが出土している。

これらの遺物は、いずれもその当時の川跡やその周辺から出土しており、その出土状況から、堅果類等の食料加工・貯蔵と凝灰岩を用いた石刀等の祭祀的な意味合いを持つ石製品の製作等の作業が水辺で行われていたことがわかる。

4．まとめ

調査の結果、桜町遺跡の谷間の区域において、縄文時代に水を多量に使用する諸作業や保管・祭祀等がおこなわれていたことが明らかとなり、当時の生活様式や祭祀のありかたを考える上で貴重な成果が得られた。またその出土遺物には、縄文時代の建築様式や、土器・土製品・石器・石製品・木製品・漆器・繊維製品等様々な製品加工の実態を具体的に示すものが多く、当時の技術を復元するうえで、桜町遺跡出土品の果たす役割は今後大きいものと考えられる。

2　桜町遺跡その選ばれし場所

小林　達雄（國學院大學）

(一)

遺跡とは、過去において人間がさまざまな行動を展開した場所であり、それらの行動と直接あるいは間接的に関係した痕跡によってその存在が認知される。

人間の行動は独り自己完結するものではなく、舞台となったその場の自然との相互の干渉を意味する。自然の環境に適応しながら、逆に人工的な地形の改変をはじめ、植生や動物相にも影響を与えたりするのである。

また、人間の行動は、単なる身体的、肉体的運動ではなく、多かれ少なかれさまざまな文物を伴っている。そうした文物とは、大地に設定された構築物であり、いろいろな機能用途の道具類（人工物）である。前者を遺構、後者を遺物と呼びならわしており、遺跡に残されている。しかし、関係した文物が余すところなく全て遺跡に残されたり、残っているわけではない。後世の人々によって、破壊、消滅させられる場合がある。自然的条件や自然の営力によって姿かたちを失うものとて決して少なくないのである。とりわけ、植物性あるいは動物性の材質即ち有機質の遺物は包含層の状態や時間の経過につれて遺存率は著しく低下する。

ところが桜町遺跡は、土中にたっぷりと水気を含んだ、いわゆる湿地性であるため、有機質の多種多様な遺物が遺存されている。類い稀な恵まれた遺跡である。

遺跡の発掘調査とは、遺跡が包蔵する文物や自然的環境にかかわるデータを掘り当て、獲得する作業に終わるものではない。さまざまな痕跡から往時、遺跡で展開された行動にかかわる情報を抽出することなのである。

桜町遺跡が豊富な有機質の遺物に恵まれたことは一般的な遺跡に比して、格段に情報量が多く、多岐に亙ることを意味している。並ではなく、破格の遺跡なのだ。それだけ桜町遺跡は、縄文文化の中の一遺跡の分際を超絶した、日本列島の縄文文化の理解に極めて重要かつ有効な情報を提供するものなのである。

桜町遺跡の内容は、すでに発掘調査報告書6冊を刊行しており、此度の縄文時代総括編を以って一応の完結となる。本書では遺跡出土文物について、それぞれの分野の研究をリードする分担者によって整理、分析、考察がなされている。当然ながらいくつもの課題を含むものであるが、現在の研究レベルの一到達点であり、ここからさらなる展望が期待される。

(二)

桜町遺跡を最もよく特色付けるものは、ここに限定された場が幾度となく断続的に繰り返し利用されているところである。このことに関しては、本書第Ⅱ章において久々忠義「桜町遺跡の変遷について」が示すとおりであるが、ここでは改めて別の視点からその意義を探ってみることとしたい。

とくに谷口から奥へ東西１㎞、南北幅約20～30mにわたる範囲に、縄文時代に始まり、弥生、古墳時代を経て、さらに古代、中世、近世までの利用痕跡が重複して認められるのである。

縄文時代に限ってさらに詳しく当ってみる。まず早期後半に最初の足跡が残される。縄文人が初めてこの場所に眼をつけたのは、そのときである。

次にそれほどの間をおかず、やがて早期が終わって前期初頭の佐波・極楽寺式土器がやや広範に散在する。しかし、一型式の期間に限られて後続きしない。

結局、200年以上の空白期間を経て、前期中葉の朝日Ｃ式土器の時代が来る。これ以降は500年ほどの土器型式が連続する。型式に間断はないが、その間途切れなく居坐り続けていたかどうかは定かでなく、むしろ土器一型式内でさえも一時的に去り、記憶のあるうちに舞い戻るということがあったと見るべきである。

この状況は中期に入っても変わることなく、さらに中期の数百年に亘る全期間、土器型式は殆んど途切れていない。とくに、中期前葉と中葉から後葉にかけては遺物量も多く、それだけ密度の濃い利用が長期間続いていた事実を物語っている。この情勢は後期初頭まで継続し、いわば桜町遺跡の黄金時代とも言える。とにかくこの中期初頭から後期初頭に至る千年にもおよぶ長期間、極く短年月の不在状態が幾度となくあったとしても、回帰する予定がちゃんと組み込まれていたのではなかったかと考えられる。

さらに後期中葉以降も晩期後葉まで土器型式の空白期を若干含みながらも、大概の連続性が維持されてゆく。しかし縄文時代終幕の直前には、ついに息切れしたかのように寂れてしまった。

新しい弥生時代の幕開け前夜は、静まり返っていたというわけである。まさに縄文から弥生への転換の劇的な歴史を象徴している。

とまれかくまれ、桜町遺跡における縄文時代全期を通じた利用の実態は、若干の空白期があったとは言え、ほとんど連続していたのだ。日本列島全体の遺跡を見回しても、他に例をみないほどに際立って異常なことである。桜町遺跡を最もよく特色づけると断じた所以がここにある。中期や後期や晩期には、いわゆる大遺跡と呼ばれる桁外れの規模を誇り、いくつもの土器型式が連続的に認められる遺跡がたしかに存在する。それらは広い平坦面を有し、眺望がきき、堂々たる格を備えて、なんといっても押し出しがいい。多数の住居跡が残され、遺物量も多いのである。

ところが、我が桜町遺跡ときたら外目には他を圧倒するほどの格を備えているとは決して言いきれない。かえって縄文列島の一般の大遺跡に比すると、いかにも貧相としか言いようのない場所に構えているのである。狭い谷間であるから、もとより四方八方に眺望がきくわけではない。三方に山が迫っていて谷口から先が開けているにすぎない。その中にあって谷口からはみ出た中出地区が軽うじて占地の好条件に恵まれており、その周辺が桜町の黄金時代の中心舞台となっている。さらにその先後に亘って利用の中心的な場所となっていたのは、やや谷を溯った舟岡地区中央部で、土器型式が連続し、とくに晩期の中心となっている。

とにかく、桜町は世に言うところの大遺跡を凌ぐほどに長期間の利用、そして大量の遺物にもかかわらず、我々が直ちに合点し得るだけの場所の風格を欠くものであるところが注意される。

実は、かねてより桜町遺跡とは別に、よく似た遺跡のいくつかが気になっていた。その一は、福岡市柏原遺跡であり、とりたてて際立った立地ではないのに、狭い空間に縄文時代早期から幾枚もの文化層の重なっているのに出会ったのが最初である。第二は、長野市松原遺跡である。後背の山麓に当る平坦面で、その限定された範囲に縄文時代前期前半から末葉、中期初頭、後期、晩期から弥生時代、古代、近世が上に重なっている。各々に長い空白期間がありながら、何の変哲もないところにもかかわらず、時を超えて幾度となく繰り返し生活舞台となっているのである。

この二つの遺跡のあり様に対して、「屋根のない洞窟遺跡」と綽名をつけて、これまでずっと気にかけていた。さしたる人目を魅くほどの地理的な押し出しも見られないのに、過去に幾度となく、時代を超えてまで活動舞台に選ばれていることの妙なる理由は只事ではないと思われてならないのだ。その限定的な範囲からずれると、文化層はみられなくなる。つまり、地形的には際立った特徴があるわけではないのに、その一地点にレンズの焦点を当てたかのように集中しているのである。もしもそれが洞窟であれば、天然の屋根庇付きであるから、雨宿りにはもってこいというわけで、突然の俄雨に見舞われたら、誰もがその下に駆けこむに決まっている。その理由は明らかだ。ところが、屋根のない洞窟遺跡では、その周辺一帯の中で地形的にも、雰囲気的にも目に見えて特別な好条件として納得がゆくわけでもないのに、他所(ほか)でもない、そこに集中する理由は到底理解の苦しむところである。一度や二度ならその地点を選んだという偶然が重なったとみられないことでもないが、時を超えて、その地点に幾度も回帰するほどに執拗に拘っているのだから、必ずや確固たる理由が存したに違いあるまいと予想するのは至極当たり前のことだ。

問題は、おそらくは確かな理由があったと考えられるのにも拘らず、その理由の正体が皆目見当がつかないという点にある。少なくとも、縄文時代における新旧の時期区分を越えて屋根のない洞窟遺跡なる地点を選んでいるのは、その選地眼にぶれがなく、一貫して意識され続けていたことを意味する。つまり縄文人にとっては自明ともいえる理由、根拠があった筈なのだ。しかも、場所によっては縄文時代が終わった後、弥生、古墳時代そして古代、中世、近世にまで、その選地眼を有効に働かせるだけの共通認識が維持されていたのである。けれども、現在ある絶対多数の村々は、せいぜい近世に溯るものはあっても、それ以前の生活舞台とは無縁であるのが一般的である。だから、現在の村の直下を発掘しても、殆んどそれ以前の遺構や遺物に掘り当たることは滅多にないのである。それ故揺るぎない伝統で、縄文時代の遺跡は、今や人里はなれた場所に存在はしても、御先祖伝来の地に建つ今日の住居の土台の下の地中にはないのが普通である。単に時代が離れているという理由によるではなく、むしろ生活舞台とすべき土地の選び方、選ぶ基準が全く異なるからに他ならない。

(三)

屋根のない洞窟遺跡の成立の理由が理解できないということは、縄文時代以来の場の選び方、選ぶ基準が判らないということである。それが縄文人の思考に由来するといえば、その心は縄文時代の終焉とともに忘れ去られることなく、場合によっては弥生時代から古墳時代さらに古代、中世を

経て近世にすら命脈を保って継承されてきているのである。桜町遺跡はその典型である。

その一方で、たしかに遺跡立地の理由の一端が我々現代人にとっても判り易い例がいくつかある。正真正銘の洞窟遺跡だけでなく、場合によっては極めて清冽な水の豊富に湧き出る泉を傍らにもつ遺跡のあれこれを挙げることができる。多数の竪穴住居で囲む中央広場の形成を保障してくれる広々とした平坦面をもつものについても、我々は容易に合点がゆく。あるいは東京湾岸の溺れ谷に面して営まれた縄文前期前葉の貝塚が、貝の採捕活動と密接に関係するものであった事情も十分理解できる。

また、北アメリカ北西海岸におけるトーテムポールを立てた人々にあっては、有力な集団が鮭遡上を待ち構えるのに最も効率の良い場所に居坐り、力の順位に従って、鮭の漁場により適した場所を占めることが知られている。縄文人にも同様な選地の社会的原則が働いていた場合があったと見てよい。

小島俊彰は、江戸時代に小矢部川を遡上するサケに課税されていた事実を古記録に見出して注目する。サケに大きく依存していた縄文人は、桜町の場をサケ獲得の基地としていたというは、おそらくその通りであろう。そのことは縄文時代の全期間ばかりでなく、弥生時代以降にも引き継がれていたとみる。だから、そこにこそ桜町の地が連綿と利用され続けていた理由と見当をつけることもできるのである。

そもそも土地は見えないはるか彼方にまで連続的に広がっているが、地形を土台としてその地上を覆う植物、あるいは周囲の景観などによって自ら一定の範囲を限定する。したがって、そうした自然のひろがりの中を限定する範囲は、無辺の自然界の部品あるいは部分であり、自然は部分の集合体なのである。それぞれの部分が自らの部分として周囲から区切る主体性を確立し個性を発揮する。

遺跡の立地は、自然の部分であり、縄文人の眼鏡に適った部分なのである。縄文人が良しとした理由は前述のごときあれこれが想定しうる。けれども問題は、狭い谷間に立地する桜町の異常な特色がそうした理由説明には不十分極まりないという点である。結局は説明できる理由だけを説明しているにすぎないのであって、説明できない重要な事柄が残されているままなのである。それが故に、依然として桜町の立地の謎は不明のままである。つまり、窮屈極まりない桜町が縄文時代を通じて長期に亘って活動舞台となり、しかも幾度もの長い空白期間をおきながらも執拗に回帰を繰り返した、その理由が解明できないのである。

だからとて、桜町縄文人が選んだ土地（自然の部分）の自然地形学的、地理学的な特色をいくら詮索したところで、その理由解明に接近しうる保障はないのである。何故なら縄文人が選ぶ理由は、ヴィトゲンシュタイン流に言えば、縄文人の論理空間に由来するのであって、我々現代人の論理空間とは大きく異なっているせいにほからないからだ。

さまざまな特色、個性をもつ部分の中から、他には目をくれず、只管（ひたすら）桜町という部分にこだわったのは、縄文人の側から発する動機だけではなく、桜町自体から発する力によるところがあったとみなくてはならない。それこそは部分が内に秘めた力である。広大な土地を構成する部分はそれぞ

れが独自にそれなりの潜在的な力を有しており、それが各部分の特色となる。しかし、そうした力は各部分が自発的に発散するのではない。その部分が秘めた力を発見する側の人間を抜きにはあり得ないのである。縄文人がその力を発見して初めてその土地部分の個性が際立ち、またその個性が縄文人に働きかける相互作用の上に場所が成立するのである。桜町には独自の個性的な場所の力が、縄文人を終始魅きつけて止むところがなかったのだ。たとえ何らかの都合で離れて他所に移動しようとも執拗に回帰を繰り返したのは、場所の力の働きにあったのである。

桜町は、場所力と場所力の存在を発見した縄文人の共同の成果であり、この事実が記憶されて、偶然性あるいは一回性ではない、永続的な関係が生れるのである。それが場所の記憶である。記憶の拠り所は、まず第一にその場所につけられた地名であり、仮りに縄文人はサクラマチと呼び慣わすうちに記憶は揺るぎなく定着するに至るのである。

そして場所の記憶は一方では愛を呼び起こす。場所愛である。だからなつかしさがこみ上げてもくるのだ。

かくして＜場所力＞、＜場所の記憶＞、＜場所愛＞の三位一体の相乗効果が、桜町遺跡の個性的な特色を顕現することになったのである。屋根のない洞窟遺跡の成立の背景とその理由である。その理由が言葉で説明できないのは、縄文論理空間が、徹底して縄文的であるせいである。桜町に弥生、古墳、古代、中世、近世にまで継承されていたのは、少なくとも縄文論理が途絶えることなく命脈を維持してきたからに他ならない。しかし、いま我々が具体的なその理由を知り得ないのは、あまりに合理的あるいは科学的という現代の論理空間が、縄文論理空間から遠く離れすぎてしまった理由なのである。

報　告　書　抄　録

ふりがな	さくらまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	桜町遺跡発掘調査報告書
副書名	縄文時代総括編
巻次	
シリーズ名	小矢部市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第61冊
編著者名	大野淳也・中井真夕・中田節子・廣藤紀子・松井章・吉川純子・鈴木三男・能城修一・管野宗武・井上美知子・四柳嘉章・久々忠義・小島俊彰・酒井重洋・山本正敏・山田昌久・宮本長二郎・小林達雄
編集機関	小矢部市教育委員会
所在地	〒932-8611　富山県小矢部市本町1番1号
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″ (世界測地系)	東経 °′″ (世界測地系)	調査期間 (西暦)	調査対象 面積 (㎡)	調査原因
桜町(さくらまち)	小矢部市(おやべし) 桜町字舟岡(さくらまちあざふなおか)	16209	209021	36° 41′ 00″	136° 52′ 40″	1986年～ 2003年 (このうち1991年から1996年の間は現地調査を中断)	延べ面積 約22,500	道路建設に伴う事前調査(国道8号小矢部バイパス)

富山県小矢部市

桜町遺跡発掘調査報告書

縄文時代総括編

発　行　日　平成19年3月30日

編集・発行　小矢部市教育委員会
〒932-8611　富山県小矢部市本町１－１
TEL　0766-67-1760

印　　刷　株式会社　ア　ヤ　ト